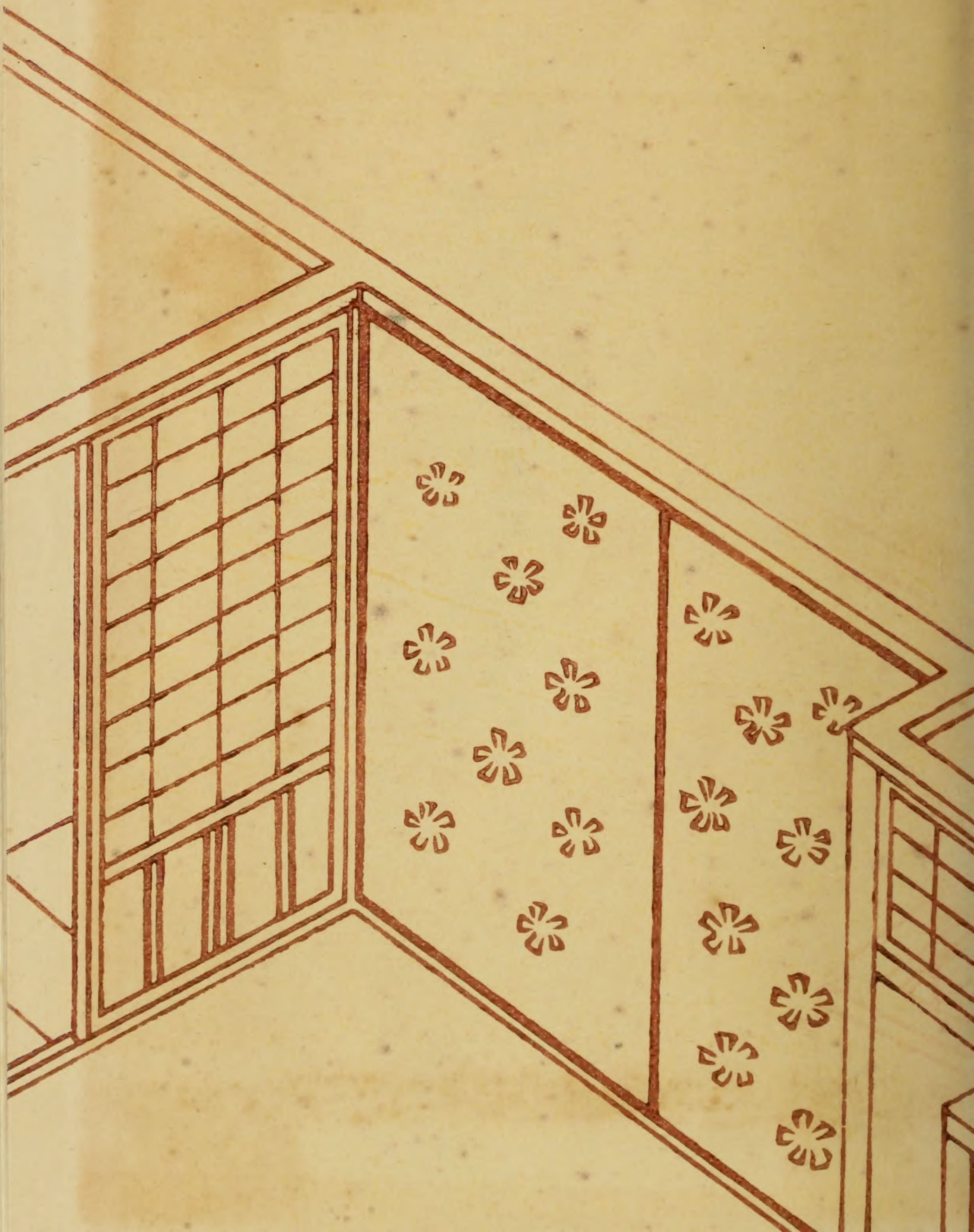




大南北全集

第十四巻

文學博士 坪内逍遙
渥美清太郎 共編

大南北全集 第十四卷

東京 春陽堂刊行

大南北全集　第十四巻　目次

挿繪目次

口繪解說

■本編には材料不足で、繪畫を多く挿入出來なかつたのが殘念である。

■卷頭に入れた、初代豐國の三人立ちは、「陬蓬萊曾我」のうち、「名越川だんまり」の場である。この場は、臺本に缺けてゐるが、筋は解說に載せた通りである。この錦繪は、三枚續きではなく、橫繪の一枚ものである。珍らしい方の種類に屬する。

■「八重霞曾我組絲」のうちで、賽の河原の二枚續きは、再演の折に發行されたものである。筆者は國貞。「奥藏の場」にお園六三が色模樣の場の二枚續きは、初演の時のもので、初代豐國の名にはなつてゐるが、多分は二代の代筆であらう。

■「初冠曾我皐月富士根」に入れた錦繪は、三代豐國筆で、八世市川團十郎が討入りの五郎の圖である。討入の場の繪が見當らなかつたので、昔の討入の五郎の姿だけをもお見せ申したいと思つて、この一枚摺りを挿入したのである。

■繪本番附は、三種とも初演の物があつたので、例の通り亞鉛版にして、その幕々へ入れて置いた。




岩井半四郎
松本幸四郎
豊国画

解說及年表

八重霞會我組絲（やへがすみそがのくみいと）

文政六年一月、市村座へ書きおろされた、吉例の曾我狂言で、世話物としては、お園六三の「八重霞」と、小絲佐七の「本町丸」とが、二つまで搦ひまぜになつて、南北の作の中でも、この二番目は、特に複雜きはまる筋を作つてゐる。

文政元年以來、三世尾上菊五郎と七世市川團十郎とは、「助六」の事から喧嘩をして、長い事同座をしなかつたのが、五世岩井半四郎の仲裁で和解が成り、前年同座の顏見世に、久方振りで合同をした。その第二回目の興行が、この狂言である。全篇、各幕とも、團菊を嚙み合せるやうに出來てゐるのは、その爲である。殊に一番目四建目の、近江八幡で兩優の早替り競爭の幕は非常に好評で、外の幕は初演ぎりで絕えてしまつたが、この一幕だけは明治まで殘つた。イカサマ、殘るだけの價値はある。彼れの作中でも、有數な幕と稱へてよい。

二番目は、臺本では大詰となつてゐるが、實際は事件の解決がついて居ない。もう一幕、あつたに違

ひはないが、何にしても、久し振りの團菊顔合せで、殘つた一幕は、たうとう千秋樂まで出なかつた。外の脚本にもさういふのがあるが、昔の惡い習慣で、大入の時は全部出さなかつたものである。臺本が殘つて居なかつたのはその爲である。そこで、結末が解らないから玆に略筋を附記して置く。場面は、「大工六三内の場」である。

六三はお絲を隱まつてある。半時九郎兵衞がお絲欲しさに強請りに來る。東林の毒藥が祟つて、六三は鳥眼になる。權兵衞殺しの詮議が嚴しい。六三は四方八方から責められて大困苦に陷る。綱五郎の女房お房が、六三の罪を引受けようとする事があつて、結局、小絲は自殺し、九郎兵衞の手から三品の寶物が六三の手に戻り、鳥眼も全快し、船越十右衞門が情の裁きで、六三は元の神原左七郎に戻る。

初演の役割は、左の通りであつた。

工藤左衞門祐經。六藤内成景　實ハ近江小藤太。曾我十郎祐成。宮大工、六三郎　實ハ神原左七郎（四ヤク三世尾上菊五郎）化粧坂の少將。綱五郎女房、お房、千住の藝者、はれ吉（三ヤク市川門之助）曾我の禪司坊（尾上三朝）伊豆次郎祐兼。大黑屋槌右衞門（二ヤク中山錦車）山住五平太。閻王寺、閑坊和尙。絲屋後家、お岩。宇佐美彌太夫（四ヤク大谷馬十）兎王新左衞門、夜番人、太郎助（二ヤク惣領甚六）神原佐五郎（市川男女藏）絲屋娘、お絲。瞽女、明石　實ハ景淸娘、人丸（二ヤク五世岩井半四郎）醫者、百川東林（大谷門藏）三浦奧女中、卿。絲屋下女、お

芳（二ヤク市川おの江）梶原平三景時。絲屋後見、庄九郎（二ヤク松本國五郎）所化、雲哲（大谷曾呂平）輕子、おつや（嵐小さん）所化、雲才（松本錦吾）雲助、山瀧權九。船頭、市川屋三次（二ヤク市川門十郎）吉原の若林屋五郎八。箱根の畑右衞門（二ヤク鶴屋小園次）馬士、梶原村の平次（坂東善次）宿場女郎、花咲（吾妻藤藏）ごろつき、七郎助 實ハ曾我の團三郎。久須美七郎俊次（二ヤク尾上蟹十郎）宿場藝者、十六夜お京（尾上菊次郎）劍澤彈正左衞門時國。家主、左五兵衞（二ヤク澤村四郎五郎）小林の朝比奈。古鐵買ひ、粟島權兵衞。船越十右衞門（三ヤク二世關三十郎）大磯の虎。粂本の藝者、小絲。六三云ひ號け、お園（三ヤク五世瀨川菊之丞）曾我五郎時致八幡の三郎行氏 實ハ赤澤十内。本町丸の綱五郎。盜人、半時九郎兵衞（四ヤク七世市川團十郎）鳶の者、小いさみの吉（市村羽左衞門）

前にも云つた通り、本筋の方は初演ぎりで廢れてしまつたが、閻王寺と賽の河原の一幕は、その後も度度上演された。その第二回目は、天保四年一月、河原崎座「富士扇三升曾我」である。

大藤内、祐成（二ヤク尾上菊五郎）鬼王（市川壽美藏）祐兪（市川高麗藏）閉坊（大谷友右衞門）彈正（市川團九郎）畑右衞門（市川宗三郎）十六夜（尾上菊三郎）禪司坊（尾上松助）八幡、時致（二ヤク市川海老藏）

第三回は天保十一年一月、河原崎座の「梅咲若木場曾我」である。

大藤内、祐成（二ヤク尾上菊五郎）祐兪（尾上菊四郎）十六夜（荻野伊三郎）禪司坊（市川勘藏）畑右衞門（尾上

岩五郎）閉坊（大谷萬作）鬼王（市川壽太郎）八幡、時致（ヤク市川海老藏）

この時までの近江八幡は、初演通り團菊の顏合せであつたのである。

第四囘は弘化元年一月の市村座「當訥子萬歳曾我」である。

大藤內、祐成（ニヤク澤村訥升）彈正（尾上菊四郎）禪司坊（山科甚吉）十六夜（坂東佳好）畑右衞門（澤村紀次）鬼王（淺尾工左衞門）時致（坂東しうか）八幡（嵐吉三郎）

弘化元年一月には、大阪中座の「浪乘曾我花景淸」の中に、この一幕を加へて上演した。市川海老藏が江戸お構へで、上阪してゐたので、出したのだと見える。

大藤內、時致（ニヤク市川海老藏）八幡、祐成（ニヤク實川延三郎）禪司坊（嵐三十郎）祐兼（中山文五郎）十六夜（尾上芙雀）彈正（市川市友）

第五囘は明治三年一月の中村座「季水仙梅幸曾我」である。

大藤內、祐成（ニヤク尾上菊五郎）婀（嵐榮三郎）禪司坊（尾上幸藏）十六夜（中村いてう）祐兼（中村仲太郎）閉坊（尾上尾の右衞門）八幡、時致（ニヤク大谷廣次）

初冠曾我皐月富士根

文政八年五月の中村座に上演された、南北の作には珍らしい時代狂言である。夜討曾我を土臺にして、これへ「鏡山」の草履打ちを、男に直して書き加へたものである。男鏡山と稱して好いものには、前にも「有職鎌倉山」があるが、それを逃げて「鏡山舊錦繪」の方に形式を近づけてある。世界が曾我であるところから、草履打ちの方も同じ背景にしたのが、多少の無理はあつても目先が變つて面白い。

「夜討曾我」は、現今では默阿彌の「夜討曾我狩場曙」に獨占されて居るやうだが、默阿彌以前の「夜討曾我」といへば、この狂言より外は無かつたのである。その所爲か、上演數度に及んでゐる。

南北手記の正本を見ると、最初は、この狂言の名題を「八重霞皐月富士」と附けてある。それは、當初の腹案が、お園六三の筋を搦ませる豫定だつたからなのである。序幕に、船越十右衛門といふ人物が出て、六三や七郎助の筋を賣つてゐるのも、その爲なのである。それが、途中から變更して本名題になつたのである。

四建目下の平塚宿の場は、ちよつと挿話的に、本筋と大した關係なくて、しかも面白い一幕になつてゐる。大阪狂言の「定助權八」の匂ひがするが、あれよりも趣きがある。さうしてこれを、浦里時次郎へ結びつけた趣向が面白い。新内節が當時流行してゐた事がわかる。

二番目に曾我祭の所作事があるのは、臺本としても珍らしく、戲曲史上相當の資料でもある。江戸歌

舞伎は初期から、曾我の狂言と關係が深い。曾我兄弟の爲に、芝居も繁昌する。報恩の爲とあつて、安永の頃から、討入の五月二十八日を期して、曾我祭といふ事が江戸芝居の年中行事になつた。この日は仕切場へ神輿を飾り、曾我兄弟の像を祀つて供物を捧げ、樂屋では賑やかに神樂を奏し、座中が祭禮氣分になるのである。さうして、春から芝居が大入を續けた時は、五月興行にこの曾我祭を舞臺へまで延長して、大切に祭禮の所作事を出すのが例だつたのである。この年は、團十郎菊五郎の顔合せで、ズッと大入を續けたので、曾我祭の所作事を添へた譯である。臺本以外、その日〳〵の趣向に應じて、種々な思ひ附きの茶番や、手踊があつたものである。今日、常磐津の所作になつてゐる「勢獅子」は、この曾我祭が殘した形見と云つてよい。

初演の折の役割は、左の通りであつた。

曾我十郎祐成。宇佐美尾上之助。お祭り佐七（三ヤク三世尾上菊五郎）仁田四郎忠常。槍持ち、うつそり官助實ハ十右衛門悴、五郎吉。曾我の母、滿江。肌ぬぎの手古舞（四ヤク三桝源之助）若黨、小由留木小源次。手古舞ひ（二ヤク尾上松助）政子御前（吾妻藤藏）中間、鴈助（市川宗三郎）蝮の仁太郎（大谷門藏）鬼王新左衛門。槍持ち、津久木傳六。祭の赤坂奴（三ヤク坂東善次）加藤大部光貞。足輕、畑右衛門（二ヤク市川染五郎）宇田五郎信重（鎌倉平九郎）若黨、勘次（尾上梅太郎）草履取り、萬八（市川市五郎）岡部彌三郎（坂東勝藏）乳母、お倉

成田屋銀兵衞）片瀨左仲太（中村千代藏）梅澤屋長太（市川長四郎）梅澤屋小平次（松本虎藏）吉良小次郎惟貞（松本小次郎　愛甲三郎季高（松本錦吾）義時妻、三崎（市川おの江）船越十右衞門。劍澤彈正時連（二ヤク尾上蟹十郎）尾上之助妻、二の宮（尾上菊次郎）醫者、針野灸按（澤村しやばく）賴家公（市川高麗藏）大磯の虎御前。梅澤屋下女、お園 實ハ小藤太娘、浦里。三日月お扇（三ヤク岩井粂三郎）岩藤玄蕃之丞時元。曾我太郎祐信御所五郎丸重宗。祭の世話人（四ヤク五世松本幸四郎）下部、初平後ニ尾上伊太八實ハ鶴賀時次郎。本町の綱五郎曾我五郎時致（三ヤク七世市川團十郎）牛島主稅。祭の鐵棒曳（二ヤク中村傳九郎）

男草履打ちの件は、天保十年七月の河原崎座に再演された。名題は「其往昔戀江戸染」二番目の八百屋お七の名題を借りたものである。

尾上之助（澤村訥升　鴈助（大谷萬作）岩藤玄蕃、曾我祐信（二ヤク七世市川海老藏）政子（市川鯉之助）小源次（市川勘藏）二の宮（尾上榮三郎）初平（八世市川團十郎）

夜討曾我の第二回上演は、天保十二年五月の河原崎座で、名題は初演の通りであつた。

祐成（澤村訥升）滿江（嵐みんし）小源次（澤村鈍之助）閉坊（市川宗三郎）時致（市川海老藏）劍澤（澤村四郎五郎）仁田（澤村淸十郎）虎御前（岩井紫若）五郎丸（市川團十郎）

第三回は、嘉永四年五月の市村座。名題は「橘牡丹皐月夜話」であつた。

祐成（市村竹之丞）滿江・五郎丸（ニヤク市川九藏）仁田（嵐吉三郎）閉坊（成田屋宗兵衞）劍澤（市川高麗藏）
小源次（坂東橘藏）虎御前（阪東しうか）時致（市川團十郎）

安政三年四月、中村座「一曲奏子寶曾我（ひとかなでこだからそが）」では、夜討曾我の一幕のみを演じた。

祐成（片岡我童）虎御前（市川團之助）仁田（市川團三郎）五郎丸（市川九藏）時致（岩井粂三郎）

安政三年五月の市村座、「花菖蒲裾野討入（はなせうぶすそのゝうちいり）」一幕では

祐成（坂東彦三郎）滿江（四世尾上菊五郎）虎御前（中村歌女之丞）小源次（坂東又太郎）五郎丸（淺尾與六）
劍澤（市川新升）時致（河原崎權十郎）仁田（坂東龜藏）

元治元年四月の中村座「譽曾我皐月念力（ほまれそがさつきのねんりき）」一幕では

時致（河原崎權十郎）五郎丸（市川八百藏）滿江（坂東龜藏）小源次（市川新之助）仁田（市川團藏）劍澤（中村翫藏）虎御前（岩井紫若）祐成（坂東彦三郎）

この河原崎權十郎は、卽ち九代目市川團十郎である。團十郎が明治七年に、默阿彌の夜討曾我を勸めて以來、「初冠曾我皐月富士根」は廢滅したのであるが、夜討の場は大體が同じ「曾我物語」其まゝなのであるから、兩者が極めてよく似てゐるのも不思議ではない。

陬蓬萊曾我

文化八年一月、南北がまた勝諺藏時代に、市村座へ書きおろされた、吉例の曾我狂言で、その鬼王貧家の場は、世に名高いものである。坂東三津五郎が忠實な鬼王新左衞門で、種々な災厄にあつて悶えながら、遂に最後に成功する役。岩井半四郎がその妻で、夫と共に苦しみながら、身を殺して遂に夫を世に出す役。松本幸四郎は、鬼王を苦しめる實惡で、その憎々しい藝風を發揮する役。三役とも定評があつたもので、この三人が同座した時の曾我狂言には、種々と形式の變つた鬼王貧家で、三人がいつも同じ役柄を勤めて來たものである。本脚本はその代表的なもので、貧家の場は特に傑出してゐる。

本編へ收錄した定本には、三建目の返し「名越切り通しの場、名越川の場」が缺けてゐる。殘念ながらいくら探索しても發見し得ない。その二幕の筋は

浪人、關の畑右衞門が、病み疲れた禪司坊を殺して、彼れが久上寺から盗んで來た百兩を奪ひ、名越川へ埋めて印しを立てゝ置き、その旨を梶原へ手紙で送つたが、取次をした馬士彌藏が無筆なところから、かれて畑右衞門から執持ちを頼まれてゐる、月小夜への艷書と間違へて、その密書を月小夜へ渡してしまつた。月小夜は夫鬼王が、逆澤瀉の鎧質請けの百兩調達に腐心してゐるので、よき幸ひと名越川へ行つて、その百兩を掘出す。畑右衞

門も掘出しにやつてくる。鬼王は又、畑右衞門が所持の狩場の繪圖面を取らんとして來かゝり、三人がだんまりになる。

卷頭へ挿入したコロタイプ版の錦繪は、實にこの「だんまり」の場面なのである。

畑右衞門といふ名は、曾我の狂言へは、いつも出てくる役であるが、「八重霞」や「初冠曾我」で見られる通り、いつも百姓か馬士の、極めて輕い役ときまつてゐるのである。この脚本ではそれが、實惡の重要な役に宛てゝあるのが面白い。これは當時、畑右衞門といふ呼び聲に似た名の惡黨があつて、評判だつたのを、取込んだものだらうと思ふ。「片瀨川の場」に、劍術遣ひが大勢出てくるのも變つてゐる。これも當時の何かの出來事を、暗示したものに違ひない。初演の役割は左の通りであつた。

近江八幡之助成氏實ハ赤澤十内（助高屋四郎五郎）中老、二の宮（市川團之助）久上の禪司坊（花井才三郎）近江彌太夫成國（市川宗三郎）近藤七郎國平（市川團兵衞）宇佐美小文次（松本芳三郎）腰元、龜菊（坂東八十八）盛俊娘、卯杖（市川照之助）侍女、小動（岩井瀧次郎）梶原娘、飾（岩井梅藏）朝比奈妹、舞鶴（市川德之助）工藤犬坊丸祐友（坂東蓑助）梶原三太郎景茂（岩井喜代太郎）久須美玄蕃（澤村淀五郎）梶原源太景季、眞刀作平（ニヤク坂東善次）醫者、似た山通庵（坂東大吉）馬士、はれ畏の彌藏（市川粟藏）大藤内成景。新刀新五兵衞（ニヤク中村次郎三）手代、善八。一刀五郎太夫（ニヤク嵐新平）手越の少將（吾妻藤藏）小林朝比奈（大谷門藏）

曾我の滿江御前（三條浪江）賴朝息女、大姬（山下八尾藏）曾我の團三郎。曾我五郎時致（ニヤク七世市川團十郎）鬼王女房、月小夜（五世岩井半四郎）鬼王新左衞門。曾我十郎祐成（ニヤク三世坂東三津五郎）浪人、關の畑右衞門實ハ大友常陸之助賴國。工藤左衞門祐經（ニヤク五世松本幸四郎）

渥美清太郎識

八重霞曽我組絲

やへがすみそがのくみいと

八重霞曾我組絲

第一番目　三建目

千住初酉の場

役名――深川の女郎、小絲。千住の女郎、花咲。同藝者、お京。同藝者、はね吉。本町の綱五郎。大黒屋穐右衞門。山住五平太。僧、雲哲。家主、左五兵衞。馬士、梶原の平次。箱根の畑右衞門。醫者、百川東林。新貝荒次郎。葛西六郎重淸。御所の黑彌吾。粕谷藤太有景。七郎助實ハ曾我團三郎。若い者、多七。粟島の權兵衞。大工、六三實ハ神原左七郎。

本舞臺、三間の間、上の方へ寄せて格子、のれん口、天水桶、すべて小塚原商賣屋のかゝり。下の方、軒口に草履草鞋、日光の道中記などを吊したる居酒屋。その側に『口附き無しの小荷駄馬乘るべからず』と書いたる傍示杭。上の方、格子の脇に多七、若い者にて、醬油樽に腰をかけ、格子の内に花浦、此山、女郎の形にて、莨盆を扣へ、見世を張つてゐる。新貝荒次郎、葛西六郎重淸、御所の黑彌吾、粕谷の藤太有景、素袍の股立を取り、熊手を頭に押し、大名の體にて、見世を素見して

ゐる。通り神樂、鳥追ひ唄にて賑やかに幕明く。

多七　サア、モシ〳〵。

ト袖を引く。

荒次　コリヤ〳〵、お身はこの家の手代か。

多七　ハイ、若い者でござります。

重清　若い者にしては、大分頭が禿げて居るな。

黒彌　我れ〳〵は鎌倉の大名、當所は大江の廣元どの預かりの場所ゆゑ。

有景　逗留いたす我れ〳〵、傾城どもを買はうと存ずるが、揚げ代金はいか程ぢや。

多七　ハイ、平常は四六度でございますが、今日はお酉様ゆゑ、物日でござりますれば、兩一でござります。

荒次　平常は四六と申すか。四六二十四文で賣ると申すか。

多七　とんだ事を仰しやりませ。夜鷹ではあるまいし。今日は二朱でござりますよ。

重清　勤めは南鐐一片で、床へ廻るは何遍廻る。

此山　オヤ〳〵、嫌な事をきく客人だの。

花浦　冗談云はずとお上がりなさんせ。
黒彌　然らばこの矢大臣で、酒宴を催ふした上遊びませう。
有景　それがようござらう。

ト皆々下の居酒屋の床几へ腰をかける。通り神樂、鳥追ひ唄になり、向うより東林、醫者の形にて、とやしげ、とやに附きし女郎、これを馬に乘せ、その手綱を曳いて出る。跡より六三、革羽織、いさみの拵へにて、頭に熊手を挿し、唐の芋を提げ、鐵、勝、同じ職人にて、徳藏、大工小僧の形にて附添ひ出る。餘程あとより梶原平次、柿色に矢筈の紋の切附けしたる廣袖に、馬の沓を口に咬へ、醉つたるこなしにて出て來り、花道にて

六三　そこへ馬を曳いて行くなア東林さんぢやアねえか。
東林　オヽ、六三か。どこへ行くのだ。
六三　お前も余ツほど後生樂な人だ、熊手と唐の芋を持つてゐる者をつらめえて、どこへ行くと云ふ者があるものか。
東林　この男も世間の狹い事を云ふ。熊手と唐の芋を持つたとて、高砂の婆アが八百屋へ嫁に行つたかとも思はうぢやアねえか。酉の町に限つた事でもあるまい。

鐵　オイ、東林さん、べら坊に好い形だね。お前、醫者と馬士と、ちやんぽんにするの。

勝　虎を曳いてくるのは聞えたが、馬とは氣が附かなんだ。

東林　なぜ醫者樣が虎を曳くのだ。

勝　ハテ、お前は藪醫者だもの。

東林　おきやアがれ。馬士の平次、どうしたしらん、

平次　カウ、お醫者さん、大分馬の曳きやうが上手だの。お前、醫者をやめて馬士になればいゝ。人を殺す氣遣ひねえ。

六三　うさアねえ。東林さん、歩びなせえ。シイ。

ト跡から馬を追ひながら本舞臺へ來る。

花浦　オヤ〱、とやしげさん、お歸りか。

多七　東林さん、この子の病氣は、どうでござります。

東林　なにサ、病氣も横痃の事だから、今日おれが大酉へ詣つて、この子の親許へ寄つたところが、退屈の樣子、殊に今日は物日だから、此方へ來たいと云ふゆゑ、平次が馬に乘せて連れて來たのよ

とや　多七どん、聞いてくんな。わつちも内に居ると、樂でよかつたけえが、てえくつなこんだから、お

醫者様に連れて來てもらつたも、今日は物日ゆゑ、忙がしかんべいと思つてだ。主思ひだと思つてくれせえ。

多七　そりやァお前、奇特な事だ。

平次　コレ、とやしげ、てめえが病氣で内へ歸つてるゆゑ、おらァ素敵に案じて、お酉様へ唐の芋を斷ち物にしたお庇で、今日歸つてくると聞いたゆゑ、おらが馬に乘せて、おらァ丹波與作の心意氣で曳いて來た。まだその上に、てめえの紋と、おらが矢筈の紋と比翼に附けて、馬の腹掛けに染めさせた。心中者だんべい。

とや　平次さん、久し振りでお前の顔を見て、氣が晴れたノシ。わしはけいに心勞な事があります。小塚ッ原が繁昌につけて、吉原の邪魔になるといつて、おッつけお手が入るさうだ。さうすれば、わしらァ田舍へでもやられる事だと思へば、苦患なこんだ。

六三　みんな聞きや。苦患なこんだと……こいつは大笑ひだ。田舍へ行くのは、本國へ歸るやうなものだ。ナニ苦患な事があるものか。

鐵　さうして、自惚れた事を云ふぜ。爰があるといつて、ナニ吉原が構ふものか。

徳藏　その色で思ひ出した。彼の所から親方へ、渡してくれろと寄越しました。

ト徳藏、懷より文を出す。

六三　オイ、よし／＼。

ト文を取り、莨入れに入れて懷に入れる。

鐵　カウ、頭、そりやアどこの文だ。

六三　ソレ、彼の。

鐵　ア、、本町の絲屋の娘か。

六三　エ、、大きな聲をして、野暮な男だ。

ト思ひ入れ。大名皆々これを見て

黑彌　ハテ、いづれも色の世の中でござる。

荒次　あの赤い男でさへ、毛の拔けた女郎と色事の樣子。

有景　我れ／＼にも出來さうなものでござる。

トこれを聞いて、平次ムツとして

平次　なんだ、この手合ひは。烏帽子を着て熊手を挿し、萬歳が煤はきの手傳ひを見るやうな態で、赤い男が色事をするが珍らしいか。今は斯ういふ男が流行るワ。馬鹿な奴等だ。

荒次　此奴が〳〵、鎌倉の大名に向つて今の雜言。

平次　鎌倉大名なら猶面白い。おらが親仁も鎌倉ぢやア、梶原平三といつて、鎌倉大名の内での俠だ。おらア小さい時に里にやられて、今は王子の梶原村に居る、馬方の平次といふ者だ。鎌倉大名だらうが、なまくら大藏だらうが、頓着はねえぞ。途方もねえ奴等だ。

ト力む。皆々立ちかゝり

荒次　樣々の痴言。梶原どのゝ落し胤でも、今は匹夫の下郎め。イデ、我れ〳〵が

四人　手を下ろして。

ト立ちかゝる。六三、この中へ入り

六三　オイ〳〵、マア〳〵待つてくんねえ〳〵。カウ、大名さん方、初春早々瘤を出しても、野暮だらうぢやアねえか、元を糺せば、根も葉もねえ木片喧嘩。通りがゝりのわしが挨拶だ。不請しなせえ、不請しなせえ。

黒彌　イヤ〳〵、余りなる不埒者。以後の見せしめ、手討に致す。

とや　なんだ、ぬしを手討にするえ。慮外ながら、此とやしげが、さうはさせやせんよ。

平次　サア、手討にでも、ぶツかけにでも、勝手にしやアがれ。

六三　コレサ、人が挨拶してゐるのに、おとなしくもねえ……オイ〳〵、立烏帽子さん、どうしても料簡が、ならぬと云ひなさるのかえ。

四人　料簡ならぬ〳〵。

六三　それぢやアごたつきに枝が咲くわえ。コレエヽ、摺粉木や紙屑籠が仲人に入りやアしねえぞ。料簡がならざアしてもらふめえ。これからはおれが相手だ。この木莵め。

ト持つたる唐の芋にて荒次郎の頭を叩く。

荒次　おのれ、大名を芋でくらはしたな。もう料簡が

ト立ちかゝる。多七、捨ぜりふにてとめる。此うち上の方へ七郎助、悪者の拵へにて、頰かむりをして出かゝり、この喧嘩のうち、熊手にて馬の尻をくらはせる。この馬驚いて喧嘩の中を刎れ廻る。これにて皆々ゴッチヤになり、大名四人逃げて入り、女郎二人に、とやしげ、多七、平次、東林、奥へ入る。此うち六三、懐より紙莨入れを落す。七郎助これを拾ひ、知らぬ顔にて隠れる。六三これに心附かず

六三　とんだ交ぜッけえしだ。

勝　カウ、今ので腹がへつた。

鐵　頭、削らうぢやァねえか。
六三　よく飲みたがる。仕方がねえ、爰の酒屋で。
兩人　そいつは有り難え。
六三　サア、來さッし。
ト下の酒屋へ入る。七郎助、莨入れより文を出して見て
七郎　なんだ『六三さま參る、絲より』。エヽ、イケ嫌らしい。これも何ぞの
ト懐へ入れ
ドリヤ、お京の顔でも見ようか。
ト通り神樂になり、思ひ入れあつて下座に入る。直ぐにこの鳴り物にて、向うより畑右衛門、つゞれの形にて、飴の袋にお市を入れ、これを食ひながら出てくる。跡より五平太、上下、大小、老けたる拵へにて出て來り
五平　コレ〳〵、そこへ行くのは畑右衛門ではないか。
ト聞いて畑右衛門振り返り
畑右　南無三。

ト逃げにかゝる。五平太、ツカ〳〵と寄つて畑右衛門の襟首を捕へ

五平　おのれは〳〵、先達てまで身が家の小者、見所あるゆゑ、一大事の用を頼みしところ、その品を受取ると其まゝ、逐電いたして行き方知れず。おのれが在所を、諸所方々と尋ねて居つた。サア、その品を出し居らう。

ト引据ゑる。

畑右　モシ〳〵、成る程私しはあなたの家來、お主樣の御用を足しまするは當り前なれど、あなたは兼ねて大江の家國を奪はんと

ト五平太思ひ入れあつて

五平　コリヤ、大きな聲で申すな。

トあたりへこなしあつて

兼ねて祐兼さまと心を合せ、小藤太成家、浪人してゐるを幸ひ、神原左五郎、弟左七郎、みな忠臣の侍ひを、亡きものにせんと思ふゆゑ、かゝる大事を打明かし、頼みし其方、駈落ち致してモシひよつと、露顯に及べば一大事と、種々に心を碎いて居つた。

畑右　サ、そこでござりまする。只の御用なら兎も角も、豆州三島宿にて神原左七郎、曉丸の劍、國許よ

り持參のところ、大藤内が盜み取り、彈正さまに渡せしとの事。まつた江戸屋敷にて、十右衛門が預かりの、管家の色紙に印子の尊像、あの九郎兵衛と二人して盜み、私しが持つて居ります。直ぐにあなたへ渡す時は、出かした愛い奴、下郎は口のさがなきものと、水も溜らず……トサア古手なせりふを聞かうより、持つて逃げればいつか一度、金になる時節もあらうと、旦那の惡事の足許を、見拔いた仕事、さりながら、田を行くも畦を行くも、金が欲しいの出來心、褒美の金と引替へなら、今でも尊像渡しませう。

五平　サ、その尊像ゆゑ、十右衛門は死罪のところ、日延べを願ひ、左七郎は追放。紛失の劍出でぬ時は、あの十右衛門は切腹。さすれば家中に、忠義立てする者は、神原左五郎只一人。曉丸の一腰は、いかにも彈正左衛門所持なれど、われが持ちゐる二品を、身共へ爰にて渡し居らう。

畑右　お前もいゝ氣な事を云ふものだ。今も云ふ通り、褒美と引替へでなければ渡されませぬ。

五平　うぬ、主の申す事を背くか。

畑右　背くのサ。金づくの事だもの、命がけの仕事。なんぼ主でも、只渡してつまるものか。

五平　うぬ、その口を

ト立ちかゝる。この前より東林出かゝりゐて、この時ツカ〱と出て

東林　山住さま、まづお待ちなされませ。
五平　御身は東林老。最前からの樣子を
東林　承りました。何を申すも堤に蟻の譬へ、一大事の事でござりますれば、あの者が申す通り、褒美の金を遣りました方が、よろしからうと存じまする。
五平　イカサマ、そこも承知いたし居れど、只今と申しては、持ち合せたる金子とても
東林　ござりませぬか。左樣なら斯うなされませ。あの者へ書附を書いて遣はされませ。いつ何時でもその手形證文を持つて、金と引替へ。
畑右　こりやァお醫者樣のいゝお裁きだ。併し、その證文も、只の證文では心許ない。ちつといやらしいが、神々樣を誓ひにかけて、神文書いて下さらば、この二品を渡しませう。
五平　神文の一札で、二品を出すとあれば、隨分爰にて書いて遣はさう。
畑右　左樣ならお賴み申します。

ト下の酒屋の内より硯箱を持つて來り、五平太に渡す。五平太證文を書く。此うち畑右衞門、以前の飴の袋に入れしお市を、錦の袱紗に包み、尊像と摺りかへる。五平太、此うち證文を書き終り、東林に渡す。

東林『取かはし置く誓紙の事。一ツ、この度、其方と契約の上は、日本の神々を誓ひに立て、偽はりこれ無く候ふ。もし二心あるに於ては、佛神の御罰を蒙むり、未來は無間地獄へ落入り、長く苛責を受くるべく、現世にてはこの色紙、印子の尊像書附けを以て、いづ方へ罷り出で候ふとも、決して恨み申すまじく候ふ。後日の爲、仍て件の如し』

五平 それで申し分はあるまい。

畑右 そんなら、この書附けを褒美と引替へ。

東林 その文言は書かずとも、此方の大事の書附け、違變はない。して、名前の所は。

五平 主が家來に證文をやるのに、名前どころか味なもの。

畑右 モシ〳〵、左樣なればその名前を、私しより兄の名前。わしが絲屋へ奉公に行つたとき、請け人に立ちましたる、家主の左五兵衞と、その名前になされませ。

五平 然らば名前は、左五兵衞どの。

ト書き終る。

畑右 左樣なら印子の尊像。

東林 して、いま一品の菅家の色紙は。

畑右　ドッコイ。二品ともには渡されぬ。この色紙は金と引替へ。

五平　ハテ、拔目の無い畑右衞門。然らばそれまで大切に

畑右　きつと懷へ入れて居りまする。

ト色紙を懷へ入れ、件の似せ物を五平太に渡す。五平太懷中する。

東林　然らば五平太さま。

五平　東林老。ナニ畑右衞門、その時きつと

畑右　お金と引替へ。

五平　ハテ、間違ひは無いわい。

ト通り神樂になり、五平太下座へ入る。東林は暖簾口へ入る。畑右衞門殘り、思ひ入れあつて

畑右　先づ、まんまと一札を取つて似せ物を渡し、誠の尊像は此方にあり、この二品にてこの身の出世
併し、五平太が誠と思ひ、金を渡さば隨德寺。餘ツぽどうまい……うまいと云へば、馬めがひだ
るからう。イヤ、馬よりもおれの腹が來たわえ。ドリヤ、この勢ひに一杯やらかさうか。

ト下座へ入る。通り神樂、鳥追ひ唄になり、向うより雲哲、所化の拵へにて、札の附きし打敷を持ち
酒に醉うたる體。左五兵衞、老けたる家主にて骨壺を提げ、燒場の歸り。權兵衞、古鐵屋の形、木綿

やつしにて出で來り

雲哲　カウ〳〵、施主の家主さん、千住に灰寄せに來て、只歸る法はない。是非小塚ツ原で遊んで行かう。この雲哲は大の馴染みがある。おれが臺を一枚奢るぜ。どうだ〳〵。

左五　コレサ〳〵、坊さん、とんだ事を云ひなさい。灰寄せに來て女郎を買つては、家主の役が濟まぬ殊に店子に云ひ譯がない。

權兵　左やう〳〵、わしも御町内の夜番太郎助が養子、この權兵衞が一緒に參りまして、氣が紛れては濟みませぬ。殊にお内儀樣がお果てなされまして、直ぐに女郎買ひとは、佛の手前もございまする。

雲哲　なにサ、お家主のお内儀は、あんまり惜しくもない女だ。近頃不躾ながら、とても幽靈になつては出られぬ。出れば化け物の口でござる。

左五　成る程、御坊の云ふ通り、女房の死んだのは、錢を三百落した心持ちだといふが、それほど惜しいとも思ひませぬ。それにつけても、貴樣の妹分のあのお梶、内にゐる時はこの家主、至つて執心であつたが、緣のないやら、今ではこの宿場の藝者。女房が死んだを幸ひ、二度添ひが欲しいが、あのはね吉は相談は出來まいか。

權兵　サア、あの妹も、今月年季が明きましたが、いろ〱借金の殘りがござりますゆゑ、主人方でもすべよくは出しませぬ。

左五　サ、そこぢやて。妹が得心されたれば、借金位は拂つてもやる。高の知れた借り殘り。それも承知ぢやが、いよ〱貴樣は妹を

權兵　得心さへ致したならば、御相談いたしませう。

雲哲　ア丶、權兵衞どのゝ妹といふは、はね吉の事か。宿場で評判のはね吉、左五兵衞どのゝ女房には打つてつけだ。器量はよし。惜しい事にはね吉……これは兄貴の前で麁相な事を云つた。併し、氣前は好いものサ。本町の綱五郎と、大色だといふ事だ。……ホイ、また差合ひを云つた。ハ丶、ハ丶丶丶、大きに醉つた。ちよつぴり洒落やせう。オイ、多七どん〱。

ト奥より多七出て來り

多七　これは〱雲哲さま、ようこそ……オ丶、權兵衞さん、親方が逢ひたいと云つて居られた。

權兵　わしも妹の事で、相談に來ました。

左五　そんなら次手に、妹に逢つて右の事を

權兵　談じて見ませう。

二立目



三立目



雲哲　其うち左五兵衛さん、ちよつぴり一盞。

左五　跡から行きやせう。

權兵　わしはこれよりお部屋へ行つて、何かの掛合ひ。

左五　待つてゐるによ。

多七　お客だよ。

ト多七先に雲哲、權兵衛奥へ入る。左五兵衛殘る。この時下座バタ〳〵にて、畑右衛門逃げて出てくる。跡より庄九郎、羽織ばつち。傳助、吉原の若い者にて追ひかけ出て、畑右衛門を捕へ

庄九　ヤイ、うぬは〳〵。こちの絲見世の番頭、左五兵衛が弟ゆゑ、奉公に置いたところ、内の品を引出して駈落ち。爰で逢うたが幸ひぢや。持つて逃げた代物を、殘らず爰で返し居らう。

傳助　カウ〳〵、畑右衛門、吉原の若い者傳助だ。去年の暮れから、この春の仕舞ひに、一座の前があるから呑み込んで、貴樣の顏を立てゝやつたに、梨の礫もない上に、附けてやつた馬まで、道で踏みのめして寄越さず。聞けば貴樣は商賣が馬士ださうだ。馬士が附馬をはぐらして濟むものか。なんでも今日は、是非連れて行かにやァならねえ。歩ばつせえ〳〵。

庄九　そんならわりやア、今では馬士になつたか。イヤ、呆れた奴ぢや。もう〳〵、さういふ身狀では、

ちよつとも待たれぬ。サア、盗んだ物を、いま寄越せ〳〵。

ト大聲をあげる。左五兵衞この中に入り

左五　これは絲屋の後見庄九郎さま。ようこそ弟を捕まへて下されました。この左五兵衞は兄ながら身狀の惡い弟、御帳に附きましたあなた方の、御勝手になされませ。

畑右　これサ兄貴、そんなに氣まづい事を云ふものぢやねえ。現在弟が難儀の場所、どうか始末を附けて下さい。

左五　押しの強い事を吐かせ。難儀するのも身から出た錆ぢや。おれが目にかゝれば、召連れて訴へねばならぬ。知らぬ顔をするは、兄の情といふものだ。

庄九　何もかも云ふ事はねえ。盗人同然な此奴め、直ぐにこれから代官所に。

傳助　わしも願はにやなりませぬ。

畑右　モシ〳〵、お二人ながら、段々御尤もでござります。たゞ口でばかりお詫びを申しては濟みますまいが、爰に斯ういふ代物がござります。

ト懷中より色紙と尊像を出し

これは金になる代物でござりまする。金の出來るまで、この二品をお預かり下さりまして、どう

ぞ四五日、お待ちなされて下さりませ。

ト庄九郎、尊像をよく〳〵見て

庄九　成る程、こりやア金になりさうな代物。われが風體で、どうして此やうな物を……これも大方

畑右　イエ〳〵、出所は慥かなお屋敷の寶物、以前の旦那から預かつたのでござります。

傳助　この色紙も、そんなら金の代りに、此方へ取つて置きます。

庄九　金の埒が明かぬと、この品は流れるぞよ。

傳助　此方は流れては勝手が悪い。間違ひなく四五日のうちに。

左五　それまで待つてやつて下さりませ。左様なら庄九郎さま、御不請ながら

畑右　エヽ、兄貴、大きにお世話だ。口出しをしてもらふまい。

左五　兄に向つてその口は

畑右　たつた今、兄ぢやアねえと云つた。

傳助　これサ、兄弟喧嘩は此方は構はぬ。旦那へ云ひ譯、この品を預かつて歸ります。ちつとも早く金を拵へて下さい。こりやアどなたも、おやかましうござりました。

ト傳助は色紙を懐へ入れて向うへ入る。

庄九　左五兵衞、あんな奴に構はずと、奥で飲んで行かうではあるまいか。

左五　おんぶなら參りませう。

畑右　エヽ、慾張り親仁め。

左五　何だと吐かす。

庄九　ハテ、構はずと、サア來やれ。

ト兩人奥へ入る。畑右衞門殘り、思ひ入れあつて

畑右　エヽ、いま〳〵しい。折角似せ物を摑ませて、捲きあげたあの二品、つまらぬ事に……併し又、どうか仕事があらう。年寄りの癖に彼奴らは……い、ワ、押しかけて、酒でも飲んでやらう。

ト畑右衞門、暖簾口へ入る。通り神樂、誂への流行り唄になり、向うより槌右衞門、羽織着流し、町人の形。小絲、深川の女郎にて、駒下駄を穿き、三次、船頭。おつや、輕子の形にて、皆々出て來り

槌右　半右衞門が所も、東屋も、みんな座敷が混んだゆゑ、初酉へ參りながら、今夜はひねつて小塚ツ原と酒落るつもり。翁の鰻といふ景物もありやす。

三次　モシ〳〵、旦那、わしやァ此方は、さつぱり勝手が知れやせぬ。その上お客を送り申しても、お

つりもあるまいし、ふさぐ譯だね。

小絲　何ぢややら氣味の悪い所。早く内へ歸りたいわいな。

つや　そして、お前はんには泊りが附いてゐるし、早う歸る方がようござんす。

槌右　コレおつや、この小絲は、男嫌ひといふ噂。それに又どういふ事か客がたんとある。ちつとは又中に、嫌はぬ男がありさうなもの。まづ差あたり、この槌右衛門なぞは

小絲　取分けて嫌でござんす。女郎をしながら男嫌ひも、我まゝらしい事、云ふのは勿體ないと思ふけれど、生れついたわたしの因果、兄さんの仕業で、よんどころなう勤めの身。こりや内の旦那さんも承知の上。床のある女郎衆より、猶更辛いわたしが勤め。可哀さうなと思うてなら、その氣で附合うて下さんせ。

槌右　その氣がとんと恐れる譯だて。おぬしも女ではないか。マア男と寢て見やれ。又おつりきな氣になるものだぜ。

三次　イエモウ、小絲さんに限つては、おつな氣になつた事を、今までまだ聞きませぬ。

つや　もしやにかゝつて、客人もお出でなされますが、お前さんも男なら、小絲さんを落して御覽じませ。

小絲 おつやさん、否だよ。手向けておくれでないよ。

槌右 イヤ〳〵、是非ともおれが落して見せう。

ト抱きつく。此うち七郎助、後へ出かゝりゐて

七郎 オイ、門中で見ッともない。

ト引分ける。

槌右 おぬしは七郎助。

七郎 いま後で聞いてゐたら、兄の仕業で辛い勤めと云つたが、兄といふのは醫者の東林、賣つたはおれだ。おれも元はりやんこの端、曾我の家來の團三郎が、兄の間拔けに勘當され、其うちにわれが親、風の神の太左衛門が養子になつた。いはゞおぬしの聟になる氣。てめえがおれを嫌ふゆゑ業が沸えたから、千住通ひをおッ始め、金に詰まつておぬしが身を、仲町へ仕切りで出し、てめえが兄の東林と、一緒におれが金を借り、證文の表はおれが兄なれど、いはゞ亭主の七郎助。

小絲 サ、その男が否でござんす。親とお前が承知でも、わたしが否で杯せねば、亭主でもござんせぬ。あんまり我まゝ云うて下さんすな。

七郎 その又男嫌ひが、なんでわりやア子を産んだ。

小絲　エヽ。

ト思ひ入れ。

七郎　男嫌ひが、父なし子を孕んだか……云ふな。何もかもおれが知つてるらア。成田へ詣つて歸ると其まゝ、ほてれんになつて子を産んだ。それでもわりやア男嫌ひか。サア、この上は、亭主でなくば矢ッ張り兄よ。兄の高下で、われを槌右衞門さんの所へ片附ける。女房になれ。

槌右　ハヽア、そんなら小絲は子があるか。さういふ事なら、あんまり男嫌ひでもあるまい。

三次　わしも斯う云へば、どうか金の襟に附くやうだが、客と女郎と、何方も粗末になりませぬ。お前が承知さへすれば、兄貴もお前も、浮び上がるといふものだ。男が嫌ひでなくば、旦那の心に隨ひなさい。

七郎　コレ小絲、なぜ默つてゐるえ。男嫌ひが子を産んだぢやアねえか。否だの應だのと云ふが我まゝといふものだ。たつて否だと吐かすと、打のめしても承知させる。

槌右　コレ兄貴、おれもこれまで小絲にかゝつて、門屋敷も半分家質、もう〱云ひかゝつては、否でも應でも女房にする。さう思つて下さい。

三次　カウ、小絲さん、お前、默つてゐちやア解らねえ。どつとも返事をしなせえな。

七郎　エヽ、小焦れッてえ女だ。なぜ物を云はねえ。

ト小絲思ひ入れあつて

小絲　サア、おつやどん、行かう。

トおつやの手を引き、行きにかゝる。

七郎　待つた。挨拶なしにどこへ行く。

槌右　今日一日はおれが自由だ。斷わりなしに、やる事はならねえぞ。どうとも斯うとも返事をしろ。

小絲　いつまで云つても返事は一つ。

七郎　否だと吐かすのか。

小絲　アイサ。

トすましてゐる。槌右衞門ムッとして

槌右　この女ア、太え女だ。

ト小絲、槌右衞門の顏を見て

小絲　モシ、どなたから御朱印を貰つて、わたしを女呼はり、措いて下さんせ。詞の凄味や金づくで、女郎が自由になるものと、思ふ心の行きどまり、苔の淸水でその顏を、寫して見てから云はしや

んせ。わたしも女子に生れたからは、好いた男もござんせう。無うてかいなア。思ふ男はたつた一人。浮名巽の中裏で、噂されるは口許が、淺い仲ではござんせぬ。誠に眞實心底づく。それより外はどなたでも、男嫌ひと評判を、賣りつけ今日まで辛抱した、憚りながらこの小絲、否ぢやと云ふに間違ひは、金輪奈落無いほどに、マアさう思うて下さんせ。

七郎 わりやア大分云ひ草が上がつた。わりやア又外に男があるなア。

ト懷より以前拾ひし文を出し

『六三さままゐる。絲より』。こりやアわれが手紙であらうが。

小絲 いかにお前、わたしを苛めたいとて、覺えもないその手紙。そんな事は知らぬわいな。

七郎 イヽヤ、われが文に違ひはねえ。

槌右 そんなら小絲はまた外に、色男へやるその濡れ文。エヽ、腹が立つわえ／＼。

トこの前より六三出かゝりゐて、懷を探し見て、そこらを尋ねる思ひ入れ。

六三 先刻たしか爰らへ。

ト七郎助の持ちし文を見て

オヽ、爰にあつた。こりやアおれのだ。

ト取りにかゝる。

七郎　貴様は誰れだ。

六三　おらアこの文の主の、六三といふ大工だ。

槌右　ハヽア、そんなら小絲が色だといふ。

六三　イヽヤ、そりやア間違ひだ。先刻のごたつきに、紙莨入れの中へ入れて落した文。いかにも絲というのはおれが色だが、小絲と書いちやアねえぜ。元より小絲といふ女は、おらア見た事もなし世の中にやア同じ似た名もあるものだ。絲と小絲の間違ひで、先刻から見てゐれば、可哀さうに若い女を捕まへて、人中でわつぱさつぱ。どこの人だか知らねえが、見つともねえ、よさつしやい。この文はおれがのに違ひない。

槌右　イヤ〳〵、それでもその文は、小絲が手蹟に違ひない。男嫌ひと吐かす癖に、嫌らしいその文ゆゑ。

六三　それで貴様が腹が立つか。見かけは立派な人だが、わからねえ男だ。常人も覺えはねえと云ふし宛名の六三は猶知らぬ小絲。アヽ、こりやアなんだな。譯もない難題を、この子に云ひかけて口說くのか。アヽ、不便な事だ。色の仕樣を敎へてやりてえものだ。

ト嘲笑ふ。七郎助思ひ入れあつて

七郎　この男は、大分おいらをきよくるが、そんならその文の、絲といふのはどこの女だ。

六三　それを聞いて何にするのだ。そんじよそこの、斯う〳〵いふ女だと、迂濶にしやべるべら坊があるものか。

槌右　それが云はれずば、いよ〳〵小絲に違ひねえ。

三次　小絲さんの文なら、おれが手をよく知つてゐる。ちよつと見せやれ。

ト六三にかゝるを、突き廻して見事に蹴りのけ

六三　どんな用が書いてあるやら知れぬ文、うぬ等に見せて堪るものか。人の色の文詮議も、いらぬお世話だ。よし又この文があの子の文で、おれが所へ來たならどうする。女郎は賣り物買ひ物。勤めの習ひ、客の所へ文を寄越すめえものでもねえ。貴樣は間抜けて振られてゐるから、女の文は見た事はあるめえな。この文は、成る程、小絲さんの所から、おれがとこへ來た文よ。

ト小絲思ひ入れあつて

小絲　モシ、わたしやアそんな覺えは

六三　ねえ筈よ、おれも知らねえものを。併し此奴等が、あんまり氣を揉むゆゑ、お前の文だと云ふな

ら云はせて置いて、片ッ端から面の皮をひん剝いてやらア。コレ、お客だか飛脚だか知らねえがこの文は、おれが紙莨入れに入れて置いた。どうして貴様が持つてゐる。大方人ごみの中で、稼ぎでもしやアがるのだらう。サア、文を入れて置いた莨入れを、どこへ吐いた。

槌右　それをおれが知るものか。

六三　知らねえも淒まじい。この盜人めらア。女子供をつらめえて、無理無體の難題の、云ひ草は達者に吐かすが、文の名宛の六三はおれだ。云ひ草があるならおれに云へ。大工の六三が相手にならう。初春早々ごたつくも、誰が指し金の節なしに、出入りも濟むか墨壺の、絲と小絲の間違ひから、一寸ならぬ五分鑿でも、引かぬひつきり氣の荒醜、こいつは一番、團十郎を出さにやアなるめえ。

トこれにて皆々氣味惡き思ひ入れ

槌右　これサ〱、若いの、いゝよ〱。間違ひなら間違ひで、そんなに筋を出す事はねえ。ナア三次

三次　左やうサ、畢竟酒の上の事で、いはゞ痴話喧嘩も同じ事。

七郎　先刻爰で拾つた文、丁度名前が似たゆゑに、ツイ云ひかゝつた間違ひだ。

槌右　カウ〱、腹を立たずに、不請しなせえ〱。

六三　ムウ、張合のない奴等だ。そんなに云ふものを、此方から好んで出入りをしたくもねえ………
小絲さんとやら、お前も機嫌を直しねえ。
小絲　どなたか存じませぬが、有り難うござんす。
つや　どうなる事かと、わたしや大抵案じた事ぢやござんせん。
六三　ナニお前、案じる事があるものか。聞けばあの子は、男嫌ひださうだね。わしもこの文の、絲といふものに搦まつてゐるざア、少しはあの子に、こぐらかりてえ心もあるが、何を云つても、彼方は男嫌ひの事なり、どうで出來ねえ相談だ。緣があつたら又その後逢ひやせう。
つや　モシ、ちつと深川へお出でなされまし。
六三　アイ、お忝うござりやす。わッちらがやうな者でも可愛がつて
槌右　エヽ、見ることと聞くことにつけて小胸の惡い。
三次　マアモシ、お酉樣へでも詣つて、氣を直しなせえ。
七郎　小絲を愛へ殘して置くは、ほんの猫に鰹節。
槌右　それ〳〵、狐に油揚げ。サア〳〵小絲、一緒に來やれ。
ト小絲の手を取るを、振り放し

小絲　サア、おつやどん。

　　トおつやに手を引かれる。

槌右　そんなに否か。

三次　ハテ、野暮を云はずに歩びなせえ。

六三　ざまを見や、犬を見たやうな奴等だ。

三次　わんだと吐かす。

七郎　ハテマア、行きなせえ。

　　ト通り神樂、鳥追ひ唄になり、この人數皆々奥へ入る。

六三　いま〱しい奴等だ……オイみんな、好い加減に食へな。

　　ト酒屋の内より勝、鐵、徳藏出て來り

勝　カウ、親方、お前いま後で見てゐたが、今の女に氣があるの。

六三　馬鹿を云へ。彼奴は男嫌ひだ。殊におらア、知つてゐる通り、絲屋のエテがあるし、どうしてそんな事があるものか。

徳藏　ひよつとそんな事があると、わつちが云ひつけます。

六三 ソレ見や、子供は正直だ。おらア外の女は目に入らねえ。
鐵 噓をつくぜ。時に勝や、勘定はよかつたかえ。
勝 あれで澤山よ。
六三 そんなら酉へ詣つて來よう。
皆々 サア、行きなせえ。

ト六三はじめ、この人數皆々下座へ入る。直ぐに通り神樂、流行り唄になり、向うより、はれ吉、藝者の拵へ。綱五郎、羽織股引、藤倉草履にて、熊手と御多福の面を持つて、はれ吉に引ツ張られ出る跡よりお京、宿場藝者の形にて附いて出る。

はね コレ、綱五郎さん、お前何をウロ〳〵してゐる。大方先へ行つた、深川の女郎衆とかいふ風な、女に見惚れての事か。お前も餘ツほどのろい男だ。今日爰へ一緒に來たも、わたしの兄判で、權兵衛どのが貰ひ主。それに內では年季が明いても、借の抵當に出す事はならぬ何のと云ふゆゑ、その譯道を附けてもらはうと思つて、一緒に來たのではござんせぬか。
綱五 知れた事だ。おれもふとした事で、てめえと浮名が立つて、本町河岸で人にも知られた綱五郎、絲屋の內へ聟に入り、中根屋の次右衛門どのが病死の跡、たうとう內はおれが潰して、今ぢやア

その株を買つた人は、阿野屋十兵衞といつて、本町二丁目で絲屋商賣。その株を賣つたこの佐七は、元へ戻つて矢ッ張り本町綱五郎。女房は本所の松坂町で、相も變らぬ苦しがり。てめえの事もどうかして、昔の身ならばと、新内じみた事を云つたばかりぢやア始まらねえ。金といふ強者にやア、關羽が渡りに來ても叶はねえ譯だ。それゆゑてめえの兄貴に、主人方へ嘆いて見ろと云つて先へ寄越したが、マア〳〵、その返事を聞いた上、また思案もあらうぢやアねえか。

お京　わたしもいろ〳〵借金はあるけれど、年季々々と分けらるればよいけれど

綱五　そこが主人方の附け目。鹽引で茶漬を食つた錢まで貯めて置かれて、年季にされちやア、子供も困る譯だ。

ト　この時奥より權兵衞出てくる。はね吉見附けて

はね　アレ兄さん、お前、旦那に逢つておくれか。

權兵　オヽ、綱五郎さん、段々主人方へ掛合ひましたところが、妹の借金は、みんな證文になつてゐるゆゑ、その濟み方の附くまでは、藝者が否なら女郎にしても勤めをさせると、とつてもつかぬ强情ばかり。どうしたものでござりませう。

綱五　爰らの商賣屋ぢやア、その位な横は云ふだらう。何を云ふにも借りたが不請。

はね　お前借りたと云つて、固まつた金でも借りはしめえし、ツイ浮れた酒の上で、臺を取つたり何かしたのサ。あんまりわッちが氣前がよかつたものだから、その上にわッちやア、どこか門之助に似たとか云つて、來る客も褒めるから、旦那にグッとのりが來て、女郎衆にでもする氣ださうだ。吉原の花魁にでも、なるのならいゝけれど、小塚ッ原ぢやア冴えないね。

綱五　あんまりべら坊云ふな。それだから世間で、兄貴の前ぢやア云ひ憎いが。

權兵　刎ね者ぢやとの評判。そこでてめえの名もはね吉。

はね　オヤ、お前方、よく知つてお出でだね。みんながわッちの事をさう云ふよ。

綱五　困つたものだ。てめえ、門之助にやア似ねえ。小野の小町に生寫しだ。

はね　ムウ、ちいッと似てゐると、直にそんな事を云ふよ。

權兵　これはしたり、其やうな事を云ふより、てめえの身の上の事。その證文も出しては見せたが、恥かしいがわしは無筆。どういふ事が書いてあるやら、よいやうにされたかも知れぬ。兄がこれ程苦勞をしてゐるに、おぬしはよい氣な

はね　兄が苦勞で枕を投げた。

お京　はね吉さん、あんまりだよ。あのやうに兄さんが、苦勞をしてゐるもの。綱五郎さん、どうぞ仕

様はござんせぬか。
綱五　仕様と云つたら、借金を償ひさへすれば、一も二もねえ、と云つたところが差當つて
はね　色男は、いつでも金が無いものサ。
お京　わたしも同斷。相手にする思ふ男は
はね　矢ッ張りごろつき眞ッ裸。
權兵　また彼方から惚れてゐる男には、金があつても妹の氣には
綱五　して、その男は
ト權兵衛、綱五郎に囁く。
アヽ、そんなら大家の
權兵　先刻も先刻、その事を
綱五　殊に女房が死んだ噂。その相談から
はね　わッちやア否だよ。年寄りの癖にあの家主、頭は藥鑵で、あんま鍼の療治。
お京　そこを辛抱したならば
綱五　一番何ぞ好い思案がッ　何かの話しは隣の酒屋で

権兵　そんなら妹へ今の話しを
綱五　兄貴と一緒に
　　　　　　トはれ吉を突きやる。
はね　それでも兄さん、今の事は
綱五　兄貴ゆゑには綱五郎、心を許して
権兵　委細の話し。
綱五　とつくり御思案。
はね　大福餅あつたかい物で一つおやりな。
お京　わたしは内のしがくをば
はね　お京さん、頼むよ。サア兄さん
　　　　　　ト権兵衛の手を取り
　　　綱さん後にえ。チヤン
　　　ト我が手に唄を唄ひながら、権兵衛の手を取り、酒屋へ入る。お京、奥へ入る。綱五郎残り、床几に腰
をかけ

綱五　あのはね吉には困るぞ。

ト下座バタ〱になり、小絲駈けて出て來り

小絲　モシ、ちよつとわたしを隱して下さんせ。

ト綱五郎の羽織の裾へ隱れる。下座より槌右衞門、三次駈けて出て來り

槌右　どこへ逃げやァがつたか。

ト綱五郎を見て

モシ〱、お前、先刻から爰に居なすつたか。

綱五　アイ。

槌右　爰へ女が一人、逃げて來やァしませんか。

綱五　アイ、來やした。

三次　その女は、どこへ行きました。

綱五　その女は、風呂敷包みを背負つて、杖を突いて、西新井の大師樣へ行くと云つて、今まで爰に休んでゐました。

槌右　なにサ、そんな女ぢやァねえ。グツと年の若い、派手な女サ。

綱五 アヽ、そりやア今、あの地藏樣の後で、派手な着物を着て、嫁菜を摘んでゐた。餘ッぽど年も若かつた。

三次 いくつ位な女でござります。

綱五 七つか八つ位、まだ芥子坊主だ。

槌右 エヽ、この人は、よく人をちよつくり返す人だ。深川の女郎のやうな風體の女よ。

綱五 そんならさうと、早く云ひなさればいゝに。その女は、いま爰の内へ入りました。

槌右 アノ爰の内へ、何しに。

綱五 それまではわしやア知りませぬ。

ト槌右衞門、暖簾口へ向つて

槌右 オイ、頼まう〳〵。

ト奥より多七出て來り

多七 ハイ〳〵、これはようお出でなされました。お客だよ。

槌右 これサ〳〵、おれは客ではない。

三次 いま爰の内へ女が一人

多七　一人でも二人でも、女郎衆はいかい事ござります。サア、先づお上がりなされませ。ソレ、お茶を上げろよ。
槌右　これサ、客ではないと云ふに。
　ト云ふを聞かず、多七、捨ぜりふにて無理に二人を連れて入る。
綱五　サア、もうようござりやす。
　ト立つ。小絲、癪の起りし體にて、床几にかゝり、俯向いてゐる。
どうした／＼。アゝ、癪か。
　ト後へ廻り、いろ／＼介抱して
アゝコレ、何ぞ薬が
　ト紙入れより何やら薬を出して服ませ
カウ、女中さん、氣をしつかり持ちなせえ。
小絲　ハイ、有り難うござんす。もうようござんす。
綱五　お前、どうしたのだえ。
小絲　ついぞ逢うた事もないお前さんに、此やうにお世話になり、お氣の毒でござんす。

綱五　なにサ、そりやアいゝが、お前、一體どうしたんだえ。

小絲　初めて逢つたあなたへ、お話し申すも恥かしい事ながら、わたしは深川の小絲といふ遊びの者。少し譯がござんして、云ひ交した男、しかも子まで生した仲、その男の行くへも知れず、その後いろ〳〵艱難して、斯うした身の上。男嫌ひと云ひ通す、勤めの内の猶辛さ。いま爰へ來たあの人が、酒で落すと無理無體、斷わり云ふても恥しめても、一向聞かぬ無理口說き。それゆゑ爰へ逃げて來て、お前さんに隱してもらひ、濟まぬ心に血の道と、持病の癪にて又ぞろや、お世話になつた氣の辛さ。御恩は一生忘れませぬ。有り難うござります。

綱五　ムウ、女郎商賣にやア似合はぬ、一人の男に心中立て。それで男嫌ひとは、猶々好もしい。人も迷ふ筈だ。そしてお前、子があると云つたの。

小絲　アイ、今年で五つになります娘の子。わたしが養子に參りました、先の親の心が惡さに、後にはわたしをむがうして、その後產み落した娘も、里親へ預けたと云ふたは噓。誠はその子を捨てたといふ事。跡でわたしはその話しを、聞いた時の悲しさ。初めて逢うたお前さんに、恥かしい身の上話し。外へ話して下さんすなえ。

綱五　ハテ、とんだ話しだね。併しお前、子を產みながら男の肌を、今に知らぬといふ事もあるまい。

小絲　殊に浮氣な商賣柄。小絲さん、なんとお前、恩にかけてぢやァねえが、今の禮をする氣はねえか。
綱五　詞の禮で濟まぬというて、不躾らしいお禮の仕樣も
小絲　なにネ、いくらもありやす。
綱五　そのお禮の仕樣は
小絲　そのお禮の仕樣は……斯ういふお禮よ。

ト抱きつく。

綱五　これはしたり、お前は餘ッぽど冗談ものだね。
小絲　野暮を云ひなさんな。冗談に男の口から云はれるものかな。初めて惚れたのぢやァねえ。先刻橋場の渡し場から上がつた時に、小嫌らしいがゾッとする樣、ぶッつけて云やァ矢ッ張り惚れたのだ。これサ、いゝぢやァねえかな〳〵。

ト寄り添ふ。

綱五　誠に嬉しうござんすが
小絲　そのがの字が氣障だの。
綱五　そりやお前にも似合はぬ仕方。男嫌ひと云ひ憎い、その譯道を聞いてゐながら、恩を見せての板

縛り、否と云はさぬ所なれど、こればつかりはお斷わり。いかに深川に澤山な馬鹿ぢやとて、冷かして下さんすな。

綱五　その云ひ草が堪えられねえ。

ト　また抱きつく。下座よりおつや出て來り

つや　アヽ、小絲さん、お前を先刻から尋ねてゐたわいな。

小絲　わたしや持病の

つや　また癪かえ。そんなら爰の内を少つとの間借りて

ト　暖簾口へゆき

お頼み申しませう。

ト　奥より多七出て

多七　ハイ〱、どなたでござります。

つや　モシ、少つとお頼みが

ト　多七に囁く。

多七　エヽ、左樣なら、下の茶の間の座敷が明いて居ります。そこへお連れ申しなさい。

つや　そんならわたしが先へ行つて、小絲さん、早く來なさんせえ。

ト多七と連れ立ち入る。

小絲　おつやどん、わたしも一緒に

ト行かうとする。

綱五　小絲さん、蛇の生殺しは恐れるぜ。どうしてくれるな。

小絲　ほんに困るねえ。

綱五　なぜな。

トまた抱きつくを

小絲　お氣の毒ぢやが……好かねえよ。

ト振り切り、有あふ莨入れを綱五郎に打ちつけ、唄になり、暖簾口へ入る。綱五郎は莨が目に入りし思ひ入れにて、うろ〳〵してゐる。下座より六三、何心なく出てくる。綱五郎、小絲と思ひ、六三にしがみつく。

六三　誰れだ。何をするのだ。

ト綱五郎、目をこすり、六三を見て

綱五　てめえは六三か。

六三　兄貴、こりやァ何の眞似だ。

綱五　エヽコレ、いま爰へ深川の女が來て、古い奴だが

六三　惡い所へ來たと云ひさうな鹽梅だが、兄貴、また始まつたの。よすがいゝぜ、見つともねえ。

綱五　そりやァ何を。

六三　何でもいゝ、ちよつと爰へ掛けなせえ。

ト合ひ方になり、綱五郎を床几に掛けさせ、思ひ入れあつて

いま改めてこんな事を云ふのも、をかしなものだが、仔細あつて、二人が仲は兄弟同然、兄分と頼んだこなたに、意見がましく云ふではないが、絲屋の娘お房どのゝ所へ聟に入り、一年經つか經たぬうちに、財産を潰し、絲屋の株を人に讓り、居附きの娘のお房どのまで連れて出て、たんと苦勞をさせたのに、たうとうそのお房どのを構ひつけず、此ごろ聞けばお房どのは、捨て子を拾うて育て上げ、行く〳〵はその子にかゝると、お前の事は恨みもせず、女の身の獨り拵ぎ。今時の女には珍らしいと世間の評判。野暮な事を云ふやうだが、ほんに涙のこぼれるやうな志し。それに引替へ、いゝ氣になつて女狂ひ。それも思ひ附きのある女ならばまだしもの事。小塚

ツ原で名代の馬鹿藝者、はね吉といふ奴にくらひ込み、人に後ろ指をさゝれるのも知らず、外で噂を聞く度に、わしやァ辛くつてなりませぬ。その上いま聞きやァ、深川の女にどうとか斯うとか云つたが、大方そりやァ先刻の、男嫌ひだと云つた、小絲といふ女郎の事だらう。あの女を口說いてよけりやァ、わしが口說いて色になる。それさへ一人の男に情を立て、女郎の身で大それた、男嫌ひといふ程な女、光る源氏業平が口說いたとて、ナニ得心をするものか。それにマア見つともねえ。よし又得心したところが、女に貞女を破らせて、末も遂げねえ浮氣話し。先づ第一先祖へ立つめえぢやァねえか。ほんに〳〵愛想の盡きた。コレ兄貴、女狂ひも、少つとは止められさうなものだによ。

ト思ひ入れ。綱五郎溜め息をつき

綱五　成る程、おぬしにさう云はれては、おらァ一言もねえ。誤まつた〳〵。もう止める。ふつ〳〵女は振返つても見ねえ。

六三　久しいものだ。口は立派に云ふけれど、どうしてそれが

綱五　本當にやめる。女は一生斷ち物にする。併し女を斷つてしまつた日にやァ、鰯の頭を丸嚙りにしてもいゝ理屈だ。それぢやァあんまり色氣が無い。一月に一度ぐらゐは、よさゝうなものだ。

六三　それ〳〵、その位な心持でゐれば、間違ひはねえのサ。
綱五　いよ〳〵そんなら、きつとその心持だの。
六三　そりやァ誰れに云ふのだ。
綱五　お前様に。
六三　ヤ。
綱五　人の一寸、我が身の一尺……誠は神原左七郎さま。
六三　ヤ、コレ。

ト入れ替つて六三を上座へ直し、誂らへの合ひ方、綱五郎こなしあつて

綱五　モシ、若旦那様、あなたは私しが爲にはお主筋。いつぞや豆州三島宿にて、お預かりの曉丸、何者の爲にか奪ひ取られ、その越度ゆゑ今の御流浪。兄御十右衛門さまとても、江戸屋敷にて尊像色紙紛失ゆゑ、日延べの日限までに、その二品の出ぬ時は、兄御十右衛門さまは御切腹。都合三品の寶をば、詮議せにやならぬ大切なお身の上。それゆゑに世間體は、私しが弟分。御器用な細工氣から、思ひ附いたる大工の六三。御流浪なされて日もないに、最早手馴れし職人業。今ではどうやら棟梁株のやうに弟子も殖え、世間の詞使ひなど、教へてあげたが仇となり、喧嘩好み

の傳法附合ひ・馬鹿な面だの、べら坊のと、それが神原左七郎さまの……トサア、今更そんな野暮を云はずとも・御承知でもござりませうが、いま私しへ女狂ひの御意見、身に比ぶればあなたこそ、まだ御勤役のその以前、京都祇園町の藝子、どしといふ女に迷ひ、しかもその頃懷妊との事。又その上にお國許には、お園さまといふ云ひ號け。互ひにお顏は知らねども、お國許にはさういふものがありながら、この頃聞けば今の絲屋、阿野屋の娘お絲といふ女に現になり、一人が噂、二人が話し、三人四人云ひ觸らし、今ぢやァぱつと浮名が立ち、寶の詮議もどこへやら、女狂ひは町人の事、あなたは心を入れ替へて、紛失の品を取戻し、再び見返るお國の松、家名を吹き起す所存はござりませぬか。いかにお年が若いとて、身持ち惰弱な若旦那。エヽ、お前樣はなア。

ト思ひ入れ。六三、モヂ〳〵して

六三　成る程、おぬしにさう云はれては一言も無い。誤まつた〳〵。もう止める。ふつ〳〵女は振返つても見ねえ。

綱五　久しいものだ。口では立派に仰しやるけれど、どうしてあなたが

六三　本當に止めます。この左七郎は侍ひ、手斧にかけても……イヤサ、刀にかけても噓はつかねえ。

イヤ、僞りは申さぬ。女は一生斷ち物にする。併し、女を斷つた日にやア、鰯の頭を丸嚙りにしても……イヤサ、魚の頭を丸で食べてもよい理屈でござれば、あまり色氣がない。一月に一度ぐらゐやツつけても、イヤ、おやツつけなされても、よからうではあるまいか。

綱五　その心持ちでゐれば譯は無いのサ。

ト奥より權兵衞出かゝり居て、六三に見えぬやうに、綱五郎の袖を引く。

誰れだ、氣味の惡い、何をするのだ。

ト權兵衞招くゆゑ、下の方へ行き

權兵衞、何ぞ用か。

權兵　ちよつと〳〵。

ト綱五郎を花道の方へ連れゆき

外でもない。あれにござるは神原の御次男、左七郎さまではないか。

綱五　成る程、あれは若旦那左七郎さま。先度もおぬしに話した通り、今では御浪人、町家のお住居。

權兵　それも寶の紛失ゆゑ、御兄弟の御身の上。おれも若黨奉公の時分、聊かの誤まりにて、お暇は出たれども、何を云つても元は主筋。寶の御詮議なさるゝなら、及ばずながら共におカにもなりた

いが、なんとおぬし、お詫びをしてはくれまいか。

綱五　オツトよし〳〵、合點だ〳〵……。若旦那、少とあなたへお願ひがござります。

六三　これは改まつた、わしへ願ひとは。

綱五　外でもござりませぬが、以前勤めて居りました若黨權兵衞、聊か誤まちにて、お暇下されたなれども、古主のあなた樣、御流浪なされるを、よい氣味顔に見てゐられず、それゆゑお詫び致してくれいと、私しへの頼み。この儀はどう致したらよろしうござりませう。

六三　以前暇を遣はした家來が、主人の流浪を恨みもせず、詫び事するは忝い志し。頼み少ない我が身の上。兎も角もこなた、よいやうに頼みます。

綱五　早速の御承知、有り難うござります。サア、權兵衞どの、お詫びが叶つた。サア〳〵爰へ。

ト前へおづ〳〵出て

權兵　參りましても大事ござりませぬか。

若旦那樣。お久しうござりまする。

ト六三へ挨拶する。

六三　おぬしも無事で、めでたいな。

權兵　有り難うござります。綱五郎どのとは昔朋輩。あなたのお身の上。寶の紛失何もかも、詳しく樣子を承りました。我れ〳〵が爲にもお主の御難儀。身を粉に碎きましても、共々詮議いたします。必ずお氣遣ひなされますな。

六三　ハテ、頼もしいその詞。この上ともに二人の衆。

綱五　その事はお氣遣ひなされまするな。その代り若旦那、少つと眞面目になさるがようござります。

六三　おれも心を改めるによつて、其方も今日向藝者狂ひは

綱五　なにサ、私しのは、斯ういふ譯でござります。

ト六三へ囁く。

六三　アヽ、そんならおぬしは假の色事。誠の男はこの權兵衞。

權兵　何と仰しやいます。誠の男はこの權兵衞とは、アヽ、はね吉の事でござりまするか。

六三　その、はね吉とやら、どんな女か、見たいものだ。

權兵　お目にかけるも、お恥かしうござります。

綱五　その女を玉に使つて、金の工面や何やかや。

權兵　お主を貢ぐその爲に

綱五　朋輩同志が及ばずながら
六三　おれへの忠義、その深切。
權兵　寶の手がゝり知れるまでは
綱五　浮世を憚り
六三　町人姿に
權兵　矢ッ張りあなたは
綱五　大工の六三。
六三　その兄分の
權兵　綱五郎どの。
綱五　元へ戻して、今夜はワッサリ。
權兵　とんだ所で
綱五　姫はじめか。
六三　ヤ、そいつはあやまる。
權兵　何かは二階で

六三 兄貴、權兵衞どん

權兵 サア、お出でなされませ。

ト唄になり、三人思ひ入れあつて奥へ入る。下座より畑右衞門、生醉ひにて、跡より平次、馬を曳いて出で來り

平次 コレ、畑右衞門、大分醉つてゐるから、野暮を云はずに、内へ歸つて早く寢やれ。

畑右 それでもアノ、問屋の小八のべら坊め、あんまり人を安くしやアがる。

平次 いゝよく。おれが何もかも承知だ。早く行つて寢やれ。

ト無理に畑右衞門をなだめる。此うち畑右衞門、ヨロくして、以前の手形證文を落す。畑右衞門これを知らず

畑右 そんなら平次、貴樣に任せるぞ。

トよろくしながら捨ぜりふにて向うへ入る。平次、落ちたる書附けを見付け

平次 オイく、何か書附けが落ちた。オヽイく……エヽ、あの野郎め。併し、役に立たねえ書附けだんべい。

ト馬を曳き、右の書附けを懷へ入れて、馬に沓を穿かせる。この時奥より五平太出で來り

五平　ヤレ〳〵、樣々な用事で困り果てる。困ると云へば、最前は人目があるゆゑ、先刻の尊像、受取つたまゝ改めもせぬが、念の爲め、ちよつと爰で

ト懐より最前の尊像を出し、見ようとする。下手より伴助出て來り

伴助　それにござるは、山住五平太さまではござりませぬか。

トこの聲を聞き、恟りし、尊像を後へ隠し、伴助を見て

五平　其方は神原佐五郎どのゝ、家來ではないか。あわたゞしい。身共に恟りさせる。何ぞ身共に用事でもあるのか。

伴助　何も左樣に恟りなさるやうな、用事でもござりませぬ。ちと内々にあなた樣に

ト段々側へにじり寄る。五平太、尊像を見られては惡いと、後へ隠したまゝ段々後すさりして、馬の鼻面の所へ行き

五平　神原氏の御家來、身共に用とは何事ぢや。

伴助　別儀でもござりませぬが、今度賴朝公へ差上げる印子の尊像、まつた友切丸の紛失も、箱根下山の箱王丸とも、因幡幸藏が仕業とも相分らず。併しながら、その因幡幸藏と申す盗賊、金錢に目を掛けず、名ある刀脇差ばかり盗み取る事。それゆゑお上より内々の御詮議。そのお役目はあな

た樣と、主人佐五郎。卽ち用意の金子十兩、相渡せと、お役所よりの御用金。イザ十兩、お受取り下さりませう。

ト包み金十兩出す。

五平　ヤレ〳〵、それで少し落ちついた。何事かと大きに恟り致した。然らば金子受取るでござらう。

ト左の手を出し、金を受取る。

伴助　私しの落でござれば、お受取を下さりませ。

トこの時、後に隱したる尊像を、馬が喰ひつく。

五平　アイタヽヽヽ。

伴助　どうなされました。

五平　馬が喰ひつきました。

ト馬、吹替への尊像をムシヤ〳〵食ふ。五平太驚き

ヤア〳〵〳〵、手を喰ひついたばかりか、大切な尊像、あの馬めが………イヤサ、尊像ではない

アレ〳〵、ムシヤ〳〵、こいつは大變だ〳〵。

伴助　モシ〳〵、その受取を。

五平　それどころではござらぬ。屋敷で認めて、持たせて遣はしませう。
伴助　左様なれば私しは
五平　お使ひ御大儀。
伴助　お暇申しまする。

ト伴助引返して入る。

五平　サア、この畜生め。

ト馬の口を取出す。

平次　モシ〳〵、お侍ひ様、その馬を、どこへ曳いてお出でなされます。
五平　この馬は、身が大切な品を食つてしまつた。それゆゑ屋敷へ曳いて行く。
平次　モシ〳〵、とんだ事を仰しやります。この馬を取られては、私しの鼻の下が干上がります。お前さんの大事な物とは、どんな物でござります。
五平　サア、その品は……云ふに云はれぬ大切な品を
平次　どんな品か知りませぬが、馬は食ひ物でなけりやア喰ひはしませぬ。そして食つてしまつたものを、どうなるものか。

五平　此奴が〳〵、武士に向つて慮外千萬。是非とも馬を身共に渡せ。

平次　馬はどうしても渡されません。

五平　おのれ、渡さぬと手は見せぬぞ。

平次　手は見せなくつてもいゝから、馬を返さつしやい。

五平　さう云や、おのれ

ト脇差を鞘のまゝ拔き、平次の眉間をくらはせる。

平次　ヤア、切つた〳〵。人殺しだ〳〵。

ト無性にわめく。この物音に下座より大名四人、七郎助、奥より左五兵衞出で來り

皆々　人殺しを、ふん縛れ〳〵。

荒次　相手は誰れだと思つたら、先刻我れ〳〵と喧嘩をした

黑彌　六波羅の息子平次景高、馬士になつても以前は大名。

有景　陪臣の侍ひに頭をぶち毀されて、知らぬ顏をしてゐるは

濤　　　仲間の達引が無い。これからは我れ〳〵が相手だ。先の野郎を、踏み倒せ〳〵。

ト皆々立ちかゝる。七郎助、左五兵衞中へ入り

七郎 間違ひだ。靜かにさつしやい〱。

左五 五平太さま、どうした譯でござりまする。

五平 サア、少々の間違ひで、これ程にならうとは存じなんだ。左五兵衛、御身よろしいやうに扱うてくりやれ。

左五 マア〱、疵人を見てからの事に致しませう。

ト平次の側へ來り

まづ第一、疵に風が浸みては惡い。何ぞ紙でも押附けるがよい。

七郎 紙と云つたところが何にもねえが、この男が何ぞ紙を

ト平次の懷より以前畑右衛門が落したる起證文を何心なく出し、半分引裂き、宛名の無き方にて、平次の額を拭いて捨てる。

左五 マア、早く醫者を呼びにやるがいゝ。

ト暖簾口より多七、東林を連れて出で來り

多七 丁度お醫者樣が來てござります。

左五 モシ〱、お醫者樣、早う御覽じて下さりませ。

東林　ハヽア、酒興の上の刃傷と見える。して、疵人はどれにゐるな。
七郎　疵人の頭から血が流れまする。顔が赤いゆゑ一向に解りませぬ。
東林　ハヽア、疵人はこれか。ドレ〳〵、脈體を伺ひまして

ト平次の脈を見て

コレ〳〵疵人、食はどうでござる。通じの鹽梅はようござるか。この病人は何を申しても默つてゐるが、舌を出して見せさつしやい。

ト平次パックリ口を開き、舌を出す。東林悔りして

ハテ、怖い面だ。これは昔流行いたした、擂粉木閻魔といふ病氣でござる。
皆々　何を云はつしやる。

ト五平太、左五兵衞をソツと招き

五平　コレ、左五兵衞、爰に金子が十兩ござるが、この金子で疵の扱ひ。身共はあの馬が所望でござるが、これで求めてはくりやるまいか。
左五　あの馬を何になされます。
五平　さればサ、仔細あつてあの馬から起つた顚末。是非とも此方へ。

左五　マア、何にしろ掛合つて見ませう。
　　ト十兩の金を受取り、平次の側へ來て
オイ、馬士どの。疵養生代、これで濟ます氣は無いか。
　　ト右の十兩の內、二兩取つて摑ませる。平次ニツコリして
平次　こりやア小判だね。
　　ト思はず大きな聲をして、また疵の痛い思ひ入れにて
左五　外の人なら料簡はならないが、お前の挨拶だから、ようござります、不請しませう。
早速得心して忝い。時に爰が相談、馬はお侍ひ樣にやるのだぜえ。
平次　とんだ事を云ひなせえ。あの馬をやつて堪るものか。ありやア二兩二分で買つた馬だ。
左五　これサ、その馬の代も、爰におれが
　　ト殘りの八兩をいぢらせ
爰に持つてるから、跡でどうでもしてやるわサ。
　　ト平次に呑み込ませる。平次思ひ入れあつて
平次　そんならようござります。よろしうお賴み申しまする。

左五　それでサッパリ物事が納まるといふものだ。

ト馬を五平太の側へ曳いて行き

五平　これは大きに世話でござつた。サア、お望みの通り、お前さんへお渡し申します。

左五　どなたもマア、やう〳〵扱ひが濟みました。

皆々　それは大きに御苦勞でござりました。

七郎　時にこれから二階へ行つて、ワッサリと仲直り。

大名　我れ〳〵も係り合ひ。

荒次　男は當つて砕けろ。早く濟んでめでたい。一體、馬士が侍ひに切られるとは、此やうなめでたい事はない。

多七　そりやァなぜでござります。

荒次　馬士どのめでたう侍ひに切られる（誠にめでたうさむらひけろ）といふ事がござります。

皆々　何を云はつしやる。

七郎　これから惣一座で大洒落にしやせう。

左五　あのお侍ひ樣の名代には、わしが參ります……お前樣、早く馬を曳いてお出でなされませ。
五平　ぢやと申して、身共が自身にこの馬を
平次　わしに疵を附けたその代りぢや。わしは構はぬ。獨りで曳いて行かつしやい。
五平　アヽ、仕方がない。上下なりで小荷駄馬、これも浮世の廻り合せ。
　ト馬の口を取り、花道へかゝる。
皆々　我れ〱は。これより奧へ。
七郎　疵人相手に仲直り。
平次　馴染みの色の顏でも見ようか。
五平　その樂しみに引かへて、槍一本の主たる身が、今は昔の刀さし、鎌倉諸侯の列座の中、引くに引かれぬ。
皆々　なんと。
五平　大井川がなアえ。
　ト馬士唄を唄ひながら、馬を曳いて向うへ入る。舞臺の人數殘らず暖簾口へ入る。引違へて奧より權兵衞出る。下の酒屋の內より、はれ吉出る。權兵衞と顏見合せ

はね　權さん、ちよいと來ておくれよ〱。

權兵　これサ〱、其やうに引ツ張つて、何の話しだ。

はね　サア、お前に先刻ちよつと話した借金の事だわね。

權兵　どういふ趣向にするつもりだ。

はね　サア、その事をあの左五兵衛さんに……斯ういふ筋の狂言サ。

ト囁く。

權兵　そいつは奇妙々々〱。然らば萬事ぬかるな。

はね　それサ、どうぞ惚れたといふ證據を見せて

權兵　あの大家めを浮れさせ、おぬしが身拔けをさせるやう。

兩人　何ぞ證據はねえかしらん。

ト思ひ入れ。この時暖簾口より花咲、飯もり女郎の形にて出かゝり、捨てゝありし血の附いたる起證文を拾ひ、よく〱見て

花咲　モシ、お二人さん、その魂膽があるね〱。

ト前へ出る。兩人恟りして

はね　ヤア、お前は花咲さん
權兵　そんなら今の話しを
花咲　アイ、殘らず聞いたよ。
はね　南無三、身の上の大事とこそはなりにけり、
ト聲色のやうに云ふ。
花咲　何を云はんす。併し、わたしとても朋輩同士、ちつとも氣遣ひ
はね　中橋の、槇木屋藥と利き目のよい。して、お前の魂膽は。
花咲　サア、お前とも仲のよいわたし。左五兵衛さんを、この書き物ではどうぢやえ。
ト書き物を出す。權兵衛見て
權兵　そりやア先刻皿を拭うた反古ではないか。して、その趣向は。
花咲　この書き物を左五兵衛へ、この子の起證と僞り、役に立てゝはどうぢやえ。
權兵　イカサマ、無筆のおれには讀めねども、見える人が讀んだら
花咲　男女に限らぬ起證の文言。
權兵　そんなら、この書き物を起證と云つて、あの家主に見せ、私しは兄でござると云ふから、その時

てめえ巧くやるかよ。

はね　よしサ、百も承知。芝居の女形氣どりで、わたしやお前に斯うぢやわいなと、あの左五さんをのろくさせ。

權兵　借りを濟ませば身拔けして

花咲　一日二日家主の、女房になつたその上に

はね　思ひ入れふざけ追ひ出され、それからお前の女房だ。

花咲　この子もお前ゆゑには苦勞する。お羨ましいね。

はね　今時の男にやア、氣前を見せねば承知しないよ。

花咲　わッちらもしがねえ中で、客人と親には、時々當て身をくふのサ。

はね　當て身と云へば、わッちが親仁は、變る事はねえかえ。

權兵　隨分達者だが、何か工面が惡いさうサ。何ぞ貸してやるがよい。

はね　久しいものよ。わッちもこの頃はめんくも惡いが、この簪は一分一本通用。そんならこれを貸してやつておくれ。

ト出す。權兵衞取つて

權兵　これでも親仁も喜ぶであらう。併し、落さぬやうに、何ぞへ巻いて

ト何心なく落ちてありし最前の起證の名宛の方に、件の簪を包み、懐中する。

はね　そんなら權さん、今の話しが首尾よく行くまで

花咲　わたしが部屋で

權兵　何かの譯を

はね　寢てしつぽりと

花咲　御遠慮なしに

はね　たんとしやせう。

權兵　それではどうか

はね　なにサ、話しを

ト寄り添ひ、花咲と顔見合せ

堪忍おしよ。

ト花咲あちら向く。

權兵　通り者め。

ト花咲へ思ひ入れあつて、はれ吉を抱く。

ト唄になり、三人よろしくあつて、この道具廻る。

花咲　呆れるよ。

本舞臺、正面安紙にて貼りたる襖、下の方階子の上がり口、木にて拵へたる燭臺を灯し、酒肴を取散らし、爰に大名四人、以前の形にて大あぐらをかき、東林は平次の頭へ膏薬を貼りゐる。七郎助は左五兵衛その外へ、仲人の思ひ入れにて、捨ぜりふ云つてゐる。すべて小塚ッ原四六屋體二階のかかり。『わたしや何でも』の唄、寺鐘にて道具とまる。

ト皆々よろしく、七郎助、八寸の上に杯を二つ戴せ持ちながら出で

七郎　さて〳〵、どなたも御不請でござりやせうが、疵人も早速承知してくれたゆゑ、ちよつと御挨拶を申しやす。この上ながら、お心安うして下さりやし。

左五　私しも不慮の爭ひにて、既にお代官沙汰にもなりますところを、お取扱ひにて事故なく相濟み、有り難うござります。

東林　イヤモウ、兎角世間に事なかれ。愚老も好い所へ參り合せ、療治を致しましたが、この分では、

病人もよろしうござらう。

平次　あんまりよくもねえのサ。初春早々頭をぶち毀されて、毎年曾我の役割りに、梶原の名が廢ります。

荒次　大名と違つて、百姓の梶原ゆゑ、此やうな間違ひは有うちだ。

黑彌　併し喧嘩に花が咲くとは、延喜もよし

有景　いはゞめでたい初春だ。

東林　祝つて一つ〆めてくれ。

皆々　よい〳〵〳〵。

ト手を打つ。

左五　時に皆さんにお世話になり、此まゝでも濟みますまい。

平次　先刻仕舞はせて置いた、ふんばりどもはどうした。

七郎　若イ衆、子供を早く、出さつし〳〵。

多七　ハイ〳〵、畏りました……サア、どなたもお出でなされませ。

ト合ひ方になり、奥より多七、見世莨盆を四つ持ち出で、跡より、とやしげ、花浦、此山、花咲、初

會女郎、ツンとしたる思ひ入れにて出で來り、よろしく居並ぶ。多七、莨盆を並べ、杯と銚子を持ち、平次の前へ置く。平次取つてとやしげへ献す。荒次郎は花浦、黒彌吾は此山、成景は花咲へ献す。その度々、多七杯を持ち廻る。女形四人、杯をカツチリ云はせ、客の方をちよつと見てツンとする事など各々心にあるべし。皆々よろしくあつて

七郎　サア〳〵、これから大騒ぎだ。早く藝者を呼びにやれ。

荒次　この男は藝者が好きと見えるな。

此山　そりやアその筈サ。あの七郎助さんは

花浦　十六夜お京さんといふ藝者衆と

花咲　何やら譯があると、きつい評判。

平次　七さん、おうら山吹茶漬飯。

ト「わたしや何でも」の唄になり、奥よりはね吉、お京、めい〳〵三味線の長箱を持ち出で來り

はね　わたしが參る座敷は、右か、左か、奥座敷でござりやす。ソコ〳〵テン〳〵。

ト口三味線にてよき所へ坐り

二人　これはどなたも、よう入らつしやりました。

はね　さて私ははね吉と申しまして、ずんと不調法者、御贔屓のほど偏へにお願ひ申しますと、役者が舞臺に口上の通り、隅から隅までといふ洒落は、どうでござりませう。
皆々　イヨ、口上有り難い。
荒次　成る程、はね吉とは、よく附けたわえ。
左五　はね公、いつもながら御盛んだね。
はね　オヤ、さかんとは、鏝で塗る人ぢやアねえかよ。
東林　此奴、惡く洒落るな。
七郎　お京さん、お前一つ獻しては
お京　左樣ならちよつとお手許を
花咲　オヤ〳〵、ぬし達はお睦まじいね。
とや　そりやその筈、骨がなくば一つになるべいと
女皆　イヨ〳〵、七さまの色男さま〳〵。
七郎　これサ、そんなに煽てねえものだ。
左五　ぬし達はお樂しみだね。それに引替へ、この左五兵衛の半老、一人ころり寢とは、南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛。
はね　オヤ〳〵、左五さん、何かふさぎの蟲や赤蛙だね。
左五　おれも女房が死んで、今日は灰寄せの歸りがけよ。
はね　さうかえ　そりやア嬉しの森や花川戸だね。
左五　ひどい所で洒落るな。なぜおれの女房が死ねば、てめえは嬉しい。
はね　おかみさんが無けりやア、わつちやアお前の所へ行くからよ。
左五　よく噓をつく。おぬしにやア綱五郎といふ、色男があるではないか。
はね　その綱五郎さんは、疾からよしの木さいかち猿すべりよ。
花咲　これは地口で目を突きさうな。はね吉さん、ちつと眞面目に〳〵。
はね　オツト承知々々。憚りながらお前さんへ差上げませう。
ト東林へ杯を出す。
東林　これはちよつとお手許を
ねど　どうやら主は、葺屋町の芝居にゐる、門藏に似ておいでだね。
左五　其やうな事云ふからは、てめえは芝居が好きと見えるな。

東林　貴公は誰れが贔屓だ。
はね　わつちやア濱村屋が大贔屓サ。去年石段のとき、濱村屋と門之助、脇差を持つてカタ〳〵と、斯うやつた所はようござりました。
　　　トよろしく振りする。
皆々　濱村屋、瀧野屋。
七郎　よく覺えて來たな。そんなら色と度々芝居へ行つたな。
はね　贔屓の役者が居れば、度々芝居へ參ります。顏見世も葺屋町へ行つて
左五　ぐつと手を廣げたか。
はね　芝居へ行きやア錢金を湯水のやうに
左五　いくらほど遣ひやした。
はね　二朱と六百、なんと氣前者でござえませうが。
皆々　おきやアがれ。
東林　時に先生たち、三筋の手は、どうだな〳〵。
はね　心得丹波の大江山サ。

お京　わたしが彈くから、お前はいつか芝居で覺えた事を、一つおやりな。
はね　そんなら一つ所作事をお目にかけやせうかね。
皆々　そいつは奇妙だ。所望だ〳〵。
トはれ吉お京、何にてもちよつとあつて納まる。
皆々　やんや〳〵。
トこの時奥座敷にて
綱五　否だ〳〵。料簡しねえぞ。
ト云ひながら、骨の入りたる壺を持ち、雲哲を引立て、跡に多七、これを止めながら出で來り
雲多　御料簡なされませう。
綱五　料簡しねえぞ。この坊主めが。どうするか見やァがれ。
雲哲　堪忍さつしやい〳〵。
花咲　綱さん、おとなしくもねえ。坊主を捕まへて、どういふ間違ひだ。
綱五　マア、聞いて下さい。この坊主が廻しをくつて、むかッ腹を立つて、投打ちに事をかいて、初春早々から骨壺をおれに打ちつけられちやァ、延喜が悪い。料簡しないぞ。

雲哲　おきやァがれ。おれも小塚の初買ひに、廻しをくつちやァ延喜が惡い。ふんばりを、出しやァがれ〳〵。

多七　モシ〳〵、とやしげさん、お前さんも、どうしたものでござります。お初會が濟んだらお客人の方へ、お廻りなさるがようござります。

とやサア、そりやァ尤もだが、坊さんも日暮れ前から來て、隨分度數を取つたぢやァねえか。

平次　イヤア、そんならてめえは廻しか。この瘡ッかきめ。よく噓をつくぜ。あの坊主めを廻しに取つた、こゝな廻し坊主め。

東林　ハヽア、廻し坊主とは、賣僧坊主といふ地口だな。奇妙々々。

綱五　洒落どころぢやァねえぜ。この坊主め。おれに骨を打ッつけやァがつた。

ト件の骨壺を雲哲に打ちつける。左五兵衞見て

左五　コレ〳〵、その骨壺は、おれが女房の骨だ。なぜそんなに、ぞんざいにするのだ。その上見ればそこらあたりの藝者にくらひ込み、毎日々々小塚通ひ、腹が立つぞ〳〵。コレ綱五郎、おぬしもちつと内に居るがよい。

綱五　なにサ、店賃さへ拂つてゐれば、大家にあやまる譯はねえのサ。

左五　イヤ〳〵、そればかりぢやない、第一大家を安くする。なぜおれが女房の骨を投げた。
はね　骨を投げたも今道心、とはどうだえ。
左五　洒落どころぢやアない。また和尚もその通り、灰寄せの歸りに女郎を買ふとは、不埒千萬だ。
雲哲　やかましいわえ。坊主が女郎を買はうが、大家の世話にならうが、生きてゐる内ばかりは、大家だといつて長屋で力むが、死ねば旦那寺の厄介になるワ。馬鹿な大家だ。
左五　ナニこの坊主め。家主に向つて、馬鹿とは何事だ。
雲哲　馬鹿と云つたらどうする。
左五　ナニこの、ヨイ〳〵め。

ト立ちかゝる。多七中へ入り

多七　マア〳〵、御料簡なされませ。モシ、わつさりと、酒にしてはどうでござります。
雲哲　イカサマ、坊主は當つて碎けろと云へば、大家さんも綱五郎どのも、料簡さつしやい。時に大家さん、一つ上げませう。

ト酒を飲み、大平の中を見て

この大平は精進だな。なぜ鯛の潮でも出さないか。小塚にやア鯛はねえか。

綱五　コレ〳〵、若い衆、佛の頼みだ。早く云ひつけてやらつしやい。
多七　ハイ〳〵、只今申しつけまする。マア、一つお上がりなされませ。
　　　ト また酒を飲ませる。此うち東林、件の壺より骨を出し、大平の中へ入れて
東林　サア〳〵、和尚さん、鯛の潮が來ました。
雲哲　そいつは奇妙〳〵。
七郎　成る程、この和尚も洒落者だわえ。洒落者といへば、爰らあたりの藝者めは、おれを先刻から待たせておいて、どこへやら穴ツ入り。大方藝者の方から、客をころばしたがる助兵衛藝者か。
お京　モシ、七さん、おつな事を云ひなさるが、助兵衛とはわたしが事かえ。
七郎　マアそんなものサ。
皆々　ソリヤ痴話喧嘩の、始まり〳〵。
綱五　イヤモウ、この藝者も襟について、てんてれつくのおれを突出し、そこらあたりの禿頭といちやつき、始終は大家の女房になる心か。腹が立つわえ〳〵。
はね　オヤ綱さん、をかしな事をお云ひだが、わつちも藝者の身の上、この左五さんが深切にしてくれるゆゑ。

左五　ちつと話し合つた事もあるが、おぬしは岡焼き餅ぢやァ、云ひ分があるのか。
綱五　云ひ分がなくつてサ。この藝者にいちやつく奴があれば、大家でも何でも、一番云はにやァならねえ。
左五　この女に家主が惚れても、店子の世話になるか。べら坊面め。
綱六　べら坊とは誰れが事だ。
左五　うぬが事よ。
綱五　ナニこの禿頭が、
左五　イヤこの野郎が。
ト兩人立ちかゝる。この時薄ドロ、寢鳥のやうな通り神樂になり、雲哲スックと立ちあがり、女の振りになり、左五兵衞を捕へ
雲哲　申し〳〵こちの人、わたしといふ女房がありながら、なんでお前は、あのはね吉さんに惚れさんした。エヽ、こなたはなう〳〵。
ト女の思ひ入れ。
東林　イヤア、この坊樣は、女のやうになつたぞよ。

左五　イヤア、ありやァわしが女房の骨、それをあの坊樣が食つたゆゑ、死んだ女房が乘り移つたか。

東林　ハヽア聞えた。あの壺の中の骨を、潮にして食はせたゆゑ。

皆々　イヤア。

左五　コレ〳〵、おぬしは死んだ女房の幽靈か。

皆々　イヤア。

雲哲　アイ、あたしやおかみさんの幽靈。聞えぬぞや左五兵衞どの、わたしが死んで間もないに、あのはね吉さんに惚れるとは、エヽ、こなさんはなア。

トよろしく思ひ入れ。

左五　アヽ、コレ〳〵、それはついした出來心、堪忍してくれ。南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト珠數にて打つ。雲哲グンニヤリして倒れる。

綱五　あれ見なせえ。幽靈でさへ燒き餅を……おれが前であの大家と譯のあるのを、どうして見てゐられるものか。

はね　たとへどのやうな事云はれても、襟許に附くが當世ぢやわいなア。

ト左五兵衞に寄りそふ。

綱五　うぬ、そのいけ口を

　　トかゝらうとするを花咲とめて

花咲　モシ、綱五郎さん、腹の立つのは尤もぢやが、これには段々譯のある事。一旦左五兵衛さんに身を任せて、其のち金を

綱左　ヤア。

花咲　サア、金ゆゑ身儘にならぬが勤め。何かの話しは。

　　ト囁く。

綱五　そんなら金を

花咲　モシ、何であらうと、細工は流々。

七郎　お前方の話し合ひは、解つたか知らねえが、此方は腹が立つわいく。

お京　お前が腹が立つなら、わたしも腹が立つわいなア。

　　ト有合ふ物を打ちつける。

七郎　こいつ投打ちをするな。うぬ、ふんばりめ。

　　ト立ちかゝるを皆々とめる。

皆々　ハテマア、靜かにさつしやい〳〵。
七京　イヤ、料簡がならぬ〳〵。
　　ト皆々ワヤ〳〵云ふ。七郎助とお京をなだめながら、この人數奥へ入る。はれ吉、左五兵衞思ひ入れあつて
はね　サア〳〵、邪魔は拂つた。これからは左五兵衞さん、お前とわたしがしつぽりと、ちん〳〵鴨の鍋燒きで、一つ飲み直しは如何ぢやえ。
　　ト左五兵衞を引寄せる。
左五　どうもおれは合點がゆかぬ。俄におれに靡く樣子。こいつは夢ではないかしらん。
はね　サア、わつちが俄に此やうな事云へば、浮氣な仇者と思ひなさんせうが、今まではおかみさんがあつたゆゑ、死になさつたら、どうぞわつちをお前の女房に。
左五　オツト、その手は桑名の、燒き蛤〳〵。おぬしの色仕掛けは、大の嘘々。
はね　エヽ、なんでわたしが
左五　ハテ知れた事、內證に借金のあるおぬしが身の上。その金が出來ぬゆゑ色を仕掛け、おれに金を出させるつもりか。

はね　何だな、疑ひ深い。それにはキッとした證據があるわいな。

左五　して、その證據は

ト權兵衞出かゝりゐて

權兵　アイ、その證據は、私しが持つて居ります。

ト左五兵衞見て

左五　こなたは兄の粟島權兵衞。して、その證據は

權兵　外でもござりませぬ。これを見て下さりませ。

ト最前の起證を出す。

左五　ヤ、こりや生血の附いた起證ぢやな。

はね　サ、それが嘘をつかぬといふ、わたしの證據。

左五　成る程、起證に違ひないが、肝腎の名宛もなく、半分引裂けてあるは、どうした事だ。

ト兩人悄りして

はね　サア、その破れてあるは、どうした事であつたなア兄さん。

權兵　サア、その破れてあるは何やらで……オヽ、それ〳〵、妹はまだ勤めの身の上。此やうな事をし

て、親方に見られてはならぬと、わしが意見をしましたら、名宛さへ無くば大事あるまいと、刃物で切らぬが色文の魂膽。それゆゑ引裂いてござります。

はね　わたしが血汐はお前へ心中。その起證では、アイタヽヽヽ。

卜急に指の痛むこなし。

權兵　僞りならぬ妹の心底、お疑ひは晴れましたか。

左五　當人といひ兄御まで、其やうに云はるゝ事なれば、疑ひは晴れました。

はね　それでわたしも、どうやら心が

權兵　又もや御意の變らぬうち、お疑ひの晴れた上は、親方樣へ借金を濟ませ、妹が身拔けして下さりませ。その時は私しも、共々お取持ちを致し、お前の女房に上げませう。なんと得心しては下さるまいか。

左五　解りました。當人も承知、兄貴も承知とあるからは、町内組合のところは何ぞと云うて、女房にもらひませう。して、借金は、いくら程ござる。

權兵　ハイ、十五兩ほどでござります。當金半分償へば、妹はわしが連れて歸り、跡金をお前からお貰ひ申せば、直ぐにその晩が婚禮サ。

左五　解りました。當人も承知、兄貴も承知なら、その半金を貸してやりませう。

はね　そんならお前がその金を

左五　解りました。當人も承知、兄貴も承知なら、女はこなたに預けますぞや。

權兵　イヤモウ、金さへ出して下さる上は、外々よりこの女に、指でも附けさせる事ではござりませぬ。

トこの時綱五郎、後に出かゝりゐて

綱五　イヤ、その女には足があるよ。

ト合ひ方になり、前へ出る。三人見て

三人　ヤア。お前は。

左五　綱五郎、おぬしがこの女と、譯のある事は知つてはゐれど、立て金すればおれが女房。それを兎や角云ふからは、そんならおぬしは

綱五　なにサ、心の腐つたこの女、何の念が殘りませう。併しながら、女に突き出されたと云はれては世間へ外聞が惡い。この上は左五兵衞さま、わしが顔の立つやうにしてくんなせえ。

左五　サア、その仕樣と云つたところが

ト迷惑なる思ひ入れ。權兵衞思ひ入れあつて

權兵　モシ〳〵、左五兵衞さま、お氣遣ひなされまするな。この兄が附いてゐますから、たとへこの女に足があればとて、私しが自由にはさせませぬ。まして風來者の綱五郎、憚りながら、この兄がなりませぬ。

綱五　さう云へば此方も自棄無茶。この女はおれが貰つた。はね吉のみ込み、サア、來やァがれ。

ト手を取る。三人顏見合はせ、目くばせする。その手を拂ひ

はね　なんだな、綱五郎さん、イケ聞いた風だ。わつちやァお前が否になつたから、寢返りだよ。必ず物を云つておくれでねえよ。今までとは違つて、兄さんの意見について、襟許の世の中となら、今日からわつちやァ左五兵衞さんのおかみさんだよ。主のある女に、構つてもらひますまいよ。なんだな、一緒に來いの何のと、いかに正月だと云つて、呆れが禮に來るわな。

綱五　おきやァがれ。さう吐かせば面あてに、うぬを殺して此方も死ぬわい。

ト立ちかゝる。左五兵衞考へて、包み金を綱五郎に投げ

左五　手切れの金、取つて置きやれ。

ト綱五郎金を見て

綱五　ヤア、こいつは小判で八兩。

左五　不足であらうがこの金を
はね　納まつた上は、それがおしやぎり。
左五　目腐れ金を、古風も云はずに
綱五　お時節柄ぢや、取つて置きやせう。
權兵　それはおてちん、合點かく。
綱五　知れた事だ。
はね　やうくわたしも一つは安堵。
左五　安堵次手に親方と
權兵　金の押切り何やかや
綱五　片附けてから、おれもこれから
はね　夜の更けぬうち、こちの人。
ト左五兵衞へ思ひ入れ。
綱五　とはいへ女は
ト思ひ入れ。

權兵　コレ、何も辛抱して
左五　やがてめでたう
はね　それまでわたしの
綱五　兄貴が慥かに
權兵　預かる上は
左五　そんなら必ず
はね　其うち綱さん

ト綱五郎へ思ひ入れ。

權兵　アヽコレ。

ト中を隔てる。

左五　俠に金なし、喧嘩を以て渡世とする。浮世の勇みは、あゝしたものぢや。
三人　エヽ。
左五　馬鹿ではないわい。

ト唄になり、左五兵衞、骨の入りたる壺を持つて、はれ吉に心を殘し、階子の口へ入る。三人殘ると、

奥より花咲出で來り

花咲　モシ、皆さん、先刻拾つた起請の魂膽。細工は流々、仕上げはどうだえ。

綱五　古いやつだが亭主の權兵衛、兄貴の仕打はきついものだ。

はね　わたしが間夫は綱五郎さんと、見せてたうとう手切れの金。

權兵　お主を貢ぐ綱五郎、朋輩同士が云ひ合せ。

花咲　まんまと首尾よく、この子の年季を

綱五　拔かせるやうに此方の惡法。

はね　一杯くつた男の自惚れ。

權兵　鼻毛よまれた色の世の中。

花咲　音に聞えた

綱五　はね吉よりも

はね　左五兵衞さんは

權兵　大きなはねもの。

四人　ハヽヽヽヽ。

花咲　アコレ。

ト思ひ入れ。唄になり、皆々よろしく奥へ入る。「元より薬」と云ふ唄になり、槌右衛門先に東林、三次。お京をなだめながら出て來り

三人　ハテ、どうともなる事だ。靜かにするがよい〳〵。
お京　イエ〳〵、わたしや腹が立つて〳〵ならぬわいなア。
東林　ハテ、思ふ仲の戀いさかひは間々ある事。また醫療の致しやうもござらう。
三次　左やう〳〵、物には間違ひといふ事もあるもの、靜かにしなさい〳〵。
槌右　コレ〳〵、お京坊、その腹の立つを、横にする法がある。なんと、おれが料簡に附かねえか。
お京　して、その仕様は。
槌右　サア、何にしろ文を一本書いて、七郎助が所へやるがいゝ。
お京　それは心安い事。それで七さんの心が直りますかえ。
三人　直るとも〳〵。
お京　して、その文は、どう書いたらようござんせう。
槌右　待て〳〵。その文言は、東林さん、話した通り、お前よろしく。

東林　承知々々、幸ひ爰に懐中矢立。サア〳〵それにて認め給へ。

ト懐中より矢立を出す。お京鼻紙を出し、

お京　その文言は、よいやうに云うて下さんせえ。

東林　「一筆しめしまゐらせ候、最前は心にもなきこと申し上げ候ふ、御前様心を引き見るため、誠にそれほど思し召し下さるは、我が身に取り御嬉しく存じまゐらせ候、それにつき、奥の小座敷に御待ち候ふまゝ、首尾を見合し、御出でのほど待入りまゐらせ候、その節目じるしには屏風に私しの帯を掛け置き候ふ。御出での節合圖には内より灯を消し候ふまゝ、くれ〴〵も御出でのほど御待上げまゐらせ候めでたくかしく」。名宛は七郎助さまも野暮だ、御許さまへ、京よりとするがよい。

ト お京、仰せ書のやうに認め、上書の京の字、思はず糸といふ字になる。お京見て

お京　オヤ〳〵、わたしが名の京といふ字、どうやらこれでは糸といふ字に

槌右　大事ない〳〵。少しも早くこの文を、小ぢよくに持たせ、向うへやるが此方の目算。

お京　エ。

三次　この文で、もし七郎助が來たならば

お京　あの小座敷で何かの事を

槌右　山々話して仲直り。
東林　物事丸く納まる祝ひに
槌右　一杯飲み直しはどうだ。
お京　成る程、それがようござんせう。
東林　そんならいづれも。
四人　サア、參りませう。

ト流行り唄になり、四人こなしあつて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、正面二間の屋體、前側あかり障子、東西落間、冬木の植込み。下の方つくばい。いつもの所に枝折り戸。しつぽりした合ひ方にて道具とまる。

トこの合ひ方にて向うより綱五郎。文を見ながら出で來り

綱五　いま小じよくが持つて來たこの文、何だか解らねえが

ト下のつくばいの側に來り、文を開き

「一筆しめしまゐらせ候、最前は心にもなきこと申し上げ候ふ、御前樣の心を引き見るため、誠に

それほど思し召し下さるは、我が身に取り御嬉しく存じまゐらせさふらふ、それにつき奥の小座敷に御待ち候ふまゝ、首尾を見合し、御出でのほど待入りまゐらせさふらふ、その節目じるしには、屏風に私しの帶を掛け置き候ふ、御出での節合圖には内より灯を消し候ふまゝ、くれ〴〵も御出でのほど御待上げまゐらせさふらふ、めでたくかしく。御許さまへ、糸より」……イヤア、この文の様子では、あの小絲が心附き居つたわえ。併し、こいつはおれをちよつくり返すのか、但しほんの事か、こいつはどうやら。

ト障子をソッと明け、内の様子を見て

ヤア、この文にある通り、目じるしは小絲が帶。こいつはまんざらでもないわえ。

ト内より行燈の灯を消す。綱五郎見て

イヤア、註文通り内から灯を。いよ〳〵しめたぞ。

トそろ〳〵這ひあがり、屏風の内へ入る。屏風の内、バタ〳〵と音して

ト屏風を刎ねのける。内に小絲、絹夜具を着たるまゝ、恟りして起上がる。綱五郎逃げやうとするを槌右衛門、綱五郎の帶を捕へ

槌右　泥坊々々。皆來てくれ〳〵。

トこの聲に七郎助、東林、三次、六三、出で來り、皆々捨ぜりふにて、綱五郎を無暗に取つて押へ

六三　泥坊をつかめえた。灯を〳〵。

トこの音にてお京、おつや、奥より行燈を持ち出で來り

つや　大方枕探しでござんせう。

ト小絲慄へてゐる。

六三　何にしろ泥坊の面を見て

ト綱五郎と顔見合せ

ヤア、こなたは兄貴か。

綱五　面目ない〳〵。

小絲　お前は先刻の

皆々　大泥坊め、引摺り出せ〳〵。

トロ々に云ふ。

六三　コレ兄貴、どういふ事でこの體裁。何ぞ譯があらう。その譯を早く云ひなせえ。

綱五　サア、その譯は……どうもおれにも解らねえ。
六三　これサ、そんな詰まらねえ事を云つちやアいけねえ。どうした譯だよ。
七郎　いよ／＼胡亂な綱五郎。
槌右　こりやア六三も同類だな。
六三　コレ兄貴、譯もねえ事に泥坊呼はり、この六三まで同類と、云はれるが口惜しい。差當つて云ひ譯もない事か。默つてゐちやア解らねえ。譯を云ひなせえ／＼。
綱五　エヽコレ、見す／＼拵へ事と思ふゆゑ、譯を話せば却つて恥の上塗り。云はにやアおぬしまでも同類との、退引きならぬこの場の仕儀。譯と云ふなア外でもねえ。この文を見やれ。
ト以前の文を出す。六三、口の内にて讀み
六三　「御許さまへ、糸より」……こりやア爰へ忍んで來いといふ、小嫌らしいこの附け文。
綱五　先刻おぬしが意見、舌の乾かぬ内にこの始末と、積られるも恥かしいが、迷つた上の煩惱は、犬に劣つた綱五郎、思案も絲瓜も眞暗に、忍んで來たらこの體裁。おぬしが手前も面目ねえのサ。
六三　そんなら、この文は小絲どの
小絲　イエ／＼わたしや其やうな

東林　覺えはあるめえ。ナニあるものか。

六三　そんならこの文の出所は。

お京　そりやア慥かわたしが先刻

ト寄るを七郎助支へて

七郎　これサ、泥坊の詮議に、おぬし達が出るものぢやアねえ。

お京　それでもどうやら

トまた寄るを、三次とめて

三次　これサ。それで樣子が荒まし知れた。

槌右　押しの強い綱五郎、小絲に惚れたと云ひ拔けるは

東林　六三が軍師、兄弟で

七郎　枕探しをひろぐのだ。

トきつと云ふ。六三、皆々の顏を見て

六三　アヽ、その口振りで樣子も大概。先刻の顚末、意趣返し。六三を引出し、難儀をかけるうぬ等が目算。

ト以前の文を取り
勿怪の幸ひ。わいらに鼻を明かすのは
ト思ひ入れあつて
小絲さん、ちよつとお目にかゝりませう。
ト變つた合ひ方。
小絲　わたしに何ぞ用かえ。
六三　小絲さん、お前は成る程深切者だ。思ひ思つたこの文、こりやアお前、本當の心か。
小絲　コレ、六三さんとやら、そりやお前何を云はんす。眞實わたしや其やうな
六三　覺えはねえと、隱すのも尤もだが、もう斯うなつちやア隱すより、色でござると云ひ通すが、お前も達引、此方も身抜け。
ト聲をひそめ
無理な事だがこの通り、この顚末になつたから、無理にも惚れにやアならねえ始末。先刻の顚末お前の難儀、その返禮だと諦めて、この場を平に兄弟二人、若い男を立つてはくれめえか。
小絲　六三さん、解りました。自惚れた事ながら、成る程、お二人を立てませう。が、お前も知つての

わたしが身の上、この場ぎりならどうなりと。

六三　そりやァ承知だ。只管お前と。

小絲　よふござんす。

　　　トつと立つて綱五郎の側へ寄り

モシ、綱五郎さん、ふとしたわたしのいたづらから、送りし文がお前の難儀。堪忍して下さんせえ。

　　　ト綱五郎に寄り添ふ。

皆々　イヤア、どうやら風が、變つて來たわえ。

槌右　コレ小絲、あの文はナニわれがのなものか、嘘を吐くかく。

小絲　イヽエ、これはわたしが文。それともお前方の拵へ事でござんすか。

槌右　イヤ、さうではなけれど。

小絲　わたしが文ゆゑ綱五郎さんに、泥坊の惡名は、ござんすまいわいな。

七郎　そんならわりやァ綱五郎に

小絲　アイ、惚れました。

東林　ヤア、そんならどうかこの戀は

三次　おいらが寄つて執持つたやうなものだ。

槌右　これサ、それを現に……コレ小絲、いよ〳〵わりやア

小絲　惚れたに嘘はないわいなア。

ト綱五郎にもたれ思ひ入れ。綱五郎解らぬゆゑ、ウロ〳〵してゐる。

槌右　エヽ、うぬは〳〵。

ト立ちかゝる。六三この中へ入り

六三　オット待つたり。ほんの色ゆゑ忍んで來たを、うぬらが寄つて泥坊呼はり。アレあの通り小絲は色なり、おれは色氣も内證の、拵へ事はうぬらが手盛り。泥坊なりと吐かした返報。一番六三が相手になつて……と角を出すのも矢ッ張り野暮。この場は粹に身分相應、小塚の女郎で、姫はじめでもするがいゝのサ。

お京　それいなア。味に搦んだこの場の仕儀、惚れねばならぬ小絲さん、流石辰巳の心意氣は、違つたものだね。

つや　達引つよいが小絲さんの持ち前、爰に居るほどお前方

お京　恥の上塗り。七さんも一緒に奥へ。

七郎　エヽ、いま〱しい。此奴ら三人。

三次　畢竟おいらは岡焼きもち。

東林　この有樣を見ては氣が惡い。カウ、仕方なし、奥でしつぽり。

槌右　詰まらぬ者はおれ一人、先刻の意趣を返さうと、思つた文の拵へ事が

六三　廻り〱て此方の仕合せ。手を濡らさずに色の執持ち。

槌右　とは云ふものゝ

六三　野暮に痛い目する心か。

槌右　イヤ、それにやア及ばぬ。

お京　そんなら、どなたも

ト槌右衛門、小絲へ立ちかゝろ。おつや、お京これを押へ

兩人　サア、お出でなされませ。

ト唄になり、この人數思ひ入れあつて奥へ入ろ。綱五郎六三小絲殘ろ。合ひ方。

六三　小絲さん、誠にきついもの。有り難い〱。

ト綱五郎思ひ入れあつて小絲を突きのけ

綱五　六三、おぬしは有り難いか知らねえが　おらア有り難くも何ともねえ。綱五郎の一分が廢つた。これからこの女ア叩ッ切つて、おれもくたばる分の事だ。

ト小絲へ立ちかゝるを、六三とめて

六三　コレ兄貴、そりやアお前、何を云ふのだ。それぢやアお前、狂人だぜ。

綱五　オヽ、おらア氣が狂つた。本町の綱五郎は、女にかゝつて氣が狂つたわえ。法に乗せられて、盗人だの、泥坊だのと云はれるのも、みんなこの畜生のお庇。人に苛められて、着物から綿を出し綿毛を下げてゐる、只の色事師だと思やアがるか。もう色も戀も覺め果てた。そこ放せ〳〵。

トわめく。

六三　イヽヤ放されねえ。お前も解らねえもんだ。おれが頼んで小絲さんに、表向きの色になつてもらつたゆゑ、この場の顔は立つてゐるぢやアねえか。

綱五　イヽヤ立たねえ。こりやア何だな、わりやア小絲とくッついて、おれを玉に使つて、小馬鹿廻しにするな。

六三　カウ、いかに兄だといつて、いゝ加減に無理を云はつせえな。解らねえ男だ。

綱五　何が解らねえ。何が無理だ。

六三　無理に違ひねえ。無理だ〳〵。

綱五　無理を云つたらどうする。

ト此うち小絲、綱五郎の顔をヂツと見てゐて、いろ〳〵思ひ入れあつて、この中へ入り

小絲　六三さん。マア〳〵待つて下さんせ。

六三　小絲さん、どきねえ〳〵。なんぼ兄でもあんまり強情。

綱五　うぬ、兄に向つて

ト立ちかゝる。小絲、綱五郎をとめながら抱きつき

小絲　綱五郎さん、お前の腹の立つのは至極尤も。腹が立つなら、わたしをどうなとしなさんせ。お前
にぶたれたら、さぞ嬉しからうねえ。

トぴつたり寄りそふ。これにて綱五郎グンニヤリして

綱五　エヽ。

小絲　六三さん、堪忍して下さんせ。わたしや今まで料簡違ひで

ト云ひさして顔を隠す。六三、綱五郎、顔見合せ

六三　兄貴、こりやァおつな話しになつたぜ。
綱五　持つて生れた癇癪で、一かばちかの愛想づかし。
小絲　その云ひ草から氣前まで、女子を迷はせ、憎いお前。
トふッつり抓る。
綱五　アヽ、いゝ心持ちだ。
ト抓られた所を撫る。
六三　合せ鏡か知らねえが、兄弟喧嘩が味に崩れて
小絲　法に乘るとは、男嫌ひを立て通す、その譯知つた六三さん、浮氣者ぢやと下げすんで下さんすなえ。
六三　そんならお前、本當に
小絲　狐狸のお二人さん、どう辛抱が……察して下さんせ。
ト顏を隱す。
六三　兄貴、何ぞ奢んな。
綱五　夢ぢやァねえか。

ト奥より鐵、勝、徳藏出て

鐵　頭、いゝ加減に歸りやせう。

六三　オヽみんな、振られたな。

勝　小塚の女郎は腹に合はねえ。

六三　おきやァがれ……兄貴。わしやァもう歸ります。跡でしつぼり小絲さん、お前またあんまり可愛がつて、命まで取らねえやうにしてくんねえよ。

綱五　そんならおぬしやァ、直ぐに歸るか。

六三　アイ……サア、みんな來や。

ト三人を連れて花道へ行きかける。

勝　頭、あれを見ちやァ、直ぐに内へは歸れねえ。

六三　うさアねえ。おれも羨ましくなつたわえ。

小絲　カウ、六三さん、お前も先刻ちよつと見た、文の所へ。

六三　ちよいと請けさせやせうか。

ト懷より幕明きの文を出す。

綱五　アヽ、かのか。

小絲　綱さん。

　　ト顏を見る。

綱五　エヽ。

　　ト小絲思ひ入れあつて、綱五郎としつぽりこなし。

小絲　きつとだよ。

　　ト六三はこの文を取つて廣げるが木の頭。

六三　イョ成田屋に濱村屋。

　　ト文を頰かむりにする。キザミにて、よろしく拍子幕の外、六三先に三人、流行り唄にて向うへ入る。通り神樂にてツナギ、引返す。

幕

第一番目　四建目

小地獄閻王寺の場
箱根賽の河原の場

役名――曾我の禪司坊。藝者、十六夜お京。三浦の奥女中、岬。同小姓、雪の戸。八幡の三郎行氏實は赤澤十内。劍澤彈正左衞門。伊豆次郎祐兼。閻王寺閉坊和尚。鬼王新左衞門。所化、雲哲。同、雲才。雲助、畑右衞門。同、權九。庄屋、李太夫。若い者、多七。大藤内成景實は近江小藤太成家。曾我の十郎祐成。曾我の箱王丸。

本舞臺、三間の間、一面の高足本緣附きの本堂。正面に誂への大閻魔、經机、賽錢箱。左右に幡、天蓋、その外いろ／＼佛道具を飾りつけ、上手に接待茶と書きし幟を建て、この前に鑵子を七輪にかけ、茶碗など取ひろげ、前に多七、前幕の若い者にて、半合羽、旅形にて、腰をかけてゐる、牛八、肴屋にて、飯臺にゆで蛸を入れしを下ろし、休息してゐる。雲助二人、小さき長持を下ろし、茶を飲んでゐる。本堂には閉坊和尚、色衣、後向きに双盤を貼つてゐる。前幕の雲哲、地獄極樂の掛け物を、面竹にてよき所に掛けてゐる。舞臺には李太夫、木綿羽織、庄屋の形にて、上座に飯を食つてゐる。畑

右衛門、權九、雲助の拵へにて、日光膳に向ひ、飯を食つてゐる。雲才、腰衣の所化にて、給仕をしてゐる。すべて箱根山地獄閻魔寺、本堂の模樣。正月十六日齋日、施餓鬼の鳴り物にて賑やかに幕明く。

多七　モシ〳〵、このお寺には、御法事でもござりまするか。お賑やかな事でござりますね。

ト杢太夫と雲助は無性に飯を食つてゐる。多七、この體を見て

半八　なにサ、今日はお齋日の御供養サ。それでわしもこの通り、佛餉を持つて來ました。

ト飯臺より佛餉袋を出して見せる。

多七　エヽ、左樣かえ。成る程、田舍は正直なものだ。わつちやァ江戸の者だが、藏前の閻魔堂などは齋日だといつて、こんなに人に飯を振舞つた事を聞いた事がねえ。

ト此うち杢太夫等、飯を食つてゐる。

雲才　サア〳〵、お辭儀なしにお替へなされまし。

杢太　イヤモウ、よい折に參り合して、存じがけない御馳走になりました。

畑右　お辭儀なしに食べたゆゑ、のる事も反る事も出來ませぬ。

權九　てめえはその筈だ。明日の分まで食ひ込んだものだ。

皆々　ハヽヽヽヽ。

　　トこの時閉坊、双盤をやめ、雲哲、掛け物を掛けしまひ、兩人舞臺へ下りて來て

閉坊　これは〳〵いづれもには、ようこそお詣りなされました。

杢太　イヤ、大きに御馳走になりました。

閉坊　なんと、お氣に入つた物は、替へて參らつしやれ。

雲哲　これサ雲才坊、精出して給仕しないか。

雲才　なにを、さう云はねえでも、素敵に食つたものを、この上替へられては、臺所の仕込みが亂騒きだ。

閉坊　何を白痴め。

　　トこの時半八、閉坊を見て

半八　アヽ、和尚樣は、この間まで箱根のお別當で見かけたが、いつ此方へお引越しなされました。

雲哲　この閻王寺は、當山箱根權現の末寺にて、卽ち當院は近頃まで、別當金剛院に役僧を勤めてござつたを

閉坊　只今では隱居いたして、この寺を預かりしゆゑ、入院ひろめや何やかや取ませて、いづれもをお

招ぎ申したのでござる。

半八　モシ庄屋様、お前、長持を擔がせて、どこへござりましたのだ。

杢太　私しが今日參りましたは、先日權現様の御神領へ、お觸れがござりました刀の儀につき、私しの支配下の村方へは、殘らず觸れましたれば、百姓の事ゆゑ、刀脇差を所持いたしてゐる者は、早速相知れまして、皆々取集めて、卽ちあの通り長持へ入れ、持ち參りましたが、當院へお取寄せなさるは、どういふ譯でござりますな。

閉坊　愚僧もその譯は、しかと存ぜぬが、この度大江廣元さまより、この近郷にあるところの、百姓町人の腰の物を集め、檢分の上にて、鍛えのよき刃物を、お上へお買ひあげになるとの事でござる。

畑右　それもお買ひあげならいゝが、百姓町人の要らぬ道具と、取上げられた日にやア、これが取上げ婆アで詰まらぬものだ。

權九　そりやア氣遣ひない。梶原さまのお觸れなら知らねえ事、廣元さまの仰しやる事、なに間違ひがあるものか。

多七　モシ〳〵、先刻から聞いて居りましたが、何か脇差が大金になると、申す事でござりまする。私しも一本差して居りますが、これは金にはなりますまいかな。

ト自分の脇差を出して見せる。杢太夫取つて

杢太　イヤ、これは取り所のないガタ〳〵丸、斯樣な品は、役に立ちさうにもござらぬ。

ト多七へ戻す。

多七　でも、町人百姓の脇差を、お買ひあげなさると申す事ゆゑ。

閉坊　イヤ、それは斯うでござる。町人百姓どもの古き家には、先祖より持ち傳へ、思ひがけない銘作があるものゆゑ、それで殘らずお取寄せなされ、お吟味の上、不用の品はお戻しなさるとの事。

多七　アヽ、さうかえ。わしやア又、どんな物でも金になるかと思ひました。

雲哲　ハテ、慾張つた男だ。そんな脇差が御用なら、柳原か日蔭町へお觸れが出るワ。ハヽヽヽヽ。

杢太　刀のお觸れと申せば、箱根權現樣へ納めあるところの友切丸の一腰、紛失いたしたと申す事でござるが、左樣かな。

閉坊　左樣でござる。たゞ氣の毒なは稚兒の箱王丸、紛失のその夜に下山いたしたれば、その盜賊は箱王丸と疑ひかゝり、養父祐信どのゝ難儀も、弟の事にも構ひなく、兄の祐成は、大磯通ひとの噂でござる。

多七　成る程、その祐成さまは、おいらが本店、大磯の舞鶴屋に、居續けでござります。

雲才　ムウ、さういふ貴様は、どこだ。
多七　わしやア江戸の小塚ツ原といふ、奥州海道の宿場で、舞鶴屋といふ女郎屋の若い者サ。
雲哲　さう云へば、どうか見知り越しのやうにもあり
多七　成る程、お前はちよく〱、見世へござつたやうなお方。
雲哲　その筈だ。愚僧はこの頃まで、淺草邊に住居して、居ながら拜む觀音ではなくて、尻くらひ觀音で、三日あとから爰へ來たのに、貴樣は又、何を爰らへまごつくのだ。
多七　モシ、お聞きなさい。わしらが見世の十六夜お京といふ女郎。蟲が附いたゆゑ住替へに、大磯の本店へ出したところが、何がその住替へ先から、ガラリ駈落ち。その蟲も、たしかこの近所と足が附いて、それでその女を尋ねに出たのサ。
雲哲　そりやア大變だ。成る程、その女も知つてゐる。まんざら見ず知らずのこなたでもねえから、その女がこの近所へ來たなら、知らせてやりませう。
多七　それは有り難う。何分お願ひ申します。
李太　ハテ、いま時の御出家は、嫁入りの世話ばかりでない、おつな口入れもなされますな。ハヽヽ
ト笑ふ。この時半八前へ出て

半八　へイ、御免なされませ。先程から、何かいろ〳〵お話しがござりましたゆゑ、扣へて居りましたが、私しは山中の肴屋でござります。佛餉袋を入れて參りました。よろしく御囘向をお賴み申しまする。

ト出す。閉坊取つて

閉坊　ヤレ〳〵、お奇特な儀でござりまする。早速囘向いたしませう。

雲才　ナニその袋を貰つたとて、奇特な事があるものか。佛餉袋より、その蛸を一ぱい奉納さつしやれば、廣大無邊の功德になります。

半八　そりやァなぜでござります。

雲才　一生に一度、其やうな蛸を、丸で一ぱい食つたなら、この世に思ひ殘す事なく、極樂往生疑ひなし。

閉坊　ヤイ〳〵、こゝな馬鹿坊主め。とんだ事を吐かし居る。

雲才　それでも、いつもお前ばかり食つて、おいらには見せてばかり置いて

閉坊　まだ吐かすか。

ト叱る。雲才しよげる。

多七　成る程、このお所化は、餘ッほど蛸が好きだと見える。行く〳〵は、好い蛸坊主にならつしやるだらう。

半八　それほど好きな物なれば、お齋日のお功德に

雲才　おれにくれるか。

半八　錢せえ出しやアいつでも遣るワ。只食はせては、此方の腮が干上がるから、マアこれはよしに新場蛸々々。

ト飯臺へ蓋をして擔ぎ上げ

ト呼びながら向うへ入る。

雲才　アヽ、これを思ふにつけても、たゞ恨めしいは親々達。

皆々　そりやなぜに。

雲才　なんでこの身を、出家にした事やら。さりながら、同じ佛門に入りながら、目黑の藥師樣は羨ましい。

閑坊　大だわけめ。

李太　さて御馳走で腰は張る。この上の樂しみは

畑右　下素の寢樂としようか。

權九　まだ日暮れには間があるよ。

畑右　ハテ、食後の一睡といふわな。

多七　わしもこれから、木賀の方を探して見ようか。

李太　左樣なら和尙樣、この長持は

雲哲　庫裡へわしが案內しませう。

閉坊　これはどなたも

皆々　お住持樣。

閉坊　お雜作でござりました。

ト双盤、てんつゝにて、多七は下座へ、李太夫は人足に長持を擔がせ、畑右衞門權九手傳ひ、雲哲指圖して、皆々下手へ入る。閉坊、雲才殘り、閉坊は又々双盤を貼つてゐる。雲才はそこらを片付けてゐる。矢張り右の鳴り物にて、向うより禪司坊、切繼ぎの小袖着流し、一本差し、一文字の編笠を持ち出てくる。跡より鬼王新左衞門、庵に木瓜の紋附いたる木綿の綿入れ羽織、朱鞘の大小にて、茜木綿の頭巾をかむり、疱瘡を煩ひし思ひ入れにて、さんだらぼうしに達磨木菟と、件のゆで蛸を道にて

　　買ひしを一緒に包み、疱瘡神送りに來りし體にて出で來り

鬼王　モシ〳〵、そこへお出でなさるは、若旦那禪司坊さまではござりませぬか。

禪司　オヽ、鬼王か。よい所で逢つた。

鬼王　あなたは、どこへお出でなされました。

禪司　わしは養父祐信さま、山中宿の三浦家の御陣屋にお預けゆゑ、そのお見舞に行たのぢやが、鬼王其方の形は、どうしたのぢやぞいの。

鬼王　成る程、御存じの通り、よい〳〵の病ひの上に、疱瘡に取附かれまして、既に彼方のものと思ひましたが、仕合せと筋が好くて、今日は酒湯でござりますれば、權現樣へ御禮參りに行きました歸り道、そこで肴屋が持つて居つたゆで蛸、あまり旨さうにござれば、買うて參りました。

　　トさんだらぼうしの中の蛸を見せる。

禪司　其方、其やうな物を食べて、毒ではないかや。

鬼王　なにサ、毒なら猶ようござります。大當りに又當ります。ハヽヽヽ。

　　トよろしく兩人本舞臺まで來る。閉坊見て

閉坊　これは〳〵禪司坊さま、ようこそ御參詣なされました。

禪司　ハイ、兄々達のお身の上、息才延命、又は養父祐信さまの、今の御難儀晴れますやうに、現當利益の立願に參詣いたしました。

閉坊　兄箱王どのには、愚僧金剛院に罷りあるうち、別して懇意に致し居つたが、いかなる事にや、箱王下山のその夜より、友切丸紛失ゆゑ、その疑ひが祐信どのゝ御身にかゝり、常々名代の曾我のお屋敷、さぞお取込みと推察いたして居ります。

禪司　御推量の通り、相談いたすべき祐成さまは大磯通ひ、内へとてはお歸りなく、頼みに思ふ家臣の鬼王は、御覽の通りの病ひ者。

鬼王　その旨い物とはこの事。

ト　また蛸を出し

コレ、この旨い物は蛸の入道、これは拙者が大好物。そこで蛸の値段を廉く買つたれば、爰は箱根、これは蛸根でござります。

閉坊　ハヽヽヽ、成る程貴樣は、頓智頓作が、よい〳〵でござる。併し貴樣の年で、殊に見ますれば前齒が入れ齒でござるが、それで蛸が噛まれますかな。

鬼王　成る程、前齒は一本入れ齒でござるが、跡は殘らず達者で、誠に鬼のやうでござるゆゑ、そこで

鬼王でござる。

閉坊　イヤハヤ、取り所もない……感心いたした仁でござる。

トこの話しのうち雲才、掛け物の竹にて後より蛸をソツと取つて、これを一本もぎり、食ひにかゝる　鬼王、さんだらぼうしの蛸見えぬゆゑ、惘りしてあわて、あちこち探し、思ひ入れあつて閉坊に向ひ

鬼王　お住持樣、出して下さい。

閉坊　これは〳〵、俗に申す藪から棒に、愚僧に出せとは。

鬼王　ハテ、落ちつき顏はよさつせえ。サ、甘口なうち、キリ〳〵出してもらはう。

閉坊　そりや何を。

鬼王　オヽ、今おれが提げて來たゆで蛸を。

トこれにて雲才惘りして、屋體の上へ來り、蛸をあちこち隱さうとして隱し所なきゆゑ、正面の閻魔の御首を拔き、その中へ蛸を隱し、御首を元のやうにして置く。この時奥より雲哲出かゝり、この體を見てうなづき、奥へ入る。雲才これを知らず、食ひかけし蛸の足を閻魔の口へ挾み、知らぬ顏にて居眠りゐる。舞臺の三人これを知らず

閉坊　これは存じも依らぬ。愚僧がどうして蛸を
鬼王　取らしつたに違ひない。上がつたら燒いて食はう、下がつたら煮て食はうと、樂しんでゐた蛸を
いよ〳〵出さにやア蛸坊主め、この寺を家探しするワ。
トいろ〳〵喚き、フト閻魔の口の端を見て
イヤア、蛸ノ盗人が知れた〳〵。
禪司　コリヤ〳〵鬼王、氣を鎭めて物を云やれ。和尚を捕へて無實の云ひかけ、また盗人が知れたとは
どうした譯ぢや。こりや、酒湯をかけても、疱瘡神樣が附いてござるさうぢや。
鬼王　イヤ、疱瘡神ぢやアねえ。蛸盗人は、あの閻魔だ〳〵。
閉坊　木像の閻魔大王が、どうして蛸を
鬼王　盗んだ證據は、口に殘つてゐる。この上は、閻魔を引ッ捕へて
ト立ちかゝるを
禪司　たとへ證據があるにもせよ、佛體に向ひ、そりや成らぬ。
トとめる。
鬼王　イヽヤ、佛體ぢやアねえ、ぶつたくりの蛸坊主。諸人の見せしめ、閻魔の首を引拔いて、獄門に

晒してやるワ。

ト禪司坊を振り切り、二重へ駈けあがる。雲才、首を拔くと聞いて悑りして飛んで出で、鬼王を押へながら無理に舞臺へ引下ろし

雲才　イヽヤ、像を切らせては、ならぬ〳〵。

ト禪司坊も縋りとめて

禪司　コリヤ鬼王、氣を鎭めてたもいの。

鬼王　イヽヤ、大事の蛸を閻魔に盗まれては、鎭まれねえ。

ト無性に腹を立て、立騒ぐ。閉坊此うち思ひ入れあつて、そこにある火打ち箱より、火打鎌と石を取つて、鬼王が頭の上にて火を打つ。鬼王これにて捨ぜりふ、惡口を吐きながら段々鎭まる。皆々見て

禪司　やう〳〵の事で、神樣がお立ちなされたさうぢや。

鬼王　さて〳〵、あの閻魔は大食ひで、誠につけが荒い。これが本當の、荒いの閻魔だ。

ト皆々よろしく鎭まる。双盤、てんつゝになり、向うより七郎助、紺看板の折助にて、中拔を腰に挾み、跡よりお京、頰かむり、駈落ち者の拵へにて出で來り、花道にて

お京　モシ、七郎助さん、お前がこの箱根へ來なんした跡、あの千住の親方が、惡蟲が附いてゐるわッちだといつて、大磯へ住替へに出したと思はんせ。お前の來てゐる箱根へは近くなる、嬉しくて嬉しくて、住替へに來たその晩に、直ぐに大磯を駈落ちして、方々とお前を尋ねて歩き、やうやうの事で二人一緒に、こんな嬉しい事アねえよ。

七郎　そりやアおれも同じ事、てめえの事は片時も、忘れた事はなかつたわえ。

お京　エヽ、人を喜ばすやうな好い事ばつかり。

ト抓る。

七郎　アイタヽヽヽ……なにサ、噓ぢやアねえ。どうぞして、てめえを身請けして、こんなに朝晩くッついてゐてえと思ふから、江戸に居ても見かけた山もなし、そこで、勘當されても生れ故郷、曾我近邊へ來て、何ぞ好い事もあらうかと、いろ〳〵探してゐるところ、幸ひ伊豆の次郎さまに中間の空があると聞き、まづ當時は雇ひ中間、折助よ。なんと安い野郎だらう。

お京　オヤ、それぢやアお前の事を、白痴の一心に思つてゐる、わッちやアそゝり節にある通りだね。

七郎　そりやアなぜ。

お京　草鞋が切れたか川留めか。

七郎　おきやアがれ。

ト本舞臺へ來る。上の方より多七出て來り、出合ひ頭にお京を見て

多七　ヤア、十六夜お京ぢやアないか。

お京　お前は多七さん。

ト逃げ出さうとするを捕へ

多七　イヽヤ、逃がさぬ〳〵。見附けた〳〵。よく住替へ先から駈落ちひろいだな。見知り人のこの多七が、江戸三界から呼び出されて、てめえを探し歩いたに、爰で逢つたはお引合せだ。それも大方七郎助の指し金であらう。サア、二人ともに大磯の、親方の所へうしやアがれ。

トお京の手を引き、七郎助の襟髪を取つて行かうとするを

七郎　エヽ、見つともねえ、よしやアがれ。

ト多七の手を拂ふ。

多七　見つともねえは其方の勝手、見えがゝりだ。連れて行くのだ。

七郎　なんだ、見えがゝりも氣が強い。この七郎助さんが色事遊ばした十六夜お京、おれが箱根にゐると聞いて、跡追ひかけて來た女を、見附けられたら仕方がねえ。と歸してやつちやア、この兄さ

んは只の男だ。殊に宿場拵ざの伏せ玉は、上げ玉にしても大事ねえ。それともおぬしが手を引いて、連れて歸るなら歸つて見ろ。それこそ忽ち劍の舞ひ、十二神樂のひよつとこ野郎、指でもさして見やアがれ。なんの事た、風ひいた。

ト此うち鬼王、七郎助を見て

鬼王 ヤア、わりやア勘當した弟の團三か。今に性根が直らぬな。

七郎 知れた事だ。曾我の屋敷に愛想がつき、江戸三界までごろついて、今の名は七郎助、兄でも杭でもねえ鬼王。

お京 モシお前、兄さんに向つて、あんまりでござんせうぞえ。

七郎 ナニ、勘當されたら赤の他人、なに構ふものかえ。

禪司 その心ゆゑ今のその形、親兄弟の罰とは思はぬか。

七郎 アイ、罰も報ひも知らぬが一徳。

お京 それではお前、濟むまいがな。

七郎 濟まぬといつて、どうするものか。

多七 どうといつたら、十六夜を渡さにやア、身の代の立て金しろ。

七郎 馬鹿な野郎だ。金があるものか。

多七 金が無けりやア女を連れて

ト お京を引立てるを、七郎助とめ

七郎 爰にゐては、四の五と面倒だ。われは先刻の所で、合點か。

お京 そんならわたしは

七郎 行け〳〵。

ト お京は思ひ入れあつて向うへ走り入る。

多七 玉を逃がしては

ト 七郎助を振り切り行くを、七郎助とめる。鬼王出て、七郎助を引廻して

鬼王 此奴はやらぬ。こなたは跡を

多七 合點だ。

ト 立廻り、三味線入り禪のツトメになり、多七は花道へかゝる。七郎助は鬼王を振り切る立廻り。此うち向うよりお京、顔を隠し、チリ〳〵と跡戻りして出てくる。これを押し戻して祐兼、上下衣裳、大小。岬、裲襠抱へ帯、奥女中、跡より雪の戸、定家文庫を持つて奥小姓にて附き出て、よき所まで

來る。お京摺れちがひ、逃げようとするを、祐兼捕へ、押さへてお京を後へ圍ふ。此うち多七追ひかけゆき、祐兼をかきのけ、お京を捕へんとするを、祐兼、多七の腕先を捕へ捻ぢあげ、此まゝにて皆々舞臺へ押して來り

祐兼　慮外な匹夫め。

ト見事に投げて

すさり居らう。

ト閉坊、祐兼を見て

閉坊　ヤア、あなたは工藤の御舍弟。

七郎　ほんに、雇はれた旦那の祐兼さま。

閉坊　まづ／＼これへ。

祐兼　罷り通る。

ト管絃の頭にて通り神樂、合ひ方になり、祐兼、岬、雪の戸、上の方へ通り、皆々よろしく住ふ。

閉坊　祐兼さまのお入りは、何御用にて。

祐兼　今日は狩場の繪圖面内見の爲、まつた友切丸の儀について、來かゝる路地に無禮の女、殊更慮外

岬　なあの下郎、それゆゑ餘儀なく引連れ參つた。

岬　私しことは、三浦平六兵衛義村の、奥勤めいたす岬と申す者。先達て主人義村の娘片貝こと、曾我の祐成さまと、云ひ號け致せし上は、內緣ある曾我のお家。然るに友切丸紛失は、箱王さまの業なりと、お疑ひかゝりし上、祐信さまは此方の陣屋へお預けの身。

雲戸　何卒友切丸の劍詮議いたし、箱王さまのお疑ひも晴らし、祐信さまもお預け御免あるやうにと義村公の內意により、女ながらもこの岬、內々吟味いたすのでござります。

トこの時多七起上がり

多七　アイタヽヽヽ。モシ、お侍ひ樣、御無禮いたしたは御免下さりませ。シタガ、先程からの口振りでは、爰にゐる七郞助は、あなたの御家來かえ。

祐兼　いかにも。

多七　左樣ならば、あなたも遁れッこはねえ。モシ、あの十六夜お京といふ女を、お中間の七郞助が、上げ玉にしたところを、やう〳〵と捕まへたのだ。主人方なら是非共に、あなたへかゝらにや成りませぬ。

祐兼　ヤア、素町人の分際で、一﨟職の弟たる、祐兼へ對し慮外な一言。今一度ぬかさば、眞二つだぞ。

　　トきつと云ふ。

多七　アヽ、モシ〳〵、玉を上げられたその上に、眞二つに切られては、根ッから算盤の玉に合はぬ。主人顔をしようと思へば、眞二つにしようと云ふ。こりやア一番切りかへて、元の名の團三郎でかゝらば、幸ひ爰に兄御の鬼王さん、殊に曾我の若旦那もお出でなりや、お二人さん、どうぞこの仕埒をつけて下さい。

鬼王　いま聞く通り、勘當の弟の野郎が、逃げやうが、くたばらうが、なんの構ふ事があらう。

多七　イヤ、勘當しても、肉身分けた團三郎、否でもこなたにかゝらにやならぬ。十六夜お京を渡すとも、但し身の代三十兩、耳を揃へて受取らうか。禪司坊さん、新左衞門どん、どうぞ挨拶して下さい。

岬　その返事は、岬が致さう。

　　ト皆々思ひ入れ。岬、雪の戸を招き、定家文庫より三十兩出し

曾我に由縁の三浦家にて、この場のあらまし、無難に納めたさ。いらぬ岬が差出ながら、其方が望みの身の代金。

　　ト投げてやる。多七受取り

多七　エヽ。こりやア小判で三十兩。夢ではないか。

岬　それにて云ひ分ないか。

多七　これさへ取りやア、何を申す事がござりませう。こんな夢なら覺めぬうち

岬　キリ〳〵歸りや。

多七　こりやアどなたも、おやかましうござりました。

ト通り神樂になり、多七向うへ入る。

閑坊　ハテ、流石は大家の三浦の奥勤め、岬どのには感心いたした。

七郎　世には彌次馬もたんとあるものだ。なんぼ曾我に縁があればとて、昔の團三郎ならば、有り難い忝いと思はうが、勘當されてごろつきの、七郎助の身にとつちやア、その日雇ひでも御主人の、祐兼さまが有り難い。そのお方も構はぬに、大きなお世話、お女中樣。

ト禪司坊、ツカ〳〵と七郎助の側へ來り

禪司　エヽ、其方はなア。御内縁あればこそ、曾我の名の出るをおいとひなされ、おのれ風情に岬どののお志し、厚く一禮述ぶべきに

鬼王　せめて押し默つてござるる事か。その惡口は何事ぞ。力づくでは叶はぬが、いつその事、かぶり

ついて

ト立上がる。

祐兼　鬼王待て。

鬼王　でも餘りな

祐兼　今日一日は身が家來。殊に其方は勘當したれば、いらぬ口出し。

鬼王　エヽ、あの惡人の肩を持つ、祐兼さまの牛は牛連れ。

祐兼　イヤ、賤しい彼れが肩を持つ。曾我に內緣あるからは、一家の端と思ふから。

禪司　ナニ一家とは。

祐兼　元は一家の曾我と工藤。ナニ禪司坊とやら、近しき仲の初對面、伊豆の次郎祐兼が、知る人にならう。鬼王もろとも、これへ參れ。

禪鬼　アノ、私しどもを

閑坊　お召しなさるゝ祐兼さま。

禪司　いはゞ敵の弟御と

鬼王　思へば無念な。

トきつと立ち、ツカ〳〵と行き無念のこなし。

七郎　そりやこそ怒つた〳〵。

ト囃し立てる。

岬　コリヤ、鎮めて〳〵。

ト押へる。閉坊心得、件の鎌にて鬼王に火を打ちかける。これにて鬼王、力んだまゝ、グンニヤリとなる。

禪司　ムウ。

ト見得。これより誂らへの合ひ方になる。

祐衆　初めて逢つた禪司坊、見ると聞くとは大きな相違。兄祐成は惰弱者にて、廓通ひに現を拔かし、弟は劍の盜賊と、疑ひかゝりし箱王丸、末の弟は禪司坊、見かけからして柔らかな、役に立たずのその生立ち、いはゞ一家の面よごし。久上へでものめずりこみ、くり〳〵坊主が相應だ。ハヽハヽヽヽ。

禪司　その嘲りも何故ぞ。親を討たれしばつかりに、現在敵の口の端に、曾我をさみする口惜しさは

鬼王　四百四病の病ひより

閑坊　馬の啼くほど、辛いものはないわい。
鬼王　コレ〳〵和尚どの、なぜ馬の啼くのが辛うござる。
閑坊　ハテ、ひんほど辛いといふ事サ。
鬼王　イヤ、呆れた坊樣だ。
祐兼　三ケの莊は、兄祐經が領地となり、河津が胤の兄弟、その態は何事だ。貧乏神の身を以て、敵呼はり氣が強い。
禪司　共に天を戴かざる親の仇。兄弟揃うて。
祐兼　ナニ小差出た小わつぱめ。
鬼王　病みほうけても新左衞門、兄事お主の敵をば

トきつとなり、禪司坊と入れ替り、腰なる竹光に手をかけ、無念のこなし。祐兼思ひ入れあつて

祐兼　うぢ蟲め。うぬはこの祐兼を睨みつめ、刀の柄に手をかけて、身共を切る氣か。ハヽヽヽヽ。當時一﨟職の御舍弟だぞ。貧乏神の澁團扇、破れかぶれと氣紛れて、その赤鰯がちつとでも、身共の體へ觸るが最後、主も家來も逆礫刑だぞ。エヽ、まじ〳〵とした大腰拔けめ、

ト鬼王を踏み倒す。このはずみに鬼王の刀鞘走る。鬼王うろたへ取りにかゝるを、七郎助、ツカ〳〵

と寄つて引ツたくり

七郎　ドツコイ……兄貴の魂ひ、御覽なされませ、

祐兼　曾我の家來の新左衛門、拔き放したる一腰は、お定まりの竹べらか。雀に劣つた業晒し。キリキリ塒へ歸りやアがれ。

禪司　その鳥類さへ親と子の

祐兼　恩を思はゞ

禪司　やがて本望。

祐兼　心許ない。

岬　まだ年若な禪司坊さま、そのお心根が

お京　思ひやらてておいたはしい。

七郎　エヽ、べら坊め。いらざる他人の貰ひ泣き。てめえはおれさへ大事にすりやアいゝ事だ。これからどこぞへ行つて、晝飯とせう。マア來や。

ト手を取る。

お京　阿房らしい、そんな事が。

七郎　ナニ構ふ事があるものか。大事ないわい。

岬　その大事のお主の難儀も、兄御の病氣も外に見なして

お京　思へば〳〵、義理知らずぢやなア。

七郎　義理に搦まり紙子を着て、見す〳〵川へはまらうより。ナア、嗅ア

お京　お前、それではあんまりな

ト氣の毒な思ひ入れ。

禪司　辛き報ひも

閑坊　辛き苦界も

お京　遁れたお禮は

ト岬へ辭儀する。

七郎　たわ言云はずと

トお京を引寄せる。

岬　禪司坊さまには御一緒に。

閑﨔　然らば岬どの

岬　祐兼さま。

禪鬼　とは云へ、見すく

ト祐兼へ思ひ入れあるを

岬　ハテ、その後ゆるりと

ト禪司坊を呑み込ませて押へ

お目にかゝりませう。

ト唄になり、岬は祐兼と閉坊へ目禮して、擬勢する禪司坊と鬼王を押へ奥へ、七郎助はお京の手を引き、下座へ入る。雲才は下手へ入る。跡に祐兼と閉坊殘り

閉坊　祐兼さま。何は差置き承らう。大江の重寶、曉丸の一腰を、盗み渡せと廣元の家中、劍澤彈正に云ひつけ召れたが、右彈正が、又々神職大藤内を頼み、大江の家中左七郎が、預かるところの曉丸、首尾よく盗み、彈正へ渡したを、又々愚僧が預かりござるが、今一品の友切丸は、如何なりました。

祐兼　その友切丸も、矢張り大藤内に盗ませ、彼れめに預けあるワ。

閉坊　彼奴に預けて置く時は、事のばれる氣遣ひはないが、祐兼さま、何故あつて友切丸といひ、大江

祐兼　の重寶曉丸も、奪ひ取らせたのでござるな。
その儀は兼ねて某、蒲の冠者範頼公へ一味なし、鎌倉どのを討ち亡ぼし、範頼公を世に出さんと計らへども、兎角邪魔者は大江の廣元、彼奴があつては何かの妨げ。それゆゑ廣元の家臣、劍澤彈正を味方に引入れ、彼れに仕事を云ひつけて、賴朝公の御懇望ある、大江の重寶曉丸を捲きあげさせたは、廣元を罪にとつて落す一つの計略。それゆゑ刀預かりの、船越兄弟は押籠めとの噂。また廣元もさる者にて、表立つての詮議はならず、内々にて名劍を懇望と云ひ立て、領地領地に觸れを廻し、當院へ皆取寄せ、近々この所へ參詣と號し、誠はその時曉丸、詮議なさんず廣元が計らひ。

閑坊　成る程、それで當寺へ、矢鱈に刀を取寄せる趣意が解り申した。さりながら、なんぼ智慧自慢の廣元でも、曉丸の一腰を、愚僧が方に預かりあるとは、うろたへた閻魔でも、知る事ではござりませぬ。

祐兼　それにつけてもこの所へ、劍澤彈正が參る筈ぢやが。

トこの話しのうち下手より雲哲出かゝり、この時前へ出て

雲哲　仰せの如く、今日劍澤彈正さま、當院へお入りの由。先刻御家來中を以て、お知らせでござり

ました。

祐兼　ムウ。然らば彈正參るまで、何かの密談。

閑坊　圍ひに於て薄茶一服。

祐兼　御無心申さうか。

ト唄になり、閑坊案內して祐兼附き、二重へ上がり、奥へ入る。跡に雲哲殘り

雲哲　まづ邪魔な奴等は片附けた。これからは、おれが見ておいた先刻の代物。うまい〳〵。

トこれよりいつもの合ひ方になり、雲哲あたりを窺ひながら、そろ〳〵二重へ上がり、閻魔の側へ行くと、バツタリ音して天井より、猫一疋飛びおりる。雲哲悔りして飛び退く。猫は閻魔の口の蛸の足を目がけ、段々に這ひ上がる。雲哲これを見て、猫を追ひ廻し、又そろ〳〵と閻魔の側へ行き、御首を引拔き、中より雲才が隱した蛸を引出し、そこへ置き、御首は元のやうにする。此うち又猫出て來り、右の蛸を咬へ行かうとする。雲哲あわてゝ猫を追ひ廻す。猫、蛸を放さぬゆゑ、同じく猫の眞似をして追ひ廻す。この時向うより中間一人走り出て、直ぐに本舞臺へ來り

中間　物まう〳〵。

ト雲哲これに心づかず、猫を追ひ廻し、トヾ猫を引放す。猫逃げて奥へ入る。中間、いくら呼んでも返

事せぬゆゑ、雲哲の側へ來り

これサ、物まう。

ト脊中を叩く。雲哲恟りして

雲哲　ドウレエゝ。

ト慄へ聲にて挨拶して、蛸を懐へ隠す。

中間　只今これへ、劔澤彈正罷り越しまする。右の段を、お知らせ申せとの儀でござりまする。

雲哲　折角〆めようと思うたに、また邪魔が入つた。

中間　ナニ、お邪魔なら、主人へ左樣申しませうか。

雲哲　イエ〱、なにサ、邪魔を拂つておきましたといふ事サ。

中間　アヽ、左樣かな。然らばお暇申します。

ト云ひ捨て、引返して向うへ入る。雲哲また蛸を出して嚙らうとする。この時奥にて

閑坊　雲哲々々。

ト呼ぶ。これにて又恟りして

雲哲　ハイ〱。

ト云ひながら、隱し所に困り、股藏へ隱し

アヽ、折角ものして心のまゝに、食はんと思へば邪魔が入る。又せしめんと思へば呼び立てる。

アヽ、蛸は諸道の妨げぢやなア。

ト三味線入りの禪のツトメになり、雲哲いぢかり股して奥へ入る。向うより劍澤彈正、惣髮、馬乘り袴、大小にて、鞭を差し、遠乘りの歸りの心にて出てくる。跡より大藤内、切繼ぎ小袖、着流し、大小、湯襷をかけ、深編笠にて、鈴を持ち、神道者の拵へにて出て來り、花道にて彈正を駈け拔け、先へ廻り、鈴を振りながら

大藤 高間ヶ原に神とゞまりまします。すめろみ神ろみ、とうかみゑみたみ、りけんたけん八百よろずの神々達。

トわざと彈正に摺りつく。

彈正 ヤイ〳〵、物貰ひなら、附くな〳〵。

ト搔きのけて本舞臺へ來る。大藤内跡より追ひかけ來り

大藤 拂ひ給へ淸め給へ、無性多寶神道加持。

トひつこく彈正に摺りつく。

彈正　エヽ、あたしつこい。退きやァがれ。

ト振りきるはずみに大藤内の編笠取れる。兩人顔見合せ

大藤　ヤ、其方は

彈正さま。

彈正　その後逢はう。

ト行きにかゝるを引廻し、立ふさがつてキツと捕へる。彈正拔きかけるを、大藤内ちやつと見る。これにて彈正、鞘に納める。大藤内ドッカリと坐る。双方よろしく思ひ入れ。誂らへの合ひ方。

大藤　彈正どの、こなたは身共を、殺さずばなるまいがな。

彈正　なんと。

大藤　いつぞや身共に内々にて、大江の家中神原佐七郎が預かりの、曉丸の短刀を、盗みくれろと頼みゆゑ、この身の出世にならうかと、首尾よく盗んで渡したも、身貧な態の神道者、大藤内が横しまは、神の咎めも恐れずに、慾にころんでした仕事。それをこなたはそれなりに、短刀取上げ今日が日まで、梨の礫もしねえのは、恐れながらも出來めえと、見越しての惡顔か。もう斯うなつちやァ破れかぶれ、無駄骨折らしたその代り、曉丸の一腰は、劍澤彈正が、所持いたして居りま

すと、三老方へ云ひ立てゝ、おれが命をきりにかけ、こなたの首はおれが物だ。首が惜しくば劍澤、一かばちかの挨拶しやれサ。

彈正　成る程、さう云はれては彈正、一言もない。併しながら、身共が心から出た事ではない。その頼み手は祐兼どの。それゆゑ賞樣を頼んで盗ませたのだ。して、友切丸の一腰も、慥かにこなたが

大藤　オヽサ、友切もおれが手先で盗み取り、矢ッ張りおれが預かつて、知れねえ所へどめて置いたが褒美の金を貰はぬうちは、おれが刀も同じ事。こなたはそれに事かはり、現在主人の重寶を、他人のおれに盗ませて、濡れ手であはよく大江の家を、こなたが横領する心か。

彈正　アヽコレ、滅多な事を。

大藤　口外されるが否なれば、曉丸の價をくりやれ。

彈正　いま差當つて

大藤　無けりやア矢ッ張り訴人をせうか。

彈正　サアそれは。

大藤　金を寄越すか。

彈正　サア

大藤　サア

兩人　サアく。

大藤　彈正返事を、聞くべいか。

　　ト彈正思ひ入れあつて

彈正　いかにも、遲なはつたるその褒美、これにて渡し遣はさう。

大藤　すりやアノ爰で

彈正　いかにも。

　　ト云ひさま拔きかけるを、突き廻して、ちよつと立廻りある。此うち後へ閉坊、掛け物の箱を持ち出かゝり、窺ひゐたりしが、この立廻りの中へ入り、双方を押へる。三人見得。

閉坊　アヽ、コレく、彈正どの、短氣な事をなさらずと、愚僧に任せて、まづく。

　　トなだめる。彈正これを好き機にして納まる。閉坊、大藤内に向ひ

　成景どの、その請合ひは愚僧が渡す。その證據はコレこの通り、曉丸の短刀は、掛け物の箱に入れて、疾くより愚僧が預かりござれば、何事も頭に免じられて、この場は暫らく

大藤　イヽヤならねえ。なりませぬ。神道者とは氣の合はぬ、挨拶人が出家ゆゑ、惡顏させる彈正どの

その合ひ口なら人喰ひ馬、牛に經文、耳にやア入らねえ。サア、褒美の金が出來なけりやア、その短刀はおれがものだ。ドレ

ト掛け物の箱へ手をかける。

閑坊　イヤ、この品は愚僧が渡さぬ。

大藤　そんなら褒美を、いま寄越すか。

彈正　金といつては今爰に

大藤　二種ともに渡さにやア、この趣きを三老方へ。

ト立上がつて花道へ行かうとする。彈正「エイ」と袱紗包みを手裏剣に打つ。大藤内手早く打ち落す。袱紗とけて、中より狩場の繪圖面出る。大藤内取上げ見て

こりやコレ狩場の

彈正　その繪圖面は祐經が、廣元どのへ差上げし、皐月下旬の地割りの繪圖面。

大藤　それを何しに打ちつけたのだ。

彈正　褒美の金を渡すまで、當座の合ひ文。

大藤　すりや、この品を預かつて

彈正　祐兼どのに面談して、金は屋敷で

大藤　そんならそれまで、褒美の形代。

ト懷中する。

閑坊　して、この短刀は。

大藤　矢張り貴僧へ。

閑坊　預かり置くは承知でござれど、廣元公よりこの短刀、詮議の爲にこの寺へ、百姓町人の腰の物をいくつとなしに取寄せござるが、これを見分るには、何ぞ外に見どころでもござるかな。

彈正　成る程、出家の身には、曉丸の譯知らぬ筈。元よりこの短刀は無銘なれど、酉の年の者の血汐を注げば、所々にて鷄聲を發し、刃に星の影うつる。名けてこれを曉丸といふ。

閑坊　ハテ、稀代な劍でござりまするな。

彈正　かゝる不思議な名劍ゆゑ、友切丸と一つになし、範頼公の差料となさんとの事。たゞ心がゝりは劍詮議に廣元が、當寺へ來りしその時に、短刀隱しある事を、必ず共に氣取られまいぞ。

閑坊　それはちつとも氣遣ひあるな。この如く掛け物の箱へ秘めあれば、又ぞろ所を變へて、目立たぬやうに。

大藤　無駄骨仕事は御免だな。

閉坊　その事なれば愚僧が請合ひ。ナニ彈正どの、幸ひ奥に先刻より、祐兼どのもお出でござれば

彈正　イカサマ、何かの密談いたした上

大藤　此方の仕事を分けて下さい。

彈正　そりや申さずとも

閉坊　彈正どの

大藤　成景、繪圖面預かつた。

ト唄になり、彈正思ひ入れあつて奥へ入る。跡に大藤内、閉坊殘る。

閉坊　さて〱、あの彈正どのは、誠に氣を揉ませるお方でござるて。

大藤　あの位に申してさへ、蛙の面に水とやら。それには代り祐兼さま、奪ひ取つたその日より、友切丸を身共へ預け置かるゝは、流石大家の工藤の御舍弟。

閉坊　して、其許が隱し置く、友切丸の劍はいづれに。

大藤　人目を憚り小地獄の、湖水のあたりへ。

閉坊　天晴れ妙計。イヤ、感心々々。

ト此の時奥より雲才出て來り

雲才　モシ〳〵、大藤内さま、只今奥にて祐兼さまが、お前を同道いたし參れと仰せられます。サアサア、お出でなさい〳〵。

大藤　すりやアノ、祐兼さまが

雲才　左樣でござります。

大藤　然らば參つて面談いたさう。ナニお住持、必ずともに、只今申した劍の在所は

閉坊　承知でござるて。

雲才　御案内いたしませう。

ト双盤になり、雲才案內して、大藤內附いて奥へ入る。跡に閉坊殘り

閉坊　ハテ、丈の知れぬ成景が胸中。そればかりでなく、今日計らずも禪司坊、三浦家よりの奥女中、もしこの短刀の詮議ではあるまいか。左樣な事では、我が寺ながらウカとは置かれぬ。アヽコレ、どこぞへ仕舞うて

ト件の掛け物、箱の短刀を取出し、いろ〳〵あつて

よし〳〵、有るワ〳〵。義村さまの使ひの歸るそれまで、氣の附かぬ所は閻魔の御首。さうだ、

さうだ。

　　ト　あたりを見廻し、閻魔の頭を拔いて短刀を差込み、元のやうにして思ひ入れ。よき時分雲才出で、隱せし蛸を見つかりしかと心得、膽を潰し

雲才　ア、モシ、閻魔の首に蛸はござりませぬ。

　　ト　慄へて云ふ。閉坊恟り飛びのき

閉坊　ナニ、閻魔の首がどうしたと。

雲才　サア、閻魔の首に蛸は

　　ト　もぢ〳〵する。

閉坊　たわけ面め、閻魔の首が紙鳶にしてあげられるものか。いろ〳〵な無駄を吐かすな。

雲才　それでもお前が、閻魔樣の首を拔いで、どうやら蛸にでもしさうだから、それでとめました。既に以てお經にもござりまする。釋迦に提婆、西瓜に和中散、蛸に閻魔は大の禁物でござりまする。

閉坊　イヤ、此奴が樣々な事を吐かす。おのれ、斯樣な阿房は寺には置かれぬ。追ひ出してしまふ。サア、出てうせろ〳〵。

　　ト　雲才を捕へ、花道の方へ突きやる。

雲才　ハイ〳〵、御免なされませ〳〵。

閑坊　イヽヤ、置く事はならぬ。コリヤ、男ども、この坊主めが古襦袢を持つて來い。此奴、裸にして追ひ出す。

雲才　御免なされませ〳〵。

ト逃ぐるを捕へ、帯を解かうとして

閑坊　これはしたり、男どもは居ぬか。雲哲よ、古襦袢を持つて來ぬか。コリヤヤイ、何をしてゐるぞ

ト奥へ向ひ、獨り呼びながら氣をもみ、小言を云ひ〳〵足早に奥へ入る。雲才跡を見送り、思ひ入れあつて

雲才　あの和尚めがあゝ云ひ出しては、とてもおれは、この寺をお拂ひ箱だ。裸にされて追ひ出されては、出入りが出來ねえ。布子を取られぬ其うちに、おれが方から駈落ちしてやらう。幸ひ爰に脚絆草鞋、菅笠もあるな。占めた〳〵。これが本當の駈落ちだ。

トそこにある脚絆草鞋菅笠を取つて、足早に行かうとして立ちどまり

イヤ〳〵〳〵、駈落ちするなら、閻魔へしまつた蛸を持つて行かう。あの和尚めに喰はれるも損だ。

ト駈寄りて御首を取のけ、件の短刀を取出し、ゆで蛸見えぬゆゑ、いろ〳〵氣を揉み

サア／＼大事だ。折角隠したゆで蛸が、こんな刃物になつた。こいつは大變だ／＼。

トいろ／＼して

イヤ／＼、この耳くじりを古手買ひに賣つたなら、蛸の足の喰はれぬといふ事もあるまい。これから寺を隨徳寺、蛸をなくして箱根を駈落ち。ドリヤ、一散に駈落ち。

ト菅笠をかむり、脚絆草鞋にて、短刀を差し、一散に向うへ入る。此うち通り神樂、奥より大藤内、狩場の繪圖面の袱紗包みを持ち出で來り、あたりを見て

大藤　最前思はず彈正が、我れに渡せしこの繪圖面。富士の御狩の地の利案内、曉丸の褒美の合ひ紋、此方で繪圖面寫し取り、兼ねての大望、その節役に……さうぢや。

ト合ひ方になり、机の亂れ箱を取寄せ、件の繪圖面を開き、地理の樣子をよく／＼見る思ひ入れ。音樂になり、向うより八幡の三郎行氏、上下大小。侍ひ二人附き出で來り、花道にて

行氏　コリヤ、其方どもは、申し附けたる儀、承つたか。

侍ひ　左樣でござりまする。大江の御家老彈正さま、殊に御舍弟祐兼さまもお入りの樣子。

行氏　すりや、祐兼さまにも……ハテ、何用ござつて。

ト思ひ入れあつて

然らばこれより供待ち致せ。行氏一人御寺へ參つて……サヽ、罷り歸れ。

侍ひ　ハヽア。

ト引返して向うへ入る。矢張り音樂にて、行氏舞臺へ來り、立ちどまつて

行氏　誰ぞ御案內賴みたう存ずる。

ト云へども、大藤內一向挨拶なく、繪面の地理を見詰めてゐる。

大藤　御領の假屋は戌亥の方、辰巳に當つて和田北條、祐經どのゝ假屋も同じく

行氏　ヤ。

ト聞き咎める。これにて大藤內、思はず顏を見合せ、件の繪圖をちやつと疊み、思ひ入れあつて

大藤　いつの間にやらお歷々。

行氏　案內乞へど何やらに、見惚れゐらるゝ樣子といひ、問はず語りは、慥かに狩場の

大藤　アイヤ、存ぜぬ失禮。

ト繪圖面を懷中して

御容赦下され、サヽ、お通りなされまし。

行氏　然らば許しめされい。

ト替りし合ひ方になり、思ひ入れあつて行氏、上座へ通る。大藤内思ひ入れあつて

大藤　見れば庵に木瓜の御紋附き、工藤家のお使者かな。

行氏　いかにも、身共ことは祐經が近臣、八幡の三郎行氏と申す者。

大藤　エヽ、あなたが當時の八幡三郎、ハテ、二代目の行氏どのか。

ト目を附ける。行氏もこなしあつて

行氏　寺院に居らるゝ取次の身を以て、木綿襷かけて居らるゝは、何とも以て。

大藤　成る程、御不審御尤も。拙者は即ち權現の社人、大藤内成景と申す、神道者でござります。

行氏　その社人たる大藤内、所持いたされたは、慥か狩場の、繪圖面でござらうな。

大藤　イヤ、全く左樣な品ではござりませぬ。こりや何でござるて……オヽ、左やう〳〵、武家方に普請の家相を頼まれ、それを只今判斷いたして。

行氏　すりや、家相を見んが爲に、今の繪圖面。ハテサテ、狩場に似寄りの品を

大藤　ヤ、なんと。

ト兩人キッと顏見合せ、思ひ入れあつて

行氏　ハテ、其許には、どうやら見掛けし

大藤　其許とても存じた面ざし。
行氏　ハテ、いづれでありしか。
　　ト兩人互ひに顏を見詰め、思ひ入れあつて
大藤　オヽ、思ひ出した。しかも、過ぎにし安元二年、赤澤山の柏ケ峠で、莨の火を貸さつしやいと、無心を云うた、伊藤どのゝ馬の口取り。
行氏　それ〳〵、さう聞いて氣が附いたが、火繩の火で莨を吸ひつけ、話さしつたる山獵師、弓矢携へ鳥獸、射て世を渡る狩人どのだの。
大藤　射とめる狸か野狐か、白狐か奴かお侍ひ。しかも二代目八幡の三郎。
行氏　狩人變じて神道者、大藤内とはこなたであつたか。
大藤　命があれば今日爰で
行氏　思ひがけなう落ちあつて
大藤　古い話しも……オヽ、十八年。
行氏　ざつとつもつて二タ昔。
大藤　ハテ久しうて

兩人　サア、樂にござりませ。

ト大あぐらになり、合ひ方替つて世話のやうになり

行氏　ヤ。

大藤　ハテサテ、人の成行きは知れぬ。馬の口を取つた奴どのが、工藤さまの御家老樣。家老の身共に

行氏　イヤモウ、あの時分とは大きな相違。誠に今では浮み上がつた。

ト大藤内思ひ入れあつて

大藤　アイヤ、狩人が神道者、兩方ともに出世は出世だが、仕合せは、まだしも貴樣か。

大藤　その出世した奴どのに、大藤内もあやかりたいが、身共も以前は武士の果て、工藤のお家へ其許が、推擧をしては下さるまいか。

行氏　イカサマ、袖振り合すも緣とやら、推擧いたして進ぜようが、その代りには此方もちつと、賴みがござるわえ。

大藤　そりや如何やうなお賴み事。

行氏　外でもござらぬ。貴公が御所持なされたる、家相の口傳、普請の繪圖面、見させては下さるまいか。

大藤　アノ只今のこの繪圖を
行氏　地利は正しく牧狩の、その繪圖、身共に
大藤　この儀ばかりは
行氏　叶ひませぬか。
大藤　いかにも。
　　　トよき時分に彈正出かゝりゐる。
行氏　然らば、貴公のお頼みの、工藤の家へ
大藤　推擧のお世話は
彈正　この彈正が致して進ぜう。
行氏　ヤ、さう云やるは劍澤、彈正どのか。
彈正　祐經どのへ推擧いたさう。さすれば以前の近江の小藤太。
行氏　ヤヽ、これなる社人大藤内は。
大藤　歸參の上は某も、昔のまゝに小藤太と、變名いたさば名乘りの一字、元の成景、以前の成家、その時こそは、近江の小藤太成家と。

行氏　ヤヽヽヽ、近江の小藤太成家とは、工藤家の執權たる

大藤　その名もいつか埋れ木の、十八年の艱難も、伊東を射損じ祐安を、射て落したる越度ゆゑ、流浪の上に又ぞろや、主人の勘氣、扶持離され、當時は誠の素浪人。

行氏　すりや、赤澤山の狩倉にて。

大藤　河津を射たるこの身の誤まり。

行氏　さては河津を射とめしは、近江の小藤太。

彈正　今より歸參は身が推擧、それも射術に名高き成家、以前に變らぬものなれば、射術の程を拜見いたさう。

大藤　云ふにや及ぶ、覺えの手の内。

ト思ひ入れ。この時空へ、白鷺、山鳩、大分に舞ふ。

彈正　幸ひ空飛ぶあの白鷺、近江八幡の兩執權、新參古參の二人の手の内、彈正これにて拜見いたさう。

大藤　手練とござれば拙者めも、不拙者の盲目蛇、云はゞ座頭の垣のぞき、恥を垣根に朝顏の、小柄を以て、空飛ぶ諸鳥を

ト小柄を取つて思ひ入れ。行氏これをとめて

行氏　にぶき射術も正しきは、色づく山の紅葉に鹿……サ、しかも、時雨の赤澤山、その手の内は劣るとも、紅葉に鹿の笄にて。

ト笄抜いて立ちかゝり、兩人見やつて、大藤内は上の方、行氏は下手に寄つて、空飛ぶ鳥にキッと目を附け

八幡が手練はにぶるとも

ト思ひ入れあつて空なる鷺に目をつけ

いづれを一羽失ふとも、鳥類だにも嘆きは同じ。

大藤　八幡どのには遲れの樣子、然らば身共があの鳥を

行氏　椎の木なくば、貴殿はよもや

大藤　ヤ。

ト窺ふうち、行氏すかさず笄を打つ。鳥にあたりし體。大藤内遲れじと小柄を打つ。これは外れる。先に打ちし笄にて鷺はよき所へ落ちる。兩人駈けより、件の鳥に手をかけ、思ひ入れ。大藤内の小柄下へ落ちる。

行氏　この白鷺は拙者が笄。

大藤　イヽヤ身共が小柄にて
行氏　イヤ行氏が
大藤　いよ〳〵貴殿の手練とござれば、射術に暗きこの成景、一生埋れ木。さすれば矢張り神道者、家相の判斷。これが相應。
ト懷中の繪圖を出しかけ、思ひ入れあつて
花咲く折もござるまい。
ト繪圖へ思ひ入れして云ふ。行氏こなしあつて、鳥に中りし笄を、素早く拔き捨て
行氏　アイヤ、氣遣ひあるな成景どの、鳥に中るは朝顏の、貴殿の小柄に相違ござらぬ。拙者が紅葉の笄は、空より落ちて砂まぶれ、未熟の八幡が及ばぬ御手練、行氏驚き入つてござる。
ト大藤内の小柄をソツと鳥へ突き立て、差出す。大藤内取つて
大藤　すりや、某が小柄にて
行氏　空飛ぶ鳥も、まツこの如く。ハテサテ御手練、感心いたした。
大藤　然らばいよ〳〵いけ鳥の、勝を取りしは卽ち拙者。
彈正　手練の程を見し上は、いよ〳〵歸參の執持ち致さう。

ト この時祐兼出かゝりゐて

祐兼　祐兼しかと見屆けた。兄祐經に成りかはり

彈正　祐兼さまには、今の樣子を御覽ありしか。

祐兼　それゆゑ彼れが勘當は、身共が赦して以前の如く、工藤が家の執權職。

大藤　すりや小藤太めを歸參とな。

祐兼　今より忠勤はげんでよからう。

大藤　こは冥加なき御仰せ、有り難く存じ奉ります。

行氏　すりや、其許には今日より

大藤　昔に變らぬ近江の小藤太。

行氏　拙者は新參、八幡の三郎、以後は互ひに別懇に、申し

兩人　談ずるでござらう。

ト思ひ入れ。バタ〳〵になり、奥より七郎助、禪司坊を引ッ立て來り

七郎　禪司坊どの、動かつしやるな。

禪司　家來の身として團三郎、某を何とするのぢや。

四立目　同返上



七郎　科はその身に覺えがあらう。劍を入れた長持は、村方よりのお寺の預かり、それを窺ふ禪司坊、これも矢ッ張り箱王と、同じ畑の丁稚と存じ、それゆゑこれへ連れて來た。祐兼さま、御油斷なされますな。

禪司　コリヤヤイ、團三、身に覺えなきその云ひかけ、曾我の屋敷に勘當を、受けても古主の某に、無禮を申さば赦さぬぞ。

ト刀へ手をかける。

祐兼　ヤア、素丁稚の分際で、目に角立てゝの面がまへ。察するところ、箱王丸と馴れ合つて、名ある劍を奪ひ取る工面であらう。身共に荷擔の團三郎、禪司坊を拷問なし、箱王丸が在所を問へ。

七郎　畏りました。祐兼さまへの奉公はじめ、曾我の身內の禪司坊、箱王丸が行くへの詮議、丁稚め、キリ〳〵ほざいてしまへ。

ト禪司坊を引附ける。行氏これを留め

行氏　ヤイ、匹夫め、云はゞ古主の禪司坊、詮議呼はり、すさり居らう。

大藤　イヽヤ行氏、扣へさつしやい。團三が匹夫であるなれば、おてまへとても以前は匹夫、いはゞ伊東が徒中間。

禪司 ナニ、以前伊東の小者とは。

彈正 さては八幡は祐親が、馬添へなりし身を以て、工藤へ取入る二股武士。御油斷なさるな、祐兼さま。

祐兼 正しく兄の祐經を、つけ覘ふため入込んだる

大藤 伊東に仕へて河津が馬添へ、主人の館へ紛れこみ、八幡となつての奉公は、胸に一物あらうがな

行氏 イヽヤこの身に二心はない。よし又小者なればとて、左衛門さまのお目鏡にて、取上げられし新參者、古參といへどおてまへは、今日の今まで主人の勘當。

大藤 その御勘氣も忠義ゆゑ、伊東に所領を横領され、身は漂泊ひの金石丸、身共が勸めて奥野の狩、山獵師と樣を變へ、柏ケ峠に待ちうけしに、騎者を迎ひの飾り馬、口を取つたる歩中間、身共が咬へし莨の火、借りたる節に主人の噂。伊東が迎ひと口走るを、これ幸ひと小者の奴等、まつた飾りし鞍鐙、よつく目をつけ椎の下、窺ふ折から轡の音、よく〳〵見れば見覺えの、馬の飾りに口取りの、面體違はぬ上からは、これを證據に所領の仇、おのれ祐親ござんなれ、切つて放つ矢あやまたず、鞍の山形射削つて、大地へ撻と落ちたるは、伊東と心得退いて、跡にて聞けば河津の三郎。ヤアしなしたり、人違ひ、悔めど返らぬ身の誤まり。

ト此うち行氏、禪司坊無念の思ひ入れあつて

禪司　すりや父上を、その折、其方が

行氏　この面體を證據となし、射て落せしは相違して、父御にあらぬ祐安さま、この面がまへの目じるしが、主人の爲めに

祐兼　ナニ主人とは、河津が事か。

行氏　サ、その主人の祐經さま、御武運拙く小藤太どの、天晴れ忠義、此方は、覺えられたるこの面が河津の爲には敵のしやつ面。

ト無念の思ひ入れ。

大藤　射損じながらも主人の爲。それを勘當なされたは、ちつと恨みな祐經さま。河津を射たも成家は左衞門さまを思ふがゆゑ。この上敵と曾我殿原、つけ覘ふとも身共は存ぜぬ。主人の爲なりや敵は御主人、間違ひ立てして身を恨むな。

彈正　殊更最前預け置く、狩場の繪圖は主人廣元、まつた左衞門祐經どのが役目なれば、工藤へ歸參の成家どの、富士の狩場の普請奉行は、貴殿と某。

大藤　その繪圖面は卽ち爰に。これを欲しがる八幡が胸中、曾我の奴等へ渡す氣か。曾我を見切つた團

三郎、その丁稚めを苛なんで、箱王丸が在所をほざかせろ。

七郎 心得ました。禪司坊どの、團三郎が答にて、行くへの知れぬ箱王丸が、在所をキリ〱

ト立ちかゝるを、行氏さゝへて

行氏 又も主人を手籠めの緩怠。

祐兼 それを留めるは行氏も、いよ〱曾我の肩持つか。

行氏 全く以て。

彈正 工藤の扶持人、扣へさつしやい。

行氏 サアそれは。

皆々 但し間者か、

行氏 サアそれは。

皆々 サア

行氏 サア

皆々 サア〱

敵皆 どうだ。

トこれにて行氏、禪司坊を圍ひ、ホツと思ひ入れ。

大藤　ぶち据ゑろ。

七郎　心得ました。

ト禪司坊へ立ちかゝるを、行氏、七郎助を捻ぢあげる。祐兼立ちかゝる。七郎助、行氏へ組みつく。立廻りのうち行氏の衣裳脱げて、紺看板、奴の形、この時懐より飯行李落ちる。敵役皆々見て

彈正　さてこそ八幡が

敵皆　この形は。

禪司　ヤヽヽヽ、行氏どのゝ姿といひ。

七郎　工藤の家老の懐に、この飯行李は

敵皆　なんの態だ。

トあざ笑ふ。行氏思ひ入れあつて

行氏　小藤太どのゝ詞の如く、八幡が正體現はせば、根が盛切りの身を以て、今まで知行高祿の、御家老ながら日々の、露命を繫ぐ扶持米は、工藤のお家の米一粒、食はぬ氣儘の徒中間、曾我さまよりの貢ぎの飯行李、敵の手引きと入込んだは、三本足らぬ猿智慧も、つら赤澤の十内が、昔に返

る捻切りの、河津が馬添へ不忠者、恥を隠せしこの衣服、脱いだら元の奴らさ。御存じあるまい

若旦那、よくも成長なされました。

ト禪司坊へ向ひ思ひ入れ。

禪司　すりや、其方が父上の。

大藤　河津を討たれし大腰抜け。主人の館へ入込んで、曾我へ手引きの不敵者。

祐兼　この祐兼が一刀に

ト立ちかゝるを大藤内とめて

大藤　お手にかけられお刀の、却つて穢れを存ずるゆゑ、命助けて爰追放。併し團三は禪司坊の、詮議仕抜いて箱王の

七郎　行くへをきつと私しが、白状させるも主従の、縁の切れたる團三の面晴れ。

彈正　成家どのにはこの上に、口談いたす仔細もござれど、それより大事な彼の品の

大藤　アヽコレ、その儀は成家、胸にござる。

祐兼　その心底を見る上は、歸參の小藤太、用意の衣服、これへ持て。

ト向うにて

八内　ハツ。

ト八内、奴の形にて、廣蓋に袱紗をかけて上下衣服を載せ、これを捧げ、走り出て來り

仰せ置かれし上下衣服、即ち持參。

ト よき所へ置く。

祐兼　今より歸參の小藤太成家、衣服を改め、祐兼同道。

大藤　思ひよらざる身の冥加、以前に變らぬ工藤の執權、今より忠勤勵みまするでござりませう。

ト行氏思ひ入れあつて

行氏　不興をうけし成家どの、以前に變らぬ家老職、その立身に事かはり、八幡は元の徒中間。

彈正　命助けて直さま追放。

七郎　曾我にゆかりの禪司坊、詮議の役は家來の團三。サ、丁稚どの、來さつしやい。

ト禪司坊を引ッ立てる。

禪司　エヽ、主人に刃向ふ人非人。

ト思ひ入れ。

七郎　びくしやくすると、曾我へお祟り。

禪司　サアそれは。
　ト抑へる。祐兼花道の方へ行き
祐兼　定紋附きの上下衣服、直さま館へ持ち參れ。
八内　心得ました。
　ト行氏の衣裳刀を取上げる。
行氏　せめて下郎が一腰なりと。
大藤　穢れた魂ひ、われにくれるワ。
　ト投げてやる。行氏取つて
行氏　この身になつては有り難く、頂戴いたすでござりませう。
　ト押戴く。
彈正　然らば此まゝ、祐兼さま。
祐經　彈正左衞門。
大藤　御兩所、お先へ。
彈正　小藤太どの

大藤　お別れ申さう。
七郎　立たつしやい。
ト唄になり、祐兼彈正、八内、行氏の衣服を抱へ、向うへ入る。七郎助、禪司坊を引立て、奥へ入る。あと合ひ方、大藤内思ひ入れあつて
大藤　誠に人は正直の、頭に宿る神とやら、時節來れば以前に變らず
ト衣服を抱へ立ち上がる。
行氏　その御出世に事かはり、化あらはれし十内が、あなた樣へ折入つて、お願ひ申さにやならぬ一儀御所持なさるゝ狩場の繪圖、どうぞ拙者に
ト大藤内これを聞かぬ振りにて
大藤　工藤家へ歸參すれば、知行の高も、これ〱
ト指を折り數へてゐる。行氏、また向うへ廻り
行氏　小藤太さま、何卒下郎がお願ひを
大藤　用人、小者、若黨、下部……カウと。
トまた行氏、此方へ廻り

行氏　成家さま、何卒それなる繪圖面を

ト袖を引く。大藤内、行氏を見て

太藤　なんだ。最前から跡ねだりする犬を見たやうに……なにか、われが願ひは、身が所持したるこの繪圖面、見たいといふのか。

行氏　左樣でござります。

大藤　この繪圖面を見たならば、曾我へ手引のその目算、其方の爲には勝手がよからうが、歸參いたした小藤太が、主人の仇となるべき忠義。まづ、よしに致さう。

行氏　御尤もではござれども、そこを只管あなた樣へ。

大藤　すりや、どうあつても聞分けなく。

行氏　何卒願ひを

ト縋るを

大藤　たわけた事を。

ト衣服を肩にして、行氏を蹴倒し、キッと思ひ入れ。行氏「チエヽ」と思ひ入れ。この引張りにて、道具ぶん廻す。

本舞臺、柾木の生垣、向う本堂の横を見たる道具。よき所に草井戸。爰に七郎助、禪司坊を引附け、割り木を振上げゐる。お京、その手に縋りゐる。鬼王、禪司坊を圍ひゐる體。かすめたる禪のツトメになり、道具納まる。

鬼王　ヤイ〳〵、團三め、現在兄を打ち叩き、氣が狂つたか、惡黨め。

お京　兄さんばかりか勿體ない、お主樣を手籠めにして、お前に罰が當るわいなア。

七郎　おかたじけ。當るといふは延喜がよい。併し曾我には勘當の、この身になつた團三郎、主でも兄でもねえからは、祐經さまからお頼みの、箱王丸が詮議をする。云はねば團三が腕かぎり、古主のこなたをカウ〳〵〳〵。キリ〳〵在所を、云つてしまへ。

ト禪司坊をぶちのめす。その手に縋つてキットなり

禪司　いかに勘當うけたりとて、家來の團三が苛責の杖、思へば〳〵口惜しい。

鬼王　ヤイ〳〵〳〵、惡黨め、場所もあらうに小地獄の、地藏馬鹿にしをるか。

お京　家來の身としてお主を打擲。この世からなる修羅道の

鬼王　閻魔の前でおのれマア、罪を作つて先の世は、地獄へ落ちて鬼の責め。おれはこの世の鬼王でも

役に立たずのこのヨイ〳〵、側で見る目が口惜しいわえ。

ト自團駄踏む。

七郎　その世迷言聞きたくない。祐兼さまのお指圖で、在所を聞けば御褒美の、金でお京と二人して、夫婦暮らしに拵ぐ氣だ。必ずてめえ案じるな。

お京　エヽ、穢らはしい、其やうな、お主に刃向ふ横しま非道。コレ、心を入れかへ御主人を、大事に思うて下さんせいなア。

七郎　何を女のいらざる事。うぬらに構はぬ、禪司坊、箱王丸の在所を云へ。

禪司　たとひこの身はどのやうな、責苦を受けても箱王さまが

七郎　行くへを云はねば容赦なく、手ひどい刀の胸打ちに

ト一腰を抜き、振上げる。

お京　コレ、お怪我あつては

鬼王　おのれは磔刑。

ト兩人縋りよるを蹴とばし

七郎　わツぱを爰で

ト白刃を振上げる。この時後より行氏、ツカ〳〵と出て、この手を捕へ

行氏　天命知らずの人外め。

七郎　ヤヽヽヽ、うぬは十内。留立てひろぐと、われも側杖。

ト振上げるを行氏、立廻つて白刃をもぎ取り

行氏　お主に刃向ふおのれから。

ト振上げる。この時七郎助かい潜つて、懐より書き物を出し、サラ〳〵と開き、行氏へ差つける。

七郎　委細詳しく文言に。

行氏　ヤヽ、なんと。

ト立廻りに、この文言を見て

ヤヽヽヽ、さては團三は

七郎　お主の御難儀、友切丸。

行氏　その盗賊は

七郎　モシ。この身に引請けて

ト思ひ入れ、行氏こなしあつて

行氏　その盗賊と申し立て
七郎　片時も早く
　ト合掌して
南無阿彌陀佛。
お京　エヽヽ。
　ト縋るを、七郎助突きやる。その間に行氏、七郎助が首を打ち落す。お京、首に縋つて泣き崩れる。禪司坊鬼王驚き、見得。よき時分、岬、雪の戸を連れ、窺ひゐる。
禪司　ヤ、こりや團三を
鬼王　ソレ見ろ、罰が當つたワ。
　ト思ひ入れ。岬、ツカ〳〵と出て
岬　友切丸の盗賊は、以前は曾我の團三郎、今のその名は七郎助、祐兼さまの小者とあれば、この上ともに祐信さま、預けの御身もゆりるの道理。さすれば曾我の御兄弟
雪戸　曇りかすみの疑ひも、今より晴れて、日陰にあらぬ
お京　すりや、云ひ交せし團三どの

鬼王　弟が殘せし書置にて
禪司　箱王さまの身の難儀。
行氏　我が身一つに引請けて、首になつたる劍の盜賊。首は其まゝ義村さまへ、御持參あつて日延べの願ひ。その介添へは岬さま。この上よろしう
岬　心得ました。盜賊の首級は、あなたが御持參あつて、主人の館へ
禪司　これより直ぐに御同道。
鬼王　お供いたすは、この鬼王。
お京　して、その主の書置は
行氏　詮議の手がゝり十内が、跡に殘つて文言に、乘つたる奴等を一々に
岬　その書置にて油斷なう
鬼王　團三をお先に使ひし奴等、その引合ひには女房の十六夜。
お京　男に別れし身ながらも、跡に殘つて夫の名代、お主に忠義も追善供養。
岬　然らば此まゝ
お京　お供して

禪司　十內、よきに。

行氏　イザ、お立ちあられませう。

ト時の鐘、三重になり、禪司坊は七郎助の首を、死骸の片袖を切りて包み、岬、雪の戸、お京、鬼王附いて向うへ入る。行氏殘り、書置を見て

友切丸の盜賊は、大藤內とあるからは、正しく歸參の成家が、隱し置くに極まれば、彼奴に近寄り一詮議。殊には所持する繪圖面を

ト思ひ入れ。向うに人聲するゆゑ、木蔭に隱れて窺ふ。禪のツトメになり、向うより八內、箱提灯を疊みたるを持ち、酒に醉ひたる權平、これも箱提灯の疊みたるを持ち、中間笠と赤合羽を肩にかけて、兩人とも柿の脚絆、八內介抱しながら出て來り

八內　これサ權平、また醉つたな。キリ〳〵歩べと云ふに。

權平　否だ〳〵。おらァ醉ひはせぬが、其やうに使はれて堪るものか。人使ひの惡い。

八內　ハテ、人使ひの惡いは名代の旦那祐兼さま。降つて來ぬうち小藤太さまを、迎ひに行くのだ。キリ〳〵と歩べよ。

權平　イヽヤ、行かぬ〳〵。小藤太とやらの迎ひに行くなら、われ一人行け。おらァ行く事は、否だ〳〵

八内　そんならわれは、どうしても行かねえか。

權平　行かねえ〳〵。否だワ。

八内　エヽ、勝手にしやアがれ。

ト突き倒して下座へ入る。此うちかすめて禪のツトメ。權平始終よろしく

トよろつき廻るを、行氏窺ひ見て、落しある中間笠を取つてかむり、赤合羽と提灯を拾ひ上げるを、

權平　コレヤイ、八内、うぬ、おれを投げたな。なぜおればかり置いて行つた。コレヤイ、八内々々。

權平見附けて

誰れだ、八内か。なぜ預かりの合羽を取つた。その笠はおれのだ。寄越せ〳〵。

ト行氏によろけかゝり、笠を取らうとして顏を見て

ヤア、八内と思つたら、お前は八幡。

ト云はうとする。行氏引附け、立廻りにヨロ〳〵して、權平思はず草井戸へ落ちる。行氏跡を見やり、こなしあつて件の品を持ち、生垣を押分けて入る。時の鐘、禪のツトメになり、下座より八内、笠合羽にて、箱提灯を灯し、大藤内、上下、つまみ股立ちにて、衣裳を着替へ、高足駄、蛇の目傘にて出る。跡より畑右衞門、權九、附いて來り、あたりを見て

畑右　大藤内さま、俄に御出世なされたが
權九　わしらに用とは
兩人　どのやうな
大藤　賴み置くのは……コレ。
　　ト畑右衞門に囁く。
畑右　エヽ、そんなら賽の河原に待ちうけ
大藤　アヽコレ。
　　ト思ひ入れ。
兩人　呑みこみました。
　　ト捨て鐘になり、兩人呑みこんで下座へ入る。大藤内こなしあつて
大藤　朧の月でもこの山路、氣を附けて參れ。
八内　ネイ。
　　ト行かうとする。下手より行氏、笠合羽にて提灯を灯し、ツカツカと出て先に立つ。八内見て
　ヤ、われやア權平か、醉が醒めたか。もうお立ちだワ。氣を附けてお供をしろ。

大藤　アヽ、まだ一張あるか。それでは丈夫な。サ、先へ立て。

トこれにて行氏、顏を隱し、提灯を差出し、先へ立ち、花道まで行く。大藤内思ひ入れあつて

これにつけても十内め。身共が所持の

ト懷の繪圖へ思ひ入れ。行氏思はず提灯を大藤内の前へ差出す。愕りして

たわけ面め。提灯やれ。

トかすめて件の鳴り物、時の鐘、雨の音にて、三人向うへ入る。これにて

幕

本舞臺、三間の間、正面、石の大地藏、左右に六地藏、石塔。うしろ黑幕、稻村、藪疊、舞臺前浪板、誂らへの石、吊り枝、杉の大樹、すべて箱根賽の河原の景色、時の鐘、雨車、山おろし、禪のツトメにて幕明く。

ト爰に甚太、伊勢參りの姿にて、菅笠、柄杓、絲立てを脊負ひゐるを、畑右衞門と權九、大卒塔婆の縫ぐるみにて、ぶちのめしてゐる。

甚太　アヽモシ、御免なされませ〳〵。

ト逃げ歩くを、兩人引捕へて

畑右 エヽ、二才め、路銀があらう。早く出せ〳〵。
權九 出さねえと又ぶんのめすぞ。路銀を出して、溫袍を脱ぎやアがれ〳〵。
甚太 イエ〳〵、着る物は脱ぎませうが、路銀は決してござりませぬ。御免なさりませ〳〵。
畑右 よく嘘を云ふ奴だ。路銀を出さねえと、又うぬを、カウ〳〵〳〵、ぶんのめすワ。
甚太 モシ〳〵、路銀は持ちませぬよ。
兩人 エヽ、イケ情の強い。斯うするワ〳〵。

ト ぶちのめす。甚太苦しみ、ウント倒れる。

畑右 ソレ見たか。くたばつたワ。
權九 慥かに路銀は內懷ろに。

ト兩人立寄り、懷を探し見て

畑右 成る程、此奴は路銀を持たぬ拔け參り。
權九 殘つた物は、同行二人の菅笠に、柄杓に絲立て。
兩人 エヽ、無駄骨を折らしたわえ。
畑右 その代りには賴まれた、先刻の仕事を、爰らに待つて

権九　畑右衛門

畑右　隠れてるべい。

ト捨て鐘になり、甚太が死骸を藪蔭へ打込み、二人ながら藪の中へ隠れる。かすめて禪のツトメ、雨車、捨て鐘。向うより件の行氏、先に提灯を持ち、大藤内、八内附き出で來り、舞臺へ來り、大藤内あたりを見て

大藤　目じるしの石地藏、湖水のあたりに兼ねての一品。コリヤ、下郎ども、流れの淵の、その石を取除けろ。

ト雨車消す。

八内　畏りました……サ、權平、われも手傳へ。この石かな。

ト兩人とも笠をかむりしまゝ、水際の石を捨ぜりふにて、やう〳〵取上げ

へイ〳〵、石を取除けましてござりまする。

大藤　大儀々々。

ト石を取りし跡の水中へ手を入れんとして思ひ入れ。

兩人の下郎、まだ用がある。これへ參れ。

八内　へイ〳〵。

ト何心なく二人の下郎、よき所へ出るを、大藤内、拔討ちに八内を見事に切つて、返す刀に行氏に切りつけるを、行氏立廻つて、有合ふ笠にて受けとめる。この時、菅笠脱げる。大藤内、灯にてキツと見て

大藤　ヤ、下郎といふは

トまた切りつけるを立廻り、合羽脱げ、行氏、脱ぎかけ、襦袢の上へ繩襷の形にて、キツと留め

行氏　こりや何ゆゑの騙し討。

大藤　さてこそ十内。

行氏　小藤太どの、先刻の返報。お主の仇、殊には曾我へ疑ひの、友切丸もこなたの仕業。所持する繪圖面、奴に渡し、劍の在所をこの所で、キリ〳〵云つてしまはつしやい。

トきつとなる。大藤内思ひ入れあつて

大藤　成る程、繪圖は所持すれども、友切丸とは何のたわ言。

行氏　イヽヤ知らぬとは、云はさぬ〳〵。最前御寺で團三郎、我れへ渡せしこの書置。細かにこなたの惡事の荒まし。祐兼彈正賴みに依り、友切丸も廣元の、家に傳はる曉丸の、短刀までも貴樣の仕

業。同腹中の團三が裏切り、命を捨てゝのこの書置。これが證據だ、小藤太どの、友切丸に繪圖面を、添へてお主の仇敵、覺悟極めて、それへ直れ。

トきつと詰め寄る。大藤内思ひ入れあつて

大藤　イヽヤ存ぜぬ劍の行くへ。併し最前云ふ如く、河津は身共が射て落した。それを敵と覘へばとて盛切り奴のわいらと、工藤の執權近江の小藤太、鍛えが違ふワ、刃が立たぬワ。古風な事だが世の譬ひ、金鐵づくりのこの成家、うぬは瘦せ馬、荷かつぎか。

行氏　その廣言を云ふ手間に、誠の武士なら劍の在所、狩場の繪圖を渡した上

大藤　河津の仇は討たれんが、劍の在所は毛頭知らぬ。繪圖は卽ち、コレ爰に。

ト出す。

行氏　ヤ。

ト目を附ける。

大藤　ソレ。

ト投げる。行氏走り寄つて取らんとするを、大藤内抜討ちに切りつける。行氏立廻つて繪圖を奪ひ取り、大藤内をキツと押へ。

行氏　その手ぢやゆかぬ、小藤太成家、動かれるなら動いて見ろ。

大藤　ヤ。

ト振りほどかんとする。行氏、キツと引附け

行氏　下郎ながらも、覺えし手練は

大藤　天晴れ十内、忠義の手の內、感心いたした。

行氏　ヤ。

ト大藤內、小石を投げる思入れ。この時後より竹槍出て、行氏の急所を突く。これにてタヂ〳〵となる。その間に大藤內刎ね返し、行氏を一太刀に切る。行氏、よろぼひ切り拂ふ。藪の蔭より畑右衞門權九現はれ出で、行氏に突いてかゝり、立廻りあつて、よろぼふ行氏を、小藤太、脚にて蹴とばし、キツと見得。これより忍び三重、一つ鉦の念佛、湖水の水音、時の鐘。行氏苦痛の體にて

さては荷擔人隱し置き、騙し討とは卑怯な成家。

大藤　默れ、下郎め。斯ういふ事もあらんかと、あたりに忍ばす荷擔人の、あるとも知らぬうつけ者、くたばる場所も箱根山、この世あの世の境道、屍は直ぐに小地獄の、常念佛か未來の引導。小兒にあらぬ十內が、小石拾つて主の爲、二つ積んでは身の爲と、とこぼえながら湖水なる、賽の河


市川海老蔵
尾上菊五郎

原の土となれ。

行氏 さは知らずしてやみ〳〵と、おのれが非道の刃にて、落命なすとも恨みの一念、團三が渡せしこの書置、これさへあれば劍の在所、曾我の身よりへ、せめてはこれを

ト書置を咬へ立上がり、よろぼふ。畑右衞門、權九、組みつくを、立廻りよろしく、兩人も深手を負つて倒れる。大藤内、後より行氏を切り下げ、稻村の蔭へ倒れるを、大藤内引出し、切り苛み、件の書置を掴みゐるを、大藤内とゞめを刺す。この時件の書置、繪圖面、よき所に吹散りある。大藤内刀を納めて、行氏が白刃を取つて

大藤 役にも立たぬ無駄骨折り。さるにても、所持せし繪圖面、書置を、失うては後日の大事。

ト暗がりにて尋ねる思ひ入れ。この時畑右衞門、櫻九、よろめき這ひ廻つて

畑右 小藤太さま〳〵。アヽ、苦しい〳〵。

權九 助けて下さい。切られた〳〵。

大藤 コリヤヤイ、疵は淺いワ。氣遣ひするな。助ける程に、案じるな〳〵。

ト取附くを介抱して

兩人 助かりますか〳〵。アヽ、死にたくない〳〵。

大藤　さるにても狩場の繪圖面、團三が書置、わいらは知らぬか。

兩人　イヽエ、知りませぬ〳〵。アヽ、苦しい〳〵。助けて下さい〳〵。

ト左右より縋りつく。大藤内思ひ入れあつて

大藤　どうで存命叶はぬ二人、生け置いたなら後日の禍ひ。いつそ二人を

兩人　助けて下さい〳〵。

トよろめくを蹴倒し、二人を重ねて芋刺しに貫き、死骸を蹴飛ばす。この前より甚太、息吹返し、この體を見て、逃げんとしても腰立たず、慄へてゐるを見附け、大藤内、白刃を目先へ突き出す。甚太「ワツ」と云つて逃げんとするを、見事に切る。忍び三重やうの合ひ方。思ひ入れあつて

大藤　心にかゝるはその二品。慥か爰らに

ト矢張り右の合ひ方にて、大藤内、方々尋ぬれども暗きゆゑ、小石を探り取り、拔身を打ちかけ、摺り火打ちにて尋ねる思ひ入れ。この時向うより人聲するゆゑ、キツと見て、思ひ入れあつて小隱れする。時、鐘になり、寺中間一人、山路の弓張り提灯を灯し、この跡より鬼王、以前の形にて出る。次に百姓二人、白木の大ぶりなる獻上櫃、別當の紋附いたるを擔ひ、捨ぜりふにて出て來り

鬼王　さて〳〵、お前方のお庇、大きに助かりました。

百姓　なにサ〳〵、これからは猶石高だから、氣を附けさつしやい。

鬼王　これは大きにお世話でござりまする。

トよろしく本舞臺へ來る。この時、大藤内、ツカ〳〵と出て、先なる提灯を引ツたくり、矢張拔き身にて、物をも云はず尋ねる思ひ入れ。三人見て

三人　イヤア、人殺し〳〵。切つた〳〵。

ト件の櫃をよき所へ直し、三人向うへ逃げて入る。鬼王窺ひ見て

鬼王　おのれ曲者。

トかゝらうとするを見向きもせず、突き廻して肱にて當てる。鬼王「ムウ」とよき所へ倒れる。この時件の櫃より箱王丸、半身現はれ、窺ひゐる。大藤内、右の二品を見附けし思ひ入れにて、舞臺先の書附けに手をかけようとするを、箱王丸、ツカ〳〵と出て、その手を拂ひ、二品を取り、兩人顔見合はせてキツと見得。

大藤　ヤ、おのれは箱王。

箱王　大藤内か。

トこの時鬼王、起上がり、キツとなつて

鬼王　主の仇なる、おのれは近江の

大藤　いかにも小藤太成家だ。狩場の繪圖と團三が書置、友切丸の在所の證據。

鬼王　弟團三が書置か。

箱王　すりや、この品は

ト思ひ入れあつて

當の敵の

大藤　ヤ。

トかゝるを、白刃をもぎ取り、大藤内の首を打ち落す。よき所へ板返しにて出る。血汐、湖水へ入りドロ／＼になり、水中より水氣立ちのぼり、日覆より鍍金の龍現はれる。箱王これをキツと見て、見得、これより小太鼓の樂、大ドロ／＼、思ひ入れあつて

鬼王　お出かしなされた／＼。

箱王　アラ不思議や。時は今、春の初め、殘んの雪も消えやらず、かゝる峨々たる高山の、湖水の海原水けむり、岩をも碎く厚氷、岸に臨んで箱王が、敵の片破れ小藤太の、首討ち落せしその血の滴り、靈地の湖水に入つたるにや、氷を碎いて

鬼王　アレ〳〵、憎しと思ふ小藤太を、首になされた若旦那、お出かしなされた〳〵。

箱王　水氣盛んに立ち昇り、遙かの空に小蛇現はれ飛行なす、その色まさに金色たり。これ正しくこのあたり、天下に名だゝる名劍名器の、隱しあること疑ひなし……アラ〳〵、怪しき事を、見るものぢやなア……何にもせよ、いで箱王が一詮議。

ト早めになり、流れへかゝる。この以前より窺ひし雲哲、後より組みつき

雲哲　下山なしたる箱王丸、流れの中は見せられぬワ。

箱王　エヽ、面倒な。

ト雲哲を毆りのけ、走り寄つて流れの中より、絲立てに卷きし友切丸を引出し、「それを」とかゝる雲哲を踏みつけ、キツと見得。

これぞ正しく御連枝たる、伊豫守義經公、箱根權現へ奉納ありし、源家累代の重寶、友切丸のこの一腰。

雲哲　それを。

トかゝるを足下に踏まへて

箱王　紛失なしたるその砌り、この箱王が下山も同日。さるによつて曾我への疑ひ。今計らずも手に入

りしは、二所權現の加護なるか。アラ〳〵、喜ばしやなア……殊に手に入る狩場の繪圖面、まつたこれなる書き物は、

鬼王　團三が今際に殘せし文言。御披見なされて

雲哲　それ讀まれては

トかゝるを投げのけ、空より月出るを箱王、月あかりに透し見て

箱王　『書置きのこと。拙者主人の勘氣を幸ひ、祐兼彈正に取入り、惡事に與みせし體に見せかけ、友切丸の劍の行くへ、聞き出せしは大藤內、彼奴は以前は近江の小藤太、劍を奪ひ人知れず、隱し置きしに疑ひなし』。

鬼王　酒湯の濟んだ鬼王が、そのあらましを義村どのへ。

雲哲　その書置を

トかゝるを引附け

箱王　さてこそ劍を隱せしは、彈正、祐兼、彼奴等が計らひ。この書置にて養父の御難儀、再び救ひ奉らん。證據の書置、忠義の團三。これより直ぐに三浦の陣所へ

鬼王　御持參なされて箱王さま。

雲哲　箱王、うぬを。

トかゝるを殴りのけ、キツとなる。この時下座より同宿大勢、鉢卷、弓張り、六尺棒を持ち、バラバラと出て來て

同一　箱王見附けた。

皆々　動くな。

鬼王　ヤア、うぬらは箱根の芋堀りめら、芋堀り坊主がてんぐに、六尺棒を振り廻すと、節分過ぎの鬼王が、坊主頭へ鹽花かけ、一々おれが食つてしまふぞ。

同一　ヤア、洒落くさい世迷言、寺より使ひの釣り臺に

同二　隱れて逃げゆく箱王丸、別當樣へ引いてゆく。

皆々　動くな。

箱王　ヤア、小癪なる賣僧めら、邪魔立てすると片ツ端、この湖水へ投げこむが、道を開いて通すまいか。

雲哲　疑ひかゝつた荒若衆。いづれも寄つて、合點か。

皆々　箱王、動くな。

箱王　これから坊主の曲手毬。片ッ端から、來い〳〵〳〵。

ト曲撥になり、皆々かゝるを、箱王一々に撥りのけ、大立廻りになる。この時向うより四つ手駕籠一挺、垂れを下ろし、掛け聲にて走り來り、この中へ交り、あちこちと突き廻される。駕籠の中より祐成、着流し、一本差し、襟巻きしたる形にて、醉ひたるまゝにころげ出る。これに構はず箱王丸、大勢と立廻り、皆々叶はず、下座へ逃げて入る。箱王丸、祐成を曲者と心得、襟髪摑んで引立てる。祐成、一向他愛なき思ひ入れ。箱王、鬼王、顏を見て

鬼王　あなたは祐成さま。

箱王　ヤ、こなたは兄貴。

祐成　何ぢや〳〵。兄貴といふは、どうやら聲が

箱王　箱王丸サ。

祐成　アヽ、箱王丸か。其方も初買ひか。こりや珍らしい〳〵。

箱王　エヽ、何を云はつしやる。コレ〳〵兄貴、團三郎が書置にて、劍の行くへも

祐成　平馬の允が虎を身請けの相談が、アヽ氣にかゝつて

ト夢中にて他愛なき事を云ふ。

箱王　エヽ〱、こなたは例の醉どれか。コレ、友切丸が手に入つた。
祐成　友切よりは、蕎麥きりを云ひつけようか。
箱王　エヽ、小ぢれつたい……これさへあれば疑ひも
祐成　わしが心を疑ふか。エヽ、畜生め〱。
箱王　矢ツ張り寢言か。コレ、家來十內、團三まで、命を捨てゝ
祐成　心中したか。
鬼王　これは厄體。
箱王　この繪圖面が
祐成　アヽ細見か。改まつたか。
箱王　イヽヤ狩場の
雲折　その繪圖面を

トかゝるをキツと引附け

箱王　性根を附けて、コレ兄貴。
祐成　性根は誰れぢや。

雲哲　それを。

ト か ゝ る を、箱王摑んで

箱王　エヽ、こなたはなう。

ト力む。これにて雲哲、血を吐いて苦しむ。箱王丸ムツとして

兄貴の酒も

ト投げる。雲哲見事にかへる。木の頭。祐成チョンと手を打ち

祐成　水一つたも。

トこれをキザミ、鬼王、伊勢參りの柄杓へ水を汲み、祐成へ差出す。祐成「エヽイ」と醉醒めの模樣にて、横に寢る。箱王丸「チエヽ」と握りつめる。キザミよろしく、ひやうし

幕

第一番目　大詰

箱根矢立の杉夢の場
觀音堂雨宿りの場
相模橋對面の場

淨瑠璃　大磯の遊婦 粧坂の伶男『心情語而御神樂』　常盤津連中

役名――工藤左衛門祐經。曾我十郎祐成。小林の朝比奈。宇佐美彌太夫。久須美七郎俊次。梶原平次。瞽女明石實は景清娘、人丸姫。絲屋女房、お房。六三云ひ號け、お園。大磯の虎。化粧坂少將。曾我五郎時致。

本舞臺、三間の間、正面一ぱいの段幕、左右の大柱に紅白梅の立ち樹、日覆より吊り枝、舞臺先、土手板に春草あしらひ、隨分見事によろしく、下の方いつもの草土手、常磐津連中居並び、薄ドロ〳〵にて幕明く。

ト直ぐに舞臺前雨落ちより、誂らへ、心といふ字を段幕の中へ引いて取り、ドロ〳〵打上げる。下座より頭取出て、淨瑠璃名題役人口上觸れあつて、前彈きにかゝる。

〽天照す、岩戸の昔千早ふる、神樂乙女の舞ひの袖、莊子の蝶の夢かとよ、時枝おきて月の色

ト大拍子、チヤツパ入り、眞の神樂やうの鳴り物に人寄せやうの三味線をあしらひたる、賑やかなる合ひ方にて、段幕を切つて落す。向う一面の黒幕、眞中に注連引張りたる大木の矢立の杉、この左右

上下ともに幕串を打ち、これに誂らへの緞子幕よろしく、この前に高札。杉の洞の前に高さ五尺ほどなる山なりの立て石、これに虎ケ石と記し、この前に時致(前幕の箱王丸)角鬘、羽織衣裳、大小、この石に手をかけたる手力雄の見得。上の方に少將、着流しの上へ誂らへの千早を引掛け、練りの帽子をかむり、右の手に七五三の鈴、左にお福の面を携へたる鈿女命のこしらへ。下の方に朝比奈、猿隈、鎌髭、上に白張を引かけ、大きなる榊の枝に鼻高の面の鳥兜を附けたるを杖に、猿田彦の模樣、すべて岩戸開きの見得よろしく、舞臺先よき所まで押出す。

〽久方の天の戸明くる初空も、東より立つ春は宵に、歌舞伎の色や江戸の花、花相似たる年年も、曾我も三升の戀男、かの香久山の榊より、手にある顏の父の仇、共に天性武勇の氣性得物欲しさよ猿隈も、三筋足らざる役廻り、おほつか名代の髭奴、打つやしはかきしとゝんまかせてヤレ面白や、鈿女の神の薄化粧、化粧榊の品者か、科戸の風に八重雲の、惡魔を拂ふ神事は、岩戸の前に長鳴き鳥の、長き世かけて俳優の、鏡となれや情も戀も、敎へは神の氏子等が、歌舞の伎樂のいろ／＼を、奏する振りの袖几帳、姿なまめく小夜神樂。

ト三人振りよろしく、少將、始終時致の側へ寄りたき思ひ入れにて、この時ちやつと寄らうとする。

時致 エヽ、びらしやらと、退きやアがれ。女嫌ひの時致に、馴れ／＼しい、わりやアどこから來た。

少將　あれ見やしやんせ小林さん、矢ッ張りいつもの、けん〳〵ほろゝ。
朝比　ほんに野暮だぞ。コレ兄イ、女嫌ひも不具のうち。おれも同じ仲間だが、二つ取りなら劍菱か、四方の赤ならお辭儀はない。色戀を髭に取持てとは。一方ならぬ神の告げ、ソレそのいはく因緣を。
少將　云うたら結句、腹立つて
朝比　ハテ、小林が扣へてゐる。臆面なしに、くぜりなさい。
〽それ見やしやんせ其やうに、怖い顏すりや六月と、思ひ參らせ候べく候に遣り羽子の、一夜二夜は泣いても明かす、百夜積れば深草の、こがるゝ緣か名も同じ〽內儀少將六根清淨高間が原に神ばかり、しどけなさんす氣は中臣の〽あれ聞かしやんせ御託宣、神も女夫のあればこそ、うまし男のみことのり、可愛らしいぢやないかいな、オットそれこそ出雲の緣の、叶ふ結びか總角や、とんどと鳴るは瀧野屋に、よう成田屋と上げる團扇の花角力、行司に依估は無かりける。
時致　なんだ小林、おぬしも共に時致をなじるその腮。髯松明をひんもぐぞよ。
朝比　おやッかな。にしやアおれを烏猫だと思ふかえ。腕づくよりやア深切づく。髭が贔屓の曾我殿原

悪い意見は云はぬわやい。

少將　ほんに日頃を知りながら、愛想もすげない憎て口。

時致　イヽヤ、われにも油斷はならぬ。爰は箱根の矢立の杉。變つた所に虎ヶ石……エヽ、讀めた。石に立つ矢も虎と見て、念力通す父の仇、洞の内には祐經めが、何か巧みの呪咀調伏つ いで時致がたつた今。

ト行かうとする。朝比奈、小將、立廻つてよろしく留め

朝比　兄イ待て、そりやアおぬしが廻り氣だ。よし何事のあるにもせよ、兄祐成がその外には

少將　微塵も動かぬ虎さんの、誓ひに立てし矢立の杉。

時致　ムウ、面白い。念力の誓ひは同じ父の仇、須彌蒼海はいざ知らず、いざと思はゞ時致が、父に及ばぬ事あらんや。

朝比　そんならおぬしは、あの石を

時致　おんでもない事、いま目前。

少將　叶はぬ戀も虎さんに、劣らうものか、わたしが願ひ。

時致　妨げひろぐな、うつとしい。天の岩戸も金剛力。

朝比　物の見事に手力雄。

時致　力試しを時致が、ドリヤ。

ト大太鼓入りの合ひ方にて、時致、石の許に立ちかゝる。

〽目よりも高く、撞と地響き戸隱れの、昔もかくや閨のひま。

ト時致よろしく石を取つて投げる。

〽つれなく見えし別れ路を、霜踏む辻に立君の、その夜は寒し村千鳥　〽幾夜寢卷の其まゝに、よそのきぬ〴〵しどけなき。

ト按摩の笛、迷子の太鼓になり、杉の洞より詠成、上へ折助の紺看板、帶じだらくに、手拭を鼻の先へかむり、脇差と草履を一緒に掴み、片手に帶を曳きながら出る。跡より虎、黑の衣裳やつし、白地の帶、夜鷹のこしらへ、手拭をかむり、山下駄を穿き、寢莚を抱へ、追ひかけ出で來り、兩人思はず舞臺の三人を見て、術なきこなしにて見得よくとまる。

〽春の柳の小夜風吹けば、拗ねて招くはこれもんし、寄つて行きなよお屋敷さん、待つ夜つもりし雪の朝、わしが思ひは仙臺河岸の、立てし矢來のやるせなき、親方さんのねすり言、聞くも苦界か流れは同じ、花飾る身の厚化粧、とまり烏に誘はれて、ちんからころりと山下

駄の、音羽屋さんを土手の蔭、二八の行燈に顏隱す、お膳の數もはしたなき、とんだおこりぢやないかいな〳〵オヤ〳〵誰れだと思つたら、お虎の姐えか、こりや我折れ、そんならお客は折助なり、昨夜も口舌で又口舌。醉ッ拂ふならおきなんし。神田からとは可愛けりや、通ひごんつく內田の酒に、醉うた醉た〳〵他人を交ぜず、おらが理窟は川留めか、紋日買ふとて精出した、草鞋に隙の內證を、知つてゐながら畜類め、ひぞり拗ね言、臑からひだこ、奴凧なら春の日に、のろけ顏してどこまでも、たまにお出でも初手のうち、枕も床も破れ蓆一枚敷きの三ツ蒲團、それが命であろぞいの。

朝比　エヽコレ祐成、ぬしも曾我の祐信どのゝ、若殿樣でありながら、吉田町の洒落はあやまるなう。

祐成　これは小林の御挨拶。御存じの曾我は、御家老にも沓箱持ちにも、鬼王兄弟の外に人使ひもないもの。ところへ火急の用事で母者人の

虎　和田さんへのお使ひ、是非もなく

時致　アレ又あんな口のへらぬ。兄貴が中間奉公なら、弟のわしは何にならう。

朝比　これはしたり、おぬしも氣の早い。今日の趣向は祐經に、逢はせてやりたいその願ひ。矢立の杉へ立願に、何をするのも神いさめ。マア、わつさりと一踊り。ドレマア髭から、おッ初めろ〳〵

ト鉢巻をしてこなし。

〽おんどるべい〳〵、おらがお下のおん百姓に聞けば、榮ケ濱で田を植ゑて、一本苅れば千も苅る、二本苅れば數知れず、これも冥加の神いさめ。

ト朝比奈よろしく、此うち祐成は莨盆引寄せ、莨のみながらこれを見てゐて

祐成 イヤ、小林の隱し藝、天晴れ大磯化粧坂の、太皷持なら花どころ。失禮ながら祐成が、氣性を現はす心ばかり。

ト鼻紙を出して、紙花をやらうとする。

時致 エヽコレ兄貴、廓通ひもよい加減に。十八年の大事の願ひ。

祐成 サア〳〵、急きやるも尤もぢやが、思ふお敵を討つて取る、祕事はまツその傳授事、祐成は空んじ置いたれど、その荒氣では、其方はまだ〳〵。

虎 餘ツほど鍛練、稽古事せにやゆかぬわいなア。

時致 なんだ。敵を討つに、別に稽古がいりまするか。

祐成 ハテ、大切な傳授事。口では云はれぬ。大事の祕書。肌身離さず祐成が、これこの通り所持してゐる。

ト懐中より袱紗包みの一巻を出す。時致取つて

時致　アヽ、これか。

祐成　いかなる深き隱れ家の、寢間帳臺にも忍び入り、本望とげる大事の手事。

時致　ハテ、好い物が手に入りましたなう。

ト思ひ入れあつて開き、

なんだ……「そも〳〵天地開けてより」……大分小むづかしい事を書いたものだ。

ト繰りひろげ、ムツと思ひ入れあつて

エヽ、馬鹿らしい。薄ツ穢れた。こりやこなたまで時致を、鼻ツ垂らしと思ふのか。勝手にさつしやい。業晒しめ。

ト祐成へ投げつけ

ドレ、まん直しに酒でも飲んで、祐經めが首を引ツこぬく、めでたい思案をしてくれべい。

ト合ひ方になり

朝比　コレヤイ兄イ、氣の短かい……とは云ふものゝ祐成、おぬしもあんまりだ、一人呑み込んでゐずと、話したく。

祐成　不躾ながら小林も、お敵へ向ふ祕事口傳、よも御存じはあるまいの。

朝比　知れた事、どうしておらが。

祐成　さらば繪解きをお目にかけう。相手は幸ひ虎、少將。

虎　エヽ、滅相な、何をマア。

祐成　初心ぶらずと、來やいなう。

ト虎の手を取つてこなし。

〽もどかしな、迷子となればそれ者でも、色にやあまへて道芝の、露忘られぬ心から、笑はれ草の情立つて、やつれし影をのべ鏡、口紅ついてそしてから、のべの幾重の恥かしい、身仕舞ひ部屋でそしらるゝ〽くつさめ一つ風ひいた、ぞつと寒氣を好い機に、又寢の床の置き炬燵、顏にほつれの髮撫でゝ、つぎ穗のなさに長煙管、取る間うるさきいたづらな、手事手管の無理云うて、泣かせ足らぬは男の癖か、エヽ憎らしい餘所の文、これ見よがしは何ぢやいなア、裂いてあてがふまくら紙、吹きちる酒の泡消えて、お燗直しに裏階子、たいこ女郎が口舌の加勢、受けつ流しつ中とつて、主に道理をつけ出しの、跡は屏風の幕切つて、首尾を紛らす忍び駒。

祐成　忍び編笠なんのその、一寸先は闇の夜に

虎　飲めば嬉しい玉子酒。話しは長い、サアござんせ。

〽サアござんせと手を取つて、逢ふ夜嬉しき虎が雨、濡れのふしどに入りにける。

ト祐成、虎、緞子幕の中へ入る。時致思ひ入れあつて

時致　チエヽ、情ない放蕩惰弱。もう兄貴にやア構はない。祐經が館へ踏んごんで、日頃の本望。オヽ、さうだ。

ト行かうとするを、朝比奈、少將、よろしくとめ

朝比　ヤレ待て兄イ、早まるな。兄弟一緒に云ひ合せ、今またおぬしが只一人、なんぼかまはぬお株でも、まんざら見てもゐられまい。

少將　わたしも木遣りでやつてくりよ。

〽ヤアレナア、銀の簪伊達には差さぬ、よい〳〵、切りし前髪、なんで櫛を横に差す、ゐんやらえ、よいさア、よいやな、とても留めるなら拍子にかゝつてやつてくりよ　〽かの山寺の大寺の、アンレトエイ〳〵、鐘撞木が生木で、コレハエイ〳〵、突く度毎にエヽトン、ゐんや〳〵、あれさのサアよいとな　〽宵の口舌のまだ覺めぬ、もつれは酒の科ならで、ぬし

の癇癪ォヽ怖や。

朝比　エヽ〳〵、うぢ〳〵と、退け〳〵。そんな事ぢやァ及びもない。それよりおぬしやア、ソレ。

ト幕の内な顔にて敎へる。

幕を切るのは拍子もの。合圖の拍子木、合點か。

〽やつちやまかせろ日頃の氣質、髭に預けて幕の内、必ずやいのと待合ひの、辻褄合せ走り行く。

ト少將よろしくあつて幕の内へ入る。

〽跡は左右にあうんの仁王、睨み立つたる力士腰、抱いてとめさのそれをこそほんに、とめてよいのは福の神、めでたくかしこは文のとめ、やつさもつさ、髭小林の淺漬澤庵、押しの重たい腕自慢、ならば手柄に鎧蝶、草摺ならで三階菱に、蔦の色よき江戸紫の、引く手數多をゆかりの色に。あやかりものに曳け〳〵〳〵〽曳くは子の日の姫小松、皐月のあやめ花車御贔屓舞臺葺屋町、春は福引棧敷も土間も、引連れ〳〵人の山、富士の裾野に兄弟が、やがて譽を武のいさほし、延喜もよしや強者の、竹馬の交はり初夢の、あり〳〵爰に日ざましき春の勇みぞゆゝしけれ。

ト文句一ぱいに朝比奈、時致、草摺引の振りよろしく、引張りの見得。段切れ。ドロ〳〵にて、よろしく道具かはる。

本舞臺、三間の間、正面藁葺き、椽側附きの辻堂、白布の戸張、これに、、、觀音堂と記し、上下に杉の大樹、吊り枝、、、、、鶴ケ峯神領と記せし傍示杭。よき所に杉の葉にて拵へたる厄神送りの輿、青竹を返したるを捨てあり、軒口に前幕の伊勢參りの菅笠吊しあり、所々に稻村。雷の音、雨車にて道具納まる。

ト椽の上に人丸姫、手拭にて頭を包み、田舍染めのやつし、裾をからげ、風呂敷に包みし三味線を横に脊負ひ、、、、、、、日向の國宮崎と書きし菅笠を置き、杖にすがり、雨舍りの體にて、お園、上代染めの振り袖、やつし脚絆、手甲、高からげ、順禮の葛籠を脊負ひ、、、、、、、因幡の國淸美郡島内村同行二人と記せし菅笠をかざし、笈摺なしの順禮の體にて、椽に腰をかけ、お房、世話女房、前帶、旅形にて、藤倉草履を紙にて包み、染分けの風呂敷、隅に、、、、、、江戸兩國絲屋ふさと記しあるを頭へかむり、俄の夕立、雨舍りの見得。道具とまると、知らせにつき、朧の月出かゝる。直ぐに馬士唄の合ひ方。三人思ひ入れあつて

人丸　ヤレ〳〵、恐ろしやく。時ならぬお雷。アヽ、どうやら遠くへお出での樣子。

その　怖さに駈けこむこのお堂、見れば觀音堂とある。雨をやめるも順禮の、札打つ一德。これも薩埵の御利益にて

ふさ　雨の舍りにわたしらも、委細かまはず緣先へ、挨拶なしに不遠慮な。モシ、御免なさりませい。

その　ハイ、そりやお互ひでござりますわいなア。

トこの聲を聞いて、人丸姫思ひ入れあつて

人丸　アヽ、そんならわたしばかりが、雨やみいたすと思うたら、また外に女中さんがござりまするかえ。これはしたり、わたしとした事が。ホヽ、ヽヽ。

ふさ　アヽ、そんならお前はわたしらが、爰へ駈けこんで、雨やみするを知らずかえ。

人丸　どうしてそれが知れませう。わたしや御覽じませ、目の見えぬ生れ。只今のお雷さんにて、瞽女も淺黃に目を開いたと思はれまする。ホヽヽ、ヽヽ。

その　アヽ、そんならお前は瞽女さんかえ。

人丸　ハイ、左樣でござりまする。

その　殊に見ますれば、その笠に、日向の國宮崎とござりまするが、ハテマア、遠い國から

人丸　三味を彈きく、どうやら斯うやら

ふさ　ほんに、さう仰しやれば、お前の笠には、因幡の國清美郡の、島內村とは、そりや遠いお國でござんすなう。

その　ハイ、順禮いたして廻りますわいなア。

人丸　ハテマア、それはお氣の毒な。して、此方のお女中樣は、御近所のお方樣かえ。

ふさ　イエく、左樣ぢやなけれど、これから大方十四五里、花のお江戶で盛り場の、兩國と申す所、その近所の者でござりまする。梅澤の吾妻權現樣へ、願掛けに參りますわいなア。

その　エヽ、そんならお江戶のお方かえ。道理こそお髮の風が、一際目立つ東のお方。

人丸　そのマアお江戶の兩國橋、賑やかな事さうなが、早う參つてわたしも見たうござります……オヤオヤ、わたしや目も無い癖に。ホヽヽヽ。して、お前さん方は、濡れはなさんせぬかえ。

ふさ　イヽモウ、濡れたともく、このマア形を見せたうござんす。

その　わたしも嗜みの桐油、出す間もない夕立、どこもかしこも濡れ鼠。

人丸　モシく、爰に火打ちがござんす。お前さん方、落葉を集めて、焚火をなさんせぬか。

ふさ　さうしやんせう。爰に幸ひ稻村の、藁を集めて

ト藁を取つて來り、よき程に仕掛け

その　コレ〳〵、爰に厄神送りの葉越しの青竹も、くべて煙りと

ト杉の葉を取つて青竹をくべる。お房、人丸姫の火打を借りて打ちつけ、煙草を藁の中に入れて振り廻し、二人捨ぜりふにて焚きつける。人丸姫、緣の上よりこれを見て

人丸　こりや有り難い。お前方のお庇で、わたしも好い目にあひますわいなア。

ト焚き火にあたる。

その　して、お前さんは、お一人かえ。

ふさ　イエ〳〵、わたしは連れもあり、子供を連れて合ひ輿の、駕籠の來るまで待ちあひを、連れ立つて參りまする。

その　そんなら雨の晴れるまで、江戸のお前と

人丸　遠い因幡の順禮さん。

ふさ　國の果てなる日向の瞽女さん。

人丸　ゆるりとあたつて

三人　話さうかいなア。

ト焚き火にあたる。替つた合ひ方になり、風の音して、小蝶二羽飛んで來り、をちこちして、人丸姫の周圍を舞うてあるき、肩へとまる。兩人目を附けて、こなし。

その　それ〳〵、小蝶が寒いのに舞うてあるいて

ふさ　お前の肩へ羽を休め、とまつてぢやぞえ。

人丸　エ、アノ小蝶が舞うて、わたしの肩へ。

その　それ〳〵、とまつてゐるわいなア。

ト人丸姫思ひ入れあつて

人丸　まだ解けやらぬ殘んの雪、地中にひそむ蟲けらの、殊に小蝶の飛びめぐり、焚き火につれて來りしか。又は所持する青葉の名笛。

兩人　エ。

ト人丸姫、懷中を押へる。

ふさ　二羽の小蝶の女夫づれ、それに引替へ邪慳な連合ひ。

人丸　連れそふものは影ばかり、今は世に落ち田舍瞽女。

その　云ひ號けとはいふものゝ、お顏も知らぬ我が夫は、東の空と聞くばかり。

人丸　聞けば似寄りのそのお詞、お恥かしながこの瞽女と、親の許せしお方はつらく、嶮しき山の箱根
寺、御經讀誦の稚兒とのみ。

ふさ　そんならお前も、男を尋ねて

人丸　目かいも見えぬ長旅と

その　殿御ゆかしと順禮の

ふさ　話して見ればそれ〲に

人丸　男を思ふわたしらは

その　狂ふ小蝶に劣りたる

ふさ　緣遠い身で

三人　ござんすなア。

トこの時蝶は人丸姫の顏のあたりを舞ふ。

人丸　アヽ、また顏へ蝶が來てやら。

ト杖にて拂ふ。件の小蝶、ドロ〲にて、舞うてあるきながら戸張の內へ入る。

園房　ヤ、今の小蝶が戸張の內へ。

ト縁へ上がり、内を窺ふ。戸張をキリ〳〵と巻きあげる。内に時致、好みの形、伊勢參りの拵らへ、友切丸を絲立てに包み脊負ひ、眠りゐる體。矢張り薄ドロ〳〵。二人は目を附け、

ふさ　ヤ、内にはお伊勢參りのお方か。

人丸　エ、まだ合ひ客がござんすかえ。

その　しかも前振り、お若衆さん。

人丸　アノ、お若衆さんが。

その　寢てゐなさんす……モシ、お若衆さん〳〵。

ト兩方より搖る。薄ドロ〳〵やむ。時致キット見開き

時致　ヤヽヽ、虎少將か。して、兄者人祐成どのは。コレ朝比奈、皆の行くへは。

ト夢心地にてあたりを尋ねる。人丸姫聞いて思ひ入れ。二人は何心なく

ふさ　これはしたり、わたしらは、虎でも猪でもござんせぬ。

その　蝶々は來たけれど、少將とやら何とやら

兩人　雨舍りした、旅人ぢやわいなァ。

トこれにて時致、思ひ入れあって

時致　アヽ、さては夢にてあつたるか。夢は五臓の煩ひにて、胸に忘れぬ彼の念願。心の勞れか心氣の衰へ。ハテ、思はざる今の初夢。

トきつとなる。人丸姫思ひ入れあつて

人丸　そんならお前は旅寢の夢、お伊勢參りのお方かえ。

時致　軒に吊した菅笠の、この目じるしの伊勢參り。

ト吊せし笠を取つて差出す。

その　モシ、ぬしは瞽女ぢやぞえ。

時致　アヽ、盲目でござるか。

人丸　アイ、兩眼持てど情ない、遠い日向にありながら、世界を照らす日の影も、見えぬながらも夫を慕うて。

時致　アヽ、見えぬながらも色氣はある。コレ、瞽女の坊、按摩が成るか。

人丸　ならいでかいなア。目の見えぬ身は按摩が生業。揉んであげうかえ。

時致　そりやア有り難い。この伊勢參りが、張つた肩を

人丸　日向のわたしが和らげる。これが誠に伊勢日向。

ト時致の肩を揉む思ひ入れ。

その　寢物語りは美濃近江。

ふさ　大和に成田は下總の

時致　不動の御利益、まだ外に、鼾のするは。

ト女形三人聞き耳立て

三人　オヽ怖。

時致　狼かえ。

三人　エヽ。

時致　イヽヤ坊樣、破れた衣。あの佛前に大鼾。

その　焚き火へ寄つてわたしらは

ふさ　この濡れ形を

二人　干さうかいなア。

ト田舍めいたる合ひ方になり、人丸、時致の肩を揉む。二人は焚き火へかゝり、青竹をくべて火を燃す事

ふさ　モシ〳〵、因幡の女中さん、お前も札所はかこつけに、今の話しの男の行くへを。

その　アイ、尋ねて廻る札打ちの、わたしは幼ない時分から、親の許せし云ひ號け。因幡の御家中、立派な武家方。お顔は知らねど人さんの、噂ばかりを樂しみに、祝言するを待つうちに

ふさ　男の心と秋の空、駕籠の飛び乘り、日待ちの履き物。

時致　變り易いといふ事か。

ふさ　こりやよう當つた。

時致　なんと奇妙か。

人丸　妙々々。

ト思はず時致の頭を撫る。

時致　エヽ、何をする。

人丸　して、その跡は、どうぢやえ〳〵。

その　サア、聞いて下さんせ。そのお方が江戸のお屋敷勤番のうち、奥の女中に色が出來、その名は樒かにとしさんとやら、それから國へは音信不通。惡性な男でござりますわいなア。

時致　話しの樣子は先は武士、男ゆゑには江戸三界、尋ね廻るか。

人丸　エヽ、畜生め。

ト時致をきつく揉む。

その　この風呂敷のしるしには、絲屋ふさとはあなたかえ。

ふさ　アイ、以前は江戸の本町に、絲屋生業その娘、今は僅かな絲ばかりを、女商人しみたれ女房。實の妹がござんすが、小さい時に別れたまゝ、江戸の住所は今日爰に、居たと思へばもう店越し、世にある時はわたしらも、男えらみと同町の、お方を無理に聟に取り、その人ゆゑに家藏も、地面地屋敷みな失ひ、かゝらう島もなけれども、爰が女の辛抱と、守つてゐても、この頃は、深川女郎に色が出來、無けなしの物を掻き集め、女房が簪、櫛笄、みな池田屋へ七難卽滅。

人丸　エヽ、聞いても腹の立つ話し。そのマア男を、わたしなら

ト時致をきつく揉む。

時致　アヽコレ、どうする〳〵。

ふさ　それゆゑわたしは五年跡、捨て子を拾うてその子を養育、末はその子を樂しみに、今では以前の男より、その子が一しほわたしには

その　生さぬその子がお前のお便り。

時致　子で子にあらぬその子さへ、戀しと思ふは世の習ひ。


大詰



人丸　その恩愛は親と子の
時致　父をやみ〳〵討たれたる
人丸　お顏も知らぬ養父の仇。
時致　遺恨重なる
人丸　年月は
時致　安元二年神無月。
人丸　壽永の秋の風立つて
その　須磨の浦風あとになし
ふさ　通ふ千鳥の一群れは
人丸　群れ高松に群れ入る鷗、雪と見まがふ源氏の指し物。
時致　さしも名高き勇士だに、騙すに無念や赤澤山。
その　椎の木小楯のその噂、それは餘所事わたしとて、結ぶ妹脊の仲なるに
ふさ　外を內との男より、憂を忘るゝ憂晴らし。
時致　宇佐美久須美や河津の莊、三ケの莊の主だに、今は浮世の日陰者。

人丸　日向勾當盲目の、身は賤しくも景清き
その　思ふ男と添臥しの、夜はほの〴〵と明石潟。
ふさ　朝霧分けて女子の身、島がくれゆく商ひの
その　それは播磨路、柿の下。
人丸　人丸姫と名乗る證據は
　　ト懷中より袱紗包みの青葉の笛を出し、後より時致の懷中へ入れる。時致思ひ入れあつて
時致　心あり氣な
　　ト笛を見て
　　こりやコレ青葉の
人丸　アヽモシ、云ひ約束の御方と、察せしゆゑにその笛を、證據になして互ひの實名。
時致　夫を尋ねてはる〴〵と
その　さまよふ心を露ほども
ふさ　知らぬ男は惡性者。
その　顏は知らねど云ひ號け。

時致　知らぬながらも親々の、契約ありし證據の笛竹。

人丸　アヽモシ。笛を持つたる按摩の證據。

女二　御緣もあらば

時致　そろ〳〵ござれ。

人丸　お二人樣。

女二　早う泊りへ。

　　　トこの時向う東の方にて

大勢　ハイホウ。

　　　ト人聲する。皆々思ひ入れ。

その　向うに見えるは數多の提灯。

ふさ　紋はどうやら

　　　トよく〳〵見て

　　庵に木瓜。

時致　ヤ。

ト思ひ入れ。時致スックと立つて

工藤左衛門

人丸　祐經どのゝ

ト時致、絲立ての中なる友切丸、人丸姫は脊負ひし三味線の仕込みを取つて、初めて目を明き、キッとなる。時致見て

時致　盲目ならぬ女が兩眼。

人丸　舅の敵その上に、一門方の仇なる源氏の

時致　祐經、おのれ。

ト立ちかゝる。奥の方より朝比奈、件の形の上へ淺黄の投げ頭巾、墨衣にて、ツカ〱と出て、時致を見て

朝比　さう云ふわれは時致か。

人丸　さてこそ我が夫。

時致　云ひ號けせし

朝比　おぬしが女房、今は日蔭の

時致　人丸姫か。

人丸　箱王さん、年月こがれて。モシ

ト時致に寄りそふ。この途端に焚き火の中なる青竹の節に火移り、節音高く火はパッと立ち、お房の顔へ刎れる。「ワッ」と云うて耳へ指をさしこみ、お園介抱する。時致、向うへ思ひ入れ。朝比奈押へて

朝比　この小林は

時致　ヤ。

朝比　仲人だワ。

トこの見得、双盤にて、道具まはる、

片シヤギリにて、右の道具廻るに隨ひ、東の方より草土手附きの板松を引出す。後は黒幕、道具納まる。知らせあつて、向う中の間通り、東の桟敷の上より花道留場の際まで掛けたる大きな橋を高欄ともにせり上げる。尤も馬入川、相模橋の景色。道具とまると、知らせあつて、行列三重。下り葉になる東の桟敷より、紺看板の中間二人、庵に木瓜の箱提灯を持ち、二行に並び、「ハイホウ」の掛け聲にて

出る。同じく二行に並び、中間二人、紺看板にて、庵に木瓜の金紋附きの先箱を擔ぎ、行列を振り出す。續いて麻上下の侍ひ二人、股立にて出る。次に二人、同じく麻上下。次に紺看板の中間二人、好みの二本道具。この人數花道中程まで行く。爰にて知らせあつて、舞臺の道具、西の方へ引いて取る。また知らせあつて、黒幕切つて落す。向う一面に打抜き、奥深に山組み、石段、額を掛けたる石の鳥居、神木、石燈籠、左右廻廊。すべて八幡村、鶴ヶ峯八幡の景色、結構に仕立て、道具納まる。上の方より時致、人丸姫、朝比奈附き出て來り、行列を見てキッと思ひ入れ。朝比奈制して囁き合ひ、東の花道中程へ來り窺ひゐる。中間二人、庵に木瓜の箱提灯を持ち、二行に並び出る。侍ひ一人、上下股立ちにて、袋入りの打ち物を擔ぎ、同じく侍ひ二人、麻上下にて附添ひ、中間二人、庵に木瓜の箱提灯。つゞいて陸尺六人、誂らへの挾み手拭、結構なる乘り物を擔ぎ、内に祐經、烏帽子直垂、大紋の下にて乘りゐる、次に宇佐美彌太夫、白髪かづら、かちんの上下にて、大小、高股立ち。久須美七郎俊次、同じ色の上下衣裳、祐經の刀を持ち、中間長柄の傘を持ち、草履取り一人、簑箱持ち、茶道一人、中間二人は茶辨當を擔ぎ、次に馬丁二人、結構なる飾り馬の口を取り馬柄杓を持ちし中間、沓箱持ちの中間、これより定紋にて挾み箱三人、合羽籠二人、次に押への侍ひ二人、ぶッ裂き羽織、袴大小、弓張りを持ち、ズッと跡より梶原平次、中間の形、下座敷を擔ぎ、

この人數皆々本舞臺へ來る。よき所にて時致、勢ひ込んで駈け來る。人丸姫、朝比奈さゝへて舞臺へ來り

時致　この同勢は左衞門祐經、乘り物待て。

ト飛びかゝらんとする。

皆々　狼藉もの〳〵。

ト立騷ぐ。宇佐美、久須美、乘り物を圍つて

宇佐　ヤア、心得ぬ素丁稚め、主人左衞門祐經さまと、聞いて狼藉ひろぐのか。

久須　身の程知らぬ慮外緩怠。いづれも彼れらを召捕りめされい。

皆々　動くな。

ト皆々立ちかゝる。

朝比　やかましいワ、耄碌めら、うぬらはおれを知らないか、和田の三男髭奴、額に引いた猿隈が、附いてゐるワ。祐經どのゝ乘り物と知つて狼藉、滅多な事は髭がさせぬワ。うぬらも騷がず、お手を突いてゐろ〳〵。

宇佐　さうお云やるは朝比奈さまだな。あなたは格別、怪しいわつぱめ。

久須　狼藉なさば、附添ふ我れ〱。

人丸　イヤ、夜陰の狼藉ならず、仔細ござつて左衛門さまの、御乘り物へお願ひござつて。

時致　願ひも仔細もいるものか。無禮緩怠合點で近寄る某、千人居やうが、うぬらには用はない。駕籠の内なる左衛門祐經、親の敵、勝負なせ。

ト立ちかゝる

朝比　コリヤ、そこを一番、おつこてえろ〱。

宇佐　ヤア、思ひがけなき敵呼はり、御乘り物へ近寄る丁稚め。當時武將のお覺えめでたく、一﨟職を賜はつたる、御主人左衛門祐經さま。斯く云ふ身共はお家の老臣、宇佐美彌太夫。

久須　御近習頭の某は、久須美七郎俊次。願ひとあらば取次ぎくれんが、敵なんぞと狼藉いたせば、臣下の役目。

宇佐　慮外な素丁稚。

兩人　腕まはせ。

ト刀に手をかけキツとなる。この時、乘り物の中にて

祐經　ヤア〱兩人、麁忽いたすな。乘り物立てい。

皆々　ハア、。

　　ト乘り物を立てる。

宇佐　お駕籠間近く叶はねば、キリ〳〵そこを

皆々　下がれえゝ。

時致　ヤ、、なんと。

　　ト對面三重になり、三人思ひ入れあつて花道へ行く。この時祐經、乘り物より出て、悠々と床几にかかる。三人は花道へ住ふ。

皆々　ドツコイ。

祐經　それにお居やるは小林ならずや、外に見馴れぬ男女の兩人。いま乘り物にて樣子を聞けば、この祐經へ見參いたさん一言ゆゑ、何者かと思ひの外、匹夫下郎に等しき體。かゝる姿のわつぱめが、敵呼はり心得ぬ。賤しきわいらに左衞門祐經、敵と云はるゝ覺えない。して汝等は、何者ぢや。

人丸　そのお尋ねにこの身の上　申しあぐるも恥かしき、今は世になき平氏、その人々へ仕へたる、武士の娘の成れの果て。

時致　我れも名乘ればその以前、祐殿伊豆に流れの砌り、赤澤山にて遠矢にあたり、父は落命それよりして、兄も弟も孤子と、世にうとまれし兄弟二人。

朝比　それを贔屓にこの髭が、側にゐるのを云はずとも、跡は其方で御推もじ。狼藉ならぬこの若者、いはば貴公の一家の端くれ。

人丸　賤しきわたしも親々の、云ひ號けせし緣あれば、疑ひもなき舅の仇。

時致　親の敵と速やかに、名乘れや祐經、卑怯な振舞ひ。

祐經　ハテ心得ぬ詞の端。まだその頃は源平と、隔りありし、亂軍の砌りならん、戰ひの最中にて、左樣なる死をとげたりし者ありて、その間違ひにて某を、敵と思ふ輩もあらんが、この身にとつて覺えなき。さりながら、いま朝比奈のお云やつた、一家の端との一言は、仔細もあらん。小林どの。

朝比　そりやァ違はぬ貴殿の御一家、今は疎遠の不仲ゆゑ

祐經　左樣ござらば祐經も、逢うて詳しく承らん。殊に面體覺える爲、予が目通りに近う參れ。

人丸　すりや、お逢ひなさるゝ御所存とな……アレ、お聞きありしかあのお詞。

朝比　心を鎭めて兄イやい、おめず臆せず恥らはず。

人丸　お側へ早う。

朝比　のたくりつん出ろエヽ。

時致　參りますべい〳〵。

人丸　アヽモシ、無禮なきやう。

時致　合點だ。

ト岩戸になり、時致勢ひ込んで立ちかゝるを、人丸姫、朝比奈これを制して、附添ひ舞臺へ行く。皆

皆、アリヤ〳〵の掛け聲よろしく

皆々　ドツコイ。

ト三人きつとなる。祐經思ひ入れあつて

祐經　ハテ、天晴れなる小冠者が振舞ひ。殊には父に遲れたる、兄弟なりとの今の一言、この身に當つて某も、父祐繼に遲れしは、まだ金石の幼年を、思ひ出すも今日の忌日。父尊君の御墓まで、詣ずる路次に同じくも、親に遲れし若者に、逢ふは誠に佛の導き。せめて手向けの

ト思ひ入れあつて

駕籠の內なる香爐をこれへ。

侍ひ　ハッ。

ト乘り物の中より白木の臺に載せし香爐を持ち來り、目通りへ差置く。祐經、懷中より香包みを出し

祐經　くゆらす一炷き。

ト鼓の合ひ方。下座にて

謠〽昔語りはさて置きぬ、さて今跡を吊ひ給ふ。御身はいかなる人やらん。

ト「佛ヶ原」の謠になり、祐經香を炷く。トヒヨの鳴り物、合ひ方、大小入り。日覆より雁金五羽舞ひ來る。三人これを見て

人丸　あの雁金を見るにつけ、雁の便りの浪の上、今はその身も西の空、國の果てとや日向なる。

時致　鳥の羽風に雁金の、五つ連れたる其うちに、一羽は父よ今一羽、側にあるのは母鳥の、殘る三つは子鳥にて、鳥類だにもあの如く、親に離れぬものなるに

朝比　親子も今は散り〴〵に、鳥に劣りし兄弟二人。

時致　この身も今は羽拔け鳥。思へば無念、口惜しい。

トきつとなる。

祐經　我れも九歳のその砌り、親に遲れし年月を、數へて見れば三十三年。
時致　父の最期も今日にて、十八年の天津風。
人丸　一門方の成行きも、二十四年の榮華の夢、覺めて跡なき平家の運命。
祐經　心あり氣な詞の端。して、おことらは何者にて。
朝比　この若者こそ河津の次男。
祐經　兄の一萬成長なし
祐經　祐經どのゝ養子となり、曾我の十郎祐成。
朝比　弟　箱王人となつて
時致　北條どのゝ烏帽子子にて、曾我の五郎時致。
祐經　して又女は由縁あつてか。
人丸　いかにも親ども箱王へ、云ひ號けせしばかりにて、今は日向の勾當と
祐經　さてこそ平家の侍ひ大將。
朝比　その景清が娘の人丸。
時致　兄は廓へ劍の詮議。

朝比　尋ねに通ふ千鳥の名代。

祐經　祐成ならぬ女夫連れ。

時致　盲龜の浮木、優曇華の

人丸　花を愛せし夢ならで

祐經　蝶は時致、千鳥は人丸。

時致　工藤左衞門

人丸　祐經どの。

祐經　ハテ珍らしい

三人　對面ぢやなア。

ト中間かゝるを兩人左右へ見事に投げる。この途端に時致は蝶の肌脱ぎ、人丸は衣裳引拔き、浪に千鳥へ南無觀世音菩薩の文字入りの模樣になる。

皆々　どつこい

時致　親の敵、祐經觀念、

ト立ちかゝるを朝比奈とめて

朝比　そこを一番、おつこてえろ〳〵。
侍一　待て〳〵。最前から見てゐれば、狂人じみた小冠者の
侍二　どこやら形も曾我々々と、貧乏じみたあのしやッ面。
侍三　去年の暮は大雪ゆゑ、いつもより菜が高いから
侍四　青菜の入つたお雑煮を、食つた事がないさうだ。
侍五　ひだるいかしてブル〳〵と、慄へてゐるあの態はえ。
平次　食ふ物が無いならば、大部屋の食ひ残り、もつさう飯でもくれべいに、あのみじめな態を見て、笑へ〳〵。
皆々　アハヽヽヽヽ。
朝比　やかましい、生れ損ないめら。いらざる彌次馬吐かすが最後、いづれも樣の仰しやる通り、罰が當るぞ。
久須　朝比奈さまの御意でござれど、あまりがさつな時致さま。友切丸は紛失にて、御身は未だ日陰の身。
宇佐　養父の祐信、預けの身の上。殊には狩場の惣奉行、その御主人へ狼藉なさば、曾我へのお祟り、

兄祐成も

皆々 同罪だワ。

時致 イヽヤ、失つたる友切丸は、工藤の郎黨小藤太が仕業にて、證據は即ち團三郎、彼れが自筆のこの書置。友切丸も手に入る上は、義村どのへ差出し、養父の御難儀救ふはこの時。友切丸は即ちこれに。

ト件の品々を差出す。

祐經 すりや小藤太が企みにて、盗み隱せし友切丸、時致詮議いたしたとな。

朝比 劍戻らば曾我一門、よもやお咎めござるまい。

祐經 いかにも、友切丸手に入る上は、曾我の疑ひ晴るゝの道理。

朝比 その疑ひが晴れたる上は、絕えて久しき一家の參會。

人丸 對面なされし證據の爲、時致さまへ。

祐經 尤もなるその願ひ。我れも今日祐經が、佛參なさんと來りし路次、遣はすべき品とても、用意なさねど時致へ、云ひ號けの婦人の願ひ。この場に於て何をがな。

ト思ひ入れあつて

幸ひ〳〵。

ト三保神樂になり、駕籠の内より三方に戴せし誂への狩衣を取出し

五郎ヤイ。

時致　なんだ。

祐經　いま祐經が携へしは、物好きしたる予が狩衣、地紋は卽ち右幕下の、笹龍膽の紋散らし、梅松織らせし鎌倉錦、取りも直さず松竹梅、袈裟衣ともなさんずと、持來りしが取あへず、一家の參會二つには、云ひ號けせし人丸へ、今日の祝言島臺に、なぞらへ遣はす左衛門は、一家のはじめ、仲人役。イザ立寄つて、受取れ時致。

時致　受取りますべい〳〵。

ト三保神樂にて、思ひ入れあつて時致近寄つて、件の狩衣を取つて

この狩衣は祐經どの、物好きしたる松竹梅、父の最期の狩衣の、模樣は秋の草づくし、それに替りしこの地紋、三ケの莊に等しき紋柄、おめでたいやら口惜しいやら、時致受納いたしてござる。

祐經　ハテ勇ましき小冠者が振舞ひ。赤澤山の露霜と、消えたる端か祐安の、模樣は秋の七草を、今日の晴れ着と思はずも、最期の砌りさぞかしと。

ト思ひ入れあつて

〽地を去る獸、空をかける翼まで
親子の哀れ知るものを、いかなれば祐經は。

ト思ひ入れあつて

時致　さん候ふ〳〵。親を討たれて無念なか。口惜しいか。

祐經　さもさうず、さもありなん。されども工藤は大々名、見るかげもなき曾我殿原。惣奉行たる祐經は、連るゝ時には千騎二千騎、連れざるとても百騎二百騎。見るもいぶせき素浪人、片腹いたい敵呼はり。及ばぬ事ぢや。叶はぬ事ぢやぞ。

ト此うち時致、無念の思ひ入れあつて、狩衣の三方を摑み碎き

時致　もう料簡が

ト飛びかゝる。朝比奈抱きとめ

朝比　コリヤ、もう一番だ。こてえろ〳〵。

ト祐經キツとこなしあつて

祐經　いま孝心の時致が、勇氣の程を感心なし、大役終るそれまでは、名乘るまじきと思ひしが、健氣に愛でゝ名乘り聞かさん、よつく聞け。

時致　ヤ、なんと。

祐經　過ぎし奥野の狩倉の、折を幸ひ予が家來、近江の小藤太成家に、申しつけしは伊東祐親。それを射損じ誤まつて、河津を射たるは小藤太なれど、予が指圖ゆゑその役目、主を思ふの心底は、予が手をかりて射たるの道理。今こそ名乘る其方が親、河津が敵は斯く申す、工藤左衞門祐經なるワ。

時致　さてこそな。

祐經　名乘り合ふとも今は討たれぬ。時節を待て。

朝比　さはさりながら小藤太が、所持なしありしこの繪圖面、不思議に手に入るその上に、團三が書置二品を、祐經どのへ此方より。

ト繪圖面と書附を渡す。祐經取つて

祐經　いしくも返せし狩場の繪圖面。我れも汝に與へたる、その狩衣は時にとつての、祐經が年玉代り。

時致　晉の豫讓は衣を裂く。それに習つて時致も

人丸　御一門方、舅の仇。

朝比　笹龍膽の紋散らし、恐れ多くも兩人にて

時致　やがて本望。

人丸　まツこの通り。

ト兩方より件の狩衣を二つに引切る。中より二枚の切手落ちる。

兩人　ヤ、こりやコレ狩場の

祐經　サ、切つて本望。

時致　すりや、狩倉の

祐經　コリヤ……兩人、灯。

兩人　ハアヽ。

ト宇佐美久須美は提灯を祐經が前に差つける。思ひ入れあつて

祐經　面見覺えよ、五郎時致。

時致　云ふにや及ぶ。

人丸　あなたの面體。

祐經　見覺えたるか。

時致　おんでもない事。

トきつと見詰める。祐經、中啓にて、左右の提灯を打ちおとす。

字久　これは。

祐經　皐月闇。

時人　ヤア。

祐經　闇はあやなし

朝比　名乘つて通れ。

時致　然らばその時

祐經　裾野で逢はう。

四人　さらば。

時致　これより二番目始まり、左樣に御覽下さりませう。

トかけりになり、皆々引張りよろしく、アリヤ〳〵の聲。庵に木瓜の提灯大分差上げ、賑やかに、一番目めでたく

幕

引附けると呼びあつて打廻し。

第二番目　序幕　本町絲屋の場

役名――絲屋娘、お絲、同下女、お芳。修行者、お園。大工、六三實ハ神原左七郎。絲屋番頭左五兵衞。大黑屋槌右衞門。絲屋後家、お岩。後見役、庄九郎。若林屋五郎八。丁稚、坊太實ハ雲才。若い者、多七。鳶の者。忠八。左官、鐵。手代、伊八。手代、傳助。神原下部、伴助。醫者、百川東林。古鐵買ひ、粟島權兵衞。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、上下土藏の戶前、軒口に紺の暖簾、絲屋と記し、正面納戶口。上の方見世戶棚、下手、絲の入りし抽出しよろしく書おとし、いつもの所に門口。下の方路地口。門口の外に箱看板。すべて絲屋見世の道具。爰に庄九郎、隱居番頭の拵へにて、帳箱にかゝり、帳合ひしてゐる。左五兵衞、通ひ番頭、三建目の役にて、絲枠にかゝり、紐を打つてゐる。伊八、手代にて、絲を卷き、仕出し二三人、絲を買つてゐる。摺り鉦入り、通り神樂にて幕明く。

ト仕出し大勢、捨ぜりふ云つて絲を買ひ入る。直ぐに向うより東林、醫者の形。跡より五郎八、女郎

屋の亭主。傳助、供の者にて出る。跡より六三、道具箱を擔ぎ、忠八、鳶の者。鐵、左官にて、皆々花道にて

東林　コレ六三、只待つてくれ〳〵と云つたとて、いつまで待たれるものか。

六三　カウ、お醫者さん、お前の代物ぢやァあるめえし、大きにお世話だ。お前に待つてくれろと云やアしねえ……モシ親方、お前の方に預かつてゐる色紙は、是非ともわしが買ひますから、どうぞその積りで。

五郎　積りばかりしたところが、此方も掛けの抵當に取つた代物なれど、今ではおれが物も同然。

傳助　左樣サ、百兩が一文缺けても、賣つてはなりませぬ。

六三　アイサ、隨分百兩でもいくらでも、この六三が買ひました。

忠八　コレ六三、蛭子講の商賣ぢやァあるまいし、百兩だの二百兩のと……色紙が欲しけりやァ、紙屋五郎兵衛の所へ行つて、三十二文出して見や、好きなのがあらァ。

六三　馬鹿ァ云やな。そんな安いのぢやァねえ。是非なくつてはならぬ品ゆゑ、百兩でもいくらでも、買はにやァならねえ。

東林　この男は職人の癖に、大層大風な事を云ふ。どうして貴樣達に、百兩といふ金が出來るものか。

愚老が妹の小絲も、深川に勤めをしてるるが、この頃は綱五郎にくッついて居るとの事。男ばかり好くつても、ひッてんな綱五郎に、世話になつてるる貴様だものを、百兩といふ金は、所詮むづかしからう。

六三　この醫者様は、又しても人を見くびるが、天下の極印の打つてある小判だ。誰れの彼れのと、金に主があるものか。世の中の廻り物、出來ねえと堅く云はれた事でもねえ。おれが工面して見せらア。親方、是非々々わしが買ひまするよ。

五郎　マア、何にしろ、とつくりと相談をしませうか。

トこれにて皆々本舞臺へ來り

ハイ、御免なさりませ。若林屋でござりまする。

左五　オヽ、これはようお出でなされた。跡から來るは

鐵　左官の鐵でござります。何か御用があると仰しやるゆゑ

六三　お長屋の根繼ぎでもなされますのかえ。

左五　なにサ、大變な川があつて。マア〳〵みんな、此方へお入りなされませ。

トこれにて皆々内へ通る。

五郎　承れば今日、この内方に、御祝言があると承りましたが、おめでたい事でござりまする。

ト六三これを聞き

六三　エヽ、そんならお内の娘御に、お聟樣でもお取りなされますかえ。

左五　さうサ、それを六三がなぜに咎める。

六三　イエなにサ、咎める譯はござりませぬが、そんなら少つとは話し合ひも……何にしろ、イケおめでたい事でござりまする。

ト思ひ入れ。

左五　これは御挨拶。

忠鐵　時に、私しどもへの御用とは、何でござります。

トこの時、庄九郎、帳場より下りて

庄九　イヤモウ、外の事でもないが、咋夜こちの土藏へ、泥坊が壁を切り破つて入りました。そこで、その繕ひを賴まうと、貴樣達を呼びにやつたのぢや。

忠鐵　それは大變だね。

六三　そりやモウ、今日早速、繕はにやアなりますまい。

鐵　併し、切つた樣子では、人もかけざアなりますまい。
六三　マア、何にしろ、切り拔いた壁を行つて見ませう。
庄九　さうして下さい。
六三　モシ親方、今の事は、間違ひなくわしが方へ。
五郎　金さへわかる事なら、相談しませう。
六三　金も譯をつけやす……それにしても今夜の祝言。アヽ、氣の揉めた話しだわえ。
庄九　マア、行つて見て下さい。
伊八　わしが案内しませう。
六三　親方、間違つちやアいけねえよ。
伊八　サア來なせえ。

ト庄九郞伊八先に、六三、忠八、鐵、奧へ入る。あと思ひ入れあつて

左五　まづ遠慮な手合ひは、奧へ行つてしまつた。時に先達て畑右衞門から、金の抵當に預かつたといふ、菅家の色紙、今日持つてござりましたか。
五郎　かねて東林さまが、似せ筆の名人と聞いたゆゑ、その色紙の似せ物を拵へ、二品ともに持つて參

りました。

東林　愚老が拵らへた、似せ筆の色紙は即ち爰に。

ト懐より似せ筆の色紙を出し

正銘の色紙と比べて見さつしやい。

ト五郎八、懐より誠の色紙を出し、引比べて

五郎　誠に、寸分違はぬこの色紙。

傳助　わしがいつぞや畑右衛門の、掛けの抵當に取つた色紙。その後、畑右衛門は行くへ知れずとの事それに似せ物を拵へて、どういふ趣向にするのでござりまする。

左五　サア、その譯といふは、いつぞや大江の家にて、三品の寶紛失、曉丸の一腰は、今に行くへは知れねど、尊像は畑右衛門の手から、後見の庄九郎が預かり、こちの内に、また色紙はこなたの方にあるによつて、大黒屋の槌右衛門といふ人が、屋敷方より内々、その詮議を頼まれ、爰の内に色紙のある事を聞出して、五十兩の持參金を持つて、急に此方の娘のお絲どのゝ所へ入り聟。即ち今夜御祝言……それゆゑ昨夜、こちの内へ盗人が入つて、尊像を盗んだと云うたは嘘。人知れずおれが盗んで押ッ隠し、その盗み手は、あの大工の六三にかづける手段。その上にその色紙

も、似せ物を槌右衞門に賣り附け、誠の尊像と色紙は、此方から屋敷へ上げて、大金にする工面ぢやて。

トこの話しのうち向うよりお園、千ヶ寺葛籠を脊負ひ、網代笠をかむり、杖をつき、さんすいなる拵へにて出て來り、門口に立ち

その　お賴み申します。

トこれにて左五兵衞悔りして

左五　ハイ〳〵、どなたでござります。絲屋庄兵衞は此方でござります。絲の御用でござりまするか。

その　何ぞお守の打紐でも

ト仰山に挨拶しながら門口を明ける。

左五　何の事だ。人を悔りさせた。いま〳〵しい。出たのがない。通れ〳〵。

その　長旅の順禮に御報謝。

トお園、左五兵衞の顏を見る。左五兵衞、顏にて、路地にて入れといふ仕方。お園うなづき、路地口へ入る。

左五　いま〳〵しい乞食めだ。悔りさせた。

東林　時に左五兵衞どの、そんなら尊像は貴様の手に

左五　昨夜盗んで卽ち爰に

ト懷より出して

誠の尊像とこの色紙は、わしがしつかりと預かりませう。

ト本の色紙を脊中へ隱し、尊像を懷中して、五郎八へ似せの色紙を出す。

東林　元この出所は、馬士の畑右衞門と、半時九郎兵衞といふ盗人、此奴等二人が仕業。頼んだ人は大江の家老、彈正左衞門、その片腕は山住五平太さま。愚老もその節頼まれて、拵へたるコレこの毒藥。

ト懷より藥包みを出し

上包みに氣附と書いてあるのが、啞ごろになる祕法。又、逆上の藥と記してあるのが眼中惡しく、鳥目の如き病になる毒藥。この祕法を以て大殿を片附け、大江の跡式を押領せんと彈正さまの企み。これにつけても稀代なるは、彼の曉丸の劍に、酉年の血汐を注ぐ時には、所々にて鷄の聲を合せ、酉目は忽ち平癒なすとの事、爭はれぬ名作でござるぞや。

左五　サア、そこでわしが趣向は、この似せ物を聟にくる、槌右衞門に授ける工面。

五郎　丁度幸ひ、あの大工の六三が、この色紙を欲しがる樣子。此奴にも似せ物をあてがひ、金の早い

方へ賣りつける手段。

左五　わしも急に女房を持たねばならぬ。それにつけても金の入用。儲け口は手許にあつても、金の工面はまだ嘗て

傳助　わしも噂に聞いてゐた、はね吉とやらの借金。千住の親方も、金を遣らざア落ちつくまい。

左五　その前方に金の算段。

五郎　何かは奥で、東林さん。

東林　後家に逢つて、祝言の喜びながら

五郎　ちよつと一杯。

左五　サア、奥へお出でなさい。

東林　今の二品は、しつかりこなたが

左五　わしが預かるからは大丈夫だ。

傳助　そんなら親方

五郎　御馳走になりやせう。

ト五郎八先に傳助附添ひ、東林は差してゐたる合口を忘れて、同じく入る。左五兵衛残り

左五　まづこれで一つ片附いた。

ト足許にある脇差を見て

あの東林さんは脇差を忘れて行つた。麁相な人だ。

ト通り神樂になり、向うより權兵衞、御膳籠を擔ひ、古鐵買ひの拵へ。跡より坊太、いがぐりに中剃りをしたる丁稚の拵らへにて、判取帳を持ち、出で來り

坊太　オイ〳〵、古鐵屋さん、お前にちよつと賣りたい物がある。買つてくれないか。

權六　絲屋の小僧さん、何を賣りたいと云ふのぢや。

坊太　いま見せるから、少つと待つてゐて下さい。

ト坊太駈けぬけて下の路地口へ入る。權兵衞、門口へ來り

權兵　御免なされませ。左五兵衞さまは內方に居られますか。

左五　オヽ、これは權兵衞どの、先刻にから待つてゐました。

權兵　わしも早う妹の事、片附けたう存じまして、今日わざ〳〵參りました。

ト此うち坊太、路地口より出て招く。權兵衞、外へ出る。坊太、花道へ連れてゆき

坊太　これは、おれが以前奉公してゐる時分、持つてゐた物だ。どうぞ買つて下さい。

ト澁紙に包みし曉丸の一腰を出して見せる。

權兵　ムウ、隨分拵へは派手ぢやが、いくらに賣るつもりぢや。

坊太　いくらだか、おれに知れるものか。お前、踏んで見てくんねえ。

ト此うち左五兵衞、ソツと門口を窺ひ見て

左五　小僧や〱。坊太々々。

ト呼ぶ。

坊太　アイ〱……サア、番頭が呼ぶ。早く買つてくんねえ。

權兵　ろく〱中も見もせぬに。五百位なら買ひませう。

坊太　なんだ、五百とはあんまりだ。

左五　坊太や〱。

トまた呼ぶ。

坊太　アイ〱……エヽ、仕方がねえ。五百でもいゝ。早く〱。

ト權兵衞、荷の中より五百出してやる。

コレ、だんまりだよ。

ト舞臺へ來り

ハイ、番頭さん、鐵砲町へ行つて參りました。

左五　御用は濟んだか、

坊太　定家文庫の紐が、淺黃を紫にするばかりで、ようござります。

左五　何だかソワ〳〵してゐる。早く奧へ行け。

ト叱る。坊太、權兵衞に目くばせして奧へ入る。權兵衞、右の一腰の目釘を拔き、中心を見ながら、目釘を拔いたまゝ、柄鞘をはめて、籠の中へ入れて置く。

時に權兵衞どの、いま貴樣が見てゐた脇差は、仰山な拵へぢやが。

權兵　これは今、内の……イエ、さるお屋敷からのお拂ひ物でござります。

左五　廻り廻つてもしこれが、彼の曉丸……イヤ、掘出し物かも知れねえ。

ト通り神樂になり、多七、若い者の形にて出て來り

多七　御免なされませ。此方に古鐵買ひの權兵衞どのは居りませぬか。

權兵　アイ〳〵、權兵衞は爰に居ります。

ト多七と顏見合せ

オヽ、小塚ツ原の多七さん。

多七　ちよつと來なせえ。

ト權兵衞を花道の方へ連れて行く。此うち左五兵衞、東林が忘れて行きし合口の中心と、荷の内の一腰と、中心を入れかへる事。

コレ、權兵衞どの、こなたはく〳〵、方々探させた。貴樣の妹のはね吉、給金殘りの借金が十四兩玉を引上げた上、今に梨の礫もせぬは、どういふ譯だ。埒が明かずば、はね吉を連れて行きませう。

權兵　サア、段々御尤も。その殘り金の譯は、絲屋の通ひ番頭の左五兵衞どのが、今にわしの方へ寄越す筈。それゆゑわしも今日、爰へ來てゐます。

多七　そんならわしもその人に逢つて、その譯を附けて行きませう。

ト兩人一緒に本舞臺へ戻り

權兵　モシ、左五兵衞さま、妹の親方の所から、殘り金の催促。どうぞ早く譯道を、附けたいものでござります。

多七　モシ〳〵、左五兵衞さま、お前樣が、權兵衞どのゝ妹を、女房になされますなら、はね吉の殘り

の金、どうぞ分けて下さりませ。

左五　アヽ、こなたは小塚ッ原の若い衆か。随分はね吉が借金は、わしが引受ける約束なれど、まだ女房は内へ入れもせぬうち。併し對談なれば、是非この左五兵衞が、きつと辨まへますほどに、二三日待つて下さいと、内の親方に云うて下さい。

多七　イヤモウ、今まで二三日の四五日のと、引摺られたは度々。今日は是非々々埒を明けてもらはうと思つて參りましたが、お家主の左五兵衞さまの請合ひなら、ようござります。どうぞ間違ひなう、二三日の内に

左五　承知しました。この左五兵衞が請合ふから、間違ひはござらぬ。

多七　左樣ならお賴み申します。權兵衞どの、また其うちに。

權兵　親方へよろしう

多七　お暇申します。

ト多七引返して向うへ入る。

左五　コレ、權兵衞どの、あのはね吉を女房にすれば、貴樣はわしが爲には兄貴。奥の後家に逢つて、左五兵衞は私しが爲には妹聟、いはゞ悴同然なもの、この後お賴み申しますと、賴んで下され。

權兵　それは少と迷惑な。
左五　なぜ〳〵。
權兵　お前をわしが悴とは、ちと釣合はぬ。
左五　ハテ、そこが合縁奇縁でござるわいの。
　　　　　　トこの時奥より伊八出て
伊八　モシ〳〵、番頭さん、後家御樣が御用があると云はつしやる。
左五　オイ〳〵。そんなら權兵衞どの、今に奥へ來て、後家御に逢つて下さい。
權兵　畏りました。
伊八　サア、お出でなされませ。
　　　　　　ト伊八、左五兵衞を連れて奥へ入る。直ぐに奥より東林出て來り
東林　麁相千萬な。先刻妥へ脇差を忘れて行つた。
　　　　　　ト云ひながら權兵衞と顏見合せ
こなたは正月の初酉の日に、千住で逢うた古鐵屋どのだな。
權兵　左樣でござります。段々溫かに、よいお天氣でござります。

ト此うち權兵衞の荷の中にある件の脇差を見付け

東林　ヤア、その脇差は、兼ねて彈正さまの手にありし時、見覺えのある、慥かに

權兵　エ。

ト思ひ入れ。

東林　イヤサ、ハテ、好い腰の物を持つてゐるが、なんと、その脇差を、愚老に賣つてはくれまいか。

權兵　隨分商賣でござりますゆゑ、賣つて進ぜませうが、少しお醫者樣には、派手な拵へでござります。

東林　その派手なところが所望ぢやて。愚老至つて派手者でござる。最前爰へ來る時、合口を忘れ、腰が明いて甚だ見ともない。どうぞそれを賣つて下さい。

權兵　わしも、外に約束した所もござりますから、其方へ見せた上、御相談申しませう。

東林　イヤ〳〵、さうでもあらうが、見る通り愚老は、暫時腰が明いて見苦しい、是非ともおれに賣らつしやい。

權兵　お前また、それをいくらに買はつしやる。踏んで御覽じませ。

東林　なんだ、踏んで見ろ。踏んだら折ツぺしよれるだらう。

權兵　無駄を云はずに、いくらでお買ひなさる。

東林　愚老も急に困る譯だから、二朱に買はう〳〵。

權兵　イエ〳〵、そんなら外へ見せませう。

東林　コレサ〳〵、氣の短かい商人だ。二朱に買はうといふは冗談。此やうな大切な物、ちよつと貴樣の氣を引いて見たのだ。誠は三十兩位で賣つてはくれまいか。

ト權兵衞不思議さうな顏をして

權兵　お前、いま二朱に値を附けた物を、急に三十兩……お前も好い加減の人だ。人をなぐさむも時によります、眞顏になつて、馬鹿々々しい、よしになされませ。

東林　これサ〳〵、何も相談づくだ。さう腹を立てゝは話しが出來ない。隨分商ひがら、相談づくにするがよい。カウツト、もう五兩買ひませう。三十五兩では、どうだ〳〵。

ト此うち左五兵衞出かゝり、この樣子を聞いて、さてはト思ひ入れ。權兵衞、あまり値段が違ふゆゑ馬鹿にすると心得、ムツとして

權兵　モシ、お醫者樣、人を馬鹿にするも大概になされませ。隙づいえな。とんだ人だ。

ト腹を立てる。東林、安く附けしと心得

東林　これサ〳〵、ハテ氣の短かい男だ。腹を立てずともよいわサ。それで賣れずば賣られぬと、また

權兵　相談があるわサ。いつそ一飛びに五十兩。サア〳〵、五十兩で、手を打たつしやい〳〵。二朱から附けて五十兩とは、出來ない話しで、人をちよつくり返すのかえ。馬鹿々々しい。そんな人の相談に、乘つてゐる隙はござらぬ。

東林　これサ、腹を立てずと、本當に五十兩。

權兵　エヽ、知りませぬ。五十兩でも百兩でも出して、外の脇差を買はつしやりませ。馬鹿々々しい。

ト無性に腹を立て、東林を突きとばし、一腰を持ち、奧へ入る。

東林　ハテ、譯の解らぬ奴だの……あの一腰は正銘の曉丸、彈正さまが持つてござつた時に、見覺えのあの拵へといひ、寸分違はぬあの一腰。どうぞして買ひたいがなア。

トこの時後より左五兵衞出て

左五　東林さん、お前も麁相な。腰の物を忘れてお出でなされました。わしが、失ならぬやうに持つてゐました。

東林　これは忝うござる。いま尋ねて居つたところ。

左五　時にお前に、少つと話しがござります。わしは家主もしてゐながら、今に腰の物がござりませぬ長屋の祝儀不祝儀の度々、外で借りるも氣の毒。不躾ながらお前の合口は、大分に損ねました。

なんと物は相談ぢやが、わしに賣つては下さらぬか。

東林　これはどうしたものだ。醫者に脇差を賣れとは、近頃その意を

左五　さればでござりまする。今あれから聞いて居りましたが、五十兩でお腰の物を、買ふと仰しやる程なら、この合口はいらぬ物。どうぞ讓つて下さりませ。

東林　それ程に云はるゝ事なら、愚老を見かけて男の願ひを、欲しいといふ詞も潰されもしまい。實は重代でござる。柄絲は切れたれども、天晴れ源家の重寶は、鬼切膝切にもおさ〳〵劣らぬ業物。づんど切れます、よく切れます。愚老も差當つて金の入用、賣つて進ぜませう。

左五　左樣なら、一兩にお貰ひ申しませう。

東林　ナニ一兩……なか〳〵一兩二兩の刃物ではござらねども、別懇の貴公の事なり、只讓つてもよい譯でござるが、氣は心ぢや、一兩で讓りませう。

左五　それは有り難うござります。

ト左五兵衞、心で笑ひながら、懷より一兩出してやる。東林も嬉しき思ひ入れにて、金を受取り

東林　この一兩を權兵衞に手附に渡し、今の一腰。併し、跡の大金

左五　あの刀は、そんなに大金な品でござりまするか。

東林　大金どころか、あれは
　　　　　　ト云はうとして
隨分見所のある一品でござる。愚老も跡金の工面いたすにも、また妹の小絲をせびらねばならぬ
併しあの妹めは、この頃、綱五郎といふ錢無しにくッついてゐれば、出入りが出來ぬと
左五　でもお前、好い兄弟を持つて仕合せ。今に左團扇でござりませう。
東林　イヤ、さう巧くは參りますまい。あの妹は、高うは申されぬが、實の親と申すは、爰の家藏を讓つて、今かすかになつた、中根屋の次右衞門といつた亭主が、まだ繁昌の時分、内の下女に手をつけ、安産するやうにと、子安貝の守を添へ、下女の宿へ遣はし、産み落したが、前の絲屋中根屋次右衞門が娘。また本妻の腹に產れた娘は、綱五郎を聟に取つて、この綱五郎もろとも、今は本所の方に引込んで暮らしてゐるお房といふ者。いま深川にゐる、わしが妹の小絲は、そのお房と腹は變れど、胤は一つの姉妹。あの小絲が、まだ乳を飮む時分、その下女が、わしが親仁の所へ、小絲を連れて二度添ひに緣づき。その時わしも子供の時分。それから間もなく、わしの兩親も死に、連れ子ながらも妹の、小絲の世話をしてゐたが、育てるが面倒ゆゑ、深川へ賣つたが、今では綱五郎にくッついてゐれば、さぞ彼奴にむしり取られて、この頃はひッてんであらう。

左五　こなたの妹の小絲は、男嫌ひといふ噂であつたが、どういふ事であの綱五郎に、くッついたものだね。

東林　さればサ、あの小絲が成田へ詣つた時、行德の船の中で、ついした男とどれ合ひ、その男の胤を懷妊して歸つたゆゑ、わしが内證で產まして、里子に田舍へ遣ると妹を騙し、一石橋の際へ、捨てしまつた女の餓鬼。もう今年で五つになります。聞けばその捨て子を、今の綱五郎が女房、本所にゐる絲賣りのお房が、町内から貰つて育てゝゐるとの事。腹は變れど妹の小絲の子を、姉のお房が知らずに育てるとは、これも因緣。また小絲めは、その男に心中立て、男嫌ひと云つてはゐたが、たうとう綱五郎に落され、今では深い仲。どうしても女といふものは、辛抱甲斐のないものだ。

ト此うちお岩、後家の拵らへにて出て、この樣子を聞いてゐる。

左五　それでさつぱりと解りました。前の絲屋の亭主の胤に小絲があれば、今度の絲屋にお絲があり、これも因緣ぢやて。

いは　その因緣話し聞くにつけ、わしも因緣話しがござるわいの。

東林　お前は後家御

左五　いつの間に。

ト合ひ方。

いは　こなた衆の話しを聞いてゐましたが、爰の株式を買うた阿野屋十兵衛どのゝ娘、今のお絲どの、わしは乳母なれど、十兵衛どの病死の後、ずる〳〵べつたり内の後家樣。何不足ない身の上になるにつけ、わしが在所にゐる時持つた亭主は、平作といふ百姓。この人が死なれてから、二人の子供を連れて京へ上り、その時分爰の内の旦那、十兵衛どのは因州の侍ひにて、石塚彌惣兵衛というた人、弟御は船越十右衛門というて、それは因州にて病死。その十右衛門どのゝ娘を養女にもらうたのが今のお絲。彌惣兵衛どのは武士をやめて町人となり、絲物の買出しに、京へござつたその時に、わしが生活に迫つたを、深切にして世話して下され、直ぐに京都から、今の娘のお絲どのゝ、乳母になつて江戸へ下り、十兵衛どのゝ病死。それゆゑお絲を娘にしてゐれど、十兵衛どのゝ恩は忘れず、どうぞ今のお絲に好い聟を取つてやりたいと思ふ內、大黑屋の槌右衛門さんといふ金持ち、五十兩の持參で、東林さまのお世話で、今日の入り聟。これで一つは落ちついたやうでござりますわいの。

東林　ハテ、變つた緣引きでござるの。それはさうと、もう聟どのゝござる刻限。

左五 身の上話しはやめにして、何かの支度をせざアなりますまい。

いは イヤモウ、大概心當てにしてござるわいなう。

ト通り神樂になり、向うより槌右衛門、袴羽織、一本差し。徳松、丁稚にて、附添ひ出て來り

槌右 へイ、御免なされませ、槌右衛門でござります。

東林 そりやこそ、お聟樣がお出でなされた。

いは オヽ、待ち兼ねました。ようこそ〳〵。

左五 サア〳〵、お通りなされませ。小僧さん、此方へ入らつしやれ。

徳松 ハイ〳〵、どなた樣も、今晩はおめでたうござります。私しはこれからお臺所へ參つて、お手傳ひ致しませう。

左五 それは有り難い。その路次から行かつしやい。アヽ、氣のきいた小僧さんだ。

ト徳松、下の路次へ入る。

槌右 さてお袋さま、御機嫌よく。不思議な御縁で私しも、あなたの内へ參りましてござりまする。この上とも、よろしくお賴み申します。

いは これは御挨拶。年寄つたこの母に、年のゆかぬ娘のお絲、何分お前を賴まにやなりませぬ。

東林　この東林も、仲人やら口入れやら、今日は日柄もようて、おめでたうござります。

ト此うち奥より庄九郎、五郎八、傳助出て來り

庄九　これは〳〵、聟樣でござりまするか。私しはこの家の後見、庄九郎でござります。お見知りおかれ下さりませう。

五郎　私しは御祝儀がてら、今日上がりました。兼ねてお約束の菅家の色紙、お望みとござりますゆゑわざ〳〵參りました。

傳助　私しも彌次馬ながら、その色紙も存じて居りますれば、引合ひに參りました。

いは　それについても大切な尊像、昨夜土藏の壁を切りぬき、盗まれましてござります。

庄九　イヤモウ、聟樣へ、申し譯もない仕儀でござります。

槌右　それは大變。その尊像が望みゆゑ……サア、何は兎もあれ、娘御のお絲どの、今晩の儀は得心でござらうの。

いは　隨分得心でござりますが、して持參金の五十兩の儀は。

槌右　約束ゆゑに、持つて參りました。

ト懷より財布入りの五十兩を出す。

いは　それはマア、ようこそお持ち下さりました。それにつきましても、あのお絲も年は參らず、その上私しが妛の娘でないゆゑに、母の申す事、何やらツン〳〵と致しまして

トうぢ〳〵と云ふ。槌右衞門思ひ入れあつて

槌右　イヤ〳〵〳〵、私しも大枚の五十兩の持參も、見込みがあつての聟相談。いま承はれば、肝腎の尊像は盜まれ、お絲どのは不承知の樣子を聞いては、此方も五十兩は

トまた仕舞はうとする。お岩、左五兵衞、これにて思ひ入れ。

岩左　イエ〳〵、左樣でもござりませぬが

ト思ひ入れ。

槌右　でも、大金でござれば此方へ

ト懷中せんとする。

東林　イヤ〳〵、斯うなされませ。祝言に間もござりますまいが、お聞濟みなされますれば、マア〳〵物事調へまするまで、愚老がお預かり申しませう。

槌右　成る程、仲人の事なり、そんなら金子は預けませう。

東林　隨分愚老が預かりました……イヤモウ、金といふ物は、手に持つてさへ心持ちのよい物だ。

ト財布を取つて懷中する。

五郎　モシ、私しの方の、色紙の相談も

槌右　今日中に相談いたしませう。

いは　サア、何にせい爰は端近。

庄九　奥へござつて何かのきめ引き。

東林　仲人、介添へ、みな男。

傳助　添へ聟は吉原連中。色氣はたつぷり。

東林　仲人は日本一の色男。

庄九　それでは聟樣の褒めやうがない。

いは　三國一の花聟樣。

槌右　お袋樣、そんなら奥へ。

庄九　サア、お出でなされませ。

ト唄になり、皆々奥へ入る。左五兵衛殘り、思ひ入れあつて

左五　エヽ、イケ騷々しい奴等だ……時に、先刻ちよろまかしたこの一腰、誠の中心は一兩で醫者を騙

し、此方へ捲上げ。それにつけても内の娘、今夜の祝言に、娘が槌右衛門を嫌ふのも、先刻にうせた大工の六三、彼奴が縁を切らせるには

ト懐より以前の尊像を出し

先刻頼んだ女巡禮、うまく仕事をやらせた上、色紙と一腰で金儲け。はね吉を女房にして、表はちよいと小粋な格子、下女が一人に猫が一疋、しかみ火鉢に帆立貝、彼奴が箸と、おれが箸とかち合せて、紙屑拾ひが喧嘩をするやうに。エヽ、畜生め。古い奴だが、さううまくゆけばいいが。

ト腕を組み思ひ入れ。通り神樂にて道具廻る。

本舞臺、正面床の間、違ひ棚、出入り口障子たてきり、上の方に屋體。よき所に手水鉢。座敷には風爐に掛けたる罐子。下の方に枝折り門、外に長屋へ通ふ路次の入り口。すべて絲屋奥座敷の體。手毬唄にて道具納まる。

ト奥よりお絲、振り袖、拗ねたる樣子にて出るを、お芳、下女にて、お絲をなだめながら出て

よし　モシ〳〵、お絲さま、なぜ其やうにお腹をお立てなされますぞいなア。

いと　これがマア、腹が立たいでかいの。わしには一向沙汰無しに、母さんが聟を極めなさんして、今宵内祝言せいと云はしやんすは、そりやあんまりななされ方。それぢやによつて、わたしやモウ氣が揉めてナ。

よし　サヽ、御尤もでござりまする。その上にお前樣は、家内のお方は知らいでも、わたしばかりは存じて居りまする。アノお內へお出入りの、六三さんと譯ある事は。

いと　アヽコレ、それを。

よし　ハテ、私しにお隱しなさる事はござりませぬ。お前樣と六三さんの事を、左五兵衞どのが、あの後家樣へ告げ口して、急に極めた聟穿索と見えますわいな。

いと　よし六三さんの事が、母さんへ知れやうがまゝ、わたしや押つけな聟さんと、杯する事は否ぢやわいの。

よし　左樣でござりませうが、ちよつとマアお召し物を、お着替へなされて。

いと　なんの着替へやう。捨てゝ置いてたもいなう。

トこの臺詞のうち、路地の內にて、忠八の聲にて

忠八　サア〳〵、とんだ事だ〳〵。大變だ〳〵。大變が出來た。

ト順禮葛籠を提げて出る。これにて兩人驚く。

モシ〳〵、大事だ〳〵。番頭さん〳〵。

ト呼び立てる。奥より左五兵衞は件の合口を腰に差し、尊像を懐中して出で來り

左五　なんだ〳〵、忠公、何を騷ぐ。

忠八　騷ぐどころか、裏の井戸へ、身投げがあるわな〳〵。

ト これにて三人驚き

左五　ナニ身投げだ。そいつは大變々々……モシ〳〵、身投げがございます〳〵。

トうろたへる。お岩、庄九郎出て來り

いは　身投げとは、何者ぢや〳〵。

庄九　もし内の者ではないか。但しはおれではないか。それで落ちついた。

左五　して、死んだか〳〵。

忠八　イエ〳〵、いま引揚げた〳〵。

トこの時路地口より鐵、伊八、戸板にお園を乘せ、木綿蒲團を掛けて吊つて出る。跡より長屋の者二三人附き出て來り

鐵　モシ〳〵、氣は附いてゐますが、マア、ずつぷり濡れて居ります。

伊八　何ぞ着替へさせずばなりますまい。

鐵　モシ〳〵、水を吐かせるがようござります。

忠八　イエ〳〵、上手に落ちたから水は呑みませぬ。落ちると直ぐに、わしが引揚げました。

いま　マア〳〵、こちの内へ吊り込まんせ。

鐵伊　左様いたしませう。

ト座敷へ入り、よき所へ置く。

左五　見ればどうやら、比丘尼のやうだの。

忠八　左樣サ、まだ年若な尼でござります。これがその、身投げの雜物サ。

ト件の葛籠を出す。

庄九　早く着替へさせるがようござらう。

よし　モシ〳〵、爰にお絲さまのお寢卷がござんす。これではどうであらうか。

いは　アヽ滅相な。そりや娘が着る物ぢやないか。

いと　イエ〳〵、大事ござりませぬ。若い尼御とあるからは、女子は相互ひ、早うそれなと進ぜやいの

いは　そんなら、その小袖を着せるがよい。
忠八　早く〳〵。
ト皆々立寄つて吹替への濡れた形を取り、件の振り袖を着せ、およし、平括けの帶を締めてやる。爰にて吹替へ變り、尼の頭巾をかむりしお園に、振り袖を着せて
鐵伊　コレ、身投げの、氣は慥か〳〵。
左五　冷えては惡いぞ〳〵。
よし　この炬燵蒲團を着なんせ。
ト置炬燵の絹蒲團を着せる。お園、恥かしさうに俯向いてゐて
その　これはマア、思ひがけなう皆様のお世話にあづかりまする。死なねばならぬ譯あつて、この御近所の井戸のうち、身を投げましたをお世話にて、助かりまするも私しの懐中に、水天宮の御守、この御利益と存ずれど、もう斯うなつては神佛の、利生のないがましぢやもの。助かりまして跡での後悔、わたしや恥かしうござりますわいなア。
ト俯向いて泣いてゐる。
庄九　モシ〳〵、身投げは助かりましても、あの井戸は、掃除をせねばなりますまい。

左五　成る程、手傳つて下さい〳〵。
皆々　呑み込みました。
庄九　併し、身投げの樣子を、宿老へ屆けて來ませう。
いは　さうして下され。こなさん達は、早く井戸を洗うて下さんせ。
皆々　サア〳〵、番頭さん、お前も來て、井戸替へを手傳ひなさい〳〵。
左五　イヤ〳〵、わしは爰に大事な物を持つてゐるから。
ト懐の尊像へ思ひ入れ。
鐵　ハテ、一人も多いがよいわな。大家なり、番頭なり、遁れッこはない。來なさい〳〵。
ト引ッ張る。左五兵衞思ひ入れあつて
左五　ア丶コレ、それでもわしは。
忠八　ハテ、動き泣きをする事はない。その上、なんだ、お前は一本差してゐるの。とんだ折助だ。
いは　コレ〳〵、娘もお芳も、庄九郎の歸るまで、身投げの番をしませうぞ。
いと　エ丶滅相な。どうしてわたしが。
よし　ハテ、わたしが居りまするわいなア。

皆々 サア、番頭さん、井戸替へだく。

左五 これは迷惑。

庄九 ドリヤ、屆けて來ませうか。

ト四つ竹の合ひ方になり、庄九郎は向うへ入る。お岩は奧へ入る。忠八、左五兵衞を引ッ張り出し、皆皆附いて路地の口へ捨ぜりふにて入る。あと合ひ方。三人殘り、お園俯むいてゐる。お絲、脇へ離れ氣味の惡き思ひ入れ。お芳、側へ寄り

よし 見たところが、まだお年若なお方ぢやが、髮をおろして修行の身の上。その上に、身を投げて死なうとは、よく〳〵思ひ詰めた事でござんせう。

その ハイ、御推量なされて下さりませ。

ト涙を流しゐる。

いと それはさうと、顏色も惡い樣子、藥なと進ぜずとよいかいなう。

よし 左樣でござりまする。どう致しても、この冷えるのに水に入り、定めて堪へてござんせう。わたしに好い藥がござります。ちよつと取つて參りませう。

ト立たうとする。お絲驚き

いと　アヽコレ、其方が行きやるなら、わしも連れて行つてたもいの。

よし　これはしたり、直ぐに取つて參じまする。お前さん、ちつとの間ぬしの側においでなされませ。左樣でないと、又あのお袋樣が

いと　それぢやというて、わしは怖いわいの。

ト　お園へ思ひ入れ。この時顏を上げ

その　成る程、身を投げた私し、其やうに思し召すも道理。したが、此やうにお世話をかけたこのお内もう〳〵間違うた事は致しませぬ。必ずお氣遣ひなされて下さりまするな。

よし　あれお聞きなされましたか。よもやモウ不所存な事も致しますまい。ちよつとわたしが藥を取つて參りませう。

いと　そんなら早う取つて來てたもや。

よし　アイ〳〵、直きに參りまする。コレ、尼御さん、待つてゐなさんせえ。

ト合ひ方になり、足早に奧へ入る。お絲矢張り氣味の惡きこなしあつて

いと　これいなう、芳や、早くお藥を取つて來てあげやいの。コレ、早く來てたもいの。

ト心遣ひの思ひ入れ。お園、顏をあげ

その　お前様は爰のお内の、お娘御様と見えまするが、思ひがけなうお世話にあづかり、死ぬる命をお助けなされて下さりましたこの御恩は、有り難う存じまする。

いと　イエ〳〵、なんのお禮に及びませう。お前もどうぞお藥などあがつて、必ず煩らはぬやうにしなさんせえ。

その　ハイ〳〵、有り難うござりまする。私しは遠國の者、やう〳〵この間お江戸へ參り、今日のやうなこの體裁。さうして、爰は何と申しまする所、お内のお名を承りたう存じまする。

いと　爰は本町といふ所。こちの内は絲生業、阿野屋十兵衞といふはわたしが父さん、わたしや絲と申しまする、娘でござりますわいなア。

その　エ。アノ、爰がお江戸の本町、殊に絲屋のこのお内、お娘御はお絲さま。ヤヽヽヽ、そんならお内が、わたしの尋ねし

ト恟りする。

いと　モシ、何をマア其やうに、絲屋と聞いて

その　こりやモウ、いよ〳〵生きてはゐられぬわいの……モシ、お絲さまとやら

ト お絲が顔を、よく〳〵見て、思ひ入れあつて

御恩は死んでも忘れませぬ。さらばでござりまする。

ト其まゝ表へ行かうとする。お絲、縋り留めて

いと　これはしたり、絲屋と聞いて驚かしやんすお前の樣子、それには譯がござんせう。モシ、包まず話して下さんせいなア。

ト思ひ入れ。お園こなしあつて

その　面目なうござりまする。申すまいと思へども、あなた樣の眞實に、お聞きなさるにほだされて、お話し申す一通り。わたしが國は因州にて、連れそふ男はこの江戸へ、仕事拵ぎに出まして、國許へは音信不通。やう〳〵と去年の暮、江戸の知るべの所より、申し越したる手紙の文言、こなたの亭主は霜月半、病死したとの知らせの狀、聞いて身も世もあられませうか。直ぐにお寺へお頼み申し、髮をおろして尼となり、せめては男の墓詣りと、海山越えて女の身で、順禮いたして一人の旅、やう〳〵この頃御當地へ、參つて知るべへ尋ね寄り、樣子を聞けば皆僞り。

いと　エヽ、その男が、僞りを云うたかえ。

その　ハイ〳〵、僞りを申しました。死んだと僞り、お江戸のうちに、よい色が出來ましたといなア。

いと　エヽ、そんならお前の男が、外に色が出來たゆゑ、死んだと云うて騙したかいな。こりやモウ、

どこの男も、滅多に油斷はならぬわいの。
トよそ事と心得、奥の方を見やり、六三が事を身につまさるゝ思ひ入れあつて
してマア、その男に逢ひなさんしたかえ。
その　イエ〳〵、今に逢ひは致しませねど、その先樣の女中は、よろしい商人にて、お名も所も承り、
もしや爰かと存ぜしゆゑ、身を投げましたも本町筋、絲屋を目當に、わたしが體裁。
いと　なんと、絲屋を目當にして。
その　アイ、わたしが亭主の色といふ、お方は卽ち本町の、絲屋の娘御、お絲さまと申す事。
いと　エヽヽヽ。してそのお前の、男といふは。
その　輕い身分の大工の六三。
いと　エヽ。そんならお前が、六三さんの。
ト悧りして奥へ行かうとするを、お園、裾に縋つて
その　モシ、お絲さん、聞き憎からうが一通り、お聞きなされて下さりませ。
ト合ひ方かはる。お絲、下に居て
いと　尤もでござんす。尤もぢやわいな〳〵。

ト顔を隠して俯向く。

そのモシ、お絲さま、お案じなされますなえ。今に男に逢うたりとも、髪をおろせしこの姿。悪いと思ふ男でも、見せまするも恥かしうござりまする。有やうは今日、本町の絲屋とあれば、尋ねて参つてお見世の様子、見ましてからはモウ〳〵〳〵、どうで男はこの家の聟になるのに、なんのマア、しみたれたわたしらにはと、フツと存じ附きまして、それから俄に死神の、附きましたやらあの井戸へ、身を投げましたを引揚げられ、お恨み申すお前様の、介抱うけるも因果づく、わたしもどうぞ、死にたうござりまする〳〵。

ト泣き伏す。よきあたり後の障子をソツと明け、お岩窺ひゐる。お絲これを知らず

いと成る程、さう云ひなさんすりや、恥かしい事ながら、内へ出入りの六三さん、ついした事にぬしさんと、いとしらしいと思ふから、ついアノわたしや

トうぢ〳〵して

互ひに今では深うなり、義理あるわたしが母さんの、目顔忍んでいたづら事。それといふのも六三さんが、お内儀さんは無い事と、思うたばつかり、このいたづら、夢々知らぬ事でござんす。堪忍して下さりませいな。

ト手を合せて詫びる。

六三さんの云はしやんすには、何を隱さう國許には、云ひ號けの女はあれど、互ひに顏は知らぬ同士。殊さら人の女房に、なつてゐやうと云はしやんす、そのお話しに引かへて、お前の樣子を聞く上は、どうマア顏が合されませう。

ト立上がつて奥の方へ行かうとする。お岩走り寄つて

いは　コレ娘、身投げどのゝ樣子は、荒まし聞きました。

いと　エヽ、そんならお前が

その　只今申したこの身の荒まし

いは　殘らずわしが聞きましたが、娘お絲がいたづらから、身を投げやうとのお前の心は、尤もぢや、尤もぢやが、もう〳〵、其やうなこと脇へほかし、あの六三どのと夫婦にならつしやりませや…コレ〳〵、娘、わが身も惚れたあの六三、思ひ切る事もなるまいし、と云うて嫌な祝言もなるまいほどに、もう〳〵、よしにしや〳〵。併し、聟の變替へすりや、持參金も手に入らず、身代が立ちませぬ。これといふも、生さぬ娘はわしが主筋、母親は乳母の上がり、何を云うても通らぬ筈。ぢやというて家が大事、先祖の佛へ云ひ譯には、コレ娘、跡を賴むぞや。

ト懐より剃刀を出し、自害せんとする。お絲、あわてゝ留め

いと　アヽコレ、何をなされまする。これいなア母さんが……皆來てたもいなう。

ト縋る。お園、ウロ〳〵する。

いは　これはしたり、大きな聲しやつて、皆が來ると外聞が惡いわいの。放してたも〳〵。

いと　イエ〳〵、放しませぬ〳〵……モシ、お前、とめて下さりませいな。

その　モシ〳〵、何か存じませぬが、お待ちなされませ〳〵。

ト お岩をとめる。

いは　わたしが自害も半分は、皆さんへの義理があるゆゑ、コレ、三方四方を思うての事。放して下さんせ。

その　さう仰しやれば猶更に、死なねばならぬわたしが納まり。淵川へなと身を沈め、永い未來で六三どのに

トつか〳〵と行くをお絲すがつて

いと　どうしてお前を見捨てゝは、

いは　聟への云ひ譯、先祖へ義理の

ト自害せうとする。

いと　母さん待つて、

ト　とめる。お園立上がつて

その　又も身を投げ

いと　コレ。

ト　とめる。

いは　わしも自殺を

ト死なうとする。お絲あちこちと兩方とめる事。

岩園　見捨てゝ殺して下されい。

ト思ひ入れ。お絲こなしあつて

いと　モシ母さん、わたしや祝言いたしますぞえ。

いは　ヤヽ、アノ得心しやつて、あの六三と

いと　アイ、得心いたしますわいなア。

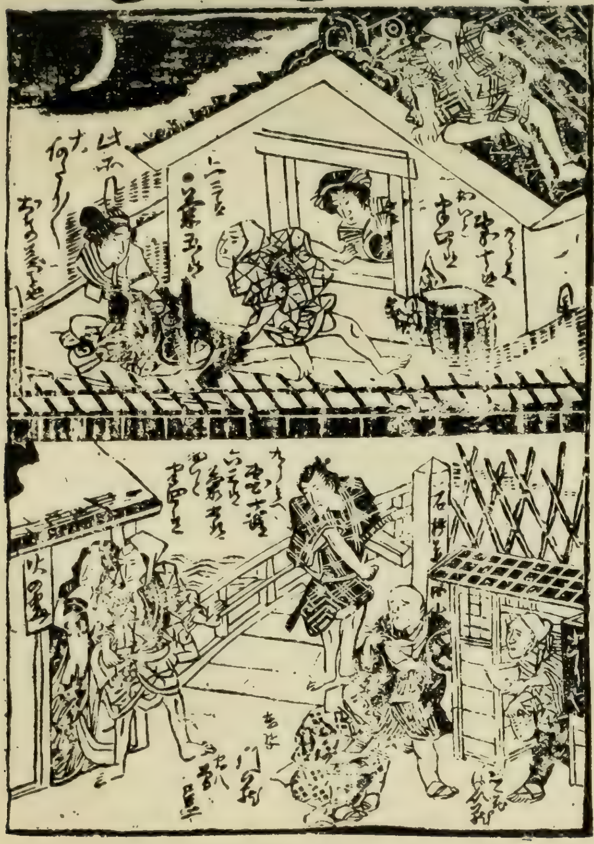
その　エヽ、すりや、わたしの男を

いと　思ひ切つたといふ證據、あの聟さんと杯を、致しまするが何より堅い
いは　そんならいよ〳〵內祝言を
その　今にもわたしが男に逢ふとも
いと　內祝言をするからは、主のある身のわたしぢやもの。
その　嬉しうござんす。
いは　それでわたしも大きに安堵。既に自害と思うたに
その　身投げのわたしも命を拾ふ
いは　それも娘の心一つ。いよ〳〵今のは得心か。
いと　マア……アイぢやわいなア。
その　とても の事にしつかりと
いは　家の爲ゆゑ父さんの、位牌の前で
いと　煙り絕やさぬ常香を
いは　盛るも孝行。
その　切れるも浮世の

いと　義理と佛へ
いは　立つる誓言。
その　そんなら佛間へ。
いは　サア、娘、おぢや。
いと　エヽモ……行くわいなア。
　　ト唄になり、三人思ひ入れあつて上手の障子屋體へ入る。直ぐに門口より左五兵衞歸り來り
左五　ヤレ〳〵、矢尻普請と井戸替へで、交ぜツかへすワ。殊にこの合口も、うつかり置かれず。ア、立騷いで咽喉が渇く。
　　ト内へ入り、鑵子を見附け
　イヤア、白湯がたぎつてるるな。ドレ、息つぎに
　　ト鑵子の蓋を取り、湯を汲んで飲む事あつて
　ヤレ、有り難い〳〵……イヤ、有り難いといへば
　　ト懷より尊像の廚子をソツと出し
　この尊像も、おツつけ金に

功二番目序幕　同返し





ト云はうとして、思ひ入れ、また湯を飲みゐる。この時、上の屋體の障子を明け、お園、尊像を見附けて思ひ入れ。下の路地より忠八出て來り

忠八　番頭さん〳〵、コレ、番頭さん。

ト後より脊中を叩く。左五兵衛驚くはずみに、持つたる尊像を鑵子の中へ落し

左五　エヽ、恂りさせた。何を其やうに

忠八　何を其やうにも凄まじい。サア、來て綱を曳きなさい。手が足りぬわな。

ト引ツ張る。

左五　今まで手傳つたではないか。おらア湯を飲みに來たばかりだワ。

忠八　サア、飲んだら來て綱を曳きなさい。

左五　ハテ、いま行くわな。

忠八　サア、來なさいな。

左五　サア、行くは行くが、おらア大切な物を、この湯の中へ

忠八　湯へは、しまつて入りなさいよ。

左五　イヽヤ、この鑵子の中へ

忠八　馬鹿を云ひなさい、鑵子が水風呂ではあるまいし。サア、來なさいな。

左五　ハテ、あの中へ

忠八　エヽ、來なさいな。

ト心を殘すた、忠八は左五兵衞を引ッ張り〳〵、路地口に入る。奥よりお芳、水注し、藥鑵を持ち出る。坊太、鐵、莚に大工道具を取ひろげたるを二人して引ッ張り持ちながら出て來り、跡より六三、九尺ばかりの丸太を擔ぎながら出てくる。

鐵　何だかこの內は、素敵にごたつく內だぜ。物置で始めりやア、澤庵や薪を出すのに邪魔になると飯焚がぼやくし、臺所ですりやア、聟入りの料理拵への邪魔になると吐かす。どこへすればいゝのだか、ねッから解らねえ。

六三　コレ、小僧どん、このお座敷で、仕事をしてもよいか。

坊太　隨分よいね、今日は客があるから內は取込み。爰で始めねえ。

六三　聞きなさい。泥坊の切つた藏の壁を、今のうちに繕ふやら、直ぐに左官仕事に渡すやら、べら坊に忙しねえ目にあはせた。おまけが井戸へ身投げと聞き、中から見物が押しこんで、土藏際の羽目を踏み毀すやら、誠に交ぜッけえしだ。こいつも身投げのお庇だ。

鐵　マア、この板塀の附け柱を角取つて、締りの方を早くしべい。

六三　さうしよう／＼。

ト兩人莚をひろげ、墨打ちなどして、兩人して手斧打ちなどよろしくあり。

坊太　コレ、お芳どん、貴様は水をどこへ持つて行く。

よし　この鑵子へ、水を入れようと思うて。

坊太　これサ、鑵子には湯が一ぱいあるよ。

よし　サ、その鑵子の湯は、あのはんとへ入れて、跡へ水を注して置けと、お袋様の云ひつけ。はんとの水が凍るによつて、湯を入れて置けとの事。こなさん、その湯を、はんとへ明けて下さんせ。

坊大　エヽ、よく人を使ふの。

ト捨ぜりふ云ひながら、鑵子をソッと持つて行き、はんとの中へ明けながら

六三さん、お前、初午に王子へ行くなら、おれも一緒に行かう。歸りに六阿彌陀へ廻らうか。

ト捨ぜりふのうち、脇見をして、件のはんとへ明けるゆゑ、中の尊像、湯と共にはんとの中へ入る事。お関、此うち障子より覗き、六三と聞き、この男の事と何心なく思ふこなしあつて、尊像の様子を見うけ、障子さす。お芳、件の水を鑵子の中へ入れて、元の風爐へかけ置く事。奥より下男

出て來り

下男　カウ〳〵、大工さん、塀のぶツ倒れた所から、身投げがゐるかと思つて、矢鱈に人が覗いてならねえ。出來るまで假りに、何ぞぶツつけて置いてくんねえ。

鐵　オヽ、さうだらうと思ふから、いま柱を木取つてゐる。直ぐに出來やす。

下男　それでも、代り〴〵覗いて、うるさくつてならねえ。どうぞ早くしてくんねえ。

鐵　ハテサ、今直に出來る、ちつとの間。

下男　ちつとの間でも見つともないから。

鐵　エヽしつこい、いま出來るといふに。

六三　これサ。ちよつと戸板でもぶツつけてやらつし。

下男　どうぞ、お頼みだ〳〵。

鐵　ハテ、やかましい手合ひだ。

ト鐵、鐵鎚を持ち、下男附いて奥へ入る。

よし　コレ、こなさん、用を仕舞うたら、見世へ行かしやんせ。

坊太　貴樣も行かツし。

よし　こなさんばかり行かしやんせ。わたしはお絲さまの
ト六三へ思ひ入れ。
坊太　エヽ、貴樣も來さつしやいな、
ト引ッ張る。
よし　これはしたり、わしは
坊太　何でも連れて行く。行かつしやい〳〵。
ト無理やりにお芳を押やり〳〵、坊太奧へ入る。上手奧よりお絲、思ひ入れあつて出てくる。六三、
ヂロリと見て
六三　オヽ、そこに居なさるはお絲さんかえ。モシ、お絲さん、お前、何を考へ込んで
ト お絲淚ぐみ、默つてゐる。
アヽ、お詞が無いな。なぜお前は默つてゐる。拗ねたな。ひぞり姉さん皷が上手。人を騙すも上手だ。聞けば今夜お前のところへ、お聟さんが來るさうだねえ。それも沙汰なし、その上に、物を云つても、だまりの天神。お絲さん、おめでたいねえ。
ト氣を揉み、思ひ入れ。お絲、こなしあつて

いと　そりやモウ、今宵の事を聞きなさんしたら、腹も立ちませうが、お前もわたしに僞り云うて

六三　何を僞りを云つたえ。何を嘘を吐きやした、お絲さんえ、モシ……わしが嘘を云ふといふは、爰の内を出て、女房に持つのが、遲いといふ事かえ。さうかえ〳〵。

ト仕事をしながら問ひかける。

いと　イエモウ、どうしてわたしがやうな者を、なんでお前が

六三　モシ〳〵、さう嫌味を云はねえものだ。今にも連れて行く事は知つてゐるが、ちつと此方に、むづかしい羽目があるによつて

いと　お前の方に譯があるなら、お構ひなされますな。

六三　氣障を云ふぜ。お前もおれも、江戸屋敷に勤めてゐる時に、お腰元のとしといふ女はおつりきだと、此方で思へば其方でも

いと　文の數々結ぶの神、朋輩衆のじやれ事にも、とし左七となぶらるゝ、その嬉しさが奥樣の、お耳に入つてお暇ゐゑ、内へ歸つてお前とは、別れ〳〵の其うちに

六三　思ひがけなくこの左七も、預かりの寶紛失の、その誤まりにて流浪のうち、大工の六三と假名して、誂らへさせた染拔きに、お前の元の名のとほり、この手拭を放さずに、持つてゐるのも朝夕

に、二人一緒で居る心。

いと　そりやわたしとても同じ事。この月形の櫛の蒔繪は、お前と早う祝言して、めでたく〳〵なるやうに、祝うて差して居りますわいなア。それほど思うてゐるわたしを、ようも騙して

六三　さう疑ぐるなら今からでも、連れて行くから案じなさんな。その代りお前も、おれの下齒になると、骨が折れるぜ。

いと　下齒とは何の事ぢやえ。

六三　成る程、こいつは解るめえ。嬶アの事よ。まづ第一、頭へ裂れを掛けたり、油をつけたりする事はならず、髮はズッと結び髮で、細帶に前垂れ、飯も炊いたり、德利を提げてその歸りに、七ッ屋の番頭を口說く事まで、覺えにやアならねえぜ。

いと　わたしやお前をのけて、外の男を口說いた事はござんせぬ。その七ツ屋とは、どこの内でござんす。

六三　こいつも解るまい。一々數へるなア骨の折れた事だ。さうしてお前は、屋敷の癖が失せねえから物云ひが丁寧過ぎて惡い。

いと　サア、その物云ひを、敎へて下さんせ。

六三　まづ、ザツと云つて見せうなら……カウ、おらの内ぢやア、まだ仕事から歸らねえか、又どこぞのやににでも、びろついてゐるだらう。困つた飲んだくれだぜ……と、この位に云はにやア堪へねえ。
いと　滅相な。殿御の事を其やうに
六三　その殿御からして氣にくはねえ。
いと　サア、氣に染まぬから、わたしや大工樣の女房にはなられますまい。もうその物云ひも、覺えずとようござんす。
六三　アヽ、女房にならぬとは、ソレ見たか、今夜の聟と祝言する氣だの。
いと　イエ〳〵、わたしや祝言せぬ心ぢやが、お前の方に、お内儀さんがあるによつて。
六三　コレ、どこにわしの女房がありやす。
いと　アレ、まだお前其やうに、先刻にお前のお內儀さんがござんしたわいな。
六三　ナニ、わしの女房といふ奴が來たえ。イヤ、さういふ奴があれば相手だ。そんな奴がうしやァがると、ひッつらまへて、うぬ、よくおれが女房と吐かしたな、その代りうぬが面を、鐵鎚で毆りまげて

ト鐵槌を取つて仕方話しのうち、怪我にてお絲へ打ちつける。

いと　六三さん、お前投打ちをさんすかいな。ナニお前のやうな

六三　ナニ、投打ちはせぬのサ。コレ、そのマア今の話しの、跡を云ひなさい〳〵。

トこの時奥にて

皆々　曳いたり。

ト聲する。六三これにて立つて來り、お絲の側へ來ると、鉋屑思はずお絲の方へ散る。お絲袖にて拂ふ。六三見て

六三　こいつは御免なさい。大事の花嫁樣が埃だらけだ。御免なさい〳〵。

トお絲にかゝりし鉋屑を手拭にて拂つてゐる。この時路地の口より左五兵衛、綱の先を持ち、跡より伊八、鐵、若い者、綱に取つき、この體を見て

左五　コレ〳〵六三、そのお子の側へ滅多に寄るな。今夜は內祝言があるぞ〳〵。

六三　なにも寄りはしねえわな。わしは仕事をしてゐるわな。

左五　仕事なら、もつと此方へ寄つてしやれ。

六三　いゝわな。仕事だわな。

左五　ハテ、見つともないといふに。

ト内へ入らうとする。路地の内にて

忠八　ソリヤ、綱だワ。

皆々　ソリヤ來たア。

ト内にて綱を曳くゆゑ、左五兵衞曳かれて、小言を云ひ〳〵、跡退りに入る。

いと　コレ、六三さん、お前、わしが心を、知らんせん事はあるまいに、なんでわたしが祝言する心があらう。それといふも、お前に連れそふお方があるゆゑ。

六三　エヽ、この子も情が強い。どこにわしの女房がある。あるといふ奴がありやア、それこそ喧嘩だしやくる奴を出しなさいよ。サ、連れて來なさい〳〵。そんな事を吐かす奴は、横ツ面を、この鑿で

ト鑿を振り廻す。

サア、しやくつた奴を、云ひなさい〳〵。

ト手を取つて引立てる。この時、路地の内にて

忠八　曳いたりや。

ト聲して、左五兵衛また綱の先を持ち、「アリヤ〳〵」と云うて出る。この途端に六三、投打ちをする。
左五兵衛入らうとする時、鑿をぶちつける。

左五　アイタヽヽヽ、なぜおれが面へ投打ちをするのだ。

ト鑿を取る。

六三　わしやア知らねえわな。

左五　イヤ〳〵、知らぬ事はない。おれが面へ

ト寄らうとする。奥にて

忠八　ソリヤ、綱ぢやぞ。

皆々　ソリヤ來たワ。

ト奥にて綱を曳く。左五兵衛、鑿を持つたまゝ引かれて入る。六三、お絲の側へ來て

六三　コレ、お絲さん、お前、今、わしが女房と云ひなさるが、して、わしが女房だといふ女に、お前逢ひなすつたか〳〵。

いと　逢うたによつて、わたしが切なさ。それに今夜内祝言。重なるわたしが身の辛さ。

六三　イエ〳〵、わしが女房が、爰へ來やう筈はなし。して、わしが名を、何と云ひました。

いと　エヽ、お前も何を云ひなさんすのかえ、大工の六三と云はんしたわいなァ。
六三　そりやこそ嘘だ。國の女が、大工の六三といふ事を、ナニ知るものか。
いと　國の女と云ひなさんすは、矢ッ張りお前がお國に、色の女中さんが
六三　イヽエ、無いのサ〳〵。よし有つたとて今さらに、お前をのけて、どうして外へ
いと　そりや嬉しうござんすが、わたしや今宵の内祝言が
ト思ひ入れ。
六三　打ッちやつておきねえ。聟が來りやァ、それこそお前を連れて逃げるワ。
いと　エヽ、アノ、わたしを連れて行て下さんすかえ。
六三　お前さへ變らすば、連れて退くわな。
いと　エヽ、嬉しうござんす……とは云ふものゝ、先祖の爲と母さんが
六三　エヽ、親の事は打ッちやつておきねえ。四の五はいらねえ。爰から逃げよう。サ、歩びねえ〳〵
ト お絲の手を引ッ張り引立てる。お絲、心づかひの思ひ入れ。よき時分より槌右衞門出かゝり、立聞いてゐて
槌右　間男見附けた、大工の六三、動きやァがるな〳〵。

いとヤヽお前は。
六三 コレ〳〵、この六三が、なんで間男だ。
槌右 間男だ〳〵。きつと見附けたぞ。間男だ〳〵。家内の手合ひ、來さつしやい〳〵。
トわめく。お芳、五郎八。門口より左五兵衞出て來り
五郎 アヽ、そんならこの六三が、内の娘を
左五 モシ〳〵、聟樣、大工の六三が、アノ間男を致しましたか。さうあらうと思つた。
槌右 コレ〳〵、左五兵衞、娘のお絲とこの六三、じやらくらするのを、きつと見たぞ。間男だ〳〵。
よし これはしたり、滅相な。なんでマアお絲さまが
いと わたしに疑ひあるとても、六三さんにはこれ程も、いたづらがましい事とては
槌右 エヽ、お絲の庇ふが、腹が立つわえ〳〵。二人は間男だワ〳〵。
六三 やかましいやい。云ひ分あらばおれに云へ。この子の知つた事ではねえ。コレ、お芳どの、その子が居ては面倒だ。お絲さんを、連れて行かつしやい〳〵。
よし 合點でござんすわいなア。
いと それぢやというて、主の樣子を見捨てゝは

六三　ハテ、ちつとも早く、連れさつしやい〳〵。

槌右　イヽヤ、娘と三つ鼎で

ト寄るを、六三支へる。

よし　マア〳〵、お出でなさんせいなア。

トお絲を無理に手を引き、奥へ連れて入る。

左五　コレエヽ六三、間男は世間にもあるが、われは大それた盗みをするな。盗んだぞ〳〵。

六三　コレ〳〵、左五兵衛どの、間男との疑ひは、あの子と二人居たのが誤まり。それに又、盗んだとは、何を六三が盗みをした。

左五　イヤ、隠すな〳〵。昨夜土藏の壁を切り、入つた奴は、こいつどうでも、勝手を知つた泥坊と、今朝ひやあひを、よく〳〵見たら、コリヤ、この鑿が落ちてあつた。柄には、コレ〳〵、大工の六三といふ燒印。そんなら昨夜盗んだは、われだな〳〵。

ト鑿を出して見せる。

六三　成る程、それはおれが鑿。爰にある手斧の柄、殘らず大工の六三と燒印。併し今まで、土藏の繕ひしたからは、道具が落ちてゐまいものでもない。して、昨夜の土藏で紛失したのは

左五　オヽ、掛替へのない印子の尊像。

六三　ナニ、印子の尊像……ハテ、心當りのその品が、この家にあるとは、もしやお家の

ト合點のゆかぬ思ひ入れ。

槌右　コレ〳〵、その尊像は大江の屋敷で、御詮議なさる品ゆゑに、おれが買はうと相談最中。殊に大工の身を以て、色紙を買はうなんぞとは、どうでもこいつは怪しいわえ。

五郎　成る程、大工風情で菅家の色紙、買はうといふのも曲事だ。その上盜みをすると聞いては、此方も滅多に賣られない。コレ、六三さん、色紙は賣らぬ。變替へだよ。

六三　イエ〳〵、今更それを變替へられては、わしが立たねえ。是非〳〵買はにやアならねえよ。

五郎　ならずば金を出さつしやれな。

六三　サ、今といつちやア

五郎　金が無くば外へ遣るワ。一文なしの癖に、よく今まで釣りつけたな。エヽ、嘘吐き野郎め。

ト六三を蹴飛ばす。

六三　コレエヽ、釣りつけたとておぬしは、おれを足蹴にしたな。

ト立ちかゝるを、左五兵衞押へて

左五　足蹴にしてもいゝぢやァねえか。われは現在得意先の、矢尻を切つて尊像を、盗んだ作法は

六三　どうしたと。

左五　泥坊だから、この左五兵衛が

　　　　ト六三をくらはす。

六三　覺えもないのに、うぬァ六三を

　　　　ト立ちかゝるを、槌右衞門引附け

槌右　間男ばかりか覺えある、娘子供をちよろまかす、うぬは誘拐し、ぶつてもいゝワ。

　　　　トくらはす。六三その手を捕へ

六三　そんならどうでも間男呼はり、矢尻も切つたと、うぬらが寄つて

左五　オヽ、矢尻を切つた證據はこの鐶。われが道具。うぬは大方評判の

五郎　半時九郎兵衞が同類か。

六三　何と云はうが差あたる、色紙はどうぞ五郎八どの。

五郎　否だわエヽ。

六三　聞き譯なくば

ト槌右衛門を投げのけ、五郎八を引附ける。

槌右　うぬ、手向ひするな。間男め。

ト立ちかゝるを、六三キッととめて

六三　間男夜盗と云はれても、色紙はどうぞわしが手へ、渡して下さい、その代りには、どうされても

左五　大事がなくば左五兵衛が、矢尻を切つたと云はせて見せうか。

槌右　間男したと、おれも云はせて。

六三　どうともしやれ、その代り、色紙は

五郎　渡してやらうが、金があるか。

六三　サア、その金は。

左五　無くばおいらが

皆々　斯うするワ。

ト三人寄つて六三を打擲する。六三、無念を堪へ、打たれゐる。この時、権兵衛出かゝり、この體た見て中へ分け入り、皆々を取つて押へ、六三を圍ひ、しやんとなる。

三人　ヤ、わりやア権兵衛、なぜ投げた。

權兵　アイ、投げてもよい。權兵衞でござります。六三どのゝその金は、わしが出しませう。

六三　ヤア、色紙の金を、アノおぬしが

權兵　ハイ、私しが出しまする。云はゞお前は以前の古主。

三人　ヤア。

權兵　サ、主筋の六三どの、それゆゑに古鐵買ひが、この出入りを買ひに入りました。若林の旦那、色紙とやらのその金は、私しが立替へませうか。

五郎　コレ〳〵、古鐵屋、金さへ出さば賣りもせうが、五十兩の

權兵　金もござります。お渡し申しませう。

槌右　金は湧き物、出來もしやうが、この六三は間男だ。

權兵　モシ、聟樣、お前、いつ祝言をなされました。

槌右　杯はしねえが、今夜はおれが内祝言ぢや。

權兵　それ御覽じませ。杯も濟まねえで、お絲さんの御亭主とも云はれますまい。内祝言の無い内は、矢ツ張り他人、すりや、主の無い娘御、間男でありさうもないものでござります。

槌右　成る程、それぢやァ間男とは云はれないでも、云ひ號けの聟樣だ。

五郎　殊に色紙を買ふと云ふが、貴樣は、いよ〳〵

權兵　只今お渡し申しませう……モシ、東林さん、ちよつとお目にかゝりませう。

ト奥へ向ひ云ふ。東林出て來り

權兵　お前が買はうと云はしつた、あの代物の事につき、ちつとお前に

東林　コレ、權兵衞どの、先刻の話しを、相談でもする氣か。

ト花道の方へ連れゆき

モシ、先刻お前が五十兩に、値を附けさしつたあの一腰。ありやお前、誠に買つて下さりますか。

東林　オヽ、買ふとも〳〵、五十兩なら、きつと買ひませう。賣らつしやるか〳〵。

權兵　賣りまする〳〵。買つて下さるか。エヽ、有り難い。併し、いま金が出來ませうか。

東林　オヽ、出來るの〳〵。コリヤ〳〵

ト槌右衞門より預かりし五十兩を出して

預かり金の五十兩、この分ではあの聟入りも、當分の事には合點がゆかぬ。繰り廻しに、この金で買ひませう。

權兵　五十兩ござりまするか。エヽ、有り難い。サア、賣つてあげませう〳〵。

ト件の一腰を出す。

東林　こなたが賣るなら、五十兩は卽金だ。

權兵　そんならちよつと、賣上げを下さりませ。

東林　アヽ、買ひ手の方から賣上げを取るか。

權兵　左樣でもござりませぬが、私しは明盲目でござりまする。むづかしながら念の爲、お前よろしう

東林　よし〳〵。正直な男だ。解りました。

ト懷の半紙を出し、懷中矢立の筆にて文言を認める。

サ、これでよし。

權兵　讀んで聞かせて下さりませ。

東林　アヽ、さうであつたの。『一札の事、一つ、金五十兩なり、右は差し料一腰、緣頭は春霞、曙のこしらへ、鍔は南蠻鐵、赤木作りのこしらへ、右の品慥かに買ひうけ申し候ふ、高金に候ふ間、此方より書附け入れ置き候ふ、念のため依つて件の如し、權兵衞どのへ、百川東林』……これでよからう。

權兵　よろしうござります。サ、この一腰をあげませう。

東林　ソリヤ五十兩、改めて受取らつしやい。
ト金と一腰を引替へにして
愚老もこれで金儲け。
ト云はうとして
ハヽヽヽヽ、これで安堵しました。
ト權兵衞は書附けを紙莨入れへしまひ、兩人舞臺へ來り
權兵　サ、金が出來ましたく。六三さん、氣遣ひさんすなく。
六三　コレく、權兵衞どの、その金は
權兵　出來ました。サ、五郎八さんとやら、手附け金五十兩、受取つて下さりませ。
五郎　ア、そんなら急にその金が……モシ、大黑屋さん、五十兩の手附けを取れば、色紙は六三へ…
……モシ、よしかえく。
槌右　イヤくく、六三が手附けは、取らせぬく。おれも手附けを五十兩、たつた今渡すワ………
コレく、東林坊。持參に預けた五十兩、ちよつと寄越したく。
東林　エヽ、あの金が

槌右　オヽサ、色紙の手附けだ。先刻の金を
ト悑りする。
東林　サ、その五十兩は、たつた今
槌右　これサ、手附けに遣るのだ。急に先刻の
トうぢ〳〵する。
東林　サア、あの金は
槌右　どうしたよ。
東林　サ、大金ゆゑに、餘所へ預けて置きました。ちよつと參つて
ト行くを捕へ
槌右　コレ〳〵、あの金を餘所へとは。
東林　預けて置いた。取つて來ます。
ト一腰を持ち、一散に向うへ走り入る。この時東林、件の毒藥の入りし紙入れを落す。
權兵　モシ〳〵、東林さん、紙入れが落ちてある。コレ
ト向うを見て

イヤ、雲を霞と行かしつた。わしが預かり、届けて進ぜう。

ト懐中して

サ、手附けを渡しませう。金の預かり。

ト五十兩出す。五郎八取つて

五郎　認め置いた手附けの受取り、名を書き入れて大工の六三。これを渡しますよ。

槌右　それではおれが詰まらぬが、何を云つても預けた金を、あの坊主めが。エヽ、どうしてくれうな

トむしやくしや腹を立てろ。五郎八、紙入れの中より、書いて置いたる手附け證文を出し、宛名を書き入れ

五郎　サア〳〵、色紙の手附け五十兩。受取り手形を

ト渡す。六三取つて

六三　跡金のしまひに、色紙は六三が買ひましたよ。

ト受取を懐中する。五郎八は胴巻へ金をしまふ。この時、バタ〳〵にて、伴助、走り出て來り、内を窺ひ

伴助　頼みませう〳〵。お内へ、出入りの六三どのは居られますかな。

トこの聲に六三出て

六三 ヤ、慥かこなたは

伴助 へイ〳〵、神原佐五郎が下部の私し。この近邊へ主人のお供。佐五郎申し遣はせしは、先日申し越した通り、三品のうち何れなりとも、御持參なされますやう。詮議の日限も最早近々。面談いたし、申したき儀もござれども、同役どもと主用ござつて、互ひに遠慮。其方逢つて傳言いたせと、主人の口上。お供でござれば、下部は直さま。

ト引返す。六三とめて

六三 すりや、この邊まで佐五郎どのには

伴助 今の御返事、少しも早う。お供でござれば、お暇申しまする。

ト引返して走り入る。跡見送つて

六三 すりや紛失の品々も、近づく日限りに御主人の大事。取分け詮議はあの一腰。

トこの詞に權兵衞思ひ入れあつて

權兵 モシ、尋ぬる品の其うちに、いま一腰と云はしつたが、どうやら心當りもあるが、その拵らへを知つてござりますか。

六三　その拵らへは緣頭、春霞と名けたる、模樣は曙、鍔は卽ち南蠻鐵、赤木作りの拵らへにて

權兵　ヤヽヽヽ、その拵らへに、割符を合す

ト思ひ入れ。

六三　ヤヽ、心當りが

權兵　ありまする。

六三　ヤア。

權兵　ありはあれどもその品は、色紙の手附けの五十兩、賣り拂うたもたつた今。こりやア何方を何方とも

六三　ヤヽ、なんと。

權兵　それと知つたら賣るまいものを。したり、まだ〳〵、よもや、外へは

ト向うを見て思ひ入れ。

六三　その一腰が、どこの手許に

權兵　氣遣ひさんすな、あの品ならば

六三　ヤ。

　　　ト寄るを振り切り

權兵　取つて參ります。

　　　ト曲撥になり、一散に向うへ走り入る。六三思ひ入れあつて

六三　只事ならぬ權兵衛が、血相かへて。こりや斯うしては

　　　ト向うへ行かうとするを、槌右衛門引とめ

槌右　イヽヤならねえ。わいら二人が云ひ合せ、間男沙汰の云ひ分を、逃げる工面か。さうはさせない。

六三　そんならどうでも間男に

槌右　お絲に疵を附けた六三、うぬが面にも極印附けろ。

　　　ト腰の周圍を探り見て、左五兵衛の合口を見つけ

　番頭、借りたぞ。

　　　ト左五兵衛の差してゐる合口を取つて拔かうとする。左五兵衛うろたへ

左五　アヽコレ、滅相な事を。このマア刃物は

　　　トこの手に縋りとめる。槌右衛門、急きこんで拔かうとする。この時奧よりお絲走り出で、槌右衛門の手に縋つて

いと　アヽモシ、腹が立つなら、わたしを爱で。いたづら者はこのお絲、切るとも突くとも、サヽ、お前のまゝに。

ト氣遣ふ思ひ入れ。

左五　モシ〳〵、必ず拔かせぬやうに〳〵。

いと　刄物はわたしが、どうぞ預かつて

トこれにて、槌右衞門、少し心の解けし思ひ入れにて

槌右　おぬしに刄物を預けやうが、六三と切れて女房になるか。

いと　そりや、どうなりと。

槌右　そんなら、まんざら

ト合口を離す。

いと　預かりましたわいなア。

ト合口を取る。この時、上の方、障子を明け、お園窺ふ。正面よりお岩出かゝりゐる。

左五　六三が面へ疵をつけるも、あんまり氣短か。その合口は左五兵衞へ

ト寄るを

いと　イエ〳〵、刃物はわたしが方へ

ト合口をきつと抱へて、思はず二人を見附ける。

槌右　預かる心は、六三を庇ふ氣か。そんならどうでも六三と色か。

六三　この子と色なら何とする。成る程六三が

いと　イエ〳〵、わたしやお前と、今日からフツツリ

六三　ヤ、そんならお前は……今更わしを捨てる氣か。

いと　さうではなけれど

槌右　そんなら六三と

トお絲振りむく。お岩、自害するといふ仕方する。

いと　杯するわいなア。

ト俯向く。六三思ひ入れあつて

六三　俄に心變つたも、おほこ娘の玉がへり。さうとは知らず大切な、品を詮議の身を以て、色に心を引かされて、延引したが身の誤まり。合せ物なら離れ物。女房に持つたといふでもなし、ほんの仇つき、浮氣がたつぷり。どうするものだ。したが間を見て、禮は云ふよ。

いと　お前さんと切れねば、母さんがお身の上。その上お前の在所のお内儀

いは　井戸へ身を投げ死ぬるといふ、それ程の義理合ひゆゑ、娘はこなたが、疾から嫌ぢやと云うてゐるわいなう。

トお岩、ツカ〳〵と出て

六三　ナニ、井戸へ入つた修行の尼、あれが六三の女房といふのか。それでお前は、この六三を突き出すのか。

トお絲、俯向いて頭を振る。

いは　頭を振るはこの母も、先刻の女中も殺す氣か。

トお絲、また頭を振る。

六三　それで大概様子が知れた。こりやアお前と、この六三が、縁切り工面の作者があるわい。

トこれを聞いてお園、振り袖の形にて、件の葛籠を脊負ひ、脚絆を探し、これを穿いて逃げ支度する

して、六三が女房といふ、身投げの女は

いと　あの小座敷に

六三　其奴に逢はうワ。

ト行きにかゝろ。お園うろたへ、葛籠を脊負ひ

その　ハイ〳〵、順禮に御報謝。

ト早足に行くを、六三捕へ

六三　見れば見知らぬ順禮尼、われは六三が女房か。亭主のおれは覺えがねえ。こりやア、この子と六三が仲、身投げを仕事に裂く心、それを頼んだ奴等があらう。サ、それを云へ〳〵。

ト引附けて振り廻す。

その　アヽモシ〳〵、わたしや何にも存じませぬ。大工の六三といふ者の、女房と云うて、斯う〳〵せいと、あのお二人が

トお岩左五兵衞へ思ひ入れあつて

サ、云ふまいとは存じたが、もう斯うなつては身投げのあらまし、斯う〳〵してと敎へられ、怪我せぬやうにあの井戸へ。

六三　それで解つた身投げの拵らへ、六三が名前を騙つた女、まだ背負うたる

ト立ちかゝるを、お園、外へ逃げて行く。この時、枝折り門の外へ忠八出て來て、お園を捕へ

忠八　身投げの女、宿老から指圖のあるまで逃がされぬ。併し騙りとあるからは、棒縛りにもするとこ

ろを、女の事ゆゑ箒に縛つて

　　トお園を箒に縛りつける。

その　アヽモシ、そんならどうでも、アノわたしをば

忠八　あの奥藏へ縛つて置いて

その　明日は早々この形で

忠八　たわ言つかずと、立ちやァがれ。

　　トお園を無理に引立て、奥へ入る。槌右衛門、思ひ入れあつて

槌右　女の騙りは其方のこみやり。おれが持參も尊像が、欲しさのまゝの入り聟だ。

左五　それを盗んだ六三は泥坊、コリヤ、夜盗だぞ。

六三　やかましいワ。六三に於てはこれ程でも、間違ひの無い男だぞ。鐵火、湯起請、何なりと、望んで來やれ、凹みはせぬ。

槌右　その大風が面白い。なんぞ六三に

　　ト鑵子を見附け

あつたぞ／＼。コレ／＼、爰に鑵子のたぎり立つ、この湯の中へ手を差込み、湯起請取らせて見

さつしやい。

ト鑵子を差出す。お絲、思ひ入れ。

六三　ナニ、この湯の中へ、六三が腕を

左五　面白い〳〵。サア〳〵、釜へ手を入れて

ト鑵子を見て思ひ出し、悔りこなし。

いと　アヽ滅相な。どうしてマア、この湯の中へ

トとめるを、お岩引附け

いは　お絲、構ふな。六三が腕を火傷させ、それで腹癒せ。

左五　アヽ、モシ〳〵、腕の火傷は氣の毒〳〵。鑵子は必ず御無用々々々々。

ト鑵子を押へる。

いは　これサ、左五兵衛、火傷さしやいの。

六三　腕が燒けるか爛れるか、盗まぬ證據は鑵子の湯起請。それが誓紙だ。

トかゝるを左五兵衛とめて

左五　コレ〳〵、六三、それが氣短か。たつて誓紙がしたくば、外に仕様が

トうぢ〳〵して、いゝはんとを見附け、手早く下ろして

いゝはんとで誓紙を

ト差つける。

六三　イヽヤ卑怯な、ナニ水で。六三は沸湯で

ト寄るを、お絲とめて

いと　お前の代りに、わたしが鑵子で

トいゝはんとへ手を入れ、中より件の尊像を掴み上げて

ヤ、中に何やら。

六三　こりやコレ正しく印子の尊像。土藏の中の紛失は

槌右　イヽヤその品、この聟が

トひつたくるを、お岩直ぐに取つて

いは　この尊像は此方の代物、欲しくば賣つてやらう程に、いつでも金を持つてござんせ。

左五　ハテ面妖な。入れてあつたは鑵子の中だが

ト鑵子へ手を入れ

アツヽヽヽヽ。

ト手を振り廻す。

六三　すりや、その尊像は、どうでもいは金さへ寄越せば、いつでも遣るワ。

六三　サアその金は

槌右　その尊像より、六三は間男。

左五　ればかりおやアねえ、尊像を欲しがるからは、土藏を切つたおのれは泥坊。

槌右　間男盜人の重罪人、代官所へ連れて行かうか。

六三　サアそれは。

いは　但し金にて尊像買ふか。

六三　サアそれは。

皆々　サア

六三　サア

皆々　サア〳〵〳〵

敵皆　六三返事は、ドヾどうだ。

六三　チエヽ。

　　　ト口惜しき思ひ入れ。

いと　六三さん、こりや何とせう、どうせうぞいなア。

六三　折角尋ねる尊像も、金が無ければ手に入らず、それに間男夜盗の難題、それを洗へば一々に、云ひかけひろぐうぬ等は首、八丁畷は烏の餌食。併し、そんな隙は六三は持たねえ。まづそれよりは差あたる、あの尊像が

　　　トお岩の方へ思ひ入れ。

槌右　なにを六三のこの野郎め。

　　　ト打つてかゝるを、押へて

六三　こいつは急に、金の工面を

　　　ト振りほどいて、また來る槌右衛門の裾をかいて投げる。左五兵衛「うぬを」とかゝるを、いゝ、はんとを取つて左五兵衛にかむせる。チヨンと木の頭。

せにやアならねえ。

ト お絲、六三へ寄らうとするを、お岩押へる。左五兵衛、水を浴びてブル／＼と慄へてゐる。槌右衛門おこつくを、六三踏みにじる。双方よろしく、ひやうし　幕

ツナギ、通り神樂。

第二番目　序幕返し

絲屋土藏の場

一石橋の場

役名――絲屋娘、お絲。六三云ひ號け、お園。盜人、半時九郎兵衛。番頭、左五兵衛。大黑屋槌右衛門。絲屋後家、お岩。醫者、百川東林。鳶の者、忠八。丁稚、坊太實は雲才。若林屋五郎八。船頭、市川屋の三次。夜番、ねず六。大工、六三。

本舞臺、上の方、絲屋の土藏、二階の切拔きし所へ土を塗り、荒打ちしてあり、足代を取つけ、下の方忍び返し、黑塀、出入りの切り戸、天水桶。よき所にこれ土へ菰をかけ、紙のしるしを立てゝありすべて阿野屋裏通りの體。四つの鐘、拍子木の音にて幕明く。

ト向うバタ／＼にて、五郎八あわたゞしく、

五郎　泥坊々々。

ト駈けて出る。跡より三次、屋根船の提灯を持ち、東林同じく駈け來り

三次　五郎八さん〳〵、何を取られなすつた。

五郎　聞かつしやい。あの四つ角で、怪しい奴が突ッかゝつて、懐の紙入れを取つて逃げやアがつた。跡を追ひかけたが、直に見失つた。

三次　そいつは大變だ。定めし金が

五郎　なにサ、二分ばかりもあつた。仕合せな事には、色紙の金は内懐にしつかりとあるのよ。

三次　そいつは奇妙だ。時にお醫者さん、お前も何ぞ取られなすつたか。

東林　わしは大切な脇差を取られやした。

三次　お前の脇差なら、高の知れた耳くじりだらう。

東林　なにサ、あの刀は、やう〳〵の事で五十兩で買つた……大變々々、どこまでも追ひかけて行かねばならぬ。泥坊々々

ト先へ追ひかけ入る。

三次　とんだあわて者だ。

ト三次、提灯の灯にて、足許の紙入れを見附け

五郎　モシ〳〵、爰に紙入れが落ちて居りやす。

三次　こりやアおれが紙入れだが、中の品は皆抜きやアがつたな。

五郎　さうでござりやせう。モシ、お歸りなさるなら、わたしが内から、船でお出でなされまし。

五郎　さうしませう。船を拵らへて下さい。イヤモウ、油斷のならねえ。

ト捨て鐘にて、兩人話し合うて向うへ入る。凄き合ひ方、時の鐘。これ土のかむせし菰をソツとまくり、中より九郎兵衞、五十日鬘、古小袖、藁草履にて、顏を出して、向うを見送り、今抜きし紙入れの金を出し、數へて見る思ひ入れ。向うにて人音するゆゑ、九郎兵衞窺ひ見て、頰かむりする。矢張り時の鐘。向うより六三、銅の一本差しにて、頰かむりして出て來り、花道にて

六三　アヽコレ、權兵衞に逢ひたいものだが、先刻の始末が氣にかゝるゆゑ、道で工面のこの一腰、たばさみ來たも絲屋の尊像。

ト思ひ入れあつて

それにしても權兵衞が、便りを聞きたいものだが。

ト權兵衞を尋ねる心にて、思はず草履の鼻緒を踏み切る。

南無三ぼう、鼻緒が切れた。

ト草履を引提げ、舞臺へ來り、上の方の用水桶に腰をかけ、あたりの藁を拾ひ、鼻緒をすげてゐる。この間に九郎兵衞は、入れ代つて花道の方へ行く。下座より蕎麥屋、風鈴蕎麥の荷を擔ぎ出て來り

蕎麥 蕎麥うわうい。にかけ南蠻、

ト呼びながら花道の方へ行く。

九郎 蕎麥屋さん／＼、一つくんなさい。

蕎麥 ハイ／＼。

ト捨ぜりふにて蕎麥をこしらへ出す。九郎兵衞、かッこんで食ふ。六三、鼻緒をすげてゐる。切り戸口より忠八、坊太を連れて出て來り

忠八 コレ／＼小僧や、おれが奢るから、思ひ入れ蕎麥を食へ。

坊太 ほんの事かえ。食ふによ。

忠八 食へ／＼。その代りには賴みがある。

坊太 今夜は蛭子講だの。蕎麥屋さん、熱くしてくんな。

蕎麥 アイ／＼、湯は沸いてゐやす。

忠八　コレ小僧、おらア夜番を頼まれたが、今から鶩を追ひに行くから、てめえ、あの藏の番をしてくれろ。
坊太　エヽ、うまくするな。蕎麥さへ奢ると、毎晩でも番をするよ。
蕎麥　モシ、どこの土藏の寢ずの番だえ。
忠八　この絲屋の藏サ。昨夜泥坊が入つて、内にあつた印子の尊像とやらを盗んだのよ。
坊太　そのまた尊像とやらが、内から出たわな。それでも内の婆アが、その尊像とやらを、きつと持つてるるね。大きな騷動だっ
忠八　その泥坊の入つた穴を、急にやうくふさいだが、まだ土が干ねえから、用心が惡いと、番を頼まれたが、小僧、代りに番をしてくれろよ。
坊太　承知だよ。蕎麥さへ食はせれば、朝からでも番をする。
九郎　さう藏を用心するからにやア、金もあらうね。
坊太　ある段か。大きにあるの。
　　　トこの話しの内、六三、九郎兵衞、聞いてゐる體。
忠八　てめえ、幾つ食つた。

坊太　たつた三つ。
忠八　蕎麥屋さん、錢よ。
九郎　おれがのも取りねえ。
蕎麥　アイ／＼。
忠八　それぢやァ賴んだぞ。
坊太　承知だよ。
忠八　それは有り難い。マア、よく番をしろよ。
坊太　承知サ。

ト捨て鐘になり、忠八は向うへ、坊太は切り戸口へ入る。蕎麥屋、呼びながら向うへ入る。九郎兵衞跡先見廻し、花道へ行く。六三、藏へ目を附け、東の歩みへ行く。兩人、立ちどまつて思ひ入れ。

九郎　盜人用心しながらも、今夜の番はあの丁稚。
六三　尋ねる品は、そんなら藏に。幸ひ今夜
九郎　金のあるのを、聞いては病が
六三　お主の寶、盜んだとても

九郎　首になるまで、働らく生業。

六三　命を捨てゝも

九郎　仕事が肝腎。

六三　土藏の破れが

兩人　丁度幸ひ。

ト思ひ入れ。捨て鐘きびしく鳴る。兩人、しやんと裾をからげる。凄き合ひ方。兩人、窺ひ〳〵、舞臺へ來り、六三は足場に取つき、よき所まで上がる。九郎兵衞は板塀へかゝり、切り戸をこぢてゐるこの時下座よりねず六、夜番にて、割り竹を曳き、出て來る。これにて九郎兵衞、黑塀へひつたりとなつて隱れる。六三は足場の上の菰を取つてかぶる。

ねず　火の用心さつしやりませう。

ト花道の方へ行かうとして、九郎兵衞の方を怪しみ、窺ひ見て

そこにゐるのは、人か〳〵。但し、犬か〳〵。

九郎　わん〳〵〳〵。

ねず　アヽ、黑犬ださうだ……火の用心さつしやりませう。

ト向うへ入る。九郎兵衛、六三、跡見送り、ホツとした思ひ入れ。時の鐘の送りにて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、土藏の二階を見たる飾りつけ、下通り忍び返し、黒塀上の方を見たる體。足代取つけ、この道具よき所まで押出す。時の鐘打上げると、獨吟になり、よき所に戸前の所を、ザリ〳〵と巻きあげる。

ト内にお絲、網の手燭を置き、件の一腰をかたへに置き、書置を認めゐる。藏の上の方にお園、亭の看板をかむり、屏風の内に縛られゐる樣子。この唄のうち、下の方の足場より六三上がり來り、一腰を拔き、藏の壁をポツ〳〵と切る。土藏の屋根へ九郎兵衛窺ひ出で、後の方の屋根板を剝す。唄一くさり切れる。お絲、思ひ入れあつて

いと　どうで添はれぬ六三さん、この書置に細々と、身の云ひ譯を書き殘し、死ぬる覺悟の今際にも、一目たりとも六三さんに

九郎　屋根瓦からひん剝り、上から忍んで有り金を

六三　内の樣子は覺えある、爰を切りぬけ、二階へ忍んで

ト捨て鐘。また獨吟になり、三人とも思ひ入れあつて、お絲、書置にかゝる。六三、壁を切りあけ、内へ入る。途端にお絲、白刃を拔き、死なうとするを、六三窺ひ寄つて

お絲さんか。

いと 六三さん、南無阿彌陀佛。

ト死なうとするを、六三とめる。此うち九郎兵衛、屋根へ穴を明け、内の樣子を窺ひゐる。合ひ方。お園も屛風の内に聞きゐる。

六三 これサ〳〵、なんでお前は死なうとするのだ。

いと 何ゆゑとは六三さん、これ見て下さんせ。わたしが素性も腹からの、町人ならぬ武家育ち。

六三 して、その武士であつた時、いづれの家中で家名は何と。

いと 產まれし所は因幡の國、親の家名は書置に。

ト六三書置を見て

六三 ナニ因州とは、ドレ。ナニ〳〵『父さんことは因幡の郷士、石塚彌惣兵衛と申し、姉樣ことは、小さい時に、船越十右衛門と申す、伯父さんの所へ養女にて、その名はお園さまと申します、私しは實の親彌惣兵衛さま、この江戸へお連れなされて、武士を捨て、阿野屋十兵衛と改め、この

いと　絲屋の跡式を讓りうけ暮らす其うちに、兩親の病死、それより今の母さんは、ありや行德產まれにて、わたしが乳母に抱へし奉公人に候へども、父さんの取立てにて、今の母樣、纔しき仲に候へば』……アヽ、そんならこなたは國許にて、顏は知らねど船越氏、云ひ號けせしお園の妹。

六三　サ、そのお園とは云ひ號けの、神原左七郎。

いと　エヽ、お園さんとは、わたしが姉さん。

トこの話しをお園、屛風の内にて聞いて、いろ〳〵に思ひ入れ。

いと　すりや姉さんのお前は連合ひ。猶々添はれぬ妹のわたし。死んであの世で、お前の女房に

トまた死なうとする。六三とめる。この時、屛風の内のお園、棒しばりのまゝ、この中へ入り

その　アヽコレ、お前さん方、死ぬるに及ばぬ。必ず怪我して下さりまするな。

六三　わりやア最前の騙りの女。

いと　又もや今の樣子を聞いて

その　惡い工みもしやうかと、一事が萬事私しを、鬼のやうにも思し召しませうが、今お二人のお話しを、聞いて悔り……サア、見るもいぶせきそぎ尼も、花咲く昔に逢つたならと、まだ去りやらぬ輪廻には、若いお方の切なる戀。羨ましいやら一つには、妬ましいほど飛び立つほどの、はかな

いこの身をかへりみて、云ふに云はれぬ身の懺悔。今の、お話し現にも、知らぬ先ゆゑ頼まれて、大工の六三が女房ぢやと、二人が仲を裂かう爲、向うへ並んだばつかりに、お前がお尋ねなされまする、その尊像は後家の居間に。

六三　仕舞うて置いたを、とつくりと見たか。

その　アイ、重ね簞笥の抽出しに

いと　置かしやんしたら、わたしがソッと。

六三　六三が爲ぢや、お絲どの。

いと　心得ました。男の爲には

ト行かうとして、思ひ入れあつて

モシ、必ず外へ

ト思ひ入れあつて

行きなさんすなえ。

ト件の一腰を殘し、時の鐘、合ひ方になり、窺ひ〳〵入ろ。兩人殘つて

六三　隱す事まで知らせた騙り。この繩解いて

ト お園の繩を解き、突きやる。お園思ひ入れあつて

その 騙りをするも、お前の行くへが、知りたいばつかり。

六三 ヤ。

その 以前は神原左七郎さま、あなたに連れそふ云ひ號け。即ち證據はこれなる往來。

ト 懐より帳を出し

これ見て素性を

ト 渡す。六三見て

六三 『坂東順禮往來。淸見郡島内村、淨土宗金大院判、願主船越氏娘 その』……ヤヽヽヽヽ、お絲どのゝ書置と、割符の合うた往來の、素性を書きし船越氏。

その 内には詳しく石塚彌惣兵衛、その御方は實の父さん、わたしやお前の云ひ號け。

六三 お園であつたか。

その あなたと知らいで最前も、繩目の辱も恥かしい。

六三 それも矢ッ張り左七郎、結ぶの緣の縛り繩。

その そんならいよ〳〵我が夫、左七郎さまでござんしたか。

六三　云ひ號けせし其方の夫は
その　あなたであつたか。
六三　不思議な緣で
兩人　あつたなア。
その　エヽ、おなつかしうござりましたわいなア。

　　ト縋り、よろしくこなし。この時お園の頭巾取れて、さら毛の島田髷、娘の姿になる。

六三　ヤヽ、尼と思ひし其方、油氣もなき島田わげ。
その　流浪のお前のお行くへを、尋ねさまよふこのあたり、思はずこの家の番頭後家が、わたしへ賴み先の男の大工の六三、よもやお前の假り名とは、知らで先刻の騙り事。これもお顏を知らぬ同士思ひもよらぬ土藏の二階、名乘り合ふのも不思議な緣。それにつけても妹のお絲、あの子がこの由聞いたなら、わたしを恨むでござんせう。そればつかりが、わたしや悲しい、悲しいわいなア
六三　その恥かしいはわしとても、現在姉と云ひ號け、その身を以て
その　妹と譯あるお前をば、姉のこの身でなんのマア。所詮わたしは尼となり、この刃物にてこの髮を

　　トお絲が置いて行きし合口を取つて、髮を切らうとする。六三とめるとて、思はずお園の帶解ける。



六三 アヽコレ、亭主が出たのになんでマア、髪を切らうとしやるぞ。
その でも妹と、誓ひしお前。
六三 ハテ、妹も姉も、他人ではなし、大事もあるまい。
その それぢやというて
六三 コレ。
ト帶の端を引寄せる。これにてお園、思はず六三へこけかゝる。
その 思へば不思議な。
六三 緣は異なもの。
その エ。
六三 夢ではないか。
ト爰にて間違うて、我が一腰と心得、お絲が置きし曉丸の一腰を持つて、屛風引廻す。唄、捨て鐘。六三が差して來りし銅作りの一腰殘りある。この途端に屋根の切り穴より、見惚れし九郎兵衞、トンと落ちて思ひ入れ。腰を撫つて、やう〳〵起きあがる。この時、灯消える。九郎兵衞、思ひ入れ。奥よりお絲、探り〳〵出て來て

いと　六三さん〳〵。

ト尋れる。九郎兵衛うなづき、思ひ入れあつてお絲の手を取る。足に觸るゆゑ、六三の脇差を探り取つて腰へ差す。お絲、尊像を出して

母さんの簞笥の中に、仕舞うてあつたこの尊像。モシ

ト六三と思ひ、差出す。九郎兵衛取つて懷へ捻ぢこみ、行かうとする。お絲取つき

アヽモシ、わたしもお前と一緒に爰を。サ、連れて退いて下さんせ。

ト引とめる。九郎兵衛思ひ入れして、お絲の耳に口を寄せ、小聲にて云ふ。お絲喜び

アイ〳〵、どうぞ一緒に

ト件の書置を持つたるまゝ縋るを、九郎兵衛手を引き、六三が切つたる壁の崩れへ出ようとする。此うちお岩出かゝりゐて

いは　ヤヽ、今夜も盗人。

ト九郎兵衛に取つく。振り切るはずみにお岩、タヂ〳〵となりて屏風へこけかゝる。此うち九郎兵衛は、お絲の手を引き、件の穴の崩れを傳はり、下家へ下りし體。屏風の中より手を出して、お岩の帶を捕へる。恟りして

アヽ、盗人ぢや〳〵。

ト呼び立てる。これにて左五兵衞、手燭を持ち、槌右衞門も出て來り

左槌　ナニ盗人とは、どこにゐる。

いは　コレ〳〵、屛風の内に。

兩人　アヽ、爰にか。

ト屛風へかゝるを、手を取つて槌右衞門を突きやる。この途端に屛風引明け、内にお園、石塚氏のしろし札貼りし小袖櫃を置き、振り袖衣裳を着替へ、帶を締めてゐる見得。三人見て

左五　ヤ、騙りの尼が、内の小袖を

いは　なんで着たのぢや。

槌右　イヽヤ、これなる小袖櫃、石塚氏と書いたしるしの、この札が貼つてあるのは、この家の主は以前は侍ひ。お名は

その　石塚彌惣兵衞さまと、云うたであらうの。

いは　ヤ、いかにもさうぢやが、詳しい事を、どうして知つてぢや。

その　その石塚彌惣兵衞さまは、わたしが父さん、女主のこなさんは、乳母の上がりの奉公人。

いは　成る程、乳母ぢやが、何とした。
その　そんなら、わしが家來ぢやぞ。
三人　ヤヽヽヽ、とんだ話しだ。
その　變名なされて阿野屋十兵衞、そのお方こそわたしが父さん、お絲が爲には親身の姉、他家へ養女のこのお園、女ながらもこの家の惣領、入り聟どのにはわたしは小舅。乳母や手代は殘らず家來わしは主人ぢや。下に居やいなう。
三人　イヤア。

ト思ひ入れあつて

いは　いよ〳〵旦那の娘御と、云ふには何ぞ證據があるか。
その　疑がやるなら順禮の、この往來が慥かな證據。

ト件の往來を見せる。お岩開き見て

いは　『生國因州淸見郡島内村、石塚彌惣兵衞娘、當時同國船越十右衞門へ養女に罷りありしに、その事心願にて坂東順禮仕り候ふ。國々所々御關所、相違なく御通し下さるべく候ふ。往來件の如し。淨土宗金大院判』……ヤヽヽヽ、そんなら旦那のお娘御、お園さまかえ。

その　相違はあるまい。馳走しやっ。

左五　御酒でも出さっか。お絲さまには姉御様。

槌右　ドリヤ、お杯を

ト駈けて入る。

その　今から爰にいしかる程に、直ぐに爰らへ寐かしてたも。

左五　御寐なりますなら、お床をのべて

ト絹夜具蒲團を敷く。この時槌右衛門、銚子杯を持ち來り

槌右　めでたく聟めにお杯。

その　床敷いたなら、灯を消して

三人　それでは暗うて。

その　暗いが勝手ぢや。早う灯を

三人　お望み通り。

ト三人、手燭を吹き消す。お園櫃の箱を明ける。中より六三出るを、お園、手を取ってこなし。

その　憂を晴らすは、幸ひ爰に

ト杯を取つて六三に持たせ

左五　サ、ついで下さんせ。

ト六三、杯を差出す。左五兵衛探り寄つて

番頭、お酌。

ト酒をつぐ。六三、一口飲む。お園側より口をつけ、二人して飲む。三人これを知らず

いは　お久しぶりだ、めでたく謠。

槌右　聟が祝して……『千秋萬歳の千箱の玉を奉る』

六三　いかい白痴な。

三人　ヤ。

その　モシ。

ト寄りそふ。木の頭。

三人　エヽ、おめでたう存じます。

ト手を突き、辭儀をする。これをキザミにて、ひやうし迷子の鉦太鼓にてツナギ、直ぐに引返す。

幕

本舞臺、向う一面の黒幕、正面に普請仕掛けし橋、桁ばかりの欄干なき一石橋。下は浪板。下の方竹矢來、木戸口、榜示杭、これに一石橋普請小屋場と記しあり、時の鐘、迷子の聲にて幕明く。

ト爰に若い者三人、絲屋といふ弓張り、六尺棒を持ち、鉦太鼓を叩き、尋ねる體。下手に東林、酒に醉つてゐるを、三次介抱してゐる。

三人 迷子やアい……お絲さんやアい。

三次 コレ〳〵、お前方は、お絲さんといふのを尋ねるのかえ。

三人 左樣でございまする。

東林 ナニお絲、ハテ、似た名もあるものだ。殊に絲屋といふ提灯は、貴樣達は本町の衆か。

三人 アイ、絲屋の娘御が、かいくれ見えませぬ。

三次 そいつはとんだ事だの。

東林 ナニ絲屋の娘が見えぬ。それは大變。それは大方祝言の事から、駈落ちと見えるわえ。

ト云ひながら、ヒヨロ〳〵する。

三次 これサ、東林さん、しつかりしなせえ。轉ばぬやうにしてお出でなせえ。

ト行かうとするを東林押へて

東林　これサ、三公、いゝ所で逢つたから頼むのだ。急に大江のお下屋敷、龜井戸まで船を出して下ッし。

三次　ハテサ、先刻から申す通り、今夜は一人で、船は出されませぬよ。

東林　なんでもいゝから、出してくれろと云ふに。

三次　無理な事を云ひなせえ。出されませぬよ。

東林　なんでも頼むと云ふに。

　　ト三次捨ぜりふにて、せちがひながら、兩人下座に入る。

三人　迷子やアい……お絲さんやアい。

　トこの人數は向うへ入る。此うち捨て鐘、誂らへの合ひ方になり、番小屋の戸を明け、お絲出る。跡より九郎兵衞、銅の一腰を差し、尊像を持つて出て來り、直ぐに九郎兵衞は逃げようといふ心。お絲鉦太鼓の方へ思ひ入れあつて、暗がりゆゑ六三と心得

いと　アレ聞かしやんせ六三さん、わたしを尋ねるあの人聲。どうぞ早う連れて退いて下さんせいなア

　　ト九郎兵衞に縋る。振り切つて逃げんとするを

アヽ、これいなア、この暗いのに、わたしばかりで、どうしてマア。コレ、六三さん、お前のお

内へ

トいろ〳〵思ひ入れ。この時、空へ月を引出す。矢張り向うにて迷子の聲する。

アレ、わたしを尋ねて來ぬうちに、ちつとも早う、六三さん。

ト縋り寄つて、月あかりにて、九郎兵衞の顏を見て

ヤ、六三さんぢやと思うたら、お前は見知らぬ

九郎　泥坊だ。

いと　エヽ。

ト驚く。合ひ方。

九郎　絲屋の土藏へ入つた盜人、今お尋ねの半時九郎兵衞。先刻の暗がり幸ひに、引出して來たお絲ぼう、六三と思うて尊像まで

いと　知らぬこなたに渡したかいの。こりやマアどうせう、何とせうぞいなア〳〵。

ト慄へてゐる。

九郎　これサ、そんなに怖がる事はねえ。六三だといつて、おれだといつて、そんなに違ひもしめえぢやアねえか。取違へたはお前の麁相。尊像といひこの脇差、娘一人を揚げ玉で、二人斯うしてる

るといふも、よく／＼深い縁のお絲。折よく爰にこの番小屋、ころび寐をしたその揚句は、宿場へやつて拵ぎにするのだ。サア、來さツし／＼。

ト手を取つて引立てる。お絲、振り切つて逃げる。九郎兵衛追ひかけゆく。お絲逃げ歩き、木戸の口より橋の上へ逃げ行く。九郎兵衛追ひかけ、捕へて

逃がしはしねえ。サア、おれが内へ來い／＼。

いと　アヽコレ、滅相な。どうして其方のやうな人と行くものぞ。六三さんぢやと思うて渡した尊像もあなたへ上げねばならぬ程に、どうぞ返して下さんせ。コレ、拜むわいの／＼。

ト縋つて思ひ入れ。

九郎　ナニ尊像をくれろ。エヽ、よしてもおくれ。これをてめえに返したら、其方は勝手がよからうがつまらねえなアおれ樣だ。もう二三度も抱いて寐たなら、うつかりひよいと渡しもしようが、袖無し羽織に取らうとは、お情ねえ。これサ、賣られるが嫌なら女房に持たう。六三を打ッちやつて、さう極めねえ。

いと　アヽコレ、滅相な。どうしてマア其やうな事が。コレ、その尊像を返して下さんせ。

九郎　それ程欲しくば遣りもしようが、その代り、女房になるか。

いと　なんの、あなたをのけて、其方のやうな。
九郎　嫌だと云やァこの尊像、川の中へぶち込まうか。
いと　ア、コレ、それを
九郎　そんなら爰で女房の、固めをさせてくれな。
トこのあたり好き時分に、尊像を懐へ入れ、足にて小石を搔きよせ、袱紗へ包み、吹替へを拵らへお絲を口說く事よろしく、お絲思ひ入れ。
いと　そりやモウ、その品さへ返して下さんすりや、どうなりとならうけれど、六三さんへその品を渡さぬうちは
ト苦しき思ひ入れ。
九郎　その氣になつたら遣りもせうが、きつとおれが女房になるか。
いと　それさへ返して下さんしたら
九郎　遣らねえでどうするものか。併し、だまを食つちやァ面が立たぬから、違ひのないといふ證據を貰はう。
いと　サア、その違はぬといふ證據は

九郎　何ぞ貰はう〳〵。

　ト引附けて云ふ。お絲、怖さのまゝ思ひ入れあつて

いと　サア、その違はぬといふ證據には、これをお前へ渡しませう。

　ト差して居たりし月形の櫛を取つて出す。九郎兵衛取つて

九郎　アヽ、こりやァ櫛か。こんな物を取ると、縁が切れるといふが、なんのまゝよ、取つて置かう。外にまだ、何ぞ無いか〳〵。

いと　イエ〳〵、何も外には。

　ト云ふうち、襟より守り袋の紐出かゝりゐるを、九郎兵衛、探り見て

九郎　アヽ、こりやァ六三が、起請か〳〵。

いと　なんのマア、そんな物ではござんせぬ。こりや、わたしが產まれた年月を書いた、臍の緒ぢやわいな。

九郎　嘘ばつかり。起請であらう。これも寄越しだ〳〵。

　ト無理に守り袋を引ッたくり

サア、約束した尊像を遣るよ。

ト渡す。お絲誠の品と思ひ

いと　嬉しうござんす。これさへあれば六三さんに

ト逃げようとするを

九郎　逃がしはしねえワ。

ト追ひかける。立廻りにお絲、思はず吹替への尊像を川へ落す。

いと　ヤア〱、折角貰つた大事の尊像。

九郎　逃げ歩いたばつかりに、川へどんぶり……サア〱〱、あいつが無いと、いよ〱六三は、自滅だ、自滅だ。

いと　エヽ、そんならあの品無い時は

九郎　可哀や六三は……サア〱、大變々々。

いと　折角あなたのお爲にと、取返したる今の品。この川へ落したわたし、六三さんへの云ひ譯に、いつそ身を投げ

ト橋の上より飛び込まうとする。

九郎　殺しはしねえワ。

ト引とめるを振り切つて

いと　ぬしへの云ひ譯。

ト飛び込まうとする。九郎兵衞とめる。下座より六三出て來り、お絲を見て

六三　お絲か。

いと　六三さん。

九郎　なんだと。

トお絲を捕へる。六三、お絲の手を取り、九郎兵衞の横面をポンと毆り、お絲を連れて向うへ走り行く。九郎兵衞呆れし思ひ入れ。これを木の頭。よろしく引張りにてキザミ、ひやうし　幕

幕の外、時の鐘の送りにて、六三、お絲を連れて走り入る。

第二番目　中幕　淺草三間町の場

役名――藝者、はね吉。輕子、おつや。仕事師、小勇みの吉。本町の綱五郎。粟島權兵衞。家主、左五兵衞。山住五平太。夜番、太郎助。宇都宮の若い者、要助。町人、徳右衞門。同、萬右衞門。神原佐五郎。

本舞臺、三間の間、上の方一間の番太郎の見世、賣り物いろ／＼書いたる行燈。草履、草鞋、天徳寺の蒲團、など積みあげ、その外の賣り物を並べ、下の方三間、駒寄せしたる自身番。下座の口に町内の木戸を見せ、誂らへの通りよろしく、幕の内より綱五郎、蝙蝠羽織を着て、綱といふ字の附いたる長提灯を置き、出刃庖丁を振上げ、立ちかゝりゐる。太郎助、老けたる番太郎の拵らへにて、笊に入れた反古、糊刷毛を持つて、天徳寺を貼りかけし心にて、とめてゐる。左五兵衞、有合ふ物を振上げ立ちかゝりゐるを、德右衞門、萬右衞門、町人の形。小勇みの吉、仕事師の形にて、右三人、左五兵衞をなだめてゐる。すべて淺草三間町あたり、番屋の體。曲撥にて幕明く。

三人　マア、料簡さつしやい／＼。

綱五　否だ／＼、料簡しねえワ／＼。

ト左五兵衞に、右の反古の入りし笊を投げつける。

太郎　イヤア、この反古はおれが生業道具、どうする／＼。

綱五　サア、大家め、それへ出やアがれ／＼。

ト反古を笊へ掻ひ込む。

左五　何をこの野郎が。

ト双方立ちかゝるを、三人押へて

三人　マア〳〵、一體こりやアどういふ譯だ。

綱五　聞いてくんねえ。今夜この家主の所へ、女房が來たとよ。しかも、その女は、はね吉との事。おれもあの女にやア懸り合ひがあるに、此方の方も附けず、なぜ女房に持つたのだ。それぢやアこの綱五郎の、男が立たねえ〳〵。

太郎　オツト、よし〳〵、その事なら、舅の番太郎が呑みこんだ。

德右　マア、靜かにさつしやい〳〵。

綱五　否だ〳〵、料簡ならねえぞ〳〵。

太郎　ハテ、何事もおれに任せて

綱五　そんなら、わしが面の立つやうに。

太郎　合點だ〳〵……コレ〳〵、聟どの、はね吉が小塚ッ原に居る時から、綱五郎と譯のある事は知つてるたが、こなたが女房に持つなれば、なぜ方を附けてやらつしやらぬ。

左五　ハテ、わしも如才はござりませぬ。この中も小塚ッ原で、ごたつきがあつたゆゑ、その時手切れの半金渡しました。それでもまだ兎や角云ふのか。

吉　そんならおぬしやア、手切れの金を取つたか。

綱五　成る程、この中手切れの半金は取つたが、跡は追ひ〳〵遣らうとばかりで、それから挨拶がねえからサ。

吉　それぢやァおぬしが皆尤も。思ひ入れ、云はつしやい〳〵。

綱五　それゆゑあの大家めを

ト立ちかゝる。

左五　待て〳〵。手切れの後金、渡してやらう。

綱五　ナニ、後金を寄越すといふのか。

左五　併し、爰に金は無いが、おぬしには店賃の貸しが大分ある。それを手切れにくれてやらう。

綱五　そんなら手切れに店賃を

左五　その代り、おれが店には置かぬから、早く店請けを呼びにやりやれ。

太郎　オツト、綱五郎が店請け、これに居るぞ。

左五　ほんに、舅どのが店請けであつたつけ。

太郎　この上は、當人を引取つて行く。大家さんではない、大家、さう思へ。

萬右　ハテ、横柄な店請けだの。

太郎　おれは左五兵衛が舅だ。大家、承知か。

左五　ハイ〳〵、畏りました。イヤハヤ、とんだ奴に店を貸した。

綱五　とんだ奴とは、おれが事か。

左五　オヽ、うぬが事よ。

綱五　何をこの駄大家め。

左五　何をこの野郎め。

　ト立ちかゝるはずみ、左五兵衛の懐より、前幕の誠の色紙落ちる。太郎助、何心なく取って

太郎　大家さん、何か落ちました。

　ト出す。左五兵衛これを知らず

左五　サア、早く店を明けろ。

綱五　うぬも覺悟してうしやアがれ。

太郎　コレ、大家さん、何か落ちやした。

　ト何心なく色紙を取る。左五兵衛これに心附かず

左五　うぬも覺悟してうしやアがれ。

皆々　ハテ、料簡さつしやりませ〳〵。

　　ト左五兵衛をなだめ〳〵、下座へ入る。兩人殘り

太郎　おれが生業物を臺なしにした。まづ天德寺の中へ

　　ト件の色紙を何心なく落ち散りし反古と一緒に、丸めて天德寺の中へ入れてゐる。

綱五　成る程、あの大家も、とんだ鼻ッ歪らしだわえ。

太郎　イヤモウ、あのやうな男ゆゑ、こなたも腹は立たうが、料簡さつしやい。

綱五　店請けのお前が挨拶、どうでもいゝが、店立てをくッちやア、今日から詰まらねえ。

太郎　ハテ、外へ店を借りるまで、この番屋に居候ふサ。

綱五　そいつも氣散しでよからう。そんなら當分お賴み申しやす。

太郎　天德寺でも手傳ふがいゝ。

　　トこの時綱五郎、太郎助の着物を見て

綱五　太郎助さん、お前の着物は、そりやアどうしたのサ。

太郎　ドレ〳〵。

ト着物を見て

こいつは昨夜送り物の時、蠟をかけたのサ。こいつはどうしたら落ちるだらう。

綱五　そりやア、紙へ溫灰を包んで拭くと、直ぐに落ちやす。

太郞　綱公、その笊に反古があるから、面倒ながら拭いてくれないか。

綱五　ナニ拭いてくれ。面倒な事を云ひつけるぜ。拭いてやらう。

ト笊の中より三建目の起請の名宛の方を何心なく取つて來り

この反古は、何だか小むづかしい字が書いてあるな。

ト太郞助見て

太郞　それは先度、娘の所から、簪を包んで寄越した反古サ。

ト綱五郞見て

綱五　なんだ『右の條々僞るに於ては、大小の神祇の御罰を蒙むるものなり』

ト何心なく火鉢の灰を包み、着物の蠟を拭いてやる。向うバタ〳〵になり、怪しき形の若い者一人、菊蝶の紋附いたる簪を持ち、走り出る。跡よりおつや、深川の輕子女にて、追ひかけ出て來り

つや　アレ、泥坊ぢやわいの〳〵。

ト云ひながら追ひかけてくる。この時下座より伴助、前幕の形にて、小さき箱提灯を持ち、出て來り
この體を見て、件の若い者を捕へ

伴助 下に居らう……わりやア何者だ。

若者 御免なさい〳〵。

つや その簪を取りました。お頼み申します〳〵。

伴助 ナニ簪を取つた。サア、出さぬか〳〵。

若者 ハイ、出します〳〵。御免なさい〳〵。

ト件の簪を伴助に渡し、一散に下座へ逃げて入る。綱五郎見て

綱五 なんだ、簪泥坊か。久しいものサ。

伴助 コレ〳〵女中、今の簪はこれか。

ト見せる。

つや 左樣でござります。

綱五 さういふ聲は、おつや坊ではないか。いま時分、どこへ行くのだ。

つや ハイ、わたしは小絲さんの迎ひに、田川屋へ參りましたが、只今簪を取られました。

太郎　ヤレ〳〵女中、危ない事をさつしやりました。

つや　モシ、綱さん、小絲さんのお言傳があるゆゑ、お前の内を尋ねましたが

綱五　知れねえ筈よ。おらア店立てをくつて、當分爰に居候ふ。

つや　そんならお前は、番太郎さんかえ。

太郎　イヤ、番太郎といへば、今夜は聟の左五兵衛は、夜番だが、何をしてゐる。もう見えさうなものだ。

つや　夜更けぬうちにわたしは、直ぐに田川屋へ

伴助　おれも旦那の迎ひに

綱五　氣を附けて行かッし。

ト時の鐘、さんげ〳〵になり、伴助は向うへ、おつやは下座へ入る。綱五郎太郎助殘る。この時下座より左五兵衛、何か尋ねながらウロ〳〵出て來り

左五　サア〳〵大變々々、慥か先刻のごたつきの時

ト無性にそこらを尋ねる。

太郎　大家さん、何をなされます。

左五　慥か爰らへ大事の色紙を……イヤサ、併し人が拾つても、役に立たぬ書附け。ハテ、とんだ事をしたわえ。

太郎　これサ／＼、其やうな事は捨てゝ置いて、早く自身番へ詰めてゐさつしやい。

左五　時にお前も知つての通り、今夜ははね吉と祝言、どうか夜番を、外へ繰りかへてもらひたいが。

太郎　イエ／＼、さうはなりませぬ。外の衆は兎も角も、こなたとわしとは聟舅、私しの事があつてはお組合へ濟みませぬ。

左五　そんならどうでも夜番をするのか。いま／＼しい。

ト口小言いひながら番屋へ上がる。綱五郎、二人を見て

綱五　太郎助さん、大家さん、今晩は御苦勞でござります。

ト左五兵衛ツンとして脇を向く。綱五郎思ひ入れあつて

太郎助さん、今夜は寒いなう。

左五　太郎助さんばかりではない、おれも寒いのと、癪にさはる野郎がゐるから、むしやくしや小腹が立つてならぬ。番太郎、酒を出せ。

太郎　番太郎とは何の事だ。おれは舅だぞ。大家、洒落るな。

左五　ほんに、さうであつた。酒の取りましたのがござりまするか。

太郎　あるく。綱公、居候ふの役だ。そこらにさんまの干物があつた。酒を出して下さい。

綱五　オット合點。

　　　トさんまの干物を皿に、ちろり諸とも出す。この時所々にて、五つの拍子木を打つ。

　　もう五つださうだ。

太郎　今夜おらア疝氣が痛いから、綱公、大儀ながら廻つて下さい。

綱五　〆めたく。おれが廻つて來よう。

　　　ト拍子木を持ち、行きにかゝる。左五兵衛見て

左五　綱五郎、待てく。おぬし一人、時廻りにはやらぬく。

綱五　なぜおれ一人やられぬな。

左五　ハテ、おれが内にやア女房一人居るワ。おぬし一人を廻らして、猫に鰹節、それぢやによつて、

　　やられぬく。

綱五　それでも、あの人の頼みゆゑ。

左五　どなたが頼みでも、それはつかりは、ならぬく。

太郎　綱公、何をしてゐる。早く廻つてくれぬか。

綱五　オイ〳〵、廻つて來ます。

ト行きにかゝる。

左五　待て〳〵。おぬしが廻るなら、おれも一緒に

ト拍子木を持つ。綱五郎は鐵棒を持ち、花道の方へ行く。

綱五　大家さん、なぜおれ一人廻つては惡いね。

左五　ハテ、この男は惡い呑みこみ。おれが内には女房一人。譯のあつたおぬしが、内の前を通るのは猫に鰹節。それゆゑおれは氣が揉める。

綱五　其やうな事に氣を揉まずとも、早く拍子木を打ちなせえ。

左五　それを貴樣に習ふものか。

綱五　そんなら早く打ちなせえな。

左五　オヽ打つワ。しかも、したゝか斯う打つワ。

ト早拍子木のやうに打つ。太郎助悔りして

太郎　アヽ、コレ〳〵、早拍子木を打つては、惡いぞ〳〵。

綱五　ソリヤ、舅がやかましいよ。
左五　エヽ、氣が揉める。この男はおれが留守へ、しけこまねばよいが。
綱五　嬶アの用心さつしやりませう。
左五　あのやうな事を。エヽ、小自烈てえ。
　　ト又た早拍子木を打つ。太郎助聞いて
太郎　また早拍子木を打つ。靜かに〳〵。
綱五　嬶アの用心さつしやりませう。
　　ト兩人捨ぜりふにて喧嘩をしながら花道より中の歩みへかゝる。向うより四つ手駕籠一挺、これに要助乘つてゐる。駕籠舁き、これを擔ぎ、出て來る。下座より德右衞門、萬右衞門出る。はずみに德右衞門、駕籠の棒鼻に當り
德右　アヽ、痛い〳〵。なぜ駕籠をぶッつけた。
萬右　駕籠舁きぐるみ、ぶんのめせ。
　　トこれにて要助、駕籠より出て
要助　急ぎましたゆゑ只今の麁相。

駕舁　御免なされませ〱。

萬德　料簡しねえ。うしやアがれ〱。

ト駕籠をよき所へ置き、皆々ワヤ〱云うて下座へ入る。此うち兩人は東の歩みより爭ひながら舞臺へ歸る。太郎助見て

太郎　これは御苦勞。聟どの、寒からう。サア〱、酒でも飲まつしやい。

綱五　おれも一杯飲みてえね。

左五　綱五郎、洒落るな。われにやア飲ませぬ……舅御樣、お前、一杯どうでござります。

太郎　わしは疝氣で飲めぬ。こなた參れ。

左五　左樣なら、手酌でやりませう。

トよろしくある。綱五郎思ひ入れあつて

綱五　もう五つ半でもあらう。ドリヤ、廻つて來よう。

ト行きにかゝる。

左五　この男は、よく廻りたがる。これほど廻りたくば、切り見世へ行くがいゝ。

太郎　コレ〱、燗が覺める。早く飲まつしやい。

トまた酒を飲む。此うち綱五郎、最前蠟を取つたる灰を、ちろりの中へソツと打込み、その包み紙はあたりへ捨て

綱五　もう四つであらう。廻つて來ようか。

左五　成る程、この男はうるさい男だ。マア、酒でも飲まつしやい。

綱五　ちよつと押へませう。

太郎　おれが酌をしてやる。大家、有り難いか。

ト酌をする。

左五　ア丶、それ〳〵。

ト無性に飲む。酒に醉ひし思ひ入れにて

ヤア、廻るワ〳〵。自身番も、舅どのも、綱五郎も、廻るワ〳〵。イヨウ、大道具大仕掛け、有り難いと申しやす。

太郎　ハヽア、もう四つださうな。

綱五　ドレ、廻つて來ようか。

左五　この男はうるさい男だ。ドリヤ、おれも一緒に

ト立たうとして、腰の立たぬ思ひ入れ。太郎助見て

太郎　こなたは大分醉つたさうだ。今度はおれが附いて廻りませう。

左五　お前がござれば、わしも安堵。

綱五　そんなら一緒に廻りませう。

ト花道へ行き、綱五郎囁く。太郎助呑み込み、綱五郎の鐵棒を取つて腰に差し、拍子木を打つ。左五兵衞は兩人一緒に行くと心得

左五　モシ、舅どの、綱五郎に油斷せぬやう、內を賴みます。

ト云ひながら立上がり、撞と座して他愛なき思ひ入れ。太郎助は腰に差したる鐵棒を曳きずりながら拍子木を打ち、向うへ入る。綱五郎頰かむりをして、下座の方へ歩む思ひ入れ。左五兵衞と四つ手駕籠を乘せたまゝ、ヂリ／＼と綱五郎の足の運びについて、この道具まはる。

本舞臺、二間の屋體、此うち一間の出格子、戸の明け閉てあり、下の方一間は戸を閉てきり、外より錠をおろしある。よき所に犬の小屋、これへ人の入る事。すべて表店、家主の內、夜の體。時の鐘にて道具納まる。

ト綱五郎思ひ入れあつて

綱五　まんまと家主を一杯くはせ、はね吉が年季を抜かせたゆゑ、仕方なしに女房にはなつたが、これから左五兵衛に愛想を盡かさせ、叩き出させる仕様は、おれが間男になつて、斯うして、カウカウ。その上で權兵衛が方へ。よし〳〵。

ト思ひ入れあつて礫を打つ。これにて内より格子の戸を明け、はね吉、顔を出し

はね　オヤ、綱さん、よくお出でだなう。

綱五　早く戸を明けてくれ。

はね　聞きねえな。馬鹿大家が、外から錠をおろして置いたよ。

綱五　そんなら叩き毀して入らうか。

はね　それぢやア音がするわな。

綱五　どうか仕様はねえか知らん。

トうろ〳〵してゐる。この時向うへ灯見えるゆゑ

折惡い。誰れか向うから來るわえ。

はね　早くどこぞへ隠れねえな。

綱五　合點だ〳〵。

トあたり見廻し、思ひ入れあつて犬の小屋へ隠れる。はれ吉も戸を閉て、内へ入る。時の鐘、合ひ方になり、向うより伴助、小箱提灯を持ち、跡より五平太、佐五郎、野袴、ぶッ裂き羽織、大小の形にて出て來り

五平　イヤナニ、神原氏、春とは申せども、未だ寒いではござらぬか。

佐五　おてまへ様にも、御苦勞に存じます。晝夜の差別なく、斯様に心勞いたすも、弟左七郎が不所存ゆゑ、三品の寶紛失に、頼朝公のお咎め嚴しく、御主人廣元さまの、御身にかゝる一大事。何卒詮議いたさん爲。斯くの如く夜分の步行。五平太どのにも、さぞかし御心配。

伴助　旦那どの、御心勞も、この節の盗賊、半時九郎兵衛の御詮議。

五平　その九郎兵衛も江戸に住居いたすとの事。

佐五　それゆゑ、この近邊に、目を附けて居ります。

五平　然らば御苦勞ながら。

佐五　急げ〳〵。

ト皆々本舞臺へ來る。この時下座より犬一疋出で來り、小屋の内を見て無性に吠える。皆々これに目

を附け

五平　待て／＼。あの犬を見れば、小屋の内を見て頻りに吠える様子。

佐五　イカサマ、内にどうやら人影が

ト伴助、提灯を上げて

伴助　モシ、誰れやら小屋に居ります。

五平　ソレ、引出して吟味いたせ。

ト綱五郎この様子を聞いて

綱五　こいつは堪らねえ。

ト上の方へ逃げようとする。三人、綱五郎を捕へる。佐五郎見て

佐五　ヤア、其方は綱五郎。

綱五　あなたは御主人、佐五郎さま。

佐五　主人とは、そりや何を申す。見所ある其方ゆゑ、弟左七郎へ附け置きしに、おのれも共に不所存ゆゑ、お預かりの寶紛失。

五平　これサ／＼、佐五郎どの、その不所存者ゆゑ、斯様な所に隠れ居るは、畜生同然。叩いて見たら

何が出やうも知れぬ。怪しい風體。番屋へ引け。

綱五 アヽモシ、私しは

五平 なにを……うしやァがれ。

ト伴助と共に綱五郎の襟髪を取り、皆々下の方へ歩む思ひ入れ。此うち向うより太郎助出て來る。これに隨ひ、逆廻しにヂリ〳〵と道具まはる。

本舞臺、元の番屋になり、眞中に左五兵衞、矢張り寢たまゝにて道具とまる。

ト皆々自身番の前へ來り

佐五 番人〳〵。

太郎 番人、これに居ります。

トこの聲にて左五兵衞起上がり

左五 はね吉、手水ならおれも一緒に

ト寢惚けたる思ひ入れ。兩人見て

佐五 此奴、何を申す。

ト左五兵衞心附き、皆々を見て

左五　これはお役人樣。

佐五　其方は町役人か。

左五　左樣でござりまする。

ト五平太を見て

五平　ヤア、あなたはいつぞや小塚ッ原で

コリヤ、知らぬぞ〳〵。何も申すな。その時おのれが弟めは、身共によくも似せ物を

ト佐五郎へ思ひ入れあつて

うぬら兄弟、覺えてうせろ。

ト左五兵衞、太郎助。綱五郎を見て

兩人　ヤア、おぬしやァ綱五郎。

佐五　番人、灯を〳〵。

太郎　畏りました。

ト燭臺を出す。五平太、綱五郎を引据ゑ、よく〳〵見て

五平　おのれが面は、尋ねる盗賊によく似て居るが、われが名は、九郎兵衛と云はうがな。
綱五　イエ〳〵、私しは綱五郎と申しまして、以前は神原さまの御家來。只今にては町家の住居。卽ち
　この家主の店子でござります。
左五　イエ〳〵、この者は店立て致しましたれば、店子ではござりませぬ。
綱五　家主が何を申しましても、未だ引取りを致しませぬ。
五平　未だ懸り合ひと申すか。
綱五　左樣でござりまする。
佐五　それは兎もあれ、おのれ何ゆゑ、あの内に隱れ居つた。
綱五　サア、内に隱れ居りましたは
五平　此奴、盜賊であらう。それゆゑ我れ〳〵が參るを見て、小屋の内に隱れ居つたか。
綱五　どう致しまして、私しは
五平　怪しい奴、腕まはせ。
　　　ト立ちかゝる。綱五郎恂りして
綱五　アヽモシ、御免なされませ〳〵。

五平　イヤ〳〵、この家主が支配に、ろくな奴はない。家主も怪しい。其奴も縛れ。

伴助　ハツ。

ト立ちかゝる。左五兵衛恟りして

左五　待つて下さりませ〳〵……コレ綱五郎、こなたが申し譯をしないと、おれまでの迷惑。早く云ひ譯を、頼む〳〵。

五平　綱五郎とは聞き及び居るが、何ゆゑあつてあの内に

綱五　サア、隠れて居りましたその仔細は

ト左五兵衛を見て

イヤ〳〵、こいつは云はれぬ〳〵。

左五　これサ、貴公が云ひ譯をしてくれないと、おれまで迷惑。どうぞ云ひ譯を、頼む〳〵。

綱五　仕方がねえ。何もかも云ふが、必ず大家さん、腹を立てなさんな。

左五　おぬしが申し譯するに、なんでおれが腹を立つものか。

五平　早く仔細を吐かし居らう。

綱五　ハイ〳〵、申します〳〵。何を隠しませう、私しは、この家主の女房と、色でござります。

左五　嘘々、大の嘘。おぬしは前の色。今の色男は、この家主でござります。

五平　何を吐かす。下に居らう。

ト立ちかゝる。

左五　ハイ〳〵。

ト思ひ入れ。

五平　その詞に違ひなくば、女を呼びよせ、突合せに致すぞ。

綱五　どのやうに御吟味なされても、それに違ひはござりませぬ。私しは、盗人夜盗の覺えは、毛頭ござりませぬ。

佐五　然らば、その女を連れて參れ。

太郎　畏りました……サア〳〵、往來を明けませう〳〵。

ト鐵棒を持ち、下座へ入る。

五平　綱五郎とやら、其方は所々にて盗み致した事は、此方でよく存じて居る。痛い目せぬうち云つてしまへサ。

綱五　毛頭左樣な覺えはござりませぬ。この家主の女房と、譯はござりまするが

佐五　黙り居らう。さほど申し交した不義密通なら、亭主の前を包むべきに、明らさまに申し僞り。

左五　嘘々、大の嘘でござります。

　　トまた立ちかゝる。

伴助　下に居らう。

左五　ハアイ。

　　ト思ひ入れ。時の鐘、合ひ方になり、下座より太郎助、はれ吉を連れて出で來り

太郎　コレ〳〵娘、お役人樣が、何事をお訊きなされても、何も云はぬがよいぢや。

はね　よしサ〳〵、そこへ行つちやァ如才仲町廣小路サ。

太郎　これサ、洒落ずと、眞面目で〳〵……へイ、女を召連れましてござります。

はね　オヤ、どなたも今晩は、よう入らつしやりましたね。

佐五　其方は家主の女房か。

はね　アイ、女房といふでもなし、アタ入我入サ。

五平　其方はこの綱五郎と、密通を致したか。

はね　なにサ、三つや四つぢやァござりません、この綱さんとは、久しい話し合ひサ。

左五　イヤア、てめえいつの間に。
はね　今どきの女が、一人の男を守つてゐるものか。お前の夜番を幸ひに、綱五郎さんを引摺り込み、二人しつぽり樂しむ心サ。
伴助　此奴、天下の役人に請けさせるな。
はね　モシ、天下の役人さん、お前方に只も請けさせられめえ。奴鰻でもはづまうか。
五平　何を吐かし居る。
左五　イヤア、そんならおれを出し拔いて
綱五　跡へつけこむ此方の魂膽。
はね　なんと悧巧な女房であらうが。誰れだと思ふア丶、面もねえ。
五平　何を吐かす。イケやかましい。
はね　やかまし丶に牡丹は、綱さんの替へ紋サ。
左五　そんなら二人は、いよ〳〵色か。
はね　知れし御事サ。
佐五　然らば兩人は不義間男。

五平　法に行ふ。覺悟いたせ。

はね　知れし御事サ。

左五　イヤ〳〵、今更さうは拔けさせぬ。どこがどこまでおれが女房。

佐五　女は今の通り申すが、それには何ぞ

左五　ハイ、きつとした證據がござります。

五佐　して、その證據は。

左五　外でもござりませぬが、この女の方から私しへ、遣はしました起請がござります。

佐五　して、その起請は。

左五　卽ちこれに。御覽下さりませう。

ト懷より三建目の起請を出す。佐五郞取つて

佐五　成る程、これは起請文に相違なけれど、半分引裂き、名宛も無く、殊にはどうか男の手跡。

綱五　私しも一件の懸り合ひ。憚りながらその起請を

ト佐五郞より取つて

成る程、こりやア男の手だが、どういふ事であの女が

ト思ひ入れ。この時佐五郎、最前太郎助が置いたる證文の末の方を取つて、ソツと袂へ入れる。五平太、これを知らず、件の起請を、よく〳〵見て

五平　この起請を見れば、尊像色紙と引替へに、褒美の金を相渡すとあるが、さてはこの盗賊は、家主其方だな。

左五　ア丶、モシ〳〵、どうして私しが其やうな事を

五平　默り居らう。おのれでないものが、何ゆゑこの證據を所持なし居るぞ。

佐五　ヤア、今さら云ひ譯なさの世迷言。女房より取つたる起請、何ゆゑ尊像色紙が書き入れあるのだ

左五　サアそれは。

五平　して、尊像色紙は、いづれへこかした。

左五　なんの私しが、尊像とやら、色紙とやら

五平　知らぬと云つてもその起請、所持なすからは寶の盗賊。

左五　サアそれは。

五平　サア

兩人　サア〳〵。

佐五　五平太どの、その詮議は御無用でござる。

左五　大切な寶の詮議いたすを、なぜ留めさつしやる。

佐五　イヤ、その盗賊が相知れました。

五平　して、その手懸りは。

佐五　外でもござらぬが、只今この所にて、不思議に手に入る起請の名宛。これ御覽下されい。

ト出す。五平太見て

五平　ヤア、その手跡は。

佐五　これなる起請と、この反古を、斯う繼ぎ合すれば一紙の文言。左五兵衛どのへ、山住五平太と記しござるが。

五平　ヤア。

ト思ひ入れ。

佐五　この、山住五平太とは。

綱五　どうやら聞いたやうな名でござりますな。

五平　その山住五平太とは、身共が姓名。

佐五　して、家主左五兵衛は。

左五　その左五兵衛は、私しでござります。

佐五　然らば兩人、腕廻せ。

五平　默らつしやい佐五郎どの、何科あつて我れ〳〵へ

左五　繩をかけると云はつしやる。

佐五　繩をかけても大事ない。

五左　そりや又なぜに。

佐五　うぬら二人が盜人だワ。

五左　何がどうした。

佐五　知るまいと思ふか。この一札をよく見れば、尊像色紙を盜ませた、褒美の金と引替へまで、預かり手形の文言に、生血をべつたり注いでも、非禮を受けぬ正直の、神を僞る泥坊めら、そこ一寸も動きをるな。

ト下へ蹴落す。

左五　ヤア、思ひがけなきこの災難。

五平　身共に一向覺えはないぞ。
佐五　イヽヤ、覺えないとは云はれまい。繼ぎ合したるこの書面と、いつぞや貴殿が金子の受取り、これなる下郎へ遣はしたるこの書附け、同筆同印。これでもおてまへ、あらがひ召さるか。
五平　サアそれは。
綱五　起請の名宛は左五兵衞どのへ。
佐五　その請け人は畑右衞門。
左五　そんならいつぞや弟が
佐五　かゝりや繫がるこの場の一件。
綱五　二人の奴等、動きやァがるな。
五左　サアそれは。
綱五　寶の在所、吐かしてしまへ。
皆々　サア〳〵〳〵。
五左　こいつは堪らぬ。
　ト逃げにかゝる。後より吉出て、左五兵衞を取つて押へ、ありあふ番屋の繩にて縛る。綱五郎は五平

太を縛しあげ

吉　形はちつくり小粒でも、爰がお江戸の町抱へ。親の名代に勇みだぞ。泥坊めら、動きやアがるな

佐五　この上は二人の奴等、拷問なして寳の手がゝり知れるまで、この科人は大切に。

綱五　其うち三品を取戻し、御主人方は本地へ御歸參。

佐五　左五兵衛とやらは天下の囚人。この女にはお構ひない。主なき女は綱五郎、其方引取り立歸れ。

綱五　何から何まで、有り難うござります。

はね　そんならわツちやア、お前の方へ。

綱五　引取る上は改めて、元の亭主へ綱五郎。

トはれ吉を突きやる。この時、駕籠の中より要助出る。後向の駕籠舁きと見えしは權兵衛にて、頰かむりを取りて前へ出て

權兵　戻すとあれば權兵衛が、女房は慥かに受取りました。

ト左五兵衛この體を見て

左五　ヤア、兄妹と思つたに、あの權兵衛は元の亭主か。

はね　ヤア、左五兵衛さん、お前は鏡を見た事はないかえ。お前に惚れたと云つた時、眞請けに請けた

が其方の自惚れ、ちと御麁相かと存じまゐらせ候べく候。ほんに身請けをお忝け。

左五　一ぱい食つたか、いま〳〵しい。

權兵　始終の樣子は承りました。御主人方の御心配

佐五　其方が事は、かね〴〵又の家來筋、弟左七が身の上も

綱五　お氣遣ひなされまするな。權兵衞と私しが、身を粉に碎き、寶の詮議。

はね　どうとも其方は御勝手次第。權兵衞さんと夫婦になつても、忠義だの、よい〳〵だのと、迷惑くさい事をせうより、此方は矢ッ張り仕來つた、宿場藝者があたぼうサ。

權兵　それもお主の尋ねる寶。色紙の後金、約束通り、親方さんへ

要助　オット承知。そりや五十兩。

ト權兵衞へ渡す。

綱五　見れば大枚五十兩。

佐五　して、その金の出所は。

はね　わたしが住替へ、行く先は、宇都の宮の宿場拵ぎ。越後ッぽうの機嫌を取るのサ。

太郎　その親判はこの太郎助。

要助 奉公人は、わたしが引取る。
はね 思ふ男のその爲と、お輕もどきは人聞きが、よけれどわッちやァ好きな道。
權兵 義理ある男へ
綱五 立てさす忠義か。
佐五 天晴れ感心。
はね ナニ、わッちは小むづかしい、その達引は知らないが、流れ行くのがこの身のはね……いつまで
わたしが……はねてゐるのが樂でいゝのサ。
權兵 それも矢ツ張りお主の爲。
太郎 眞實誠で
左五 おれより餘ッぽど悧巧者。
五平 繩目にかゝつた此方がはね吉。
綱五 勤めの金で吉原へ
權兵 色紙の後金……しかしこの形。
太郎 綱公、羽織を貸してやらッし。

ト綱五郎脱いで、權兵衞に羽織を着せる。

吉　とても事に提灯を

ト綱の提灯を出す。權兵衞取つて

權兵　夜の更けぬうち

はね　權兵衞さん、もうお出でか。

トほろりとする。

權兵　とはいへ別れに

はね　達者でおいでよ。

ト權兵衞、はれ吉、ちよつと側へ寄る。

左五　畜生め。

佐五　コレ。

ト皆々思ひ入れ。權兵衞、はれ吉、顏見合せる。これを木の頭。兩人別れを惜しむ。キザミひやうし

ツナギ、禪のツトメ、直ぐに引返す。

幕





第二番目　大切

淺草中田圃の場

役名――船越十右衛門。粟島權兵衛。仲町の女郎、小絲。本町綱五郎。同女房、お房。神原中間、伴助。大工、六三實ハ神原左七郎。醫者、百川東林。

本舞臺、三間の間、正面柵、竹矢來、うしろ黑幕。よき所に石の地藏。上の方、枯れ蘆の茂り、小川の心。これへ人入る事あり、爰に非人二人、菰かぶりにて焚き火してゐる。すべて淺草中田圃、夜の景。双盤、時の鐘にて幕明く。

ト向うバタ／＼になり、東林、以前の形、出刃を持ち、走り出て來て

東林　昨日掘出し物の曉丸と見たゆゑ、槌右衛門が持參金で、此方へ買ひ取り、百兩にも賣らうと思ひの外、出合ひ頭に昨夜の災難。たうとうお菰とまでなつたが、この埋め草にはあの妹。それ／＼

ト うなづき、舞臺へ來り

仲間の手合ひは、居るか／＼。

非一　おぬしやア新米の醫者樣、どうした／＼。

東林　いま爰へ、綱の字の附いた提灯を持ち、蝙蝠羽織を着て、來るぜ〳〵。
非二　提灯を持つて、蝙蝠羽織は、いくらも通る。
非一　それがどうした〳〵。
東林　サア、それが妹と云ひ交した男。其奴があるゆゑ、おれまでこの通り。その野郎が爰へ來たら、コレ。

ト囁く。兩人呑み込み

非一　そりやア合點だが、骨折り代は。
東林　ハテ、そこに如才はねえ。先刻妹を騙して、借りて來たこの簪、バッタりに賣つて飲ませるワ。
非二　そんなら、綱の附いた提灯に蝙蝠羽織。
非一　して、手にあるその時は
東林　この出刃庖丁で

ト以前の庖丁を出す。

非人　ばつさり云はせる
東林　コレ。

ト三人囁き合ひ、小隱れする。時の鐘、向うより權兵衞、以前の蝙蝠羽織、綱の字の附いたる提灯を持ち、頰かむりをして出で來り

權兵　いま打つたのは何時だしらん。どうぞ吉原へ、引け前に行きたいものぢやが。

ト何心なく舞臺へ來る。この時、非人二人、縫ぐるみを持ち、物をも云はず提灯を打ち落し、打つてかゝるゆゑ、權兵衞恟りしてこれを支へる。立廻りののち、縫ぐるみを引つたくり、兩人を打ちのめす。これにて非人二人、向うへ逃げて入る。この途端、東の揚げ幕より小絲、裸足にて走り出て來り本舞臺へ來て、思はず權兵衞に突き當り、兩人恟りして

うぬ、まだうせたか。

ト縫ぐるみを振上げる。小絲、恟りして

小絲　アレエヽ。

ト聲立てるを、權兵衞透し見て

權兵　さういふ聲は、女中ぢやな。

小絲　通りかゝりの者でござんす。どうぞ赦して下さんせ〳〵。

ト慄へて云ふ。

權兵　アヽ、コレ〳〵、どうもしはせぬ。わしは今爰で、泥坊にあつたゆゑ、滅多無性に叩き散らし、そこへお前が來たゆゑ、もしひよつとその同類かと思うて、それで今のやうに

小絲　さうでござんすかえ。わたしや又お前さんが、泥坊さんかと思うて。

權兵　イヤ〳〵、決してさういふ者ぢやない。若い女中の今時分、供をも連れず只一人、マア、どこへござります。

小絲　アイ、わたしや深川の者でござんすが、お客と一緒に駐春亭へ參りまして、好かぬお方が大勢して、わたしを弄らうと致すゆゑ、やう〳〵爰まで逃げて參りました。

權兵　アヽ、深川から、お客と一緒に來たと云はつしやるからは、大方藝者衆か。お前マア逃げ出して爰から一人で歸るのか。

小絲　アイ、駕籠でも賴まうと思ふけれど、爰らに駕籠屋は

權兵　そりやアお前、馬道まで出にやア駕籠屋は無い。この道は誠に物騷で、今も今とて盜人めが……併し、わしが懷に、大金を持つてる事を知つて、それでかゝり居つたなれど、わしも一生懸命その金は取られませぬ。

ト懷へ手を入れ、拾ひし紙入れを出して

わしが拾うたこの紙入れ、中には薬包みばかり。これさへ取られはしませぬ。

ト話しのうち、小絲思ひ入れあつて

小絲 ほんに、男といふものは、大金を持つての夜道でも、心強いものでござんす。

權兵 ナニお前、大金といつて、小判で僅か五十兩。

小絲 エ、アノ、小判で五十兩。

權兵 ハテ、仰山な。

小絲 お前も早う、駕籠にでも乘つてござりませ。

權兵 わしはこれから吉原へ行きます。北と南へ別れにやならぬ。隨分急いで行つかしやりませ。

小絲 左樣なら、お別れ申しませう。

ト小絲、權兵衞の懷へ心を殘して思ひ入れ。權兵衞、何心なく、捨ぜりふにて別れ、下座の方へ行きかける。小絲こなしあつて

アイタヽヽヽ。

ト仰山に云ふ。權兵衞、立戻り

權兵 これは女中、どうさつしやれた〳〵。

小絲　わたしや持病の

權兵　アヽ癪か。困つたもんだ。

小絲　モシ、お前にちとお願ひがござんす。どうぞ申し兼ねましたが、駕籠屋のある所へ、送つて下さんせぬか。

權兵　サア、わしも急ぎの用はあれど、この難儀を見捨てゝも行かれまい。仕方がない。馬道まで送つて進ぜませう。

小絲　それは〳〵、有り難うござんす。

權兵　サア〳〵、一緒に

　ト時の鐘、合ひ方になり、連れ立つて花道へかゝる。

小絲　モシ、お前さん、いま吉原へ行くと云はしやんしたが、金を持つて此やうな、淋しい所をたつた一人、戀には身をもやつすとやら、餘ッほど實者でござんすな。

權兵　ナニ、お前、わしは女郎買ひに行くのではござりませぬ。ちつと掛合ひ事があつて

小絲　掛合ひ事なら、大方年の明いた女郎衆の、置き土産やら祝儀やら、證文巻いて連れて來る、掛合ひ事でござんせう。本當に羨ましい。お前のやうな實のある人に、世話になる女郎衆は仕合せ者

わたしもどうぞ成らうなら、お前のやうな

ト云ひさして思ひ入れ。

權兵　なにサ、そんな榮耀な事ではござらぬ……お前、先刻から、おつうわしをはぐらすが、送つてもらふ返禮の氣休めかえ。

小絲　なんのマア、さうぢやござんせぬが、爪づく石も他生の縁とやら云うて、爰で一緒に逢うたのも神樣が氣を取つて、逢はせたものでござんす。わたしや此やうな、嬉しい事はござんせぬ。

ト思はず權兵衞に寄り添ふ。

權兵　何ぢややら、嬉しがらすやうな事を

ト思ひ入れあつて

お前、癪はよくなつたか。

ト小絲思ひ出したやうに

小絲　アイタヽヽヽ。

權兵　思ひ出したやうに痛む癪でござるな。

小絲　癪の痛いも、お前に浮れて

權兵　眞暗がりな夜の道。

ト眉毛へ唾を附け

その手は食はぬ。

トこれにて小絲、金の事かと心得、ハツと思ひ入れあつて

小絲　初めて逢うた女子の口から、ふざけたらしい事を云ふゆゑ、わたしがその金を……それで、その手は食はぬと云ふのかえ。

權兵　とんだ所へ氣を廻したものぢや。お前は女の事で、ナニこの金を持つてゐたとて、爰で氣遣ひがあるものか。

小絲　ほんに、氣遣ひはござんせぬ。お前また何で今のやうに

權兵　どうやらお前は狐ではないか。

小絲　エヽ、氣味の惡い。

權兵　此方が氣味が惡い。

ト此やうな事を云ひながら、中の間へ廻る。知らせ無しに本舞臺の道具よろしくヂリ〳〵と廻る。

本舞臺、三間の間、一面の藪疊、うしろ黒幕、中田圃夜の體にて道具納まる。

ト始終時の鐘、誂らへの合ひ方にて、兩人東の歩みより舞臺へ來る。

小絲　モシ、お前、女の可愛いといふ事を知つてかえ。

權兵　お前も詰まらない事を云ひなせえ。犬でも猫でも、それを知らぬといふ事があるものか。

小絲　お前ひよつと、可愛いと思ふ女子が、命に係はる程の顛末になつた時、知らぬ顔して居なさんすか。

權兵　妙な事を根問ひをする。そりや人情だものを、共に命を捨てるか、又は金づくで濟む事なら

小絲　無理な都合をしてなりと

權兵　引くに引かれぬ譯ならば、たとへ首が落ちやうとまゝ、人の物をば盗んでなりと。

小絲　さうでござんせう。さうなうてはならぬ筈。女子にも矢ツ張りその通り、可愛い男の爲にならば恐ろしい心にも、なりさうな事でござんすわいなア。

權兵　されば、女の心はどうぢややら……オヽ、爰から馬道へはツイそこ。もう爰らで堪忍してはくれまいか。

小絲　アイ、有り難うござんす。其やうに嫌がらしやんすもの、頼んだとて仕樣もなし。そんなら爰で

権兵　別れますぞや。

小絲　アイタヽヽヽヽ。

権兵　また癪かいの。

小絲　お前、とてものお世話次手に、ちよつと爰を押して下さんせ。

権兵　それは困つたもの。見捨てゝも行かれまい。斯うかく。

ト脊中を押へてやる。

小絲　有り難うござりまする。わたしの癪はそれより、爰を押して下さりませ。

ト権兵衛の手を取り、懐へ差入れる。兩人こなしあつて

権兵　ハヽア、お前は御病身と見える。大ぶん灸がすゑてありますな。

小絲　どうぞもつと下の方を。

権兵　爰かく。

小絲　イエくもつと。

ト権兵衛思ひ入れ。チヨンと月出る。兩人顔見合せ、ヂツとこなし。誂らへの合ひ方になり、小絲は権兵衛を引寄せる。よき時分、本釣り鐘ゴンと鳴る。これにて兩人左右へ別れるはずみ、小絲は権兵

衞の懐の金を引出し、行きにかゝるを、ザツと押へ

權兵　コレ女中、こなたはなんでこの金を

小絲　サア、近頃申し悪い事ながら、わたしにどうぞこの金を

權兵　滅相な事を。この金は大事の御主人へ、忠義を立てねばならぬ譯合ひ。

小絲　わたしも丁度その通り。可愛い男のお主樣、金が無ければ一生埋れ木。たとへこの身はどうなつても、夫へ忠義が立てさせたい。爰の道理を聞き分けて、しばしの間この金を

權兵　サ、わしも忠義を立てたさゆゑ、可愛い女房を賣つた金、どうしてこなたに

小絲　サヽ、さうでもあらうか、是非ともわたしが

ト財布を持ち、行きにかゝるを、權兵衞キツと捕へる。この時月隱れる。

權兵　そんならうぬは作病かまへ、色に事よせこの金を

ト振り切る。小絲、財布を引合ふ。この時、東林出かゝりゐて、この中へ探り寄つて、右の財布へ手をかける。立廻りのうち權兵衞、足にさはりし縫ぐるみを取つて打つてかゝる、はずみに思はず東林に切られ、刃物を捨て、タヂ／＼となる。小絲、權兵衞に縋り

小絲　モシ、慈悲ぢや情ぢや、どうぞ／＼この金。

權兵　エヽコレ、女と侮り、この深手。

小絲　アヽコレ、滅相な。わたしは刃物は持ちませぬ。

權兵　ようもうぬァ騙し討に、アレ、人殺し〱。

小絲　モシ、人が聞きますわいなァ。

權兵　人殺し〱。

　ト大きな聲にて喚くゆゑ、口に手を當て、思ひ入れあつて

小絲　ハテ、是非に及ばぬ。もうこの上は、鬼ともなつて

權兵　何を女め。

ト振り切る。小絲は手に當る出刃を取つて、是非なく權兵衞を一刀切る。權兵衞、東林を押へる。忍び三重、一つ鉦の念佛になり、立廻りのうち東林心附き、探り寄る。權兵衞は小絲の手より刃物を取り、小絲と心得、東林へ切りつける。この時東林、以前の簪を落し、撞となる。權兵衞は小絲を仕留めしと心得、につたりと思ひ入れ。此うち小絲、件の財布を持ち、行きにかゝる。權兵衞、合點の行かぬ思ひ入れにて、やるまいとして、手負ひゆゑ、タヂ〱となる。此うち小絲摺りぬけ、財布を持つて、よろぼひ〱、向うへ入る。權兵衞起き上がり、透し見て

ヤヽ、いつの間にやら一人の荷擔人。おのれ女め。

ト跡追うて行きにかゝる。前幕の東林が紙入れ、件の出刃を捨て、ウンとなる。時の鐘、合ひ方にな
り、向うより六三、一本差し、尻からげにして、もとの手拭を頬かむりして、小提灯を持ち、思案し
いく出て來り

六三 この間權兵衞が、短刀があると云つたばかりで、一向沙汰もねえが、どうぞ權兵衞に逢つて、樣
子を聞きてえものだ。それにつけても絲屋の内で、暗まぎれとはいひながら、脇差が取替つたが
こりやァ慥かあの東林が脇差。取替へに行きたいにも、内にはあのお絲どのを。何にしろ權兵衞
は吉原であらう。ちつとも早く、それく。

ト云ひながら舞臺へ來り、件の紙入れを拾ひ

ハヽア、誰れか紙入れを落したわえ。中に書附けでもあるなら、屆けてやらう。

ト紙入れの中を探し見て

なんだ、逆上の藥と書いた藥があるが、ハテ氣の毒な。我れも人も、紙入れを落したら困るもの
だ。持つて歸つて、とつくりと見て、その持ち主へ屆けてやりませう。

ト紙入れを懷中して行きにかゝる。足許の權兵衞に突き當り

これは御免なされませ。急ぎますゆゑ、思はぬ麁相いたしました。心を慥かに持つて

ト提灯にて、よく〳〵見て

ヤ、、權兵衛か。どういふ譯でこの深手。併し急所は除けた。

ト引起し

コレ權兵衛、六三ぢやぞ。心を慥かに。氣が附いたか。

ト權兵衛心附き

權兵　ヤ、、若旦那か。面目ない〳〵。

六三　コリヤ〳〵、何も面目ない事はない。して、其方を何者が手にかけた。

權兵　サ、、思ひがけないこの深手。色紙や短刀の事について、金を持つたがこの身の災難。

六三　ヤ、、すりやその短刀や色紙は如何いたした。コリヤ、心を沈めて云つて聞かせろ。コリヤ、心を慥かに持て……療治は屆くぞ。まづ早速に聞きたいが、短刀の在所。して、その持ち主は、いづくの何者。

權兵　サ、その短刀の持ち主は、この東林。

六三　ヤ、、すりや、この東林か。して短刀は手に入つたか。

権兵　その短刀の申し譯は。

　　トありあふ出刃庖丁を腹へ突き立てる。

まツこの通り。

六三　エヽ、こりや権兵衛、氣が狂うたか。譯も云はずにその生害。仔細はなんと。ドヽどうぢや。

権兵　サア、その申し譯一通り、お聞きなされて下さりませ。

六三　ヤヽ、なんと。

　　ト本釣り鐘、誂らへの合ひ方になり、権兵衛こなしあつて

権兵　いつぞや僅かの價にて、買ひ求めたる小脇差、眼はあつても盲目ゆゑ、物の辨まへない悲しさ、その短刀と露知らず、商ひ物と思ふうち、この東林が買ふとある、値段も大枚五十兩、生業づくの掘出しと、悑りするやら怪しいやら、直さま金を受取つて、手詰めとなつた色紙の手附け。その時取つたこの書附け。跡にて聞けばその短刀は、尋ぬる品を聞くなれば、取戻すには五十兩、色紙の手附けに遣つたるゆゑ、兎やせん方も情なや、愚かな女房を道遠き、宇都の宮へ飯盛り奉公、その金高も五十兩。それにて色紙か短刀の、二つの中を取戻し、お詫びなさんと吉原の、その持ち主へ行く道にて、不意にうけたるこの疵は、女の曲者邪慳にも、金を奪つて立退く折柄、

荷擔人らしき一人を仕留め、見れば短刀買ひ求めし、醫者東林を殺せし上は、短刀詮議の綱も切れ果て、心を碎いた權兵衛が、云ひ譯なさに相果てる、心の中の苦しさを、御推量なされて下さりませ。

六三　アヽ、あつたら忠義の權兵衛を、六三が身の誤まりより、死なしたり、殘念な。アヽ……さるにてもその短刀は、もしや東林がこの死骸に

ト東林の死骸を改めて

ヤヽ、この死骸にも見えざるは、又ぞろ外へ賣り代なしたか。

權兵　ハテ口惜しき、今での後悔。

六三　それにつけても其方が、女房を賣つて拵らへた、金を取りしは女とあれば、遠くは行くまい、跡追ひかけて

ト行きにかゝる。

權兵　モシ、若旦那、金子は僅か五十兩。それよりあなたは寶の行くへを。

六三　日延べの日限近きにあれば

權兵　身を粉に碎き、片時も早く。

六三　とはいへ其方が今の身の上。

權兵　武士は刃で死ぬるが本望。

六三　それに引かへ、我れ〳〵兄弟。

權兵　やがてめでたう本地へ御歸參。

六三　その時汝を連れぬが殘念。

權兵　草葉の蔭より私し夫婦が

六三　死骸は跡にて、よきに葬むり

權兵　左樣なれば若旦那。

六三　これより直さま。

ト行きにかゝる。この時莨入れとよしの手拭落ちるも六三心づかぬこなし。權兵衛引廻し、苦痛の思ひ入れ。六三見て、

とはいへ此まゝ、

權兵　モシ、隨分御無事で

六三　アヽ、不便な最後を。

ト本舞臺を見て思ひ入れ。權兵衞よろぼひ〳〵立上がり、笛を掻切り、上手の枯れ蘆の中へバッタリ横に落入る。六三思ひ入れあつて氣を變へ、向うへツイと入る。直ぐに太鼓入りの双盤になり、東の揚げ幕より綱五郎、前幕の形にて、四十八文のぶら提灯を灯し出て、直ぐに舞臺へ來り、兩人の死骸を見て

綱五 ヤア〳〵、こりやァ權兵衞、一人は醫者の東林。こいつは大變〳〵。早く知らせて……イヤ〳〵まだ息があるまいものでもねえ。權兵衞やァい〳〵……アヽ、もう死に切つたさうだ。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

ト權兵衞の死骸の側にある莨入れを見て

ヤア、この莨入れは見覺えある、六三さまのだ。どういふ事でこの死骸に。後日の證據になる時は、若旦那は人殺し。寶の詮議は餘所になり、六三さまのお身の上。こいつは思案をしにやァならねえ。

ト六三の莨入れを取つて我が腰へ提げ、綱の手拭を死骸の側へ捨て、人殺しは我れなりといふ心にてしほ〳〵と行かうとする。向うより灯影見えるゆゑ、提灯を吹き消し、田の畦を通る心にて、土間の歩みへかゝる。よき時分、向うよりお房、世話女房の拵らへ、小提灯を持ち出てくる。此うち綱五郎

歩みを渡り、揚げ幕へ入る。お房これを知らず、始終時の鐘、合ひ方。

ふさ　どうやら空も曇つた樣子。このマア暗い事わいなア。お主の爲とはいひながら、女子の身空で夜中、色紙は吉原と聞いたゆゑ、持ち主に話して見れば、六三さまより手附けの金を、預かつたと聞けば一つは安堵。したが、跡の二品揃はぬ時は、お主樣といひ、こちの人の身の上。何につけても、心がゝりな事ぢやなア。

ト鳴り物生け殺しにて、舞臺へ來り、兩人の死骸を見て

ヤヽ、爰に誰れやら。いとゞ氣味の惡いと思ふ中田圃、大方此やうな事ぢやあらうと思うた。ちつとも早う。

トわな〳〵しながら行かうとする。この時、落ちてありしゆしと綱の手拭を見て

ヤヽ、死骸の側にこの手拭。こりやコレ慥かにお二人の……爰にあつては、

ト思ひ入れあつて二つの手拭を懷中する。此うち向うにて提灯見えるゆゑ、ちよつと小隠れする。木魚入りの合ひ方になり、向うより伴助、菅笠をかむり、提灯を持ち、跡より十右衛門、大小袴ばかりにて、傘をさし、出て來り

伴助　俄の雨ゆゑ、道が辷ります。お危なうございますぞ。

十右　絲屋より戻りかけ、神原氏にお目にかゝり、其方が送りくれたればこそ、これまで參つた。大儀大儀。

伴助　へイ、そこに溝がござります。

十右　オット合點ぢや。

ト兩人捨ぜりふにて花道よき所へ來り、十右衞門、下駄の鼻緒を切りし思ひ入れ。

南無三、鼻緒が。

伴助　これはしたり、私しが直しまして。

十右　然らば、慮外ながら。

ト下駄を片足出し、伴助の肩へ手を掛けゐる。伴助、鼻紙を出し、鼻緒を立てながら

伴助　お前樣は何御用で、江戸へお下りでござります。

十右　サア、聞いてくりやれ。養女のお園めは、云ひ號けの左七郎が跡を慕ひ、この江戸へと聞いたゆゑ、やうく阿野屋十兵衞方にて、めぐりあひ、樣子を聞けば、聟の左七郎は六三と名を改め、家來綱五郎が世話にて大工の世渡り。あまつさへ、阿野屋の娘お絲を連れて出奔との事。右の始末を聞いたれども、云ひ號けのお園には悋氣もなく、義理を立てゝの尼法師、若い身空で苦みの

花。不便と思ふ心根は、いづれの親も變りはない。
ト思はずホロリと思ひ入れ。

作助　ハイ、お下駄がよろしうございます。
ト出す。十右衞門、ちやつと氣を變へ

十右　これは憚り。

作助　斯うお出でなされませ。
ト兩人舞臺へ來り、伴助、死骸を見て
ヤア、爰に誰れやら切られて居ります。

十右　ナニ、横死の者が
トよく見て
疵口の樣子を見れば、武家の仕業とも見えぬ。こりや町家の者の意趣斬りと見ゆる。されども二人は若い同士。ハテ、不便な事を。
ト思ひ入れ。この時、落ちてある簪を見て
ヤ、死骸の側にこの一品。紋は菊蝶、琴柱の簪。

ト伴助見て

伴助　その持ち主は、最前慥か。

十右　見覺えあるか。

伴助　先刻木町綱五郎、ゆかりと聞きし女の簪。

十右　ヤ、綱五郎は左七郎が家來。それにゆかりとあらば、遁れがたなき小絲が身の上。

伴助　證據となるべきその品は

十右　身共が此まゝ。餘人でなうて……ハテナア。

ト件の簪を懷中する。小蔭に窺ひゐたりしお房、この樣子を聞き、人殺しを身に引受け、證據といふ心にて、片袖を引切りながら、よき所まで行くを、十右衞門透し見て

十右　闇はあやなし、正しく女。

伴助　慥かに小絲。

ト提灯を上げて行きにかゝるを、十右衞門これを支ゆる心。此うちお房、件の袖を小石に包み、エイと打ちつける。これにて提灯バッタリ消える。

伴助　南無三、灯を。

十右　大事ござらぬ……この間に早う。

ト顔にて逃げろといふ思ひ入れ。お房「ハツ」と忝きこなし。

サヽ、参りませう。

トこの仕組みよろしく、頭取出て

頭取　まづ今日はこれきり。

めでたく　　打出し。

初冠曽我皐月富士根

げんぶくそが さつきのふじがね

初冠曾我皐月富士根

第一番目　三建目

鎌倉三祐ヶ谷の場
大藏ヶ谷花館の場
御殿草履打の場

役名——源の頼家公。政子御前。岩藤玄蕃之丞時元。宇佐美尾上之助。同、下郎、初平。愛甲三郎。吉良小次郎。宇田五郎。加藤大部。岡部彌三郎。義時妻、岬。腰元、深雪。同、三浦。同、三津瀨。大工、船越十右衞門。蝮の仁太郎。牛島主稅。甘縄丹下。片瀨左仲太。尾上之助妻、二の宮。若黨、小源次。乳母、お倉。鬼王新左衞門。醫者、針野炙按。下郎、八内。

本舞臺、三間の間。うしろ黑幕、黑塀、眞中に物見格子。よき所に用水桶。上の方塀の上へ土藏を見せ、下の方は辻番。同じく辻行燈。塀の内に冬木の立ち木。爰に丹下、夜蕎麥賣り。左仲太、甘酒賣りにて、荷を下ろしてゐる。すべて祐信屋敷物見下、夜のもやう。よろしく、時の鐘にて幕明く。

ト上の方より番人二人、庵に木瓜の紋附いたる籠提灯を提げ、六尺棒を突き出て來り、敷石を叩き

て

番一　四つ廻りでござります。

番二　火の元御念入れられませう。

　　ト兩人、荷の方へ來り

番一　コレ〳〵、熱くして一杯下さい。

丹下　ハイ〳〵。

番二　おれは甘酒にしよう。生姜をたんと入れて下さい。

左仲　ハイ〳〵。

　　ト兩方ともに拵へて出す。

丹下　又おつな空になつて來ました。降られちやア夜商人は困ります。

番一　イヤモウ、降つては此方も困るて。こんな寄合ひ辻番で、半時廻りまでさせられちやア、勤まるものぢやアねえ。

番二　それに又、小高な癖にこの會我が、一番やかましい。

　　トこの話しのうち丹下、左仲太、屋敷の內を窺ふ思ひ入れ。

丹下　モシ、祐信さまは御小身と承りましたが、それに致しちやアお土藏などは、立派な事でござります。

左仲　大方御内福と見えまするな。お米などが、たんと入つて居りませうね。

番一　なにサ、この土藏の中には、大切な香爐と、名香が納めてあるゆゑ、そこで夜廻りまでも、嚴しく云ひつけるのよ。

番二　今度その二品を、京都より御所望について、賴朝公へ上げるとの事だ。さうしたら御加增があるであらう。

左丹　そんなら噂に違ひなく

ト思ひ入れ。

二人　オイ、湯を下さい。

ト兩人錢を拂ふ。

左丹　ハイ〳〵、有り難うござります。

ト番人は辻番の內へ入る。兩人あたりへ思ひ入れあつて

丹下　牛島どのゝ話しの通り、あれなる土藏の中にこそ、心をかける香爐、名木。

左仲　今宵の内に主税どの、忍び入つて二品もろとも。

丹下　それゆゑ二人が姿をやつし、もしも支ゆる奴あらば、我れ〳〵兩人力を合せ、事成就の上からは

左仲　重なる恩賞、この身の出世。

丹下　左仲太どの。

左仲　丹下どの。

丹下　必ずともに

左仲　合點でござる。

トこの時、向うに人音するゆゑ、兩人囁き、荷の側へ寄り、窺ふこなし。向うより仁太郎、浴衣の上へ花色三本筋の絆纏を着て、足早に出で來り、舞臺へ來て

仁太　蕎麥屋さん、もう何時だね。

丹下　四ッ過ぎでござります。

仁太　いま爰へ、五十餘りの男と、脊の低い二才が通りはしねえかの。

丹下　イヽエ、見掛けませんね。

仁太　ハテナ、そんならまだ跡に違ひねえ……モシ、一つお貸しなさい。
ト懐より叺莨入れを出し、莨をのみながら
なんでも爰へ來る筈だが
ト向うを見詰めてゐる。
左仲　蕎麥屋さん、廻つて來やせう。
丹下　さうしやせう。
ト兩人荷を擔ぎ、呼びながら上手へ入る。この時、雨車。
仁太　ハテ、もう來る筈だが。なんでも今夜は、否でも應でも借りにやアならねえ。
ト向うを見て
來たぞ〳〵。あの提灯がそれに違ひない。
ト空を見て
エヽ、いま〳〵しい。また降つて來た。
トあちこちして、塀下の用水桶に腰をかけてゐる。この時奥にて、かすめて鼓の音聞える。向うより
次郎吉、大工の弟子にて、仁太郎と同じ絆纏を着て、三尺帯へ、普請場の鑑札を結び、棟上げの道具

を擔ぎ、小田原提灯を下げ、跡より十右衞門、老けたる拵らへ、一本差し、輕衫を穿き、出て來り、花道にて

十右　エヽコレ次郎吉、われも氣のきかねえ。この頃の天氣癖に、傘を持つて來ねえといふ事があるものか。

次郎　なにサ、その癖傘は丁場にあつたがね、内までは持たうと思つて、置いて來やした。

十右　それが矢ツ張り骨惜しみといふものだ。早く歩けく。

ト足早に舞臺へ來る。この時、仁太郎前へ出て

仁太　親方、剛氣に遲くござりましたね。

次郎　カウ、仁太郎さん、お前、夜夜中、どうして爰に居たのだ。

仁太　ナニ、おれか。あんまり親方が遲いから、迎ひに來たのよ。

十右　ナニ迎ひに來た、ついぞない、そりやァ奇特な。して、傘を持つて來てくれたかな。

仁太　イヽエ、どうか内まで持たうと思つて。

次郎　これも矢ツ張り骨惜しみだ。

仁太　又この野郎め、よく差出やァがる。時に親方え、何を隱しませう、今夜よんどころない事が出來

て、それでどうぞお前に

十右 金を貸してくれろと云ふのか。出來ねえワ。コレ、ちつとは義理といふ事を知れ。同じ弟子のその中で、分け隔てをするぢやァねえが、餓鬼の折から手しほにかけ、まだ年季も二三年あれど、店も持たせ、作料も前貸しにして、今までどれほど無心を聞いてやつたか。われが胸にも覺えがあらう。

仁太 イヤモウ、段々御尤もでござりまするが、重ねては申しませぬ。どうぞ今夜のところを

十右 ならぬと云ふに。コレヤイ、恩を知らねば天道が許さぬワ。今度狩場の御用を受取つたも、祐信さまのお指圖ゆゑ。今云ふが始めてぢやが、おれも若い時は、曾我さまに若黨奉公、その砌り、腰元の女に馴れそめ、子供が三人出來た後、その女房は病死。その後下女のお岩めを、後添ひに持つたが、今では後悔。また古主の曾我さまは、相も變らぬ御不勝手、貢ぎたうても大工の身の上、その日の生活薪木片、煙りの代と送るのも、昔の恩を思ふがゆゑ。われも少しは恩を知れ。

次郎 アヽ、そんなら今のおかみさんは、元は飯焚かね。

仁太 して、その三人の子供衆は、今ではどこにござります。

十右 サア、惣領は幼名五郎吉と云つたが、餓鬼のうちから職人嫌ひ、武家奉公して内へは歸らず、今

では彈正さまの屋敷に、奉公をして居るげな。いま一人は里にやつた、その先は商人で、今では京都へ上つてゐるとの事。また末の六三といふは、矢ツ張り職人、今では江戸に居るさうなが三人が三人とも、便り一つせぬは、おれが御主人のお目をかすめた、その中で出來た餓鬼ゆゑ、その報ひでがなあらう。わいらも又その通りだ。何も大事にされたうはなけれど、主を思ふは身を思ふだ。不孝の罪はその身にかゝると……イヤ、かゝると云へば、餘ツほど降つて來た。コレ次郎吉、てめえ、あの入滿寺へ行つて、傘を借りて來い。

次郎　アイ、さうしやせう。そんなら提灯は置いて行きませう。

十右　其うちおれは、この辻番で待つてゐるから、早く行つて來い。

次郎　アイ〳〵。ドレ、行つて來よう。

ト道具を擔ぎ、引返して入る。

十右　ドレ、あの辻番で。

ト行きにかゝるを、仁太郎引とめ

仁太　アヽモシ、最前からお前の仰しやるのは、御尤もではござりやすが、この頃の不仕合せ。そんならどうぞ四五兩でもいゝ、いま貸して下さいまし。

十右　又してもく\、われがやうな奴に、どうして貸されるものか。
仁太　ハテ、さう云はつしやらずと、どうぞ爰で
十右　ならぬと云ふに。
仁太　そんならどうでも貸されねえのか。
十右　知れた事だ。
仁太　貸されねえと云へば、わしも云ふぜ。
十右　云ふとは何を。
仁太　何をも白々しい。今度頼朝さまの裾野の狩屋を、範頼さまに頼まれて、伊豆の山から伐り出した木の内で、調伏の逆木を立てろと頼まれて、しつかり金を取つた筈だ。その手傳ひをしただけでも、五兩や十兩貸したといつて、首と釣りかへ。なんと安いものぢやアねえか。
十右　ハヽヽヽ、それを囮に貸せと云ふのか。悪事に組みせし様に見せ、使はにやならぬ逆木の柱は工藤さまの狩屋へ立て、範頼さまへは逆木をば、立てたと云つて僞つたも、双方無難に納める思案。曾我に奉公したおれゆゑ、祐經さまには御兄弟の、恨みもあればこれ幸ひと、調伏の逆木を立てたも、こりやアみんな古主へ忠義だ。

仁太　どう云へば斯う云ふと、そんならこの事、祐經さまへ。

十右　云ふともどうとも勝手にしろえ。ならぬと云つたら金輪際。あつたら口をきかせるな。

仁太　いゝワ、そんなら借りねえワ。

ト段々聲高になるゆゑ、この聲を聞き、辻番より番人出て

番人　通れ〳〵。

ト叱る。これにて兩人別れ、十右衞門は番人に向ひ

十右　ヘイ、私しは今度の狩屋御普請の棟梁、船越十右衞門と申す者でござります。少しの間雨舍りをお願ひ申します。

番人　承知いたした。入らつしやい。

十右　それは有り難うござります。

仁太　斯う云ひ出すからは、親方でも何でも、借りる所で借りて見せるワ。

十右　どうともしろよ。

仁太　どうともするワ。

番人　通れ〳〵。通り居らぬか。

ト仁太郎を叱り、十右衛門を入れて戸を閉める。

仁太　見やアがれ、今にどうするか

ト雪駄を腰に挾み、頬かむりをして、一散に上手へ入る。雨は頻りに降る。矢張り皷の音聲える。この時、バッタリ音して、物見の窓を切り破り、内より主税、頬かむり、尻からげにて、二品の寶を懐中し、用水桶に傳はつて下りてくる。この物音に上の方より、丹下、左仲太、絲立てをかむり、窺ひ〳〵出で來り

丹下　牛島どの

左仲　豫ねての首尾は。

主税　コレ。

トあたりへ思ひ入れ。

折を幸ひ降る雨の、篠つく軒の雨音は、これ屈竟と忍び入り、明烏の香爐、東雲の名木もろとも

ト懐中より二品の寶を出す。

丹下　出かし召された。豫ねて御主人玄蕃さま、祐信が娘の二の宮に、お心を掛けらるれども承引せず

左仲　また河津が胤の禪司坊、曾我兄弟の中にても、別腹の者ゆゑに、久上の寺にて出家せしを、呼び

寄せて還俗させ

丹下　宇佐美尾上之助と名を改め、賴朝公へ相續のお願ひ、御加增あつて遠からず、諸侯の列に入ると
の事。

主稅　ハヽヽ、それゆゑにこそ、この主稅、鎌倉武將へ差上げる、二品の寶を奪ひ取り、尾上之助が
出世を挫き、まつた御主人岩藤さまの、戀の叶はぬ腹癒せに、祐信はじめ一家の奴等、吠え面か
はくを見るやうだ。

ト この以前より辻番の戶を明け、十右衞門窺つてゐる。

丹下　然らばその品、岩藤さまへ

左仲　ちつとも早く。

ト 三人身づくろひする。バタ〳〵になり、仁太郎出て來り

仁太　ヤ、あなたは牛島さま、よい所でお目にかゝりました。

主稅　わりやア蝮の仁太郎。何用あつてこの所へ。

仁太　イヤ、外の事でもござりませぬが、あの棟梁の十右衞門が、範賴さまに賴まれて、賴朝さまを調
伏の、逆木の柱で金を取り、賴朝さまの方を除け、曾我兄弟の恨みある、祐經さまの狩屋へ立て

金を摑むはうぬ一人、なんと太い奴ではござりませぬか。

主税　ナニ、祐經どのを調伏とか。

丹下　然らば我れ〳〵言上して

　　トこの時十右衛門前へ出て

十右　イヤ、其方が云へば、此方も云ふワ。

主税　わりやァ船越十右衛門、其方も云ふとは

丹左　そりや何を。

十右　知るまいと思はつしやるか。尾上之助さまの出世を嫉み、戀の叶はぬ腹癒せに、盜み出したる香爐名木。曾我にゆかりの十右衛門が、目にかゝつたる上からは、二品此方へ渡さつしやい。

主税　なんのいらざる老ぼれめ。大事を聞いたが運の盡き。覺悟極めてそれへ直れ。

十右　ハヽヽヽ、年こそ寄つたれ十右衛門、非道の刃金が立つものか。二品返して、この場を立去れ

主税　ナニ小ざかしい。その息の音を。ソレ

丹左　合點だ。

　　ト早舞になり、兩人、十右衛門に切つてかゝる。立廻り。仁太郎、六尺棒を持ち、打つてかゝる。こ

れより鳴り物變り、立廻つて仁太郎を引敷く。この時うしろより主税、一刀切る。これにて十右衞門摚となる。仁太郎起上がり、しがみつく。この立廻りのうち、十右衞門の懐より、金の入りし財布を落す。仁太郎振り切るはずみに、絆纏の袖ちぎれ、十右衞門の手に殘り、兩人摚と座す。この時右の財布、仁太郎の手にさはるゆゑ、探り見て懐中する、この物音に番人、戸を明けて

番人　ヤア、人殺し／＼。

ト聲立てるゆゑ、主税、白刃をさしつける。番人「ワツ」と云つて戸を立てる。主税、刀を納め、仁太郎に囁き、向うへ走り入る。十右衞門起上がり

十右　卑怯未練な人非人め。

トよろ／＼して行きにかゝる。丹下、左仲太起上がり、十右衞門を切る。十右衞門、件の袖を咬へ摚と座す。この見得よろしく、時の鐘にて道具廻る。

（作者　待乳正吉）

本舞臺、向う一面の造り物の富士山の張り物。この前側雨障子をかけし團子提灯の枠、この提灯に狩場の紋づくしを描き、枠の根際へ低き青竹の矢來、東西一面に櫻の立ち樹、同じく吊り枝、下草、皐月、卯の花、上手の舞臺前へしがらみ附きの浪板、花菖蒲の盛り。上の方に石の鳥居、絹の幟へ富士

、、、淺間宮と書いたるを建て、舞臺に毛氈を敷きし床几二三脚並べ、すべて大倉ヶ谷花屋敷のかゝり、大拍子にて道具納まる。

ト矢張り大拍子にて、向うより灸按、慈姑頭の醫者。八内、海鼠襟の供にて、薬箱を抱へ、出て來る花道にて

灸按　アヽ、咲いたワ〳〵。噂に聞いた頼朝さまのお花屋敷、見事な事ぢや。

八内　モシ、旦那、とんだ時分花が咲きましたね。爰は何といふ所でござります。

灸按　頼朝公のお花屋敷ぢや。

八内　開帳講中がお花をあげる所かね。

灸按　エヽ、又べら坊を吐かすか。

トすた〳〵と舞臺へ來る。この時奥より新左衛門、絹の法被、海鼠の袴、雇ひ足輕の形にて、硯箱料紙を持ち出で、床几の上へ直し置く。灸按、新左衛門を見て

ヤ、其許は、曾我の家臣、鬼王新左衛門どのではござらぬか。

新左　お前は針野灸按老か。

灸按　存じもよらぬ所でお目にかゝつた。して、只今では

新左　イヤモウ、お聞きなされまし。どう氣が外れたか祐信さまが、滿江さまを追ひ出して、その飛ばッちりが御兄弟にかゝり、この鬼王まで主從ともにお拂ひ箱。ひつてんの曾我ゆゑに、まさか主從居食ひもならず、それでこの花屋敷へ雇ひ足輕。江戸に知るべもあれど、この形ぢやア築地へも行かれず、イヤハヤ、困り果てまするて。

灸按　それは近頃氣の毒千萬。舊來のお馴染ゆゑ、お世話も申したいが、當今は皆世間が健かゆゑ、この節句前も大きに違うたて。

八内　ナニ、病人はあつても、かゝり手がねえからサ。

灸按　また馬鹿を吐かすか。

ト叱る。この時向うにて

呼び　御臺樣のお入り。

ト呼ぶ。

新左　もう御臺樣のお入りだ。灸按さん、爰にやア居られねえぜ。

灸按　イヤ、愚老は岩藤玄蕃之丞さまのお召しで參つたゆゑ、大事あるまい。

新左　ハテ、おめしでも、おつけでも、お通りのうちは、扣へねばならねえよ。

八内　おめしもおつけも、抓へて食ふのか。
灸按　でも我れらは、玄蕃さまの
新左　ハテ、情の強い。入られねえといふに。
　　ト無理に両人を押しやりゆく、三人入る。また向うにて
呼び　御臺様のお入り。
　　ト三味線入り、誂らへの鳴り物になり、向うより政子御前、裲襠衣裳にて出る。跡より岬、裲襠の上へ抱へ帯せし形、義時の妻にて出る。深雪、三浦、三津瀬、振り袖にて附添ひ、はるか跡より彌三郎麻上下、大小にて、木太刀の額を三寶に載せ、持ち出て來り、皆々花道にとまり
政子　時知らぬ、山は富士の根いつとても、まだらに雪の降るらんと、雪と見紛ふ櫻の盛り、雪花ともに時知らぬ、珍らしい眺めではないかいなう。
岬　御意にござりまする。雪と花とを一つに寄せて、御覽遊ばすといふは、又と類ゐも夏木立、咲きまさりたる遲櫻。
深雪　池の汀の花菖蒲、花檀の夏菊、白牡丹。
三浦　富士の白雪とりまぜて、一しほ四季の眺め草。

三津　いつ眺めても見枯れせぬ、花が花見るこの館。

彌三　あなた方さへ其やうに、お馴染薄き今參り、この花やかさ賑やかさ、何と申してよからうやら、只々感心仕りましてござります。

岬　御臺樣には設けの床几

彌三　お越しあつて、然るべう存じまする。

政子　成る程あれにて、皆の者。

皆々　まづ、お越し遊ばしませう。

ト鳴り物の切れにて、皆々本舞臺へ來り、政子、岬、床几へかゝる。女形皆々下手の床几へかゝる。この時灸按、八内、鳥居の内より出で來り、あちこちと女中の内を見廻し

灸按　ハイ、御免なされ〳〵。

彌三　ヤイ〳〵、御臺樣の御前。見苦しい、其方は何者ぢや。

灸按　ハイ〳〵、私しは御執權、岩藤玄蕃之丞さまのお召しにて、參りました醫者でござります。このお女中のうちに、曾我さまの御息女、二の宮どのはお見えなされませぬか。

岬　ハテ、跡先辨まへぬ麁相な人。御臺樣の御前、扣へてござれ。

灸按　ハイ〳〵、眞平御免なされませ。ちと二の宮どのへ、急にお目にかゝりたい事がござつて、御臺樣の御前とも憚らず、失禮の段、御高免下さりませう。

ト下の方へ扣へる。

政子　この度我が君樣、皐月下旬、富士の裾野に於て、牧狩の御催ふし。さるによつて、この花館へ、富士山を造營遊ばし、卽ち淺間の祠を勸請なし、御武運長久祈りの爲。

岬　殊に若君賴家公には、狩倉のお拳がためと、この程谷七鄕にて、小鳥狩の御催ふしは、治世に亂を忘れずとの、敎へにもとづく御勵み。

彌三　去るによつて、このお館の淺間宮に、我が君樣より御奉納のこの木太刀、岡部彌三郎、持參仕つてござります。

深雪　卽ち淺間樣の御奉納。諸侯方より植ゑられし、お庭の樹木その內に

三浦　祐經さまより奉納ありしあの櫻木、時を違へ花の咲くが、お覺えめでたき一﨟職。

三津　花もの云はねど榮ふる前表、狩倉の御催ふし、お恙ないとの神のお知らせ。

灸按　お覺えめでたき工藤さまの、奉納ありしあの櫻、花の咲いたはめでたいやうなれど、時に應ぜずして形をなすものを、これをかいいと云ふ。御身に取つては大不吉。また御威勢によつて花が咲か

岬　ば、岩藤さまの奉納の、櫻の木にも花が咲きさうなもの。當時にては御家來分なれど、阿野の法橋全盛さまの御血脈、なりや賴朝公とも伯父甥の仲。この御威勢には勝たれますまい。玄蕃さまへ出入りの町醫者、おもねりへつらふその詞、一萠職の威勢をこばみ、不吉を附ける推參者。

彌三　殊に曾我の二の宮どのへ、何か用事の樣子といひ、曾我と工藤は疎遠の噂、それゆゑにこそ祐經どのを惡ざまに。

灸按　イヤ、全く左樣ではござりませぬが、二の宮さまへは、玄蕃さまが内々にて

政子　あの二の宮は祐信の養子、尾上之助と云ひ號け、夫ある身の二の宮ゆゑ、岩藤どのより内々の、用事といふは不遠慮な。殊さら心かたましき、日頃の行跡。

灸按　ヤア。

政子　『仇にのみ、うつろひぞゆく陽炎の

岬　夕山ざくら風にまかせて』。

政子　サ、まかせぬ枝を手折るのは、てもマア、憎い嵐ぢやぞいなう。

岬　サア、その嵐がお留守の間に、吹きはびこらぬ其うちに、私しどもゝ夫の留守、事ないやうに祈

るは神の

政子　成る程、これより拜殿にて、御武運長久、民安全。

彌三　御祈念あつて然るべう存じまする。

政子　皆の者も神前へ。

皆々　見苦しい、あの者は

彌三　キリ〳〵下がり居らう。

灸按　へイ。

ト政子思ひ入れあつて

政子『心ありて横さまに降る雨はあらじ、風が誘へば晴るゝ村雨』……誠に戀は曲者ぢやなア。

ト唄になり、この人數皆々奥へ入る。灸按舞臺に殘る。大拍子になり、向うより二の宮、屋敷女房にて出てくる。跡より小源次、若黨にて附添ひ出てくる。灸按、二の宮を見て

灸按　それへござるは、二の宮どのではござらぬか。愚老先刻より、大抵お待ち申した事ではござらぬ

マ、これへ〳〵。

二宮　あなたは灸按さま、その後は打絶えまして。

灸按　これは〳〵小源次どの、久しう御意得ませぬ。今日は御苦勞にござる。
小源　其許樣にもお健やかに、よう御參詣なされまする。
灸按　イヤ、あながち參詣ばかりでもござらぬ。ちと內々用事ござつて。マヽ。何は兎もあれ、お掛けなされい。實は愚老、お前樣にお話しがござるて。
二宮　これは〳〵灸按さま、女子の私しへ御用とは。
灸按　外の事でもござらぬが、豫ね〳〵其許へ申し入れた

ト小源次へこなしあつて

イヤ、其許へ、なんでござるて。それ〳〵、承れば、この程祐信さまには、滿江さまを御離緣との事。愚老も御眤懇に致した事ゆゑ、相成る儀ならお執成し、元々へと存ずるゆゑ、そのお話しを致さうと存じて。
二宮　それはマア御深切な。この上ともに、よろしうお賴み申しあげまする。
小源　イヤモウ、夫婦別ありとは申しながら、それに繫がる御兄弟、これとてお屋敷にもお出でなされず。何卒以前の如く、滿江さまお歸りなされ、またお腹替りの禪司坊さま、尾上之助さまと御改名なされ、また改めて二の宮さまの聟がね樣。それといひ、これといひ、おめでた次手に、滿江

さまのお詫びの事も

灸按　こりや小源次どのゝ云はるゝ通り、孫までもあるそのお身が離別とは、近頃以て氣の毒千萬。イヤ、孫と申せば、御子息は如何召された。

二宮　助太郎ことは、先刻乳母が連れまして、當社へ參詣いたさせましてござりまする。

灸按　これは如何。女子一人に子供を預け、今日は別して諸侯方の御參詣ゆゑ、お供廻り等も群集いたすに、ひよつと怪我でもござつては、滿江さまもお留守のうち……コレ八內、そこらあたりを見て參れ。

八內　ヘイ〳〵。

小源　イヤ〳〵、左樣ござらば二の宮さまには、暫時これにお待ちなされまし。拙者が參つて、お連れ申すでござりませう。

二宮　そんなら其方、大儀ながら

小源　畏りました。ドリヤ、お尋ね申して來ようか。

ト大拍子になり、小源次奥へ入る。灸按、跡を見送り

灸按　まづこれで邪魔は拂うた。時に二の宮さま、外の事でもござらぬが、當時出頭の岩藤さま、其許

様を御執心にて、既に文も差上げましたとの事。右の御返事承つて來いとの事ゆゑ、この儀を何卒お聞かせ下され。

二宮　憚りながら、お詞ではござりますれど、私しことは尾上之助と申す、夫のある身の上、左様な事は重ねてから、御無用になされませ。貞女兩夫に見えずと、ましては子まである仲を、あまりと申せばあなた様も

灸按　これは又、堅いワく。貞女を捨てゝ貞女を立てると申す事もござる。左様なら愚老が、業體に譬へお話し致しませうが、五臟の中でも岩藤さまは、心の臟ぢやて。その心の臟一つで、人の體を養ひますれば、ひよつとその心の臟に違ふと、遂には人をも損なふ道理ぢや。すりや、尾上之助さまを大名に取立て、首尾よう勤めささうと、又させまいと、みな心の臟にある事ぢやて。それを補ふには、隔腹兼用と申して、一人の病人に、二人の醫者をかける事もござるゆゑ、尾上之助さまのお針もお用ひなされ、また岩藤さまの御療治もおうけなされば、自然と病も癒り、家も無難に納まる道理。なんと御得心が參つたか。

八内　醫者の道は兎も角も、地面の賣買ひ、家の世話、或ひは婚禮、妾の口入れ、金談聟入り里ッ子まで、旦那の匙加減にかゝるのが、一番の近道でござります。

二宮 穢らはしい。聞く耳は持たぬわいなう。

灸按 これは無調法。然らば重ねては申すまい。併しこの上は、祐信どのゝ屋敷に、不慮の儀が出來いたさうが、また尾上之助さまの身の上に、どのやうな事が出來やうが、その時に後悔なさらぬがようござる。岩藤さまは、頼家公のお附き人、それを其やうに情なくばかり云はれたら……イヤイヤ、云はぬ事〳〵。然らば愚老は

ト行きにかゝるを二の宮とめて

二宮 アヽモシ、暫くお待ちなされませ。

灸按 イヤ、おとめ下さるな。我れら病用繁多でござる。

二宮 サア、お腹も立ちませうが、たゞ何事も夫の爲。

灸按 イヤ〳〵、御無用になさい。愚老は古法でござれば、てきぱきとせぬ儀はお斷り申す。餘人におかゝりなさい。

二宮 其やうにまで仰しやつて下さること。夫の大事。この上は人知れず、あなたへ御返事申して

ト思ひ入れ。この以前より小源次出て窺ひゐる。

灸按 そのお心なら、お執持ち致して進ぜう。イヤ又、其許が愚老の申す儀をお聞入れなされば、お前

も仕合せ、我れらも滿足……コレ八内、われは直ぐに宅へ參つて、岩藤さまからお人が見へたら
灸按後刻上がりますと申せ。

八内　ハイ〳〵、そんなら私しは、お先へ歸りまするのかえ。

灸按　ちつとも早く、參れ〳〵。

八内　ハイ〳〵。

ト花道の方へ來て

おらが旦那は、醫者だ〳〵といふに、藥を一貼盛りもしねえで、地面家作や色の執持ち、年中人の懐を當てだ。さう巧くゆけばいゝが。

灸按　ハクショ……誰れか噂をするさうだ……まだ行かぬか。早く行け〳〵。

八内　ハイ、參ります〳〵。

ト大拍子になり、八内は向うへ、灸按は鳥居の内へ入る。二の宮思案の思ひ入れ。この時、小源次出て

小源　二の宮さま……エヽ、お前樣はなア〳〵。

ト合ひ方。

尾上之助さまといふ、夫のある身を持ちながら、いかに當時出頭でも、岩藤どのゝ心に隨ふとはあなたは慾に目がくれたか。不義間男をなされまするか。人でなしと申さうか、見下げ果てたるそのお身持。エヽ、あなた樣はなア。

二宮　尤もぢや、尤もぢやが、人でなしとは恨めしいわいなう。コレ、落ちる所はこの身一つ。首尾ようお役をお勤め遊ばし、その上にては我が身の事、夫に打明け不義の女と、自分から白狀して死ぬ心。これも夫を思ふがゆゑ。其方までが其やうに、云やるも道理、さりながら、果敢ないものは女子の身の上。わしや何とせう、どうせうぞいなう。

ト思ひ入れ。

小源　あやまりました〳〵。そのお心とはえゝ存ぜず、夫の大事を思し召す、そこへ心の附かぬのは、下郎の不調法。併しその儀を內々にて、尾上之助さまへお知らせ申すが、まだしもあなたの御身のあかり……オヽ、幸ひのこの料紙。

ト件の床几の硯箱と料紙を出す。

二宮　そんなら文にて、この事を

小源　ちつとも早う、お認めなされませ。

ト二の宮、文を認める。小源次、あたりへ思ひ入れ。

二宮　して又これを、どうしてあなたへ。

小源　今日は頼家公小鳥狩ゆゑ、お旦那はお供にて、當お館へお越しあるとの事。さすればおッつけお出でもあらん。どうぞコレ、折を見合せ、尾上之助さまへ、お手渡し致したいもの。

トこの時お倉、乳母にて奥より出で來り

くら　二の宮さまへ申し上げます。只今お迎ひのお駕籠にて、若樣は直さまお歸り遊ばしました。私しもお附き申して、これより直ぐに

ト行かうとするを、小源次とめて

小源　ア、、コレ〳〵、こなたに少つと頼みたい事がある。おれはあなたにお供申さにやならぬが、このお文には大切な用事が書いてある程に、其方は鬼王どのを尋ねて、少しも早うこのお文を、鬼王どのより尾上之助さまへ、お届け申すやうにして下され。

二宮　隨分ともに、人の目褄にかゝらぬやうに。

くら　畏りましてござります。

小源　然らば、斯樣な場所に長居は御無用、少つとも早う

ト二の宮の手を取り、引ッ立てる。この時、二の宮の草履の鼻緒切れる。

エヽ、折悪いお草履の

くら　憚りながら、私しのを召しまして

ト脱いで二の宮の前へ出す。

二宮　夫の身の上もの思ふ、折も折とてこの鼻緒。

小源　エ。

二宮　麁相ないやう氣をつけて。

くら　お案じ遊ばすな。鬼王どのへ、きつと手渡し致しまする。

小源　サ、早うお出でなされませ。

ト唄になり、小源次、二の宮を連れて足早に向うへ入る。この時、草履残りゐること。大拍子にて、奥より鬼王出で來り、お倉を見て

鬼王　そこに居るのは、お乳母のお倉ぢやアねえか。何をしてゐるのだ。

くら　ヤア、新左衛門さんか。よい所へ。お前を尋ねて行くところぢやに。

鬼王　そりやア又なんぞ用でもあるのか。

くら　外の事でもござんせぬが、このお文には、大切な事が書いてあるゆゑ、人の目褄にかゝらぬやうお前の手から尾上之助さまへ、お手渡しせいとの、二の宮さまのお頼みぢやわいなア。

鬼王　ナニ、そのお文を、尾上之助さまに上げてくれろとか。どうして〳〵、そんな大事の用が書いてある文を、ひよつと落しでもした時には、第一濟まねえワ。そんな心遣ひな物は、御免だ〳〵。

くら　それぢやというて、お前の手から、お屆け申してくれとの事でござんす。

鬼王　ハテ、それは困つた事だの。併し今日は尾上之助さまも、頼家公のお供をしてござるから、折を見て知らせやうから、その時其方が……併し待てよ。女の事なり、頼家さまの前へは出られないし。どうぞコレ、好い工風が。……オヽ、ある〳〵。

ト舞臺前の流れより小石を二つ持つて來て

コレ〳〵、好い時分に、おれがこの石を、カチ〳〵と叩くから、その時其方、物蔭から、その文を投げるがよい。

くら　そんなら何と云はんす。好い折を見て、石を叩きなさんすとかえ。

鬼王　さうよ。間の好い所で、この石をカチ〳〵と叩くぜ。

くら　そんなら一つ叩いて見なさんせ。

鬼王　エヽ、呑み込みの悪い。あなたが通る時に、チヨコ〳〵と、コレ斯う叩くワ。

ト鬼王、石を無性に叩くはずみに、前を打ち心にて、ウンと倒れる。お倉愕りして、流れの水を汲んで鬼王に含ませ、介抱して

くら　鬼王さま、新左衛門さまいなう。

ト呼びかける。鬼王、やうやう〳〵心づき、起上がつて、ピヨイ〳〵と飛びながら

鬼王　アヽ、痛い〳〵。

くら　あんまり話しに實が入つて

鬼王　つい手が外れて思はずも……アヽコレ、これを思へば體のうち

くら　四百四病の病より

鬼王　アヽ、きんほど痛いものはない。

ト又ヨロ〳〵して術なきこなし、お倉介抱する。この見得よろしく、大拍子になり、道具廻る。

本舞臺、正面常足の二重、草土手の上に九尺の屋體、軒口を見せ、笹龍膽の紋ついたる紫の幕を絞り、下の方には同じく紋ついたる白地の幕を張り廻し、舞臺先に杜若、柵つき流れの浪板。この後

に以前の道具残り、櫻の吊り枝、左右の提灯枠、これを見せたる體。すべて大倉ヶ谷花館のかゝり。唄にて道具とまる。

ト屋體の眞中に政子、上の方に岬、側に深雪、三浦、三津瀬、下の方に彌三郎扣へゐる。

政子　珠簾を卷くと詠じたる、實に唐歌の詩のさまを、爰に寫せしお物好き。我が君の思し召し。花館のこの風景。

岬　新たにしつらふ御殿の結構、お庭のやり水、草木まで

深雪　靡き從ふ御威勢に、時めく花さへ返り咲き。

三浦　櫻が中に紫の、匂ふゆかりの杜若。

三津　澤邊の水に啼く蛙。水鷄の鳥の夜をこめて

彌三　又一しほのお慰み。御臺樣には、暫しこれにて

皆々　御遊覽遊ばされませう。

ト三味線入り、大小誂らへの鳴り物になり、向うより賴家公、むかはぎ附け太刀、弓小手、狩倉の騎射の形にて出てくる。跡より岩藤玄蕃之丞、馬乘り袴、大小、弓小手、鞭を差し、次に大部、大小、野袴、ぶッ裂き羽織、鷹を据ゑ、續いて愛甲三郎、騎射笠を持ち、小次郎、弓矢。宇田五郎、袱紗に

て刀を持ち、いづれも絆纏、股引、ぶッ裂き羽織、好みの拵へにて、附添ひ出てくる。跡より尾上之助、馬乘り袴、ぶッ裂き羽織、鷹匠の拵へにて、鞭を差し、これに勢子四人、袖無し羽織、陣笠にて、小鳥の入りたる籠を青竹にて結ひつけ、これを擔ぎ出てくる。皆々花道に並び

頼家　太刀は鞘、納まる御代も武士の道、心掟の弓の弦、今日頼家が狩倉の小鳥狩。

岩藤　殊に今日新御殿、御普請成就遊ばされ、御武運長久祈りの爲、富士淺間の御社を、お庭に移し奉り、歸りもうでの御立寄り。

尾上　君につらなる身の冥加、これまで伺候の時を得て、開く惠みの櫻花、今を盛りの返り咲き。

岩藤　その御歸館の御供には、頼家公のお附き人、阿野の岩藤玄蕃之丞。

尾上　まだ部屋住みの身不請ながら、宇佐美尾上之助を初めとして

三郎　愛甲の三郎。

小次　吉良小次郎。

五郎　お側に附添ふ宇田五郎。

大部　加藤大部は御近習役、いづれも警固

皆々　仕つてござりまする。

賴家　方々、滿足。
岩藤　然らば君には
皆々　まづお入りあられませう。

ト右の鳴り物にて、皆々本舞臺へ來る。賴家、上の方の床几にかゝり、皆々よろしく仕ふ。

岬　賴家公には只今御歸館、政子さまにも先刻より
女三　若君のお入り、お待ち遊ばしてゞござりまする。
政子　賴家を初め、諸士の面々、思ひ立つ日の吉日に、鎌倉山の夏木立、青葉分けゆく小鳥狩、道の疲れもさぞかしながら、併し氣も晴れ、好い慰み。自らも、疾よりこれに待ちうけ。方々にも今日の役目、大儀々々。
岩藤　ハツ、政子御前のお詞にあづかり、諸士の面々、某に至るまで、家の面目、身の冥加
皆々　有り難く存じ奉りまする。

ト皆々平伏する。

賴家　この度父君賴朝公、富士の裾野に於て牧狩の御催ふし。予もそれにはあらねども、この花館へ引移り、路次の慰み、谷七郷を狩倉せしが、日足も長き山鳥の、おのが塒へ歸る雁。

大部　拙者が預かり御祕藏のお拳、今日の獲物こそ、夥しき働き。諸鳥は即ちお手土産、政子御前の上覽に供へんと、あの如く献上物。

彌三　いづれものお手柄、君にもさぞかし御滿足。

五郎　我れ〳〵に至るまで、獲物の大獵。

皆々　この上やござりませう。

岩藤　誠に、栴檀は二葉より芳ばしと、賴家公の御手練の程、天晴れ末賴もしき御器量といひ、御指南申す拙者などは及ばぬ事、この岩藤玄蕃之丞が口から、手前物のやうにて何とやら、自慢らしう申し上げるも恐れながら、君の生立ち、行く末榮ふ源家の礎、動がぬ御代と、喜ばしう存じ奉りまする。

尾上　イヤハヤ、承つたよりは驚き入つたる君の御手練、なか〳〵以て、流石は岩藤どのゝ御鍛錬が屆きまして、嘸かし御滿悅でござらう。それにつけても拙者なぞは、未だ部屋住みの身の上、殊には小身者にござれども、この度我が君へ、素讀の御指南申し上ぐるも、全くお見出しにあづかりし身の仕合せ、各々力と斯樣に同席仕りまするも、誠に恐れ多き儀と、有り難く存じまする。

大部　それ〳〵、おてまへなぞは、元よりお家柄と申すではなし、それが陳分漢のお庇やら、元は久上

の坊主上がり、學問か經文か知らねえが、物知り顏が鼻の先に、ブラリ〱とブラついて

五郎　見るからして學者といふものは、どうか貧乏じみた面がまへ。

三郎　その筈でござる。その貧乏で評判の、曾我どのゝ御養子。

四人　イヤハヤ、俄出世は何とも以て。

トこれにて尾上之助、ムツとしたる思ひ入れにて

尾上　すりや、各々方には、賴家公の御前といひ、何科あつてこの尾上之助を

大部　イヤ、ツイうか〱と、政子御前のお入りと知らず

尾上　それゆゑ拙者が身の上を

四人　お噂申した儀でござる。

尾上　ムウ。

ト思ひ入れ。

四人　さて〱笑止千萬。

ト皆々あざ笑ふ。

艸　政子さまの御前でござる、いづれも方

女三 お扣へなされい。

政子 イヤ、左にあらず、人は素性に依らぬもの。殊には尾上之助こと、尋ねたき一條は、この度我が君賴朝公へ、禁庭より總追補使の綸旨を賜ふ。その御禮の爲、何がな君に捧げんと、思ふに幸ひ曾我祐信の家には、明烏の香爐、東雲の名香、右の二品、唐土より曾我の馬子といふ者、入唐の折から、この日の本へ持ち來りしより、今に傳へて曾我の家の、寶なりと聞き及ぶ。

賴家 その名香こそ、件の香爐にくゆらす時は、香氣につれていづくよりか、飛びかふ小烏、稀代の名器。

岬 大君樣へ差上げよとある嚴命は、これぞ全き曾我家の規模。

大部 お取立てある尾上之助どのは、いはゞ其身の幸ひと申すもの。

三郎 イヤ、お羨やましい

四人 儀でござる。

尾上 これはく、いづれも方の御挨拶、それと申すもこの身の幸ひより、全く以て先祖の影、彼の佛道に入つたるしるし、それゆゑ若君樣へ、佛法のあらゆる書物、憚りながらこの上とも、御指南申し上ぐるでござりませう。

岩藤 イヤ尾上之助どの、默り召されい。其許には物知り、拙者なぞは愚智文盲の所爲かして、左樣な

儀は存ぜぬが、貴殿なぞは、曾我どのゝ養子にて、元が河津の胤とやら、幼なき時は禪司坊と申した、坊主返りと承つたが、唐人の寢言は御存じあつても、武士の道は御存じあるまい。イヤサ、軍學兵術武藝の道にお達しなくては、刀の手前が勤まりますまい。

大部　して、其許の武藝の師は

四人　何人でござるな。

尾上　イヤ、武術と申して烏滸がましく、申し上ぐる程とては……いづれもが御存じの拙者が身の上、元は河津の胤なりしが、風折の腹に生れ、劍難の相あるゆゑ、母の教へに一度は、出家沙門に世を捨てゝ、久上寺にて生ひ立ちなし、祐信の迎ひに依つて、武士に戻りし尾上之助。その劍難を親々の、案じにつけて武士道の、身にあるまじきこの如く、親の手づから刀へは、封印つけたる鯉口も、拔かぬが爲の兩腰を、御推量下されい。

ト思ひ入れ。

岩藤　イヤ、承つた貴殿の胸中。それこそ誠の腰拔け武士。

五郎　それでも武士か、侍ひか。まさかの時の役に立つまい。

尾上　イヤ、その節こそは

岩藤　白刃を抜かぬが大事とあらば、何を以て

ト合ひ方になり、あたりを見廻し、木太刀を取つて、思ひ入れあつて

幸ひ爰に有り合ふ木太刀、劍難恐るゝ其許へは、これなぞが分相應。武藝の試み、賴家公の御慰み。御前に於て

ト木太刀を直中へ直し、岩藤玄蕃、大部、左右より尾上之助に詰めよつて思ひ入れ。

尾上　すりや、拙者めにこの所で

大部　木太刀を以て立合ひ召されい。

尾上　イヤ、その儀ばかりは。

岩藤　承引なければ武術の試み。

大部　然らば拙者が

ト尾上之助を引立てにかゝるを

尾上　お手下ろさるゝまでもなく

岩藤　然らばこの場で立合ひ召さるか。

尾上　サア それは。

大部　但しは武藝の嗜みが

尾上　サア

岩藤　サア

三人　サア〳〵

皆々　キリ〳〵立合ひ召されぬか。

ト敵役皆々キッと思ひ入れ。バタ〳〵になり、向うより初平、一本差し、好みの奴の拵へにて、ツカ〳〵と出て來り

初平　暫らく〳〵、憚りながら、いづれも樣、ヘイ〳〵〳〵、御免なされて下さりませ。

ト花道よき所に蹲まる。尾上之助、初平を見て

尾上　ヤイ〳〵、そちや下部初平ぢやな。下郎の身を以て、頼家公の御前と申し、政子御前もお入りなるぞ。慮外な下郎、下がれ〳〵、下がらぬか。

ト叱る。初平これにて、腰をかゞめて立上がり

初平　ヘイ〳〵。

ト行きにかゝるを、岩藤玄番見て

發端　三立目





岩藤　コリヤ〳〵、待て〳〵。見れば、われは尾上之助が下部、初平とやら。下ざまの身を以て、誰れが許して若君の、御前間近く無禮千萬。

大部　慮外な下郎。

四人　下がれ〳〵、下がり居らぬか。

トきつと云ふ。初平立ちどまり、手をつかへて思ひ入れ。

初平　イヤ、誰れ彼れ様のお許しはござりませねど、見るかげもない二合半が、お歴々様の前へ出ましたも、主人の難儀と見たゆゑに、奴めが厚皮さ。尾上之助が身の上は、御存じ知られた山中に、出家上がりの寺侍ひ。さりながら、武士の交はり致すからは、木太刀の一手も、稽古いたした證據には、この奴めに折々は、教へました事もござりますれば、もしや主人がお相手に、御不足なれば下郎めが、主人の名代いたさうと、それゆゑ、罷り出ました。お歴々様、憚りながら奴めをお相手になし下さらば、へイ〳〵〳〵、有り難う存じまする。

トよろしく思ひ入れ。

岩藤　成る程、下部に似合はぬよい心がけ。いかにも願ひの通り、聞き届けたが、併し下部が望む相手は

大部　イヤナニ岩藤玄蕃どの、折角の願ひ、叩き据ゑておやりなされい。
三郎　下郎めの心根が不便ゆゑ、其方が願ひ、聞き届けたとあるからは心置きなく、ズットこれへ。
五郎　すりや、下郎めがお願ひ、お聞き届け下さりまするか。
初平　コリヤ〳〵、初平、出過ぎた一言、無禮慮外も顧ず、岩藤どのへお相手なぞとは、思ひもよらぬうつけ者。キリ〳〵御前を下がらぬか。
尾上　ト叱る。初平思ひ入れ。岩藤とめて
岩藤　尾上之助どの、待たつしやい。折角奴めが嗜みを、願ひに任せてやりたいが、手にも足らざる下素下郎、並みゐる内にて、いづれも方と、ナ。
ト思ひ入れ。
五郎　サア、下郎め、試合ひの勝負、御前に於て岩藤どのゝ、お許しが出たからは、サヽ、ズットこれへ。
初平　すりや、拙者めが願ひの通り
大部　いかにも、試合ひの相手は某が

ト立ちかゝる

初平　ハツ。

政子　ハテ、遠慮に及ばぬ。岩藤が指南といひ、サヽ、早う〳〵。

彌三　奥方のお詞といひ、執權の仰せなれば、急いでこれへ。

初平　左樣ござらば、お許し受けて。

ト小鼓の合ひ方になり、初平思ひ入れあつて本舞臺へ來り、下の方に扣へる。

頼家　然らば互ひに試合ひの勝負。

政子　頼家はじめ自らも、これにて見物。双方ともに、用意しや。

初平　畏つてござります。

ト白囃子になり、双方支度あつて、二重舞臺へ辭儀して、木太刀を取上げ、いろ〳〵立廻りあつて、初平、大部をしたゝかに打つ。三郎、五郎、小次郎かゝるを、よろしく立廻りあつて、散々に打つ。尾上之助思ひ入れ。初平、一人づゝ塵を拂ふ。四人、初平を睨みつけて

四人　よくひどい目にあはしたな。

初平　御免なされて下さりませ。

と思ひ入れあつて行かうとする。

岩藤　コリヤ〳〵、下郎待て。

初平　ヘイ、御用でござりまするか。

ト立ちどまる。

岩藤　其方が手の内、あまり見事ゆゑ、今この所で某が、相手になつて遣はさう。

初平　すりや、あなた様が下郎めを。

岩藤　いかにも。

初平　ヘイヽ。

ト思ひ入れ。

岩藤　支度しやれ。

初平　ハツ。

トまた白囃子になり、四人手傳ひ、岩藤支度する。兩人、眞中へ出て

岩藤　下郎め、われは仕合せ者ぢや。

ト出しぬけに打つてかゝる。初平手早く木太刀を取つて請けとめ、立廻りに兩人キッと見得。これよ

り三味線入り白囃子になり、立廻りよろしくあつて

初平　これではお相手になられませうか。

岩藤　なか／＼味を……ところを斬うして

ト立廻りあつて

初平　これでは如何でござりませう。

岩藤　オヽ出かした。ところを

ト身をかはして打つてかゝる。立廻りにトヾ初平、岩藤が小手をしたゝかに打つ。岩藤「ウム」となる。初平、直ぐに木太刀を打ち落さうとして思ひ入れ、岩藤が持つたる木太刀を取つて立ちかゝる。敵役四人立ちかゝる。尾上之助思ひ入れ。初平思ひ入れあつて、右の木太刀を岩藤が前に置き、下手へ行かうとする。この時岩藤心づき、初平を木太刀にて散々に打ち据ゑる。

岩藤玄蕃が手練の早速、なんと骨身にこたへたか

初平　イヤ／＼、そりやァ御卑怯でござりまする。先を取つたは拙者が勝。御遠慮いたして、扣へたを、騙し打に

岩藤　黙れ／＼、黙り居らう。口強情にこの場の云ひ譯、互ひに武藝を現はす立合ひ、なんの遠慮もい

らぬ事。おのれが勝つたら、なぜ身共を打たぬのだ。心根が不便さゆゑ、あしらうて居たを誠と
心得、附けいる無禮、打ち据ゑたは以後の見せしめ、その未熟の手の內で、お相手なぞとはすさ
まじい。もう四五年も稽古したとて、どうしておれに齒が立つものか。馬鹿な面だ。

初平　慮外か、未熟か、あなた樣の、木太刀を打ち落しました上からは

　ト立ちかゝるを、尾上之助、ツカ〳〵と行つて扇にて打ちすゑ

尾上　こゝな慮外者めが。お二方の御前といひ、あなたをどなたぢやと思ふ。當時賴家公のお附き人、
岩藤玄蕃之丞さま。お歷々の中で、よもや〳〵と思うたに、物の見事に。

　ト嬉しき思ひ入れ。それを隱して

サア、見事あなたのお相手に、ならうと思ふか。慮外者めが。

初平　ハツ。

　ト思ひ入れ。政子思ひ入れあつて

政子　下部に似合はぬ初平とやらが手の內。尾上之助、目をかけてやりやいなう。

尾上　有り難う存じまする。

賴家　まつた尾上之助へは父上より、兼ねて賜はるお墨附、殊には下部のその者も、今よりしては、侍

ひ分に取立てくれん。

政子 幸ひこの程富士の根方、夏狩の御催ふし。多用の事ゆゑあの者に、用向きを申しつけ、直さまこれより駿河路へ、出立いたす用意してよからう。

尾上 すりや下部の初平を、今よりしては尾上之助と、同席仰せつけらるゝとな。

初平 こは身に取つて有り難き、御意にはござれど私しは、もと曾我さまとは古主ゆゑ、餘人は格別、跡に殘りて下ざまの、只今にては尾上之助が草履取り。さすれば、御緣の切れた滿江さまでも、御兄弟樣でも、私しは矢ツ張り御家來、その曾我さまに御恩ある、身に引かへて御直參とは、この身の冥加。あの御兄弟のお二人から、もしや何かとお咎めが、あつた時にはこれまでの、忠義も却つて不忠となる譯。この事ばかりは幾重にも

ト思ひ入れ。

岩藤 辭退をするも事に依る。世にも痴けた馬鹿侍ひ、犬の飼ひ扶持同然な、これがほんの捨て知行とやら。

政子 イヤ、初平が武藝の嗜み、天晴れ手練の賴もしさ。今よりしては近習並、新規三百石にて召し抱へ、尾上之助が家來ゆゑ、主人の名跡そのまゝに、名も改めて尾上伊太八。

初平　段々厚き思し召し。すりや、どうあつても拙者めを

頼家　この由父上へ申し上げ、尾上之助は頼家が附き人、岩藤玄蕃と同席。

初平　アノ、いよ〳〵お取立て、主人に並ぶ拙者まで

政子　尾上之助は今よりして、七百石の加増を賜はり、大名の列に加へ、藤の間に相勤めさする。猶怠りなく、忠勤勵んで君への奉公。

尾上　エヽ、有り難き仕合せ。家の面目、この身に取つて冥加至極。

政子　まつた尾上伊太八ことは、夏狩の砌りは、當國箱根山に役所を建て、岩藤が家來と時替りに相詰め、路次の警固を致してよからう。

初平　匹夫下郎の拙者まで、お取立てに與り、今よりしては御直參、御知行取りに召し抱へ下されんとは、武運に叶ひし身の出世。

兩人　有り難く存じ奉ります。

ト兩人平伏する。岩藤、ムッとしたる思ひ入れ。

岩藤　すりや、いよ〳〵兩人ともに。

頼家　牛の斑は目に見ゆれど、心の斑は目に見えぬと、岩藤玄蕃、そちや忠義な者ぢやなア。

小次　廻り合せといひながら
三郎　早い出世の奴どの。
五郎　我れ〳〵と同席も自然。
大部　濡れ手で粟の飯よりは、ほんの米食ふ知行取り。
頼家　幸ひ今宵新たに建つる館の祝儀、壽祝ふその席にて、尾上之助に墨附くれん。
尾上　すりや、今宵のうちに拙者めに
岩藤　その取次は玄番之丞、今日お供の諸大名、並みゐる席にてお墨附、拙者が申し請け、直さま貴殿へ相渡さん。
尾上　萬事よろしう、御推擧にて
岩藤　して頂戴のその服は。
尾上　それも貴殿のお指圖に任せ
岩藤　長上下にて頂戴召され。
尾上　畏つてござりまする。
ト　この時七ツの太鼓鳴る。

岬　いま打つ太鼓は申の上刻、最早日足も傾けば

頼家　これより直さま新殿へ、母君と御一緒に

政子　鎌倉山の夕景色、遊覽亭にて山々の詠め。

岩藤　腰元衆は御酒宴の用意。

女四　畏りました。

岩藤　然らばいづれも。

大部　君のお立ち。

皆々　ハアヽヽ。

ト時の太鼓、唄になり、この人數殘らず附いて下座へ入る。岩藤、初平、彌三郎殘る。

初平　ドリヤ、奴めは

ト立上がり、氣をかへ、思ひ入れあつて

イヤ、然らば拙者は

彌三　お庭口までお見送り。

ト兩人顏見合せ、目禮して

初平　後刻。

ト唄になり、初平鷹揚に、彌三郎附いて向うへ入る。岩藤殘る。

岩藤　思ひもよらず下郎まで、出世なしたるその上に、尾上之助が加増といひ、心よからぬ今日の仕儀今にぞ思ひ……ムウ。

ト思ひ入れ。合ひ方になり、下座より灸按出て來り

灸按　これは〳〵岩藤さま、これにお出でなされましたか。先刻よりお尋ね申しました。

岩藤　オヽ、貴殿は針野灸按老、豫ねて申し聞かせたる二品の寶は、牛島が働きにて、奪ひ取つて此方に。名香は即ちコレ爰に。

ト懷中より袱紗包みの名香を出し

この品は暫らく其方に預ける。しかと所持して

灸按　すりや、東雲の名香を

ト受取る。

岩藤　いま一品の香爐は、此方に所持してはあれど、二の宮の戀の叶うた上、その時の褒美には、其方へ遣はすワ。まづそれまでの手附として、名香はいよ〳〵其方へ

灸按　畏りました。愚老がお預かり申す上は、お氣遣ひなされますな。

岩藤　貴公へ渡せば枕を高く、寢られると申すもの。

灸按　さて、その御安堵次手に、お喜びなされませ、豫ね〴〵お頼みの二の宮が、おてまへ樣に。

ト囁く。岩藤思ひ入れあつて

岩藤　すりや、日頃から戀ひ慕うた二の宮が、身共の心に從ふぢやまで。

灸按　なんと、耳よりな儀でござりませう。イヤモウ、その代り大骨を折りましたが、首尾よく行つてさぞお喜び。

岩藤　イヤ、喜びの段か。それと申すも貴公の働き。

灸按　その前祝ひに、一つ〆めませうか。

兩人　アヽ、ヨイ〳〵〳〵。

ト兩人手を打つとて、岩藤は有合ふ木太刀を取つて、何心なく木太刀を打つ。この音を合圖と心得、バッタリと音して、下の方幕の内より、二の宮が書いたる件の文に、右の草履の片足を重しに附けて打込む。この草履、岩藤が額へあたる。灸按見て、恟りして

灸按　エヽ、恟りさせた、何やらあなたの

ト岩藤、右の草履を取つて見て

岩藤　こりやコレ慥かに女の手跡。殊に片足のこの草履。

灸按　あなたの戀人二の宮どのゝ

岩藤　手跡に違はぬこの文へ、縛しつけたるこの樣子。

ト思ひ入れ。

灸按　もしやあなたの心を察して、こりやア大方附け文か。

岩藤　ハテナア。

ト考へる。灸按、側から煽てながら

灸按　サア／＼、めでたい／＼。イヨ、色事師さま／＼。

ト此うち岩藤、右の文を開き、思ひ入れあつて

岩藤　なんの／＼、其やうに煽てゝもらふまい。ナニ／＼「今日御花館の富士淺間へ參詣御ゆるしの由幸ひと存じ、この度のお咎め、早速御免これあり候ふやう、心願のため參詣仕り候ふところ、醫者灸按老にお目にかゝり、豫ね／″＼私し方へ玄蕃之丞さまより、道ならぬ

ト讀みさし、思ひ入れあるを、灸按取つて

灸按　ドレ〳〵「玄蕃之丞さまより道ならぬ御文、數度下され候へども、其まゝに返し候ふところ、今日申さるゝには、當時賴家公のお附き人たる、岩藤さまに候へば、もし尾上之助どの、この度お取立て遊ばされ候ふ、御出世の妨けの程も如何とのこと、左樣に候へば、御前樣のお身の上、御大切と存じ、心にもなき事ども、灸按へ申し聞かせ候ふも、今日御殿の首尾、お案じ候ふまゝの事にて候へば、誠に主ある女の道に違ひ候ふ事を、嘘僞はりを申し遣はし候へば、左樣御心得、御殿に於ても岩藤さまに御油斷なう、それのみ申し上げ候ふ、首尾あらば御目もじと存じ候へども、若君樣お成りにつき、御目もじ叶ひ難く、文にて申し上げまゐらせ候、めでたくかしく」

ト此うち岩藤、チツと無念の思ひ入れ。

岩藤　して〳〵、先の名宛は。

灸按　サア、その先の名は。

岩藤　讀んで聞かせい。

灸按　「尾上之助さまへ、二の宮より」……ヤア〳〵、こりやどうだ。

ト此うち岩藤、だん〳〵と腹の立つ思ひ入れ。灸按も呆れたる思ひ入れ。

モシ、岩藤さま、あまりと申せば

ト岩藤の袖を引くを振り拂ひ、思ひ入れあつて

岩藤　憎い女め、武士たる者に、よくも恥辱を

灸按　さては愚老まで僞つて

岩藤　騙かるにも事をかく、殊には夫へこの如く、身共が事を惡ざまに。もうこの上は尾上之助、恥面かゝせる、仕樣は何か

ト思ひ入れあつて、右の草履を取つて、池の水へちよつと浸し、その泥を我が顏へ塗ること。

灸按　これは。

岩藤　武士の面へ泥を塗る、尾上之助めにこの返報。

灸按　すりや、あなたには

岩藤　尾上之助を

灸按　今宵のうちに

岩藤　コリヤ。

ト思ひ入れ。早舞ひになり、兩人あたりへ思ひ入れ、この見得、道具廻る。（作者。三升屋二三次）

本舞臺、正面竹の節、たすき欄間、二重に本簾をかけ、金襖、高足、黒塗りの五段を取り、すべて新御殿上段の道具、よろしくとまる。

ト管絃になり、尤も明りを除け、暗夜の體、向うより尾上之助、長上下にて出て來り、花道にて、勝手知れざる思ひ入れにて

尾上　新たにしつらふ花館、案内知れざる尾上之助、殊には暗夜。岩藤どのゝ詰め所はいづれか。

ト花道にて窺ふ。序の舞になり、向うより愛甲三郎、小次郎、立烏帽子、素袍にて出て來り、暗き思ひ入れ。尾上之助は、人や來ると花道に片寄つてゐる。兩人、暗がりながら尾上之助を窺ひ見て

小次　季高どの、お廊下に何者やら居りまするな。

三郎　左樣に見受けました……それにござるは、お茶道衆か。どなたでござる。

尾上　ハツ、尾上之助にござりまする。

三郎　アヽ、尾上どのか、貴公方のござる席ではないが、何者が許しました。

尾上　ハツ、玄蕃之丞さまのお指圖をもちまして。

小次　左樣か、然らば咎めるには及ばぬが、窺ひ見ますれば、上下でござるな。

尾上　左樣にござりまする。

小次　ハテナ、我れ〳〵さへ素袍烏帽子とのお指圖に、この席へ上下とは。
三郎　長上下でお來やつたか。
尾上　左樣でござる。
三郎　ハテ、心得ぬ儀でござる……サヽ、お越しなされい。
ト行かうとする。尾上之助思ひ入れあつて
尾上　ハツ、承りたう存じまするは、玄蕃之丞さまお詰め所は、いづれでござるな。
三郎　アヽ、岩藤どのゝ詰め所を聞かつしやるか。お指圖申したいが、身共は一向に存ぜぬ。
小次　貴殿が御存じなくば、この惟貞なぞは猶以て存ぜぬ……斯樣召されい。御殿を下がり召されて、辻番で聞かつしやるがようござる。
三郎　それがよろしうござらう。ハヽヽヽヽ……イザ〳〵、お越しなされい。
トあざ笑つて上の方へ入る。此うち序の舞、尾上之助こなしあつて
尾上　ハテ、詰め所はいづれに。
ト案じろ思ひ入れ。矢張り序の舞にて、向うより大部、立烏帽子、素袍にて出て來り、これも尾上之助を窺ひ見て

太郎　ハヽヽヽヽ、これは玄蕃之丞どの、お早い儀でござりまする。取分けて今宵は、頼家公の御参詣、さぞかしお心遣ひ、察し入りまするて。相應の御用もござらば、お心置きなう。ハヽヽヽヽ

トわざと平伏する思ひ入れ。尾上之助、氣の毒に思ひ

尾上　アヽイヤ、岩藤どのではござりませぬ。拙者、尾上之助にござりまする。

太郎　アヽ、尾上どのか。未だ御番人もなきに、なんで爰へござつたのぢや。

尾上　ハツ、その儀も今宵、お墨附頂戴仕る由、玄蕃どのよりお指圖ゆゑ。

太郎　それはおめでたい。併し、番人もなうて、貴公達か上下でこの席へとは、近頃出過ぎた其許、其やうな人に拙者なぞも……イヤ、誠におめでたい儀でござる。

尾上　ハアヽ。して、岩藤どのゝお居間はな。

太郎　存じませぬ〱。知りませぬ。其許こそ御存じでござらうに、身共なぞは存じませぬ。知りませぬ。併し、岩藤どのゝ詰め所は、慥か正面の御簾の内か……イヤ〱、あれは頼家公の御座の間か。一向に解りませぬから、其許の行きたい方へお行きやるがよい。ハテサテ、貴公はお仕合せなお出世で、おめでたう存ずる。御加増でおめでたい。

ト暗がりゆゑ様々な顔をして、あざ笑ひ、素袍にて蹴立て、管絃になり、上の方へ入る。尾上之助、

途方に暮れし思ひ入れにて

尾上　ハテ、何やら心ならざる

ト思ひ入れ。矢張り管絃にて、向うより宇田五郎、立烏帽子素袍にて出て來て、花道にて窺ひ見て

五郎　それにござるは、どなた樣でござるな。

尾上　ハツ、私し事は小身ながら、今宵各々方の列に加はりまする、尾上之助でござりまする。

五郎　アヽ、尾上之助どのでござるな。それは無調法。身共なぞは暗がりゆゑ、御殿へ盗人猫が參つたと存じた。猫と貴公と見違へるとは、暗がりと申すものは、イヤ粗忽千萬、赦さつしやい〳〵。誠に猫かと存じた。

ト行かうとする。尾上之助裾を捕へ

尾上　アイヤ、岩藤どのゝ御座なさるゝ詰め所は、いづれにござりまするな。

五郎　アヽ、何か云はつしやるさうなが、身共この程は逆上仕り、耳が遠うて一向に聞えませぬ。暗がりで耳が遠いとは、これが正眞の盲目に聾。ハヽヽヽ、見えませぬぞ。無調法の段は、御容赦にあづかりませう。

トわざと素袍の下にて蹴ちらし、蹴のめして上の方へ入る。尾上之助思ひ入れあつて

尾上　最前といひ、心得がたき諸大名のあの振舞ひ……ア丶、これと申すも、小身者の立身出世を、ねたみ嫉むは世の習ひ……さはさりながら、岩藤どのに面談いたして

ト探り〳〵、正面の上段の間へソロ〳〵と上がる。この時、件の四人、各自手燭を素袍の袖に隱し、窺ひ出て、小次郎と五郎は下の方へ窺ひ行く。三郎と大部は上の間に窺ふ。尾上之助、段の上へソロソロと上がる。この時御簾、ぢり〳〵と卷きあがる。正面に岩藤、長上下にて、三方に白木の箱を載せたるを持ち、すつくと立ち身。尾上之助、これを知らず、二重へ上がる。岩藤これを知つて、あざ笑ひゐる。尾上之助あたりを探り、岩藤の上下手に觸るゆゑ、恟りして

岩藤　灯を持ちやれ。

ヤ丶、これに御座ある御方は。

ト高聲に呼ぶ。この時四人、一度に手燭を差出す。二重の上へ茶道二人、銀燭臺を持ち、ツカ〳〵と出て、よき所に置く。尾上之助「ハツ〳〵」とうろたへる。岩藤キツとなつて

若殿のお居間近く、慮外千萬、下がらぬか。

ト突き落す。尾上之助、上よりまろび落ち、平伏する。四人、手燭にて、よく〳〵見て

大郎　御座の間近く窺ふは、曲者なりと存ぜしが、見れば尾上之助どの。

岩藤　すりや、これに居つたは、祐信の養子たる

四人　尾上どのでござりまする。

岩藤　左様とは存ぜず、無禮申した。赦さつしやい〳〵。

尾上　これは〳〵、玄蕃之丞さまのお詞、恐れ入り奉りまする。最前其許様の仰せに任せ、お墨附頂戴の爲、これまで伺候仕つてござりまする。何卒首尾よう頂戴仕りまするやう、偏へにお執成しの程、お願ひ申し上げまする。

岩藤　尤もの願ひ、聞き屆けました。卽ちお墨附、持參仕つた。サヽ、近う〳〵。

尾上　ハツ〳〵。

ト岩藤の方へ行かうとする。この時岩藤、キツと目を附け

岩藤　アイヤ、尾上どの、待たつしやい。見ますれば其許は、未だお墨附頂戴も致さぬ前方に、長上下の體、誰れが許しました。何者が指圖仕つた。見らるゝ通り諸大名、殘らず烏帽子素袍でのお勤めでござる。憚りながら賴家公の、お添へ人と申すは拙者一人でござるぞ。その某と、肩を並ぶるその姿は、餘りと申せば我まゝなる致し方。この玄蕃之丞を、蔑らに致さるゝのか。若輩者の身を以て、出過ぎさつしやるな、扣へさつしやい。

トかさ押しに叱る。尾上之助平伏し、やう〳〵と面を上げ

尾上　無調法の段、恐れ入り奉りまする。さりながら、先刻お伺ひ申せし砌り、長上下にと其許樣の

岩藤　默らつしやい、尾上之助。なんで某が左樣な指圖仕らう。コレ、よく物を辨まへてもお見やれ。よし又指圖いたしたにもせよ、身共は何者。コレ、平大名とは違ひまするぞ。鎌倉武將に一門類葉、多きが中に誰れあらう、阿野の法橋全盛の血筋たる、岩藤玄蕃之丞時元、身と同樣に思うてござるか。今宵の拙者は、賴家公の御名代。こなたは何だ。いはゞ御敵伊東が身內、河津が胤にて一度は、久上にありし坊主がへり、小祿取りの祐信が、養子となつて云ひ立は、素讀を指南の知行取り。四角な文字を探し出す、それが誠の侍ひか。見らるゝ通りいづれも方は、殘らず烏帽子素袍だワ。心を附けやれ、尾上之助。

トきつと云ふ。尾上之助思ひ入れあつて

尾上　お指圖恐れ入り奉りまする。然らばお次へ罷り立ち、服改めて其節お目見得。

ト行かんとするを、岩藤思ひ入れあつて

岩藤　待たつしやい。時刻が延びます。その間この席に、待たせて置かうと思はつしやるか。

尾上　サヽその儀は。

岩藤　ハテ、見かけによらぬ。うつけも程があるものぢやヮ。

ト思ひ入れ。尾上之助チッと平伏してゐる。三郎摺りよつて

三郎　誠に、其許様の御立腹の様子、一々恐れ入りましてはござれど、只今に至り、致し方なき尾上之助。

大部　この席に居合す者は、誠に氣の毒、何とも申しやうもない儀、何卒我れ〳〵に免じられ

小次　お墨附頂戴の儀を、偏へに願ひまする。

五郎　我れ〳〵とても皆同心。何卒故なう

四人　願ひまする。

ト岩藤に手を下げて思ひ入れ。

尾上　これは〳〵、各々方の思し召しの程、恐れ入つてござりまする。この上もなき無調法、殊には養父祐信こと、明日をも知れぬ老病なれば、せめて一日たりとも各々方の列に加はり、老の喜び見まするなれば、この上の候はん。何卒偏へにお墨附頂戴の儀を、願はしう存じまする。

大部　同席の我れ〳〵とても、偏へにこの儀

皆々　願ひ奉りまする。

ト岩藤と顔見合せ、思ひ入れあつて詫びる。

岩藤　さほどまでに各々方の御挨拶、聞き届けました。この上ともに、心を附けさつしやい、承知か。

尾上　有り難く存じ奉りまする。

岩藤　然らばお墨附、頂戴おしやれ。

尾上　ハツ。

ト思ひ入れ。管絃生け殺しあつて、岩藤の側近く摺り寄る。岩藤、件の箱を三方のまゝ差出す。尾上之助取つて押戴き、岩藤の額を思はず見て

其許様のお面に、埃と見えて

ト思ひ入れ。岩藤もこなしあつて

岩藤　身が面へかゝりしに、御殿の暗がり、定めし埃が

尾上　然らば有り難く頂戴仕りまする。

ト喜びの思ひ入れにて、箱の蓋を開く。中に上包みせし書き物、件の草履の片足あるを見て、合點のゆかぬ思ひ入れにて

ヤヽヽヽ、お墨附かは知らねども、中には片足の女の履き物。

岩藤　覺えがあらう。
尾上　ヤ。
ト靜かな序の舞。
岩藤　最前お庭の富士淺間、鳥居先なる幕の影、合圖あつてか身が面へ打ちつけし、しかも女の古草履土足にかけし土埃、阿野の岩藤玄蕃之丞が、面を穢す無禮緩怠、履いたる女は八ツ裂きに、致してもよき憎くき奴。併しその儀は差措いて、草履に添へしお墨附、とく〳〵頂戴いたしてよからう。
尾上　すりや、履き物へ、勿體なくも
岩藤　尾上之助へ賜はる墨附。拜見おしやれ。
尾上　ハヽツ。
ト不思議さうに件の上包みを取り、中より書き物を出し、開く。四人は直さま手燭を差出す。書き物を見て、尾上之助思ひ入れあつて
四人　讀み上げさつしやい。
「内々にて申し上げ候」……ヤヽ、こりやコレ手跡は

尾上 サ、その儀は。

岩藤 キリ〳〵墨附、讀み上げぬか。

ト きつと云ふ。これにて尾上之助、こなしあつて、書き物を開き

尾上 「今日御花館、富士淺間參詣御許しの由、幸ひと存じ、この度のお咎め、早速御免これあるやう心願のため參詣仕り候ふところ」

大部 その墨附は女の手跡。

三人 仔細ぞあらん。して、その跡は。

尾上 似寄りの手跡。

ト 迷惑なる思ひ入れ。

四人 讀み上げさつしやい。

ト これにて尾上之助是非なく

尾上 「醫者灸按どのにお目にかゝり、豫ね〴〵私し方へ、玄蕃之丞さまより道ならぬ」

ト 讀みさして、あたりへこなし。

岩藤 大事ござらぬ。玄蕃とあれば猶更聞き事。サヽ、讀み上げさつしやい〳〵。

トせがむゆゑ、尾上之助是非なきこなしにて

尾上「道ならぬ御文、數度下され候へども、そのまゝに御返し候ふところ、今日申さるゝには、當時賴家公のお附き人たる、岩藤さまに候へば、もし尾上之助どの、この度お取立て遊ばされ候ふ御出世の妨げの程も如何とのこと、左樣に候へば、御前樣のお身の上、御大切と存じ、心にもなき事ども灸按へ申し聞かせ候ふも、今日御殿の首尾、お案じ候ふまゝの事にて候へば、誠に主ある女の道に違ひ候ふ事を、噓僞はりを申し遣はし候へば、左樣御心得、御殿に於ても岩藤さまに御油斷なう、それのみ申し上げ候ふ、首尾あらば御目もじと存じ候へども、若君樣お成りにつき、御目もじ叶ひ難く、文にて申し上げ〳〵、めでたく〳〵」……ヤヽヽヽヽ、この文言は、この身の大事。

ト讀みあげるうち、いろ〳〵こなし。

岩藤 宛名を讀みやれ。

尾上 サア、その儀は。

岩藤 苦しうない、讀んで聞かしやれ。

尾上 でも、この席で

四人　讀み上げ召されい〳〵。

　　トこれにて尾上之助、いろ〳〵あつて

尾上　宛名は卽ち

岩藤　尾上之助さまへ、二の宮よりか。

尾上　ヤ。

岩藤　なんと相違はあるまいがな……玄蕃が面を穢したる、草履の科人、證據のその文。夫婦馴れあひ
　某に、恥辱を與へん胸中と、推察いたした。尾上之助、それに相違はあるまいがな。

　　トきつと云ふ、尾上之助思ひ入れあつて、件の草履を以て岩藤に向ひ

尾上　覺えござらぬ事ながら、拙者婦妻が手跡と申し、申し譯なきこの體裁。卽ちこれにて

　　ト草履を差出し

　御存分に御打擲の程、偏へに願ひ奉る。

　　トよろしくこなし。岩藤思ひ入れあつて

岩藤　すりや、この草履で、身共に打つて、腹いせ致せとお云やるのか。

尾上　なか〳〵左樣。

岩藤　イヤ、打ちますまい。誠の武士が何しに左樣な。

尾上　そこを只管尾上がお願ひ、武士の面をいかほどなりとも、御打擲あつてお墨附

岩藤　申し受けたい心底か。

尾上　養父の親へ孝道ゆゑ、何卒拙者がこの面を

岩藤　さほどに願ふ事なれば、然らばこれにて貴殿の面を

ト草履を取る。

尾上　サヽ、お打ちなされて。

岩藤　望みとあれば是非なくも

ト振上げしが思ひ入れあつて

打たで叶はぬ事なれば、この岩藤が

ト草履を持つて、尾上之助の額を除け、肩衣の上を二つ三つ打ち

これにて仕返し。

尾上　イヤ、左樣では却つて迷惑。矢張り身共がこの面を

ト岩藤が手を持ち添へ、手前の額へ押しあて

サヽ、存分これにて。

岩藤　打てとあるなら勸めに任せ、打ちまするぞや、尾上どの。

尾上　お心任せに。

岩藤　身共は打たぬ、岩藤は、打擲いたす心は無けれど、こなたが勸めの草履の笞。打てならこの場でまツこのやうに……これこそこなたの指圖の笞。斯うして〳〵、カウ〳〵〳〵……身共は打たねど勸めの折檻。尾上之助、これで骨身に堪へたか。

ト尾上之助が面をしたゝかに打つ事。尾上之助ヂツと無念を堪へゐる。この時奥にて、五つの時計鳴る。四人、思ひ入れあつて

大部　初夜のお時計、若君御歸館に程近き時刻。

三人　我れ〳〵どもは路次の警衞。

岩藤　用意召され。

四人　ハツ。

ト各自手燭を持つて立上がり、尾上之助を見て

大部　尾上之助どの、御心中察し入りまする。列座の中にて草履の折檻、よくも堪へてお居やつた。

三郎　流石は河津の胤ほどあつて、河津の血筋はこれ程まで

五郎　河津に似たる蛙の面へ

小次　水にはあらぬ古草履。

大部　それも貴殿の奥方の、履いた草履で定めし喜び……イヤ、氣の毒千萬。

皆々　笑止に存ずる。

ト管絃になり、皆々尾上之助に向ひ、わざと禮儀を正しく會釋し、あざ笑ひながら、茶道附いて奥へ入る。尾上之助此うち、いろ〳〵こなし。岩藤、思ひ入れあつて

岩藤　跡に用なき尾上之助、退出さつしやい。

ト件の箱を抱へ、正面の階へ踏みかける。尾上之助寄つて裾を捕へ

尾上　アイヤ、岩藤どの、願ひましたるお墨附、何卒今宵

岩藤　なりませぬ。

尾上　ヤ。

岩藤　罷りならぬ。

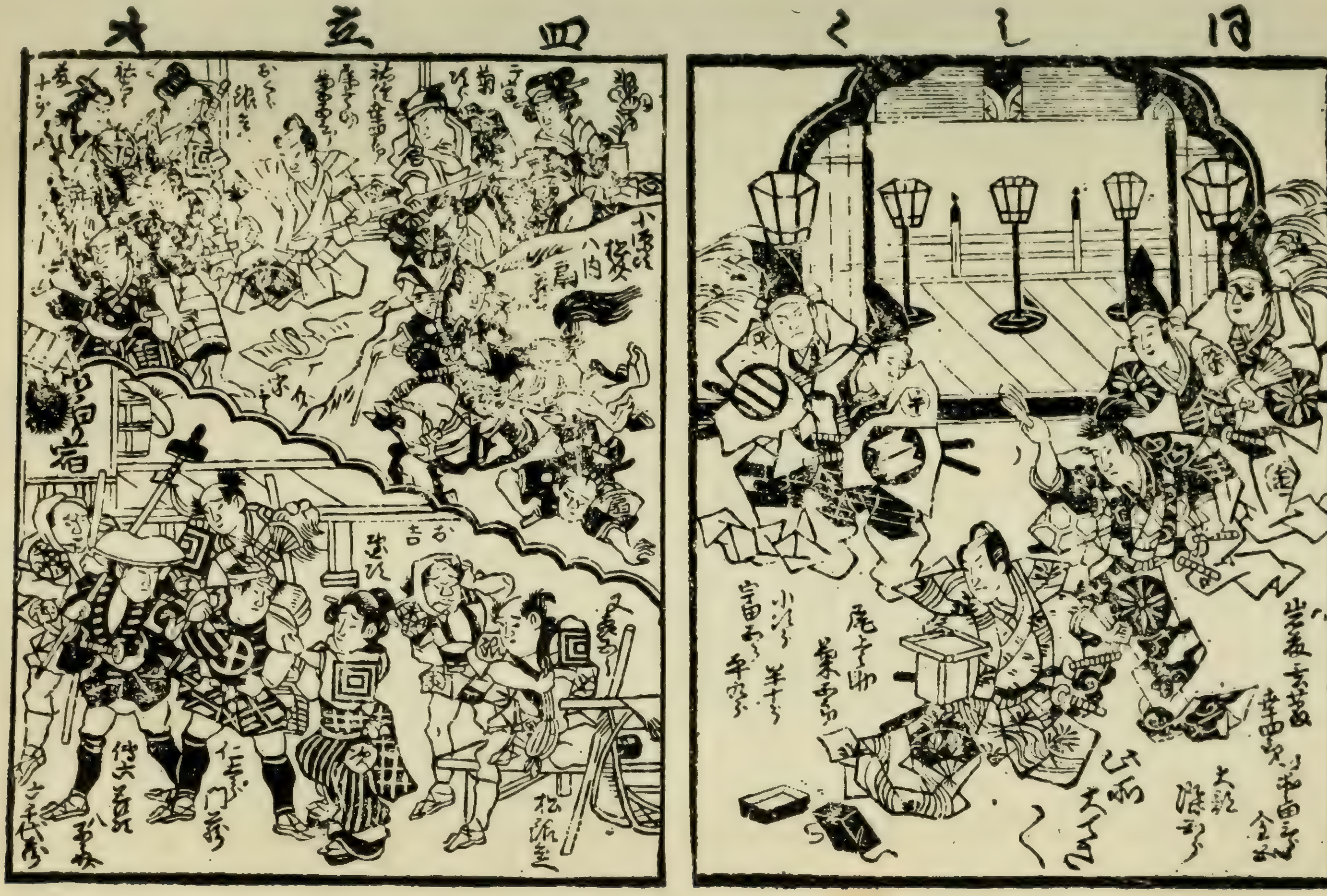
尾上　でも、御折檻相濟む上は。

岩藤　草履の遺恨は私し事、武将へ捧ぐる名木香爐、その二品を持參いたしやれ。
尾上　サ、それは。
岩藤　それ無きうちは墨附叶はぬ。とく〳〵御殿を下がらつしやい。
尾上　すりや只今の御打擲、斯程に恥を與へし上に、お墨附は
岩藤　相渡されぬ。墨附望まば、二品揃へて
尾上　でも、今以て
岩藤　在所は知れまい。どうして〳〵。うろたへ武士の祐信、尾上、今の咎も其方から、所望いたしした草履の折檻、ぶつたがどうした。叩いたが何とした。
尾上　それと申すもお墨附、頂戴せんと恥を捨て
岩藤　二品上げねば叶はぬ事。こなたにくれるは奥方の、手跡の墨附、古草履、進上いたさう、守におしやれ。

ト書き物を草履へ挾み、尾上之助の面體へ打ちつける。尾上之助、直さま取上げ

尾上　重ね〴〵のこの我まゝ。養父の家を思ふゆゑ、人なきならば

ト刀へ手をかけ、思ひ入れあつて



劍難の相ありと、刀へ封印。これも思へば養父のお慈悲。今にご思ひ

ト思ひ入れ。

岩藤　武士たる者が刃物へ封印。思へばたわけた

尾上　ヤ。

ト見上げる。岩藤、唾を吐きかける。尾上之助堪へかね

あまりと申せば

ト立上がる。この時奥にて

呼び　御歸館でござる。

ト呼ぶ。

岩藤　立たつしやい。

尾上　ハヽア。

ト平伏する。木の頭。

岩藤　ハヽヽヽヽヽヽヽ。

ト笑ふをキザミにて、よろしく、ひやうし

幕

（作者　鶴屋南北）

祐信屋敷の場

第一番目　四建目の口

役名――宇佐美尾上之助。曾我太郎祐信。尾上之助妻、二の宮。若黨、小源次。乳母、お倉。下郎、鴈助。甘縄丹下。片瀬左仲太。一子、祐太郎。

本舞臺、三間の間、緣側つき常足の二重、軒口に菖蒲を葺き、正面さや形の襖、長押誂らへの槍かけてあり、よき所に好みの神棚。中仕切りの欄間に札箱をかけ、上の方一間の障子屋體、いつもの所に栗丸太の枝折り門。上の方、打破りの池。雨落より門口の外、同じく池の心。花菖蒲、眞菰大分茂り、舞臺に山形庵に木瓜の袴幟を置き、すべて曾我祐信屋敷の體。爰に二の宮、竹花活けへ菖蒲を活けてゐる。鴈助、中間にて太鼓を叩き、お倉、鬼の面をかぶり、祐太郎の子役を渡邊にして、羅生門の見得。琴唄にて幕明く。

ト鴈助、太鼓を叩き、謠にて

鴈助「後をきつと見てあれば、さもやんごとなき上﨟の、姿も忽ち二丈ばかりの惡鬼となつて、綱か

髻かい摑んで、虚空はるかに引揚げたり。ヤア、ハア」。

ト無性に太鼓を叩く。お倉、祐太郎を相手に、ちつと舞ひあつて

くら　やれ〳〵、婆アも大きに草臥れました。モウ〳〵舞ひは、明日の事になされませ。これから、鼬ごつこをして遊びませう。

祐太　そりや否ぢや〳〵。おりや強い渡邊がよい〳〵。

くら　これはしたり、其やうにやんちや仰しやると、お線香と艾でござりまするぞ。

祐太　否ぢや〳〵。渡邊がよい〳〵。

くら　モシ〳〵、和子さま〳〵、斯う遊ばしてはどうでござります。あの鴈助をお馬になされまして、お馬どう〳〵、これがよろしうござりませう〳〵。

鴈助　コレ〳〵、お乳母どの、折角和子さまが御機嫌で、羅生門の舞ひをなされうといふものを、エヽ、憎い婆アでござります。

ト祐太郎を抱き

サア〳〵、只今の跡を、舞ひませう〳〵。

ト祐太郎に菖蒲刀を持たせ

「その時渡邊少しも騷がず、佩いたるところの膝丸にて、茨木婆ァの横腹を、叩き切つてやるべいと、ヤアハア」

トお倉をくらはせろゆゑ、お倉逃げ出し

くら　アレ、否だよ、鴈助どの、女子を捕へて思ふさま。アイタヽヽヽ。

鴈助　痛くば鼬の糞婆ァ、彌彦婆ァは越後にあり、安達ヶ原は鬼婆ァ、咳の婆ァは本所原庭、ばゝアな面の婆アめを、微塵になさんと夕月に

ト鴈助、出たらめの謠をうたひながら、お倉を追ひかける。お倉逃げ歩き、飾りある幟へこけかゝり幟を折る。このはずみにお倉、鼻血を出す。

それ〳〵、幟を押つぺしよつたワ。今に旦那のお目玉を貰ふであらう。おいらぢやないぞ〳〵。

祐太　幟が折れては、おりや否ぢや〳〵。

鴈助　ほんに、憎い婆アでござります。思ひ入れ、くらはしておやりなされませ。

トこけてゐるお倉の頸を、菖蒲刀にて打たせる。

くら　アイタヽヽヽ。鼻血が出るよ〳〵。

鴈助　鼻血が出ても、おいらぢやないぞ〳〵。

くら　おいらぢやないもよく出來た。こんたが追ひかけて歩いたから、これこの通りに鼻血が出るよ。

ト鼻血を拭きながら鼻くた聲にて云ふゆゑ

鴈助　ナニこつそりと話しがある。イヤ、眞平御免だ。

くら　コレ、目に見えないか、鼻血が出るよ。

鴈助　三圍に淺茅ケ原だ。

くら　エヽ、鼻血がく。

鴈助　放し龜が、どこに居るといふのだ。

トぢらすゆゑ、お倉腹を立て

くら　エヽ、面の憎い、この折助めが。

ト武者ぶりつくを

鴈助　何をするのぢや。この李婆アめ。

トくらはせにかゝる。この時、二の宮立つて來り、この中へ入り

二宮　これはしたり、こなた衆もマア、どうしたものぢやぞいの。いかに夫の留守ぢやというて、わしを侮つてか、其やうないさかひ事。これにつけても義理ある母上、滿江さまがお出でなされたら、

下部までが此やうな、慮外もしやるまいに、また祐太郎も温なしうしや。お祖父様は御病氣の事必ず惡あがきしやんな。ほんに其方衆も、嗜みやいなう。

くら　モシ〱、奥樣え。それでも私しはあの雁助どのに、此やうに鼻血を出されては、女が立ちませぬ。

雁助　ハヽヽヽヽ、立つの立たないのと生意氣な……イヤコレ、お乳母どの、仲直りに、ぼんのくぼの毛を、三本ほど抜いてやらうから、不請さつしやい〱。

二宮　ハテ、總體にてんがうが過ぎまする。今も今とて此やうに、幟を折りやつたが、端午の飾りは殿達の身の祝ひ、この程夫尾上之助どのゝお身の上、どうか斯うかと、案じる事のある最中。殊には父上の御病中、わしやモウ、氣にかゝつてならぬわいなう。

雁助　成る程、こりやア尾上之助さまのお身の前表。是非ともこの幟の通りにならねばならぬ。

二宮　アヽコレ雁助、何と云やる。

雁助　イエナニ、このお乳母めが、不吉な事を致しましたわえ。

くら　それもこなたが惡いからぢや。

ト立ちかゝるな

二宮　エヽ、又かいなう。

祐太　ばゝ、おりや眠たいわいなう〳〵。

雁助　それ〳〵、和子さまが眠いと仰しやるワ。早く納戸へお連れ申したがよい。エヽ、氣のきかない閻魔婆アだ。

くら　ナニ閻魔なものか。お乳母だワ。

ト雁助を睨める。

祐太　アレ、ばゝが、怖いわいなう〳〵。

雁助　成る程、お乳母によく似だ閻魔様だ。

くら　この罪人めが、よく覺えてゐるよ。クワウ。

ト雁助を睨みつけ、祐太郎を抱き、合ひ方になり、奥へ入る。雁助、二の宮殘る。これより太鼓の調べ。

雁助　ハヽヽヽ、あれでも男があつて、子を拵らへたのだな。ほんに、あの乳母の亭主の面を、見てやりたいものだ。よもや人間ではあるまい。モシ、奥樣、あなた樣は、何と思し召しまするな。

ト此うち二の宮、矢張り活け花を直しゐる。

二宮　可哀さうに、其やうな事云やんな。また聞へたなら、大抵な事ぢやあるまいぞえ。

鴈助　聞へたとて大事ござりませぬ。ほんに思へば思ふほど、あの女を女房に持つた男は、不運な男だ。それに引かへ、あなたのやうな奥樣を、持たしやつた尾上之助さまは、好い日の下で産湯を使はしやつた人でござりまするて。

二宮　ホヽヽヽ、鴈助が一人して、何を云やるやら。

鴈助　何を云ふのぢやアござりませぬ。モシ、奥樣え、あなたは其やうに一心不亂に、花ばかり活けておいでなされまするが、アヽ御不便や。いとしう思し召す尾上之助さまが、餘所の女中を手活けの花になされるを、あなた、御存じはござりませぬか。

二宮　何と云やる。鴈助、こちの人尾上之助さまが、どこの女中を其やうに

鴈助　成る程、あなたは佛樣だぞ。この四五日、お屋敷へお歸りもござりませぬのは、化粧坂の色酒に現をぬかされ、今頃は大方腮で蠅も、覺束なうござりませう。その女郎の吸ひがらしの殿樣を、天にも地にもないやうに、大切になさるあなた樣は、私し共のやうな下々では、白痴と申しまするぞえ。

二宮　鴈助が何を云やるかと思へば、我が夫が揚屋遊びの事かいの。そりや其方が云はいでも、わしや

よう知つてるわいの。

雁助 ハヽア、御存じでござりますかな。それなれば猶の事。あなたは白痴と申すもの。なぜマア御悋氣はなされませぬ。あんまり結構過ぎるのも、出來た話しではござりませぬて。

二宮 サア、わしとても女子ぢやもの、尾上之助さまの惡性を、心では兎やかう思つてはゐれど、悋氣嫉妬は、假にも女子の嗜み事。

雁助 モシ、それがうつそり。あなた樣のそのお心を見縊つて、殿樣がしたいまゝの惡性狂ひ。それといふのが元を糺せば、あの尾上之助さまは、河津どのゝ妾腹で、劍難の相があるというて、幼ない時には越後の久上寺で、出家なされた禪司坊さま。このお屋敷の祐信さまの、御實子といふは祐九郎さまと、あなた樣。兄御の祐九郎さまは、お身持が惡いというて、御勘當。そこでこの曾我のお世繼ぎが絶ゆるによつて、一旦坊主になつた禪司坊さまを、還俗させてお養子に、おらひなされてあなた樣と御夫婦。ところで、何が初めて女の味を食ひしめた、坊主返りといふものだから、どこへ行つても女さへ見りやア、びろ／＼と涎で、お袴のひだも、大小も、色が替りもしませう。そんな無心中な男に、貞女を立てるあなたさま、これは只今申しました、この字にけの字。

二宮　コレ〳〵、鴈助、最前からわしが、心ようしてゐれば、女子と侮り、散々な慮外千萬。この身のしがは兎も角も・我が夫の讒訴聞き憎い。冗談もよい加減に、ちと嗜みやいの

ト叱る。鴈助こなしあつて

鴈助　ハイ〳〵、これは麁相申しました。併し、そのツンとなされたところが、どうも堪らぬほど、この鴈助は蟲が好きます。そのこの字とけの字をおやめなされて、幸ひとまだ女房の無い心中男となんと御相談なさる思し召しはござりませぬか。エ、モシ、どうでござりますな〳〵。

ト段々側へ寄つてしなだれる。

二宮　鴈助、そちや氣ばし違うてか。主に向つてみだら千萬な。其やうな事しやると、きく事ぢやないぞ。

鴈助　イヤ、此やうな事をした上は、たとへどんな目にあひましても、少つともいとひはござりませぬどうぞ其やうな事を、致したいね〳〵。

ト二の宮に抱きつきにかゝるを、二の宮、鴈助を突きのけ

二宮　エヽ、何ぢやぞいの。又しても其やうな事しやると、父さんに告げるぞえ。

鴈助　サア〳〵お告げなされませ。其やうな事をしてしまつた跡でお告げなされませ。こいつはどうも

堪らぬわえ。

ト捨ぜりふにて二の宮を追ひ廻す。この時、上の障子屋體の内にて

祐信、娘は居らぬか。娘、娘。

二宮　ありや父さんのお聲。ハイ〳〵。

鴈助　エヽ、嘘ばつかり。どこに旦那がお呼びなされます。イヤ、その手は食はぬ〳〵。

二宮　エヽ、爰放しやいの。

鴈助　イヤ、どつこい〳〵、なか〳〵、放す事では

祐信　これはしたり、何をして居るぞいやい。娘、娘。

ト障子をサツと明ける。これにて鴈助うろたへて

鴈助　ハイ〳〵、父さん、何の御用でござんすぞいなア。

ト手を突いてこなし。

祐信　ハヽヽヽ、端午の節句はあらうもの。鴈助、そちや大分醉うてゐるな。コリヤ、娘、男女七歳にして席を同じうせずとは、禮記の教へ。たとへ下郎にもせよ、男女打交つてみだら千萬、嗜め嗜め。

卜鼓の調べ、合ひ方になり、祐信、病ひ鉢卷、羽織衣裳、本を見て居たる體にて、片手に見臺を持ち
舞臺へ來り、あたりを見て

今日は五月五日、武門に於ては大切な祝ひ日ぢやに、神酒徳利も其まゝに打捨て置くが、いかに若いというて、娘、其方も氣がつかぬわえ。雁助、そちや何をしてゐるのぢや。早う備へぬかえ

雁助　ハイ〳〵、何やかに取紛れて、とんと失念いたしました。それにアノ二宮さまが、癪が起つたから押してくれろと仰しやりましたゆゑ。

祐信　ナニ、娘が癪氣ぢやと申すのか。

二宮　イエ〳〵、わたしや其やうな事を申しは致しませぬ。

雁助　成る程、あなたはよう噓を仰しやります。たつた今私しが手を捕へて、爰を押してくれろと

二宮　アノマア白々しい……エヽ、早うお神酒を上げぬかいの。

雁助　ハイ〳〵……ヤレ〳〵、忙がしいお屋敷だ。

卜下に下ろしてある瓶子の神酒徳利へ火を打ちかけ、神棚へ上げる。祐信、折れし幟へ目を附け

祐信　娘、何者の仕業か、幟が折れて居るな。端午の幟は戰場の、旗指物を表したもの。それを破却いたすといふは、この程伜尾上之助が身が上に、心よからぬ噂ある、その幸先に不吉な前表。

二宮　エ。

ト思ひ入れ。

祐信　怪我で致した事でもあらうが。目ざはりぢや。娘、そこらへ取方附けて置きやれ。

二宮　ハイ。

トこなし。矢張り右の合ひ方にて、二の宮、幟の枠を片隅に持ちゆき、こなしあつて

私しも大抵、氣にかゝる事ではござりませぬ。それにこの二三日は、尾上之助さまのお歸りもなし

トこなしあつて

モシ、父上樣、なぜに尾上之助さまを、お迎ひにはおやりなされませぬぞいの。

祐信　迎ひに遣はしたくば、其方がやればよいに、身共が存じた事ではないワ。

二宮　サ、私しがお迎ひを遣はしますと、どうやら悋氣のやうに……エヽモウ、どこに、どうして居やしやんす事ぢややら。

祐信　それを身共が知らう筈はない。若い者の事、行く先々で、少しは氣晴らしもなけりやならぬ。よいワ、捨てゝ置け。歸る時には歸るであらう。

鴈助　左樣でござりまする。大旦那樣の仰しやる通り、お歸りなさる時分には、腰をひよろつかしてお歸りなさると、ヤレ地黃丸を買つて來いの、ヤレ玉子よ鰻よと、私し一人こき使はれるでござりませうて。

二宮　ほんに、嗜んでは居るけれど、思うて見れば腹が立つて

ト向うの方を見て、こなし

鴈助　そりや、そろ〳〵角が目ざして來た。

トそこにある鬼の面を取つて目先へ出すを

二宮　エヽ、知らぬわいの。

ト面を引ツたくつて、そこへ投げつける。

祐信　これははしたない、どうしたものぢや、何を其やうに腹立てるのぢや。アヽ、大分肩がつかへて參つたわえ。娘、爰へ來て、ちと撫つてくりやれ。

二宮　ハイ……ほんに殿御といふものは、女子の思ふ半分も

鴈助　思ふ者が、爰らあたりに一人、ナ、モシ。

トこなし

祐信　エヽ、早う撫らぬかえ。
二宮　ハイ〳〵……早う歸つて下さんすりやよいになア。
ト思ひ入れ。右の合ひ方にて二の宮、祐信の肩を撫る事。
祐信　ハテ、案じやるな。年は若いが、見所ある尾上之助、たとへ夜泊り日泊り致しても、なか〳〵主用を打捨て、主ある女子を捕へ、不義を働らかうと致すやうな、人非人ではあるまいて
ト鴈助の方を見て思ひ入れ。鴈助、氣味の惡きこなし。
この度はお上にも、日本開闢ためし少なき大造作、富士の裾野の牧狩にて、御用繁多の最中。年こそ寄つたれこの祐信も、病中でないならば、相應なお役をも、勤めねばならぬところを、悴に任せて置けば、親が勤めと自分の奉公、二人前勤める尾上之助、晝夜詰め所に居るも尤も。御用さへ相濟めば、自分の屋敷、歸つて參るは知れた事。尾上之助は歸らうが、歸らぬ者は後妻の滿江に、添へて離別の二人の兄弟。
二宮　サ、その事も、平常私しがお願ひ申しまするが、義理ある母上滿江さまに、添へて御離縁なされたる、祐成さまに時致さま、腹こそ違へ我が夫と、胤は等しき河津さまの忘れがたみ。たとへお心に染まぬ事があるとても、繋がる緣の尾上之助どのに、お免じなされて二人の兄上、母上樣も

祐信　ハテ、聞き譯のない。又しても其方が詫言。この祐信が後妻の滿江の、連れ子の兄弟祐成時致、母に添へて離別なしたは、云ふに云はれぬ深い樣子があつての事。

二宮　ではござりませうが、義理ある母の滿江さまへ、それではわたしが孝行が

ト思ひ入れ。鴈助こなしあつて

鴈助　元の鞘へ納めやうと、二の宮さまが間がな隙がな、お願ひなされたとて、なか〳〵お歸しなさる事ではござりますまい。ハテ、現在血を分けなされたこの家の御惣領祐九郎さま、あなたの爲には御一腹、御一生の兄御樣さへ、お身持が惡いとて、御勘當なされたもの、ましてや下々で申せば、女房の連れ子の麥飯そくい。ならず者の癖として、大磯や化粧坂での傾城狂ひ。あらう事かあるまい事か、痩せても枯れても大名の若樣が、引く馬はお連れなされず、附馬やら下馬やら、その時分には私しめも、上げ下げに使はれて、質屋へお百度參りを致しました。イヤモウ、あのやうな貧乏神は、お拂ひ箱がお家のお爲。その血筋やら、あの尾上之助さまも、この頃は大磯へはまり込んで、お上の御用も西の海、さらり〳〵とぶん流しての居續け。それもよろしうござりませうが、第一曾我のお家の、外聞に係はる事と申しまするは、いつぞや扇ケ谷にて、滿座の中で、阿野の岩藤玄蕃之丞さまに

ト口拍子にてしやべり散らすを、祐信あびせかけて

祐信　コリヤ鴈助、ヤイ下郎、默り居らう。誰れも尋ねもせぬ事を、ずべら〳〵と、こりやヤイ、時代につれて武士の遊興も種々樣々。よしや尾上之助が、揚屋遊びを致さうとも、若殿原にはまゝある習ひ。たとへ養子にもせよ、この祐信が悴、おのれが爲にも主ではないか。それを誰れに讒訴いたすのぢや。イヤサ、以後左樣な事を申すと赦さぬぞ。

トきつと思ひ入れ。

鴈助　へイ〳〵、左樣なら私しが申し上げた事が、御機嫌にさはりましたかは存じませぬが、下郎もお屋敷に、年久しく御奉公を致しまするゆゑ、お家のお爲を存じまして、へイ〳〵、申し上げましたので

祐信　ハテサテうるさい。何をおのれが問はず語り……エヽコレ、讀みさした史記の列傳。アヽ、どこであつたな。

ト見臺の本を繰つてゐる。

二宮　コレ、父上の讀書の妨げ。其方は部屋へなと行きやいの。

鴈助　ではござりませうが、エモシ、奧樣、私しめも忠義の爲に、お家の外聞になる事は

祐信　エヽ、立たぬかやい。

鴈助　へイ。

トこなし。唄になり、鴈助、門口を明け、下座へ入る。祐信、眼鏡をかけ、本を讀んでゐる。二の宮は肩を揉むこと。この唄を借り、向うより丹下、左仲太、駕籠舁きの姿にて、四つ手駕籠を舁ぎ、小源次附添ひ出て來り、直ぐに門口の外へ來る。兩人、駕籠を内へ舁き込まうとするを、小源次とめて

小源　コリヤ〳〵、お駕籠はそこへ下ろした。

丹下　それでも旦那が、直ぐに屋敷の門の内へ、舁きこめと云はつしやりました。

左仲　サア、棒組み、やらかせ〳〵。

ト舁き込まうとするを

小源　これはしたり、密かに致せ。サア〳〵、爰へ下ろした〳〵。

ト駕籠を下ろさせ、側へ差寄り

モシヽ、御前樣、もうお屋敷でござりまする。お目覺まされませう。

トこなし。この聲を二の宮聞きつけ

二宮　ありや慥かに小源次が聲ぢやが。

ト立つて來り、駕籠を見て

ヤ、尾上之助さまには、お歸りなされたかいの。

ト寄るを、小源次隔てゝ

小源　イヤ〳〵、お旦那には御病氣でござりまする。

二宮　ナニ我が夫には、お心惡いとや。それなれば猶の事。

小源　ハテ奥樣。ナ、モシ

ト祐信の方へ思ひ入れして

ぢやによつて、御病氣々々々。

丹下　ぢやによつたか、酒に醉つたか知らないが、剛的に駕籠が舁き憎かつた。

左仲　サア〳〵棒組み、旦那の御託宣だ。内へ舁き込まう。

丹下　さうだ〳〵。やらかせ〳〵。

ト兩人ズツと駕籠を内へ舁き込む。小源次あわてゝ

小源　これはいかな。エヽ、强情な……成る程、災ひは下からだな。

丹下　これは叮嚀な御挨拶。イヤモウ、旦那も大磯の舞鶴屋で、づぶ六に醉はしつたものだから

小源　エヘン〳〵……ヤレ〳〵……、大儀であつた。サア〳〵、其方達は、歸つたノ〳〵。

左仲　アイ、そんなら駕籠を明けて下さりませ。

小源　サ、駕籠は、斯樣いたさう。今明けては、旦那の御病氣にさはるによつて、よいワ、此方から屆けて遣はさう。

丹下　モシ、それではわし等の生業が

小源　ハテ、萬事は身共が、承知してゐる〳〵。

丹下　モシ、無性に承知さしつても、惡所場の駕籠でござりますぞえ。

左仲　白の辻駕籠とは、値段が大層

小源　よいわサ〳〵。サア、早う歸れと申すに。

ト門口へ突き出し、戸を締める。

兩人　とんだお屋敷だぜ。

ト兩人、花道の方へ行きかけて、囁き合ひ、こなしあつて下座へ入る。

二宮　コレ、小源次、どのやうな女子が、其やうに我が夫に、酒過させて御病氣になる程

小源　イ、エ、どう致しまして、御酒の過ぎたのではござりませぬ。お役所からの御病氣々々。

ト祐信へこなし。此うち始終祐信、見臺の本を見てゐて

祐信　なんぢや、忰が病氣ぢやと申すのか。

ト傍の料紙箱より藥包みを取出し

コレ娘、これを白湯にて振り出して、早う服ませい〳〵。

ト二の宮に渡す。これを取つて、臺子の湯にて手早く振り出し、駕籠の側へ行き、垂れを上げる。この内に尾上之助、袴、着流しの形、酒に醉うて熟睡してゐる。二の宮こなしあつて

二宮　ほんにマア、此やうにお醉ひ遊ばすといふ事が……モシ、尾上之助さま、父上より下されましたこのお藥、おあがりなされませ。

小源　モシ〳〵、お藥でござります。

トこれにて尾上之助、目を覺まし、茶碗を取つて、こなしあつて

尾上　なんぢや、こりや酒の醉ひを醒ます藥のかほりぢや。此やうな物を、何奴が服まさうとしをるのぢや。野暮な奴ぢやなア。

ト茶碗を抛り出し

サヽ、酒を持て〳〵。

ト こなし。小源次、二の宮、氣の毒なる思ひ入れ。

小源　モシ、旦那樣、爰はお屋敷でござります。お心を慥かに

尾上　アヽ、左樣か。身共は又、化粧坂の揚屋ぢやと思うて。アヽ、よい心持ちで寐て居つたが、屋敷とは情ない。耳には木太刀、張り扇、目に見るものは穢い親仁、野暮らしい山の神の御面相、とんと拜みたうないぢや。兎角硬い物は、天國より傳來の、歌舞の菩薩の揚屋へ入り、近う寄つて御緣の結び、だいて淫槃の玉の床、その睦言のお經文の有り難さ。イヤ、堪つたものでは

ト 手を突いてゐる小源次を見て

これは先生、其やうに手を突いて、つくばいの手水鉢とは、エヽ、野暮めが。

ト 扇にて小源次の頭を叩き、現なきこなし。小源次氣の毒なるこなし。二の宮、ムツとして

二宮　モシ、尾上之助さま、女房の聞く前、廓の噂、聞きたうもござりませぬ。アイ、野暮らしい山の神は、其やうな事は承りませぬ。

ト 悋氣のもやう。

尾上　南無三、北の方が在しますとも知らず、一大事を申したわえ。ハヽヽ、併し、それがお氣にさはつたなら、我れらは入り聟、只今にてもお拂ひ箱を頂戴いたしたいぢやて。そこで以て、直さ

ま彼の、ありんす國へ宗旨を替へるのぢや。

二宮　すりや、子仲まであるわたしをお捨てなされて、その傾城と、あなたはお添ひ遊ばすか。

尾上　さればサ、戀は思案の外とは、爰らを申す事かな。

ト二の宮ズッと立つて、向うへ行かうとするを、小源次とめて

小源　これはしたり奥樣、血相かへて、あなたはいづれへ。

二宮　サ、尾上之助さまのお馴染みなされた、女郎に逢うて恨みの丈を。

小源　これははしたない。モシ、傾城は賣り物買ひ物。殊に只今仰しやつた事は、御酒興の上の戯むれ事、必ず御本心と

二宮　ぢやというて、わたしや腹が立つわいな〳〵。

尾上　ハヽア、何かな、奥樣が嫉妬にて、彼の傾城と後妻打ちの狂言の催ふしかな。イヤ、これは拜見いたしたいっ。併し、シテ方は彼奴めであらう。奥方はワキをお勤めなされい。

二宮　アレマア、あのやうな事を

ト尾上之助の側へ駈けより

モシ、我が夫、あなたは何と御意遊ばしまする。

ト こなし。小源次隔て

小源　サ、其やうに仰しやる程、却つて御酒が

ト祐信へ思ひ入れあつて

大殿様のお聞きの前、あなたのお爲に、ナ、御合點でござりまするか。

二宮　サ、わしも嗜んではゐるけれど、今も今とて子仲まである、わたしを捨てゝ傾城を

小源　サ、それも全く御酒の科、醒めての上にて兎も角も。それまであなたは、まづ／＼奥へ。

尾上　イヤ、彼れめも廓の所譯を見習うて、なか／＼裁くぢや。して見れば、傾城といふものは、偉いものぢやてなア。

二宮　アレ、二言目には、あのやうな事を

小源　ハテマア、奥へお入りなされませ。

ト合ひ方、鼓の調べにて、小源次無理に二の宮を連れて奥へ入る。此うち祐信、始終本を見てゐる。尾上之助、祐信の側へさし寄つて

尾上　親仁樣。相も變らず本と首引きでござりまするが、さて御覧なさるは、いかなる書物にて候ふな。

祐信　悴、ハテよい機嫌ぢやな。いま身共が讀んでゐるのは、史記の韓信が傳ぢやて。

尾上　ハヽア、恐れかんしん、市人の股を潜つたによつて、頭へ金の冠り、玉の冠りを戴いたと申すやうな譯でござりまするかな。

祐信　いかにも、楚王に封じられた時は、金の冠り、玉のかざしも戴いたであらうかえ。

尾上　なんと親人、左樣な書物は捨小舟となされて、細見なぞを御覽じたが、よからうずるにて候ふ。

ト扇拍子、狂言詞にてこなし、

祐信　ハテ、聞き馴れぬ書物ぢやが、して、その細見と申す書は、いかなる事を記したものぢやな。

尾上　イヤ、これは近頃無學文盲な親人、およそ大磯の廓に於て、粋の骨頂を呼ばるゝ、この尾上之助が養父には、ちと受取り悪い。なんと親人、身共と緣をお切りなされてはどうでござりませう。拙者はその史記傳より、勘當の方が望みでござるてな。

祐信　ムウ、酒興に事よせ、變つた願ひ。勘當が望みとは、そりや又なぜ。

尾上　なぜの神や雷門の御不審は御尤も。ハヽヽヽヽ、近頃申し憎いが、拙者、女郎と、二世の契約いたしました。

祐信　そりやよからう。この曾我の家は、元より其方に遣はしたものぢやによつて、娘の二の宮を去りこくつて、傾城を奥に致すとも、又は妾に抱ゆるとも、勝手におしやれ。ハテ、氣の狹い。それ

をナニ勘當に及ぶ事か。

ト思ひ入れ。尾上之助こなしあつて、

尾上　イヤ、拙者めは、町人になりたい願ひ。

祐信　よからう。この屋敷を町家にしつらへて、賣買の渡世いたすも、また一興であらうかえ。

尾上　イヤ／＼、坊主になりませうか。アヽコレ、なんぞ面白い身の上が……いつそ爰で遊女屋を致さうか。

祐信　それも一段とよからう。

尾上　イヤ／＼、それよりは、盗人になつて、人の寶で女郎買ひ、これに極めませう。

祐信　そりやよからう。切取り强盜も武士の習ひ。さのみ恥にもなるまいて。

ト尾上之助思ひ入れあつて

尾上　すりや、どうあつてゝ、御本心、かほど惰弱な某を

祐信　縁切る事は罷りならぬが、して又何ゆゑ、それ程までに勘當を

尾上　願ふは卽ち

ト前幕の文と草履を袱紗に包みしを出し

この品ゆゑに。

ト前へ置く。祐信取上げ、文を見る。この時、上の屋體の障子を明け、二の宮窺ふ。祐信思ひ入れあつて

祐信　ムウ。すりや悴には、この品ゆゑに。

尾上　なんと親人、これではよもや御勘當、なされずばなりますまいが。

ト思ひ入れ。合ひ方變る。

祐信　すりや、いよ〳〵噂に違ひなく

尾上　仔細は荒まし御存じならん。めぐり〳〵てこの文が、玄蕃之丞の手に渡り、不覺を取りし尾上之助、それを恥辱と存ずるも、刀の手前、武士の悲しさ。兩腰捨つれば何これしき、笑うて濟ますが町家の習ひ、その町人が羨やましく、是非とも身共は勘當うけて

祐信　この文ゆゑに其方が、恥辱を取りし上からは

ト思ひ入れあつて振り返る。二の宮と顔見合せ、これにて二の宮障子を閉てる。祐信こなしあつて

勘當いたす事、罷りならぬ。

尾上　エ。

ト思ひ入れ。

祐信　一旦養子の尾上之助、この家を出すこと罷りならぬ。左樣心得ておゐやれ。

ト尾上之助思ひ入れあつて

尾上　モシ、親人、拙者めはそれなる草履で、岩藤どのに、諸侯列座のその中で、打たれました。打ち据ゑられてオメ〳〵と、生き面晒す尾上之助、あなたの養子になされては、曾我の家名が穢れませうが。

祐信　イヤ、苦しうない。コレ、いま讀みさした史記の中にも、漂母に一飯を乞ひ、市人の股を潜りし韓信は、恥を捨てゝ堪忍の、二字を守つた故にこそ、漢王高祖を助けて、四百餘年の基を開き、その身も果ては齊王より、楚王に封じられしとある。して見れば、恥と思へば恥、心を廣く持つ時は、さのみ不覺にもなるまいかえ。

ト思ひ入れ、尾上之助こなしあつて

尾上　ハテ、日頃に似合はぬ親人の……然らば此方より、養父を勘當仕る。拙者は此まゝ

ト門口へ行くを、祐信入れ替つて門口を締めて

祐信　イヽヤ成らぬ。

尾上　すりや、どうあつても拙者をば

祐信　不足であらうが曾我の所領は、是非とも其方に。金輪奈落この家は出さぬ。左樣心得、思案をしやれ。

尾上　左樣あつては親仁樣、この二品の納まりが。

祐信　この二品の納まりは

ト思ひ入れあつて、そこにある竹筒の菖蒲を取つて

筒に活けたる花あやめ。

尾上　お心ありげな花の謎、根は泥水に穢れても、散り際清きあやめ草。

祐信　あやめは宇佐美尾上之助、卽ち曾我の竹筒へ、養子の其方。湛えし水は斯くいふ祐信、花が無ければ不用な水。また水が無ければ、花の精氣は養はれぬ。爰が下世話のいほ合ひ持、花あつて水あつて花。花、筒を離れず、曾我に居て、穢れし恥辱を雪ぐやう。思案をしやれ、尾上之助。

この二品の納まりは、身共の胸に。

トよろしくこなし。尾上之助思ひ入れあつて

尾上　イヤ、その水よりも町家の水、澄まず濁らず、出ず入らず。

祐信　ムウ、すりや、どうあつても町人が
尾上　水に合うたる花あやめ。
祐信　それ程までに望みとあらば、思案の上にて兎も角も。
尾上　すりや、望みの通り、勘當なされて。
祐信　否やの返事は後方までに、其うち其方は
尾上　武家と町家の水ばなれ、身の置き所も
　　　　ト思ひ入れあつて
　　　幸ひあれなる辻駕籠にて
祐信　しばしは夢を水こへて
尾上　いづれあやめの花の謎
祐信　解くか。結ぶか。
尾上　親子のえにし。
祐信　まづそれまでは
尾上　親仁様。

ト　つか／＼と寄つて駕籠へ乘る。

祐信　後刻返事を

尾上　相待ちまする。

ト、チヤンと唄のかゝり、獨吟になり、これをキツカケに尾上之助、駕籠の垂れを下ろす。祐信思ひ入れあつて、料紙箱よ　糊壺と紙を出し、舞臺の神棚、柱に掛けし札箱を封じる事。此うち下座より鴈助、丹下、左仲太出てくる。小短くあつて唄一くさり切れる。祐信、二重舞臺に手を組み、思案の思ひ入れ。

鴈助　すりやお二人は、岩藤さまの御家來にて

丹下　甘縄丹下。

左仲　片瀨左仲太

ト　兩人、懷より一腰を出して差す。

丹下　駕籠舁きとなつて、この家へ足を附けたるも、草履の遺恨を根に持つて

左仲　岩藤どのに仇を報はん心底の、有るか無きかを探らん爲。

鴈助　そりやお氣遣ひなされまするな。元より岩藤さまの間者となつたるこの鴈助、箸の轉けた事まで

も、早速注進いたしまする。併し、折角入り込んだお二人方は、いま暫らく彼處に忍んで。ナ、モシ。

ト鴈助、兩人に囁く。兩人こなしあつて下座へ忍ぶ。祐信思ひ入れあつて

祐信　誰が爲の名なれば斯くは惜しむらん。果敢なきものは武士の、一世の恥辱も悴が不運。家の汚名を、雪ぐ仕やうは

ト刀を拔き、思ひ入れあつて

オヽ、さうぢや。

トまた獨吟になり、懷中したる以前の草履にて寢刃を合せる事よろしくあつて、刀を納め、こなしあつて舞臺へ下りてくる。この仕組み、いつぱいに唄切れる。門口に窺ふ鴈助、内へ入り、祐信と顏見合せ

鴈助　大旦那樣、まだこれにお出でなされまするか。さて最前も、お家のお爲を存じまするゆゑ、尾上之助さまの事を申し上げましたところ、御立腹でござりましたが、それを恐れて口をつぐんでるも、この身の不忠と存じまするゆゑ、お心に逆らふかは存じませぬが、申し上げまする。一體あの尾上之助さまのやうな白痴者が、どこの國にござりませう。いつぞやも扇ケ谷にて、岩藤さ

まへに滿座の中にて、品もあらうに草履を以て、ぶちのめされた仕返しを、しやうともなさらずに揚屋遊びの酒浸し。腹一ぱいの放埒惰弱を、しつくしたその跡で、勘當うけて町人になりたいなぞとは、あんまりあなたを踏みつけた仕方。侍ひとはほんの名ばかり、野郎の刀掛けとは、あの尾上之助さまの事。あのやうな者は、早く梵天國となされて、御實子、祐九郎さまを呼び戻し、世嗣にお立てなさるれば、曾我のお家は萬代不易、なんと大旦那樣、それに御料簡をおきめなされては、如何でございませう。

ト たきつける。祐信思ひ入れあつて

祐信　成る程、其方が申す通り、曾我の家名を穢せしのみか、身共を侮り、勘當望む憎くき悴。

鴈助　左やう／＼、誠に武士の風上にも、置かれぬ養子は少つとも早く

祐信　勘當にては腹が癒ぬ。豫ねて思案は、親が手にかけ

鴈助　イヤ、天晴れな思し召し。醒め切らぬ酒の醉ひ。乘り物越しに

ト 思ひ入れあつて、長押に掛けたる槍を手早く取つて來り

この手槍にてグツスリと

祐信　年こそよつたれ、覺えの手の內、無明の眠りを覺ましてくれうワ。

鴈助　併し病氣のあなた樣、下郎が代つて

ト槍押ッ取つて駕籠へかゝるを、祐信手早く槍を奪ひ取る。『それを』とかゝる鴈助を、石突にて見事に當てる。これにて『ウン』と悶絶して、タヂ／＼となつて鴈助、上の池へ落ちる。水の音、この途端、駕籠の垂れを刎ねあげる。祐信、槍を構へる。一度の仕組み。尾上之助、水上下の形に着替へてゐる。これより小太鼓の合ひ方。キッとなつて

祐信　保元平治の昔より、ついに不覺の名を取らず、磨き上げたる我が武士道、放埒惰弱のおのれゆゑ曾我の家名を穢せしのみか、この程身共に無禮の有り條、今こそ思ひ知らせてくれん。親が恨みの槍先を、その胸板に

ト　ぢり／＼と駕籠に詰めよる。尾上之助、突かゝる、覺悟の體、兩人よろしくあつて、祐信、尾上之助を突く振りにて、早速に身をかはし

受けて見よ。

ト振り返つて上の障子を貫く。これにて障子へ血煙り立つ。尾上之助見て

尾上　ヤ、障子に立つたる血煙りは

祐信　娘の二の宮。

尾上　すりや、現在あなたが

トつか／＼と寄る。祐信、槍を引く。この途端、障子倒れる。二の宮、手を負ひ、苦痛の體。

祐信　親が手にかけ、まツこの通り。

ト三人顏見合せ、ヂツとこなし。これより草笛入りの合ひ方。

二宮　お手にかゝるは元より覺悟。よしなき文がめぐり／＼て、曾我の家名を穢せしも、夫の恥辱もこの身の業、聞くと其まゝ命を捨て、親夫への云ひ譯と、思へど流石恩愛に、引かれて今日まで、おめ／＼と、生き延はりしこの二の宮。最前夫が父上に、勘當お願ひ遊ばすを、立ち聞く時のその辛さ。わたしが心を推量あつて、よう父上には此やうに、お手にかけて下さんしたなア。

ト思ひ入れ。祐信こなしあつて

祐信　現在我が子を手にかけしも、養子の其方へ養父が義理、最前かけし花の謎、今こそ親が云うて聞かす。勘當望まぬ祐成時致、勘當望む尾上之助、腹は變れど河津が胤、望まぬ二人を勘當なし、ひたすら望む其方を、勘當せぬも武門の義理。二人の者は幼少より、敵祐經討たんずと、思ひ込んだる十八年、時こそ來つて當月下旬、富士の裾野の御狩倉。この圖を外さず本望をと、思へど曾我にある時は、假の親たる祐信が、身にふりかゝる難儀を思はゞ、大事の場所にて後れやせん

と、さてこそ勘當なしたる兄弟。其方も河津が亂なれど、一度久上で出家なし、俗緣離れて曾我への養子、この祐信が世嗣と定めし上からは、品によつては娘はおろか、家に代へ、身に代へても、なか〳〵勘當思ひもよらず、コリヤ、氣遣ひせずと遺恨の岩藤、討つて恨みを、晴らせよ悴。

ト思ひ入れ。尾上之助、こなしあつて

尾上　こは冥加なき親人のそのお詞。養子の我れゆゑ親人へ、御難儀かけてと無念を堪へ、わざとこの身を惰弱になし、勘當うけて思ふ存分、草履の遺恨を晴らさんと、思ふ拙者が心底を

祐信　疾より承知のこの祐信、其方と親子の緣切らば、年老いほれて命を惜しみ、家をかばひ、河津が悴三人を、勘當せしと世の人や、草葉の蔭の祐安へ、面はづかしいこの祐信。昔が今に至るまで武家の盛衰珍らしからず。今月今日曾我の家名、斷絕なすも武門の意地づく、少つともいとはぬ尾上之助、矢張り身共が悴に變らぬ。草履の遺恨を存分に。

尾上　晴らせよ御意ある上からは、お詞そむくは却つて不孝。おのれ岩藤ズタ〳〵に、切り苛なんだその上にて、腹かッさばきこの程の、汚名をやはか雪がで置かうか。さはさりながら妻の二の宮も、かゝる最期をさせまい爲、離緣を望めど親人の、お許しなきゆゑ不便の成行き。

二宮　御離緣あつては猶更に、生きてゐられぬこの二の宮。今日まで長らへ居りましたを。必ず未練と

お叱りなう。未來も必ず夫婦ぢやと、云うて聞かして下さりませ。そのお詞があの世へ土産。

祐信　元の起りは娘めが、なしたる業と思ふほど、憎うて〳〵この胸が、沸えかへるほど有やうは、可愛さあまつて手にかけた、親が心を推量して、彼れめが末期の願ひをば、叶へてやりやれ、尾上之助。

ト この時分より小源次、祐太郎を抱き、二重の上に。雁助、池より這ひ上がり、様子を窺ふ。尾上之助こなしあつて

尾上　斯くまで深き養父の御恩、未來永々親子と生れ、いつの世にかは御恩を報ぜん。これより直さま岩藤が、館へ切り入り、善悪とも、所詮生きては歸らぬ某、跡より追ひつき死出三途、手に手を取らん、女房二の宮、氣遣ひせずと、最期を清う。

二宮　嬉しうござんす。我が夫、未來で

ト 懐劍を抜き放し、咽喉へ突き立てようとするを

小源　アモシ、この世のお別れ、若様に

ト 連れて出る。皆々思ひ入れ。

二宮　逢うては却つて迷ひの種。

祐太　あれ、母樣が

小源　モシ。

　　ト思ひ入れ。尾上之助こなしあつて

尾上　只不便なは祐太郎、兩親もなき孤兒の

二宮　賽の河原をこの世から、父よ母よとさまよひて

祐信　假の浮世に生をうけ

尾上　いらざる武士の子となるも

祐信　思へば因果な

三人　幼な子ぢやなア。

　　ト祐信、祐太郎を抱き、左右へこなし。三人よろしく思ひ入れ。この時、雁助うなづいて、一散に向うへ入る。

祐信　さはさりながら行く〳〵は、紛失なしたる寶を詮議し、曾我の家名を引起す、血筋は即ちこの小悴。無益の嘆きは未練の至り。

尾上　これより直さま岩藤が、屋敷へ仕掛けて

祐信　親が覺えのこの業物、寢刃は兼ねて合はせ置く。これにて玄蕃を見事に致せ。

ト一腰を渡す。尾上之助押戴き

尾上　こは有り難き門出の賜物、これぞ冥土のよき土產。直さまこれより

小源　拙者もお供を

祐信　オヽ、勇ましい。やがて吉左右

トよき時分より丹下、左仲太、窺ひゐて、この時一腰を拔き

兩人　覺悟。

ト尾上之助祐信へかゝるを、立廻つてキッと捕へる。小源次、祐太郎を抱きあげ

小源　其奴は正しく岩藤が

祐信　聞者の曲者。

二宮　父上、我が夫、これが、この世の

ト苦痛の體。

祐信　不便や娘が

尾上　いまはの際。

ト兩人ほろりと思ひ入れ。丹下左仲太ふりほどいて切つてかゝるを、尾上之助、丹下を切り下げ、祐信は手早く槍を取つて左仲太を貫く。兩人立ち身にて苦しむ。

祐信　門出の血祭り。

尾上　直さまこれふり

ト兩人、刀と槍を引く。丹下左仲太、見事にかへる。尾上之助、刀を拭く。祐信、槍の石突をトンと突く。この途端、木の頭。

祐信　行け。

尾上　ハッ

トかけりになり、二の宮落入る。小源次駈けよつてこなし。兩人顏をそむける。この仕組みよろしく

ひやうし　幕

幕引きつけると、時の鐘のツナギ。

（作者　勝井源八）

第一番目　四建目の切

平塚宿の場

馬入川の場

役名――尾上伊太八前名下部初平實ハ鶴賀時次郎。下部、小源次。槍持ち、官助實ハ十右衛門悴、五郎吉。牛島主税。下部、萬八。同、勘次。同、郷內。同、權藏。同、權平。槍持ち、傳六。梅澤屋小平次。同、長太。按摩釜市實ハ雁助。蝮の仁太郎。雲助、八。同、六。同、松。同、又下女、お蘭實ハ小藤太娘浦里。下女、お霜。同、お吉。

知らせの柝直ると、直ぐにドン〳〵になり、向うより侍ひ大勢、袴、股立ちの形にて走り出て來る。

皆々 喧嘩々々。

ト東西へ走る。直ぐに向うより權平、紺看板、奴の形。小源次、前幕の形にて摑み合ひ、出てくる。

權平 いづれも樣、お騷ぎなされまするな。狼藉なしたる尾上之助、主人には手も負はせず、大勢に取かこまれ、詮方盡きてその場で切腹。

そりや、爰でも喧嘩ぢや〳〵。

小源 ヤヽヽ、すりやお旦那には、御切腹にて、御存念達せずとや。

權平 尾上之助が家來のおのれ、繩かけて屋敷へ引く。

皆々 我れ〳〵も共に加勢を

小源　小癪な奴等。御主人切腹なされし上は、この世に用なきこの下郎。主人の追ひ腹、冥土の道連れ覺悟ひろげ。

皆々　面倒な。討つて取れ。

ト禪のツトメになり、小源次、大勢を相手に立廻りあつて、此のうち幕の引附けより放れ馬一匹駈けて出てくる。これにて皆々この馬に驚き、逃げて入る。小源次、馬の口をしつかと捕へ

小源　幸ひの放れ馬、主人の樣子を知らせの早打ち。

權平　うぬをやつては。

トかゝる。立廻りのうちに小源次、馬にヒラリと乘り

小源　木の根石高きらひなく、直ぐに打てば五十丁。

トまた立廻つて

權平　なにを。

ト縫ぐるみにて打つてかゝる。小源次、これを引ッたくり、鞭にして

小源　さうだ。

ト禪のツトメになり、一散に向うへ入る。權平、馬の尾筒に取つき、追ひかけ入る。これにて知らせ

の柝直ると、直ぐに馬士唄になる。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、向う杉戸、軒口に富士大山江の島の月參り札をかけ、下手に床几、酒樽、いろ〳〵の肴を吊し、その外、道中記、鼻紙、藥の看板なぞ、上の方に白壁塀、丸の中に、梅澤屋と書き、この側に二八の看板、下の方に東海道平塚宿と書きし傍示杭、すべて立場旅籠屋のかゝりよろしく、驛路の音、馬士唄にて幕明く。

ト爰に小平次、老けたる亭主の形、酒徳利ちろりなどを洗つてゐる。長太、息子にて、魚を燒いてゐる。上手の床几に旅人の仕出し、酒を飮んでゐる。下の床几に又、松、六、八、いづれも雲助の形にて腰をかけ、お霜、お吉、留め女にて、給仕をしてゐる。東西より旅人の仕出し行き違ふ。

小平　お入りなされい〳〵。

しも　モシ、お泊りなされませ〳〵。

きち　モシ〳〵、お泊りなさい。先へお出でなすつても、馬入がとまつて居ります。

仕出　おらア定宿がある〳〵。

きち　お定宿もござりませうが、モシ、私しどもへお泊りなされませ。

仕出　エヽ、しつこいお多福だ。

ト振り切つて行く。

きち　エヽきいた風な。定宿も氣が強い。辻堂か松の木の下が定宿だらう。

又　お多福と云はれたが、大分癪にさはつたな。

松　可哀さうに、こんな好い器量な者を捕まへて

きち　ほんに彼奴は、盲目かも知れねえよ。

又　おきやアがれ。

トまた下座より侍ひの仕出し、供を連れて出てくる。

しも　お泊りなされませ〳〵。

侍ひ　イヤ〳〵、身共は急ぎの道中、なるたけ行かねばならぬ。

又　モシ〳〵、先へお出でなすつても、この間の出水で、馬入はとまつて居ります。

六　なんならお泊りなされませ。

侍ひ　イヤ、川はとまつても、狩場の御用があるゆゑ、鎌倉諸大名の通行しげく、侍ひは通すといふ事ぢやが。

家來　サア、旦那、參りませう。

　　ト向うへ入る。旅人の仕出し、ちろりを出し

旅人　オイ、もう一つ頼みます。

小平　ハイ〳〵、ソレ、お銚子だと仰しやるよ。

しも　ハイ〳〵。

　　トちろりを取りに行く。

旅人　肴は外に何があるの。

しも　ハイ……旦那さん、外にお肴は何がござりますえ。

小平　へイ、鰈に蓮の煮つけ、鰑に豆腐の吸ひ物、鰹の頭のこくせうでござります。

旅人　怪しからぬ肴ばかりあるの。精進物はないか。

長太　筍に切干しの煮たのがござります。

旅人　そんならそれを八文ばかり下さい。

同　わしには饂飩を一膳下さい。

小平　ハイ〳〵。

トこれをお霜運ぶ。

松　モシ旦那方、藤澤まで歸り馬だ。廉く行きやせう。

旅人　イヤ、馬はいりませぬ。

又　そんなら駕籠はどうでござります。またいで行きやせう。

旅人　またいで行かれる程の所なら、馬にも駕籠にも乘らずとよい。

しも　いつその事、お泊りなされませ。

きち　もう一里もお出でなさると、日が暮れますよ。爰へお泊りなされませ。旅籠もお廉うござります。蒲團も綺麗にござります。お望みならばお寢間のお伽も、相對づくで致します。

旅人　イヤ、其やうに伽を致されては堪らぬ。

きち　オヤ／＼、そんな事を仰しやらずと、お泊りなされませ／＼。

六　お泊りが否なら、馬でも駕籠でもお乘りなされませ。

旅人　イヤ／＼、矢ッ張りわしが膝栗毛で急ぎませう。

同　爰はいくらだね。

小平　ハイ／＼、酒が三合、お肴が三つ、饂飩が一膳、百三十三文でござります。

旅人　これは大分奢り過ぎたわい。
　　　　ト錢を拂ひ
しも　ハイ〳〵、御機嫌よう。
　　お世話でござりました。
　　　　トこれにて仕出し、下座へ入る。
小平　二人ながら、見世に鼻を揃へてゐて、先刻から一人もお泊りを取らぬ。不器用な奴等だ。
長太　どいつも〳〵、役に立つ奴は一人もない。あのお園めは、先刻から見えぬが、どこへ行きやアがつた。
小平　彼奴も出ると、滅多に歸らぬ奴だ。
長太　ちつとお前も、小言を云つておやりなされませ。
しも　イエ〳〵、お園どんは、わたしが高麗寺前まで用を頼んで、その歸りに、油も取つて來て下さんせと頼みましたから、もう今に歸りませう。
きち　若旦那さんは、お園どんがちつと見えないと、苦勞になさる。日頃から附けつ廻しつ。ほんに腹の立つ、惡性な旦那づらめ。

長太　コレ〳〵、滅多な馬鹿を云ふな。

　ト小平次へ思ひ入れ。

きち　イヽエ、大旦那もお園どんを目がけるし、親子して間がな透がな

小平　また馬鹿を吐かすか。

ぎち　エヽ、腹の立つ〳〵。

　トぷり〳〵する。

松　爰の内は、酒ばかり賣るかと思つたら、燒き餅も賣るさうだ。

又　この燒き餅はまづさうだわえ。

皆々　此奴は違えねえ。ハヽヽヽヽ。

　ト馬士唄になり、向うよりお園、小娘の形、木綿やつし前垂れがけにて、油の一升樽と、通ひ帳を提げて出て來る。跡より釜市、頭巾、一本差し、按摩にて、杖をつきて出て來り

釜市　オイ〳〵、そこへ行くのは、慥かに梅澤屋のお園さんと、嗅いだは、ひが鼻か。

その　オヽ、昨日見えた按摩さん、よう知れた事なア。

釜市　知れなくつてどうするものだ。跫音から聲音まで、しかも美しいといふところまで差して見せる

のぢや。

その　そこは少つと當らぬわいなア。

釜市　嘘ばつかり。

ト此やうな事云ひながら、兩人本舞臺へ來る。

雲助　そりや、歸つて來た〳〵。

きち　オヤ〳〵、按摩さんと道行だね。

長太　コレお園、今までわれはどこへ行つて居たのだ。ちよつと使ひに出しても、道草ばかりくつてゐて、滅多に歸らぬ。また道で、方々の若い衆にからかつてゐたのか。

小平　一體よく男にからかひたがる。からかつてもよい。内の者には少つともからかはぬが、これから男にからかひたくば、悴もおれも男だ。内でからかへ。隨分からかはれてやりたい心ぢや。

長太　たま〳〵此方からからかへば、ツン〳〵としてからかはせぬ。これから毎晩、おれがからかはれねばならぬ。

小平　われがからかふなら、おれもからかふ。

長太　親子してからかふぞ。親もからかひ、子もからかひ。

小平　親からかひに子からかひ、子からかひに親からかひ。
長太　からかひ〱三からかひ、合せてからかひ六からかひ。
皆々　とんだ外郎賣りだ。
きち　からかひたがらぬお園どんにからかひたがらずに、からかひたがれたいわたしをからかひなさい。
小平　また吐かすか、阿房め。
きち　阿房くらべがして見たい。
しも　コレ、お園どん、油取つて來くおくれかえ。
その　ハイ、取つて參りました。
長太　その油のやうに、一日のろ〱とろ〱と、怠け歩く恩知らず。コレ、われは一體義理を知らぬぞよ。いつやらの事であつた。われは行き通りの旅人。母親と二人、この內へ泊り、その晩から母親が病氣附き、遂には取つめ、ガックリ往生、捨てゝも置かれず、近所の寺へ葬むり、連れて來たわれも、遣り所が無さに、親仁どのへ相談して、年季あま同樣の居候ふぢや。
小平　素性は乞食か非人か知れぬ者なれど、親に離れて行き所があるまいと、こちの內へ置いてやるもこの親が下心は、おれがてかけにでも…………イヤ、手をかけてやるのに、おれが思ふやうにも

ない。

長太　その義理を知らず、おれが何か云ふと、ツンツンしをる。その根性を叩き直して

　　ト立ちかゝるを、お霜とめて

しも　アヽモシ、お前が折檻なされたとて、日頃が日頃のなされ方、誰れもきく事ぢやござりませぬ。小言云ふなら、云ふお前の身から、お嗜なみなされませ。

長太　此奴がくヽ、おのれ、主をやりこめたな。

松　餘ッほどの尻尾を捕まへたと見えるわえ。

又　噂を聞けば、毎晩親子して、内の女の所へもぐるさうだ。

八　親ももぐろ、子ももぐる。

六　渡し場で芋屋が轉んだやうだ。

長太　貴樣達まで同じやうに、おれを馬鹿にするな。

松　此方で馬鹿にしなくつても、其方の生れつきだ、仕方がねえ。

長太　何だと吐かす。

小平　コレくヽ悴、おまりてまへが、お園にのろく云ふゆゑ、そんな事を云はれる。ちと厳しい位に叱

るがよい。

長太　ヤイお園、これから使ひに出たら直ぐと戻れ。

その　ハイ〱、御免なされませ。この上きつと早く戻ります。

長太　まだその上に、一日に五人づゝ、お泊りの宿を引けよ。一人でも欠けると、その代りに

松　また夜這ひに行くのであらう。

皆々　こりやア大當りだ。ハヽヽヽヽ。

長太　なぜ此奴等は笑やアがる。

皆々　をかしいから笑ふのだ。

長太　何がをかしい。

ト立ちかゝる。

皆々　そりや、怒つた〱。

長太　此奴等、どうするか。

ト　これにて皆々下座へ逃げて入る。小平次、お霜、お吉、長太をとめて、皆々奥へ入る。釜市も探り探り入る。お園残り

そのほんにマアわしが身には、どのやうな罰が當つてゐる事やら、只さへ辛い旅の空、杖柱とも思ふ母さんに死別れ、女子の身のよるべなさ、いかに世話して置くというて、云ひたいがひな無理ばかり、これも矢ッ張り身の因果。この行く末は、どうなる事ぢやぞいの。

ト身を悔む思ひ入れ。馬士唄、驛路の音になり、東の口より伊太八（前幕の初平）半天股引き、大小道中羽織、切り草鞋の形。勘次、若黨。萬八、草履取り。宮助、紺看板の槍持ちにて、印附きの槍を擔ぎ、小揚げ人足、鎧櫃を擔ぎ、皆々旅形にて出て來る。

伊太　なんと家來ども、誠に天下の御威勢といふものは有り難いもの、とまり川でも、何の苦もなく渡つたが、爰らが卽ち、兩腰の有り難いところぢや。

宮助　左樣でござります。殊にこの度、俄に御出世遊ばした旦那樣、その勢ひやらでお天氣もよろしく此やうな結構な事はござりませぬ。

勘次　イヤ、私しども〻旦那樣の御運に、あやかりたいものでござる。

伊太　さればサ、思ひがけない夢のやうな出世、昨日までも中間で居つた身が、いはゞ仲間同然なお身達に、旦那さま〳〵と云はれる度每、腋の下から冷たい汗が出るやうな。ハヽヽヽ。

宮助　時に今夜は、どちらへお泊りでござりまする。

ト伊太八、空を見て

伊太　まだ八ツそこいらでもあらうか。小田原まで急がうではあるまいか。

萬八　それがよろしうござりませう。

ト此やうな事を云ひながら、舞臺へ來り、直ぐに、花道の方へ行かうとする。お園、伊太八の袖を捕へ

その　モシ、お泊りなされませ。

伊太　ヤイ〱、この女めは、武士の袖を引ツ張つて失禮千萬。兩腰が目に見えぬか。不埒な奴だ。下さがれ〱。

ト手ひどく叱りつける。お園悔りして飛びのき

その　ハイ、御免なされて下さりませ。

トおづ〱する。

萬八　官助、見やれ、美しいものだの。

官助　さうサ、おじやれには惜しいものだ。

勘次　づぶ山々と來てゐる。

ト これにて伊太八、つく〴〵見て

伊太　イカサマ、所に似合はぬ素敵な姐えだな。

ト我れを忘れしこなし。

イヤハヤ、あてやかな女もあればあるもの。

ト伊太八、お園に見惚れながら花道へかゝる。お園、氣味惡く跡ずさりする。伊太八、ソロ〳〵舞臺の方へ戻つてくる。家來、これに附添ひ來り

勘次　お旦那〳〵、何しにお立歸りなされまする。

伊太　何か少し用があつたが、ハテ、何であつたか。

萬八　モシ〳〵、小田原までは、まだ四里もござります。

三人　お急ぎなされませ〳〵。

ト伊太八、お園の顏を見ながら

伊太　もう何時であらうな。

宮助　八つ半でもござりませう。

伊太　イヤ〳〵、七つ過ぎであらう。

勘次　へイ、左様でござりませうか。

伊太　然らば四里の道はむづかしいが、爰へ泊らうかしらん。

　　ト此やうな事を云へど、お園怖がり、聞へぬ顔をして、脇の方へ寄つてゐる。

　おれは餘ッほど草臥れたて。

萬八　左様なら、馬にお乘りなされませ。

伊太　イヤ〳〵、馬は嫌ひぢやて。

勘次　然らばお駕籠を申しつけませう。

伊太　駕籠は却つて草臥れるものぢやて。

官助　そんなら、どうなされまする。

　　ト伊太八、思ひ入れあつて

伊太　アイタヽヽヽヽ。

　　ト俄に腰を押へて思ひ入れ。

三人　どうなされました〳〵。

伊太　何だか急に蟲がかぶつて參つた。

官助 それは怪しからぬ事。幸ひのこの洒見世、まづ〳〵この床几へ。

ト皆々介抱して伊太八を床几にかけさせる。

伊太 イヤ、この分では、ツイちよつとは納まるまい。アイタヽヽヽ。

官助 コレ〳〵女中、さしかゝつての御病氣、少し座敷が借りたい。

伊太 事によつたら泊らずばなるまい。

ト これを聞き、お園喜び

その それはマア〳〵、有り難うござります。どうぞお泊りなされて下さりませ。さう致さぬと、私しは主人に叱られます。

勘次 サア、事によつたら泊りにもならう。

伊太 イヤ、どうせこれは泊らずばなるまい。

その それは有り難うござります。モシ〳〵、お泊りがござります。

ト これにて奥より小平次、長太、お霜、お吉、出て來り

小平 これはどなたも、お早うござります。

長太 ソレ、お洗足を持つて來いよ。

その　ハイ〱。

ト水を盥へ汲んでくる。

長太　これはしたり、お湯を汲んでくるものぢや。エヽ、何をさせても不器用な。

伊太　アヽ、イヤ〱、おれは水が好きぢや。其まゝ持つて來い〱。

しも　サ、お御足を濯ぎませう。

伊太　イヤ〱、てまへには賴まぬ。コレ〱、てまへ洗うてくりやれ。

その　ハイ〱。

ト伊太八の足を洗ふ。伊太八、お園をヂツと見てゐる。

きち　サア〱、お荷物を此方へお出しなされしませ。

小揚　どうしてこの荷が、女に運ばれるものか。

きち　なんの、こればかりの物が。

ト輕々と鎧櫃を擔いで見世の隅へ置く。

勘次　イヤ、怪しからぬ丈夫な女だ。

小平　隨分三十位は擔ぎます。その代り、飯は太層食ひます。

ト官助、軒へ槍を立てかけ、皆々草鞋を取る。

しも　サ、あなた方も、お御足をお洗ひなされませ。

勘次　でも、盥がまだ明かぬ樣子。

萬八　旦那樣の足の洗ひやうは、長い事だ。

伊太　イヤ、身共は足を洗ふのが大好き、此やうな柔らかな手で、足を洗つてもらふのは、誠によい心持ち。併し、てまへに足を洗つてもらうては、罰が當りはせぬかしらん。

その　あのマア仰しやる事わいなア。

勘次　旦那は御腹痛は、御全快のやうに見えますが。

トこれにて伊太八、俄に顔をしかめ

伊太　アイタヽヽヽ、どうもまだ癒らぬ。

長太　左樣なら、奧で暫らく、お靜まりなされまし。

伊太　左樣いたさう。われ達も、これで休息しやれ。

長太　ソレ、お床を取つて上げ申せ。

しも　サア、此方へお出でなされませ。

ト長太、お霜、お園。伊太八を介抱して奥へ入る。

萬八　サア、これからは此方の體だ。

勘次　熱く燗をして、三合ばかりかけて下さい。

小平　ハイ〳〵。お肴は、酢蛸でもあげませうか。

萬八　蛸もよからう。イヤ、蛸といへば、今お旦那を泊めた女は、いゝ女だの。

勘次　さうサ、ずぶ大和屋といふ鹽梅だ。コレ姐え、今夜どうか話しはなるまいかの。

きち　隨分なるのサ。レコづゝはづみなせえ。

ト指を二本出す。

勘次　それで出來れば奇妙だ。

萬八　うまい事を極めたな。おれにも出來めえか。

きち　お前、蛸が好きなら、わたしではどうぢやえ。

萬八　それはあやまる。先刻の女なら二百はづまう。

きち　それもわたしが拵へてあげようわいなア。

萬八　一座廻しか。おやまるの。

きち　ハテ、灯を消しておけば、よいぢやないかいな。

ト此うち官助、無性に居眠り、たうとう床几の上へ寝てしまふ。

萬八　あのべら坊、見や、素敵に眠がる野郎だ。

勘次　海驢の子かも知れねえ。

ト小平次、皿とちろりを持ち

小平　サア、一つお上がりなされませ。

兩人　サア、始めろ／＼。

ト馬士唄になり、揚幕より主税、道中羽織、半天、股引き、大小。郷内、若黨。權藏、草履取り。傳六、槍持ちにて、道中人足一人、雨掛けの具足櫃を擔ぎ、跡より仁太郎、半天、腹がけ、脚絆、小風呂敷を脊負ひ、湯治歸りの形にて出て來り

仁太　これサ旦那、聞かねえ振りをして行く事はねえ。なぜおれが物を云ふに、挨拶をしねえのだ。

郷内　コレ／＼、わりやア先刻から、なぜそんなに大風な事を云ふのだ。

權藏　こいつア狂人かも知れぬ。とんだ奴だ。附くな／＼。

仁太　おれは狂人でも乞食でもねえのサ。おれが大風より、其方が大きな面をする事はねえ。借りるよ

しみがあるから借りやうと云ふのだ。五兩や三兩貸したといつて、好い筋だ。それを聞かねえ振りをするは、其方が乞食だ。

主稅　此奴が〳〵、云はして置けば樣々の痴言。身共はわれに金を貸すよしみはない。馬鹿な事を云ふ奴ぢや。

ト云ひながら早足に舞臺へ來る。仁太郞、同じく附いて來り

仁太　カウ〳〵〳〵、白を切らつしやるな〳〵。こんたも、わしも、人に云はれぬ暗い身の上、わしやア吹けば飛ぶやうな身の上だから、今にもお手にあつて、おれが舊惡をしやべつたら、こんたの身にも煙がかゝらう。そんなら、その口ふさぎの金轡、三兩や五兩ぢやァ廉いもの。貸して下せえ……ならねえか。返事をしろえ、二本棒め。

ト傳六、槍を軒へ立掛け、身繕ひして

傳六　この野郎め、先刻から默つて聞いてゐりやア、おらが旦那を、暗い身分だなんぞと吐かしやァがるが、そんな嚇しをくつてなるものか。イケふざけた野郎だ。

仁太　ナニこの折助め、うぬ等が知つた事ぢやァねえ。

傳六　イヽヤ知つた事だ。そんな强請りは今は流行らねえ。出直せ〳〵。

仁太　やかましいわえ。

郷内　イケ强情な野郎だ。

ト胸倉を捕へる。

仁太　うぬ等ア胸倉を捕めえて、おれを〆めるのか。サア、〆めろ〳〵。コレエヽ、どうせ體へひゞの入つた兄さんだ。うぬ等ア侍ひだといつて怖いものか。サア、〆めろ。殺せ〳〵。

傳六　うぬ、そのいけ口を。

ト側にある莨盆を仁太郎に投げつける。仁太郎、身をかはす。この莨盆、寢てゐる官助の頭へ當り、血流れる。これにて官助、寢惚けて起上がり、頭の血を見て

官助　ヤア〳〵、切つた〳〵。

トうろたへて騷ぐ。これにて皆々驚き見て

勘次　サア〳〵、濟まねえぞ〳〵。おれが仲間へ、疵を附けたぞ。

小平　お客へ疵がついては、此まゝでは濟みませぬ。

皆々　濟まねえぞ〳〵。

ト口々に喚く。

仁太　その相手はおれぢやアねえぞ。この槍持ちだ〱。

傳六　ナニおれが知るものか。疵をつけたのは、われだ〱。

勘次　なんでも相手は槍持ちどの、仲間へ疵がついちやア、此まゝぢやア濟まねえ。

萬八　どうとも斯うとも、譯を附けさつせえ〱。

小平　疵人を此まゝでは置かれぬ。早く譯を、お附けなされまし〱。

官助　ナニ、さほどで無い事。マア〱、靜かにして下され〱。

ト主税、小平次お吉の側へ來り

主税　コレ〱、貴樣は爰の內の、亭主と見かけてお賴み申す。身共は主用にて、道中いたす者。不慮の事にて、この家の見世先にて、仕出かしたる口論。何分こなたを賴むほどに、コレ、そこをよろしく、賴む〱。

小平　サア、私しの見世先で出來た事ゆゑ、此まゝにも置かれませぬが、折角のお賴み、挨拶を致して見ませう。

萬八　イヤ〱、誰れが挨拶でも、此まゝぢやア濟まされねえ。

小平　サア、そこをどうぞ內分で

勘次　ナニ内分で濟むものか。あんなに疵の附いた事が、旦那に知れちやア猶濟まねえワ。
萬八　コレ〳〵官助、われが心はどういふ氣だ。われも濟むめえが〳〵。
官助　ハテ、畢竟怪我のはずみで出來た事、何も濟むも濟まぬもいらぬ。此まゝ置いて下され〳〵。
萬八　エヽ、べら坊な男だ。此まゝにどうして濟まされるものか。
勘次　おいら達が好いやうにするから、マア〳〵、默つてゐろ〳〵。
兩人　サア、譯を附けろ〳〵。
きち　マア〳〵、靜かになされませ〳〵。

トこの時小平次、主稅に向ひ

小平　モシ〳〵、お侍ひ樣、こりや少々も金子をお出しなさらずば、この場は無難に納まりますまい。
きち　それ〳〵、金でなければ濟みますまい。
主稅　サア〳〵、身共も左樣に思ふて……然らば、南鐐一片も遣はさうか。
小平　とんだ事を仰しやります。人の頭を毀して、どうして二朱や一分で濟みますものか。
きち　燒繼ぎ屋に見せても、二朱や一分は取ります。そんな事を仰しやらずと、金をお出しなされませ。
萬八　コレサ〳〵、いくら云つても解らぬ話しだ。所詮が仲間の頭へ疵を附けられたからは、官助に代

つて、あの侍ひをおいらが相手にして、どこまでも譯を附けにやアならねえ。

勘次　いつその事に今爰で、仕返しをするがいゝ。サアお侍ひ、おら達が相手だぞ。

兩人　キリ〳〵爰へ、出さつせえ〳〵。

官助　これはしたり、二人の衆、もう〳〵疵は痛みはせぬ程に、マア〳〵、此まゝに置いて下され。そして、いま聞いて居れば、金を寄越せのと、どうして金など取られるもので、モウ、疵人のわしが料簡するほどに、靜かにして下され。もしこの事が旦那へ知れては惡いほどに、わしから料簡します。

ト小平次の側へ來て

コレ〳〵、こなた衆にも苦勞をかけて氣の毒。もう〳〵、置いて下され。お侍ひ樣も、わしが斯う譯を申すからは、云ひ分もござるまい。サア、早う此まゝ、お出でなされませ。

主稅　イカサマ、疵をうけた貴樣が、料簡さつしやるからは

傳六　二人の衆も、何もやかましく云ふにも及ぶまい。

主稅、コレ〳〵、この家の亭主、いま聞く通りの譯なれば、何も申し分はあるまいが。

小平　イヤモウ、疵人さへ濟まさうと仰しやれば、何も云ひ分はござりませぬ。

萬八　成る程、この男は大きな間抜けだ。仲間のおいら達さへ、料簡がならねえと、息勢はつて骨を折るに、それに引かへ疵人が、此まゝ無難で納まるとは、思へばく大だわけめ。
勘次　この上はお旦那へ、この始末を申し上げざアなるまい。
萬八　それがいゝく。

ト行きかけるを、官助とめて

官助　コレ、それを旦那に云はれては悪いほどに、マアく、爰に居て下されく。
兩人　エヽ、面を見るのも否だわえ。

ト兩人振り切つて奥へ入る。

官助　これはしたり、それを云つては。

ト續いて奥へ入る。

主税　成る程、あの男は正直者だ。併し此まゝでも置かれまい。コレく、わいら、好いやうに計らへ。
傳六　畏りました。コレ、こなた衆も、仲人に入つた不肖に、おれが酒を買ふから、仲直りをさせて下せえ。
權藏　コレ、何分頼むぜく。

小平　ハイ〳〵、左様なら私しどもが裁きませう。
きち　サア、わたし等と一緒にお出でなされませ。
ト小平次お吉先に、傳六權藏、人足奥へ入る。仁太郎主稅殘り
仁太　畢竟今の騷動も、お前が吝いから起つた事だ。
主稅　これサ仁太郎、われが最前から申す無心も尤もだが、何を云ふにも爰は途中、家來どもが聞く手前、それゆゑ今のやうに申したものゝ、成る程、金子も貸して遣はさうから、身が屋敷へ來やれ。
仁太　イヤモウ、さういふ事なら唐までも、天竺までも附いて參りませう。
ト奥よりお園出て、主稅の袖を引き
その　あなた、お泊りなされませ。
主稅　イヤ〳〵、身共は藤澤に定宿もあれば、いづれそれまで。
その　でも、もう日が暮れますでござります。平にお泊りなされませ。座敷も綺麗でござります。
ト仁太郎、お園の顏を見て
仁太　アヽ、美しいものだ。旦那、御覽じませ。
主稅　成る程、此やうな美しい者が留めては

その　どうぞお泊りなされて下さりませ。
仁太　それより、少つとも急がうではござりませぬか。
主税　アイタヽヽヽ。
仁太　どうなされました〳〵。
主税　急に持病の癪が起つて、アイタヽヽヽ。こりや爰へ泊らずばなるまい。
仁太　お前のやうな顔でも、癪がありますか。
主税　べら坊め、癪が面によるものか。
仁太　そんならわしも草臥れたから、爰にお泊りなされまし。
主税　どうで泊らずばなるまい。
その　それは有り難うござります。今日は御病人の御客様の流行る事ぢや。
　　ト盥へ水を汲み、出す。主税、仁太郎、足を洗ひながら
主税　コレ、われが留めたから泊るぞ。
その　ハイ、有り難うござります。
主税　口で禮を云はずと、後におれが床へ來てくりやれ。

その　何しに參りますのでござりまする。
主税　イヤサ、われに癪を押してもらひたい。
　トいちやつきながら浮れて、草鞋を穿いたまゝ盥の中へ足を突ッ込む。
仁太　エヽ、それ、臺なし水が泥だらけになつた。浮れるにも程がある。
その　汲みかへてあげませうか。
仁太　ナニ、おらアそんなに足はよごれねえから、洗はずといゝ。
　ト足の埃をはたき、上へ上がる。
主税　コレ、必ず後に來てくれろよ。
仁太　エヽ、お前も押しの強い。出來ねえ相談を云はずと、奥へ來なせえ。
主税　われが來ないと、癪が納まらぬぞ。アイタヽヽヽ。
仁太　エヽ、無駄を云はずと、早く來なせえな。
　ト仁太郎、無理に主税を連れて奥へ入る。直ぐに奥より長太、見世の行燈をつけんと、附木へ火をつけ、これを持つたまゝお園を見つけ
長太　コレ、お園、幸ひのよい折から、われには用がある。

ト逃げんとするお園の袖を捕へ

コレ、われはつれない者ぢやぞよ。いつも〳〵云ふ通り、おれが云ふ事さへ聞いてくれゝば

ト此うち手に持ちし附木、段々手許へ燃えてくる。

アツヽヽヽ。

ト捨てる。この前より後へ小平次出て、聞いてゐる。

その　旦那さん、灯をつけませうかいなア。

長太　ドツコイ、暗いが幸ひツイ爰で、日頃の思ひを、

トお園に抱きつく。

その　アレ、およしなされませ。

トこれを聞き、小平次、〆めたといふこなしにて探り寄る。お園、長太を振り放し、奥へ逃げて入る。小平次、長太をお園と心得、こなし。長太もにつこり思ひ入れ。双方よろしくこなしあつて、互ひに悔り、飛びのいて透し見て

小平　忰か。

長太　親仁さんか。

小平　エヽ、馬鹿々々しい。
　　ト双方面目なきこなし、時の鐘にて道具廻る。

本舞臺、三間の間、平舞臺、向う床の間、刀掛け、下手中形の唐紙。上の方折曲り障子屋體、すべて梅澤屋座敷の道具。少し上手へ寄せて木綿の床をとり、後へ屛風立てあり、爰に伊太八、俄病氣の體。お霜、お吉、介抱してゐる。釜市、伊太八の腰を揉んでゐる。矢張り馬士唄にて道具納まる。

伊太　アイタヽヽヽヽ。
釜市　餘程のお癪と見えます。爰に癪の固まりが見えまする。
伊太　アイタヽヽヽヽ。イヤ〳〵。癪の痛いのではない、てまへの揉みやうが痛いのぢや。
釜市　イヤ、この位に揉まねば利きませぬから。
　　ト力一ぱいに押す。
伊太　アイタヽヽヽヽ、身共は癪氣はないもせぬもの。
しも　いま旦那樣が、藥を買ひにお出でなされました。
さち　モシ、釜市さん、お癪なら、お腹へお灸をおすゑなされたら、どうでござりませう。

釜市　それ〳〵、切り艾では利きませぬ。袋艾がようござります。

伊太　イヤ、とんだ事を云ふ。何ともない體へ、灸をすゑられて堪るものか。

釜市　イエ〳〵、餘程お強いお癪でござります。

伊太　この按摩は嘘ばかりつく。どこに身共が癪た。體は何ともないわえ。

釜市　サア、そんなに仰しやるのが、矢張りお癪の譫言でござります。

きち　艾を取つて參りませうか。

釜市　いまに目を引附けるかも知れませぬ。

伊太　イヤハヤ、これは迷惑な。

ト釜市を見て

わりやア雁助ぢやアないか。

ト釜市思ひ入れあつて

釜市　エ。イヽエ。

作太　ハテサテ、よく似た。

ト思ひ入れ。奥より小平次、薬を持ち出て來り

小平　モシ〳〵、このお藥は、陀羅助と熊の膽と解毒を調合したお藥、これを一口あがると、卽座に癒ります。

伊太　イヤ、忝いが、其やうな苦い藥ばかり、どうして服まれるものか。

小平　でも、一口あがると、たんてきでござります。

きち　イヤ、たんてきではない、お癪でござります。

小平　エヽ、洒落どころではない。サア、おあがりなされませ。

伊太　あまりの世話で迷惑いたす。服みは服まうが、毒味して出しやれ。

小平　毒なら毒味も致しませうが、藥だからよいぢやござりませぬか。

きち　ドレ〳〵、わたしが毒味してあげませう。

ト一口服んで

オヤ〳〵、苦い〳〵。旦那さん、こりや癪の藥ぢやない、目藥でござります。

小平　なぜ〳〵。

きち　にがいから目藥。

小平　エヽ、べら坊め、馬鹿を云はずと奥へ行け。

伊太　お身達は、騒々しく介抱いたすので猶々のぼせる。ちと静かにしてくりやれ。

小平　ハイ〳〵、左様なら私しは、お醫者様を呼んで參りませう。

きち　旦那さん、わたしも一緒に參りませう。

小平　そんなら一緒に

きち　道々たんと話しもあり

ト小平次の手を取る。

小平　エヽ、畜生め。

伊太　按摩モウよい、早く行け〳〵。

釜市　ハイ〳〵、また後ほど御療治いたしませう。

伊太　どうでも慥かに

ト釜市へ目をつける。

小平　サア、來やれ。

ト馬士唄になり、小平次、お吉、釜市、奥へ入る。

伊太　コレ〳〵、女、先程身共をとめた女は、どう致した。

しも ハイ〳〵、お園どんでござりますかえ。

伊太 何と申すか存ぜぬが、身共をとめたきり、さつぱり見えぬが。

しも ハイ、何ぞ御用なら私しに。

伊太 イヤ、おてまへでは、少し用が頼み悪いぢやて。

しも そんならあなた、御病氣と仰しやつたも。

伊太 面目ないが、實はそれゆゑ。

しも エ。

伊太 コレ、よろしく頼む〳〵。

しも そんなら、お園どんを寄越しませう。ちとお横におなりなされませ。

ト伊太八へ蒲團を着せ、こなしあつて奥へ入る。直ぐに奥、バタ〳〵になり、勘次と萬八、官助を連れ出て來り

官助 これはしたり、貴樣達が疵でもうけはしまいし、其やうに騷がずともよい事を。

萬八 イヤ〳〵、傍輩なれば、おいらが疵をうけたも同じ事だ。

勘次 此まゝ捨てゝおいては、旦那へ濟まぬ〳〵。

ト これを聞き

伊太　コリヤ〳〵、其方達は、何を其やうに騒ぐのだ。

萬八　モシ旦那、お聞きなされませ。この官助が、通り違ひの侍ひの家來に、此やうに頭へ疵をつけられまして、それも構はず濟ましてやりました。

勘次　その上にこの男が、先の者へ此方から、詫言を致しました、大間抜けでござります。武士の家來が頭へ疵を附けられては、傍輩どもと申し、旦那樣のお名までがよごれます。

萬八　私しどもが、打捨て置いたやうに思し召しては如何と存じまして、これまで連れて參りました。

ト伊太八これを聞き、官助を見て

伊太　成る程、額の疵といひ、コレ官助、二人の者が申し條に相違ないか。

官助　ヘイ〳〵、イヤモウ、ちよつと致した間違ひ、僅かの事を、旦那樣のお耳へ入れましてはと存じますゆゑ、私し一分で、料簡いたさうと存じましたところを、傍輩どもが、濟むの濟まぬのと、聲高に申しますゆゑ、ついお目にとまつて恐れ入りますが、畢竟先で喧嘩仕掛けに、致したと申す譯でもござりませず、ほんのはずみの怪我でござりますゆゑ。

伊太　それで料簡いたして遣はしたのか。

官助　ヘイ、左樣にござります。
兩人　あれ〳〵、あの通りの大間拔けでござります。
伊太　コリヤ官助、よく物を積つて見やれ。そりやハヤ、事を好まぬは我が身ばかりか、主人の爲と思つての事であらうが、それは町人の事、まして其方、侍ひの表道具、槍を持つ役ではないか。主の供を致して通行の折、もし變あらば、めどに取らるゝは槍持ちの役、大切なわりや役人だぞよ。その役人が、面へ疵を附けられ、此まゝに差置いては、この後身共が槍印しを存じた者があつて物笑ひになる時は、一生の瑕瑾。この上は、その疵をつけた侍ひはどこに居る。武士の法を知らぬ奴、身共が直々相手になつてくれう。
ト威丈高になり、刀を取る。
官助　アヽ、イヤ〳〵、暫らくお待ち下さりませう。段々の御教訓、私しめもお目鏡を以て、お印しを預かりまする役目、一寸の蟲にも五分の魂ひ。
萬八　イヤ、旦那の前だと思つて、立派な事を吐かすが、先刻の態は何の事だ。
勘次　口と心は大違ひ、現在頭をぶち毀されても、われが仇名のけろり官助。
兩人　ほんに呆れた臆病者め。

官助　臆病とも、卑怯とも、譏らば譏れ、何とも思はぬ。その辛抱も、この身に深い

伊太　願ひがあると申すのか。

官助　エ。

ト思ひ入れ。

伊太　大方そんな事でもあらう。よく〳〵思ひ詰めたる儀と相見えたが、品によつては、其方が願ひの筋も、及ばずながら便りになつて遣はさう程に、その仔細を、つぶさに申せ。

官助　御主人様のお恥辱と、申す事ゆゑ據なく、人に云はれぬ身の願ひも

伊太　聞いた上にて、また料簡もあらう。人に云はれぬ大事とあれば、其方達は、勝手へ參つて休息いたせ。

兩人　ハツ、左樣ならば私しどもは、

伊太　荷物の支度も致して置きやれ。

兩人　ハツ。

ト合ひ方になり、萬八と勘次、思ひ入れあつて奥へ入る。

伊太　サア、二人の者を遠ざけた。して、その願ひの筋は

官助　何をお隱し申しませう、私しは、敵討でござります。
伊太　ムウ、さうであらう……靜かに申せ。
　　ト合ひ方になり、官助摺りより、こなしあつて
官助　以前私しが親は、曾我のお家に奉公いたした若黨、船越十右衛門と申す者、樣子がござりまして侍ひをやめ、町人となつて大工の職分。私しの幼名は、五郎吉と申した者。親は町人になりましたれど、私しはどうぞ侍ひになりたう存じまして、今度あなた樣が御出世を幸ひ、あやかりたさに御奉公に住みこみ、何卒少しの太刀筋でも覺えましたなら、親の敵を討たうと存じまするが、この年月の私しが願ひでござります。
伊太　ハテサテ、其方が親は、曾我どのゝ舊臣とな。さすれば身共とても、別に退いた仲でもない……して、討たれた親は、その船越十右衛門といふ人か。
官助　左樣でござります。最早餘程の年でござりまするが、この度、富士の根方の假小屋を、請負ひました大工の棟梁。
伊太　オヽ、それ〳〵、その棟梁の悴か。して〳〵、討たれし所は何處、敵は何者と申す事が、知れてゐるか。

官助　ハイ、討たれました所は、鎌倉の三祐ヶ谷、屋敷小路に於きまして、親どもの横死。敵は卽ち親どもが弟子分に致しました、同じ職人、蝮の仁太と申す者の仕業。その證據は、死骸の手に殘りましたは、右の仁太と申す者の、着類の片袖でござりまする。

伊太　ムウ、その仁太郎と申す者を、存じて居るか。

官助　イエ、顏は一向存じませぬが、その者の左の腕に、蝮の彫り物がござりまする。そこで異名を蝮の仁太郎と申すさうでござります。それを證據に尋ねまする。

伊太　それはいつち知れ易い證據。して、跡の兄弟は息才で、矢張りこれも敵討にでも出たと申すことか。

官助　イヤ、幼少の時分から、心々の望みにて、別れ〱になりましたれば、便りとても承りませず、息才なやら、死にましたやら、定めし親の横死の事も、まだ存じますまい。

伊太　跡の二人も男子ぢやな。

官助　左樣でござります。

伊太　ムウ、逐一樣子を聞けば、成る程、その身を愼しみ、無益の喧嘩なぞを致さぬは尤も。その辛抱では大丈夫、共々敵を詮議して遣はさう。さて〱思ひがけない話しを聞いて驚き入る。其方は

孝行者ぢや。

官助　私しが無念の心底、御推察下さりませ。

トばた〳〵になり、上手の障子屋體より、お園走り出て來り

その　モシ、ちつと爰へ隠して下さりませ〳〵。

ト屏風の中へ入る。兩人愕りして、

伊太　何ぢや〳〵。

トこれにて官助飛びのき、思ひ入れ。

その　ハイ、跡からお泊りなされたお侍ひ様が、いろ〳〵なてんがうなされまして、逃げても逃がさず・無體な事。また爰へ追ひかけて參りまする。どうぞ隠して下さりませ。

伊太　ムウ、跡から泊つた侍ひが、無體な事……ハテ、誰れが心も違はぬもの。身共も有やうは………マア〳〵、それは格別、爰へ隠れてゐやれ〳〵。

その　ハイ〳〵、どうぞお頼み申しまする。

ト屏風を立て、その中へお園を隠す。

官助　今の様子を聞かれたかと、愕り致しました。

ト此時上手の障子屋體より、主税、傳六、權藏、鄕内、出て來り

主税　あの女め、どこへ逃げ居つたか。

傳六　たしか爰らへ逃げました。

鄕内　大方、あの屏風の中でござりませう。

主税　成る程、屏風の中に違ひあるまい。引摺り出せ。

三人　畏りました。

ト屏風へかゝる。

伊太　イヤ、お侍ひ、待たつしやい。手前も武士でござるが、此方で借りうけたる座敷へ、案内もなく踏み込んで、どうさつしやる。

主税　イヤ、手前はこの家の、召仕ひ女を尋ねまして。

伊太　召仕ひの女に用があらば、手を叩いて呼ばつしやい。逃げ歩く女を捕へ、無理無體に、何の御用でお尋ねなさる。

主税　サアそれは……イヤ、斯樣でござる。召仕ひの小女めが、身共へ無禮を致したによつて、云ひ譯なさに、この座敷へ逃げ込んだと見えます。

郷内　なんでもあの屛風の中に、隱れてゐるに違ひござりませぬ。隱し立てなさるゝお侍ひ、屛風の中へとめておいて、强淫でもなさるのか。
權藏　但し此方へ無禮をした女を、引取つて腰押しをなさるのか。
傳六　女にのろいお侍ひ、キリ〳〵爰へお出しなさい。
主稅　女なれども侍ひへ、慮外いたした憎くい奴。
伊太　あまり憎うもござるまい。可愛さあまつてこの立腹。
主稅　ヤア。
伊太　ハヽヽヽヽ。イヤナニお侍ひ、女子供に致せ、慮外いたせば、武士の表が立ちませぬ。品によつては刀の手前。
主稅　立ちませぬ。品によつては刀の手前。
伊太　しかと左樣かな。
主稅　知れた事サ。
伊太　然らば身共も刀の手前。お侍ひ、ちよつとお目にかゝりませう。
主稅　身共にナ。
伊太　いかにも。

ト合ひ方になり、伊太八、官助を前へ連れ出て來り

この下郎、御存じでござるか。

主税　ヤ。

皆々　それは先刻の

伊太　御存じの通り、疵がつきました。この下郎は身共が家來、女子供ですら、慮外いたさば武士の表立たぬと云はれたお侍ひ。身共も家來に疵つけられ、武士の表が立ちませぬ。女を庇ひ、贔屓いたすと云はれた惡名、雪ぐこの疵、女にあらぬ家來の腰押し。サ、無禮くらべ、いま爰で糺さにやならぬ。お侍ひ、さう心得てござらつしやい。

主税　ムウ、そんなら下郎は其許の、家來であつたか。先程金子の扱ひを、知らぬといつて料簡した、氣のよい下郎と思ひの外

傳六　跡で主人へ云ひつけ口、けちな心の野郎だはわえ〳〵

官助　侍ひの家來が、金銀で料簡しては猶々濟まぬ。それゆゑ下郎が堪忍しても

伊太　家來の恥は主人の恥、この伊太八が料簡ならぬ。

主税　アヽ、コレ〳〵、あの者へ疵をつけたは、身共ではない、この槍持ちの傳六だ。

鄕内　左やう〳〵、家來同志のいさくさを、御主人の知つた事ではござりませぬ。

權藏　子供の喧嘩に親が出ると、大人氣ないお侍ひ。

伊太　イヤ、家來の無禮は主人の科、主のこなたが懸り合ひ。サア、家來の喧嘩を主同志が、買つてこの場で

主税　イヤ〳〵〳〵、家來でござらぬ。勘當いたした。

伊太　ヤ。

主税　たつた今、勘當の仕立て。家風に合はぬ下郎ゆゑ、暇をくれました。暇をやれば家來でござらぬ。さすれば身共に懸り合ひはござらぬ筈。サ、勘當ぢやぞ〳〵。

傳六　ハイ〳〵、成る程、御勘當承知いたしました。勘當うくれば槍持ちの浪人、旦那がなければ一本立ち。あの男の疵は、おれが附けたのだ。勘當された槍持ち浪人、外に懸り合ひはねえ。カウ、お侍ひさん……イヤサ、今でこそお侍ひだが、この間まで中間仲間、下馬で一緒に濁酒を、くらつてゐた初平、元は折助だ。出世したと思つて、何も大きな面をする事はねえ。こなたの家來か矢來か知らねえが、喧嘩の相手はおれだ。おれが疵を附けたのだ。それがどうした。どうしたといふのだよ。

ト伊太八の側へ摺りよる。伊太八、物も云はず莨盆にて傳六の頭をくらはせる。これにて疵つく。

うぬ、理不盡な。

ト伊太八へかゝるを、よろしく立廻つて見事に投げのける。主税、權藏、拔きかける。伊太八、白刃を拔き、主税の前へ差しつけ、郷內を引敷き、キツと見得。

伊太　勘當されても相手はこの者、疵を附ければ即ち五分々々。それともたつてお騒ぎあると、いちいちこの場で刀の相伴。今この下郎が申せし通り、以前は仲間の徒歩中間、出世はしても心は下素輕い命の交易に、どいつどなたの容赦なく、笠の臺無し二合半、切つて切り米ぶッこぬき、お望みならば今爰で、一番相手になりませう。

主税　イヤ、相手にはなりますまい。主用抱へた大事の身、即ち主人へ不忠といふもの。

權藏　左樣でござります。君子は危ふきに近よらずと、馬鹿者には構はぬがようござります。

伊太　然らば主用にかづけ、この場をコソ〳〵。

主税　逃げは致さぬ。そこが即ち寬仁大度。

郷內　肝腎かなめの命が大事。

伊太　すりや、家來の疵も此まゝに

主税　勘當したれば構ひはねえ。
權藏　主でないなら家來でなし。
鄕內　家來でなければ主でもなし。
主税　いつまで云つても同じ事。
傳六　同じ事なら痛い目を、したゞけ損な心持ちだ。
鄕內　それも忠義だ、辛抱しやれ。
傳六　これが卽ち善次は善次、勘當は勘當。
宮助　それでは築地へ歸られまい。
傳六　大きにお世話。
主税　とは云ふものゝ

ト伊太八、刀をピツシヤリ納め

伊太　云ひ分ござるか。
主税　云ひ分あれども。
傳六　外聞が惡るさに

郷内　當分このまゝ。

權藏　何分これでは

傳六　存分云へない、

主税　隨分よろしう

皆々　さつさとござれや。

主税　エヽ、おきやアがれ。

ト合ひ方になり、皆々奥へ入る。

宮助　さて〳〵、よい氣味を致しました。時に旦那樣には、今晩お泊りでござりまするか。

伊太　左樣いたさうか。てまへ達は今夜のうち、小田原宿まで參つてくりやれ。身共は跡より追ひつくであらう。

宮助　左樣ござらば傍輩どもを、殘し置きまして手前一人

伊太　イヤ〳〵、皆同道して行きやれ。

宮助　然らばお先へ、參りまするでござりませう。

ト合ひ方になり、宮助奥へ入る。屏風の中よりお園、おづ〳〵出てくる。

伊太　コリヤ〳〵、女、もうよい〳〵。さて〳〵憎い奴等ぢや。

その　これはマア、有り難うござります。私しの事から云ひ募つて、どのやうな事にならうかと、屏風の中で、誠に苦勞いたしました。

伊太　なんの〳〵、事を起す程の性根があれば、無法もせぬといふものだ。

トこの時奥より長太出て來り

長太　お園〳〵、わりや爰に何してゐる。あちらのお客様に、お膳もあげようとはせいで、お客のお寢間へ無遠慮な。又してもく小嫌らしい奴ぢや。あなたの所へいちやつきに來たのか。助兵衛女め。

その　どう致して私しが其やうな事を。

長太　どうも斯うもいらぬ。早く奥へ行かぬか。

その　ハイ。

トうぢ〳〵してゐる。

長太　エヽ、きり〳〵とうせろと云ふに。

その　ハイ。

ト立ちさうにする。

伊太　アヽイヤ、女、待て〳〵……其方はこの家の亭主か。

長太　左樣にござります。

伊太　あの女は、只今身共が、少々用事を頼んだので、これに居つたのぢや。其やうにお身が叱ると、却つて身共が氣の毒ぢやて。

長太　へイ、何の御用を仰せつけられました。

伊太　サア、その用は、身共最前より、いまだ腹痛いたし居るゆゑ、少し押してもらうて

長太　左樣なら、先刻の按摩を呼びに遣はしませう。

伊太　イヤ〳〵、最前の按摩は强うてならぬ。身共は女の柔らかい手で、押してもらふが、丁度よい心持ちぢやて。

長太　あなたのその格幅で、床の中で女と二人按摩とりとは、これがほんの猫に鰹節。

伊太　然らば身共が、あの女に按摩を頼んだを、其方は怪しく思うて左樣申すのか……コリヤ、手前は武士ぢやぞ。みだらな事を致すと思ふか。

長太　イエ、左樣では

伊太　但し身共が用を頼んでは、其方が立腹いたす儀でもあるか。

長太　イエサア

伊太　客の用は足させぬ女か。サア、返答いたせ。

ト嚇してキッと云ふ。

長太　イエ、左様ではございませぬ。隨分よろしうございます。コレお園、あなたのお氣の晴れるやうに、よく揉んであげ申せ。そして、お療治が濟んだら早く來いよ……ア丶、心ならぬ御療治ぢや。

ト長太、詮方なきこなしにて奧へ入る。お園、いろ〳〵思ひ入れ。

伊太　ハ丶丶丶丶、コレ女、いま亭主が口吻では、其方とどうやら、ねんごろ致して居るやうな樣子に見えるが、左やうかく。

その　エ丶、穢らはしい事仰しやります。殺されたとて、あのやうな人と

伊太　よう噓を云ふ奴ぢや。身共が側で差向ひに居つたのを見て、腹を立つた樣子。どうでもこりや、怪しい〳〵。

その　イエモウ、てんがうにも其やうな事云うて下さりますな。私は悲しうございます。

伊太　ムウ、其やうに其方が云へば、彼れが心に隨はぬゆゑ、あのやうに邪慳に致すとも思はれる。

その　もう〳〵、邪慳どころか、鬼とも蛇とも

伊太　サア、其やうな内に奉公せずとも、其方が器量では、どこぞへ緣附き、夫婦して、暮らしたらよささうなもの。定めし男も、引く手數多であらうな。

その　旦那樣のぢやらくらと、私しのやうなもの、誰れが構うてくれる人が

伊太　イヤ、無いとは云はさぬ、いま目前に、あの侍ひが構うたではないか。

その　そりや鼻の先のいたづら、弄さみものにせうといふお方は、いくらもござりますわいな。

伊太　然らば當座の弄さみでなく、眞實底から世話でも致さうといふ人があれば、身を任す所存か。

その　サア、そこの所は兎も角も、深切なお方があらば、私しが身の上も打明かし、お氣に入らずば妹になりとも、下女になりともこの身の片附き、お賴み申したう思うては居りますれど、世界の男といふものは、みんな浮氣ないたづら者、これぞ力に賴まうといふお人は、マア無いものでござりまする。

伊太　イヤ、あるな。隨分あるぢやて。まづ男振りは、其方の氣に入らぬは知れた事ぢやが、實情のあるところでは、業平にも負けぬ情知りがあるぢやて。

その　そりやマアどこにござります。

伊太　爰に居る。身共ぢやて。

その　エ。

　　　ト伊大八の顏を見る。

伊太　顏に似合はぬ事を申すと思つて、其やうに悧りする事はない。實情のある證據は、云うて聞かさう。まづ先程、爰の門口にて、其方が身共を留めた時、據なく急ぎの主用にて、罷り通る者なれど、其方が器量にツイ引かされ、家來の手前も面目ないゆゑ、作病を起し、この家へ泊つたも主用に替へて其方に逢ひたさ。サ、これ程の實はあるまいが。

その　不拙な私しを、お主樣の御用にお替へなされて、泊つて下さりましたは、私しの身にとりまして誠に有り難いと申しませうか、恐れ多いと申しませうか、この上もないあなた樣は

伊太　眞實者か。

その　浮氣者でござります。

伊太　ヤ。

その　蓼喰ふ蟲も好き〴〵と、どこがお目にとまつたやら、そのお心は嬉しうござりまする。また外々

にお目にとまつた者があれば、そこへも矢ッ張りこの通り。移り易いが殿御の癖。ちよつと見て、直ぐに斯うぢやといふやうな、それこそほんの當座のてんがう。

伊太 ハテ、よく理窟をこね廻す女ぢや。其やうに疑ぐるも女の常、尤もながら、そりや町人の若い衆とやらの事。侍ひの申した事は、跡へは引かぬ。また申し出した事は、どこまでも云ひ條立てねばならぬ、とサア、斯樣申して無理に口說かば、矢張り最前の侍ひのやうに、無法な事を致すと思やらうが、何が否でもなし應でもなし、蛇の生殺しの挨拶で、猶々身共氣が揉める。この上は、其方が心に落ちずばこれぎり、また料簡が附いたら返事をしやれ。たゞ白いと黑いの二つの返事サ、否か。

その エヽ。

トもぢ〳〵する。

伊太 否でもないか。

その サア。

伊太 但しは否か。さうか〳〵。

ト段々摺りより、袖を捕へて思ひ入れ。

その　サア、私しは

伊太　私しは

その　アノ

伊太　アノ

　　ト段々抱きよせる。

その　否でござります。

　　ト思ひ切つて云ふ。伊太八、お園顔を見て

伊太　あまり無造作な挨拶で、袖を捕へたこの手の放しやうがない……よいワ、まゝよ。否ぢやと云ふもの、無理にとも云はれまい。畢竟泊らずともよい内へ泊つたも、ほんの無駄事、よしない事に主用の遲滯。ドレ、これから直さま罷り立たう。

　　ト刀を持ち、素氣なく行かうとする。この時、伊太八、蒲團の上へ、守り袋を忘れて立つ。お園見て思ひ入れ。

その　アヽモシ。

　　ト氣の毒なる思ひ入れ。伊太八振り返り

伊太　なぜ留める……これサ、なぜ留めるよ。

トまた立歸る。

その　イエ、留めは致しませぬ、

ト伊太八、何の事ぢやといふ思ひ入れあつて

伊太　然らば立たう。

ト行かうとする。お園、右の守りを、よく〳〵見て

その　アヽ、モシ〳〵。

伊太　また呼ぶか。もう今度は歸らぬ。用があらば、そこから申せ。

その　あなた、腹をお立てなされては惡うございます。

伊太　何しに身共が腹を立つものか……併し、あまり心よい事もないわえ。

その　私しの申した事、腹をお立てなされずば、もう夜深でもございます、機嫌を直して、お泊りなされては、惡うございますかえ。

伊太　泊りたいは山々………イヤ、泊るまい。侍ひが云ひ出した事、跡へは引かれぬ、矢張り立たう。

その　アヽモシ、この先の松原には、病犬が居りますぞえ。

伊太　病犬は身共大好きだ。

その　イエ〳〵、そして悪い狐が居まして、化しまするぞえ。

伊太　もう爰で半分狐には化されて居る。

その　そんなら私しを、狐ぢやと仰しやるのかえ。

伊太　まづ、それに類したものぢや。

その　其やうな事仰しやらずと、泊つてお出でなされませ。但しお否でござりますかえ。

伊太　サア。

トもぢ〳〵思ひ入れ。

その　お泊りなされませいな。

伊太　サア

その　どうでもお否かえ。

トお園だん〳〵摺りより、裾を捕へる。

伊太　イヤ、身共は

その　身共は

伊太　アノ
その　アノ
　　　ト恥かしきこなしにて、ヂッと寄りそふ。
伊太　否ぢや。
　　　トお園こなしあつて
その　わたしもこの手の放しようが
伊太　イヤ、歸るのは否ぢやといふ事。
　　　ト碎けてお園を抱く。
その　あなた、先刻に仰しやつた事が御眞實なら、どうぞわたしをアノ
　　　トつかへる。
伊太　また否か。
その　イヽエ、女房に持つて下さりませ。
　　　ト思ひ切つて云ふ。
伊太　大分風が變つて參つたが、爰が今云ふ、狐かも知れぬて。

ト眉毛を濡らす。

その　アレ、又そんな憎い事。

ト つめる。

伊太　アイタヽヽヽ、イヤモ、たとへ狐であらうとも、もう斯うなつては、安倍の保名にあらねども堪へられたものではない。

トお園を引寄せる。お園、恥かしきこなしあつて

その　さういふあなたが、矢ッ張りわたしを

伊太　化かし競べは、屏風のうちで

ト唄になり、屏風を引廻す。奥より主税出て來り

主税　先刻の女を、餘ッほどかこつけかゝつたものを、あの侍ひめが邪魔をして、たうとうどこへか玉なしに

ト思ひ入れあつて屏風を窺ふ。奥より釜市出て來り、主税を見て

釜市　牛島さま／＼。

ト呼んでも、主税聞えぬこなし。

これはしたり、をかしな風をして、これサ〳〵、牛島さま。

ト脊中を叩く。主稅浮れて釜市にとりつく。

釜市　何をなされます。

主稅　ヤヽ、お身は鴈助、變つた形で變つた處に。

釜市　私しよりは牛島さま、今のは何の眞似でござります。

主稅　ちつと小胸の惡い事があつて。

釜市　時に牛島さま、よい所でお目にかゝりました。

ト主稅を花道の方へ連れて行き

岩藤さまへ、拙者が內通いたしたゆゑ、尾上之助が切り込んでも、玄蕃さまは安穩、その御褒美に大そうな出世でも、さして下さるかと思へば、その御沙汰は無うて、叶ひもせぬ戀の執持らした針野灸按へは、褒美のそくたくとして、東雲の名香を預けられ、內通したわしには知らぬ顏。わしも曾我の奴等が目をつけるゆゑ、姿を變へて昨日から、俄按摩でござりまする。

主稅　成る程、その述懷は尤もだが、まだ尾上之助が切腹いたしたは昨日の事、そのほとぼりの覺めぬうちは、その沙汰にも及ばれず。身共とても曾我の寶、二品を盜み取つたが、その恩賞さへまだ

無い程だ。併し、岩藤さまへ願つて、御身の身分は立つやうにしてやらう。それにしても、おれは

ト行きにかゝるのを留めて

釜市 ハテ、まだお話しもござります。マア、奥へお出でなされまし。

ト無理に主税を連れて奥へ入る。なまめいたる合ひ方になり、屏風を明けて、兩人よろしく思ひ入れあつて

伊太 いま云ひかけた其方の身の上、爰で詳しく。

その サア、世にも果敢ないわたしが身の上、お聞きなされて下さりませ。

ト合ひ方になり

もと私しが母さんは、工藤の御家來、近江の小藤太さまの娘、その腹に出來ました私しは、浦里と申して、小藤太さまの孫でござりまする。同じ工藤の御家來に、鶴賀甚内と申すお侍ひ、その御子息の、時次郎さまといふお方と、幼ない時にわたしは云ひ號け。ところにこの時次郎さまが、七つの時に、親御甚内さまはお果てなされ、それより御家内皆ちりぢり。その後わたしが祖父の小藤太さまもお果てなされ、母さんはわたしを連れ、云ひ號けの時次郎さまに逢はせんと、住み

馴れし伊豆の熱海を立出でて、馴れぬ旅路のお疲れやら、また過ぎ越し方の御辛勞が、一つに募つて病氣となり、わたしの生ひ先御苦勞なされて、病も重り、この家へ泊つたその夜より、歩行も叶はず、藥も屆かず、遂にこの家で母さんは、お果てなされてござります。それより跡の取り始末も、知る人の無き旅路ゆゑ、どうしてよいか泣いてばつかり。爰の內の御亭主が、初めのうちは深切に、母さんの亡骸も、近所のお寺へ葬むつて、それからわたしはこの家の內へ、水仕奉公同然に、永々世話になるにつけ、以前は正しき侍ひの、その娘たる母さんの、亡骸とても得も知れぬ、寺へ埋めて回向さへ、屆かぬ程の身の成果て。西も東も他人の中。

ト懐より守り袋を出し

力と頼むは云ひ號けの、しるしと云うて幼ない時、取かへ持ちし守り袋、これを朝夕なぐさめ草便りない身をお侍ひ樣、不便と思うて下さりませ。

ト伊太八この話しのうち、一々悧りする思ひ入れ。

伊太　ハテ、思ひがけなき其方が身の上、母御も爰で相果てしとか。南無阿彌陀佛。

ト心のうちにて回向する思ひ入れ。

その　今日といふ今日、あなたのお情うけるからは、行く末長う女房に

伊太　不便をくはへてやりたいが、罷りならぬ。

その　エ、そりや何ゆゑ。

伊太　不貞な女め。コリヤヤイ、知らぬ先ゆゑ、身共が兎やかう申したが、現在云ひ號けの男を、尋ねる身の上でありながら、今日初めて逢うた身共に、帶紐といたいたづら女、女房どころかこの後は、ふつ〳〵其方には愛想が盡きた、物を云ふさへ穢らはしい。

トきつと云ふ。お園こなしあつて

その　成る程、わたしは不義の女、その不義よりもあなたこそ、つれない仕方。現在わたしが身の上をお聞きなされて素知らぬ顏。そりや聞えませぬ、時次郎さま。

伊太　ヤ、どうしてその名を

その　床に殘つたあなたの守り、雪輪錦のこの摸樣、一目見るよりヤレ嬉しや、尋ねる夫と思へども、お顏も知らず、便りもせず、どういふあなたのお心やら、この守りを肌につけてお出でなさるからは、ちつとは云ひ號けの女房を、思うて下さるかも知れぬと、色に仕掛けて試して見るあなたのお心。否ぢやと云はれた時の嬉しさ。それに引かへ仇つきに、この守りさへ床のうち、忘れる程なつれないお心。今またわたしの身の上を名乘りもせず、却つてわたしを不義者と、恥しめて

この場を抜け、逃げる心でござりませう。そりやあんまりなされ方。云ひ號けの夫に逢はうと
これまで辛い辛抱も、あなたはよもや御存じあるまい。證據の守りを見たゆゑに、肌をゆるして
嬉しい逢瀬。ほんのどうした男でも、外へ心を移す程なら、苦勞苦患は致しませぬ。今まで肌を
穢さぬわたし、それと知らねばこの家の主、わたしを捕へて無理無體、女房になれの妾にするの
と、云ひかけられるその辛さ。それを否めば邪慳にも、山の薪を拾はせて、それをしまへば風呂
の水、汲んで火を焚くその後が、飯こしらへて外へ出て、お客を一日五人づゝ、泊めねば夜通し
枕を取上げ、蚊帳も吊らせず暗闇に、縛りからげて打ち叩き、親の手許で我まゝに、育つたこの
身が馴れぬ業、薪を切るも水汲むも、遲い〱とまた苛責。冬は手足も裂け爛れ、流れこぼるゝ
血の涙、風呂の煙りに紛らして、泣かぬ顏してこの年月、その辛抱もどうぞして、あなたに逢ひ
たいばつかりに、神や佛にありたけの、願ひをかけたお庇やら、思ひがけなう今日爰で、お目に
かゝつた嬉しやと、思ふ間もなきつれないお心。さては女房であつたかと、一言云うて下さんし
ても、さのみ恥にもなりますまい。せめて不便と云はずとも、不義な女よ不貞よとは、そりやあ
んまりぢや〱、お胴慾でござりますわいなア。

ト泣きむせび、いろ〱こなし。伊太八、氣の毒なる思ひ入れあつて、

伊太　證據の守りを見たからは、成る程恨みは尤もながら、包み隱したその譯は、どうも添はれぬ因果な緣。それと明かさば猶更に、辛い別れと思ふゆゑ、不便ながらも素知らぬ顏。

その　エヽ、なぜ又添ふに添はれぬとわえ。

伊太　サア、今も其方が物語り、我が母方は曾我の家來、十二の年に母に別れ、それより身共も時次郎の名を改め、曾我のお家に御奉公、初平といふ下郎。其方が小藤太の娘なりや、主人の曾我と敵同士、云ひ號けはしたりとも、今は添はれぬ互ひの惡緣。殊更今の主人といふは、祐信さまの御養子たる尾上之助さま、格別の御恩にて、俄に出世、又ぞろその名も改めて、主人の名を頂戴いたし、尾上伊太八。斯くまで厚き御主人の、敵にあたる工藤の家臣、その血筋たる其方ゆゑに、女房に持つては主人へ立たぬ。それゆゑつれなく申せしも、思ひ切らせん身が心。

その　そんなら親の緣を引けば、敵同志ゆゑ添はれぬ緣。そのお詞は、御尤もではござりますれど、夫婦となれば夫につき、親でも敵にするのが道。殊に親の死んだる上は、

伊太　そりや私し極めの緣者の證據。云ひ號け致せしとて、祝言せねば夫婦でない……さはさりながら今までに、添はれぬ夫と知らずして、千辛萬苦に貞女を立て、尋ねめぐりし不便な心。この世では叶はずとも、一つの功さへ立つなれば、主人へ潔白、未來の緣を

その　そんなら敵の縁ゆゑに、命を捨てゝも一つの功を、立てさへすればわたしの願ひ。

伊太　二世の夫婦となる程の、潔白見たれば兎も角も

その　成る程、さう仰しやればわたしとて、返す詞もなみならぬ

伊太　一つの功を

その　立てたる上では

伊太　身共が女房

その　して又、あなたは

伊太　主用濟んで、歸りにこの家へ。

その　ほんに果敢ない二人の縁。

伊太　それも浮世の

その　忠義と操。

伊太　思へば不便な

　　　トお園、伊太八に寄りそひ、泣き落す。

身の上ぢやなア。

ト愁ひのこなし、よろしく、道具廻る。

本舞臺、元の見世先の道具になり、時の鐘にて道具納まる。

ト爰に傳六、權藏、鄕內、勘次、萬八、いづれも脚絆草鞋など枕許に置き、寐入りゐる。お吉出て來て傳六を起す。傳六目を覺まし

傳六　誰れだ〳〵。

ト告めるゆゑ、お吉囁く。傳六あちこちと探り見て

もう四つ過ぎだらう。宵から待つてゐたに。

トこなし。この時奧より主税先に、長太、小田原提灯を提げて出て來り

長太　お立ちでござります〳〵。

主税　家來ども〳〵。

トこれを聞き皆々飛び起き、支度する。傳六うろたへ、着物を着ながらお吉を見て

傳六　ヤア、此奴は違つた〳〵。

きち　サア、勤めをおくれ〳〵。

傳六　勤めをくれもすさまじい。先刻ちよつと見た女は、粂三に似てゐたから、二百はづまうと思つたが、うぬが勝手で吹替へにうしやアがつて、うぬから此方へ二百取つても氣がねえワ。

皆々　押しの強い奴だ。

主税　さてはわいらはこの女を……物食ひのよい奴等だ。こんな者には構はずと、支度しろ〳〵。

皆々　支度はよろしうござります。サア、お立ちなされませ。

きち　やる事は成らぬ〳〵。

ト捕へるを、皆々お吉を踏み倒し、東の口へ入る。傳六は、軒に立てたる官助の槍を、自分の槍と心得、それを持つて附いて入る。お吉、猶も喚くを

長太　エヽ、外聞の惡い。靜かに吐かせ〳〵。

きち　サア、お前方、拂つておくれ。

萬勘　おいらは知らぬ〳〵。

トこの時奥より官助出て來り

官助　サア、旦那が先へ小田原まで行けと仰しやる。みんな支度をしろ〳〵。

萬勘　合點だ〳〵。

長太　左樣なら、あなた方もお立ちでござりますか。して、旦那樣は

官助　旦那は今夜はお泊りなされて、跡からお出でなさる。

長太　エ、あの旦那一人お泊りなされては、そいつは油斷が

官助　どうしたと。

長太　イエ、よろしうござります。隨分御機嫌よう

三人　世話になりました。

きち　コレ、勤めを置いて行かしやんせ。

二人　おいらがそれを知るものか。

　　トお吉を踏み倒し、向うへ入る。官助は傳六の槍を知らずに持つて向うへ入る。長太奧へ入る。

きち　エヽ、ひどい目にあはせた。

　　ト呟やきながら奧へ入る。直ぐに東の口より主税先に、傳六權藏鄕內、早足に戾つて來て

皆々　亭主は居らぬか〳〵。

　　ト奧より小平次、お霜出て來て

小平　ハイ〳〵、何の御用でござります。

主税　身共の槍が違つた。合ひ宿の侍ひはまだ居るか。

しも　イエ、もうお立ちなされてゞござりまする。

傳六　それは大變。あの侍ひは、上りか下りか。

小平　慥かお上りで、小田原の方へお出でなされた。

鄕內　まだ遠くは參りますまい。

主税　急げ〳〵。

ト花道の方へかゝる。向うより官助、走り出て來り、皆々を見て

官助　これは〳〵、お道具が取變りまして、これまでお戻りなされましたか。私しも道で取つて返しました。夜中の事ゆゑ、ツイ門口で間違ひましたやら。でも、よい所でお目にかゝりましてござります。サア、お道具は元々へ

ト傳六に槍を渡す。傳六、この槍を引つたくる。

主税　コレヤイ下郞、われは何の役を致して居るのだ。槍は武士の表道具だぞ。間違へたとばかりで濟まうと思ふか。この槍の違つたばかりで、主人の御用が遲刻いたしたら、その分では相濟まぬぞ。

官助　これは〳〵、恐れ入りましてござります。併し、同じ軒へ並べて立てかけて置きましたを、あな

た方の方で先へお立ちなりや、麁相は卽ちあなたの御家來。

傳六　黙りやアがれ。槍はそれ〴〵の印しのあるもの。夜中の事ゆゑ間違つたなら、早速追ひかけてくる筈を、うぬ、間違へ。持つて行つたではないか。

官助　サア、そこが麁相、互ひの間違ひ。どうぞ只管御料簡なされて、此方の槍を、お返しなされて下さりませ。

しも　あのやうにお詫びなさる事。あなた方も御料簡なされませ。

小平　エヽ、女の癖に、いらざる事を差出るな。

主税　ヤイ、下郎め、槍持ちの役を勤め、それで扶持を取つて居れば、卽ち槍は主人も同然。その主を間違へる大たわけめ。最前はうぬの主人が、理屈らしく身共をやりこめたが、その家來さへ武士の法を知らぬ奴。

傳六　そりやアその筈でござります。この間まで二合半、中間あがりのあの侍ひ、槍持つ術は知つてるやうが、持たせる術は知りますまい。

鄕內　殊に道具も急拵らへ。筋違ひ外で六百も出せば、立派に買へるこの槍だ。

權藏　間違つた振りで、好い道具を取替へ行けといふ、大方主人が云ひつけたのかも知れぬ。



傳六　成る程、こりやァそれに違ひない。

ト官助を引附け

野郎め、お目鏡でおれが持つたあの槍を、間違つた振りで取替へた、云はゞうぬは泥坊だワ。主が云ひつけ泥坊させたか。うぬのやうな奴の手に觸れりやァ、お道具が穢れるワ。馬鹿な野郎だ。

ト足蹴にする。

官助　こなたは先刻主人から、暇が出たと云はしつたが、どなたの道具を持つ役だ。

傳六　エ……イヤ、お主の暇は出たにもしろ、槍は卽ち下郎が主人、槍から暇を取りはしねえワ。

官助　そりや此方も同じ事。主人に譬へしその槍を、間違へたのは下郎が不念。拙者が體はどのやうになさるとも、いとひはせねど眼前に、主人をさみする今の詞。

主稅　なんだ〳〵、目に角立てゝ、主人の噂を聞いて、腹が立つなら相手になれ。

ト官助無念のこなしあつて、氣を替へ

官助　どう致して拙者めが、お相手なぞとは思ひもよりませぬ。お道具を間違へました、御立腹でござりますなら、下郎めをどのやうにも、御存分に遊ばされ、御料簡なされて、手前どもの槍を、お返しなされて下さりませうなれば、有り難うござります。

主税　成る程、涙をこぼし、それ程までに頼む事なら、隨分返してやらう。
傳六　その不肖には今爰で、立派な槍持ちにあやかる爲、おれ樣のお御足を

ト官助の肩へ足を踏みかける。

官助　サヽ、いかやうとも存分に
鄕内　オヽ、望みならおいらまで、中間仲間の附合ひを
權藏　うぬが五體へしつかりと、覺えるやうに敎へてやらう。

ト三人寄つて官助を、さん〲に打擲する。

官助　サア、これ程になされたなら、どうぞ拙者がその槍を
主税　いかにも返してやらう。この後きつと間違はぬやうに、印しを附けて返してやらう。

ト足にて槍を踏み折り、官助の前へ抛り出す。官助悄りして

官助　ヤヽ、主人より預かりの、槍を眼前この通り。ホヽホイ。
皆々　ハテ、いゝざまだ。ハヽヽヽヽヽ。
しも　ほんにマア、あんまりなあなた方。
小平　コレ、又しても差出るか。

しも　それぢやというて。

小平　コレ、われが口を出すと、此方の懸り合ひになるワ。

主税　ハヽヽヽヽ。これ程に苛なまれても、刀の柄へ手を掛け得ぬ臆病者。主が主なら家來まで、見下げ果てたる大腰拔け

しも　厄病神で敵とやら。

傳六　これで少つとは先刻の意趣が

主税　ハテ、いゝざまだ。

官助　あまりと云へば。

主税　大べら坊め。

ト蹴倒し

サア、來やれ。

ト主税先に、皆々附添ひ、時の鐘にて東の口へ入る。

しも　ほんにマア〳〵、側で見てさへ腹の立つ。あなた、さぞ口惜しうござりませう。體は痛みは致しませぬか。

ト いろ〳〵介抱する。

小平 エヽ、この女は、いらざる所へ氣を揉む奴。よく〳〵惡い事があればこそ、あんなに酷い目にあつても、手出しもしないのサ。思へば〳〵、弱い侍ひだ。

しも お前までが其やうに。

小平 ハテ、こんな者に構はずと、奥へ來い。

しも それでもお前

小平 ハテ、來いといふに。

ト小平次、無理にお霜を引立て、奥へ入る。

官助 エヽ、口惜しいなア。こり身に望みあるゆゑに、ヂッと無念を堪へるも、親への孝行。孝を立つれば主人より、預かり置きし槍を折られ、此まゝ置けば主人へ不忠。未來の孝と現世の忠、こりや官助が一生懸命。ムウ。

ト思案の思ひ入れ。奥より伊太八出て來り

伊太 そこに居るは官助ではないか。まだ參らぬか。

ト官助、思ひ入れあつて

宮助　旦那樣、私しにお暇を下さりませ。

伊太　ムウ、思ひ込んだその樣子。最前申した親の敵の、在所でも相知れたか。

宮助　イエ、未來の親の敵より、差あたる主人の敵。

伊太　ヤ、なんと申す。

宮助　サア、一生にない拙者が麁相、最前の侍ひと、互ひに夜の立ち際ゆゑ、お道具を取違へ、とつて返して詫び致せど、先刻の遺恨を含みまして、此方の槍をこの如く、土足にかけて打折りました槍は武士の表道具、即ち拙者の主人は槍、その槍を折られては、どうもあなたへ申し譯が立ちませぬ。これから直ぐに跡追ひかけ、槍の仕返しを仕りたうござります。

伊太　すりや、最前の遺恨を根に持ち……その侍ひは、上りか、下りか。

宮助　藤澤宿へ今夜夜通し。

伊太　ムウ。遠くは行くまい。某が

ト急いで行かうとするを、宮助とめて

宮助　アヽ、イヤ〳〵、あなた樣のお手を下ろさせましては、拙者の役目が立ちませぬ。どうぞ下郎にお暇を

伊太　その願ひ尤もなれど、其方は大事の親の敵、討たねばならぬその命。

官助　サア、その望みゆゑ今までに、ヂッと辛抱いたしましたが、こりや私し事、孝に替へるは即ち忠義。奉公いたせば、拙者が命は主人の物。運に叶つて仕負ふせなば、その後願うて親の敵。まづ差あたる現世の忠義。

伊太　成る程、その心なら、仕負ふせぬ事もあるまい。併し相手は多勢の事。其方は腕に覺えがあるか。

官助　エ……まだこの頃の武家奉公、人切る覺えはなけれども、死物狂ひに働きなば

伊太　ムウ、敵持つ身の性根試しは、これ屈竟のこの仕返し、其方に申しつくる。コリヤ、この刀は、中心は無銘の鈍刀なれど、鍔は鍛へし南蠻鐵、この鍔許にて向うの眉間、打ち砕きなば勝は取れる。コレ、必ず中心を當にするなよ。

ト刀を渡す。

官助　ハッ、お心あり氣なそのお詞、拙者も嗜むこの魂ひ。

伊太　ハテ、一手も知らぬ其方が、名作物を帶せしとて、役には立たぬ。莫耶が劍も持ち手に依る。身が與へたる鈍刀ものでも、鍔を便りに打ち込みなば、先を取るは案の内。其方が刀は身共へ渡せ。

官助　然らば暫時、あなたの刀を

ト兩人取替へ

伊太 必ずともに遲れぬやう、くれ〴〵もその鍔にて

宮助 向うの眉間を打ち碎き

伊太 運きはまつて命を落すとも、其方が魂ひ預かりあれば、親の敵はこの刀にて、即ち身共が討つてやる。

宮助 ハツ、それ承れば、心に殘る事もなく

伊太 心よく今の仕返し。

宮助 命に替へて仕負ふせませう。

伊太 屍は泥土に晒すとも

宮助 忠義の美名を

伊太 殘すが肝腎。

宮助 旦那樣。

伊太 早く行け。

宮助 ハツ。

ト時の鐘になり、官助一散に向うへ入る。伊太八、跡見送り

伊太 ハテ、小者には健氣な奴、一心凝つたる五體は鐵石。多勢なれども高の知れた、相手は愚人。よもやあれでは、ムウ。

ト思ひ入れ。奧より仁太郞、片肌脫ぎにて、團扇を持ちながら出で來り

仁太 アヽ、蚤がくつて、さつぱり寢られぬ晩だ。イヤ、あの牛島どのは、おれを出し拔いて立つたと見える。これから鎌倉の、屋敷へ仕掛けてくれべい。

トこれを聞いて伊太八、仁太郞の腕の彫り物を見極め

伊太 合ひ宿のお侍ひは、こなたの連れ衆でござるか。

仁太 左樣サ、連れでもござりませぬが、用があつて、爰まで附いて來ました。先へ立ちましたさうな。

伊太 こなたは侍ひではないか。

仁太 イヽエ、わしは職人でござりやす。

伊太 すりや、いよ〳〵……ハテナア。

ト時の鐘になり、向うより宿役人、平塚宿と書いたる弓張りを持ち、宿帳を提げ、出て來り

役人 ハイ〳〵、お泊りでござりまするか。宿帳を附けまする。御家名は。

伊太 イヤ〳〵、此方は、いま家來を小田原へ先へ遣はし、手前も駕籠が來次第、後から出立いたす者
泊りではない。
役人 エヽ、左樣なら附けるには及びませぬ………モシ〳〵、其方のお若いの、お前は、お上りか、お
下りか。
仁太 わしは下りで、所は鎌倉、大工の仁太郎といふ者だ。
ト伊太八思ひ入れ。
役人 アヽ、所は鎌倉、大工仁太郎。
ト帳へ記し
筆墨代四文。
ト仁太郎、莨入れより錢を出してやろ。
役人 旦那、早うお立ちなされませ。
ト役人、向うへ引返して入る。伊太八、仁太郎を尻目にかけ
伊太 所は鎌倉、職分は大工、蝮の仁太郎。
仁太 エ、旦那はよく御存じだね。

伊太　然らば、いよ〳〵其方が

仁太　アイ、腕の彫り物、これを異名に蝮の仁太郎といふ、大工のごろつきサ。

伊太　ムウ、自身の白狀、遁れはあるまい。

ト引附ける。仁太郎悧りして

仁太　ヤ、なんでわしをば

伊太　三祐ケ谷にて大工の棟梁、船越十右衞門を手にかけし大罪人。

仁太　ヤア、それ知られては

ト逃げ出すを、伊太八取つて押へ

伊太　うぬ、逃げるとて、逃がさうか。

ト下げ緒にて早繩をかける見得。禪のツトメにて、この道具廻る。

本舞臺、向う一面の川、小石などを書き割りし張り物、前側蛇籠、上の方に松の立ち樹、同じく吊り枝、下手に馬入川と書きし傍示杭、すべて河原の瀨の道具。禪のツトメにて道具納まる。

ト爰に主税、傳六、權藏、鄕內、立ちかゝりゐるを、官助とめてゐる。松、又、六、八、以前の雲助

にて立ちかゝりゐる。

官助　サア、お侍ひ。最前の槍の返報。その仕返しに今爰で、主從一々首を並べる。覺悟きはめて出さつせえ。

主稅　ハヽヽヽヽ、及ばぬうぬが腕立ては、飛んで灯に入る夏の蟲。石を抱いてこの淵へ、その身も共に馬入川、小砂利と共に流れてうせう。

官助　小癪な事を。主人が教への南蠻鐵、おのれが眞向

ト拔討ちに主稅に切りつける。額を押へて

主稅　者ども、ソリヤ。

皆々　合點だ。

ト禪のツトメになり、大勢寄つて官助をしたゝかに打ちのめす。官助、打たれながら、無性に刀を振り廻す。ごつちやの立廻り、官助、手を負ひ、皆々を無暗に切り倒す。主稅切つてかゝる。官助危ふき立廻りのうち、伊太八、仁太郎を縛り、これを引ツ立て、走り出て來り

伊太　官助々々。其方が親十右衛門を手にかけしは、それなる牛島主稅に相違ない。親の敵だ。取逃がすな。

宮助　さてこそ、おのれが

　トまた立廻つてとめる。

主税　さういふ聲は先刻の侍ひ。この牛島を、なんで敵と

伊太　今さら包むは卑怯な奴。卽ち捕へしおのれが相摺り、蝮の仁太郎殘らず白狀。

主税　ヤヽヽヽヽ。

仁太　モシ〳〵、もう叶ひませぬ。殘らずわしが云つてしまつた。

主税　さう顯はれたら仕方がねえ。助太刀の侍ひもろとも、みな合點か。

皆々　心得ました。

　トこれより鳴り物になり、多勢は伊太八に打つてかゝる。伊太八、皆々を切り散らす。仁太郎、縛られたまゝ逃げようとする。

伊太　宮助、逃がすな〳〵。

　ト云ひながら大勢と切り結ぶ。宮助、仁太郎を引寄せ、「親の敵」と無性に切る。仁太郎苦しみ、縛られしまゝの立廻り。伊太八、皆々を切り散らし、トヾ主税と立廻り、刀を打ち落し、襟髪を捕へて

サア宮助、これぞ誠に親の敵、思ひのまゝに、抉れ〳〵。

宮助　この年月の千辛萬苦も、皆おのれ等ゆゑ。思へば〳〵恨みの刀、覺えたか〳〵。

ト腹へ突き立て、抉る。主税もがくを、伊太八押へつけてゐる。トヾ宮助、主税に止めをさす。

伊太　出かした〳〵。

宮助　これにて下郎が日頃の本望、達しましたも主人のお庇。太刀の一手も知らぬ下郎、鍔にて打てとのお教へは、踏み込まして腹切らせんとのお計らひ。天晴れ鍛へしこの業物。所詮深手のこの宮助、侍ひの名聞には、この名作にて、まツこの通り。

ト腹へ突き立てる。

伊太　ハテ、我が心を、よくも推察。あつたら惜しき若者なれど、望み叶うて切腹なすは、武士の本懐。

宮助　ハヽア、斯くまで深き御仁心。弟の二人、幼名は七郎助、末の弟は六三郎、この者どもへお逢ひなさらば、拙者が親の敵討、本望遂げて相果てしと、お知らせなされて下さりませ。

伊太　すりや七郎助、六三郎、兄弟の者にめぐり逢ひなば、よしなに傳へん。心殘さず成佛せよ。

宮助　ハツ、有り難い。

ト向うバタ〳〵になり、小源次、權平、立廻りながら出て來り

小源　ヤヽ、こなたは伊太八さま。御主人様の一大事。

伊太　ヤヽ、尾上之助さまの大事とは。

權平　野郎め、觀念。

ト立廻つてキツとなり

小源　お聞きもあらん岩藤玄蕃、二の宮さまへ戀慕の意趣。主人尾上之助さま、殿中にて草履の咎。その遺恨やむ事なく、旦那樣には岩藤の、屋敷へ仕かけ討ち果さんと、お出でありしが下郎の鴈助内通を致せしゆゑ、却つて主人を押ッ取卷き、それゆゑ是非なく尾上之助さま、彼れが屋敷で御生害。

伊太　ヤヽヽヽ、すりや岩藤は安穩にて、御主人には御生害とな。

小源　あなたばかりか祐信さま、寶の二品失ひし、その申し譯立ち難く、直さまその日に、祐信さまも御切腹。

伊太　ムウ、祐信さまといひ尾上之助さま、現在主人の生害も、敵は即ち岩藤玄蕃、なに安穩で置くべきか。

官助　驚き入つたる曾我家の騷動。下郎は未來の尾上之助さまへ、この由を御注進。

伊太　やがて御無念晴らさせんと、傳へよ官助。

小源　すりや岩藤を、伊太八さま。

伊太　古主の曾我に初平の、手形證文殘る上は、首尾よくこれを申し請け、御主人の暇を取り、その上にては岩藤め、鐵石の洞に隱るゝとも

官助　首尾よう本望。

早おさらば。

トこの時後より鄉內は伊太八、權平は小源次へかゝるゆゑ、ちよつと立廻り。トがつくり落ち入る。伊太八、小源次、愁ひの思ひ入れ。伊太八、氣をかへ

伊太　おのれ、岩藤。

ト鄉內を投げる。木の頭。伊太八、向うを見込む。小源次、權平を引敷く。キザミにて、よろしく、ひやうし　　幕

第一番目　五建目　　鳴立澤庵室の場

（作者　松井幸三）

役名――曾我十郎祐成。曾我五郎時致。母、滿江。大磯の虎御前。劍澤彈正左衞門。坊主、寒心。同、閑坊。鬼王新左衞門。若黨、友八。仲居、お高。同、お秀。幇間、鰐助。同、介八。遣

り手、お爪。下部、初平實ハ尾上伊太八。

本舞臺、正面、藁葺き二間の屋體、左右の庭先き卯の花の生垣、つくばいの手水鉢、鳴立澤と記した
る石碑、いつもの所に枝折り戸、この外に虎ヶ石あり、幕の内より寒心、頭巾、麻衣にて、旅僧の形。
閉坊、所化の形にて門口に立ちかゝり、お高、赤前垂れ、仲居の拵へにて、竹箒を持ち、庭の掃除を
してゐる。すべて東海道鳴立澤の體。雨車、雷の音にて幕明く。

三人　桑原〳〵。

ト雷に恐るゝ思ひ入れ。

寒心　雲雷鼓掣電降雹澍大雨念彼觀音力。

閉坊　モシ、お師匠樣、また光りました。南無阿彌陀佛々々々々々々々。

たか　この雷さんの鳴るのに、心ない物貰ひ。出たのが無い、通らつしやい〳〵。

寒心　イヤモウ、通りますとも〳〵。愚僧は通りたうてなりませぬ。この雷では一足も行かれぬ。コレ
閉坊、爰の内を頼み、一宿いたさうではないか。

閉坊　それは何よりの思し召し。あの女中を頼み、一宿はどうでござりませう。

寒心　イカサマ、あの女中に一宿を頼んで見やれ。

閉坊　畏まりました。

ト思ひ入れあつて、狂言詞のやうになり

なう〳〵、それなる女性。この所は何と申す里にて候ふ。

たか　爰は鴫立澤の庵でござんすが、仔細あつて祐成さんがお借りなされたゆゑ、虎さんと一緒に、今日爰へ餘方行きでござります。

寒心　さては音に聞えし鴫立澤。然らばこの所に、虎ケ石といふ石あつて、女の愛に深き者は輕く上がり、また女に縁遠き者は、持ち上げる事ならぬと聞き及ぶ。

閉坊　そいつは奇妙。あの女中が承知して、宿を貸すか、貸さぬか。この石を持ち上げて、見得を見るでござりませう。

ト門口にある石に手をかけ、上がらぬ思ひ入れあつて

なか〳〵私しには持ち上がりませぬ。

寒心　それは何とも悪い見得ぢやが、何にも致せ、一應申して見やれ。

閉坊　合點でござります。……コレ〳〵、お女中樣、我れらは旅の僧でござるが、この夕立に跡へも先

へも行き難し。願はくは一宿をお許し下さるまいか。

たか　お易い事ではござりますが、爰は宿屋ではござりませぬ。これより先に梅澤といふ立場がござんす。これをお頼みなされませ。

寒心　御尤もの事ながら、我れらは木の端か、炭の折れといふやうな坊主、色事の用心なら、氣遣ひはござりませぬ。

たか　イエ〱、今時の坊さんと夏の空は、油斷がならぬわいな。

兩人　すりや、どうあつても

たか　脇をお頼みなされませ。

ト門口をピッシャリ締める。

閉坊「おいとしやと奥へ行く。」

ト淨瑠璃を語る。此うちお高、奥へ入る。

寒心　何を申す。

閉坊　とはいへ、つれない。

寒心　コレ、野に臥し、餓に勞れ、難行苦行は佛の行ひ。

閑坊　それは釋尊、これは又

寒心　さしかゝつたるこの難儀、推して頼まば佛意に叶はず。

閑坊　しつこい坊主に旦那がない。

寒心　緣なき衆生は度し難し。雨の晴れ間に

兩人　片時も早く。

ト兩人花道の方へ行きにかゝる。この時、屋體の内にて

鬼王　なう〳〵御出家、お宿いたさう。オヽイ〳〵。

兩人　ヤ、何と云はつしやります。

トつか〳〵と舞臺へ戻る。此うち簾卷きあげる。正面に打敷をかけ、一段高き上に逆澤瀉の鎧を飾り二つの位牌に香華を手向け、長押に長刀掛けてあり、この前に鬼王新左衞門、木綿やつし、風呂敷を前垂れにし、木鉢重箱を取散らし、柏の葉に包みし團子を拵へてゐる。兩人、この體を見て

寒心　おてまへは御庵主と見受けましたが、すりや、いよ〳〵我れ〳〵を

兩人　お泊めなされて下さるか。

鬼王　なにサ、わしは爰の庵主ではない。以前は大名の家老であつたが、いろ〳〵の不仕合せゆゑ、身

性をしまうて、主従一緒に、この鴫立澤に假住居。

寒心　佛前を見ますれば、二つの位牌に香華を手向けてござるが、御命日でござるか。

鬼王　左様サ、あの位牌はわしが主人、今日が逮夜ゆゑ、團子を拵へます。

寒心　イカサマ、よしある人の果と見えて、床に飾りし鎧一領。

鬼王　長押に掛けしは先祖の譲り、錆びたれども長刀一振り。

閉坊　どうやら佐野の船橋に、似た山坊主の我れ〱に

鬼王　馳走は粟の飯ならぬ、柏に包みしこの團子。

閉坊　一つ下さい、お供の愚僧に。

ト重箱へ手をかける。

鬼王　コレ、まだ佛様へ上げませぬ。

閉坊　ところを一つ。

トまた取りにかゝる。この時、雷烈しく鳴る。鬼王、雷に恐れ、思はず重箱を取落す。閉坊、團子を取りにかゝる。鬼王、寒心、支へる立廻り。トゞ、鬼王、閉坊を蹴り倒す。寒心、鬼王、顔見合せ

兩人 ハヽヽヽヽ。

ト思ひ入れ。

寒心 ドリヤ、御回向いたしませう。

ト雷の音になり、簾、バラ〳〵と下りて、この道具廻る。半分頃より百萬遍の鉦、越後甚句にて道具とまる。

本舞臺、三間の間、平舞臺、上の方、一間の障子屋體、下の方、竈、鍋釜、水瓶、その外勝手道具あり、椎の木の鉢植を三つ並べ、いつもの所に門口、よき所に封印したる大革文箱、酒肴を取散らし、爰にお高、お秀は仲居。お爪の遣り手。介八、鰐助、幇間にて、甚句を踊り、祐成、寢卷姿にて百萬遍の音頭を取り、文字野、禿にて、皆々と百萬遍の珠數を繰つてゐる。虎御前、床着の形にて、祐成に寄り添うてゐる。甚句、雷の音、責め念佛にて道具とまる。

皆々 桑原だんぶつ〳〵。

介八 明日は庄屋さんの稲苅りだ。やらかせ〳〵。

つめ ヤレ〳〵、ひどい雷様。どうやらちつと靜かになつたやうぢやが

ひで　虎さんは雷嫌ひゆゑ、百萬遍と甚句で、紛らして居りました。

たか　ひよつと太夫さんが、お癪でも起つたら、どうせうとお案じ申しました。

鰐助　雷もやんだ樣子、百萬遍のハネをつけようではござりませぬか。

祐成　コレ〳〵、念佛の音頭は祐成ぢやが、百萬遍のハネをつけるとは、どう致すのぢや。

介八　ハテ知れた事、念佛のハネには、願以主功德がお定まり。

虎　その願以主功德とやらは、色事ならばトヾのしまひ、祐成さんと譯ある仲には氣にかゝる。必ず其やうな事云うて下さんすな。

祐成　また愚痴な事を云やるか。其方とわしが仲は比翼連理、切つても切れぬ深いえにし。鎌倉と違ひこの所に假住居すれば、誰れに遠慮もない。いつまでもわしの側に

虎　わたしもその事を聞いたゆゑ、親方さんに願うて、見舞ひがてらに今日の餘所行き。

祐成　今に始めぬ其方の深切、可愛の者や〳〵。

ト思ひ入れ。皆々見て

皆々　イヨお二人樣、出來ました〳〵。

祐成　サア〳〵、これからが、酒ぢや〳〵。

皆々　一つお上がりなされませ。

ト合ひ方になり、酒盛りになる。此うち奥より鬼王、團子の重箱を持ち、出て來り

鬼王　これは〳〵、祐成さま、これにござりまするか。虎さまを始め、いづれも御苦勞に存じまする。麁末な物ながら、お茶でも飲んで下さりませ。

ト重箱を出す。お爪見て

つめ　オヤ〳〵、わたしの好物なお萩かえ。モシ、鬼王さん、今日の法事はえ。

鬼王　これは、さる佛樣の逮夜、心ばかりを營みます。ゆるりと茶でもあがりませ。

鱈助　それにしても、人も知つたる曾我のお屋敷。どういふ事で、この鴫立澤にゐでゞござりまする。

祐成　成る程、其方衆には合點がゆくまい。曾我の十郎祐成とも云はるゝ者が、斯樣な所に假住居いたすも、親ども河津さま御最期の後は、兄弟二人、祐信さまの養子となつたれど、母滿江さま、祐信さまのお心に叶はず、不緣になつたばつかりに、我れ〳〵兄弟、鬼王もともに、曾我の屋敷を梵天國、それゆゑこの所に借家住居。なんと洒落たものであらうがな。

虎　その噂も聞いたれど、かゝりや繫がるわたしが悲しさ。祐信さまも聞へませぬ。一度養子となさ

れし御兄弟、何の譯かは知らねども、母樣もろとも御離緣され、腹變りの御兄弟、禪司坊さまとやら、御出家ありしを呼び戻し、尾上之助さまと名を改め、祐信さまのお跡目にて

鬼王　曾我のお家は立つたれども、岩藤どの、佞姦にて、尾上之助さまは果敢ない御最期。祐信さまもその事をお聞きなされ、お腹を召されたお家の騷動。御勘當は受けたれど、一度主人と賴みしゆゑ、七日の逮夜も心ばかりサ。

ひで　それで法事の譯は知れたれども

つめ　なんでお萩を柏の葉へ、包むのでござんすえ。

鬼王　ハテ、こなた衆も知つてゐる、祐成さまと虎さまの、仲へ出來た千壽丸さま、今年は初の節句ゆゑ、法事のお萩やお團子を、柏の葉へ包んだは、佛事で初の節句をする、なんと好い思ひつきであらうがな。

つめ　流石は曾我の御家老樣。

鰐助　イヤハヤ、感心いたしました。

虎　一兩日顏も見ませぬが、千壽はどれに居りますえ。

鬼王　奥の別間で滿江さまと……イヤ、滿江さまではない、お乳の人が、お守り申して居りまする。

祐成　コレ〱鬼王、乳母は食物が大事と聞けば、入用に構はず、鯛をたんと取つて遣はせ。
鬼王　滅法界な事を。
祐成　必ず倹約いたすな。今日は若が初の節句。皆の者へ祝儀を取らせい。
鬼王　モシ〱、祝儀どころが、晩に炊く米がござりませぬ。
祐成　コレ、氣のきかぬ事を申すな。早く金奉行へ申しつけ、祝儀を取らせい。
鬼王　それぢやと申して。
祐成　コレ、あたりへ心を
　ト思ひ入れ。
鬼王　畏りました……ドリヤ、伊勢甚を呼びにやらうか。
　ト雨車、遠雷の音、双盤の入つたる合ひ方になり、鬼王奥へ入る。皆々捨ぜりふにて酒盛りになる。此うち向うより伊太八、中間の形、赤合羽にて、竹笠をかむり、一升入りの油樽を持ち、思案の體にて出て來り、花道にて舞臺の様子を見て
伊太　大分内が賑やかだが、ハヽア、今日は御主人方のお逮夜ゆゑ、百萬遍か。南無阿彌陀佛。
　ト門口へ來り、内を見て

何の事だ。念佛と思ひの外、虎どのを始め廓の衆。ハテ、思ひがけない。

虎　お前は初平どの、お使ひに行かしやんしたかえ。

伊太　旦那樣、只今戻りましてござりまする。

祐成　其方は大分遲く戻つたが、今まで何をして居つた。

伊太　油を買ひに參りましたが、久しくお拂ひをなされぬゆゑ、先で油を寄越しませぬ。

祐成　コレ、廓の者も聞いて居る。滅多な事を申すな。油の買ひがゝりは、金奉行へ申しつけ、殘らず拂つて遣はせ。

伊太　その金がある位なら、云ひ分はござりませぬ。まだ蚊帳の損料も

祐成　まだ吐かすか。主人の使ひに參り、何ゆゑ斯樣に遲刻いたした。おのれ、どこへか穴入りして居つたな。

伊太　イエ／＼、全く以て、

祐成　申すなおのれ、どこのたほと、ちん／＼鴨を致して居つた。

伊太　なか／＼左樣な事ではござりませぬが、遲刻と仰しやれば、申し譯もない仕合せ。御意に叶はぬ下郎なら、是非がござりませぬ、何時なりともお暇を下さりませ。

祐成　イヤ〳〵、その儀は罷りならぬ。使ひに出せば遲く歸り、嘘ばかりつく奉公人。其やうな勤め方では、いよ〳〵目をかけて使はねば相成らぬ。

伊太　それは迷惑な儀でござります。下郎めも、何がな不埒を致し、首尾よくお暇が出たなれば、古主の無念を散ぜんと……イヤサ、最前のお役、遲刻の段は、眞平御免下さりませう。

虎　あのやうに云はんすからは、もう堪忍してあげなさんせ。

祐成　外ならぬ虎が挨拶ゆゑ、今日のところは差ゆるす。以後をきつと嗜み居らう。

伊太　すりや、御堪忍下さりますか。ハテ、有り難迷惑な。

ト鉢植を見て

見ますれば、お物好きなるこの鉢植、曾我のお家にとりましては、見るもいぶせき椎の木三本、こりや何方よりの御到來でござりまする。

虎　輕少ながらその品は、わたしが手土産、佛前へ。

伊太　ハテ、心有り氣なこの鉢植……イヤモウ、種がはりのこのお持たせ、河津さまを初めとして、未來でさぞやお喜びでござりませう。

虎　喜びといへば、お前は尾上之助さまの御家來であつたれど、何やら首尾がよろしうて、出世なさ

んしたと聞きましたが、それに引替へ、その姿は。

伊太 成る程、一度直参に取立てられ、旦那の家名を其まゝに、尾上伊太八と改名いたし、大小差す身になつたれど、誠にそれも一夜撿校、尾上之助さまの事を思へば、どうして侍ひになつて居られませう。一つ間違へば命道具。アヽ、恐ろしの侍ひ奉公。川だちは川とやらで、矢ツ張りもつさう飯が身に相應。それゆゑ、満江さまや御兄弟方にお願ひ申し、元の杢阿彌、下郎の奉公。

つめ そりやお前の好い思し召し。ハテ、なぜと云ひなさんせ、鎌倉第一のお羽利き、岩藤さまに楯をついたばつかりに、尾上之助さまは身の破滅。

たか これはしたり、御兄弟の祐さんの前で、滅多な事を。

祐成 その心配は無用々々。成る程、其方が申す通り、腹替りの兄弟なれど、尾上之助は不料簡。侍ひの道を守り、思ひがけない身の破滅。それを思へば此やうに。虎が側に居て世を樂しむは、喜見城ではあるまいか。

伊太 ハテナ、同じ古主といふ内にも、下郎が親は鶴賀甚内と申して、祐安さま御親子には、大恩を受けし者、その悴の私しゆゑ、何卒主人の妄執を、晴らさんにも蟷螂が斧。

祐成 そりや何を申す。母満江を始め、曾我の屋敷を追ひ出され、赤の他人の祐信さま、今日の逮夜は

營めども、ゆかり無ければこの通り、廓の者を呼び寄せて、佛前にて魚肉の酒もり。其方も一つ飮む氣はないか。どうぢや〳〵。

伊太 イヤ〳〵、私しは酒は不調法でござります。まして魚肉は古主の逮夜、七里けつぱい〳〵。

祐成 ハテ、武張つた事を申す奴。ところを我れら一向に構はぬ。子までなした虎を側に、一日の樂しみは百年の齡ひ。親子揃うてめでたい〳〵。コレ、千壽をこれへ、連れて參れ〳〵。

鬼王 ハイ〳〵、畏まりました。

ト合ひ方になり、奥より滿江、誂らへの形、抱子を懷へ入れ、鬼王閉坊附いて出て來り、赤子啼くを、鬼王見て

オヽ、おむづかるな。

閉坊 この子の啼くも、腹がへつたのでござらう。わしもどうやら腹の加減が

鬼王 モシ〳〵、若樣がおむづかりなら、お前のしなびを、しやぶらせてはどうでござります。

滿江 オヽ、いんの子〳〵。

ト思ひ入れあつて

世の盛衰は是非もない。河津どの御存生にてあるなれば、初孫の初節句、相應の飾りもあるべき

に、甲斐なき婆が懐を、玉の臺に寝顔の和子。血筋とはいひながら、斯うまでよう似た

ト祐成を見て思ひ入れ。祐成、こなしあつて

祐成　サア〳〵、爰にも一人、石部屋のお金と申す、婆が一人見えられた。

ひで　そんならお前は、千壽さまのお乳母どのかえ。

たか　モシ〳〵、お針さん、そのお子を爰へ連れて來て、お前も一つおあがりでないか。

伊太　コレ〳〵、滅多な事を云はつしやりますな。あなたは曾我さまの

滿江　アヽコレ、わしは滿江とやらではない。和子様のお守り役、お針も兼ねる乳母でござるわいなう。

虎　そんならお前は……ハテナア。賤しからざるお年寄り、その面ざしも祐さんに……もしや、あなたは

滿江　コレ〳〵嫁女……イヤサ、廓のお女中、わしは其やうな者ではござらぬ。滿江とやらなれば、なんで此やうな麁服を着て居りませう。矢ツ張り乳母でござるわいなう。

虎　ハテ、お人柄のお守り役、随分千壽を、可愛がつて下さりませ……コレ、お爪とん、あの婆さんへ、お土産をあげて下さんせ。

つめ　ハイ〳〵、畏まりました。

ト巾着より金を一分出し、紙に包み

サア、婆アどん、太夫さんがお前へ御祝儀。

ト出す。滿江、件の金を取り、押戴き、思ひ入れあつて

滿江　これは〳〵、馴染でもないお女中樣、有り難う存じます。

ト思ひ入れ。伊太八、鬼王見て

伊太　モシ、あなたはそれを取らつしやりますか。

滿江　ハテ、人樣の志し、有り難う頂戴いたしますわいの。

伊太　移れば變る世の成行き、人知らぬこそ幸ひに

鬼王　それと云はれぬ身のほつれ、鴫立澤の夏ながら

虎　かをりゆかしく吹く風も、近き箱根の山おろし。

滿江　肌ばかりか心まで、寒さ身に滲む憂き世界。

祐成　これを思へば世の中に

鬼王　四百四病の病より

滿鬼　貧ほどつらい

祐成　オツト待つたり、今時分其やうな事を申すは、夏過ぎの筍に食傷するやうなもの。何事も取措いて、わつさりと、酒にせい〳〵。

介八　それがよろしうござりませう。併し、爰であがりましては、氣が變りますまい。

鰐助　虎さんと御同道で、廓で飲み直しはどうでござりませう。

祐成　太夫を連れて跡から行く。鬼王も先へ參り、いつもの藝子どもを、合點か。

鬼王　ハイ〳〵、畏まりました……旦那からの御祝儀は、この鬼王が呑みこみました。

閉坊　わしにもどうぞお夜食を。

鬼王　萬事は胸に

皆々　有り難うござります。

伊太　御養父の逮夜も構はず、あなたは矢ッ張り大磯へ

祐成　すゝ、行くとも〳〵。若いが二度は無いと申せば

滿江　人間不定芭蕉葉の、露と消えゆく赤澤を

鬼王　思ひ出せば、この椎の木、奥へ直して

虎　せめて佛間で

閉坊　愚僧が囘向を

滿江　そんなら嫁女。

虎　エ。

滿江　ドリヤ、看經しませうか。

ト唄になり、滿江は子を抱へ、跡より閉坊、椎の木を持つて奥へ入る。鬼王先に幇間仲居皆々向うへ入る。あと合ひ方になり、祐成、虎、伊太八殘る。

祐成　イヤモウ、大勢來をつたで、心遣ひの所爲かして、いかう肩が凝つて來たワ。アイタヽヽヽ。

伊太　左樣なら私しが、無作法ながら捻つてあげませうか。

祐成　それはよからう。賴むく。

虎　其うちわたしや爪先へ、逆上を下げる傘灸。ほんに禿も行きやつた。わたしが手づから

ト艾を出して、ほごす。

伊太　祐成さまの張りつめた、お肩をちよつと、ドリヤ、揉んであげませうか。

ト相の山になり、伊太八は祐成の肩を揉む。虎は手づから爪先きへ灸をすゑる。この時向うより彈正、

着流し、一本差し、一文字の編笠にて、胡弓を磨つて出て來り、門口に彳む。伊太八思ひ入れあつて

虎　これは幸ひ、虎さまの灸するゐに、門口へ來た物貰ひは、祐成さまと花魁か、廓でしつぽり相の山末はめでたう御夫婦に

女夫になつたその當座は、定めし花見遊山には、度々行くでござんせうが、取分けわたしや其うちに、芝居見に行きたうござんす。

伊太　成る程、芝居見物はよろしうござります。その時は私しもお供いたして

ト云ひながら揉む。

祐成　アヽ、初平は、芝居が好きか。

伊太　イヤモウ、飯より好きでござりまする。歌舞伎芝居のうちでも、あの八百屋お七の狂言に、灸するゐの所へ、相の山が來まする。丁度此やうな仕組みでござりますが、まづ差づめ私しが、八百屋のお七、大和屋氣取りで此やうに……打てば打たるゝ櫓の太鼓。

ト聲色を使ふ思ひ入れ。

虎　ホヽヽヽヽ、こりや面白うござんすわいなア。

伊太　イヤ、お前の前では、ちと厚かましいやつサ。ハヽヽヽヽ……イヤモシ、祐成さま、世話狂言ではお七は貞女。御覧じませ、娘の身で櫓へ上り、太鼓を打ちましたが、打てば打たるゝ櫓の太鼓。虎さま、お前、打たつしやりますか。

虎　そりや打つわいな。親夫の爲ぢやもの。太鼓はおろか、何によらず打つわいなア。

ト思ひ入れ。

祐成　イヤ、そこを打たぬぢや。

虎　アノ、祐さんは。

祐成　決して打たぬ。そこを、打たぬが誠の貞女、なぜと云やれ、いたづらに我が戀を、叶へん爲に打ちたる太鼓、それゆゑにこそ捕へられ、親兄弟に嘆きをかけ、その身も遂に淺ましい。

ト思ひ入れあつて

それも娘の小心を、綴りし狂言。

伊太　イエ／＼、そりや思し召しが違ひます。道を道に立てまするその時は、お七が太鼓はおろかな事、親の敵も打たねばならぬ身を以て、色に耽つて延び／＼に。その年月も十八年、討たずにござるは武士でない。申さば御未練。

トこの時祐成ふり返り、顔見合せ

祐成　ヤ。

伊太　これはしたり、話しにかゝつてウカ〳〵と、お七に敵は無いもせぬものを。ハヽヽヽヽ。

トまぎらす思ひ入れ。

祐成　然らば祐成、あの太鼓を

伊太　サ、父御へ大孝……イヤ、太鼓を打つべき祐成さまも

虎　打たぬはこれも

ト思ひ入れあり

わたしも灸の約まりは、山を見るとはいふものゝ、してマアどこの

祐成　山は富士ケ根、裾野の露を

虎　エ。

祐成　消ゆる間近き

ト三人顔見合せ

アヽ、浮世ぢやなア。

ト思ひ入れ。爰にて唄切れる。

伊太　折も折とて門口へ、耳かしましき相の山。

祐成　遣つて去なしやれ。

伊太　左様いたしませう。

ト ひねり銭を持ちゆき

袖乞ひどの、通つて下さい。

ト差出す。彈正取つて

彈正　これはお志し、有り難うござります。

ト内を窺ひ見て

して、この御別莊は、曾我の御老母滿江さまの

伊太　さうサ。それがどうした。

彈正　母御がこれにござるなら、兄弟二人も

ト思ひ入れあつて窺ふ。虎、こなしあつて

虎　ヤ、お前は爰へ。

ト立上がる事。

祐成　オヽ、其方、近附きか。

虎　イヽエ、存ぜぬ相の山。

彈正　錢は一錢二世かけし、虎が深間の

伊太　ヤ。

彈正　ハイ、忝うござります。

ト合ひ方、時の鐘になる。彈正、心を殘し、下手へ入る。跡に三人、各自思ひ入れあつて

祐成　イヤモウ、初平が按摩の所爲か、大きに肩が柔らいで來た。次手に久しぶりで

ト虎に戯むれる。

虎　これはしたり、また悪い事しなさんす。初平どのが見てぢやわいな。

祐成　アヽ、この者が居ては悪いか。然らば遠ざけませう。コリヤ〳〵、初平、われはどこぞに、用事は無いか〳〵。

伊太　イエ〳〵、爰もとには用事もござりまするが、外には決して用事はござりませぬ。

祐成　ハテサテ、それは困つたものぢやが、左様なら祐成が、用事を拵へてやらう。待ちやれ〳〵。

ト　よき所より大きなる文箱を出し

コレ〳〵、われはこれを持參して、ちよつと使ひに行て參れ。

伊太　ヘイ〳〵、畏まりました。この文箱を持ちましてか。

祐成　サア〳〵、早う行け〳〵。

ト文箱を持つたる伊太八を、無理に門口へ突き出す。伊太八、外へ出て

伊太　ヘイ〳〵、參ります〳〵。參りは參りますが、して、御用先は、どちらでござります。

祐成　それを、わしが存じてよいものか。

伊太　イヤ、これは怪しからぬお使ひだ。

祐成　イカサマ、其方、先の當が欲しくば、アヽ、いつそてまへの、勝手のよい所へ持つて行てくれ。

伊太　モシ〳〵、左樣ではござりませうが、私しが勝手な所へのお使ひは、御免なされませ。參りませぬ〳〵。

ト歸つてくる。

祐成　コリヤ〳〵初平、わりや切腹した尾上之助が、存生で居つたなら、詞は返すまいが、こりや古主の祐成ゆゑ、阿房に致すのか〳〵。

伊太　イエ〳〵、左様ではござりませぬが。

祐成　イヤ〳〵、わしが云ふ事を辨まへぬと、其方に暇をやらぬぞ、暇をやる事はならぬぞ〳〵。

伊太　左様なら、參ります〳〵。

ト文箱を持ち、不請々々に門口へ出る。虎、送つて出て

虎　お前、先の知れぬお使ひに行きなさんすのかえ。

伊太　左様サ、行かねばわしの願ひが叶ひませぬから。

虎　いつそお前、持つて行きなさんす文の宛名を見さんしたら、先のお方の

伊太　サア、さうも思ひますが、封が附いてござるから、滅多に切つては

祐成　封印切つても大事ない。行く心なら、われには許す。宛名をしかと。

伊太　さう仰しやれば、お許しうけて

ト封印を切り、蓋を明ける。中には件の草履の片足と、請け狀、外に祐成宛ての手紙出る。伊太八、取上げ見て

この書狀は親甚内、祐安さまへ有りつきし、奉公手形のその外に、祐成さまとばかりにて、送りし人の名も無き手紙、手跡は正しく祐信さまの

ト云はんとする。

祐成　アイヤ、曾我どのとは緣なき兄弟、赤の他人の祐成へ、祐信どのより送りしは、草履に添へしその書狀、養子たる尾上之助の、無念を晴らしくれよとある。其方への賴み。

伊太　すりや、私しへ祐信さま、いまはの際の送り狀。

祐成　添へたる手形は其方が親、悴を連れて我が父なる、祐安どのへ譜代の奉公。

伊太　請け人鬼王庄司左衞門、これを只今下されしは

祐成　河津の家の緣切つて、當時の主人へ忠義を立てい。

伊太　その御主人は尾上さま。

祐成　河津にあつては下郞の初平。

伊太　帶刀いたさば侍ひ分、また改めて尾上伊太八。

祐成　家名の尾上が存念を

伊太　晴らさせくれよと祐信さま

祐成　宛名も憚かる今際のお賴み、それゆゑ手形は

伊太　下し置かるゝ御恩のほど

祐成　縁は切れても一人の母親
伊太　すりや、御兄弟には
祐成　母に先立つ不孝の兄弟。
虎　その不孝には誰れがさす。みんなわたしの
　　　ト思ひ入れあり
　側で見る目の
伊太　アヽモシ、合せ物なら
虎　離るゝ習ひ。離れ〴〵の
伊太　片足の草履、御無念晴らさす時節も近く
祐成　尾上之助の恨みは其方が
虎　殊には曾我にて失なふ二品。
伊太　所持する岩藤、館へ首尾よく忍び入り
祐成　二品首尾よう
伊太　取返したるその上にて、主人の恨み

ト きつとなる。

祐成　コリヤ……暇を遣はす。いづれへなりと。

伊太　すりや、お暇の出ました奴、お主が無ければ一本立ち、御恩のお暇、祐成さま。

祐成　初平。

伊太　おのれ岩藤。

ト 向うへきつと思ひ入れ。

虎　エ。

祐成　勝手に致せ。

ト 唄になり、伊太八思ひ入れあつて、件の品々を持ち、向うへ走り入る。

虎　何か仔細のありさうな、事とは見ても女子のわたし、殊に勤めのこの身の上。

祐成　身あがりしやつてわしへの心中、そこへ長居のあの初平、遠ざけた跡は其方と

ト 虎へしなだれ寄る。

虎　ぢやというて、今にも廓の迎ひの者が

祐成　見えぬ其うち

虎　アヽモシ、わたしや今宵は

祐成　ハテ、野暮を云はずと

ト引寄せる。虎、振切つて逃げるとて、思はず髷落ちる。祐成見て

ヤヽ、其方の髪は

虎　ア、これは

トつかへる。祐成、髷を取上げ

祐成　人も知つたる祐成が、深間といふは虎御前、それに女郎の附け髪を

虎　アイ、是非ないわたしや

祐成　ヤ。

虎　髪切つたのも有やうは

祐成　すりや祐成と深う見せ、外に語らふ

虎　お客へ餘儀なう

祐成　して、その客は

虎　サ、そればかりは

ト思ひ入れあり

云はれぬわいなア。

トこなし。暮れ六つの鐘。向うバタ〳〵になり、鬼王引返し來り

鬼王　申し、祐成さま、只今この庵へ、大層な供廻り、合點のゆかぬは廓の者も、打交つて參ります。

アレ〳〵向うへ、あの提灯。

トいろ〳〵向うを見るうち、時の太鼓になり、向うより庵に木瓜の箱提灯二張り、中間先に、跡より鋲打ちの女乘り物一挺吊らせ、友八、菖蒲革の侍ひにて、挾み箱、長刀持ち。駕籠脇にはお高、お秀附添ひ、供廻り大勢附き、足早に出て來り

友八　虎御前さま

皆々　お迎ひ。

ト扣へる。虎、思ひ入れ。祐成、こなしあつて

祐成　ヤヽ、打ち物とても持たせし同勢、見れば廓の女子も交り

ひで　武家の迎ひの事ゆゑに、祐成さんの御不審も

たか　あらうと存じて廓のわたし等、その證人にこの附添ひ、こちの花魁、虎さまを

兩人　お渡しなされて下さりませ。

鬼王　イヤ〳〵、どうも合點がゆかねえ。これには、定めし深い樣子が

　　ト急いて云ふ。虎、思ひ入れあつて

虎　用意の品は。

皆々　ハア丶。

虎　早う持ちや。

　　ト合ひ方になり、挾み箱より友八、襠襠を出し、女形兩人これを虎に着せる。祐成猶々心得ぬ思ひ入れにて、フツト心附き、笑を含んで

祐成　コレ、虎御前、迎ひの者の提灯は、庵に木瓜。アヽ、こりやア聞えた。こりや祐成の紋どころ。美々しく見せしは太夫の趣向か。

鬼王　こりやア出來ましたく〳〵。

友八　ヤア、趣向なぞとは緩怠至極。迎ひの身共は工藤の陪臣、御紋は卽ち、祐經さまより迎ひの爲。

鬼王　ハテナ、祐經さまより虎さまを、迎ひといふには、何ぞ仔細が

祐成　コレ〳〵、虎、其方は樣子を知つてゐやるか。

ト急いて云ふ。此うち柴垣の蔭にて

彈正　その仔細、拙者が詳しく云ひ聞かさう。

ト合ひ方になり、彈正、鉢かづら、上下大小に着替へ、ツカ／＼と出て、祐成を突きのけ、思ひ入れ

祐成　心得ぬお侍ひ、して、其許は。

彈正　最前門へ袖乞ひの、襤褸に隱せし相の山、誠は虎が實の兄、折よく妹は工藤の根引、その手蔓にて立身なし、今日より左衛門祐經の、近習を勤むる劍澤彈正、虎を伴ひ今日より、裾野の假屋へ誘ふ役目。祐成、膽が潰れたか。

祐成　ヤヽヽ、さては疾より祐成に、愛想つかせし虎御前。

鬼王　心變りもあるうちに、敵同士なる祐經に

祐成　根引さるゝを、ようマアこれまで

ト立ちかゝるを、彈正引附け

彈正　祐經さまのお部屋樣、虎に向つてその振舞ひ、指でもさしたら、ぶッ放すぞ。

祐成　でも、これまでに誓ひし詞。

トきつとなる。虎、思ひ入れあつて

虎　それもお前の心がら。現在父御の仇敵、それさへ討たぬ大腰抜け。よい客あらばと思ふうち、祐經さまが有り難い、身請けなされて廓の苦界、殊に流浪の兄上まで、お取立ての大恩に、ほだされしゆゑ身を任せ、お前と縁を切りやんす、證據は先刻に渡した切り髪。マア、さう思うて下さんせ。

祐成　すりやこれまでの誓ひも斷ち切り、この祐成を、工藤に見代へて。

虎　アイ、見代へまする。たかゞお前は部屋住みの、敵持つ身の素浪人、祐經さまは大々名、身請けさるれば、お妾、お部屋。見らるゝ通り鋲乘り物、殿の格式あやかつて、連れる時には千騎二千騎、連れざる時も百騎二百騎。身貧なお方に心中立て、人に笑はれ暮らすより、出世するのがこりや當世。襟許女郎と云はれても、名も取る上に得もあり、それゆゑ虎は假屋へお伽、必ずこの上わたしが事、祐さん、構うておくれなえ。

ト嘲笑うて思ひ入れ。

祐成　エヽ、おのれはなア。

ト立ちかゝる。彈正隔て

彈正　これまで妹が勤めのうち、貧乏神のせぶり取り、紋日物日の身あがりまで、のめ〳〵とさせ居つ

たな。それゆゑ現在兄ながら、笄一本心よく、貸さぬもわれがあるゆゑだ。思へば〳〵

ト祐成を引附け、打擲して

虎　イケ業晒しな十郎祐成。妹、わりやアこの體裁を見ても、悲しくは思はぬか。今まで深間の男でも、縁を切つたる證據には、主と二人がその仲に、出來たあの子は男ゆゑ、殘して行くが世の大法。お前の手しほで育てゝやらんせ。

鬼王　エヽ、鬼とも蛇ともゝ、譬へやうなき道知らず……エヽ、お前樣はなア〳〵。

彈正　祐成、貴樣は口惜しくないか。

祐成　決して存ぜぬ。アヽ、心任せに。

彈正　エヽ、張合ひのない、腰拔けめ。

ト突き放す。

虎　今も云つたる千壽丸、お前育てゝ、のち〳〵樂しみ。

彈正　それも要らざる人の世話。其やうな事捨ておいて、彈正附添ひ富士ヶ根へ、妹を同道。家來、乘り物。

皆々　ハツ。

ト友八、乗り物を開く。虎、悠々と乗り移る。

彈正　直さま、これより。

虎　そんならわたしや

ト祐成の方へ思ひ入れあつて、彈正を見て

此まゝ爰を

ト乗り物舁きあげる。この時柴垣に窺ふ時致、編笠を脱ぎすて、ツカ〳〵と寄つて

時致　紋は庵に木瓜の……工藤の身寄りの

ト駕籠の棒をキッと留め、虎と顔見合せ

ヤ、駕籠の内には

虎　お前は弟御。

祐成　時致、來てか。

彈正　ヤ、ナニ時致が

時致　樣子はあれにて……憎くき虎が

ト寄るを、彈正はじめ皆々隔て、乗り物は花道の方へ行く。虎、顔を出し、思ひ入れあつて

虎　ア、思へば〱……有爲轉變の

祐成　定めぬ水の流れの習ひ。

虎　それもうつろふ飛鳥川、曇らぬ胸の鏡さへ

祐成　實に七人の子はなすとも

鬼王　あくまで腐つた

祐成　ハテ、逢ふは別れの

虎　はかないえにし。

ト皆々を見て

乘り物、やりや。

ト戸を閉す。

皆々　ハアヽ。

ト唄、時の鐘になり、皆々向うへ入る。三人殘る。

時致　心の腐つた虎御前、跡追ッかけて

ト走り行かうとする。

祐成　ヤレ待て時致、いはゞ浮れ女、さもありなん。虎は今よりフツツリと
時致　思ひ切る氣か、兄者人。
祐成　仇なる戀は思ひ切り、たゞ忘れぬは父の仇。

　　　　ト思ひ入れ。

時致　さすればこれまで放埓の、色に耽つて現在の
祐成　父の仇には、共に天を戴かぬ道理。されども世上を憚つて
鬼王　柔弱非力とこの年月
祐成　多くの人にうとまれしも
時致　すりや弟のわしにまで、明かさで包む御胸中。
祐成　父の仇討なさんずと、千々に心を碎くわやい。
時致　さすれば近きに庵を立出で
祐成　それも母人滿江さまに
時致　不興のお詫びを

　　　　ト思ひ入れ。この時奥にて幼な子の聲する。

鬼王　ありや千壽丸さま。

祐成　せわるも道理。母も見捨てゝ

時致　子を捨つる藪の虎御前。

祐成　ハテ、虎ぢやもの、いはゞ畜類。

時致　ヤ。

祐成　捨てゝ置きやいの。

ト思ひ入れ。唄、時の鐘にて道具鷹揚に廻る。

本舞臺、正面大和葺き、二間の屋體、此うち少し小高き所に逆澤瀉の鎧を飾り、二つの位牌を香華を手向け、長押に鞘をはめたる長刀をかけ、よき所に以前の椎の木の鉢植ゑ並べあり、庭先の左右、卯の花垣、つくばひの手水鉢、〽〽〽鴫立澤と記したる石の碑、いつもの所に枝折り戸、この外に虎ヶ石あり、すべて庵の體、時の鐘、合ひ方にて道具とまる。

ト以前の閉坊、木綿蒲團をかぶり、枕許の石火鉢へ蚊やりを仕掛け、あふりながら

閉坊　ヤレ〱、素敵な蚊だ。燻しを仕掛けにやア、寢る事はならぬわえ。

ト小言いひ〳〵蚊遣りをあふりゐる。時の鐘、合ひ方。向うより寒心先に友八出て來り、門口を窺ひ、寒心、小石を取つて合圖する。閉坊聞きつけ、門口へ來り

友八　合圖の礫は……友八さまか。

閉坊　心得ませぬは二人の奴等。いよ〳〵敵と左衞門さまを

友八　寒心の案内で、裏口へ廻つたが、怪しき樣子もあるか。

友八　討つべき胸中相違ない。それゆゑ何か氣遣はしく、窺ひ來るこの友八。寒心、閉坊も樣子を窺ひ二人の奴等をぶッ放し

閉坊　祐經さまの枕を高う

友八　閉坊とても油斷なく

寒心　懷劍用意し、人知れず

友八　油斷いたすな。

兩人　心得ました。

ト思ひ入れ。奥にて物音するゆゑ、友八と寒心は門口の柴垣へ、閉坊は蒲團をかむり、下の方へ隱れる。よき程に奥より時致走り出るを、滿江、撞木振りあげ追うて出る。跡より祐成支へ出てくる。屋

體の內よき所に屏風を引廻し、幼な子を寢かしある體。

滿江 ヤア、母が詞を用ひぬおのれ、箱根を下山しその上に、男なりせし五郎時致、誰れが許して目通り近う……母が答に

時致 箱王出家とげざる上は、勘當御免なされませぬか。

ト撞木振りあげる。祐成縋つてとめる。

滿江 それもおのれが心に問へ。實の親たる祐安どの、義理ある養父の祐信どのは、寶の紛失、それゆゑ切腹。緣は切れても後の親、それにおのれは、出家いたさぬ不孝者。目通り叶はぬ。祐成、早う追ひ出しや〳〵。

祐成 でも御勘氣をお詫びの時致、

時致 出家いたさぬ其うちは、母のお怒り中々に……然らば時致、この場に於て、出家堅固に勤むる證據、

ト刀を拔き、髻を拂ひ、目通りへ差置き

これにて何卒御勘當。

祐成 出かした弟、然らば兄もこの年月、虎に心を奪はれて、初めて女に誠なき、その心底を存じた祐

成、弟と共に

ト同じく髪を切つて

よもや、これでは

ト髷をよき程切つて差出す。

満江　こりや二人とも髻拂うて、二人が二人出家して

祐成　過ぎ去り給ふ河津さまへ、この祐成は仕へる心底。

時致　後の親ぞと頼みたる、祐信さまの菩提の爲

満江　出かした兄弟、それでこそ母が子よ。今こそ勘當

兩人　お免しあるか。

満江　よう息才でコレ箱王、成長してくれたなア。

ト替つた合ひ方、時致に縋つて思ひ入れ。

時致　そのお詞を聞く上は、片時も早うこの場より

祐成　兄弟揃うて、

ト思ひ入れ。

満江　して、二人は何れへ」

時致　養父の御墓、その上に、同じ血筋の尾上之助、廟所へ詣ずる我れ〳〵兩人。

満江　優しき其方の志し、然らばこれにて出家せよ。母が手づから剃刀あて、位牌の前にて香剃りせん。

時致　すりや、この上に、この場にて

祐成　お心背かば、不孝の上塗り。

満江　僞りならぬ心もあらば、コレ

ト　あたりに飾りし二つの位牌を持ち來り

幽岸院殿學樹無等大居士、俗名河津の三郎祐安。いま一つは

ト　思ひ入れあり

壽光院殿本阿普門大居士、俗名曾我太郎祐信……二人の親の、菩提の爲。

時致　出家堅固のこの箱王、二つの位牌の御前に於て

祐成　母の手づから

満江　我が子の剃髮……ア、これも浮世の

ト思ひ入れあつて

ドリヤ、香剃りを

ト獨吟になり、盥に水を汲み入れ、これを持ち來り、よき所へ差置く。滿江、剃刀と砥石を出し、手合せする。時致、手燭を取つて盥の側に置き、前髮をしめす。滿江、剃刀を持ち、立ちかゝつて、前髮を段々剃り落す思ひ入れ。時致の顔、盥の水にうつるを見て思ひ入れ。此うち唄一くさり切れる。

滿江、こなしあつて

アレ〳〵、水に寫りし面影は

兩人　親子三人あり〳〵と

滿江　いやとよ、寫りし影は四人の水の面。

時致　してこの外に一人の、影は何人

祐成　何者の

ト思ひ入れ。

滿江　水に寫るは河津どの。いま時致の面影は、過ぎ去り給ふ祐安どのに、これ程までも

ト涙ぐむ。

時致　すりや、時致が面差は、祐安さまに

ト盥に取りつき、よく〳〵見て

おなつかしうござりまする。

ト思ひ入れ。

滿江　主は一人、影は二人の親と子が、それも今より佛の御弟子、卽身成佛。

ト又も剃刀をあてんとする。祐成、早手く盥を打ち返す。この水、手燭にかゝり、灯消える。

ヤヽ、まだ剃刀も

祐成　殘りしうちに思はざる、覆水盆に返らぬ繰り言。闇夜となれば母上に、祐成代つて剃刀を

滿江　然らば母はあたりなる、夫の恨み三本の、椎の木の枝切つて、蚊遣りとなして

時致　すりや、若葉なる三本の

滿江　その三本の三ヶの莊、椎の茂みが我が夫の、御運の末の時雨月、それゆゑ爰で

兩人　切つて蚊遣りと

滿江　オヽ、さうぢや。

トまた唄になり、滿江、肌脱ぎかけ、探り〳〵、かけたる長刀を取つて目釘を拔き、白刃を取つて、

寢入りゐる幼な子を抱きあげ、よき所へ來る。この時、閉坊窺ひ寄つて、時致に切りつける。ちよつと立廻つて、刃物を奪ひ取り、見事に閉坊を切り倒す。「ウン」と倒れる。この途端に滿江、長刀にて、赤子の胸先を貫かんとする事よろしく、赤子の聲。兩人聞き耳立て、思ひ入れ、爰にて唄切れる。

祐成 今のは慥か幼な子の

滿江 蟲がおびやす泣き聲も……また物音も

ト怪しむ。

時致 アイヤ、別に仔細も

ト死骸を蹴飛ばし

泣き出す幼な子、慥かに蟲の

滿江 これが泣かずに

ト白刃にて幼な子を突く。一聲あげる。その口押へて

オヽ、いんの子〳〵。

ト泣き聲にていぶりつける。また唄になり、時致は閉坊の死骸へ蒲團をかけ、隱す思ひ入れ。祐成は時致に、爰を逃げてト仕方にて敎へる。滿江、幼な子の血を、あたりなるひさくを取つて此うちに移

す事。祐成時致は懐より書置を出し、二つの位牌の前に持ちゆき、椎の木の枝に兩人とも結びつけ、
暗がりにて暇乞ひの思ひ入れ。よろしく唄切れる。

ト行かうとする。

兩人　母上様、最早お暇仕ります。

滿江　もう行きやるか。せめてこれにて剃髪の、あの箱王が出家なり。

時致　サ、それは

トつかへる。祐成、思ひ入れあつて、閉坊の死骸を捕へ

祐成　母者人。お手ざはりにて出家堅固の、弟が姿を

滿江　それが何より

ト祐成、閉坊の頭を滿江に探らせる。

ヤ、誠に出家のこの姿。これにて母も安堵しました。その出家せし兄弟へ

ト鎧櫃の中より蝶千鳥の直垂二つを取出し、こなしあつて

尼ともならばと、たしなむ三衣は二人へ形見……イヤ、肩にかけさす出家の門出。

兩人　然らばこれより御寺へ持參し

滿江　沙門の門出」

ト思ひ入れあつて

東南西北の敵をたやすく

ト諷ひながら、白刃にて乳の下を突き、こなしあつて

亡ぼせり。

ト此うち兩人聞き耳立て

時致　御經にあらぬ謠のお聲も

祐成　狂ふ調子は

ト立ちよるを

滿江　コレ。

ト側なる團扇にてあたりを打つ。この風あたつて蚊遣り火燃え立ち、三人顔見合せ

時致　ヤヽ、何ゆゑの御生害。

祐成　殊に幼な子、泣き聲とめしは

滿江　門出の血祭り。

兩人　ヤヽ、さては可哀や
滿江　健氣な二人へ送りし三衣は
祐成　千鳥小蝶を染めあげし
時致　物好きありしも、それと云はずに
祐成　狩場へ赴むく覺悟の書置、位牌の前へ殘し置き
滿江　二人の曠れ着を渡せしも
祐成　殊に千壽をお手討に、その上又も母上の
時致　自殺も正しく兄弟に、氣遣ひさせじと思し召す
祐成　母上のお心なるか。
滿江　さとくも察せし二人の者。母も孫めもあの世の旅路。それも河津と曾我どのを、夫に持ちし武士の妻、いはゞ二人へ引添うて、夫の敵と思へども、女子のこの身、老の果て。孫と妾が血汐を湛え、二人が五臓に納めたなら、四人連れ立ち敵討ち。コレ、助太刀させて、たもいなう。
時致　御尤もなるそのお詞、これにて血汐を頂戴なし
祐成　同氣同性合體なさば、母の願ひも

　　　　トひさくの血汐をのんで差出す。時致のんで
時致　これにて親子四人の門出。
満江　世に亡き二人の御位牌へ、回向なすべき満江は、子に引かされてこの自殺。祐安どのへは義理立てど、祐信どのへ申し譯、お赦しなされて下さりませ。
　　　　ト思ひ入れあつて
　　さるにても時致は、誰れにか劣らん大力無双。案じらるゝは非力の祐成。
祐成　イヤ、お氣遣ひ下さりますな。弟が大力その上に、兄も力量勝れたる、噂あつては敵に聞え、迂濶に心許すまじと、柔弱非力と見せたれども
時致　兄者人には計略にて。
満江　母も出家を望みしは、敵に油斷させんが爲、勇氣を隱せし
祐成　非力のこの身も、これより狩場へ
時致　兄弟揃うて敵討ち。
満江　門出祝うて、とく／＼兩人。
時致　でも母上の御有様、見捨てゝこれが



ト思ひ入れ。門口に窺ひゐたる寒心、友八、入り

兩人　さてこそ工藤を覘ふ兩人。

ト寒心は時致にかゝるを引敷く。友八は祐成にかゝるを、在あふ虎ヶ石を取つて頭を打つ。これにて友八、頭を五體に打ちこまるゝ仕掛け。

祐成　おのれ祐經。

滿江　天晴れ勇力。

時致　見事。

祐成　へゝ……心地よやなア。

ト友八を押へしまゝにて撞と座するを木の頭。滿江落ち入る。祐成見て、駈けよらんとして、氣をかへ虎ヶ石をグッと踏む。これにて石は段々と大地に沈む體。よろしく、ひやうし、　幕

（作者　鶴屋南北）

第一番目　大詰　夜討曾我本望の場

役名――曾我十郎祐成。曾我五郎時致。仁田四郎忠常。御所五郎丸重宗。加藤大部。尾上之助

下郎、小源次。大磯の虎御前。

本舞臺、正面狩場の木戸口、左右柵矢來。突棒又は刺又を立てかけ、篝を焚き、爰に三婦六、彌藏、野吉、胴丸の上へ柿の子持ち筋の袖無し羽織にて勢子のこしらへ、徳利酒を呑みゐる。山颪し、捨て鐘にて幕明く。

彌藏　サア〳〵、三婦六、ついでくれ〳〵。

三婦　コレ〳〵、彌藏、わればかり呑むが、ちつとは外へも、廻せ〳〵。

野吉　さうだ〳〵、ちつとはおいらにも呑ませろ。うぬばかりとち喰ふは

彌藏　コレ、うぬばかりとは何の事だ。喰ひたくば、ソレ喰へ。

ト茶碗を打ちつける。

野吉　この野郎め、なぜ投打ちをしやアがるのだ。

三婦　ハテ、あんな奴に構ふものではない。捨てゝ置け〳〵。

彌藏　イヤ、おとなしくしねえぞ。しなかかつたら、どうする〳〵。

ト野吉へかゝる。三婦六押へる。三人よろしく捨ぜりふにて立廻り。時の太鼓になり、向うより勢子

三人、提灯を持ち、出てくる。跡より大部、胴丸、むかはぎ、刺貫、附け太刀、重れ草鞋、大仰なる狩倉の形。陣笠の勢子三人、割り竹を持つて出て來り、この體を見て

大部　ヤイ〳〵、狩場口にて尾籠の爭ひ。靜まらぬか〳〵。

トこれにて三人は下に扣へ

彌藏　光員さまには狩場の見廻り

皆々　御苦勞に存じまする。

大部　分けて今宵は、雨を催ふすあの雲立ち。篝しめらば通路の妨げ。油斷いたさず出入りを改め、必ず番を怠るな。

皆々　心得ました。

大部　わいらは殘つて、代る〴〵に番をいたせ。

勢子　ハツ。

大部　者ども、參れ。

ト時の太鼓になり、大部先に人數入る。三人の外に、勢子一人殘る。

三婦　サア〳〵、これから篝を焚きつけ

彌藏　木戸を固めて

ト篝を焚きつける。一人の勢子は木戸の方を窺ひ、彌藏が持つた拍子木を引ツたくる。これにて驚き

ヤ、われが代るか。

ト寄るを構はず、ありあふ番手桶にて水を焚火へ打ちかける。篝消える。

三人　ヤ、なんで篝を

ト寄るを、ちよつと當てる。この時、陣笠落ちる。この勢子は小源次にて、三人見事にかへる。小源次キツと思ひ入れ。雨車にて、この道具廻る。

本舞臺、正面、緣側附きの祐經狩屋、軒端には庵に木瓜の幕を張り、雨戸締め切り、上の方に誂らへの手水鉢、杉の大樹、好みの道具に納まる。

ト直ぐに唄淨瑠璃。

〽既に建久四つの年、空定めなき五月雨の、思ひの胸も晴れ間なき、その名雲井の時鳥。

ト切れる。直ぐに

〽名殘りおしかの狩衣〳〵。たつかや限りなるらん。

ト謠切れる。大小、早鼓、誂らへの鳴り物になり、向うより祐成、懸け烏帽子、素袍、好みの形、藁簑、竹笠、松明を持ち出て、直ぐに舞臺へ來る。早笛、誂らへの鳴り物になり、時致、好みの形、松明を持ち、一散に出て舞臺へ來り、キッとなる。谺の合ひ方になり

祐成 實にや三千年に一度花咲き實るなる、彼の西王母が園の桃。優曇華よりも珍らしや。

時致 その優曇華を拜みて手折れといふなれば、それに譬ふる敵左衛門、一二の太刀の拜み討、急がせ給へ十郎どの。

祐成 逸るは理り、さりながら、女數多あるべきぞ。太刀の振り廻しに心得候へ。後日の沙汰も憚りあり。

時致 云ふにや及び給ふべき。いざ諸ともに

ト祐成、時致の顏を見て

祐成 いかに時致、今宵最期と極めし上は、なか〳〵に心安けれど、年月離れぬ兄弟の、あかぬ顏見る事も、これがこの世の別れぞや。

ト時致もこなしあつて、松明をかゝげ、祐成の顏を見て

時致　敵に逢うては刹那の隙もあるまじければ、これこそ最期の見参よ。兄と見奉らんも今ばかりなる思ひなれ。我れも乙にて血のあまり、これ母方のいつくしみ。御身は正に嫡子にて、父の形見の御顔。

祐成　五つや三つの頃なれば、覚えぬながら子は親に、似るなるものを松山の

時致　はしをり鏡と聞くならは、在すが如き親の面影。

祐成　今見る心地、弟

時致　兄者人十郎どの。

ト両人、手を取りかはし

両人　おなつかしうござります。

ト祐成思ひ入れあつて

祐成　無用の涙に時移る。畠山が寸志の和歌、色づく山のもみぢ葉は、その夕暮れを待ちて見よかし、待ち設けたる今日今宵。

時致　十八年の天津風、いま吹き返す時を得て、御身も我れも母上より、下し賜はる蝶千鳥、この狩衣が彼の世へ晴れ着。

祐成　末世に殘す名こそ惜しけれ。
時致　勇み進んで
兩人　今宵ぞ本望。

トきつとなる。この時、狩屋の上の方の雨戸、さつと明く。兩人驚き、持つたる松明を捨て、灯を踏み消し、下手に窺ふ。件の狩屋より虎、しごき帶、寢卷の形にて、手燭を持ち出てくる。此うち好みの合ひ方、時の鐘。件の松明、消え殘りし體にて、少し燃えてゐる。虎、手水鉢にて手を洗はんとして、消え殘りし松明に目を附け、思ひ入れ。

虎　篝火ならぬ二つの松の火……もしやお二人

トさてはト思ひ入れあつて

塒さまよふ浦千鳥、浪にゆらるゝ沖津船、しるべの山は此方ぞや。そことも知れぬ夜の浪、風を便りの湊入り、心附かずや闇の空。

トこの時、空にて時鳥の聲。

名乘りかけたる冥土の鳥。啼く音血を吐く

トこなしあつて鼻紙をくはへ、手燭を持ち、狩屋の内へ、案内の心にて、心を殘し、淚を隱し、狩屋

の内へ入る。祐成時致囁き合ひ、窺ひ〳〵忍び込む。時の鐘になり、向うより軍兵頭に勢子二人附っき、拍子木を持ち、出てくる。上手より同じく軍兵頭に勢子二人附添ひ、出て來り、兩方行きあひ

軍甲　これはお役目御苦勞に存じまする。

軍乙　最早深更に及びましたれば、猶更大切でござる。

軍甲　左やう〳〵、その上先刻も怪しき者ども、紛れ込みし樣子。

軍乙　御領の狩屋が大事でござるな。

軍甲　オヽ、狩屋と申せば、工藤どの、俄に今宵狩屋を取り替へしは、何か仔細のござる儀を相見えまする。

軍乙　我れ〳〵も不審に存じます。

ト雨戸明きしを見附け

御覽なされ。雨戸が引明けてござるワ。

軍甲　イカサマ、慥かに大磯喜瀨川なぞの、遊君が仕業と相見えまする。引立てゝ置かつしやい。

勢子　心得ました。

ト雨戸を閉める。

軍乙　然らばこれにてお別れ申す。

軍甲　御大儀でござる。

ト双方目禮して兩方へ別れ入る。時の鐘、好みの合ひ方。好き程に太刀音して、狩屋の内、バタ〳〵になり、これにて一時に正面雨戸を、バラ〳〵と蹴放し、内より祐成、拔刀にて、書置を咬へし虎が首を持ち、時致、同じく拔刀にて、御教書を咬へし祐經が首を抱へ出て、舞臺へ下り、兩人思ひ入れあつて

祐成　時致なるか。

時致　十郎どの、多年の本望。されども祐經が口に咬へし、三ケの莊のこの御教書、兄弟二人に討たれし上へ、返し與へん健氣な覺悟。

祐成　殊に我れを騙かりし、憎くき女と思ひしも、敵へ手引きの苦肉の手段、女ながらも健氣な心底。虎は死して皮をとゞむと、死後の貞節。

時致　人は死して名を殘すと、これ我れ〳〵が本懷にて、即ち取り得し御教書は、末の弟の尾上之助へ送りやらんも先達て、死したる上は、ハテ何者にか。

トこの時、小源次窺ひ出て

小源　それこそ幸ひ下郎めが、尾上の下郎初平方へ。

時致　汝は宇佐美が下郎の小源次。

祐成　然らば其方持参して、我れ〳〵二人が本望を、達せし事を語り聞かせよ。

時致　彼れが手より、尾上の身寄りへ。

ト御教書を渡す。

小源　慥かに下郎が持参せん。

祐成　いそふれ小源次。

時致　はや行け。

小源　ハア、。

ト早めドン〳〵にて、小源次、書き物を持ち、一散に向うへ入る。兩人見送り

時致　御教書渡し遣はす上は

祐成　この世に思ひ置く事なし。今ぞ最期の門出の杯。

時致　兄弟別れの

祐成　その杯は

ト思ひ入れ。篠入りの合ひ方になり、祐成、烏帽子を取つて、狩屋の軒より滴る雨雫を烏帽子に受け

せめて軒端の雨雫、受けて弟へ水杯。

ト一口飲んで差出す。時致取つて飲み

時致　いかに十郎どの、今こそ最期の際なれば、心靜かに互ひの念誦。

祐成　實に尤もなるその詞。御身はこれまで暫くも、箱根にあつて諸經も覺え、その功力もあるべけれ我れは殊更、未來の苦患も思はるゝ。いざ〳〵これにて諸ともに

ト兩人手を合はし、よろしくあつて

時致　臨終の佛たち、我れ〳〵過去の宿業にや、一念の心意に依り、敵味方と隔たるなり。

祐成　懺悔の力にもろ〳〵の、罪障今や消滅し

時致　因果の輪廻を盡せし上は、一つ蓮の緣となし

祐成　父のましますその御國へ

時致　迎へ取らせてたび給へ。

兩人　南無阿彌陀佛。

ト兩人合掌し、愁ひのこなし。この時狩屋の内より大藤内、丸裸の形、行燈を提げ、出て來り、兩

人を見て、そろ〳〵と下へ下り

大藤　ヤア、さてはわいらは曾我兄弟、祐經どのを討つたる樣子。御領の狩屋へ。

ト行きかゝるを、時致、手早く大藤内の首を捕へ

時致　あの世へ先がけ。

祐成　この世の暇。

トよろしく時致、大藤内を見事に切り、こなしあつて

時致　『十づゝに、當の敵を討ちし跡、四十の男子四つになりけり』。

祐成　よくも仕つたり。今際の秀歌、時致集とも召されなん。

ト兩人顏見合せ

兩人　ムハヽヽヽヽヽ。

時致　いでこの上は、思ひ置く事更に無し。兄弟名乘つて潔く

祐成　然らば名乘つて討たれんもの。

ト狩屋へ向ひ

遠からん人は音にも聞け、近くば寄つて目にも見よ。伊豆の國の住人、伊東次郎祐親が孫、曾我

の十郎祐成。

時致　同じく五郎時致が、君の狩屋の御前にて

祐成　一家の工藤左衛門の尉、祐經を討取つたり。

時致　我れと思はん人々は、討ちとめて高名せよや。

兩人　兄弟相手に、なり申さん。

ト高聲に呼ばる。これにてドン／＼、早めになり、勢子大勢と、大部出て來り

大部　さてこそ兄弟これにあり。

皆々　討取れ／＼。

ト一度に拔きつれて討つてかゝる。祐成、大部を相手に立廻りながら下手へ入る。殘りの人數は時致にかゝり、よろしく誂らへの鳴り物になり、時致、皆々を相手に大立廻りよろしく、この人數を下座へ追ひ込む。この時、雨車、時の鐘にて、知らせあつて舞臺へ黑幕を振り落す。

直ぐに山颪し、時の鐘、ゴン／＼なり、小源次は軍兵二人と立廻りながら出て來り、よろしくあつて

軍一　最前より窺ふところ、正しくおのれは尾上之助が小者。

軍二　今宵夜討ちの兄弟に、ゆかりの奴等であらうがな。

小源　オヽ、推量の上は隱すに及ばぬ。尾上之助さまの家來小源次、大切の役目蒙むりし上は、妨げな
さば容赦は無いぞ。

軍一　それなれば猶以て

軍二　見遁しならねえ

兩人　覺悟なせ。

小源　小癪な雜人、手には足らねど當の敵。

軍一　面倒な。ぬかり召さるな。

軍二　野郎め、觀念。

ト兩人打つてかゝる。いろ〳〵立廻りあつて、兩人をポン〳〵と切り

小源　片時も早く、初平どのへ。

ト一散に向うへ入る。この時、下座の方、物音して

○　ヤア〳〵何れも、狩場へ夜討の入つたるぞ。御油斷あるな。出合へ〳〵。

ト高聲に呼び立てろ。直ぐに「アリヤ〳〵」の聲、早太鼓、ドン〳〵にて、下座より、立烏帽子、手

甲、いづれも裸身へ具足を附けし體、うろたへ立騷ぎながら、松明など振り立て出で來り

皆々　夜討が參つた〳〵。

同　御油斷なさるな。

同　夜討ぢや〳〵。

ト矢張りドン〳〵、「アリヤ〳〵」の聲、この人數入り亂れて上下へ入る。直ぐに黑幕切つて落す。

本舞臺、向う黑幕、よき所に狩屋の軒口を見せ、陣幕張つてあり、前通り誂らへの柴組み、右の道具に納まる。

ト、矢張り右の鳴り物にて、下座より祐成、大童の體にて出て、ホツと思ひ入れ。下座より三階物出の人數、軍兵にて出て祐成にかゝる。祐成、皆々を相手に立廻り、追ひ散らす。この時後より大部出かゝり、祐成と立廻りあつて、大部を見事に首討ち落す。

祐成　最期は兄弟諸ともにと、約せし上は、いで時致に

ト行かんとする。この時上手より仁田四郎忠常、凜々しき好みの形にて走り出て、祐成をキツと留めて

忠常　狩屋を騷がす曾我兄弟、いま某が討取りくれん。覺悟いたせよ、曾我祐成。

祐成　ヤア、烏許がましきその一言。側杖させん。

ト切つてゆく。立廻りあつて祐成手を負ふ事。忠常キッと見て

忠常　深手なるぞ十郎祐成、とく〳〵生害仕れ。

祐成　ナニ小ざかしや。して其方は何者なるぞ。

忠常　問はれて名乘る我が姓名。相手に不足とも思ふらん、伊豆の國の住人、仁田の四郎忠常なるワ。

祐成　ヤヽヽヽ、さては御身が忠常どの、望むところの相手なり。イザ立寄つて、首刎ねられよ。

忠常　すりや忠常に、討たれ召さるゝ心底よな。

祐成　首取らるゝは今際の本望。イザ〳〵介錯頼み入る。

忠常　然らば鈍き手の内にて、

祐成　苦痛を助けよ、忠常どの。

忠常　頼みに任せ、貴殿の介錯。

祐成　いで〳〵頭を

忠常　ア、忠孝全き



ト思ひ入れ。

祐成 猶豫めさるは後れしか。

忠常 臨終稱念。

ト白刃を振り上げる。祐成は腹へ突き立て、首さしのべて思ひ入れ。忠常、切らんとせしが、氣後れしてホロリとする。この時下座にて「アリヤ〱」の聲、ドン〱早目に打つ。忠常、氣を替へ、キッとなる。祐成、引廻す思ひ入れ。この見得、ドン〱、「アリヤ〱」の聲にて道具廻る。

本舞臺、向う打抜き、狩屋の大遠見、篝火松明を照らし、よき所に緣側附きの狩屋。この上に時致、大童になり、松の小枝を咬へ、いかにも莫大なる大太刀を振りあげ、三階稻荷町殘らず、いづれも素肌武者、思ひ〱の形にて、手負ひの見得。ドン〱にて道具納まる。

ト本雨降つてくる。皆々かゝるを、切り立て薙ぎ立て、キッとなる。この時下座にて

忠常 ヤア〱、狩場の面々承れ。曾我の十郎祐成を、仁田の四郎が討取つたり。各々御安堵候へ。

大勢 エイ〱オウ。

ト早太鼓打ち立てる。

時致　ヤヽヽヽ、さては祐成御最期とや。斯くなる上は時致一人、目ざすは祖父伊東の仇、御領の狩屋へ切り入つて、鎌倉どのゝ御首を賜はらん。オヽ、さうぢや。

皆々　やらぬワ。

トかゝるを、切り立て〳〵向うへかゝる。揚げ幕より白絹かつぎし黒革の鎧、本行の五郎丸の形にてよろしく窺ひ〳〵出て來り、時致に向ふ。時致、女と心得、除けて行くを、立ちふさがつて思ひ入れ。此うちドン〳〵、鼓の合ひ方、よろしく立廻りあつて、時致、かきのけんとする。よきキツカケに時致を押し戻し來り、本舞臺にて立廻り、時致を支へ、キツとなる。この時初めて薄衣を脱ぎすて、赤塗りの五郎丸、顔を現はす。時致、緣先に片足踏みかけ、振り切つて

時致　ヤヽ、女にあらぬ、さては汝は

ト白刃を振りあげる。五郎丸キツとなる。トヾ五郎丸、時致を組みとめたる畫面の見得にて木の頭。カケリ、早めドン〳〵、「アリヤ〳〵」の聲にて引附けると打込みになり、二番目呼び。

めでたく　幕

（作者　鶴屋南北）

第二番目

曾我兩社祭禮の場

奥庭仕返しの場

淨瑠璃「[illegible]三人色の地走」清元連中

役名――若藤玄蕃之丞。尾上伊太八 前名初平。本町の綱五郎。お祭り佐七。三日月お扇。醫者針野灸按。宇田五郎。若黨、畑右衛門。祭の世話人、警固、手古舞、大勢。

本舞臺、正面、高積みせし虎屋の蒸籠、この進物札本町綱五郎様、お祭佐七様、三日月お扇様、曾我中村若い者中と書いたるを貼り、すべて駿州吉原、兩社祭禮の體、屋體囃子にて幕明く。

ト爰に鐵棒曳き、裁附けの形。警固二人、花笠。忠太夫は烏帽子狩衣、神職の形にて、烏帽子の上へ鉢巻して、醉うたる體。これを手古舞ひ十五人、いづれも揃ひの絆纏、股引、あふり附きの獅子を舞うてゐる見得。獅子の太鼓にて、皆々あふり散らし、伊織、蹴倒されし體。

鐵棒　コレ〳〵、神主さん、お前、何をごてつきなさるのだえ。

忠太　ヤイ〳〵、若い者、お祭はめでたいが、神職たる舌切忠太夫を、なぜ獅子のあふりで轉ばしたのだ。神主が立たぬぞ〳〵。勇むも程があるものだ。

手古　成る程、こりやァ神主さんの、熱くなりなさるのも尤もだわえ。

同　併し、なんぼめでたい祭たといつて、神主の癖にお前、朝から呑みなすつたの。

同　さうだ〳〵、神主様が、舌の廻らぬほど呑みなすつたの。

同　ナニ舌が廻らぬ。そいつは大方、糊でも嘗めたのかも知れねえ。
同　ハテ、糊を嘗めれば、舌を切られるは當り前だワ。
同　そこで舌切忠太夫だな。
同　どうしても雀に縁があるわえ。
警固　これサ、雀々と、澤山さうに云はねえものだワ。
同　雀海中に入つて蛤といふ事を知らないか。
手古　馬鹿を云へ。雀は海中に入つて生栗になるワ。
同　これはしたり、生栗か搗栗か、いつまで云つても同じ事だワ。
同　腹も立たうが神主さん、めでたいお祭だ、不請しなさい〳〵。
同　わしらも挨拶に入りませう。
同　せりふの届かぬところは、わし等に免じて
同　御料簡なされませ。
警固　成る程、こりやア若い衆の云はれるが尤もだ。神主が朝から醉つては、氏子へ濟むまい。今日は
この厚原で、曾我兄弟の衆を、荒人神と勸請して

同　毎年五月の二十八日、この中村での御祭禮、おいらも世話役に頼まれたのサ。

鐵棒　コレ、神主さん、機嫌直して、一つ〆めなさい〳〵。

忠太　さう云はつしやると、神主返す詞もござらぬ。然らば一つ〆めませう。

皆々　アヽ、ヨイ〳〵〳〵。

警固　それで物が極つたといふものだが、併し、お祭の支度はよいかの。

忠太　隨分ようござるて。この神職が指圖して渡しかけませう。

ト下座の方に向ひ

支度がよくばお先の面々、急いで祭を渡してよからう。

ト下座にて「ハア」と聲する。ドン〳〵カヽカと吉例の鳴り物。猿田彦、裝束にて先達、續いて榊、四神、白張烏帽子の大勢、麻上下の花警固大勢、跡に附いて花道へかゝり、中の間の歩みより東へかかり、元の下座へ入る。よき時分より渡り拍子になり、向うより前髮の若衆、祭の形。赤坂奴二人、一人は長柄を擔ぎ、一人は疊み床几を持ち、これに世話人、袴の形。肌脱ぎの手古舞二人附き、足早に出て來り、本舞臺へ來て

世話　これはどなたも、お待遠でござりませう。

鐵棒　なにサ親方、お早うござりました。
警固　今やう／＼榊が通りました。
肌脫　イヤモウ、祭といふものは、さて忙しいものだの。
同　わしらも昨夜から、まんじりともしねえの。
若衆　それに善六が醉つてるから、長柄を幾度か、わしが頭へ
赤坂　當てましたか／＼。古いやつだが、當るといふのは、祭の出面にめでたいね。
同　善六さん、ちつと氣を附けて歩きねえな。
鐵棒　下戶の癖に、あんまり飮むからよ。
警固　時に親方、お內の練り物は、あらかた揃ひましたかえ。
世話　わしの方はよいが、地走りに出たいと賴んで寄越した、あの醫者の灸按が、こみあふ中で、どこへ入つたやら。
肌脫　あの醫者樣も、餘ッほど間拔けだわえ。
同　エヽ、灸按かえ。イヤ、人らぢしな醫者だぞ。
鐵棒　モシ／＼親方、このお子のお支度も奇妙に出來やした。めでたく一つ〆めやせう。

皆々　しめませう〳〵。

ト皆々手を打つ。矢張り此うち祭の鳴り物。向うより灸按、練り物の拵らへにて、駈けて出てくる。跡より畑右衞門、足輕の形にて、海鼠の袴、高股立ちにて、狀箱を持ち、追ひかけ出て來り、灸按をあちこちと追ひ廻す事。大勢の中を潜りて逃げる。畑右衞門、追ひかけ〳〵、灸按を捕へ

畑右　ドツコイ〳〵、逃がしはせぬぞ〳〵。

警固　コレ〳〵。お屋敷さんも、祭り中へ泥坊を見附けたやうに

皆々　何を騷がつしやる〳〵。

畑右　コレ〳〵、若い衆、騷がつしやるな、泥坊ではござらぬ。わしは醫者を追ひかけて來た。

鐵棒　ナニ醫者だ。そんなら、この頭を冠つてゐるは

ト皆々立寄り、鐵棒、灸按の大頭を取る。灸按、顏を出して

灸按　これは面目次第もござらぬ。

鐵棒　アヽ、そんならお前は

皆々　祭に出た灸按さんか。

畑右　サヽ、その灸按に用事ござつて、身共は當時出頭の、岩藤玄蕃之丞さまの屋敷から參つた。

灸按　コレ〳〵、お使ひ。御用もござらうが、見らるゝ通り、愚老只今祭に出かゝり、取込んでござれば、いづれお跡より御挨拶仕る。サヽ、お歸りなされ〳〵。

畑右　イエ〳〵、持つて參つたこの御狀、拜見の上、返事を下され〳〵。

灸按　これはしたり、このマア中で他聞もござる。見るには及ばぬ〳〵。

畑右　イヤ〳〵、見せねば屋敷へ歸られぬ。見て下さい〳〵。

ト兩人爭ふ。

肌脫　モシ〳〵、灸按さん、お使ひもあのやうに仰しやるから、ちよつとマア手紙を見て、返事を云つてやりなさいな。

灸按　イエ〳〵、この人込みの中で、申す儀ではござらぬ。愚老、手紙を讀む間がござらぬ。サヽ、歸つて下さい〳〵。

畑右　イヤ〳〵、どうしても讀ませねば、拙者歸つて申し譯が無い。讀まつしやれ〳〵。

灸按　ハテ、この通り取込んで居ると申すに。

ト迷惑なる思ひ入れ。

肌脫　アヽ、モシ〳〵、お使ひもあのやうに云はつしやる。お前、取込みなら、わしが讀んで聞かせま

せうか。

畑右　アヽ、さうして下さい〳〵、

灸按　ハテ、いらぬ左平次を。讀むには及ばぬ〳〵。

皆々　讀んでやるがよい〳〵。

ト口々に云ふゆゑ、灸按、切なき思ひ入れ。其うち肌脱ぎの手古舞、手紙を開き

肌脱　ナニ〳〵「飛札を以て申し越し候ふ。先達て其方へ預け置き候ふ東雲の名香、急ぎ今日中に持參いたさるべく候ふ。面談の上、其方願ひの一儀、相違なく相渡すべきものなり。月日。醫者灸按へ、岩藤玄蕃判」。

ト讀む。灸按、苦しきこなし。

世話　アヽ、そんなら專ら評判の、祐信さまのお屋敷で

肌脱　失せた寶の二品は

警固　岩藤玄蕃のお屋敷に。

肌脱　兄の佐七がお出入り屋敷、曾我のお家の退轉も、その品出なば以前の如く、それを仇する岩藤さま。

鐵棒　今時分の大名に、誠にこいつは

皆々　油斷がならぬ。

　ト何心なう口々に云ふ。灸按、氣の毒なる思ひ入れ、此うちよき時分より、編笠かむりし、がら〳〵賣りの世話商人、下座より出かゝりゐて、肌脱ぎの手古舞が讀むのを聞いて思ひ入れ。

灸按　それだによつて、爰で讀んでは惡いといふに。

畑右　その品寄越すか。いづれ返事を

　ト差寄る。灸按、術なき思ひ入れにて

灸按　エヽ、これ程云ふに

　ト畑右衞門を突きとばし、大頭をかむり、下座へ逃げて入る。畑右衞門うろたへ、件の手紙を持つて

畑右　コレ、返事はどうする〳〵。

　ト追うて入る。件の商人、後にて立聞きゐたりしが、思ひ入れあつて、二人が跡を追ひかける心にて、一散に下座へ入る。此うち矢張り祭の鳴り物。

皆々　イヤ、使ひの急くのも尤もだ。

　トこの時頭取、祭の形にて、觸れ書を持ち、出て來り

頭取　これは親方、おめでたうござります……即ちこれが、祭り淨瑠璃の番附でござります。

ト渡す。世話人見て、爰にて淨瑠璃觸れを讀む事あつて

世話　成る程、これであらう。

皆々　〆めませう。

ト手を打ち

エヽ、おめでたうござります。

ト鳴り物になり、この人數下座へ入る。直ぐにこの鳴り物にて、向うより早乙女八人、いづれも高からげ、田植ゑの拵らへ、浴衣一つ着、前を端折り、素足跣にて、皐月の花を附けし女菅笠、めい〳〵苗を持ち出て來り、早乙女の振りよろしくあつて

皆々　渡した。

ト鳴り物になり、下座へ入る。爰にて下座へ取り、「雀踊りが所望ぢやが合點か」。向う揚げ幕の内にて

八人　オヽさて合點ぢや。

ト渡り拍子になり、雀踊り八人、揃ひの拵らへにて出て來り「駱駝でせい」「神事舞」その外、振りよろしくあつて、渡り拍子になり、下座へ入る。この鳴り物にて道具廻る。

本舞臺、誂らへ花車の飾りつけ。件の手古舞皆々出て、木遣りあつて、屋體囃子になる。淸元連中出て床几にかゝる。前彈きあつて

〽花菖蒲、幟もかほる荒人神の、祭り賑はふ提灯を、月を見立てゝ時鳥、名をも雲井に揚げ障子、屋體囃子の音につれて、見にくる人も俠者かな。

ト屋體囃子になり、正面の幕を切つて落す。眞中に天津乙女、羽衣の人形。上の方に日本武尊の人形。下手に龍神の人形、大口の形。各々花車の見得よろしく、舞臺よき所まで押し出す。

〽勇ましや、正に和合の天地神、造り花だし花や咲く、げに花かつら色めくは、春のしるしの面白や、空ならで、爰も妙なり天津風、雲の通ひ路吹きとぢよ、乙女の姿しばしとて、てんととめたる舞ひの袖〽地に又入れば下界にて、和田の原なる緣の色も、うつる海原、沖ゆくばかり、月の御船の佐保の河原へ、浮み出でたる龍神の、玉の冠りも傾むけば、ところ春日の三笠山、雲にのぼり地に入りて、飛火の野守りも出て見よや〽さて又人は日の貢ぎ十二代なる景行天皇、日本武の御尊、東夷退治の御いさほし、頃は木枯し時雨月、關の東や富士ケ根の、氷柱に鋭き百草千草、荒き夷をもろともに、切り靡かせし御佩刀、それより名けて草薙の、御劍の威德泰平の、御代を壽く神いさめ、天の羽衣、龍神の、波瀾の神よ千早

振る、神は人なりとりまぜて、これ天地人三本の、見立てを玆に。

トこれにて三人引拔き、天人は三日月お扇、龍神はお祭佐七、日本武尊は本町綱五郎、いづれも祭の形。よろしくあつて

〽來ても見よかし花の江戸、祭に揃ふ定紋は、牡丹に狂ふ扇獅子、重ね扇の雄獅子の中へ、雌獅子をまぜて三つ扇、風もかほりて美しき、夏の夕暮れ賑はしや。

ト三人よろしく振りあつて

佐七 時に、男二人の中へ、美しい女が一人

綱五 嬲るといふ字に讀むとやら。

せん ほんに、綱五郎さんに佐七さん、お前方の口では、なぶられさうな事ぢやわいなア。

佐七 ナニなぶるものか。ほんに地金だ。

綱五 幸ひ石町の太夫さん、この子がすつぱり靡くやうに

佐七 口說きを一番お賴み申しやす。

〽君は山谷の三日月樣よ、宵にちらりと思はせぶりか、藝者といへば三味線を、引く手數多のぬしなればとて、梅にもいつか鶯の、高くとまつてくれずとも、本音を出したせうがには

〽女房孝行に朝起きて、龍宮見世の生肴、鰹々初鰹、鰈や大鰈、肩に負うての商ひも、お氣に入らずば精進物で、今朝はお茶漬、お口に合ふもの、煮豆はり〳〵、菜づけ〳〵、いひなづけとはちと地大根、太い願ひか知らねども、夫婦丸麩になりたいと、氣を揉み瓜の露の身は、いつでもすいではないかいな 〽さう云はんすりやお前一人が眞實で、わたしや世間の皆樣に、憎まれ草も氣の毒な、役にさゝれた天乙女、藝者は憂の酌をなし、浮いた顏して勤めてゐれど、可愛い男をよそへ唄、ちらとその影三保ヶ崎、月淸見潟富士の雪、解けて逢ふ夜を樂しみに、のろけざ惚れたが解るまい。

ト綱五郎前へ出て

〽エヽ畜生め、浮れ女の、實と頻伽の雄鳥を、見たは初めて珍らしい、樣は天人とんとろりとろり〳〵と紅鐵漿つけて、男たらしの化粧坂、少々癪にさはり山、曾我祭だけ今妾で、一番五郎を出さうかと、思へど野暮な嫌らしい、女の方に食合ひは、嫌味ぎらひの神氣性、妾らが洒落のやまと武。

ト、お扇前へ出て

〽挺でもきかぬ氣強さを、引いて見たさの手古舞は、女ながらも家の株 キヤリ 〽やんれ引

けく〳〵よい戀しかけてゐんやらサ、やつと抱きしめ床の中から、小夜着蒲團をなぐりかけ、なんでも此方を向かしやんせ、ヨウイ〳〵よい仲同士の、戀いさかひなら、痴話と口舌は、今夜もせい、東雲の明の鐘、ゴンと鳴るので仲直りすんました。

ト この木遣りのしまひに、三人振りにて手を打ち

〽 えんやりよう。

ト 屋體囃子になり、向うより鳶の者二人、一人は獅子の頭を持ち、一人は後足にて、走り出て花道へとまる。下座のはやし長唄連中、底抜けの前へ出る。地へ取り

長唄 〽 馳けくる獅子の勢ひは、向う鉢卷き手拭に、牡丹の英、匂ひみち〳〵、群集の祭、おのがさま〴〵蝶小蝶、足を千鳥に狂ふ獅子、ちら〳〵〳〵。

ト 狂ひの合ひ方になり、兩人狂ひよろしくあつて手踊りになる。

淸元 〽 見渡せば、素顔見せたる夏の富士、裾には雪の白一文字、外八文字の道中に、禿は二つ瓶子とも、また三つ巴ながしめに、大一大萬大吉の、首尾の松皮見合せて、大淵流しも儘ならぬ、ゆるさぬ人の四つ目結ひ、重ねて扇と月星を、指折り烏帽子かんならず、輪違ひまいとの約束は、詞の花菱花うつぼ、雌龍雄龍の女夫竹、竹に雀や松に鶴、牡丹に狂ふ獅子の曲、

勇ましや。

長唄〽獅子とらでんの舞樂のみきん〳〵、樂も神樂もおしなべて、浮かれ立つたる神いさめ、打てや囃せや曾我祭、外に類も荒人神の、その功を末の世に、歌舞伎の花と賑はへり。

トこの散らしの中へ灸按、以前の形にて出て、無性に踊る。鳶の者兩人、あちこち突き返す。

綱五　コレ〳〵、貴樣の屋體は、此方ぢやアねえ〳〵。

灸按　どこでも構はぬ。無性に踊る。

佐七　とんだ交ぜッ返しだ。

せん　ほんに、をかしな形ぢやわいな。

ト綱五郎、灸按を捕へて

綱五　これが卽ち俄の始まり。

佐七　なんだ〳〵。

綱五　しのぶ賣り見て我が振り直せ。

トこれふり頭取、拍子木にて、俄の思ひつき、いろ〳〵あつて皆々くる。灸按殘り、一人で踊つてゐる。爰へ畑右衞門出て來て


大切


浄瑠理
長唄
囃子
連中
連中

畑右　ヤ、爰に居たな〳〵。見附けた〳〵。

ト摑まへる。

灸按　アヽ、コレ〳〵、また貴様が來たか。愚老は俄で大取込み。御返事は、此方からやる〳〵。

畑右　イヤ〳〵、手紙の返事が出來ぬなら、殿よりこなたが預かつたその品を、おれに渡しやれ〳〵。

灸按　ハテ、この人は。コレ、一體愚老が二の宮といふ女を執持ち、その褒美の屬托同然、預かつたその一品、よし二の宮が死んだにもせよ、骨を折らした褒美を寄越さぬ其うちは、滅多にこの品遣られぬ〳〵。

畑右　そんなら殿から遣はされし、この御狀の御返事を下さい。

灸按　ハテ、この人は聞き譯の惡い。お返事はこの通り、岩藤さまへ申し上げさつしやいな。

畑右　イヤ〳〵、その位な事では屋敷へ歸り、御前へ申し譯がない。岩藤さまの屋敷へ、同道いたさうござれ〳〵。

ト手紙を持つたるまゝ、灸按を引ッ張る。このあたりに件の商人、荷をかたげ出かゝり、岩藤々々と云ふを聞いて思ひ入れ。

灸按　これはしたり、手紙の返事は此方から仕ると、岩藤さまへ云はつしやいよ。

畑右　イヽヤ、屋敷へ連れてゆく〳〵。
　　ト爭ふ。この時、件の商人走り寄つて、密事の書狀を引ッたくつて、花道の方へ行かうとする。
ヤ、大事の御狀を
　　トかゝるを、持つたる荷を畑右衞門に打ちつけ、狀を持つて向うへ入る。畑右衞門うろたへ
おのれ、泥坊の泥坊〳〵。
　　トこの跡を追うて入る。灸按殘り
灸按　〆めたぞ〳〵。彼奴さへ歸つてしまへば、もう樂ぢや。さて〳〵、うるさや〳〵。
　　ト懷より香包みを出し
併し、又うせまいものでもない。ドリヤ、氣の附かぬ所へ。
　　ト若い者中の提灯を見附け、その中へ隱し思ひ入れ。此うち佐七、後に出て窺ひゐる。
これでよし〳〵。あゝして置いて、褒美の來ぬうちは、滅多に渡す事ではない。
　　ト云つてゐるうち佐七、件の提灯の中を見て、一品あるゆゑ、思ひ入れあつて、これを持ち、行かうとする。灸按見附けて
コレ〳〵、この人は、どこへ持つて行く、滅法界な。

佐七　何が滅法界だ。この提灯は、おいら達が拵らへた揃ひの提灯だ。それがどうした。
灸按　ナニ揃ひの提灯だ。コレ、それなれば、おれも連中だから、灯させてくれ〳〵。
佐七　ナニ連中だ。コレ、誰れに斷つて醫者の貴様が、若い者附合ひをするのだ。おいらは知らねえ。
エヽ、おへねえ慈姑の化け物だ。
灸按　イヤ〳〵、慈姑の化け物でも何でも、こりやァおれが、灯すワ〳〵。
佐七　エヽ、イケふざけた。放しやァがれ。
ト引合ふはずみに中より香包み出る。佐七手早く取上げ
これこそ紛ふ方なき東雲の名香。
灸按　それを
トかゝるを引附け
佐七　伊太八さまが詮議の一品、こりや好い物が手に入つたわえ。
ト灸按を投げてキツと見得。屋體囃子にて、よろしく
右の鳴り物にてツナギ、引返し。

幕

本舞臺、向う打拔き、遠見に見たる奧座敷、障子たてきり、浮繪心に飾り、前通り築山、皐月の盛り石燈籠。よき所に樋の口、泉水に花あやめ、柳の吊り枝、上の方に枝折り戶、庭井戶。すべて岩藤玄蕃屋敷奧庭の體。よろしく、蛙の聲、螢多數飛び廻り、時の鐘、琴唄にて幕明く。

ト雨車にて向うより宇田五郎、袴着流し、大小、下駄にて、路次笠をかざし、畑右衞門引添ひ出て來て

五郎　ハテ、それは珍事が出來いたしたな。

畑右　イヤモウ、申し譯なき事ども。何分よろしくお願ひ申しまする。

ト舞臺へ來り、五郎、枝折り門に寄り

五郎　岩藤どの、召連れましてござる。

岩藤　承つた。只今それへ。

ト合ひ方になり、岩藤玄蕃之丞、袴着流し、大小にて、蛇の目傘をさし、庭下駄にて、手燭を持ち出て來る。

五郎　玄蕃之丞どの、折角今宵懇望の、名香の儀も

岩藤　ヤイ〳〵、畑右衞門、客來あるゆゑ、今宵に限るあの名香、持參いたせよと申し附けしに、遲刻いた

せしその上に、又もやその品は。

畑右　へイ／＼、申し譯なき事ながら、彼の灸按に尋ね合せ、御狀を拜見いたせよと申せども、なかなかに聞き入れず、御褒美を戴かぬそのうちは、相渡さぬとの强情者。然らば御狀の文言を、やうやう見するも祭の場所、込みあふ中にその一通、失ひましてござります。申し譯もなき仕合せ。

岩藤　ヤヽ、すりや名香も受取り參らず、あまつさへ、予が方より遣はせし彼の書狀を……ハテ、心がかりな。

ト思ひ入れ。五郎、懷より香爐を出し

五郎　其許の指圖にて、この香爐に件の名香、くゆらし見るは今宵ぞと、所持いたしある香爐も、名香いまだ手に入らずば

ト香爐を岩藤に渡す。

岩藤　折角今宵各々方を、招きよせしも名香の、不思議を試さん心にて、今宵の會合いたせしに、密事の書類を失ひしとは、この身の大事。

五郎　然らば奧へ通行の、門々固めて嚴しく出入りを、身共が參つて

岩藤　御苦勞ながら。

五郎　心得ました。

ト合ひ方、蛙の聲、五郎は足早に向うへ入る。

岩藤　さるにても、心がゝりはあの書類。名木の樣子認めあれば、外手へ渡らばあの文言、もしや手づるを。

畑右　下郎も左樣存ずれど、致し方なき無調法。

岩藤　それと申すも、予が見極めし使ひの下部。悔んで詮なき予が誤まり。チエヽ、腹の立つ。

ト立腹の見得にて、思はず拔討ちに畑右衞門を切る。畑右衞門、見事にかへる。この時。時の鐘の頭を打つ。蛙の聲、一度にやむ。この途端、樋の口を明け、伊太八、好みの拵らへにて窺ふ。岩藤、死骸を踏み飛ばし、思ひ入れ。伊太八、ツカ〳〵と出る。岩藤、窺ひ見て

岩藤　それに居るは何者だ。

伊太　へイ、私しでござります。

岩藤　ナニ、私しとは。

伊太　尾上之助が召使ひ、盛り切り奴の、初平でござります。

岩藤　すりや、おのれめが。

伊太　へイ。

岩藤　予は犬かと存じた。ハヽヽヽヽヽ……さりながら、用心堅固のこの館、誰れが許して、目通り近くうせたのだ。

伊太　イヤ、お許しはござらねど、今日思はず途中にて、手に入りまする密事の状、その文言に紛失の名木香爐二品は、あなたが御所持と存じつき、憚り多くもお館の、御寢所間近きお庭先、犬つくばいに奴めが、わざ〳〵推參いたしてござります。

岩藤　默れ、下郞め。尾上之助が屋敷にて、紛失なしたる二品の在所、なんで身共が存じ居らう。併しそれには證據があるか。

伊太　證據は卽ちこの書狀、醫者灸按へあなたより、名香渡せと內意の御狀。祭の場所で不思議にも、手に入りましたは奴が存意、屆いたところ、岩藤さま、お覺えござらばその二品、キリ〳〵奴に下さりませ。

ト件の書狀を出し、キッと思ひ入れ。

岩藤　證據とあれば、その狀これへ。

伊太　イヤ、この狀は

岩藤　予に見せざるは、怪しき書狀。

伊太　然らばそれにて

　　　ト差出す。岩藤見て

岩藤　似ても似つかぬ僞書の文言、證據にならうか。痴けた奴の。

　　ト手燭の灯にて件の狀を燒き捨てる。伊太八驚き

伊太　ヤヽ、折角手に入るその書翰、火中なされて

岩藤　證據はあるまい。

　　ト よき時分、懷中の香爐を、ソツと傘の中へ隱すこと。

伊太　成る程それでは差あたる、寶の手がゝり、證據の品も

岩藤　切れたであらうな。

伊太　いかにも左樣。併し證據の一通は、灰になつてもまだ外に、奴が平常懷中に、離さず所持する御守り、一度はあなたに拜ませたく、守り奉ぜし盛り切りが、所持の守りを岩藤さま、拜まつしやつて下さりませ。

岩藤　すりや、汝が所持する守りを。して、その守りと吐かすのは

伊太　即ちこれに。

ト片足の草履を示す。岩藤見て

岩藤　こりや尾上めを意見の節、打擲なしたる草履の片足。それがどうした。

伊太　この草履ゆゑ主人の生害、家斷絶も岩藤さま、あなたの笞が遺恨の始まり。寶の詮議にお屋敷へ參り合せし今宵こそ、吉祥日とも奴めが、存ずるゆゑに持參した、いはゞ女の役廻り、初で致さば御贔屓の、大和屋流の杜若、あやめにも似ぬ花菖蒲、女形にあらぬお馴染の、下手もお江戸の走り茄子。成田奴が差出たも、尾上が遺恨晴らしに來た。玄蕃之丞さま、岩藤さま、二品渡したその上に、御不請ながら初平に、ぶたれさしつて下さりませ。

岩藤　小差出たその頤、おのれが主の尾上之助、うろたへ武士ゆゑ草履の折檻。その仕返しとは緩怠千萬。殊更夜陰に予が館、忍び入りしは盜賊同然。察するところ尾上が小悴、餓鬼を育む盜人夜盜か。さすれば餓鬼も云はずと同類。細首刎ねるが世上へ見せしめ。

伊太　なんで其やうなさもしい根性、この身にとつて

岩藤　然らば何ゆゑ忍んでこれへ。

伊太　寶の詮議をしようが爲。

岩藤　二品あつたか。

伊太　サアそれは。

岩藤　餓鬼を尋ねて、首ぶたうか。

伊太　サアそれは。

兩人　サア〱〱。

ト岩藤、伊太八を引附け

岩藤　おのれ下郎の身を以て、勿體なくも頼家公の、お覺えめでたき岩藤玄蕃、御當地根生ひの某が、お江戸は勿論京大阪、經巡り廻つた憎まれ者、強惡人と評判の、鑑定の附いた敵形へ、嘴青き青二才、うぬらが及ぶところでねえ。主の尾上が追善に、草履の回向を、カウ〱〱

ト草履にて伊太八をしたゝかに打ち

なんと骨身にこたへたか。

ト伊太八、無念の思ひ入れにて

伊太　證據の一通火中なし、殊に又ぞろ奴めを、草履を以て

岩藤　ぶつた、叩いた。ぶちのめした。まだその上に、眼前これにて息の根とめて

ト抜いて切りつける。伊太八立廻つて、ありあふ傘にて、しやんと白刃を受ける。この時傘の中より
件の香爐落ちる。伊太八取つて

伊太　ヤヽ、これぞ正しく失せたる香爐。

岩藤　南無三それを

ト切つて行くを、立廻りよろしく

伊太　香爐は思はず手に入つたれど、いま一品のあの名香。

岩藤　揃はぬうちは、願ひは叶はぬ。うぬはこの場で

ト切りつける。伊太八、立廻つてキツと留め

伊太　二品揃はぬ其うちはと、思つてゐれどこの如く、やむ事を得ぬ岩藤玄蕃。爰で奴が敵討。

岩藤　うぬ、その高言を

ト切りつける。これより琴の六段、誂らへの鳴り物にて、兩人、傘を使ひ、大タテあつて、岩藤手を負ひ、撞となる。この時、向うバタ〳〵にて、佐七、件の名香を持ち、駈け來るを、宇田五郎支へる
立廻りにて、兩人出て來り、この體を見て

佐七　ヤア、初平どのか。こなたが尋ぬる東雲の名香。

伊太　ヤヽ、手に入つたるか、二品揃へば岩藤玄蕃

岩藤　なに、やみ／＼と

　　トかゝるを伊太八、岩藤を取つて押へ

伊太　主人の敵、覺えたか／＼。

　　ト草履にて打つ。この時五郎、佐七にかゝるを、見事に引敷き

佐七　二品揃ふ上からは、お家の再興。

伊太　これにて本望。

佐七　出來た／＼。

　　トこの時、ドン／＼になり、菖蒲革の侍ひ大勢、弓張り、十手を持ち、出て來り、兩人を取卷き

侍　動くな。

兩人　なんと。

伊太　まづ今日はこれぎり。

めでたく　打出し

（作者　鶴屋南北）

陬逢莱曾我

（むつましづきほうらいそが）

陬蓬萊曾我

三建目

相州杜戸明神の場

役名――賴朝息女、大姫。曾我の二の宮。腰元、舞鶴。同、龜菊。手越の少將。梶原三太郎景茂。同源太景季。竹の下孫八左衛門。近藤七郎國平。新貝荒次郎。吉備津の大藤内成景。近江彌太夫成國。和田の家來、片琴勇之進。馬士、刎ね艮の彌藏。曾我の禪司坊。工藏犬坊丸祐友。小林の朝比奈。曾我の家臣、團三郎。

三建目口上役人觸れ濟むと、通り神樂になり、幕の外へ、花道と幕の引附けより、思ひ〳〵の旅人、馬士、六部、順禮などの仕出し大分出る。この仕出しの中へ禪司坊、いが栗かづら、脚絆草鞋の形にて、千ケ寺葛籠に菅笠を附け、杖を突き、病人の體にて、修行しながら出てくる。仕出し、これに錢をやつて入る。此うち跡より國平、大小、股引、草鞋、ぶツ裂き羽織の形にて出でくる。跡より紺看板の

供一人附き出て來て、國平、仕出したを一人々々窺ふ事あつて、トゞ禪司坊を呼びとめ

國平　ヤイ〳〵、坊主め、待て〳〵。

禪司　ハイ〳〵、私しが事でござりまするか。

國平　知れた事だ。見れば、旅疲れにやつれた樣ぢやが、いづれよりいづれへ通る者ぢや。往來手形でも持つてるるか、眞直に申せ。

禪司　ハイ〳〵、私しは、越後の國から罷り出ました者でござります。

國平　越後が生國と申すのか。して、住居いたして居つた寺は、何と申す。

禪司　ヘイ、その儀は、越後と申しましても、西越後、東越後、廣い事でござりまして、寺院も諸所方方にござりまする。

國平　ヤイ〳〵、默れ。此奴いよ〳〵怪しい奴。外の寺院を尋ねるのではない、われが住居いたして居つた寺は、何と申す、それを吐かせ。

禪司　ハイ、ソノ、私しが住居いたして居りました寺は、高田の善道寺。

國平　ナニ

禪司　イエ〳〵、それではござりませぬ。彼の親鸞上人の

國平　ヤア、此奴胡亂者。われが住居を申さぬに於ては、僞はり者、引ッ縛つて召しつれる。腕廻せ。

ト引据ゑる。禪司坊、苦しき思ひ入れにて

禪司　ア丶、モシ〳〵、御免なされませ〳〵。左樣なれば申し上げませう。何を隱しませう、私しは、久上寺の所化でござりまする。

國平　ナニ、久上寺の所化と申すのか。

禪司　左樣でござりまする。はる〴〵參りましたも、この度祐經さまへ、お願ひの筋ござりまして、國を出ましたところ、越後路より信濃路へかけまして、殊の外の大雪、その道より斯樣に病づきまして、誠に杖を力に、やう〳〵これまで參りましてござりまする。斯樣に申し上げまするうちも、息が切れまして、ア丶、術なうござります。

ト云ひながら、苦しき思ひ入れ。國平これを見て

國平　成る程、左樣承れば、怪しい者とも見えぬ。ほのかに聞けば、先達て久上寺修覆の金子、紛失との取り沙汰。その儀を祐經どのへ訴へに參つたと、いふやうな儀であらう。相違もあるまい。身は近藤七郎國平と申す者。この程鎌倉より三島の間に徘徊いたす、關の畑右衛門と申す浪人者。その以前は京都の生れと聞きしが、此奴、手にあまる護摩の灰、詮議いたせと北條どのより、指

圖を以て斯くの如く、往來の者を吟味いたす。わいらもこれまで參るうち、もし宿屋などにて左樣な者を、見聞いたした事はないか。包まず申せ。

禪司　イエ〱、仕合せと、左樣な者には、出合ひませぬやうにござりまする。

國平　よし〱。然らばこの上は、濱邊傳ひに杜戸の近邊を詮議いたさん。家來參れ。

侍ひ　ハア、。

ト通り神樂になり、國平、供を連れ、幕の內へ入る。禪司坊思ひ入れあつて

禪司　ヤレ〱、搗てゝ加へて、心惡いに今の詮議、思はず大きに心を使うた。その上、久上寺の寄附の金子紛失の事、今の侍ひが詞の端々。すりや、もう此方へ訴へがあつたか……これといふも養父祐信さま、お上より預かりありし、逆澤瀉の鎧、鬼王にお預けありしを、兄祐成の放埒に、質入れありて祐信さまには、和田さまへお預けの身と、聞けば聞くほど親身の悲しさ。どうぞせめては露より程も、曾我の貧苦が助けたいと、思ひ思うてあらう事か、出家にあるまい恐ろしい……
……所詮命は野晒しと、思ひ詰めたる禪司坊、と云うて曾我の屋敷へ尋ねても行かれず。どうぞ折よく鬼王兄弟の、在所を尋ねて、

ト思ひ入れ。この時、幕の內、ドンチヤン、勢子の聲する。禪司坊愕りして

オヽ、あれは慥か道々に、噂のあつた祐經の若殿、富士の御狩の下稽古であらう。ヤレ〳〵、よしない事を問はず語り、思へばいとゞ病の障り。ドリヤ、氣を取直して修行しながら、もう少つと歩きませうか。

ト通り神樂になり、禪司坊、切なき思ひ入れにて、杖に縋り、幕の内へ入る。

本舞臺、三間の間、正面二重の石坂、上に松林、これに笹龍膽の紋の附いたる幕を張り、この坂の中段に、景茂、素袍、大肌脱ぎにて、石を引ッ抱へて立ち身。坂の上に竹の下孫八、新貝荒次郎、素袍烏帽子にて扣へゐる。舞臺上の方に大藤内成景、麻上下、湯襷をかけ、奉納の木太刀をかけし額を持つてゐる。舞臺眞中に犬坊丸、騎射の形にて與市の見得。下の方に宇佐美小文次、鷹狩絆纒、股引、草鞋の形にて、腰に鞭を差し、犬坊丸の竹笠を持つて扣へゐる。左右に陣笠の勢子、割り竹を持ち、扣へゐる。一體、杜戸明神の鳥居先の道具。ドンチヤン、こいあいにて幕明く。

大勢 どつこい。

孫八 既に今日、富士の御狩の下稽古、拳かための折に臨んで

荒次 爰は所も杜戸の明神、眞先かけて犬坊丸祐友、父祐經どのは狩場にて、惣奉行たる御大役。

大藤　魑魅罔兩もあらんかと、祈念に依つて斯く申す、吉備津の宮の大藤内成景まで、今日の社參と申し、これに連なる今日只今、梶原景茂の力試しは、御料の宮地にこれありし、古へ鎌倉權五郎景政が、腕に覺えの手玉石、奥野の狩の古事に習ひ、拳かための石投げは。

景茂　問ふに及ばず右大將頼朝公、伊東が館に御座の時、祐親君の勞苦をいさめ申さんため、奥野の狩を催ふしける。

小文　既に酒宴に及びし時、幕打廻せし眞中に、差出でたりし大石あり。

犬坊　人々あはれこの石の、相撲の席の妨げなりと、口々にこそ申しける。

景茂　その時股野進み出で、鞠ほどなるその石一つ、礫に打つとも苦にならじと、あたりをキッと見てあれば

犬坊　眞田の與市義貞は、遙かの谷をば通りける。

景茂　景久見るより聲をかけ、いざこの石をぞ參らせん、受けて見られよ與市どのとぞ申したり。

犬坊　與市その時會釋して、こはいかに股野どの、かさより落す大石を、谷にて誰れか受くべきや、御免あれとて行かんとする。

景茂　ヤア小積なり與市どの、この石受けぬは一門の恥と、大きに嘲り云ひければ

犬坊　與市こらへぬ若者にて、一家の恥とは烏滸がましや、それしきの小石をば、一つも二つも早捨てよと、竹笠ちぎつてフワと捨て、大手を廣げて待ちかけたり。

景茂　サア、その古事を今爰で、持ち抱へたる手玉石、イザ參らさう、受けて見られよ。

犬坊　こは興がる梶原どの、今日た親祐經、この度の富士御狩、惣奉行を承れば、拳かための狩倉を、催ふす今日。

小文　股野が古事に事よせて、主人犬坊を若輩者と侮つてか。お側には宇佐美小文次附きそひ居れば、迂濶な事は罷りなりませぬぞ。

荒次　なんの差出たその一言、景茂どのには犬坊丸へ、拳定めのその爲に、折角用ゆるあの大石。

孫八　怪我過ちがあつてつまるものか。受け損なつて、ほんの元々。

大藤　武士にあるまい卑怯な一言。但しそれともあの石が、犬坊丸には怖いのか。

景茂　拳かための今日ゆゑ、眞田にたとへし犬坊丸、その身の卑下は取措いて、受けて見られよ手玉石イデ一投げに

ト振上げる。この時向うにて

大姫　待つた。

皆々　なんと。
呼び　大姫君参詣。

ト呼ぶ。これにて舞臺皆々思ひ入れ。直ぐに三味線入り誂らへの鳴り物になり、向うより大姫、廣振り袖にて、金銀の扇を持ち、出てくる。跡より舞鶴、腰元の形にて、銀の駕籠菓盆を持つて出る。跡より龜菊、同じく腰元にて、香爐を載せ、持ち出る。跡より二の宮、襠裲衣裳、三方に守護の木札を載せ、これを持つて出る。跡より成國、白髪かづら、麻上下にて、三方に繪圖面の箱を載せ、持つて出てくる。跡より勇之進、胡麻鹽かづら、麻上下にて、三方に錫の神酒徳利を載せ、これを持つて出る跡より黒羽織の侍ひ二人、草履取り一人附き、出て來り、この人數直ぐに舞臺へ來て、大姫、上の方へ通る。龜菊、毛氈を敷き、その上へ舞鶴、褥を敷き、これに住ふ。皆々並よく住ふ。犬坊丸、下へ下がつて手を突き

犬坊　大姫君さまには、只今御參詣
皆々　遊ばされましたか。
大姫　『みどり子の、親の心を知るゆゑに、杜戸の神とあとやなしけん。』爰は所も杜戸の宮、また春めいた海の景色。それは格別、今あれから見れば、まだうら若き犬坊へ、荒くれ事はよしない遊び

怪我過ちにも及びなばと、親の心を知るゆゑに、思ひ杜戸へ來合せし、この自らがとゞめしも、無事を祈りの神詣で。ソレ、彌太夫、双方ともに、よいやうに。

成國 ハッ、こは有り難き姫君の御諚。景茂さまにも、お嗜みなされませい。どう致してその石が受けられ申さう。只今姫君よりお止めでござれば、まづ／＼お扣へなされたが、よろしうござります。

勇之 左やう／＼、拳かためなぞと申して、富士の御狩の下稽古から致して、子供などには危ない事でござるて。拙者は又この神酒、和田の屋敷より、祐信申し譯の立つやうにと、祈念を受け、持つて歸るが拙者には、大切な役柄でござる。兎角双方、怪我の無いのがようござるて。

成國 何は兎もあれ、姫君より重きお詞。まづ／＼梶原さまにも、この座ぎりがよろしうござりませう

大藤 成る程、大姫君の御諚とあれば、手の附けやうは無けれども、親の威光を鼻にあらはす犬坊丸、これからは石投げの事は、姫君の御意を立てゝ、これぎりにも致さうが、蒔き直しての拳かため幸ひ拙者が持參いたした、奉納の木太刀、これを以て、姫君のお慰みに、竹刀打ちが拳かため。

景茂 こりやアようござらう。然らばこの三太郎景茂、身不肖ながら、お相手に罷りならうか。

ト竹刀を眞中へ直す。二の宮、こなしあつて

二宮 これは又、あられもない竹刀打ちを、姫君様のお慰みとは、成景さまのお詞とも存じませぬ。譬

への節に申す如く、生兵法大疵の基とやら、どなたに怪我があるまいとも申されませぬ。それより は何ぞ姫君樣の……オヽ、それ〳〵、この濱傳ひに、お貝合せを遊ばすか。何ぞ和らかなお慰みが、ありさうなものでござりまする。なア、皆さん。

舞鶴　左樣でござりまする。今日はお姫樣にも、お氣結ぼれも出やうかと、お案じ申してのお氣晴らしの、御參詣ではござりませぬかいなア。

龜菊　それに又、石投げの竹刀打ちのと、平常聞いてゐるさへあるに、あんまりなその趣向。ひよつとあの三太郎さんが負けなさんしたら、ほんにをかしなものぢやわいなア。

景茂　ナニ、この景茂が負けたらをかしからうと。さう云はれちやアどこまでも、試合はねば武士が立たぬ。

大藤　左やう〳〵、申し出して、これぎりにも相成るまい。こりや、彌太夫どの、この竹刀打ちばかりは、御免のお取次を

成國　イカサマ、高の知れた竹刀打ち、怪我過ちと申す程の事もござるまい。姫君へは某が、よきやうに申し上げる間。併し、あまり荒氣でないやうに、双方ともに立合ひ召されい。

犬坊　さすればどうでも、この場に於て

景茂　必ずともに、容赦は御無用。

犬坊　然らば此まゝ

景茂　イザ

犬坊　イザ

兩人　イザ。

ト白囃子になり、兩人支度して竹刀打ちにかゝる。ちよつと立廻りあつて「ドッコイ」ととまる。三味線入り誂らへの白囃子になり、兩人存分にタテあつて、トヾ景茂、竹刀を打ち落され、犬坊丸、景茂を打ち据ゑる。景茂、口惜しき思ひ入れ。犬坊丸、思ひ入れあつて

犬坊　眞劍なれば、命は無いぞや。

女皆　やんや〳〵。

景茂　イヤ〳〵、今のは全く怪我といふものだ。サア、いま一勝負々々々。

二宮　これはしたり、たとへ怪我とあつても、負けたものは負けたに相違ござりませぬ。その甲乙があればこそ、遺恨も重なるその道理。古への河津股野も、相撲の遺恨と世の雜說、よしない事にお氣を揉まずと、もう好い加減になされたがようござりまする。

大姬　それ〳〵、自らが心を慰めの爲の今の試合ひ。この上ながら二人とも、必ず遺恨を殘すまいぞ。

ト思ひ入れ。成國、繪圖の箱を、三方のまゝ大姬の前へ持つて來り

成國　それは私し事。今日は、この狩場の繪圖、まつた工藤祐經が燒印据りし狩場の切手。

ト袱紗に包みし切手を懷中より取出し

斯くの如く、大姬君へ御覽に入れ、その上にて賴朝公へ差上ぐる、そのお取次は……ハテ、折惡しく梶原さまには御若輩。ハテどうぞ

ト思ひ入れ。二の宮、これを聞いて

二宮　アイヤ、そのお取次は、この二の宮の局が、受取り差上げませう。

ト成國こなしあつて

成國　イヤ〳〵、餘人は格別、この儀ばかりは、罷り成りませぬ。

二宮　そりや又、なぜでござりまするな。

ト此あたりより禪司坊出かゝり、樣子を窺ふ。

成國　イヤサ、申さば女儀の事。よしさうなくても、叶はぬと申すその仔細は、悲しいかな其許の御出生は、河津の娘。太郎朝忠へ緣組み致されたれども、力と賴む夫二の宮どのには病死いたされ、

それより世を見限つて、大姫君へ一生奉公。すりやコレ、曾我にゆかりのある其許。まつた祐信の越度は、預かり置かれし逆澤瀉の鎧、祐成が揚げ代の代りに、町家へ預くるとは、これ輕からぬ身の越度。

大藤　まだその上に、箱根山にて友切丸紛失。同時に箱王丸は下山して、行くへ知れねば疑ひかゝり、今その詮議眞最中。

成國　彼れといひ、これといひ、迂濶に心許されぬ曾我のゆかり、どう致してこの二品が渡されう。

二宮　すりや、曾我にゆかりの繫がるゝ、この二の宮の局ゆゑ、お取次の儀は

成國　痩せ浪人の曾我殿原、叶はぬ事サ。田作の齒ぎしり

大藤　扣へ召されい。

禪司　そりや又あんまり。

ト思ひ入れ。成國、フツと禪司坊を見て

成國　ヤ、合點のゆかぬ乞食坊主め。うせう。

ト云ひながら禪司坊の襟髪を取つて、舞臺へ引摺り出し

サア、坊主め、むさい穢ないこの形で、なんで姫君の御前へ出た。それさへあるにたつた今、う

ぬが口からあんまりと、口走つたは合點がゆかぬ。サア、有やうに身許を吐かせ。

大藤　彌太夫どの、此奴、狂人かも知れませぬ。

成國　イヤ、氣の狂つた面つきでもござらぬ。サ、なんであんまりと口走つたのだ。

禪司　サア……その、あんまりと申しましたは、思はず知らずこれへ參りまするど、あまり……サア、あまりに凶事の重なる怪我……樣とやらゆゑ、ツイ我れ知らずに

成國　それで、あんまりと吐かしたのか。此奴、口賢こく云ひ廻すな。それはそれにも致してくれうがわれの生國は、いづれだ。

禪司　ハイ〳〵、御免なされて下さりませ。私しは遠い北國の者でござりまする。

成國　ナニ北國だと申すか。オヽ、その北國が油斷がならぬ。先達て主人祐經、越後の國久上寺へ御寄附の金子、百兩差上げられしところ、その金子を奪ひ取つて、久上寺を逐電なせしは、河津が末の子、禪司坊。

トこれにて禪司坊、二の宮、悔りこなし。成國、兩人に目を附け

サア、てつきり汝に違ひない。この上は屋敷へ引ッ立て拷問する。うしやアがれ。

ト引ッ立てようとする。禪司坊、その手に縋つて

禪司　モシ〳〵、マア〳〵お待ちなされて下さりませ。どう致しまして其やうな、恐ろしい事を致すやうな者ではござりませぬ。北國とは申したれども、信濃路より雪に凍えて、この鎌倉へやう〳〵と、杖を力にたどり〳〵、往來の人樣のお助けにて、露命を繋ぐ賤しい修行者。なにも怪しい者ぢやござりませぬ。どうぞ御免なされて下さりませ〳〵。

二宮　成る程、見ましたところが、左樣な恐ろしい事を致すやうな、出家とも見えませぬ。こりやお免しなされて遣はされた方が、よろしうござりませう。

成國　なにサ〳〵、又してもいらざる詫び言。この上は、疑ひかゝつたこのづく入、包むに於てはぷりぷり責、拷問なして白狀させうか。

禪司　サア

成國　但しこの場で白狀するか。

禪司　サア

兩人　サア〳〵〳〵。

成國　坊主め、爰を動きやアがるな。

ト成國、禪司坊を引附け、打擲する。この途端に薄ドロ、成國の懷中にて轡の音する。禪司坊、二の

宮、皆々悔りする。成國驚き、ちやつと懐を押へる。二の宮こなしあつて

二宮　ハテ合點のゆかぬ。いま彌太夫さまの懐中にて動搖したるは、正しく河津の家に傳はりし、木枯と名けたる轡の一品、血筋の者に凶事ある時は、自然とその音を發するといふ。過ぎし安元二年の空、赤澤山にて祐安さま、御最期ありしその場所へ駈けつけ見れば、家に傳はる木枯の轡紛失又その場より逐電なせし、馬添ひの十内、慥かに彼奴が仕業ならんと、思うたばかり詮方なく、年月過す其うちに、今といふ今木枯の、轡の音に知らせしは、もしや工藤の家老職、小藤太どのの親御たる、彌太夫どのゝ懐中に、正しくその時失ひし、木枯の轡か

成國　ヤ。

ト悔りする。二の宮こなしあつて

二宮　とサア、疑ひかゝるこの場の始末。見るもいぶせき旅僧の、その詮議より差あたる、轡の詮議いたしませうか。

成國　サ、そりやア

二宮　荒立て云へばこの通り。但し繪圖面、切手とも、この局へお預けあるか。

成國　サア

二宮　轡の詮議いたしませうか。

成國　サア

兩人　サア〳〵

二宮　何とでござりまするな。

ト成國こなしあつて

成國　エヽ、折惡い……成る程、ようござる、然らば大切なる品なれども、切手の取次は姫の傅き、局役の二の宮どの、慥かに預け申したぞ。

ト切手を渡す。

二宮　大切なるこの切手、しつかりと預かりましてござりまする、また疑ひかゝりし旅僧は、思ひ設けぬ身の災難。

ト落ちたる裂れを取上げ

ハテ、合點のゆかぬ……見覺えのある藤蔓錦。こりやコレ、京の次郎祐俊さまが、越路へお出での時、慥かに持つて

トあらはに云へぬ思ひ入れあつて

そんなら、疑ひもなき、もしや久上の

成國　エヽ。

二宮　サア、久上……とやらでなければ、その身にかゝる凶事もなし、それと互ひに明石潟、汐の滿干も、くが……と沖、浪に漂ふ其うちに、惡い嵐に吹き散らされ、かゝる島なき今の灘。ナ、それ名乘るも、ナ、のらぬも風次第、行きたい所へ、早う行きや。

ト藤蔓錦を禪司坊に渡す。禪司坊受取り、涙を隱して

禪司　段々のお情、有り難うござりまする。

ト大姫こなしあつて

大姫　ほんに、最前から見るところ、危ふい旅僧、今聞けば雪に凍えて、きつう難儀の樣子と聞く。一河の流れ他生の縁。コレ、二の宮。

二宮　ハツ。

大姫　皆々も一緒にあの旅僧、自らが祈念のうち、ナ、それ、布施物取らせてやりやいなう。

二宮　有り難う存じまする。

成國　大姫君には最前より、御退屈にもござりませう。イザ〳〵、御參詣あつて、然るべう存じまする。

大姬　それ〳〵、そんなら共々神職方へ。二の宮、案內。

皆々　まづ、入らせられませう。

ト唄になり、大姬先に舞鶴、龜菊。二の宮は禪司坊に思ひ入れあつて淚を隱し入る。禪司坊こなしあつて立たれぬ思ひ入れ。これを勇之進介抱して連れ立ち入る。跡より犬坊丸、景茂、孫八、荒次郎、小文次入る。成國、大藤內殘る。

大藤　彌太夫どの、只今の旅僧、形に似合はぬ爪はづれ、何とも怪しいとは存じ居つたが、何を云つても肝腎の時、降つて湧いたる貴殿の懷中。

成國　さればサ、既に二の宮めにと思ひしゆゑ、當座遁れに切手を渡し遣はしたが、あの坊主こそ、禪司坊に相違なけれど、押して詮議もなり難き、懷中の轡の音色。かゝる稀代の河津の重器、この轡があつては、なか〳〵河津を討つこと思ひもよらずと、十八年以前、河津が馬添ひの童、十內めを騙しすかし、暫らく轡を某へ渡し置けと、情ごかしに此方へ奪ひ取り置いたればこそ、柏ヶ峠で河津を討つたその時に、凶事を知らせの憂ひもなく、まんまと某が矢尖にかゝり、命を落せし河津三郎。それより十內めは逐電なし、暫らく中絕いたせしに、この程參つて樣々と、身の成行きを悔むゆゑ、病死の八幡が跡役を、推擧いたして同腹中。斯ほど忠義を磨く我れ〳〵親子に

さのみ高祿をくれざる奇怪。その意趣晴らしと思ふうち、かねぐ\貴殿と牒し合せし、かの一儀は。

大藤　氣遣ひあるな。

ト大藤内、懐中より、小さき德利を出し

これこそは手蔓を以て、密かに手に入れしいゝくじかの膽。この膽に鴆毒を加味なし服まする時は、卽座に眩暈の病となる稀代の祕法。アヽコレ、酒に浸して服ませるまでが手段の第一、折を見合せこの毒を、酒に浸して置きたいものだが。

ト云ふうち、下座より神主、烏帽子裝束にて、勇之進が持つて來たる三方の神酒德利を、其まゝ持つて出て來り

神主　勇之進さまには、どれへござつたか。祈念いたしたこの神酒、どうぞ手渡ししたいものだが……モシぐ\、あなた方のうち、勇之進さまと仰しやるお方はござりませぬか。

ト此うち成國、大藤内、こなしあつて

成國　成る程、その勇之進と申すは、拙者でござる。

神主　左樣なれば、あなたが勇之進さまでござりまするか。御面談いたさぬゆゑ、お顏は初めて。イザ、イザ、祈念いたした神酒、慥かにお手渡し仕りまする。頂戴なされ、御信心が肝要でござります

る。

ト成國受取り

成國　これは〳〵、拙者が只今參らうと存じたところ、これまで御持參、恐れ入ります。

神主　然らば、しかとお渡し申しました。

成國　これは御苦勞に存じまする。

ト神主、下座へ入る。兩人顔見合せ

大藤　明いた口へ餅にはあらぬこの神酒、斯う手番ひがうまく行くものか。

成國　事成就したやうな心持ちでござる。一刻も早くこの神酒へ、今の一藥、仕込み召されい。

大藤　心得ました。あたりへ心を

ト管絃になり、大藤内、片々の神酒徳利へ、毒藥の包みを出して調合なし、徳利へ仕込み、元の通り神酒の口をして

大藤　斯うして置けば、祐經めにおツくらわせるは、貴殿の計らひ。

成國　そこに如才があらうか。併し、ひよつと取違へまいものでもない。ちよつと印しに

ト上下より紅梅の梅を折つて來て徳利へ挿し

この赤い方をおッくらわせれば、祐經は眩暈の病ひ。まだその上に、祐經が引いたる狩場の繪圖面、貴殿へ渡す上からは、祈念のその時、似せ物を拵らへ置き、鬼門の方へ御領の狩屋を引いたるは、祐經が越度となし、詰め腹切らせ、その虚に乘つて犬坊丸もおッ殺し、三ケの莊を横領なさん一つの手段。この上は右の趣き、梶原へ密かに申し遣はしたいものだが。

大藤　その儀は疾より、認め置いたこの一通。

ト出す。

成國　成る程、出來した。併し、宛名があつては一大事。

大藤　そこに如才はござらぬ。仰せの通り、名宛も知れぬ文言ばかり。

成國　然らば、拙者方より梶原へ、密かに送り遣はすでござらう。

ト成國、手紙を取つて懷中する。

大藤　斯くなる上は豫ねての通り、範頼公の御大望も、成就の道理。して、この大藤内には。

成國　お墨附は、おッつけ同腹中の、八幡の三郎持參いたせば、喜悦の眉も開くる道理。

大藤　エヽ、忝ない。それ承つて成景、心も浮々いたして參つた。

成國　何は兎もあれ、二の宮へ渡し置いた狩場の切手、此方へ取返す手段があれば、拙者はこれより神

職方へ。

大藤　然らば、彌太夫さま。

成國　萬事は後刻。

ト大拍子になり、成國思ひ入れあつて、三方の神酒徳利を持ち、下座へ入る。向うにて

源太　待ちやァがれ〳〵。

ト直ぐにてんつゝ、通り神樂になり、向うより駕籠舁き、四つ手駕籠を舁き、出てくる。この駕籠に少將、着流しにて出てくる。これに若い者一人附き添ひ、跡より源太、柿の前垂れ、德利を提げ、樽拾ひの梶原にて、附いて出て來り、花道にて

源太　コレ〳〵、なんでもこの駕籠の内は、手越の少將に違ひない。逢はせてくれろ〳〵。

若者　とんだ事を云はつしやる。手越の少將さんが、なんで酒屋の御用に近附きがあるものだ。構はずと、駕籠をやらつしやい〳〵。

ト云ひながら、舞臺へ駕籠を押してくる。源太、矢張り附いて舞臺へ來り

源太　このハツツケ野郎め、さう成らないと吐かしやァ、この駕籠はやる事はならないワ。

ト駕籠を引下ろす。此うち下座より景茂出て來り

景茂　これは何事だ。

ト云ひながら源太を見て

ヤア、お前は兄貴の源太どのぢやねえか。

大藤　成る程、さう云へば源太どのか。勘當うけられて、樽拾ひとまで落ちぶれたが、金も築地と思ひの外、これも善次の約束か。

景茂　樽拾ひとは、あんまりな落ちぶれやう。

源太　これサ〳〵、愚痴な事を云つたものだ。二三年あとまでは、紙屑拾ひとまで成り下がつたが、ちつとこの春は出世したところが、この通り樽拾ひよ。したが、去年は願人をするし、揚句の果には路地番までして、いろ〳〵苦勞をした所爲か、おれもうんじやうしたのよ。それについても、この駕籠に乘つてるるのは、おれがだりむくりの始まり、手越の少將。邪が非でも引摺り出して嬶アにせにやアならねえ。サア、少將め、爰へ出やアがれ。

ト駕籠の垂れを上げ、内より少將を引摺り出す。これにて駕籠舁きは駕籠を擔ぎ、下座へ逃げて入る。

若者　さうはならない。

ト取つくを、毆り倒す。少將思ひ入れあつて

少將　そりやお前、無體といふものぢやわいなア。

源太　無體も糸瓜もあるものか。いつそのくされ三人寄つて、廻り燈籠と出かけるべいか。

景太　そいつは妙だ。

ト三人寄つて少將を押しこかす。若い者取つくを毆りのける。此うち通り神樂、向うより朝比奈、胸あて、木綿やつし、三度飛脚、木綿の半のりかけ、三度笠、染め綿にて髭を隱し、出てくる。跡より彌藏、馬士にて、兩掛けの荷を擔ぎ出て來て

彌藏　サア親方、好い加減に酒手をくんなさい〳〵。

ト朝比奈これに構はず、足早に舞臺へ來て、皆々を毆りのけ、少將を圍ふ。皆々恟りして

源太　ヤア、うぬは何處からうせた

三人　三度飛脚だ。

朝比　イヤ、わしや大阪から來ましたわいなア。

ト京談にて云ふ。

源太　その又大阪から來た三度が、なんでおいらを

二人　毆り倒したのだ。

彌藏　これサ親方、わつちも先刻から、口を酸くして申しやす。極めの所から、四里も餘計に參りやした。それに酒手も寄越さず、駄賃も寄越さないで、暗雲に行かつしやるが、挨拶の仕やうが惡いと、この荷物をやる事はならないによ。

朝比　サテハテ、えいわいの〳〵。いま先へ行くと、錢かうてやるわいの。マア、なんであらうと、和田の屋敷までごんせいな。それだけの駄賃はしてやらうわいの。

ト源太思ひ入れあつて

源太　とんだ氣紛れが出てうしやアがつて、イケ邪魔をしやアがるな。もう汝にやア頓着はない。サア少將來い。

ト兩人、少將へかゝる。朝比奈、源太大藤内の利腕を取つていためる。

兩人　アヽ、痛い〳〵。

源太　とんだ馬鹿力のある三度めだ。

大藤　なんだか腕が、おッぺしよれるやうだ。

源太　アヽ、聞えた。うぬは、西の海から帆をかけた、節分の鬼か。

朝比　いんにや。

大藤　そんなら大阪者か。

朝比　いんにや。

源太　但し矢ッ張り江戸者か。

朝比　ウンエヽ。和田が三男、小林の朝比奈でござんす。皆さん御無事で、ヤレ〳〵、久しいなア。

ト笠を取る。皆々惘りして

源太　ヤア〳〵、うぬは朝比奈の貧乏野郎だな。父ッぽうに勘當うけ、せう事なしに上方へ行つたと聞いたが、そんなら島屋の上下にでもなつたのか。コレ、江戸の朝比奈といふ物は、厚板の衣裳で羽子板でも擔いで、和田が三男小林の、朝比奈だもサといふがお仕着だワ。それになんだ、うぬは、江戸ッ子のやうでもない。朝比奈でござんすわいなアとは、とんだ上方さいろくだ。

大藤　餘ッほど淀川の水が浸み込んだな。これから少つと、水道の水を呑み習ふがよい。

三人　とんだ唐變木だ。

朝比　さいナ、わしもさうは思ふけれど、多勢に無勢ぢやわいな、聞いておくれや。四五年あちに居るうちナ、つい朝比奈々々々々と云ひ習うて、此方に居た時のやうにナ、とつとどえらい事も抛つて

置いて、何ぢややら、一向厄體ぢやわいな。

三人　イヤ、此奴は呆れたものだ。

源太　これから、皮足袋賣りの、荷擔ぎにでもなるがよい。

大藤　とんだ張合ひのない

景茂　大阪朝比奈だ。

三人　ハヽヽヽヽ。

ト笑ふ。この時下座より勇之進走り出て來て、朝比奈を見て

勇之　ヤレ〳〵、和子朝比奈さまでござりまするか。私しはあなたを待つて居りました。親旦那義盛さまが、迎ひの手紙を遣はされ、今日はお下りか、お戻りかと、お待ち申して居りました。お前が彼方へ上らつしやりまして、もう四五年、アヽ、年はよるまいもの、老耄いたして、一向厄體な事ばかり申します。私しは何を云はうが、毎日違ひます程に、さう思し召して下さりまし。さてさて、物覺えの惡くなるを思へば、干し大根は三ツ葉ぢやなア。

朝比　オヽ、片琴勇之進か。ヤレ〳〵、懐かしかつたわいの、聞いて下され。去年の春、木挽町へ下つて何ぢややら、父御の勘當もゆりず、あなた方のお叱りもあらうかと、わしや扣へて居ましたわ

いの。

勇之 モウ〳〵、その御勘當がゆりましてござりまする。こればつかりは忘れませぬ。

朝比 なんぢや、勘當がゆりたと云ふのかいの。

勇之 左樣でござります。お喜びなされませ〳〵。

朝比 ヤレ〳〵嬉しや。御勘當がゆりたとあれば、わしも上るまで、少つとは覺えて居た朝比奈ぜりふサア、これからは江戸ッ子をお目にかけるぞ。

三人 イヤア。

朝比 ヤイ、げぢ〳〵めら。うぬらはマア、口に借金がいらねえものだと思つて、骨箱をならしやァがつたな。今なんと吐かした。大阪朝比奈だなんぞと、よく苛めやァがつたな。斯う云ひ出すからはうぬらに苛められてつまるものか。これから地金を現はして、うぬら片ッ端から、鹽を附けずに食つてしまふぞ。出島座頭の横ッ倒しめら、覺悟してうしやァがれ。

三人 イヤア。

トこれにて皆々氣味惡き思ひ入れ。彌藏慄へ出し

彌藏 ハイ〳〵、私しは、朝比奈さまとは存じませず、酒手の駄賃のと、おねだり申しましたが、何も

かもお貰ひ申したも同然でござりまする。あなたはお慈悲深いから、只今申しました事は、どうぞ堪忍なされて、お歸しなされて下さりませ。お慈悲でござりますく。

源太　おれも、この位な山はあらうと思つた。どうで朝比奈が來ちやア、毎歳毎年。

大藤　叶はぬ力で

彌藏　投げたり踏んだり

景茂　さつさとござれや。

彌藏　逃げるが一の手。

大藤　痛い目せぬうち

源太　さつさとござれや。

ト云ひながら、皆々慄へく下座へ入る。あと合ひ方。

朝比　ハヽヽヽ、口ほどにもない弱蟲めら、ハテ、好い心持ちだ。時に少將や、久し振りだ。マア、變る事もなくて、めでたいく。

少將　ほんに嬉しうござんす、思ひ設けぬ今の難儀、どうなる事かと思うてゐた所へ、思はず笠を取らしやんすと、朝さんゆゑ、やうく痞へが下りたわいなア。

朝比　それはさうと、おれも少つと聞きたい事がある。

トあたりへ心遣ひの思ひ入れあつて

コレ、勇之進、いま跡から行く程に、先へ行つて、神主と待つてゐやれ。

勇之　イカサマ、左様いたしませう。其うち又、お屋敷へも知らせて遣はしませう。

若者　左様なら私しも御一緒に、宮までお供いたしませう。

少將　わたしが事は、必ず案じなさんすな。

若者　どう致しまして、鬼神のやうな、朝比奈さま。

朝比　おれがしつかり預かつた。

若者　エヽ、有り難うござります。

勇之　左様なれば、朝比奈さま。

朝比　サア、行きやれ〳〵。

若者　サア、お出でなされませ。

ト大拍子になり、勇之進に若い者附いて下座へ入る。

朝比　時に、外の事でもないが、祐成や虎が事はどうなつた。

少將　サア、その祐成さんの事について、大抵話しがござんすわいなア。
朝比　なんぞ案じる事ぢやアないか。
少將　聞きなさんせ。祐成さんは、揚げ代の百兩といふもの、日々の催促に手づかへなさんして、鬼王さんを頼んで、逆澤瀉の鎧とやら、質入れなさんした。そのお咎めとあつて、祐信さまは和田さまへお預け。それゆゑ大磯へはお出でもないゆゑ、いとほしなげに虎さんは、願掛けやら斷ち物やら、涙のかはく隙はござんせぬわいなア。今日爰へわたしが來たのも、みな虎さんの頼みゆゑでござんすわいなア。
朝比　虎が頼みで、なんで、この明神へ。
少將　サア、その仔細は、これでござんすわいなア。
ト懷中より袱紗に包みし、絹地に祐成の姿か描きたるを出し、朝比奈に見せる。
朝比　オヽ、こりやア祐成が人相書ぢやアないか。
少將　なんのいな、この頃はお咎めうけ、廓へござんせぬ祐成さんが懷かしさ、又は祈念のその爲と、此やうに祐成の姿繪を描かせて、杜戸の明神樣へ日毎の願ひ。廓へ歸ると虎さんは、座敷へ懸けて、心の憂を晴らしたいと、思ひ込んでのわたしへ頼み。それゆゑ虎さんの代參に來やんしたわ

いな。

朝比　成る程、それぢやァ虎が案じるも尤も。それより滿江や鬼王が身になつて見やれ。夜も晝も、ろくく寢られまい。併し、この姿繪は、よく祐成に似せて描いたぢやァねえか。こりやァ大方豐國だらう。

ト云ひながら見るうち、風の音して、姿繪を吹きあげ、差し金にて後の幕の内へ落ちる。兩人恂りして

朝比　コレ、とんだ風ぢやァねえか。こればつかりは、力づくにもゆかねえ。

少將　差づめあの繪を失うては、虎さんへの云ひ譯立たず。こりやマァ朝さん、どうしたらよからうぞいなァ。

朝比　これサ、何も案じる事はない。今の繪は、慥かにこの幕の内に落ちたに違ひない。ドレ、おれがちよつと取つて來てやるべい。

ト云ひながら幕を絞り上げると、内より大姫、姿繪を持つて出る。跡より二の宮附いてくる。朝比奈恂りして

朝比　ヤア、いま吹きあげし姿繪は

ト合ひ方。

大姫　嬉しい風が縁となり、思はず妾がこの膝へ、落ちて心をまどはせしは、日頃戀しい床しいと、思ひつめたる曾我の十郎祐成。まだ見ぬ戀にあくがれて、心の中のやる瀨なさ。縁に繋がる二の宮が手前、恥かしさをも姿繪に、押包まれぬ胸の內。蓮葉な者ぢやと、必ず笑うてたもんなや。

二宮　これは又、改まつたそのお詞。情なや姫君の、見ぬ戀にあくがれ給ふ祐成は、この二の宮の局が弟。

少將　エヽ、そんならあなたが二の宮さま。

朝比　この朝比奈も、詞をかけたく思つたが、姫君の御前といひ、だんまりでゐたが、いま聞けば、祐成に打ッ惚れて、見ぬ戀にあくがれてゐた所へ、おつりきな風が吹いて、この手越が預かつて來た、虎が大事のその姿繪、姫君へ卷きあげられちやア、可哀さうにこの手越が、虎に云ひ譯があるまい。なんと二の宮、爰は一番おれが賴んだ。その姿繪を、返してやつちやアくれまいか。

二宮　それいなア、譯を聞けば、虎どのゝ心一つ、と云うて姫君へ申し上げなば、折角思ひつめた祐成の姿繪が、今お手に入り早々に、どうぞお返し遊ばせと、云ふに云はれぬこの場の切なさ。

大姫　イヤ〳〵、大事ないわいの。なんぼ自らが思うたとて、とても屆かぬ戀衣、きつゝなれたる獨り

寢の、枕の伽と思うた姿繪、その主こそは大磯の虎。誰れしも思ふ心は一つ。見れば見るほど思ひの種、早う返してたもいなう。

二宮　畏りましてござりまする。

ト姿繪を取上げる。少將とめて

少將　マア〳〵、お待ちなされませ。憚りながら、賤しいこの身に有り難い、思はぬ今日のお目見得も元はといへばその姿繪。お心あり氣な今のお詞。世を恨みたるお心根が、おいとしうござりますこの譯を打明けて申しましたら、虎さんぢやと申して、海道一の遊君、なんの否がござりませう折角のお心が屆いたしるし。ようござります。私しが心一つで、憚りながら姫君樣の、お氣むすぼれも解くるやう、今宵はあなたへ祐成さんを、おとめ遊ばすがよろしうござりますわいなア。

大姫　ヤヽ、そんならそもじが、この姿繪を

少將　サア、あんまりお心根がおいとしさに、只何事も心一つで

大姫　ほんに優しい志し、嬉しいぞや。

朝比　成る程、流石は手越の少將だ。それで姫君のお心も屆き、虎が心も行屆く。心は二ツ、一人の祐成。女冥加に盡きにやアよいが。

大姫　ナニ二の宮、あの女中の志し、一夜流れの勤めの身に、又とあるまい心にほだされ、根曳き致して自らが、今日より改め抱へたい。

少將　エヽ、そんなら賤しい私しを

大姫　サア、今の詞にほだされて

少將　エヽ、有り難うござりまする。

二宮　然らば今日より改めて、姫若樣の御諚に任せ、今より直ぐにお伽役。廓へは表向きより、申し遣はすでござりませう。隨分ともに、心を附けて御奉公。

朝比　コレ、廓と違つて行儀が第一。もう、酒も鱈腹は飲まれねえぞよ。

少將　そりや合點でござんすが、でも虎さんへこの事を

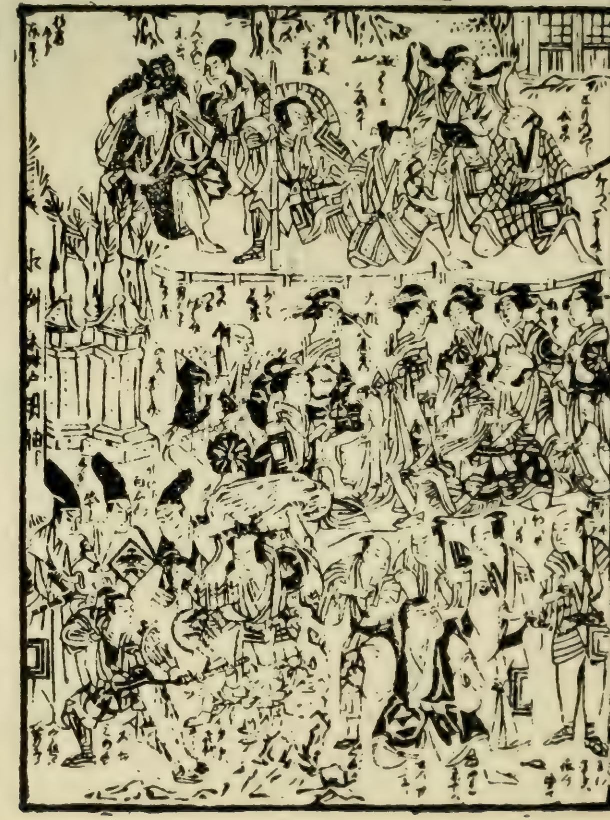
朝比　そりやアおれが吞み込んだ。姿繪の事は、恨みッこの無いやうに、十日がはりにでも勤めさせるがいゝ。

二宮　これといふのも、元の起りはあの祐成。

大姫　ヤ。

二宮　サア、それ程に思し召すお心なれば、先程お願ひ申したる、ナ、それ、この手越どのゝ廓の手を

二建月三



建月



切つて、ナ、それ、門を出口の柳ごし、この姿繪を、ちよつと狩場の

大姫　ハテ、何事も自らがこの胸に、收めて置くはこの姿繪。

　　ト懷へ入れる。バタ〳〵になり、下座より舞鶴、龜菊出て

舞鶴　姫君樣には、神職方にて奉幣の刻限。いざ〳〵

二人　お入り遊ばされませう。

大姫　そんならこれより、手越とやらも共々に

少將　お供いたしませうわいな。

朝比　ドリヤ、この朝比奈も、魚交りになるべいか。

二宮　左樣なれば、姫君樣には神前へ

大姫　皆、おぢや。

二宮　まづ

皆々　お入り遊ばしませ。

　　ト唄になり、大姫先に、少將へ思ひ入れ。少將こなしあつて入る。續いて舞鶴、龜菊、朝比奈、入る

　　二の宮殘り、跡見送り、懷中より切手を出し、兄弟へ遣りたいといふこなし。よき程に、通り神樂に

なり、向うより町人二人、團三郎の襟髪を取つて引摺り出てくる。團三郎、誂らへの形、風呂敷包みを抱へ、引摺られ出てくる。花道にて

團三 御免なされませ〳〵。間違ひでござります〳〵。

町甲 なんだ、間違ひだ。この野郎めは、いけツ太い奴でござるわえ。うぬが持つて駈け出した風呂敷包みを、出しやァがれ〳〵。

町乙 何食はぬ面つきで、この風呂敷の替へ玉を置いてうせたによつて、明けて見たれば、雑巾のやうな物を入れて置きやァがつた。

町甲 それ〳〵、なんでも此方の風呂敷包みにやァ、小袖が二つ入れてある筈だ。サア、出しやァがれ出しやァがれ。

トこづき廻す。

團三 サア、あげます〳〵。あまり急ぎましたゆゑ、つい取違へて持つて參りましてござります。サアサア、お返し申しあけます。大きに無調法を致しました。御免なされませ〳〵。

町乙 それ見やァがれ、おいらが追ツつかねえと、すつかりしてやられるところであつた。太い野郎めでござるわえ。

町甲　それ〳〵、盗人猛々しいと、晝中においらが包みを、替へ玉にせうとは、うぬは新米の晝稼ぎだな。

團三　どう致しまして。

町乙　それに又、なんで包みを持つて駈け出したのだ。

團三　サア。

兩人　エヽ、いけッ太い野郎だ。

ト　くらはす。

町甲　人を盲目にしたその代りは、斯うしてく〳〵。

ト兩人、團三郎を打つ事あつて

町乙　これで少つとは腹を癒ました。

町甲　ヤレ〳〵、好い心持ちだ。サア、行きませう〳〵。

町乙　成る程、太い奴でござつた。サア、ござれ〳〵。

ト捨ぜりふにて向うへ入る。團三郎こなしあつて

團三　いかに世につれる貧苦なればとて、空恐ろしいこの世渡り。どうぞして御兄弟を貢がんと……オ

オ、こりや云はいでも天道樣や、いづれも樣がよく御存じ。アヽ、思はず愚痴な心を出して、既に涙をこぼさうとした。ドリヤ、これから氣を持ちかへて、明神樣へお詣り申さうか。

ト舞臺へ來て、思はず二の宮と顔見合せ

ヤア、あなたは二の宮さまでござりますか。

二宮　團三郎か。

ト顔を見て涙ぐみ

ほんに思へば、曾我の代にてもあらうなら、今の憂目は見まいものと、思へばいとしや其方や鬼王、さぞ口惜しうもあらうけれど、じつと辛抱してゐやる、その心根が思ひやられて

團三　これはしたり、二の宮さま、そりやどうした事でござりまする。常からのお心にも似合ひませぬそのお詞。たとへ兄弟は、どのやうになりますまでも、逆樣な事を致しても、天道樣は正直でござりまする。おしつけ又、花の咲く事もござりませう。あまりきな〳〵思し召さぬが、ようござりまする。

二宮　ほんに、それいの。イヤ、再び花咲く事と云へば、コレ、早速其方にも、喜ばす事があるわいなう。

團三　それは耳寄りな事でござりまする。まづ何は差おき、その仔細、早うお聞かせ下さりまし。

二宮　云はいでかいの。年頃日頃鬼王や、其方が願うて居やる狩場の切手、二枚とも手に入りましたわいの。

ト出して見せる。團三郎恟りして

團三　エヽ、これはマア、夢ではござりませぬか。エヽ、有り難い〳〵。日頃から盡す心が、諸神諸佛感應あつて、今日といふ今日狩場の切手、二枚とも手に入るは、御兄弟樣の御運の強さ。祐經は縮まる命。お手柄なされました〳〵。片時も早う滿江さまや、御兄弟へお目にかけて、お喜びなさるお顏が見たうござりまする。ドレ、ちよつと私しが持つて參りませう。

ト取つて行かうとする。二の宮とめて

二宮　イヤ〳〵、切手は工藤家より、賴朝公に差上げる、初手に作りし二枚の切手。一旦武將へお目にかけぬ其うちは、妾が物にはならぬわいの。

團三　エヽ、そんならまだしつかりと、お手に入つたといふぢやござりませぬか。

二宮　サア、妾に如才があるものかいの。とつくりと折を見合せ、大姫君へ願うた上、また仕やうもやうがあるわいの。それについても、話さねばならぬ事は、最前爰へ、病み崩折れし旅僧、正しく

禪司坊に相違はない。どうぞ早う人目を除け、其方に逢はせて、委細の譯をも糺したさ。それにつけても、鬼王はどうしやつた。

團三　サア、兄鬼王は、鎧の申し譯立ち難く、曾我の屋敷に居る事叶はず、姉の月小夜どのゝ伯母たる小袋坂の隱れ家に居るとの事。箱王さまは、友切丸の紛失にて、その疑ひかゝるゆゑ、鎌倉中へは顏出しならぬ日影の御身、搗てゝ加へて、この上禪司坊さまのお身に凶事ある時は、猶さら濟まぬ曾我のお家。そのお話しの樣子では、禪司坊さまに相違ござりませぬ。これより直ぐにこのあたりを、お行くへ尋ねて

二宮　コレ、それとても表向き、打明け然うと名乘られぬ、その譯は。

　ト團三郎に囁く。悔りして

團三　ヤヽヽヽ、そんなら昨日、その金子を

二宮　コレ。

　ト思ひ入れ。團三郎、口へ手を當てる。二の宮、あたりへこなし。この途端よろしく、唄、通り神樂にて、ひやうし

幕

四建目

鬼王浪宅の場
片瀬川の場

役名――鬼王新左衛門。同弟、團三郎。鬼王女房、月小夜。曾我の母、滿江御前。馬士、劍ね民の彌藏。質屋番頭、善八。醫者、似た山通庵。庄屋、杢兵衛。尼、妙林。婆、おまご。久須美立番。奴、丹平。一刀五郎兵衛。眞刀作平。吉岡吉右衛門。無敵武右衛門。市傳市藏。神影新五兵衛。浪人、關の畑右衛門實は大友常陸之助賴國。

本舞臺、三間の間、二階附きの土藏造り、質屋の見世、戸を卸ろしたる體。下の方、木戸にて見切り爰に彌藏、齒磨賣りの形、頰かむり、股引、日和下駄にて立つてゐる。仕出し大勢、提灯を持ち、取卷きゐる。てんつゝにて幕明く。

大勢 イヨ〳〵、高麗屋々々々。

ト褒める。

彌藏 サア〳〵、御愛嬌には板三津に杜若。齒磨は僅か八文……サア、そこらにござりませんかな。

仕出 オイ〳〵、助高屋を一番聞きたい。

彌藏　助高屋は、誠に遣ひならひでござりまする。

　　ト歯磨を賣り、木戸の衆、聲色を遣ふ。皆々褒める。

仕出　次は大和屋杜若をお聞かせ申しませう。

　　ト向うにて

仕出　杜若、よからう〳〵。

月小　アイ〳〵、左樣ならば向うの町が、圓覺寺前でござりますか。忝うござりまする。

仕出　大和屋アノ〳〵。

　　ト通り神樂になり、向うより月小夜、風呂敷包みを抱へ、出で來り

月小　ほんに、宿替へしたら、常來る道さへ知れぬわいの……それはさうと、先度あの馬士の彌藏が、畑右衞門からの文ぢやというて、無理に懷へ押込んで行つたこの狀。

　　ト手紙を出し

月小　明けて見たれば、名越川へ金を埋めて置くといふ、梶原への密書。道ならぬ事ながら、鎧の手詰め。ヅッとする程怖い思ひで、拵らへた金。百兩あつても、もう二十兩足らぬばつかり、一日一日遲れる質請け。今日は是非々々請けねばならぬ手詰め。義理の惡い着物なれど、これなとやつ

て番頭どのを口說いて……それにしても、あの畑右衛門づらが、金の行場を氣取つて、尋ねて來ぬのも不思議。マア、何にせい、番頭どのが居てくれゝばよいが。

ト この時揚げ幕にて、「泥坊々々」と呼ぶ聲する。團三郎、一散に逃げてくる。舞臺の仕出し左右へ別れ、團三郎を追ひかけ入る。月小夜、舞臺へ來り

盜人さうぢや。油斷のならぬ。この包みでも取られぬうち

ト 潜りを少し明け

モシ〳〵、番頭さん、ちとお目にかゝりたうござりまする。

ト 合ひ方になり、内より善八、手代の形、網の手燭を持ち、出て來り

善八 誰れだ〳〵、いま藏へ行かうと思つてゐる所。どうで質屋へ來て呼び出す者に、ろくな奴はない

ト 月小夜を見て

オヽ、月小夜どのか。

月小 番頭さん。ちつとお前に折入つて

善八 今のは、こなさんの事ではないよ。

月小 イエモウ、仰しやる通り、呼び出すに、ろくな事はござりませぬ。その譯は、先頃、内からお賴

み申せし鎧の事。

善八　成る程、あの逆澤瀉は、元は百兩なれど、祐成どのに種なしを十五兩貸して、今ぢやァ利ぐるみ百二十兩無ければ出されぬと、先度、内から

月小　サア、お斷わりでござりまするが、今宵は是非々々、無ければならぬ品ゆゑ、さまぐに都合いたしましたれど、夫鬼王は久しう病氣。女子の手一つ、やうくとマア才覺いたして、無理に借りた品。どの道返さにやならぬ程に、これをマア、足しに取つて置いて

善八　鎧を返せと云はつしやるのか。

ト風呂敷包みをひろげ、見る事あつて

縞縮緬に結城、四品あれど、二十兩の抵當に、これがどうして。

月小　サア、それぢやによつて、親方さんに知れぬやうに、お前を頼み。ほんの抵當に取つて置いて

善八　ハテ、口說を聞くも、大概あるものだ。

月小　そんなら、どのやうにお頼み申しても

善八　あつたら口に風。わしも無駄な事に關はつては居られぬ。

ト内へ入らうとする。此うち團三郎出て

園三 番頭どの、待たつしやれ。

月小 ヤ、お前は園三さん。

園三 成る程、二十両へ、着物四つでは、得心でない筈。

ト懐より紙に包みし鼈甲の櫛笄を出し

これぢやァどうか、納まりさうなものだがの。

ト善八、よく〳〵見て

善八 こりやァきついものだ。捨賣りにしても三十両が代物。

園三 得心して下さるか。

善八 しないで、どうするものだ。質の出し入れをして下されば、質置き大明神様だ。

月小 モシ、園三さん、そのマァ大枚の頭の道具、お前は何處から

園三 サア、とんだ事サ。祐成さまのお供で、大磯へ行く度々、全盛の花魁と、姉御の前ぢやァ云ひ憎いが、つい色になつて、借りて來ました。

月小 そりやマァ幸ひ

園三 明いた口へ、入れ替への足し。

月小　又もや御意の變らぬうち、しまうて置いた百兩の金。

ト懐より百兩の金を出し、袱紗のまゝ渡す。善八、取つて改め

善八　成る程、元金百兩に、二十兩の上質は此方の代物。直ぐに鎧を

園三　そんならどうぞ、ちつとも早く

善八　いま出してくる程に、待つてお出でなさい。

園三　と、もう詞が直るやつサ。

善八　ハヽヽヽ。ちつとのうち、待つてござりませ。

ト合ひ方。善八、雜物を持ち、内へ入る。

月小　園三さん、マア、お前のお庇で

園三　今宵につゞまる逆澤瀉。

月小　埒の明いたも

園三　元金百兩。

月小　エヽ。

園三　ありやマア、どうして拵へさしつた。

月小　サア。

ト思ひ入れ。此うち彌藏、小提灯を持ち、窺ひゐて

彌藏　その出所は、慥かにこの中。

園三　なんと。

彌藏　渡した手紙を

ト月小夜へかゝるを、園三郎引廻す。ちよつと立廻り。月小夜、密書を落す。園三郎、取上げる。月小夜、提灯を吹き消す。園三郎、彌藏を捻ぢ伏せる。曲撥にて、道具廻る。

本舞臺、三間の間、世話場。上の方に板塀、梅の立ち樹。正面、のれん口。押入れ、佛壇、紙位牌、香華そなへ、行燈ともし、いつもの所に門口、上の方に鬼王新左衞門、病ひ鉢卷、搔卷を引ッかけ、左右に尻の妙林。お孫、婆ア。杢兵衞は家主。淨念は齋坊主にて、百萬遍を繰つてゐる。在郷唄にて道具とまる。

皆々　南無阿彌陀佛々々々〱々々。

トしまふ。

鬼王　ヤレ〱、どなたも御深切に、御苦勞でござりました。
杢兵　なんの〱、わしが店へ引ッ越されて、まだ間は無けれど、前方から存じてゐる鬼王どの。
妙林　それ〱、懇ろあひゆゑ、どういふ事で曾我の屋敷に居ぬ事と、笑止に思ふその上に、先度何やら新佛。
まご　今日はその佛の、立日ぢやといふゆゑに、年役に百萬遍に來ました。
淨念　時に鬼王さま、御病氣はどうでござりますな。
鬼王　矢張り同じで、はか〲しくゆかぬには困りまする。アヽコレ、折角お出でなされたに、女房めは用事あつて出ます。豆煎りでも拵らへやうにも
妙林　なにサ〱、斯うして來るも、平常洗濯や縫ひ物を、お内儀さんに賴む懇ろ……イヤ、賴むといへば、先度お賴み申した、縞縮緬二つの仕立て。
杢兵　成る程、わしも餘所行きの一張羅、五年振りで願ひ叶うて出來た結城の小袖。
まご　ほんに、わたしも賴んで置いた仕立て物、この中から催促するが
三人　まだ出來ませぬかな。
鬼王　成る程、その事も申し暮らして居ました。女房めも、拙者が病氣、何やかやで

妙林　いつ頃出來るか、歸りを待つて

まご　それ〳〵、聞いて行きませう。

鬼王　勝手に茶も仕掛けて置きました。淨念どの、どうぞ

淨念　イヤ、わしはまだ齋が、二軒ほどある。外してはなりませぬ。

ト珠數や鉦を箱へしまふ。

杢兵　そんなら、月小夜どの、歸らるゝまで、奥へ行つて

まご　それ〳〵、手煎じで飲みませう。

淨念　左樣なら鬼王さん、隨分

皆々　冷えぬやうにさつしやれや。

ト合ひ方。淨念は箱を抱へ向うへ入る。三人は奥へ入る。直ぐに通り神樂。向うより通庵、醫者の拵らへ、自身に藥箱を擔ぎ、出て來り、直ぐに舞臺へ來り

通庵　似た山通庵お見舞ひ。

鬼王　オヽ、お醫者樣、ござりましたか。

通庵　オヽ〳〵……コリヤ家來、草履に氣を附けろ……ハイ〳〵、畏まりました。

ト二人前を云つて、藥箱を内へ入れ

さて、妙に冷えるではござらぬか。それに愚老などは、病家は多し、こまり大根の切干しで、お茶漬さら〱、たべちよろの隙もねえて。

鬼王　ハヽヽ、さていつも氣さくなお醫者樣。

通庵　イヤ、醫者樣さやうでもござらぬ。イヤ、まづお脈を

ト脈を見て

さて、ようござるの。イヤモウ、達者な人の如し。

鬼王　イエ〱、一兩日、どうも鹽梅が

通庵　惡うても請合ひ〱、死ぬまでは、きつと請合ひまする。

鬼王　ハヽ、何を仰しやるやら。

通庵　時に藥を

鬼王　イエ〱、まだお藥は

通庵　ござるか。ござらば、愚老は直さま……イヤ、歸られぬわえ。

鬼王　何ぞお忘れ物でもござりまするか。

通庵　サア、面目次第もない儀を致した。一杯たべて、家來をどこへか落して參つた。

鬼王　でも只今、お供のやうな聲が

通庵　イヤ、ありや旦那と家來と二役早替りを、ちよつとお目にかけたのぢや。また藥箱を擔いで色の前でも、少とふさぐ。こりや斯う致さう。大方、僕が尋ねて參るその間、お邪魔ながら

鬼王　狹けれど、奥で、御家來の參るうち

通庵　そんならちよつと、かり山のずいき。

鬼王　それが洒落とやら申す儀かな。

通庵　爰が似た山通庵サ。

ト合ひ方。通庵、奥へ入る。鬼王、跡見送り

鬼王　病人の前で、ハテよく饒舌る醫者どの……それはさうと今日は、不慮にお果てなされた、禪司坊さまの立日。心ばかりの百萬遍。馴染もないに、よう來て下された。人に鬼は無いといふもの。それも人によるものか。いつぞや杜戸明神にて、佞人の爲に飲んだる神酒、脾の臟をからみ、陰氣に閉ぢられ、刃物を見れば眩暈の病。こりやコレ正しくくじかの膽に、鴆毒を交ぜ、用ゆる時は、この如く病ひ發すると、異病論にあるとの事。御兄弟の後見して、敵をお討たせ申さにやな

らぬこの身がこの病。搗てゝ加へて逆澤瀉ゆゑ、祐信さまの御難儀、それも今日につゞまるとい
ひ、一つとして鬼王が、心通りに物の行かぬは、よく〳〵武運に……アヽ、また胸動氣か……これ
につけても、まめ〳〵しげな女房、これが一つの扣へ綱。鎧の事も、どうぞ首尾よくしてくれれ
ばよいが……アヽ、まゝよ。ドレマア、藥でも溫めて服まうか。

ト七輪へ藥鍋をかけ、火をおこしてゐる。通り神樂になり、向うより團三郎、鎧櫃を脊負ひ、風呂敷
包みを抱へ、出て來り、直ぐに內へ入る。

團三　兄貴、そこにござりましたが。

鬼王　團三か……持つて歸つたそれは

團三　苦勞にしてござつた逆澤瀉。

鬼王　ヤ、すりや、女房に逢やつたか。

團三　サア、圓覺寺前の質屋の角へ、姉御が番頭を呼び出して、口說いてゐる所へ、丁度わしも行きか
かつて

鬼王　すりや、番頭どのも得心して

團三　サア、不得心であつたが、わしも少つと、外から借りた代物を突込んで、やう〳〵と口說きおほ

鬼王　質請けが出來たか。

團三　これ見さつしやりまし。

ト鎧櫃をそこへ出す、

鬼王　エヽ、忝ないく。

ト方々拜み

先頃女房が、御一家伊東さまから、お借り申したといつた百兩の、金があつても

團三　上端の二十兩に差つかへ、延べて置いた今宵の手詰め。

鬼王　丁度請け戻すといふは

團三　曾我のゝゝまんも直れば、こなさんの病氣も直るでごんせう。

鬼王　して、女房は。

團三　この事を、ちよつと御老母樣へお知らせ申さうと、行かつしやりました。

鬼王　オヽ、そりやよう氣が附いた。何は兎もあれ、久しぶりで鎧を

ト立上がつて鎧の側へ行かうとする。

團三　兄貴、その搔卷では居立ちも不自由。コレ〳〵、これを着さつしやりませ。

ト風呂敷包みより、紋附きの布子を出し、着せようとする。

鬼王　コレ團三、その着物は。

團三　サアこりやア、お前もわしも去年の形。一つ拵らへて、二人用ひにしようと思ひまして

鬼王　ムウ。質請けの足らぬ利足をやつたといひ、又その上にこの着物……譬への通り、貧すれば

團三　エ。

鬼王　どんな氣を出さぬやう、忠義が第一。

ト思ひ入れ。

團三　ドレ、肩でも撫りませうか。

ト唄になり、團三郎、鬼王の脊中を撫る。此うち向うより山形に木瓜の紋附きの提灯を持つたる中間。跡より古き乘り物をかつぎ、月小夜、これに附いて出て來り

月小　ハイ〳〵、左樣でござりませうが、ちよつとなりとお立寄り下さりますれば、鬼王も大抵や大方喜びまするでござりませう。無理にと申すも、押つけがましい事ながら………ハイ〳〵、有り難うござります。左樣なれば、お供の衆、向うの内ぢや程に、急いで下さんせ。

ト唄の切れに、皆々舞臺へ來る。月小夜内へ入り

鬼王　ヤ、そりやマア、夜中といひこちの人、御老母様がお出でなされたわいなう。

園三　御機嫌を損じた所へ

月小　サア、鎧の事をお知らせ申さうと、行きかゝる道でお屋敷の提灯、お供にきけば、御佛參のお歸りといふ事ゆゑ、立ちながらお話し申したところが、ことないお喜びなれど、祐信さまの手前、直ぐにお歸りと仰しやつたを、無理にお願ひ申して

鬼王　お連れ申したか。ソレ、弟。

園三　ハイ〳〵。

ト駕籠の側へ行き

お寒いに、よう入らつしやりました。

ト合ひ方。駕籠の戸を明ける。内より滿江出て

滿江　園三、鬼王は、少つとも心よいかいなう。

園三　ハイ、有り難うござります。マア〳〵、あれへ。

ト満江、内へ入り

満江　オヽ、鬼王、聞いたよりは

鬼王　少しはよろしい方。

ト満江、上へ通り

満江　まだ少と手間も取れやう程に、供の者は

團三　ハイ／＼、お返しましても、お歸りは辻駕籠でも雇つて、私しがお供いたしまして……コレ／＼

お供の衆、御苦勞。まだお隙が取れる。駕籠を持つて歸つて下さい。

供男　ハイ／＼、左様ならお提灯、お杖、お草履はこれへ置きます。

ト門口へ置いて

そんなら、モシどうぞ日雇賃を

團三　そりやァおれが明日持つて行かう。

供男　久しいものだ。

ト引ッ返し、駕籠と共に向うへ入る。

月小　まづ早速お喜ばせ申しませうは、最前ちよつと申し上げた通り

滿江　鎧が戻つたかいなう。

月小　サア、嘘ぢやと思し召さぬやう、コレ

ト鎧を正面よき所へ飾り見せる。

滿江　エヽ、忝ないく。祐成が放埒、無くした鎧、意見も云ふべき鬼王夫婦と、祐信どのゝ不興、屋敷にも居られず、假住所の町家ぐらしをさせるも、譬への通り、くぼい所へ溜まる水。わしは推了してゐれど、頼家公の鎧の着初めに、差上げねばならぬ品ゆゑ、義理ある夫は閉門、明日未明までに、右の鎧を差上げねば、祐信どのには切腹の覺悟。

鬼王　エヽ。

滿江　サア、その手詰めとなつた今宵、鎧の手に入るは、全く夫婦が忠義ゆゑ、こりや家來とは思ひませぬ、神佛とも拜んでゐるぞや。

ト手を突き、喜ぶ。

月小　アヽモシ、勿體ない。お主の爲なら、どのやうな苦勞も仕內。

鬼王　と申す内にも、折わるい拙者が病氣。これも女房と弟めが

滿江　團三郎、月小夜。アヽ、儘にならば、千石も萬石も

團三　イエモウ、そのお詞が御加増同然。たゞ御褒美には、どうぞ兄貴の

滿江　不興も赦さいで何とせう。そりや又、祐信どのへ云うて

月小　早うお屋敷へ歸りたうござります。右も左も他人の借家。

團三　馴染んだ部屋の日向に居て、草履草鞋を作つて居るが、矢ッ張り樂でござります。

滿江　オゝ〳〵、それも今の內。もう、わしは歸りませう。

鬼王　イヤ〳〵、夜中と申し、鎧の儀も、未明までとの事なれば、それまでに弟めを。あなたは寒けれど御一宿。

滿江　成る程、斯ういふ嬉しい事を聞くにつけ、思ひ出すは禪司坊が事。今日は立日ゆゑ、佛參の道々も、マア何者が手にかけたと、そればつかりを

トほろりと思ひ入れ。

團三　サア、しかも丁度跡月の今日、名越の辻堂でお目にかゝり、お下りなされしその折にも、曾我の貧苦をとりませて、話す間も障りあつて、後にと別れ程過ぎて、參つて見れば藪陰に、誰が殺したか證據もなく、血汐に染みて敢へない御最期。

鬼王　南無阿彌陀佛々々々々々々。

滿江　アヽ、生者必滅。先立つこの身は跡に殘り
月小　逆さま事も浮世の常と
團三　諦められぬ兄貴の病氣。
鬼王　アヽ、また寒氣が……暫しのうち
月小　心を休めて……御老母樣にも
滿江　そんなら奧へ
月小　お前は寢所へ
滿江　今宵は通夜して、禪司坊が
鬼王　夜とともに、御回向遊ばしませ。

ト唄になり、滿江思ひ入れあつて奧へ入る。鬼王は寢所へ行く。月小夜介抱して、二枚屏風を立て廻す。團三郎あたりを見廻し

團三　姉御、鎧の方がさつぱり附いて、いつにない質屋でも大喜び。それについても、とつくりと見て置けと、寄越した流れの書附け。

ト以前の密書を抛る。月小夜取上げ

月小　ヤア、こりやコレ畑右衛門が
團三　金を埋んで置いた密書。
月小　そんなら、それを
團三　最前拾つて、金の出所
月小　コレ。
團三　わしは見ても内輪の事、必ず人に
月小　見せられぬ質の書附け。
團三　持つて居たら、その身の破れに
月小　エ。
團三　ドリヤ、御老母樣の、お伽をしようか。
ト唄になり、團三郎思ひ入れあつて奥へ入る。
月小　この密書も、疾に破つて捨てようと思うたなれど、もしも鬼王どのが金の出所、しひて詮議をさつしやれたら、その時の云ひ譯と、持つては居れど、負うた子に淺瀬とやら、團三さんの詞に任せ

ト破らうとする。屏風の中にて手を叩くゆゑ、其まゝ懐へ入れ

アイ〳〵。ドレ、また撫つてあげませうか。

ト合ひ方になり、月小夜、屏風の内へ入る。通り神樂になり、向うより畑右衛門に、彌藏附いて來り、

花道にて

畑右 彌藏、ちつと見ないうちに、大分工面を直して、雲助の足を洗つたな。

彌藏 サア、問屋場の慰みに利運して、この頃は聲色を遣つて棒廻り。時にお前は、久しく何處へ行つて居さつしやりました。

畑右 サア、聞いてくりやれ。先度、名越で別れてから、三島のふんばりを連れして、山越えの詮議が強く、面出しがならないから、上總房州へ高ふけり。鳴りが鎭まつたといふ事ゆゑ、歸つて來たがコレ、あの時名越川の泥の中へ、隱して置いた金が無いワ。

彌藏 サア、その事を聞いて、梶原どのへ持つて行く手紙を、わしが無筆で間違へて、月小夜にやつたゆゑ、慥かに、モシ

ト囁く。

畑右 すりや、あの百兩の金で鎧を

彌藏　先刻しつかり聞きました。
畑右　ムウ……マア、どの道てまへ、手紙を返す事から附け込んで
彌藏　金の行端も嗅ぎ出しませう。
畑右　して、あの女は。
彌藏　曾我は不首尾で、向うの借家に
畑右　ヤンヤと一番云はせろよ。
彌藏　その返答は行きくれて
畑右　おきやアがれ。
ト矢張り通り神樂にて、兩人舞臺へ來り、彌藏、内へ入り
彌藏　月小夜さん〳〵。
月小　アイ〳〵、どなたぢやえ。
ト屛風より出て
ヤヽ、こなさんは、馬士の
彌藏　彌藏。形が變つても、見忘れはしまいね。

月小　なにを。耄碌した者か何そのやうに。
彌藏　イヤサ、間違つて文を渡した事をよ。
月小　エ。
彌藏　忘れまいとはその事。月小夜さん、なんと返しては下さるまいか。
月小　サア、……イエ〳〵、お前から文を取つた覺えは
彌藏　無いとは情ない。あの狀で、とんだ難儀をして居るわし。
月小　エヽ、知らぬわいなア。
　　ト下の方へ來る。此うち畑右衛門、内へ入り、莨を一口吸ふ。
ヤヽ、お前は。
　　ト恟り。
畑右　畑右衞門を見忘れずば、狀を取つた事も、忘れさうもないものだが。
月小　サアそれは。
畑右　あの狀については、いはれ因緣故事來歷のある事。女童によい事され、默つて居さうなおれだと思ふか。

月小　サア。

畑右　状が出されずば、おぬしが埋んだあの金は……イヤサ、かねて企んだ事でもあるまい。つい出來心で、その状を私しが取りましたと、あやまつて返しやれな。

月小　サアそれは。

畑右　サア〳〵、四の五のなしに、彌藏に渡した。

ト此うち、上の屏風越しに鬼王覗いてゐて

鬼王　ソレ、その手紙、女房、返しやれ。

ト文を抛つてやる。

畑右　「月小夜どのへ、畑右衛門。」

ト悔り。

ヤ、これは。

ト取らうとする。奥より團三郎とんで出て、文を取上げ

團三　不義者め、一寸も動くな。

畑右　なんと。

團三「月小夜どのへ、畑右衛門」と、生したゝるいこの附け文。現在の主ある女へ大膽な。不義者と云つたが誤まりか。

畑右 イヤ、全く以て。

トつかへる。

月小 覺えないとは云はせません。東福寺へお使ひの、その度々に附きまとひ、さまぐ\に云うた事、今さら嘘と云はしやんすか。

畑右 サ、それは。

團三 彌藏が渡した狀の催促。兄貴の病氣、事は好まぬ、返す程に、これを取つて立歸ればその通り。長居いたさば不義の成敗、代官所の裁きを受けたら、首は胴に附いては居まいが。

畑右 サ、それは。

團三 歸るが其方の爲であらう。

畑右 イヽヤ、歸るまい。胴に附かない首ならば、おればかりでない、月小夜も、鎧を請けた金の出所

マアこの鎧を

ト鎧へかゝらうとする所へ、滿江出て

滿江　こりや、鎧を何とする。

ト突き返す。立廻り。畑右衞門、懐より禪司坊より奪ひし藤蔓錦の守り袋を落す。滿江取つて

こりやコレ覺えの、藤蔓錦の守り袋。

畑右　ヤヽそれを、

ト取りにかゝる。

滿江　待ちや。

ト手早く中を改め

コレ〳〵、中の守りも覺えがある……河津の家は大織冠の末、藤原氏ゆゑ兄弟の子供、殘らず藤蔓の守りへ、多武の峰のお守り、姓名記して持たすが古例。

ト守りを返して

コレ〳〵、京の次郎と、河津どのゝ手跡で記しあるは。

ト畑右衞門思ひ入れあつて

畑右　ムウ。すりや、おれが親は、音に聞えだ河津どのか。

滿江　そんなら、いよ〳〵この守りは

畑右　幼少からの懸け守り。幼ない時に、母に別れて親の名も
滿江　知るまいが。母は舞子の風折とは云はざるか。
畑右　成る程、母はその風折。
滿江　すりや、實ひもない兄弟が兄。
畑右　京で生れた京の次郎。
滿江　腹こそ貸さね、義理ある惣領。
畑右　義理ある母人。
滿江　ても、思ひがけない
畑右　名乘り會ひで
兩人　あつたなア。

ト兩人思ひ入れ。

月小　すりや、いよ〳〵、噂にのみ聞いて居た
團三　京の次郎さまであつたか。
彌藏　ハテ、人の素性は、知れぬものだなア。

畑右　月小夜、團三、わいらが爲にもこれからは主筋、忠義を盡して奉公しろ。
　　ト上へ通り、胡座をかく。月小夜、團三郎、思ひ入れ。
　コレ、彌藏、おぬしは少つと。
　　ト囁く。

彌藏　そんなら一走り行つて來ませう。
　　ト奥にて

三人　サア〳〵、行きませう。
　　ト合ひ方。彌藏は向うへ入る。奥より妙林、おまご、李兵衞出て來り

李兵　オヽ、月小夜どの、戻られたか。
妙林　早速ながら、わしらが誂へた仕立て物、
まご　まだ出來ませぬか。
月小　サア、いろ〳〵な取込みで、お氣の毒ながら、まだ皆縫ひかけで
李兵　長いも大概。出來ずば外を頼みませう。
妙林　それ〳〵、返して下さんせ。

月小　サア。

李兵　代物を其まゝで、返せといふに、サアとはどうだえ。

妙林　それ〳〵。但しはわしらが誂らへ物、鼠でも引いて、内には無いのか。

月小　サア。

まご　寄越した仕立て物が、無くつちやァ濟まねえよ。

月小　サア。

三人　サア〳〵、早く返してくんなさいよ。

ト月小夜思ひ入れ。バタ〳〵にて、向うより玄蕃、ぶッ裂き羽織、黒股引、大小。捕り手三人を連れ、出て來り

玄蕃　ソレ、踏んごめ

捕手　ハツ。

トばら〳〵と入り

動くな。

ト月小夜、團三郎を取卷く。

月小　こりや何ゆゑに

園三　動くな遣らぬと御意なさるな。

玄蕃　何ゆゑとは、覺えがあらう。身は工藤の家來、久須美玄蕃と申す者。先立つて主人祐經、越後の國久上寺、造營の寄附金五百兩、差上ぼせたるところ、そのうち百兩を、彼の寺の納所禪司坊、盜み取つて逐電。彼れめは曾我のゆかり。この鎌倉へ下るは必定と、密々詮議いたすところ、禪司坊めは、いつぞや名越の辻堂に於て橫死なし、金子とても持ち居らぬとの訴へ。さるによつて右の金子、持ち主が人殺し盜賊と、內々町々へ觸れ狀を以て詮議いたせしに、只今圓覺寺前の質屋にて、見當りたるこの金子。

ト懷より袱紗包みの以前の金を出し

これこの如く、一兩々々木瓜の、極印打つたる右の寄附金。仔細を聞けば、鬼王が手より鎧質請けの、金子なりとの申し條。

月小　エヽ。

玄蕃　さてこそ直さま詮議に參つた。禪司坊を殺した上、金を取つたと白狀いたせ。

月小　サ、その儀は。

ト屏風の内より鬼王、よろぼひながら、ツカ〳〵と出て

鬼王　お役人様、暫らく……コレ、月小夜、最前から、いろ〳〵の樣子は聞けど、病に閉ぢられ、打臥して寢てゐたが、起きねばならぬ今の仕儀。身共は知らぬ質請けの、金の出所、どういふ譯ぢや。

月小　サア、あの金の出所はナ。

ト畑右衞門の顏を見る。

畑右　何もほざくな。わいらが爲には主人だぞ。

月小　エヽ。

畑右　サア、主……ナ、主がないその金を、われが取つたであらうがな。

月小　ぢやというて

畑右　取らぬものが貧乏な、鬼王のこの内に、なぜ又鎧が請けてある。

月小　サ、それは。

畑右　忠義を思へば、金の出所。

ト月小夜へ思ひ入れあつて

玄蕃　イヤサ、血迷うた事ぬかさずと、禪司坊も、われが殺したと白狀いたすか。

月小　サ、それは。

玄蕃　サア〳〵、なんと。

畑右　月小夜、キリ〳〵吐かしてしまへ、

　　トばた〳〵にて向うより善八、以前の着物を持ち出て來り、直ぐに内へ入り

善八　ヤア、お役人樣、もうお出でなされましたか……コレ、月小夜どの、團三どの、こなた衆は〳〵ようマアあんな金を突きつけたな。直ぐに彼方へ取上げ姿。まだ〳〵、二十兩の抵當に寄越した櫛笄は、聞けば昨日藥師樣で、内の神さんが拔かれたといふ櫛笄。

團三　エヽ。

善八　こなた衆は盜みをするか。巾着切りを働くか。

團三　サ、それは。

善八　そんな怖い事をするこなさん達。この着物も氣味が惡さに返しに來た。サア、鎧を此方へ返さつしやい。

ト着物をそこへ投げ出す。

妙林　ヤア、こりや、わしが拵らへに寄越した着物。

まご　ほんに、これもわしがの。

李兵　これも、おれがの。

ト各自引ッ抱へ、月小夜の胸倉を取り

コレ、月小夜どの、こなたは〳〵、よくおいらが拵らへに寄越した小袖を質にやつたの。

妙林　道理こそ、まだ出來ぬ〳〵と、質にやつてよけりやわしが置く。エヽ、厚かましい。

ト振り廻す。

まご　それ〳〵、まだ手も通さぬ切立て。よく質屋臭くさつしやつたの。

ト突きのめす。

月小　アヽ、モシ、段々御尤もではござりますれど、云ふに云はれぬ

鬼王　手詰めゆゑ、ハイ、出來心で。

ト詫びる。

李兵　なにを。病人の癖に、しやくり出すと、退いて居た。

ト突き倒す。善八、團三郎に詰めより

善八　コレ、團三どの、兄嫁と云ひ合せ、よくこんな太い事をするが、これがよいか。

ト くらはす。團三郎思ひ入れ。

なにを〳〵。盗人根性ひろいだ罪で、この鎧はおれが

鬼王　サアモシ、弟めが事は料簡あつて

ト絓る。

善八　なにを。體もろくでない態で、退きやアがれ。

ト蹴とばし

いつその事、存分にするか。

三人　わし等も腹癒せ。

ト三人は月小夜へ、善八は團三郎へ立ちかゝるを

畑右　イヤ、待て。月小夜は人殺し。些細なわいらが云ひ分より

立番　尋常に、それと名乘れサ。

月小　サア。

ト思ひ入れ。鬼王、側へ寄り

鬼王　コレ女房、これには何ぞ譯があらう。たとへ切ない筋道の、金であらうが出所を、この場で云はねば。

畑右　なにを、退いて居らう。

ト突きのける。

鬼王　イヤ〳〵、これはつかりは云はさにや、夫婦の身の明りが

ト引のけ、月小夜へ寄らうとするを

畑右　たつて退かねは、刀の背打ち。

トひらりと抜いて振りあげる。鬼王、白刃に恐れ、懐へ、倒れる。

ヤ、鬼王が、この態は。

ト團三郎、月小夜、ツカ〳〵と寄つて介抱しながら

團三　コレ兄貴。

月小　こちの人。

團三　搗てゝ加へてこの程より、白刃を見ればこの如く

月小　心臆するこの病。側で見て居るわたしが心、どのやうであらうぞいなう。

畑右　ム、、ハ、、、、。武士のあるまい刃物に恐れし、大腰抜けの新左衛門。月小夜とても主殺し……ナ、この事が知れゝば、河津の惣領……イヤサ、末子の禪司坊は、われが殺したと白状しろ。主が大事か、身が大事か。

月小　サア。

玄蕃　月小夜、われが仕業であらう。

月小　云ふも憂し、云はぬも辛き金の出所。この身を立つれば現在の

ト畑右衛門へキッと思ひ入れあつて

忠義には身も捨てよとは

團三　いつの世からの掟にて

月小　かゝる辛苦をさせるぞいなう。

ト思ひ入れ。滿江、いろ／＼こなしあつて、玄蕃が持つたる金の袱紗を取つて

滿江　最前より、よもやと疑ふ心もあつたが、コレ／＼、金を包みしこの袱紗は、こりや覺えある禪司坊が袈裟の裂れ。

ト つか〳〵と行き、月小夜を引附け

コレ、月小夜の横道者。忠義々々と名立てがましう、主を殺して金取つても、それが忠義か……コリヤイ、禪司坊は血のあまり、一子出家の功德には、九族天に生ずと聞く。河津どの始め、兄弟、妾たとへ佛果に至らずとも、せめて一人は殘し置き、後世の道をも弔らはせんと、思ひし事も情ない。コレ、禪司坊を償うて返せ。生けて返しをれやい。

ト振り廻して泣く。

月小　アヽモシ、御老母樣、これには段々。

畑右　やかましい。わいらが爲には主人だぞ。

月小　チエヽ。

ト思ひ入れ。

玄蕃　大方極まる月小夜が大罪。繩かける。腕廻せ。

滿江　アヽモシ、玄蕃どのとやら、云はゞ切つても飽きたらぬ彼れが罪。

畑右　イカサマ、身共が爲にも弟の敵、家來の仕置は主の役。

玄蕃　成る程、河津どのゝ惣領とあれば、主人の御一家。身共はこの百金さへ持ち歸れば、役目は相立

つ。

善八　そりや私しも同じ事。この鎧さへ元へ戻れば、親方の前も濟むといふもの。

杢兵　わし等も着物さへ受取れば

まご　云ひ分はござんせぬ。

畑右　イヤ、云ひ分はその鎧。緣者の難儀、見ても居られぬ。後方までに、金拵らへて●

滿江　其方が難儀を救うてたもるか。

月小　それではどうも

團三　我れ〳〵が。

善八　ハテ、どちらなりとも金の出來方●

團三　それまで待つて下さるか。

畑右　弟を殺した科の落着。

滿江　この場で糺す筈なれど

畑右　暫時容赦も魚心

滿江　あれども水に月小夜が

團三　身に迫つたるこの場の仕儀。
月小　一寸延びれば
團三　心もひろう
玄蕃　身共は此まゝ
畑右　團三、月小夜。
月小　思へばむごい
　　ト思ひ入れ。
畑右　人辛ければ、我れも辛しだ。
　　ト思ひ入れ。唄になり、畑右衛門先に善八、鎧を持つて奥へ入る。玄蕃、捕り手、杢兵衛、妙林、おまごすけ向うへ入る。滿江、身拵らへして、門口へ出ようとする。鬼王は最前より蟄して居たりしが、この時あわてゝ袖を押へ
鬼王　アヽモシ、御老母樣、御立腹のあまり、夜中のおいとひもなくお歸り遊ばすは、御尤もではござりまするが、何か樣子がありさうな儀。とくと糺したその上にて
滿江　イヽヤ聞かぬ。そこ退きや。

ト振り切り行く。

月小　サア、そのお腹立ちは、御尤もでござりまする。これには云ふに云はれぬ。

滿江　主殺しに詞は無い。

團三　サア、その譯も我れ〳〵は、どうも口外いたされませぬ。外より知れる時節まで

滿江　イヽヤ、盜人の家來は持たぬ。

トまた行くを

鬼王　サア、左樣でもござりませうが、この鬼王は譜代の御家來、これまで不忠を働らかぬ、御奉公に免じられ、しばし明りの立ちますまで。左樣なくば、どうも拙者が

滿江　武士は疾から廢つてある。

鬼王　エヽ。

滿江　また廢るまいものか。兄弟が後見して、敵を討たせにやならぬ其方が、その通りの臆病やみ。

ト鬼王ギックリする。

それでも武士か、侍ひか、夫は臆病、弟は盜人、女房は主殺し、武運拙ない兄弟が、思へば望みも叶はぬ筈。三人ともに勘當ぢやぞ。

三人　エヽ。

滿江　こんな事とは露知らず、義理ある夫が難儀となつた、逆澤瀉のあの鎧、その質請けに最前も、主がまッ斯う手を突いて、禮を云うたが口惜しい。その鎧さへ手に入らず、今宵明けなば、祐信どのも。

月小　御身にかゝはる鎧ゆゑ

滿江　禪司坊を殺したか。

月小　サ、それにも深い

滿江　譯があらうが……コリヤヤイ、鬼王は河津どのゝ家の子、指折れば十八年あと、柏ケ峠で遠矢にかゝつて、敢へない御最期。兄弟は五つと三つ。お腹に四月の禪司坊。子供等を守り立てゝ、おのれやれ敵を討たんと、心は逸れど女子の悲しさ。後家を通せば養育出來ず、二道かくれば貞女に缺くる、とつおいつの思案半、頼もしい祐信どの、斯う〳〵せい、守り立てようと、表に操は破つても、心に捨てぬ合莚に、寐た事はないわいなう。その深切な今の夫の、難儀となつたゑあの鎧、其方達は義理ある主、妾は何と身贔屓の、道理が附けられやうぞ。どこまでも勘當ぢや。

月小　サア、仰しやらずとも、そりや

團三　辨まへては居りますれど

滿江　イヤ、勘當が赦されたくば、未明までに鎧を持つて、詫びに來たなら、そりやその時。

團三　すりや、夜明けまでに

鬼王　あの鎧を

滿江　アヽ、それも京の次郎が、持つてくるであらうぞいの。

　ト劍もほろゝに門口へ出かける。

鬼王　ソレ、女房。お供。

月小　ハイ、お杖、お草履。

　ト取つてやるを。沒義道に引ツたくり

滿江　イヤ、赤の他人、構うて下さるな……年は寄つても兄弟が母、刃物を恐れる、まだ腰抜けにはならぬわいの。

　トつか〳〵と花道まで行き

とは云ふものゝ、屋敷へ歸つたところが、鎧が無ければ祐信どのゝ……まだその上に、友切丸の疑ひといひ、憎いながらも鬼王夫婦、あゝ云うても夜明けまでには、好い吉左右でも知らせてくれ

るか。それがなければ、どうで……ア、、命長きは、恥多しぢやなア。

ト思ひ入れ。唄になり、此うち舞臺の鬼王、團三郎へ思ひ入れ。團三郎呑み込んで、以前の提灯をともして、紙撚にて紋の所を結へ、高土間の歩みより廻り、滿江が先に立つて行く。滿江思ひ入れ。これに附いて、兩人向うへ入る。あと合ひ方。

月小 こちの人、禪司坊さまお果てなされ、金の出所、お前までも、もしやわたしが仕業かと、疑ひもござんせうが、さらく〳〵さうした事ではない、云ひ譯はこの狀。

ト以前の密書を出す。鬼王手早く取つて

鬼王 すりや、百兩はこの狀で。

月小 日頃わたしに道ならぬ艶書、封も切らずに返せしが、この時來たは外の名宛、密書とあるに合點がゆかず

鬼王 名越川の土中へ、金を隱すとある文體。

月小 讀むと其まゝ、鎧の金も

鬼王 すりや、先月の今日、名越川の

月小 非道と知つて樋の口から

鬼王 掘り出して來た百兩か。
月小 黑白は知れぬ闇なれど
鬼王 外にも二人、見咎められ
月小 危ふさ怖さ、その時の
鬼王 一人は矢ッ張り身共ぢやワ。
月小 エヽ、そんならお前も
鬼王 狩場の繪圖を手に入れんと、窺ひよつて詮ない墨附。その時發せしこの病。
月小 わたしもお前の病氣といひ、質請けの金不足ゆゑ、見合す内に今日の手詰め。
鬼王 すりや、禪司坊さまを殺して、金を取つたは奥に居る
月小 あの畑右衞門が、思ひがけない次郎さまと、御老母樣との名乘り合ひ。
鬼王 主の一字にそれぞとも
月小 明かして云はれぬわたしが切なさ。
鬼王 搗てゝ加へて樣々の
月小 重なる難儀はいとはねど

鬼王　折わるい身共が病症。

　　ト口惜しき思ひ入れ。

月小　尤もでござんす、道理でござんす。悔んだとて、力づくにも金づくにも、及ばぬは病ばかり、まだしもお主の御機嫌を、少しも直すはあの鎧。

鬼王　次郎さまが金拵らへ、あの方から出されては、どうも身共が、

　　ト思ひ入れ。合ひ方になり。月小夜思ひ入れあつて、鬼王の脇差を持ち、奥へ行かうとするを、あわて丶止めて

コレ女房、血相かへて、どこへ行く。

月小　サア、手詰めの鎧、譯云うて、たつて諾かねばあの善八、殺してなりと

鬼王　ハテ、馬鹿な。人を殺めてその事が、世間へ流布せば、矢張りお主の

月小　と云うてマア、どうしたら。

鬼王　廢りかゝつた武士は身共。その武士道を

月小　立てる仕様も無い事か。

鬼王　身貧な上にこの病。

月小　それさへ無くば又外に
鬼王　仕やうもやうもあらうのに
月小　たとへに四百四病より
鬼王　貧は辛いと云ふもの
月小　貧と病と一時に
鬼王　搦められたる
月小　夫婦が身の上。
鬼王　女房。
月小　こちの人。
鬼王　口惜しいわえ〳〵。
月小　尤もぢや、道理ぢや。
鬼王　死んで苦患が遁れたいわえ。

ト手を取交して大泣きに泣く。奥にて

善八　月小夜どの〳〵、鎧の返事は、どうするのぢや〳〵

月小　アレ、もう質屋めは

鬼王　あせつたとて急いたとて

月小　ハテ、まだ夜明けまでには余程の間。それまでには

鬼王　思案が附かねば

月小　エ。

鬼王　二杯煎じを溫ためてくりやれ。

ト唄になり、力なき鬼王を介抱しながら、思ひ入れあつて兩人奥へ入る。時の鐘にて、向うより彌藏玄蕃、ヒソ〳〵出て來り、彌藏、内へ礫を打つ。合ひ方になり善八、鎧を抱へて出で來り

ト門口を明け

善八　今のは礫。彌藏か。

彌藏　善八どの、先刻畑右衛門さんが、おれを小手招ぎして、どうで極印のある金、取返したところが遣はれず、禪司坊を殺したも無駄骨。その事をこなさんに、相談しろと囁いたゆゑ

善八　サア、おぬしがその事を知らせると、幸ひ玄蕃さまもござつたゆゑ、踏ん込んで

玄蕃　かねて畑右衛門に頼み置いたる毒藥の儀で、外の金を持參いたし、又ぞろ參つた。

彌藏　畑右衛門さんは奥にかえ。

善八　サア、その毒藥の事であらう、いま通庵と取合つてゐられた。

ト奥バタ〳〵にて畑右衛門、通庵の襟髪を取つて出てくる。

通庵　これサ、それはあんまりむごじるし。少つとゆるめてくれの鐘。

畑右　何を、大べら坊め、先度から頼んで置いた毒藥、望みの藥代取りながら、今となつて心變りか。

通庵　アヽコレ、待つたり、不佞、心變りなぞと、明け放しの路地、ぢやうなしといふ點はござらぬがちと北國に當てが出來て、それゆゑ延引は、愚老が一生のあやま針、眞平〳〵。

畑右　フム、すりや、たつた今この所で、毒藥を盛るか。

通庵　盛らいでどうせう。南瓜の胡麻汁。

善八　エヽ、駄洒落を云はずと、早くさつしやい。

ト合ひ方になり、通庵、藥箱を持ち來り、調合にかゝる。

畑右　大べら坊でも一つの取得、醫者にかけてはまた別方。して、盛る毒藥は

通庵　信州に砒石あり、これを燒いて砒霜石といふ。

畑右　フム。

通庵　幽谷に丁長といふ蟲あり、これを俗に斑猫といふ……これに草烏頭を加味して用ゐる時は、南蠻祕法の大毒藥。

畑右　人の命を忽ち斷つか。

通庵　これが、ほんの、氣の毒藥せんばんサ。

ト二服調合して出す。

畑右　慥かに受取つた。

通庵　と云ふと殺される幕でござえせう。爰らは早く、にけたの内に橘の、お祖師樣の紋どころ。

ト逃げ出す。

畑右　イヤ、逃げるには及ばぬ。ツレ、褒美の金。

ト金を投げてやる。

通庵　イヤ、これは有り難い。

ト取るを、善八支へて

善八　オツト、幸ひなこの金。この間から催促しても、埒の明かぬ養子ツ子の勘定。

ト取上げる。

通庵　これサ、おらア今毒を盛つて、殺されたと諦らめて、そりやアおれに下さいな。

ト爭ふ。

彌藏　これサ〳〵、それぢやア果しがない。狐釣りで……ナ、ソレ、この細引を繩にして、通庵が取つたら流してしまひなさいな。

ト善八に呑みこませる。

善八　そんならさうしようかい。

彌藏　マア〳〵、金を寄越しなさい。

ト無理に取つてそこへ置き、細引で罠を拵らへ、狐釣りの合ひ方になり、ト通庵を、善八彌藏兩人にて絞め殺す。

兩人　ヤ、こりやア

ト思ひ入れ。

畑右　大事ない。……併し、此奴に毒味をさせようと思つたに、早まつて

玄蕃　イカサマ、併し、いま調合の品々、毒に間違ひもござるまい。約束通り成氏どのより、金子百二

十兩。

ト畑右衞門が受取つて

畑右　祐經に服ませる毒藥、他聞に洩れん事を憚かり、身共へ賴み。念に念を入れ、とくと心を見た上跡から

玄蕃　イヤ、それでは金子の

畑右　そりや受取を遣はさう。かねて曾我一家を憎しと思ふ成氏どの、禪司坊も身が手にかけ、死んだ京の次郎が證據の守りで、まんまと兄弟が兄と計り負ふせし事まで、安堵なすため、この受取に書き込んで

トそこにある硯箱にて、受取を認めやる。玄蕃見て

玄蕃　この上書に、大友常陸之助とあるからは、さては、こなたは

畑右　これサ、その名を人に知らすまいぞ。

善八　ハテ、拔け目なき金の出所。して、この鎧は

畑右　身共が方へ。

ト金を渡して鎧を取る。

彌藏 すりや、請け戻して、アノ曾我へ

畑右 なにを馬鹿な。こりや月小夜を口說く品玉。

善八 して、醫者の死骸は

彌藏 幸ひの鎧櫃。

ト死骸を鎧櫃へ入れ

御苦勞ながら、善八どの。

善八 歸りがけに、捨てゝやらう。

畑右 彌藏、われには、まだ用が

彌藏 ごんすなら、殘つて居ませう。

玄蕃 然らば御浪人

畑右 成氏どのへよろしう。

ト奥にて

鬼王 月小夜やく。

ト畑右衞門行燈を吹き消し、唄になり、畑右衞門と彌藏は奥へ入る。玄蕃先に、善八は鎧櫃を脊負ひ

　　向うへかゝる。この時團三郎、以前の提灯を下げ、出て來り、花道にて行きあひ

團三　ヤア、鎧を持つて立歸るは

善八　イヤサ、これは

團三　聞き譯なければ絶體絶命。

　　ト橫へかゝる。

玄蕃　中を見られて堪るものか

　　ト支へるうち、善八は振り切つて向うへ入る。玄蕃、立廻りに今の受取を落す。團三郎取つて

團三　何か怪しい

　　ト玄蕃、手早く取つて、ちよつと當て、提灯を持ち、一散に逃げて入る。

　南無三、鎧といひ、今の書き物。それ

　　ト時の鐘にて、跡を追うて向うへ入る。合ひ方になり、鬼王、探り〳〵出て來り

鬼王　オヽ、こりや行燈の灯が消えたさうな。

　　ト火打ち箱を探り、附木を出して土火鉢の火を移し、行燈へ灯し

　いま打つたるはありや夜中。夜明けまでも、もう一時。金の出來る當てもなし、駈け廻つて才覺

の、元より體はこの通り。安閑と夜を明かし、未明とならば

　ト思ひ入れあり、また灯消えかゝるゆゑ

オヽ、こりや油が無いさうな。

　ト油をつぎ

アヽ、人の身の上も、丁度この行燈の灯。燈心といふ體があつても、油といふ精力なければ、用には立たぬ暗闇。鬼王が身もこの通り、五體があつても有りがひなし、油といふ精力なければ、女房が無實の明りも立たず、心も細き燈心の、おのれと消ゆる御主人の、この曉を待たんより、祐信さまに先立つて、所詮廢つた鬼王が、武士も命も捨てるなら、少しは不便と未來にて、御勘當の詫びの綱。生きて居たとて詮ない體。たとへこの身は臆病の、病に體は閉ぢられても、死ぬるといふには未練も出まい。オヽ、さうぢや。

　ト誂らへの合ひ方になり、鬼王、思ひ入れあつて、脇差を取つて來て、腹を切らうとする。拔きかけると慄へ出し、納めては又拔きかける事、二三度あつて

エヽ、これ程覺悟を極めても、死ぬるにも死なれぬこの身の業。戰場の討死に、命を芥にたとへたる、武士に病も多からうに、臆病やみとは情ない……なんたる因果に此やうな、恥かしい病は

鬼王が、これまで念じ奉る、神や佛もましまさぬか。エヽ……我が身で我が身に愛想が盡きた。恨めしい體ぢやなア。

ト身内を掻きむしり、氣を揉みあせり、また脇差を取り直す所へ、月小夜、ツカ〳〵と出て

月小 申し、こちの人、こりや何さんす。

トとめる。ちよつと立廻り

鬼王 女房、どうぞ殺してくれい。死にたい〳〵。死にたいわえ。

月小 コレ、こちの人、死ぬには及ばぬ。鎧が手に入るわいなう。

鬼王 なんと。

月小 サア、いま奥で京の次郎さまが、金拵らへて鎧を請け、こちら夫婦に遣らうとの事。

鬼王 ヤヽ、そりや誠か、眞實か。

ト後へ畑右衛門、鎧を持ち、出て居て

畑右 オヽ、京の次郎も武士の端、云つた詞に僞りは無い。

鬼王 エヽ、忝ない〳〵。

月小 そんならどうぞ、主の氣休め。

畑右　イヽヤ、只は遣られぬ。
月小　して又、なんぞ
畑右　鬼王。われが女房をくりやれ。
兩人　エヽ。
畑右　恥かしい事だが、月小夜に屬魂惚れて、これまで度々口說くのに、つれない女。
鬼王　フム。その又、心ある女に
月小　覺えない禪司坊さまを殺したが、この身の業と先刻の難題。
畑右　あれも矢ツ張り戀の罠、われが心さへ得心なら、無實の科も
鬼王　どうしてお赦しなさるゝな。
畑右　ハテ、それは手もない事。禪司坊を殺したはこの次郎。
兩人　エヽ。
畑右　とサア、見すく知らぬ事ながら、被つても濟むといふ譯は、ハテ、現在の弟、不孝者ゆゑ兄が
手討と、屆ければ事は濟む。
月小　フム、成る程、鎧が無ければ鬼王どのが、死なうとまで云ふ命がはり。

鬼王 すりや、得心して
月小 この身は犠牲。
鬼王 笑顔つくつて
月小 鎧の代り
畑右 眞實寝る氣か。
鬼王 妹にして、女房は進上。
畑右 成る程、世間にまゝある傳。
月小 別れて見れば
畑右 いはゞ小舅。
ト鬼王、胸苦しき思ひ入れ。
月小 アレ、また氣を揉ましやんすゆゑ。
ト側へ寄り、介抱するを、畑右衞門引分け
畑右 コレ、まだ心が殘つて居るか。
月小 サア、なんの心は殘らぬど、いま云はしやんした、主は兄さん。

畑右　ヤ。

月小　これから孝行にせにやならぬ。不孝にしたら、お名が出やうと

畑右　サヽそれは。

月小　猶大事にせにやなりませぬわいなア。

ト介抱する。

畑右　成る程、孝行。おれも孝行はじめに、その病氣の早速癒る、藥を遣らう。

ト合ひ方。

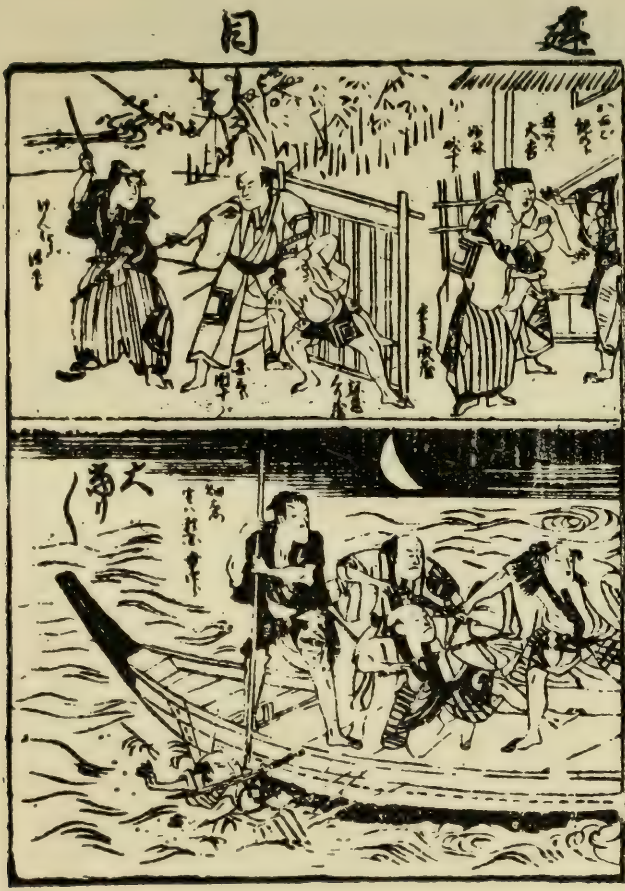
月小　エヽ、アノ、藥を

畑右　サヽ、おれが望みの女房をくれた、義理のある小舅なり、家來なり……コレ、こりやアおれが上に居た時、大内の典藥が、秘法の萬病丹。

ト藥疊を出す。

月小　すりや、その藥を

畑右　斯うは云ふものゝ、どんな藥を服ませるかと、疑ふまいものでもない。おれが毒味をしてやらうか。





ト在あふ土瓶の湯を汲み、薬を出し、薬包みの中の白き包み紙を取つて、茶碗の中へ入れ

サア、この通りだ。

トぐつと飲み

何も案じる薬ぢやアない。少つとも早く服むがよい。ついした薬で癒るも一徳。

トまた白湯をつぎ、思ひ入れあつて、薬袋紙の薬包みより薬を出し、茶碗へ入れ、鬼王へやる。

鬼王　御深切、有り難う頂戴いたしまする。折角のお志し、何しに疑ひませう。

ト茶碗を戴き、グッと飲む。

畑右　服んだか。よし〳〵。サア、これからは、この徳利の天目酒、仲人いらずに、奥の彼の二階で、鬼王、酌をしやれ。サア月小夜、飲んで寄越しやれな。

ト此うち鬼王、頻りに苦しき思ひ入れにて

鬼王　ヤヽ、今の薬を服むと等しく、筋骨いたみ惱亂なすは

畑右　得心しても比翼の夫婦、生けて置いては心が置かれる……フム、その筈〳〵。

月小　ヤヽ、その詞といひ、主の苦しみ。

畑右　祐經に服ませる毒の試み、鬼王、うぬに喰はせたが、南蠻秘法の毒薬だワ。

月小　ヤア、すりや、今のは

鬼王　祐經どのに

ト寄らうとするを蹴飛ばし

畑右　默つてくたばれ。

月小　もうお主でも、夫の敵。

ト鬼王の脇差を拔いて、切りかける立廻り。鬼王血を吐いて倒れる。よき程に彌藏出て來て

彌藏　親方、毒で鬼王めを

畑右　まだビク／＼する。しつかり止めを

ト月小夜が持つたる脇差を取つて投げてやる。

彌藏　合點だ。

ト鬼王を引起し、止めを刺さうとする。畑右衞門は月小夜を押へ、手籠にする。この立廻りのうち、鬼王、彌藏が持つたる脇差を取つて、彌藏へ一太刀あびせ、月小夜と入れかはり、畑右衞門へ白刃を突きつけ、キツと見得。月小夜、彌藏を押へる。畑右衞門キツとなる。

月小　ヤ、こちの人、お前は毒を服ましやんしても

畑右 命も落さず、その上に
月小 白刃を見ても恐れぬは
畑右 こりやアどうだ。

ト鬼王、白刃を見て、吻りして

鬼王 ヤヽ、イカサマ、刃に臆しもせず、今まで悩みし病も忽ち、全快の氣を現はせしは………さては先達て佞人の企みにて、服したるくじかの膽、脾の臓を搦み苦しみしを、いま又服んだる毒藥にて、身内の悪血吐き終つて、病根絶えしか。これぞ世に云ふ、毒藥變じて藥となり、我が身の難病も癒えたるか。エヽ、忝ない。

ト彌藏、刎ね返して

彌藏 うぬを。

トかゝるをポンと當て

鬼王 さるにても、祐經どのを毒殺とは、御身一人の企みではあるまい。外の頼みであらうがな。
畑右 サ、それは。
鬼王 なんと。

ト向うより團三郎、玄蕃、書き物を爭ひながら出て、直ぐに舞臺へ來り

團三　ヤヽ、兄者人……京の次郎といふは僞り、禪司さまを殺したもあの浪人、誠は大友常陸之助。

鬼王　なんと。

團三　成氏へ遣るこの密書、何もかも、がらりと知れたワ。

ト鬼王手早く取つて

鬼王　誠に。さうとは知らいで今までも

月小　お主ごかしのあの難題。

鬼王　みな僞りであつたよな。

畑右　それ知られたら百年目。

ト切つてかゝる。鬼王、立廻りに行燈を蹴返し、闇になる。忍び三重、時の鐘。團三郎は逃がすまいと門口を締める。此うち畑右衞門、上の梅の木を傳り、逃げようとする。彌藏、そこらを探り、火打ち箱を持ち、ウロ〱窺ふ。鬼王、滅多切りにして、彌藏が持つたる火打ち箱を叩き落す。附木、火鉢へ入つて、燃えさしの粗太へ火燃えつく。この明りに畑右衞門を透かし見て

鬼王　ヤヽ、賴國めは

畑右　エイ。

ト鬼王へ手裏劒を打ち、塀を越して逃げ行く。鬼王、手裏劒を打落しながら

鬼王　とり逃がしたか。

トこの途端、バタ〳〵にて、向うより丹平、羽織、足輕の形にて走り出て

丹平　鬼王どの〳〵、拙者は和田が家來。祐信どの、鎧を差上げぬ越度にて、屋敷へ連れゆき、未明に切腹と事極まり、網乗り物にて、はや和田の屋敷へ參つてござる。

鬼王　ヤヽ、すりや、祐信さまには

月小　和田さまへ。

丹平　お知らせ申すも主人が寸志。逆澤瀉の鎧手に入らば、助命の願ひ屋敷まで。拙者は此まゝ、早おいとま。

ト引ッ返して入る。

鬼王　賴國めは追つての詮議。先づ差あたる

團三　御主人の火急。

月小　危ふいうちにも、この鎧。

團三　幸ひのこの着物。兄貴、着替へて

ト最前の着物を鬼王に着せる。月小夜は風呂敷へ鎧を包み、鬼王に脊負はせる。此うち七つの鐘鳴る

團三　南無三、明け近き

鬼王　寅の一天。

ト走り出ようとする。この時、玄蕃彌藏、心附き

兩人　その鎧を

トかゝるを鬼王、兩人を投げ、門口へツカ〳〵と出る。團三郎は玄蕃を、月小夜は彌藏を押へる。

鬼王　これは。

團三　爰かまはずと

月小　早うござんせ。

鬼王　合點だ。

ト三方よろしく

鬼王、向うへ走り入る。禪のツトメにてツナギ、引返し

幕

本舞臺、三間の間、向う一面打抜き、浮畫の書き起し、花道際へ浮洲、蘆原、ゝゝゝ片瀬川と記したる榜示杭、よき所に渡し船、この道具すべて誂らへの通り。船頭二人、菰のみ、河岸をついてゐる。日覆より半月出て居る。浪の音にて幕明く。

ト直ぐに向うバタ／＼にて、五郎太夫、作平、吉右衞門、武右衞門、市藏、新五兵衞、いづれも浪人者、大小にて走り出てくる。花道にて

五郎　頼國どのは

新五　慥かに道で

皆々　遅れたと見えます。

ト向うを振り返る。バタ／＼にて畑右衞門走り出てくる。

畑右　こりやアいづれも。すりや、この片瀬川の河岸にて頼國どの。

五郎　わりない貴公のお頼みゆゑ、我れ／＼六人呑み込んだ。とは云ふもの〻

新五　在家近き畑小路にては、身體自由の働らきならず。

作平　それには屈竟なるこの足場。

吉右 爰で待ちうけ

皆々 殺らすつもりサ。

畑右 成る程、朋友の其許方、手を勞するも氣の毒なれど、身共が企んだ惡事の荒まし、覺り知つたるのみならず、百兩あまり出した鎧まで、むざと彼奴等に渡したが、いかにも殘念。この道へ來るは必定。併し手強いあの鬼王。

五郎 なにサ〳〵、たとへ鬼王でも鬼神でも、腕に覺えの一刀流、苗字も一刀五郎太夫。

作平 眞刀流の眞刀作平。

吉右 流儀も吉岡吉右衛門。

武右 術にかけては無敵武右衛門。

市藏 諸流の中で市傳市藏。

新五 業も神影新五兵衛。

五郎 殘らず劍術

皆々 師範の我れ〳〵。

五郎 一刀づゝ一寸やつても、六ケ所深手は

皆々　負はせまするワ。
五郎　風も吹き消す片瀬川。
皆々　底の水屑に
畑右　これサ。
ト囁く。
皆々　成る程。
畑右　ござれ。
ト皆々本舞臺へ來り、五郎兵衞、船頭に囁く。
船頭　すりや、この所へ來る侍ひ。
畑右　身は蘆原へ。
五郎　後詰めの殿り。
ト向うバタ〳〵。
畑右　ソレ。
ト畑右衞門は下の蘆原へ隱れる。皆々船へ飛び乘るところへ、バタ〳〵にて向うより鬼王、鎧を脊負

ひ、走り出て來る。これを見て

皆々　船を出せ〳〵。

ト鬼王これを聞いてうろたへ

鬼王　暫らく。その船、便船をお願ひ申す。

船頭　イヤ〳〵、この船へ同船は、叶はぬ〳〵。

鬼王　そりや又なぜな。

船頭　こりやァ狩場の御用船だ。

鬼王　すりや、狩場の

五郎　いかにも狩場の御用にて、鎌倉へ通行の我れ〳〵が、乗つたる船に同船は

皆々　罷りならぬ。

鬼王　成る程、狩場御用の船とあらば、同船ならぬも尤もなれど、申さば片瀬の渡し船。拙者儀も主人の急用。何卒御勘辨を以て

皆々　イヤ〳〵成らぬ。早く船を出せ〳〵。

ト船頭、漕ぎ出さうとする。鬼王、纜を持つて引とめ

鬼王　左樣ではござらうが、只一艘の渡し船、行き戻るまで待たれぬ火急の用事。武士は相身互ひとやら。
五郎　まだ云ふか、武士々々と、して鎌倉どのゝ
皆々　直勤めか。
鬼王　イヤ、陪臣の拙者なれど
新五　陪臣なれば猶ならぬ。身共等は劍術師範
武右　大名を弟子に持つて
作平　狩場の手練稽古のため、我れ〳〵が乘つたる船。
鬼王　すりや、其許方は
皆々　道場たつて
五郎　仕官はせぬ。
鬼王　すりや、矢ッ張り御浪人。
皆々　船を出せ〳〵。
鬼王　イヽヤ、船を出すな。

皆々　船を出せ〳〵。

ト鬼王、ヒラリと飛び乗り

鬼王　たとへ狩場の御用あるとも、浪人とあるからは、何條恐るゝ事あらん。サア、いづれも、便船なして渡しておくりやればその通り。ならぬとお云やれば一生懸命。

皆々　ヤ。

鬼王　とサ、申すも渡してもらひたさ。未明までにこの川越えねば、人の生死に係はる大事。コレ、武士が手を下げる。どうぞ爰の所を聞き分けて

五郎　イヽヤならぬ。今そちや何と申した。ならぬと云へば一生懸命

作平　切つても通ると云はぬばかり。

新五　それ聞いてから渡しては、怖いやうでこれから末、武術師範の

皆々　刀の手前。

鬼王　すりや、どう手を摺つて頼んでも

五郎　サア、この一刀五郎太夫から、先へ切つてこの川を越しやれ。

新五　それ〳〵、身共を切つてから渡してもらへ。

皆々　サア、切れ〳〵。早く〳〵つてもらひたい。

ト皆々、鬼王へ傍若無人の振舞ひ。鬼王ヂッと辛抱して

鬼王　すりや、どうあつてもこの船に

五郎　おんでもない事。同船して

新五　渡す事はならない程に

作平　鬼王、早く自滅しろ。

鬼王　ムウ……初めて逢うた某を、鬼王と名を差すは、さては誰れぞに頼まれたな。

五郎　知れた事だ。頼國どのゝ一大事、覺り知つたる汝ゆゑ

作平　殺らしてくれろと頼まれて

新五　網を張つて

皆々　待つて居たワ。

鬼王　すりや、矢ッ張り頼國めが

五郎　ヤア、愚痴な繰り言ぬかさずと

新五　お念佛でも

皆々　早く唱へろ。

鬼王　小癪な事を。忠義廢れば身も捨てゝ、心から爲す鬼王が、冥土の旅の武者修行、腐れ劍術使ひめら、太刀筋覺えて手本にしろ。

皆々　觀念。

ト六人一度に拔きつれてかゝるを、鬼王兩刀のあしらひ。よき程に鳴り物になり、これより三人づゝ華々しきタテあつて、トヾ鬼王、六人を見事に川の中へ切つて落す。船の中の柄杓にて水を呑みゐる所へ、畑右衛門窺ひ寄つて切つてかゝる。立廻りにて

鬼王　そちや賴國。

畑右　覺悟。

ト立廻りに畑右衛門、陸へ飛び上かり、足にて船を蹴出し、一散に花道へかゝる。向うより團三郎、一腰ぼつこみ、走り出て、畑右衛門を押し戻し、堤際の浮洲へ來る。鬼王、棹をさして、また上より下へ押して、途端に畑右衛門團三郎、船へ飛び乘り、立廻りに畑右衛門、狩場の繪圖を落す。鬼王取上げ

鬼王　こりや狩場の繪圖。

畑右　それを。

　　トかゝるを團三郎と鬼王、見事に畑右衛門を切り倒し

團三　兄貴、禪司坊さまの敵。

鬼王　思ひ知つたか。

　　ト止めを刺す。思ひ入れあつて

團三　頼國めは、我が身の罪を責むる筈なれど

鬼王　從ふ奴等七人まで

團三　すりや、それもこなたが

鬼王　是非に及ばず手にかけて

團三　イヤ、人殺しはこの團三。

　　ト五郎兵衛、川の中よりよろぼひ上がり

五郎　鬼王、うぬ。

　　トかゝる。團三郎、立廻り。五郎兵衛、團三郎に組みつくを、團三郎、我が腹よりグッと突き通す。

　　五郎兵衛苦しむ。

鬼王　すりや、兄に代つて

團三　お主の御難儀、救ふ鎧を

鬼王　詞に任せて

　　　トまた五郎兵衞立廻り、團三郎切り伏せ

團三　幾人死んでも相手は一人。

　　　ト引廻す。

鬼王　出かした弟。

　　　トごんと時の鐘。鬼王、棹をさしながら、振り返つてキツとなる。チヨンと木の頭。團三郎落ち入る。鬼王、合掌する。この仕組みよろしく、キザミについて、船を上手へ漕ぎ戻す。ひやうし

　　　幕

大詰　對面の場

役名――工藤左衞門祐經。曾我十郎祐成。曾我五郎時致。小林の朝比奈。近江八幡之助成氏實ハ赤澤十內。賴朝息女、大姬。曾我の姉、二の宮。手越の少將。梶原妹、箙。和田の妹、舞鶴。

腰元、龜菊。同、小動。同、卯杖。

本舞臺、一面の筋塀、正面三間の高樓、紫の幕を張り、塀より見越しの梅柳。下の方、誂らへの打返し、すべて花の御所の體。爰に手越の少將、奧女中の形、これを雀踊大勢、見得よく支へて居る。渡り拍子にて幕明く。

皆々 よんやサ。

少將 見れば梶原さまより、この御殿にお渡り遊ばす、大姫君のおしつらひ、慰め參らすその爲に、雀踊りの奴さん方。元は舞子のこの少將、今は御殿を勤むる私し、何ゆゑあつてお使ひの

雀一 その歸るさを支へるは、若旦那梶原さま、そさまに日頃現を拔かし

雀二 首たけ背たけ惚れ込んで、口說けど靡かぬ手越の少將。

雀三 大姫君のかしづきと、引上げられて手の屆かぬ、お側女中の使ひ先。

雀四 いま見かぢつたを幸ひに、雀踊りを取措いて、梶原さまへ連れて行き

皆々 お寢間のお伽をさせるのだワ。

少將 ホヽヽヽ、どういふ譯と思うたりや、あの意地惡の梶原さまへ……元とは違ふ少將を、無體に手

籠めにさしやんしたら、定めて大姫さまよりこなさん方へ、きつとお咎め。笑止な憂目を見やうより、眞平御免と詫び言して、サア、そこ退いて通さんせ。

雀一 イヨ、きめたりなお屋敷さん。

雀二 その劍呑みで我れ〳〵を

雀三 嚇して此まゝ行かうとは

雀四 逢つた所で笠とやら

皆々 否でも應でも

ト左右よりちよつと立廻り。

少將 イヤ、さう自由には

皆々 そこを、斯うして

トまた立廻りに引附けて

雀一 ドレ、お旦那へ

皆々 そびくべいか、

ト、チヨンと下の塀を打返す。爰に長唄囃子連中居並び

〽かゝる所へ向うより。

ト大太鼓入りの鳴り物になり、皆々、少將を引ッ立て、花道へかゝると、向うより朝比奈、鳥刺しの拵らへにて出で來り、花道にて所作一くさりあつて、舞臺へ來り、四人と入れ替り、少將を圍ひ、キツと見得。

皆々　どこえ。

雀一　いま手越の少將を、引ッ立てる向うづら。

皆々　何ゆゑ邪魔をひろぐのだ。

朝比　ナニ邪魔だ。邪魔から小がら四十雀、あの揚げ幕から出て見りやア、この色鳥を無理やりに、摑んで鳶とろゝとは、ちとちやぼらしい木菟ども、一杯機嫌か白斑の鷹、そんな古風は葭きりに、五位鷺ませと吐かせばよし、やだアなんぞと家鳩だと、この小林が替へ紋の、鶴の餌拾ひ一口に食つてしまふぞ惡鳥めら。サア返答を白鳥で、ありやまんすで、ごんすでやんすと、ホヽ敬つて曰す。

少將　ほんに、よい所へ朝比奈さん、よう來て下さんしたなア。

朝比　オヽサ、この髭も大姫の、御機嫌とりに鳥刺しでたち。來かゝる所へ小雀めら、もう何百羽騷い

でも、氣遣ひな事はない。コレ、落ちついて居ろ〳〵。

雀一　ヤア、お定まりなる朝比奈め。うぬから先へ

皆々　ぶッちめて

　　　トかゝるを投げのけ

朝比　コレ少將、おぬしやア爰に構はずと、姫の御前へ、少つとも早く。

少將　そんなら朝さん。

皆々　彼奴をやつちやア

　　　トとめるを朝比奈、支へ

朝比　構はずと、行きやれ〳〵。

少將　御殿でお目にかゝりませう。

　　　ト通り神樂になり、少將、下座へ入る。

雀一　幸ひ出合つたあの少將。

雀二　景季さまへそびいて行き

雀三　褒美にすべいと思ひの外

雀四　とんだ所へ小林め、此奴に構はず

皆々　跡ぼつかけて

ト行かうとする。鼻の先へ刺し竿を突き出す。

アヽ、何をしやアがる。

朝比　ちよいと刺いて見さいな。

トこれより誂らへの所作あつて、「めでたけれ」と唄おさまり、囃子連中を消し、あと雀踊りのタテあつて、朝比奈、皆々を見事に押へ

大繩がはりの鳥黐で、四羽とも一緒に、來い〳〵。

ト片シヤギリになり、四人を刺し竿にくつつけ、引いて下座へ入る。鳴り物打上げると、高樓の幕の内にて

大姫　子の日する松ならねども妻琴を

二宮　千代のためしと引きやそむらん。

ト琴唄になる。

〽青柳の、そのいとしさを風の手に、結ぶ緣のあるなれば、解けて思ひを春の雪。

トこの唄のうち、高樓の幕を絞る。こゝに大姫、廣振り袖。二の宮、裲襠にて、琴を弾いてゐる。少將、箙、蕗の臺、長柄を持ち、舞鶴、龜菊、小動、卯杖、いろ〳〵の春草を活けて居る。梅ケ枝に鶯來て囀る。

大姫 あれ〳〵、梅の梢に鶯の、春知り顔のしはらしさ。なんとマア、一しほの眺めではないかいなう。

二宮 左樣でござりまする。誰れ教へねど花に來て、初音の聲の長閑やかさ。初音と申せば姫君樣、この程よりのおもの思ひ、それゆゑお好みの妻琴さへ

少將 年は明けてもお調べなく、お側で辛氣と思ひの外、お氣もじよいやら今日の彈きぞめ。

箙 壽祝ふ内ぐもり、屠蘇の長柄もとりあへず、お氣慰めに皆さんが

舞鶴 お庭の梅や青柳殿へ、手しなを見るも見眞似とやら。

龜菊 拙ない振りを投げ入れの、ちつとはお氣のおむすぼれ。

小動 解けるやうにと花の御所、この下館の御逗留。

卯杖 お冴え〴〵しきお氣色を、お見上げ申して何ほどか

皆々 お嬉しう存じまする。

大姫　皆そのやうに自らを、案じてたもる志し、忘れはおかぬ、嬉しいぞや。よしない人を見染めしより、せめて云ひ寄る綱にもと、いつぞや預かるこの御狩の

ト切手へ思ひ入れあつて

サア、思ひ切つてと思ふ程、猶いやまさる戀しい祐成。

二宮　アヽモシ……素氣なき松に風通ふ、色音にせめて

大姫　サア、それはの。

〽水に宿かる月さへも、おきゐる草の露の床、あゝ羨まし、みゝえ染めにし夕より、忘れもやらで面影の、うつゝもついそれなりに、仇な戀慕の名もつらや。

ト此うち向うより祐成、時致、虚無僧の拵らへ、尺八を吹きながら出て來り、花道にとまる。

祐成　一枝尺八、怨み絶えがたし。

時致　ふひと胡茄、さいせうの吟に入る。

祐成　入るや入狹の法の月、廣くすまして武藏野の、草葉の蔭の父の仇、共に天蓋尺八の

時致　梵論の姿もいとふなよ、心は僧にあら梵字、思ふお敵と見るなれば、心の丈の一節切。

祐成　サア、それもその時、ヤアそれまでは、アレあれを見や、梅咲けば

時致　まだき櫻も時ありて、おのれと花も咲くものを
祐成　只何事も折を待ち、ぢつと堪忍かん鍋の
時致　二人寢酒の南無阿彌豆腐。
祐成　サ、そこが佛法。
時致　喰ふが世法。
祐成　悟れば
時致　ぼんに
兩人　さうぢやなア。
〽戯むれ事の夢になと、通ふ心の一筋を、せめては告げん閨の梅ケ香。
ト兩人此うちに舞臺へ來り、竹を合す。琴唄切れる。あと合ひ方殘る。
大姫　絃に合せし
皆々　竹の音は。
ト大姫、塀の外を見て
大姫　ヤア、慥かに姿は

ト高欄へ立ちかゝろ。皆々「モシ」と留める。このはずみに簸、持つたる花筒を落す。これに祐成の顔うつる。大姫見るより

祐成かいなう。

二宮 ナニ祐成が

ト下を見下ろす。

祐時 さういふお聲は

ト上を見上げて

姉者人。

女皆 ほんに、ようマア

大姫 コレ二の宮、姉の高ドで祐成に、色よい返事を、頼むわいの〳〵。

少將 それ〳〵、あれ程までに思し召す、姫君樣のお心根。

簸 外の方でもある事か、弟御樣へつい一言

皆々 云うておあげなされませいなア。

二宮 イエ、なりませぬ。夫に別れ朝忠の、苗字を其まゝ二の宮と、召されて上意にお側の勤め。殊に

は拙ない琴の御師範、申し上ぐる身を以て、現在弟へ恐れ多い、頼朝公の姫君を、戀の執持ちなりませうか。この儀は決して、さりながら、お志しのいとほしさ、他所の他人の虚無僧と、わたしが知らぬ事なれば、幸ひ時分も黄昏時、御殿でしつぽり、ナ、合せ物を、ナ。

祐成　でも姫君と、左樣な事が

二宮　ハテサア、差合ひくらき兄弟が、願ひを叶へて、また願ひも

ト切手へ思ひ入れ。この時、六つの時計鳴る。

最早暮れ六つ、折も宵闇。

皆々　姫君樣、さぞお嬉しうござりませう。

トこの時、向う半疊場にて「ハイホウ」の聲する。

祐成　ても夥しいあの同勢。

時致　道を照らする提灯の

二宮　紋は慥かに

皆々　庵に木瓜。

大姫　ナニ、折々、折とて祐經が

ト思ひ入れ。

時致　祐經なれば

ト天蓋を取つて思ひ入れ。祐成も天蓋を取り、入れ代つて

祐成　コリヤ。

ト押へる。對面三重に行列を交ぜ、また向うにて「ハイホウ」の聲する。これにて兩人はヂリ〳〵と押へて下座へ入る。誂らへの鳴り物になり、向うより中間二人、庵に木瓜の箱提灯。跡より同じく金紋の先箱。あとより二人、二本道具。定紋の箱提灯二張つゝ、續いて徒士侍ひ四人、次にまた定紋の箱提灯二張、次に上下の侍ひ四人。また箱提灯二張。乘り物。陸尺六人。次に定紋の箱提灯。跡より近江八幡之助、刀を持ち、柿の上下。また箱提灯。長柄持ち。草履取り。跡箱。茶道坊主。定紋附き、茶辨當持ち。馬の口取り、馬を曳いて出る。合羽籠。押へ侍ひ。下座敷持ち。こ　行列、二行に並よく、中の間の歩みより花道を通り、本舞臺へ來る。此うち高樓へ銀燭數多出る。乘物舞臺へ來るを見て、時致走り出るを、支へながら朝比奈、祐成、出てくる。時致、この同勢の中へ割つて入り、乘り物へかゝらうとする。皆々驚き、「狼籍もの〳〵」と口々に云ふ。祐成、朝比奈、時致を留めて

祐成　ヤレ早まるな。

朝比　待て〳〵。

八幡　ヤア、何奴なればかゝる狼藉。そこ一寸も

皆々　動くまいぞ。

ト乘り物の内にて

祐經　仰々しい、皆扣へい。

皆々　ハア。

ト扣へる。鼓の合ひ方になり、乘り物の内より祐經、大紋の下、小さ刀、中啓を持ち出て、床几にかかる。時致、「ムウ」と思ひ入れ。朝比奈押へる。祐經見て、思ひ入れあつて

祐經　祐經、君の命を蒙むり、狩場の御用繁多につき、鎌倉御所より夜陰に下城なすところ、路次を遮り狼藉の、折よく側に小林の、制し止むる彼れらは何者。

朝比　サア、アヽ、こりやア

皆々　慥かに曾我の

八幡　アイヤ〳〵、いづれも。その曾我の奴原は、友切丸の紛失より、疑ひうけて蟄居の身の上。どうして爰へ面出しが

祐經　して又、二人は。
二宮　姫君樣の爪琴へ、竹を合せし梵論の修行者。
大姫　ほんに、それ〳〵、自らが呼び寄せたわいなう。
　　　トこれにて祐經、上を見上げ思ひ入れ。
祐經　見上げますれば大姫君。すりや、この御所へ御保養に
朝比　サア、そこでお慰みに、尺八を吹いたこの虛無僧、褒められたゆゑ乘りが來て、祐經どのへも聽
　　かせべいと、大道手の辨まへなく、それで爰へ出たのであんべい。ナア、兄弟。
祐成　いかにも左衞門祐經さまへ、我れ〳〵が竹の一手。
時致　振り拳の鹽梅も、所望でなくともこの所で
　　　ト立ちかゝる。
祐經　勇氣を含む小冠者が面體。ハテ、よく似たワ。
二宮　祐經さま
八幡　似たとは誰れに
二八　似ましたな。

祐經 我が一門たる祐安に。

朝比 ハテナア。

祐成 似たと仰せに名乘らぬは、臆すと察しも恥かしく、かゝる姿は汚名を受けし、友切丸を詮議のため。

時致 上を憚かる梵論の笠、面をつゝむ我れ〳〵こそ

祐經 さては河津が

兩人 二人の倅。

祐經 兄の一萬成長して

祐成 曾我の十郎祐成。

祐經 弟箱王人となつて

時致 曾我の五郎時致。

祐經 祐成、時致

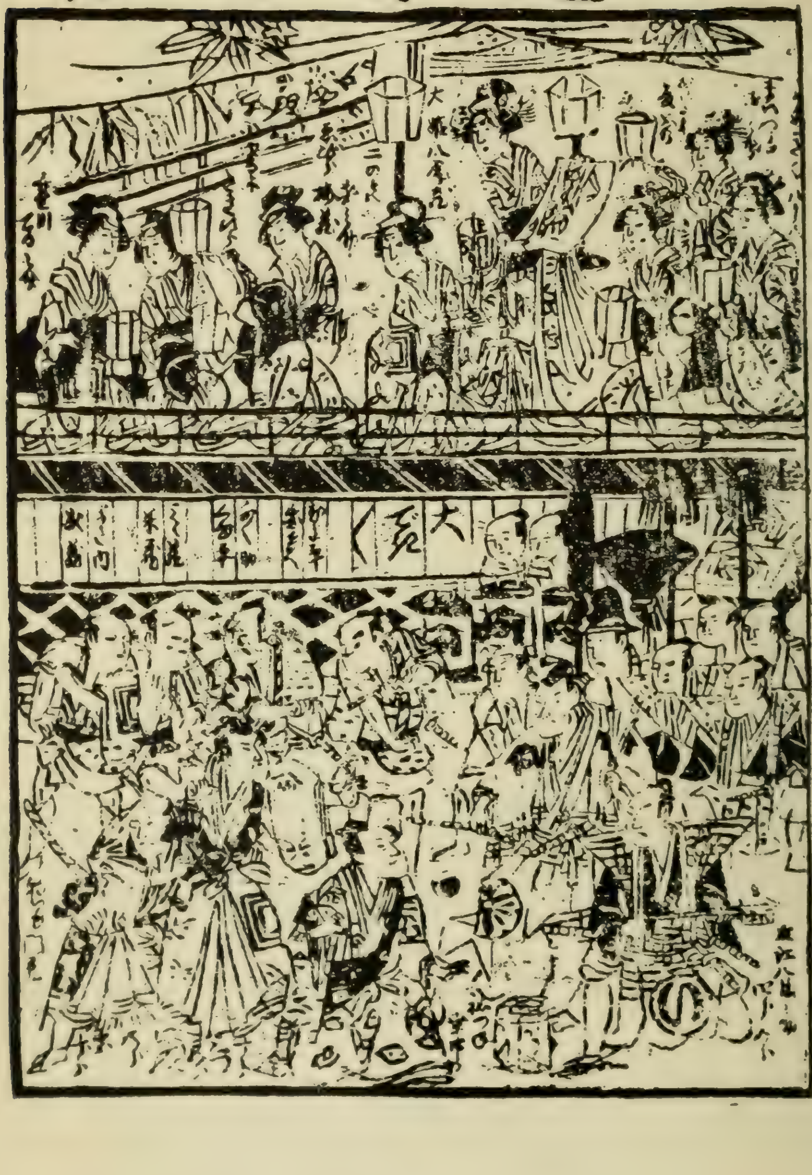
兩人 祐經どの

祐經 ハテ珍らしい

三人　對面ぢやなア。
時致　親の敵、祐經觀念。
ト飛びかゝる。祐成、朝比奈、入れ代つてとめる。
祐經　ヤア時致、いま聞けば某を、親の敵なんどゝ申すが、敵と申すは股野の景久。この祐經は覺えはないぞ。
時致　なんと。
八幡　すりや、左衞門さまには、祐安どのを……サア、討つたお覺えないとある、その御主人に刃向ふ奴。お側にちつと職すぎた、二人の役目を一人して、近江八幡之助成氏が、どつこい、そつこいやりやァしよないぞ。
侍一　よしんば御主人祐經さまを、敵なんどゝ覘へばとて
侍二　見る影もない曾我殿原、喰ふ物さへ無いかして
侍三　坊主に等しき態をして、敵呼はりしようより
侍四　お願ひ申しやァ大部屋の、空きは無くとも百人や
侍五　二百人は浮き人にも、お抱へなされて下さるワ。

侍六　そこが旦那は大々名。
侍七　お格式でのお供には
侍八　千騎二千騎お連れなさるワ。
侍一　どうしてそれに
皆々　歯が立つものか。
侍二　イカサマ、こりやアさうでござらう。
侍三　吉例の通り、お笑ひなされ。
皆々　ハヽヽヽヽ。
朝比　やかましいわえ。今年は並び大名めらがうせないゆゑ、そんな御託はあるまいと、思ひの外に老碌めら、よく古風に笑やアがつたな。
少將　ほんに、わたし等が贔屓のお二人さんを、憎てらしい今の惡口。
籬　それいなア。女子の櫛ではあるまいし、歯が立つの立たぬのと
舞鶴　あの憎てらしい口許へ
龜菊　烏は灸を据ゑぬかいなア。

大達同大誥



小動　人の事云ふ皆さんが

卯杖　お二人さんに、齒は立つまいわいなア。

朝比　オヽ、姐え達、よく云つた。今の意趣返しに、笑つてやれ〳〵。

女皆　わアい〳〵。

皆々　なにを。

時致　數人形の唸り言、そんなのを耳にやァかけない。卑怯未練な左衞門祐經、三つ子も知つたる親の敵、包み隱すは後れたか。この時致が怖いのか。

祐成　河津が敵は我れなりと、この場に於て速かに、お名乘りなされて下さりませ。

ト祐經思ひ入れあつて

祐經　祐經、君命承る、役目滿たざる其うちは、身で身ならねば押し包むと、未練と思ふ一言の、捨て置き難し、名乘つて聞かせる。いかにも河津の祐安を、遠矢を以て射落させしは、斯く云ふ左衞門祐經ぢやワ。

祐時　さてこそなア。

祐成　天晴れ左衞門祐經どの、敵とお名乘りある上は

時致　サア、立上がつて

兩人　勝負〳〵。

祐經　イヤ、勝負は叶はぬ。

時致　卑怯未練な左衞門祐經、この場に於て後れたか。

祐經　勝負なさぬは其方達がため。

兩人　なんと。

祐經　富士の御狩の濟まざるうち、我れを敵と過ちあらば、曾我の一家は紛失の、友切丸に重なる罪科
　その辨まへなく敵對せば、過ぎし實父の祐安にも、よも滿足にはあるまいぞよ。

二宮　それ〳〵、義理ある養父へ不孝となれば、折角つくした孝も水。

祐成　すりや、生さぬ仲の孝を思へば

時致　この場で敵は討たれぬか。エヽ、小自烈てえ。

朝比　オヽ、尤もだ〳〵。エヽコレ、せめての事の蟲押へに、途中でなくば髭が賴んで、祐經どのに吉
　例の、杯でもさせべいに。

祐經　イカサマ、小林のお云やる通り、敵は敵、春の壽、一家の杯せんものを。

大姫　それこそ幸ひ有り合す、土器、長柄。これにて二人へ。

祐經　然らば姫のお流れにて、めでたう杯……成氏、これへ。

八幡　畏まつてござりまする。

ト對面三重になり、大姫、少將と箙へ思ひ入れ。兩人心得、手の附いたる籠花活けへ、土器、三方、長柄を入れ、兩人して下ろす。八幡之助、これを受取り、祐經が前に置く。祐經、土器を取上げ、一つ飲み

祐經　祐成、獻し申さう。

ト祐成に吉例の通り杯ごとあつて

五郎やい。

時致　なんだ。

祐經　杯くれう、ずつと參れ。

時致　戴きますべい〳〵……今日はいかなる吉日にて、日頃逢ひたい見たいと神佛をせがんだ甲斐あつて、出ツ會したは優曇華の、花待ち得たる今日の對面。三ケの莊の福は内、鬼も十八年來を、いま吹き返す天津風。杯頂戴いたしてござる。

ト土器を砕く。

祐經　ハテ勇ましきその生立ち。親は無けれど子は育つ。一家のよしみに某を慕へ。ハヽヽヽ。親を討たれて無念なか。

時致　さん候ふ。

祐經　口惜しいか。

時致　さん候ふ。

祐經　併し何ほど思へばとて、痩せ浪人の細腕で、祐經には及ばぬ〳〵。馬鹿な奴の。

ト嘲ける。

時致　ムウ。

ト三方を摑み毀し、立ちかゝる。朝比奈、祐成、隔てる。この時、薄ドロ〳〵にて、轡の音、頻りにする。

祐成　合點のゆかぬ。いま頻りに、いづくともなく轡の音は。

祐經　これ世の轡にあらず、伊東の先祖大織冠より、おことらが親祐安まで、相傳なせし木枯の轡、この轡の奇特には、その家の血筋に凶事あらん時は、自然と轡の音を發すと聞き傳へしが、祐安が

死後に行くへの知れざるよし。この場に誰れが所持なすや。

ト八幡之助に目を附けて思ひ入れ。八幡之助「ムウ」と懐を押へて思ひ入れ。ドロ〳〵、轡の音やむ。

八幡　ハヽヽヽ、智者に一失。今の轡は、どなたぞ下城の乗馬の響き。先づそれよりは御主人を、敵と覘ふ曾我兄弟。

皆々　ドレ、我れ〳〵が引ッ縛つて。

祐經　イヽヤ、曾我殿原なら、友切丸の紛失ゆゑ、咎めの身の上、縄掛けて引くべきなれど、彼れらは梵論の兄弟づれ。この場は此まゝ打捨て置き

二宮　其方衆二人を祐經さまが、敵とお名乗りあつたるを、今日對面の思ひ出に。

朝比　それ〳〵、友切丸の出ないうちは、頭のつかへたおぬし達、マア今日は、蟲を殺して。

時致　でも、此まゝに。

祐成　サア、そこを堪へて歸るのも、養父へ孝と料簡しや。

時致　エヽ、コレ、寶の山へ入りながら

大姫　手を空しうは返すまい。あの梵論字へ、二の宮、ソレ。

ト二の宮へ思ひ入れ。

二宮　姫君様より、二人へ布施物。

ト三方にある袱紗包みを投げてやる。祐成取上げ

祐成　こりやコレ狩場の

ト祐經、二の宮へ思ひ入れ。

二宮　取違へたる申し譯

ト手早く懷劍にて自害する。女形驚く。

時致　ヤヽ、姉者人。

八幡　それを。

ト手をかける。時致、引廻す。朝比奈支へる。この立廻りに八幡之助の衣裳脱げて、紺看板、奴の形になる。皆々「オヽ」と思ひ入れ。

祐經　さてこそ成氏。

八幡　成る程、この體、合點ゆかぬは御尤も。流石は左衛門祐經さま、鳴りを出せし轡は爰に。

ト兄弟の前に轡を置く。

時致　すりや、成氏と
祐成　思ひし其方は。
八幡　祐安さまのお馬の口取り、十内めが身の申し譯。
兩人　ヤヽ、なんと。

トこの時同勢の中より中間二人出て

中間　十内なれば

ト左右よりかゝるを、ちよつと立廻つて引敷き

八幡　今更申すも面伏せ。その木枯の轡こそ、吃に奇妙のまじなひゆゑ、暫しの間貸しくれよと、近江彌太夫成國が、賴みに下郎の心一つで、貸してやつたが御主人の、運のきはめか奥野の歸るさ、遠矢に敢へない祐安さま……チエヽ、いつもの轡かけ置かば、おのれと響いて凶事を告げ、斯く過ちはあるまいもの。成國に騙かられ、やみ／＼御最期させましたは、この身の越度、悔んでも後の祭と、それから成國にわざと取入り、二代の八幡と推擧され、敵と見せて近江の跡目、兩名一つに成氏が……お二人樣に本望をと、心に碎く狩場の切手、二の宮さまのお命に、かゝつた御緣の轡の不思議。昔も今も毛の足らぬ、面赤澤の十内が、猿に劣つた身のしだら。古主の河

津祐安さま、手は下ろさねど殺した同然。いま又假の主人たる。祐經さまを手引して、何卒お討たせ申したさ。敵の祿を喰ひつゝ、年月送りしその無念さ……推量なされて下さりませ。

侍一　そんなら手もなく

皆々　主殺し。

中間　天罰忽ち

ト また兩方より組みつく。其まゝ一人を投げのけ、一人を振りほどいて竹光を拔く。「それを」と寄るを、ポンと當て

八幡　この竹光が鋸がはり。

ト直ぐに腹へ突き立て

二の宮さま、せめてはお供を。

朝比　流石は十內

祐時　姉者人。

二宮　忠と

八幡　孝とに

大姫　主家來。

祐經　後の主人が暇を取らす。冥土の主人へ歸參せい。

八幡　エヽ、忝ない。

二宮　我れも未來の父上へ……姫君、兄弟。

兩人　南無阿彌陀佛。

ト手を合はす。祐經「エイ」と八幡之助の首を討つ。二の宮、落ち入る。ゴンと時の鐘。血ぶるひして

祐經　いかに時致、まッこの如く祐經を、討たば血汐の赤木の柄、今日見參の引出に其方へ。

ト差出す。時致受取り

時致　血汐の賜物、しかと落手。

ト受取る。祐經持たせし刀を取る。

大姫　その十内と二の宮へ

祐經　手向けは即ち法の灯し火……灯を上げい。

皆々　ハアヽ。

ト箱提灯を上げる。女形、手燭を差出す。

朝比　コレ、敵の顔を

祐時　心にとつくり。

ト思ひ入れ。祐經、中啓にて左右の灯を消す。

皆々　これは。

祐經　灯を消せば皐月闇。

祐時　狩場で本望。

朝比　マアそれまでは

祐經　兄弟、無事で

祐時　祐經どの。

祐經　乘り物やれ。

皆々　ハアヽ。

ト皆々乘り物を差上げる。

三人　さらば。

祐經　これより二番目始まり、左様に御覽下さりませう。

ト打込み。めでたく

滿　來

大正十五年五月八日印刷
大正十五年五月十一日發行

『大南北全集第十四巻』

非賣品

校訂　坪内逍遙

編纂者　渥美清太郎

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田利彦

東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷者　堀江關武

東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷所　常磐印刷所

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行所　春陽堂



